

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第132集

恒武西宮遺跡Ⅱ 笠井若林遺跡

平成10・11・12年度 (主)浜松環状線(笠井工区)道路改良(一般)工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

【正誤表】

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第132集

恒武西宮遺跡Ⅱ 笠井若林遺跡

下記の箇所に誤りがありましたので、訂正くださいますようお願い致します。

頁	誤	正
例言 1行	所在するや	所在する
16頁 第7図⑤土層柱状図	I C	I D
152頁 上から4行	内外面丹が塗られ	内外面に丹が塗られ
310頁 下から9・14行	表22	表19

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第132集

恒武西宮遺跡Ⅱ 笠井若林遺跡

平成10・11・12年度 (主)浜松環状線(笠井工区)道路改良(一般)工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

恒武西宮遺跡、笠井若林遺跡は平成8年度から浜松環状線の建設に伴い、当研究所が継続的に調査を行なっている恒武遺跡群の一部として把握されている。天竜川の右岸、天竜川平野のほぼ中央の沖積微高地に位置し、古墳時代から連綿と続く複合遺跡として知られるが、長く調査の手が及ばず、詳しい遺跡の実体は明らかではなかった。

平成8年度に浜松市教育委員会によって行なわれた山ノ花遺跡の調査では、埋もれた奈良時代と古墳時代の旧河道が発見された。また、平成8年度から10年度にかけて当研究所が行なった恒武西宮遺跡1次、恒武西浦遺跡の発掘調査では、古墳時代から奈良時代を中心とした集落域からは多数の建物跡や、前述の山ノ花遺跡へと連続する旧河道が発見された。旧河道からは大量の遺物が出土しており、古代においては官衙施設、古墳時代においては有力豪族との関連が指摘されている。

今回は先に実施された恒武西宮遺跡の未調査部分とその北側約500mに位置する笠井若林遺跡の調査を行った。その結果、古墳時代から中近世にかけて連綿と営まれてきた集落跡が発見されたのである。特に笠井若林遺跡では律令期の堅穴住居を主体とした集落を発見し、出土した円面鏡や帶金具といった官人との関わりを思わせる遺物は注目に値する。また、集落内における鉄精練に関わるとみられる遺構や遺物の出土は当該期の集落のあり方を考える重要な発見であろう。恒武西宮・笠井若林遺跡においては16世紀代を中心とした中世後期の集落跡が発見されている。遠江においてこの時期の集落は調査事例が少なく、近世、さらには現在へと続く集落景観の原風景を垣間見ることのできる成果である。

本書で述べるこうした調査成果が、当地域の歴史を解明する手がかりとなれば幸いである。

現地での発掘調査ならびに本書の作成にあたっては、静岡県浜松土木事務所、静岡県教育委員会、浜松市教育委員会をはじめとする関係諸機関、地元住民の方々などから多くのご理解とご協力をいただいた。また、調査については多くの方々よりご指導、ご教示をいただいた。この場を借りて厚くお礼申し上げる。最後に現地作業、資料整理に従事した調査員、作業員諸氏にも感謝の意を表したい。

平成14年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例　　言

つねたけしゆ

1. 本書は、静岡県浜松市恒武町字西宮に所在するや恒武西宮遺跡2次及び、同市笠井町字若林に所在する笠井若林遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は（主）浜松環状線（笠井工区）道路改良（一般）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県浜松土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
3. 現地調査は、平成10年10月から平成11年6月まで恒武西宮遺跡2次調査を、平成10年10月から平成11年3月まで笠井若林遺跡1次調査（I区）を並行して実施した。平成11年7月から同年11月まで笠井若林遺跡2次調査（II区）、平成12年4月から同年11月まで笠井若林遺跡3次調査（III区）をそれぞれ実施した。

資料整理は、平成12年11月から平成14年3月まで実施した。

4. 調査体制は以下の通りである。

平成10年度（現地調査）

所長 斎藤 忠 常務理事 伊藤友雄 調査研究部長 石垣英夫
調査研究部次長心得 佐野五十三 調査研究四課長 遠藤喜和
総務課長 杉木敏雄 総務係長 田中雅代
調査研究員 佐原哲之・大谷宏治（笠井若林遺跡1次）
梶原良久・溝口彰啓（恒武西宮遺跡2次）

平成11年度（現地調査）

所長 斎藤 忠 副所長 山下 晃 常務理事 伊藤友雄 調査研究部長 佐藤達雄
調査研究部次長 佐野五十三 調査研究二課長 遠藤喜和
総務課長 杉木敏雄 総務係長 田中雅代
調査研究員 佐原哲之・溝口彰啓

平成12年度（現地調査・資料整理）

所長 斎藤 忠 副所長 山下 晃 常務理事 伊藤友雄 調査研究部長 佐藤達雄
調査研究部次長 及川 司 調査研究二課長 篠原修二 資料課長 大石 泉
総務課長 杉木敏雄 総務係長 田中雅代
調査研究員 中村正宏・溝口彰啓

平成13年度（資料整理）

所長 斎藤 忠 副所長 山下 晃 常務理事 余田徳幸 調査研究部長 佐藤達雄
調査研究部次長 栗野克巳 及川 司 調査研究二課長 篠原修二
総務課長 本杉昭一 総務係長 山本広子
調査研究員 溝口彰啓

5. 本書は第IV章4節の石製模造品に関しての本文及び挿図等についてを北山峯生氏（権原考古学研究所嘱託）が、第IV章4節及び第V章5節の金属製品の本文及び観察表を調査研究員 大谷宏治が執筆・作成し、原稿を溝口が加筆、編集した。その他は調査研究員 溝口彰啓が執筆した。

6. 本書に使用した遺物写真図版は、すべて(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所職員が撮影した。
7. 木製品の樹種同定及び保存処理、金属製品の保存処理は当研究所保存処理室（室長 西尾太加二）が実施した。
8. 遺跡出土鉄滓の成分分析は(株)日鐵テクノリサーチに委託し、分析結果を付録として掲載した。
9. 基準点測量及びグリッド杭打設、写真測量による遺構図の作成を(株)フジヤマに委託した。また、遺物実測、遺構図及び遺物実測図のトレースの一部を(株)フジヤマに委託した。
10. 現地調査では遺構及び遺物について元浜松市博物館館長 向坂鋼二氏に、地質及び古環境の復原について静岡大学名誉教授 加藤芳朗氏にご指導いただいた。また、資料整理では瀬戸美濃系施釉陶器について瀬戸市埋蔵文化財センター副所長 藤沢良祐氏に、石製品の材質について静岡大学名誉教授 伊藤通玄氏にご指導いただいた。
11. 本書の編集は、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
12. 発掘調査に関する資料は、静岡県教育委員会文化課が保管している。

凡 例

1. 現地調査にあたっては、調査区全域に10m方眼のグリッドを設定し、東西ラインをアルファベットで、南北ラインをアラビア数字で表記した。詳細は第Ⅲ章1節第5・6図に図示した。

2. グリッドは国土座標系を基準として設定した。したがって本書で使用する方位は国土座標の方位である。

3. 遺構の名称については、下記の略号を使用する。

<遺構>

SH・・・掘立柱建物跡	SB・・・堅穴住居跡	SD・・・溝状遺構
-------------	------------	-----------

SF・・・土坑	SX・・・性格不明遺構	SP・・・小穴
---------	-------------	---------

SE・・・井戸	SR・・・流路
---------	---------

<遺物>

S・・・石製品	W・・・木製品	M・・・金属製品
---------	---------	----------

C・・・土製品	無印・P・・・土器
---------	-----------

4. 現地調査で付した遺構名は、すべて新しい遺構名に変更した。

5. 文中及び挿図で使用する遺物番号の「○-●」という表記は、遺物挿図に表記した()内の番号○とそのページに付された番号●を表す。恒武西宮遺跡においては第43図～67図が(1)～(25)、笠井若林遺跡においては第132図～192図が(1)～(61)にそれぞれ遺跡ごとに対応する。

6. 遺構図、遺物実測図での表現は、以下のとおりである。

遺構



焼土



炭化物

遺物



長石釉



灰釉



鉄釉

目 次

序
例言
凡例
目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 笠井地区における発掘調査について	2
第Ⅱ章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第Ⅲ章 調査の方法と経過	11
第1節 調査の方法	11
第2節 調査の経過	14
第3節 基本土層について	15
第Ⅳ章 恒武西宮遺跡の調査	19
第1節 調査の概要	19
第2節 古墳～奈良時代の遺構と遺物	24
第3節 中世～近世の遺構と遺物	38
第4節 その他出土遺物について	70
①遺構外出土土器	70
②金属製品	71
③石製品	72
④土製品	74
⑤木製品	74
第Ⅴ章 笠井若林遺跡の調査	115
第1節 調査の概要	115
第2節 I区の遺構と遺物	116
①古墳・奈良・平安時代	116
②中世～近世	132
第3節 II区の遺構と遺物	140
①古墳・奈良・平安時代	140
②中世～近世	154

第4節 III区の遺構と遺物	170
①古墳・奈良・平安時代	170
②中世～近世	193
第5節 その他出土遺物について	209
①遺構外出土土器	209
②金属製品	212
③石製品	214
④土製品	214
 第VI章 まとめ	 302
第1節 恒武西宮遺跡の遺構変遷	302
第2節 笠井若林遺跡の遺構変遷	305
第3節 恒武西宮・笠井若林遺跡の鉄滓分布について	310
第4節 恒武遺跡群の中世遺物について	312
付編 恒武西宮・笠井若林遺跡出土鉄製品成分分析調査 (株)日鐵テクノリサーチ 伊藤 薫	317

挿図目次

第 1 図 笠井地区発掘調査地点位置図	3
第 2 図 恒武西宮遺跡・笠井若林遺跡位置図	5
第 3 図 恒武遺跡群周辺地形図	6
第 4 図 恒武遺跡群周辺遺跡分布図	7
第 5 図 恒武西宮遺跡グリッド配置図	12
第 6 図 笠井若林遺跡グリッド配置図	13
第 7 図 恒武西宮遺跡土層柱状図	16
第 8 図 笠井若林遺跡土層柱状図	17
第 9 図 恒武西宮遺跡第2面遺構全体図	20
第 10 図 恒武西宮遺跡第2面平面図1	21
第 11 図 恒武西宮遺跡第2面平面図2	22
第 12 図 恒武西宮遺跡第2面平面図3	23
第 13 図 SH201・202 実測図	25
第 14 図 SH203・204 実測図	26
第 15 図 SH205・206 実測図	27
第 16 図 SH207 実測図	28
第 17 図 SB201 実測図	30
第 18 図 SF201・209・210 実測図	31
第 19 図 恒武西宮遺跡第2面溝状遺構抽出図	33
第 20 図 SD243・250・299 実測図	34

第 21 図	SX202・211 実測図	36
第 22 図	SX203・209・212 実測図	37
第 23 図	恒武西宮遺跡第1面遺構全体図	39
第 24 図	恒武西宮遺跡第1面平面図1	40
第 25 図	恒武西宮遺跡第1面平面図2	41
第 26 図	恒武西宮遺跡第1面平面図3	42
第 27 図	SH1・2 実測図	43
第 28 図	SH3・4 実測図	44
第 29 図	SH5・6 実測図	46
第 30 図	SH7・8 実測図	47
第 31 図	SF9・10・11・17・28・33・37 実測図	49
第 32 図	SF23・26・27・32・54 実測図	50
第 33 図	SF39・40・41・43・47 実測図	51
第 34 図	SF14・51・52 SD5 実測図	52
第 35 図	恒武西宮遺跡第1面溝状遺構抽出図	54
第 36 図	SD9 実測図	56
第 37 図	SD1・3・6・7・12・16・27 SX4・5 土層断面図	58
第 38 図	SE1 実測図	60
第 39 図	SE2 実測図	61
第 40 図	SE3 実測図	62
第 41 図	SX1・2 実測図	64
第 42 図	SX3 実測図	65
第 43 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（1）第2面遺構出土土器	76
第 44 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（2）第2面遺構出土土器	77
第 45 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（3）第2面遺構出土土器	78
第 46 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（4）第2面遺構出土土器	79
第 47 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（5）第2面遺構出土土器	80
第 48 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（6）第2面遺構出土土器	81
第 49 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（7）第1面遺構出土土器	82
第 50 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（8）第1面遺構出土土器	83
第 51 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（9）第1面遺構出土土器	84
第 52 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（10）第1面遺構出土土器	85
第 53 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（11）第1面遺構出土土器	86
第 54 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（12）第1面遺構出土土器	87
第 55 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（13）第1面遺構出土土器	88
第 56 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（14）遺構外出土土器	89
第 57 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（15）遺構外出土土器	90
第 58 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（16）遺構外出土土器	91
第 59 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（17）遺構外出土土器	92
第 60 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（18）金属製品	93
第 61 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図（19）錢貨	94

第 62 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図 (20) 錢貨	95
第 63 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図 (21) 石製品 (石製模造品)	96
第 64 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図 (22) 石製品 (石製模造品等)	97
第 65 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図 (23) 石製品 (砾石)	98
第 66 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図 (24) 土製品	99
第 67 図	恒武西宮遺跡出土遺物実測図 (25) 木製品	100
第 68 図	笠井若林遺跡第2面・第1面遺構全体図	117
第 69 図	笠井若林遺跡 I 区第2面平面図1	119
第 70 図	笠井若林遺跡 I 区第2面平面図2	120
第 71 図	笠井若林遺跡 I 区第2面平面図3	121
第 72 図	SH203 実測図	122
第 73 図	SB205・207 実測図	123
第 74 図	SB206 実測図	124
第 75 図	SF212・213・214・216・217・233 実測図	126
第 76 図	SF209・226・227 SP241 実測図	127
第 77 図	SD243 実測図	129
第 78 図	SE201 実測図	131
第 79 図	SX229 実測図	133
第 80 図	SX230 実測図	134
第 81 図	笠井若林遺跡 I 区第1面平面図1	136
第 82 図	笠井若林遺跡 I 区第1面平面図2	137
第 83 図	笠井若林遺跡 I 区第1面平面図3	138
第 84 図	SF11・34・36 実測図	139
第 85 図	SF33 実測図	140
第 86 図	SD20 実測図	141
第 87 図	笠井若林遺跡 II 区第2面平面図	143
第 88 図	SH201・202 実測図	145
第 89 図	SB201・202 実測図	146
第 90 図	SB203・204 実測図	147
第 91 図	SF204・205・206・210・211 実測図	149
第 92 図	SD223・224・227 実測図	151
第 93 図	SH202・P7 SP244 実測図	152
第 94 図	SX208 実測図	153
第 95 図	笠井若林遺跡 II 区第1面平面図	155
第 96 図	SH1・2 実測図	157
第 97 図	SH3・4 実測図	158
第 98 図	SH5・6 実測図	160
第 99 図	SF4・5・6・7・8・9 実測図	161
第100図	SF12・16・20 実測図	162
第101図	SD2 実測図	164
第102図	笠井若林遺跡 III 区第2面平面図1	167

第103図	笠井若林遺跡Ⅲ区第2面平面図2	168
第104図	笠井若林遺跡Ⅲ区第2面平面図3	169
第105図	SH204 実測図	171
第106図	SH205・206 実測図	172
第107図	SB208・209 実測図	173
第108図	SB210・211 実測図	175
第109図	SB212・213・214 実測図	177
第110図	SB215・216 実測図	179
第111図	SB217・218・219 実測図	181
第112図	SB220・221 実測図	182
第113図	SB222・223・224 実測図	184
第114図	SB225・226・228 実測図	186
第115図	SB 227 実測図	187
第116図	SF234・239・262・263 実測図	188
第117図	SP290・302・315 実測図	190
第118図	SX218・220 実測図	191
第119図	SX222・224・225・227・228 実測図	192
第120図	笠井若林遺跡Ⅲ区第1面平面図1	194
第121図	笠井若林遺跡Ⅲ区第1面平面図2	195
第122図	笠井若林遺跡Ⅲ区第1面平面図3	196
第123図	SH7・8・10 実測図	197
第124図	SH9・11 実測図	198
第125図	SF37・38・39・42・44 実測図	199
第126図	SF48 実測図	201
第127図	SD38 実測図	204
第128図	SD43・52 実測図	205
第129図	SD49・69・72 実測図	206
第130図	SE2 実測図	207
第131図	SX4 実測図	209
第132図	笠井若林遺跡出土遺物実測図（1）I区第2面遺構出土土器	220
第133図	笠井若林遺跡出土遺物実測図（2）I区第2面遺構出土土器	221
第134図	笠井若林遺跡出土遺物実測図（3）I区第2面遺構出土土器	222
第135図	笠井若林遺跡出土遺物実測図（4）I区第2面遺構出土土器	223
第136図	笠井若林遺跡出土遺物実測図（5）I区第2面遺構出土土器	224
第137図	笠井若林遺跡出土遺物実測図（6）I区第2面遺構出土土器	225
第138図	笠井若林遺跡出土遺物実測図（7）I区第2面遺構出土土器	226
第139図	笠井若林遺跡出土遺物実測図（8）I区第2面遺構出土土器	227
第140図	笠井若林遺跡出土遺物実測図（9）I区第2面遺構出土土器	228
第141図	笠井若林遺跡出土遺物実測図（10）I区第2面遺構出土土器	229
第142図	笠井若林遺跡出土遺物実測図（11）I区第2面遺構出土土器	230
第143図	笠井若林遺跡出土遺物実測図（12）I区第1面遺構出土土器	231

第144図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (13) I区第1面遺構出土土器	232
第145図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (14) I区遺構外出土土器	233
第146図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (15) II区第2面遺構出土土器	234
第147図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (16) II区第2面遺構出土土器	235
第148図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (17) II区第2面遺構出土土器	236
第149図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (18) II区第2面遺構出土土器	237
第150図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (19) II区第2面遺構出土土器	238
第151図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (20) II区第2面遺構出土土器	239
第152図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (21) II区第2面遺構出土土器	240
第153図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (22) II区第2面遺構出土土器	241
第154図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (23) II区第2面遺構出土土器	242
第155図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (24) II区第1面遺構出土土器	243
第156図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (25) II区第1面遺構出土土器	244
第157図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (26) II区第1面遺構出土土器	245
第158図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (27) II区第1面遺構出土土器	246
第159図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (28) II区第1面遺構出土土器	247
第160図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (29) II区第1面遺構出土土器	248
第161図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (30) II区遺構外出土土器	249
第162図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (31) III区第2面遺構出土土器	250
第163図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (32) III区第2面遺構出土土器	251
第164図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (33) III区第2面遺構出土土器	252
第165図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (34) III区第2面遺構出土土器	253
第166図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (35) III区第2面遺構出土土器	254
第167図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (36) III区第2面遺構出土土器	255
第168図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (37) III区第2面遺構出土土器	256
第169図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (38) III区第2面遺構出土土器	257
第170図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (39) III区第2面遺構出土土器	258
第171図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (40) III区第2面遺構出土土器	259
第172図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (41) III区第1面遺構出土土器	260
第173図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (42) III区第1面遺構出土土器	261
第174図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (43) III区第1面遺構出土土器	262
第175図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (44) III区第1面遺構出土土器	263
第176図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (45) III区第1面遺構出土土器	264
第177図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (46) III区第1面遺構出土土器	265
第178図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (47) III区第1面遺構出土土器	266
第179図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (48) III区第1面遺構出土土器	267
第180図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (49) III区遺構外出土土器	268
第181図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (50) III区遺構外出土土器	269
第182図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (51) III区遺構外出土土器	270
第183図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (52) 金属製品	271
第184図	笠井若林遺跡出土遺物実測図 (53) 金属製品	272

第185図	笠井若林遺跡出土遺物実測図(54) 銭貨	273
第186図	笠井若林遺跡出土遺物実測図(55) 銅製品・石製品等	273
第187図	笠井若林遺跡出土遺物実測図(56) 石製品(砥石)	274
第188図	笠井若林遺跡出土遺物実測図(57) 石製品(砥石)	275
第189図	笠井若林遺跡出土遺物実測図(58) 石製品(砥石)	276
第190図	笠井若林遺跡出土遺物実測図(59) 石製品(砥石)	277
第191図	笠井若林遺跡出土遺物実測図(60) 土製品	278
第192図	笠井若林遺跡出土遺物実測図(61) 土製品	279
第193図	恒武西宮遺跡古墳時代～中世前期遺構変遷図	303
第194図	恒武西宮遺跡中世後期遺構と周辺地籍図 (昭和11年豊西村土地宝典図をもとに作成)	304
第195図	笠井若林遺跡古墳時代～中世前期遺構変遷図	306
第196図	笠井若林遺跡中世後期～近世遺構と周辺地籍図 (昭和9年笠井町土地宝典図をもとに作成)	309

挿表目次

表 1	笠井地区における発掘調査一覧表	2
表 2	恒武西宮遺跡 壴穴住居跡・掘立柱建物跡一覧表	66
表 3	恒武西宮遺跡 土坑・井戸・性格不明遺構一覧表	67
表 4	恒武西宮遺跡 溝状遺構一覧表	68
表 5	恒武西宮遺跡 土器一覧表	101
表 6	恒武西宮遺跡 金属製品一覧表	106
表 7	恒武西宮遺跡 銭貨一覧表	107
表 8	恒武西宮遺跡 石製品等一覧表	108
表 9	恒武西宮遺跡 土製品一覧表	114
表10	恒武西宮遺跡 木製品一覧表	114
表11	笠井若林遺跡 壴穴住居跡・掘立柱建物跡一覧表	216
表12	笠井若林遺跡 土坑・井戸・性格不明遺構一覧表	217
表13	笠井若林遺跡 溝状遺構・流路一覧表	218
表14	笠井若林遺跡 土器一覧表	280
表15	笠井若林遺跡 金属製品一覧表	298
表16	笠井若林遺跡 銭貨一覧表	300
表17	笠井若林遺跡 石製品等一覧表	300
表18	笠井若林遺跡 土製品一覧表	301
表19	恒武西宮・笠井若林遺跡 鉄滓分布表	311
表20	恒武遺跡群 中世遺物一覧表	314
表21	恒武遺跡群 潬戸美濃系施釉陶器一覧表	315
表22	恒武遺跡群 初山・志戸呂窯施釉陶器一覧表	316

図版目次

- カラー図版 1 恒武遺跡群周辺の地形（南より）
恒武遺跡群周辺の地形（南東より）
- カラー図版 2 笠井若林遺跡Ⅲ区完掘状況（上空より、合成）
- カラー図版 3 恒武西宮遺跡出土石製模造品
笠井若林遺跡Ⅰ区SB206出土遺物
- カラー図版 4 恒武西宮・笠井若林遺跡出土貿易陶磁
笠井若林遺跡Ⅱ区SD2出土遺物
- 恒武西宮遺跡
- 図版 1 調査区北半第2面全景（西より）
調査区南半第2面全景（西より）
- 図版 2 調査区北半第1面全景（西より）
調査区北端全景（西より）
- 図版 3 SH201完掘状況（南より）
SH202完掘状況（西より）
- 図版 4 SH204完掘状況（南より）
SH205完掘状況（西より）
SH206完掘状況（西より）
SH204～207以北完掘状況（南より）
SH205～207完掘状況（西より）
- 図版 5 SB201遺物出土状況（西より）
SB201遺物出土状況（西より、近接）
- 図版 6 SF209遺物出土状況（北より）
SF209遺物出土状況（西より）
SF231遺物出土状況（南より）
SD243遺物出土状況（東より）
SD250遺物出土状況（北より）
- 図版 7 SD299遺物出土状況（東より）
F-16区周辺溝状遺構完掘状況
(東より)
SH203-P1鉄製品出土状況（北より）
SX211遺物出土状況（南より）
SX202完掘状況（西より）
- 図版 8 SH1完掘状況（西より）
SH1～4・6完掘状況（西より）
- 図版 9 SH2完掘状況（南より）
SH4-P3根石出土状況（南より）
SH4-P4根石出土状況（南より）
SH7完掘状況（北より）
- SH8完掘状況（東より）
SF32焼土検出状況（東より）
SF41遺物出土状況（南より）
SF42遺物出土状況（東より）
SF41遺物出土状況（西より）
SD1～3完掘状況（北西より）
SD5遺物出土状況（北より）
SD9遺物出土状況（南西より）
SD9完掘状況（南西より）
SE1遺物出土状況（南西より）
SE1完掘状況（南西より）
SE3石組み検出状況（南より）
SE2水溜検出状況（南より）
SX2完掘状況（南東より）
SX3完掘状況（東より）
SX1完掘状況（東より）
- 笠井若林遺跡
- 図版13 I区北半第2面全景（東より）
I区南半第2面全景（東より）
- 図版14 I区北半第1面全景（南より）
I区南半第1面全景（東より）
- 図版15 SB206遺物出土状況（東より）
SB206完掘状況（南より）
- 図版16 SB205完掘状況（西より）
SB207完掘状況（南より）
- 図版17 SB205遺物出土状況（西より）
SF216遺物出土状況（東より）
SD243遺物出土状況（北東より）
SE201井戸側検出状況（東より）
SX230遺物出土状況（西より）

図版18	SX229遺物出土状況（西より） SF11遺物出土状況（東より） SF36遺物出土状況（南より） SD20遺物出土状況（東より） SD28完掘状況（南西より）	SB212遺物出土状況（南より、近接） SB213遺物出土状況（南より） SB212～214完掘状況（南より）
図版19	II区第2面全景（北より） II区第1面全景（東より）	SB215・216遺物出土状況（南より） SB216龜周辺遺物出土状況（西より） SB217完掘状況（南より） SB220完掘状況（南より） SB220-P2検出状況（東より）
図版20	SH201完掘状況（南西より） SB201龜検出状況（西より） SB202完掘状況（西より） SB204完掘状況（南西より） SB201遺物出土状況（西より）	図版31 SB219遺物出土状況（南より） SB219龜周辺遺物出土状況（南より） SB219龜内遺物出土状況（西より） SB222・223完掘状況（南より） SB224完掘状況（南より）
図版21	SB203遺物出土状況（西より） SD227遺物出土状況（南より）	図版32 SB221遺物出土状況（西より） SB221龜周辺遺物出土状況（西より） SB225・226完掘状況（南より） SB227遺物出土状況（南より） SB227遺物出土状況（南より、近接）
図版22	SF211遺物出土状況（南東より） SD223遺物出土状況（東より） SD224遺物出土状況（南東より） 土馬出土状況（南より） SH1・2完掘状況（東より）	図版34 SB227完掘状況（南より） SB228完掘状況（南より）
図版23	SH1-P3棹秤の錘出土状況（南より） SH5・6完掘状況（北より）	図版35 SF234遺物出土状況（南西より） SF239遺物出土状況（東より）
図版24	SD2遺物出土状況（北より） SH4完掘状況（東より） SD2～6完掘状況（西より） SD15遺物出土状況（南より） SF9遺物出土状況（北より）	SF262遺物出土状況（北西より） SD260遺物出土状況（南西より） SP302遺物出土状況（北より） SX218遺物出土状況（北東より） SX222遺物出土状況（北東より） SX227遺物出土状況（北東より）
図版25	III区（北）第2面全景（南より） III区（南）南半第2面全景（東より）	図版36 SH7完掘状況（南東より） SH9完掘状況（南東より）
図版26	III区（南）北半第2面全景（西より） III区（北）第1面全景（南より）	図版37 SH10完掘状況（北西より） SH11完掘状況（北東より）
図版27	III区（南）南半第1面全景（東より） III区（南）北半第1面全景（東より）	図版38 SF42遺物出土状況（西より） SP72遺物出土状況（東より） SD43遺物出土状況（東より） SD38・52遺物出土状況（西より） SD38・52遺物出土状況（東より）
図版28	SH205完掘状況（北より） SH206完掘状況（西より）	図版39 SD38遺物出土状況（東より） SD38完掘状況（西より）
図版29	SB209～220完掘状況（東より） SB208遺物出土状況（南より） SB209完掘状況（南より） SB209遺物出土状況（南より、近接） SB210完掘状況（西より）	図版40 SD38遺物出土状況（西より）
図版30	SB211遺物出土状況（南より） SB212遺物出土状況（南より）	

- SD44遺物出土状況（北西より）
SD48～52完掘状況（南より）
SD54南端完掘状況（南より）
SD52完掘状況（南より）
- 図版41 SD80遺物出土状況（南西より）
SX4完掘状況（東より）
SE2遺物・石検出状況（東より）
SE2完掘状況（東より）
SE2石組検出状況（東より）
- 図版42～47 恒武西宮遺跡出土土器
- 図版48 恒武西宮遺跡SB1出土土器
恒武西宮遺跡出土内耳鍋
- 図版49 恒武西宮遺跡出土金属製品
- 図版50 恒武西宮遺跡出土銭貨
- 図版51 恒武西宮遺跡出土砥石
恒武西宮遺跡出土土製品
- 図版52 恒武西宮遺跡出土木製品
- 図版53～59 笠井若林遺跡Ⅰ区出土土器
- 図版60～65 笠井若林遺跡Ⅱ区出土土器
- 図版66～76 笠井若林遺跡Ⅲ区出土土器
- 図版77 笠井若林遺跡Ⅱ区SB203出土土器
笠井若林遺跡Ⅲ区SB212出土土器
- 図版78 笠井若林遺跡Ⅱ区SD227出土土器
笠井若林遺跡Ⅲ区SF42出土土器
- 図版79 笠井若林遺跡出土金属製品
- 図版80 笠井若林遺跡出土銭貨
笠井若林遺跡出土棹秤の錘
- 図版81 笠井若林遺跡出土砥石1
笠井若林遺跡出土砥石2
- 図版82 笠井若林遺跡出土石製品
- 笠井若林遺跡出土土製品1
- 図版83 笠井若林遺跡出土土製支脚
笠井若林遺跡出土土製品2

第Ⅰ章 調査に至る経緯

第1節 調査に至る経緯

東名高速道路浜松インターチェンジの取付道路である浜松環状線は、浜松インターの北約1km付近で浜松市と浜北市を結ぶ主要道の笠井街道と合流している。笠井街道は片側一車線と狭く、近年になってさらに増加する交通量に対応するため、浜松環状線の笠井街道以北の延長工事が計画されることとなった。

浜松環状線予定地には恒武町を中心とした周知の遺跡である、恒武遺跡群が存在していたため（『静岡県文化財地図Ⅱ』1989）、平成7年10月に静岡県浜松土木事務所の依頼を受け、第1回目の遺跡範囲確認調査を行うこととなった。この確認調査は浜松市教育委員会が中心となり、当研究所が補佐する形で実施され、その結果を受けて平成8年度には恒武西宮遺跡1次、平成9年度と10年度には恒武西浦遺跡の発掘調査が実施された。この調査結果は（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第120集『恒武西宮・恒武西浦遺跡』としてすでに刊行されている。

上記恒武西宮遺跡1次と恒武西浦遺跡の調査結果から、両遺跡に挟まれた長福寺が存在する地区にも遺跡があることは確実となり、長福寺の移転終了後の平成10年10月から平成11年5月にわたり平成10年度（主）浜松環状線（笠井工区）道路改良（一般）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、調査を実施する運びとなった。恒武遺跡群では、浜松市教育委員会と協議の上、小字名をとって遺跡名としている。長福寺跡地地区も小字名西宮であることから、恒武西宮遺跡の一部であり、今回の調査は1次調査に統ぐ2次調査となる。調査面積は表面積2,420m²、延べ4,840m²である。

一方、平成9・10年度に調査された恒武西浦遺跡のさらに北側の道路予定地については、上記文化財地図によれば、恒武遺跡群の遺跡範囲から外れている。しかし、それまでの調査結果から北に遺跡が広がる可能性が十分考えられたため、平成9年9月に静岡県浜松土木事務所の依頼を受け、当研究所が第2回目の確認調査を実施した。この確認調査は恒武西浦遺跡北端から未買地を挟んで、北に約80mの地点を起点に道路幅に沿って起点から約180m北までの範囲で行った。その結果、奈良時代から中世の遺構と遺物包含層が確認されたため、本調査が必要であるとの結論を得た。この時点では、遺跡名がつけられていなかったため、浜松市教育委員会と協議の上、所在する町名及び字名をとって笠井若林遺跡と呼称することとなった。

第2回目の確認調査範囲における笠井若林遺跡の本調査は、北側部分を平成10年10月から平成11年3月まで平成10年度（主）浜松環状線（笠井工区）道路改良（一般）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した。調査面積は表面積2,340m²、延べ4,680m²であり、これを1次調査とした。南側部分は翌年平成11年7月から平成11年10月まで平成11年度（主）浜松環状線（笠井工区）道路改良（一般）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した。調査面積は表面積2,420m²、延べ4,840m²であり、これを2次調査とした。

1次調査の北側部分に関しては、第2回目の確認調査時にはまだビニールハウスが建っていたため、撤去後の平成10年8月に第3回目の確認調査を実施した。調査範囲は1次調査地点北端より、約120m北の春日神社付近までである。この確認調査により、笠井若林遺跡は春日神社境内付近まで広がっていることが

判明した。これを受けて、平成12年4月から平成12年11月まで、平成12年度（主）浜松環状線（笠井工区）道路改良（一般）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査としてこの範囲の発掘調査を実施した。調査面積は現道の市道大島豊西線部分を除く表面積2,375m²、延べ4,750m²で、これを3次調査とした。

なお、恒武西宮遺跡は道路建設予定地の歩道部分を含めて調査対象としているが、比較的標高の高い笠井若林遺跡の歩道部分に関しては掘削が造構面まで及ばず、保護層が確保されることが確認された。それについて文化課、浜松土木事務所、当研究所で協議をした結果、地下道建設予定のある2次調査地点を除いて、車道部分のみの発掘調査となった。

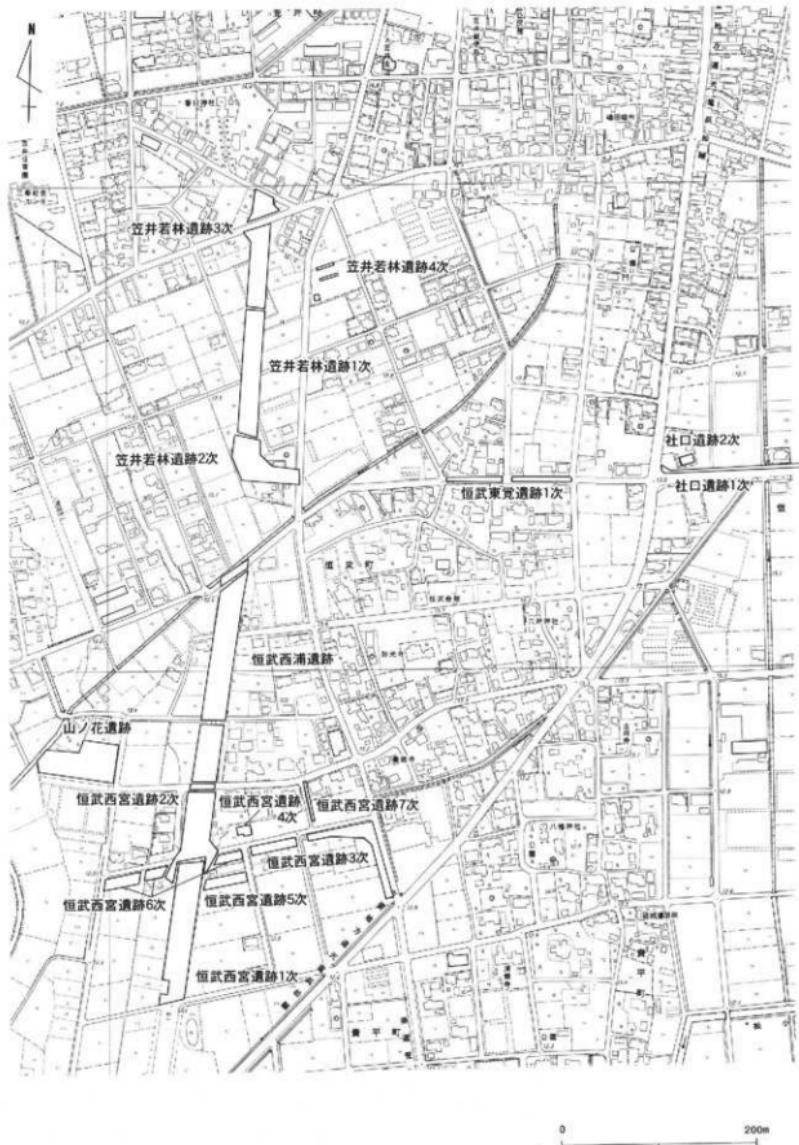
以上の経緯から、本報告書で報告するのは、平成10年度の恒武西宮遺跡2次と平成10年度から平成12年度にかけて行われた笠井若林遺跡1次・2次・3次の発掘調査結果である。

第2節 笠井地区における発掘調査について

近年、浜松環状線を中心とした開発が進み、笠井地区では発掘調査が増加し、徐々に地区の歴史が明らかになりつつある。調査地点が散っており、また当研究所と浜松市教育委員会と共に調査主体がそれぞれ地点ごとに異なることもあるため、やや複雑となっている。ここで別表（表1）、別図（第1図）により整理しておく。

表1 笠井地区における発掘調査一覧表

遺跡名	所在地	調査期間	主な時代	調査主体	文献
蛭子森古墳	豊町	1962.3～1962.4	古墳	浜松市教育委員会	浜松市教育委員会1995 『浜松市指定文化財・古墳』
笠井下組遺跡	笠井町	1994.1	奈良	浜松市教育委員会	浜松市教育委員会1995『笠井町下組遺跡』
御殿山遺跡	笠井町	2000.5	鎌倉	浜松市教育委員会	(財) 浜松市文化協会2000『御殿山遺跡』
ハツ面遺跡	笠井町	2001.5	古墳	浜松市教育委員会	(財) 浜松市文化協会2001『ハツ面遺跡』
笠井若林遺跡1次（Ⅰ区）	笠井町	1998.10～1999.3	奈良・鎌倉	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所	本報告書
笠井若林遺跡2次（Ⅱ区）	笠井町	1999.7～1999.10	奈良・平安・戰国	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所	本報告書
笠井若林遺跡3次（Ⅲ区）	笠井町	2000.4～2000.11	奈良・平安・鎌倉・戰国	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所	本報告書
笠井若林遺跡4次	笠井町	2000.5	平安	浜松市教育委員会	(財) 浜松市文化協会2000 『笠井若林遺跡4次』
社口遺跡1次（確認）	恒武町	1983.2	古墳・奈良	(財) 駿府博物館 付属静岡埋蔵文化財調査研究所	(財) 駿府博物館付属 静岡県埋蔵文化財調査研究所1983 『社口遺跡』
社口遺跡2次	恒武町	1993.11	奈良	浜松市教育委員会	(財) 浜松市文化協会1994『社口遺跡』
恒武東覚遺跡1次	恒武町	1999.11～2000.3	古墳・奈良・鎌倉	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所2000 『恒武西宮・西浦遺跡』
恒武西宮遺跡	恒武町	1997.7～1998.9	古墳・奈良	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所2000 『恒武西宮・西浦遺跡』
恒武西宮遺跡1次	恒武町	1996.9～1997.3	古墳・奈良	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所2000 『恒武西宮・西浦遺跡』
恒武西宮遺跡2次	恒武町	1998.10～1999.6	古墳・奈良・戰国	(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所	本報告書
恒武西宮遺跡3次	恒武町	1998.10～1999.1	古墳・戰国	浜松市教育委員会	(財) 浜松市文化協会2002 『恒武西宮遺跡3～7次』
恒武西宮遺跡4次	恒武町	1999.5	古墳	浜松市教育委員会	(財) 浜松市文化協会2002 『恒武西宮遺跡3～7次』
恒武西宮遺跡5次	恒武町	1999.12	古墳	浜松市教育委員会	(財) 浜松市文化協会2002 『恒武西宮遺跡3～7次』
恒武西宮遺跡6次	恒武町	2000.11～2000.12	古墳	浜松市教育委員会	(財) 浜松市文化協会2002 『恒武西宮遺跡3～7次』
恒武西宮遺跡7次	恒武町	2000.11	戰国	浜松市教育委員会	(財) 浜松市文化協会2002 『恒武西宮遺跡3～7次』
山ノ花遺跡	恒武町	1996.8～1996.12	古墳・奈良	浜松市教育委員会	(財) 浜松市文化協会1998『山ノ花遺跡』



第1図 笠井地区発掘調査地点位置図

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

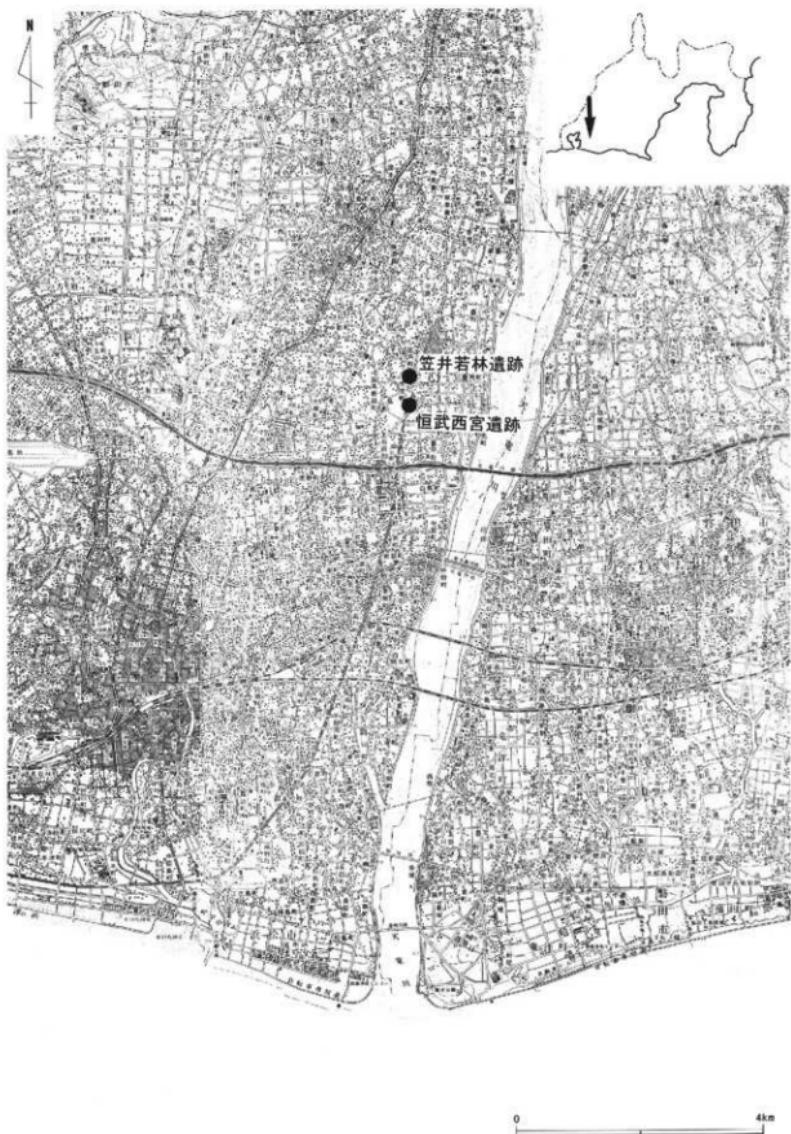
恒武西宮遺跡・笠井若林遺跡は浜松市の北東部、東名浜松インターの約1kmに位置する。現在は天竜川の西岸にあたり、浜北市方面に向かう主要幹線である笠井街道の西側に沿っている。地形的には天竜川が磐田原、三方原台地の間の空間に大量の堆積物を運搬して形成した沖積平野（天竜川平野）上に立地する。現在の町名では浜松市恒武町、笠井町にそれぞれ該当し、この2町は貴平町、常光町、豊西町、豊町、笠井新田町、笠井上町とともに笠井地区の範疇に入る。

天竜川は諏訪湖を源流として、赤石山脈、伊那山地、木曾山脈の間を抜け、途中支流からの流れをあわせながら自らの形成した冲積平野を流れ、遠州灘へと注ぐ全長216kmの河川である。水量が豊富で、山間より運搬した土砂を活発に堆積させることから、厚い砂礫層を主体とする扇状地図の平野を形成するという特徴を持っている。よって、山間を抜けた天竜市二俣付近から河口にかけての冲積平野は、大きく見れば北から南に向かって傾斜を持った扇状地形を呈する。笠井町付近からその傾斜はやや緩やかとなり、その南側から河口にかけては比較的平坦となる。恒武西宮・笠井若林遺跡を含む恒武遺跡群はちょうどその境に位置している。

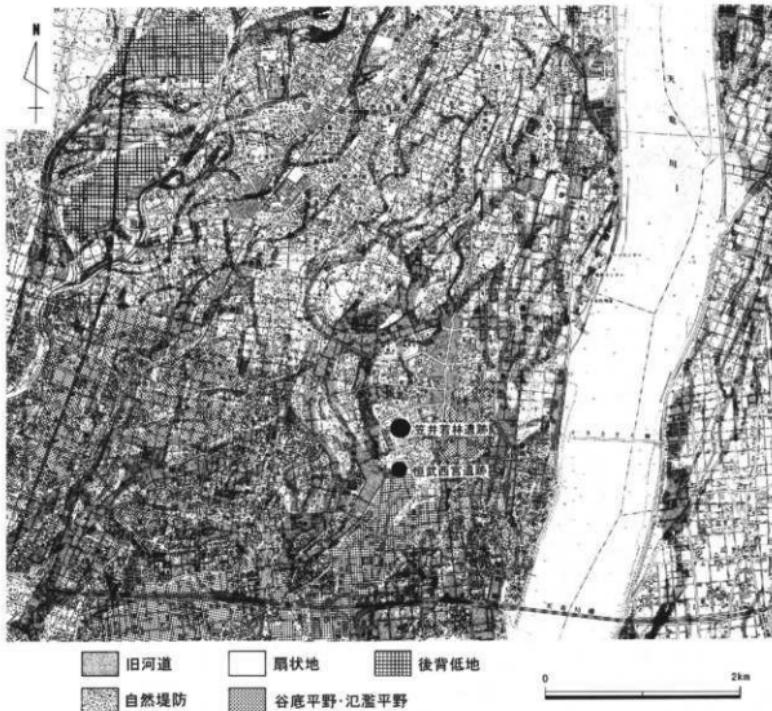
天竜川は古来より磐田原、三方原台地の間で氾濫を繰り返し、「暴れ天竜」という異名がついている。古くは『続日本記』に記載された和朝8（靈紀元）（715）年の地震による決壩、天平宝字5（761）年の堤が決壊した記事が知られる。当時の天竜川の本流は魚玉河と呼ばれており、現在の安間川に該当するという（浜北市1986）。以来、昭和20年の最後の大洪水まで天竜川は水害をもたらし続けたのである。今でも堤防によって仕切られた河川敷の中で多量の降雨の際には増水し、その後水が引くと増水前の流路群とは違う姿が見える。大規模な治水が行われる前は、このような状況が周囲の平野部で繰り広げられていたことは想像に難くない。現在のように一本化した天竜川の景観はごく最近になってからのことであって、過去においてはこのように本流とそれに付随する小流路が平野を縦横に流れ、時には大規模な洪水によって流路が変更するという状況が長く続いていたと思われる。沖積平野は平滑ではなく、自然堤防である微高地や旧河道である微低地が複雑に入り組んでいる（第3図）。それらはこうした川の活動によるものであり、人々の生活はその制約の中で水と共存し、そして戦いながら営まれてきたのである。恒武西宮遺跡・笠井若林遺跡はそうした河川群の形成した自然堤防上の微高地に位置するため、比較的安定した環境にあったと考えられる。古墳時代から現在まで長期間にわたる集落が営まれる立地条件を満たしていたのだろう。

第2節 歴史的環境

恒武遺跡群を含む笠井地区を中心に、沖積平野における各時代ごとの歴史的な環境を記述してみたい。なお、遺跡後ろの数字は第4図の遺跡番号に対応し、笠井地区の遺跡については第1図を参照していただきたい。



第2図 恒武西宮遺跡・笠井若林遺跡位置図



第3図 恒武遺跡群周辺地形図（国土地理院「土地条件図 磐田」をもとに作成）

旧石器・縄文時代

天竜川の形成した沖積平野上では旧石器時代の遺跡は発見されていない。更新世末期（3～1万年前）には現在よりも海面が100m程度も低下しており、河川もそれに応じて河床を下げて深い谷を形成し、天竜川平野では30～100mの深さにまで達していたと考えられている（磐田市1993）。よって、現状では沖積平野における旧石器時代の遺跡については存在すら確認できないといえよう。

縄文時代の遺跡の様相もほとんどわかっていない。縄文時代早期末～前期にかけてのいわゆる「縄文海進」時には天竜川平野にも海水が進入し、入り江を形成したとされる（静岡県1994）。海退期を通じて沖積平野が徐々に形成されていくが、生活に適した安定した環境ではなかったことがうかがえる。しかし、沖積平野上の遺跡である宮竹野跡遺跡4次調査（25）において晩期後半の土器の出土が報告されていることもあり（浜松市1997a）、今後注意する必要があろう。

弥生時代

天竜川平野での弥生時代の遺跡は中期以降、見られるようになってくる。この頃から地形も安定し、沖積高地を中心に集落域が形成され始めたと考えられる。それを裏付けるように、宮竹野跡遺跡2次調査（浜松市1994）では中期と想定される小区画の水田域が確認されている。しかし、集落の構造に迫



第4図 恒武遺跡群周辺遺跡分布図

れるだけの資料は少なく、人々の本格的な沖積平野への進出は遺跡が急増する後期に入ってからといえよう。後期の発掘された遺跡としては、天王中野遺跡（21）、山の神遺跡（26）、松東遺跡（29）などがあげられる。しかし、恒武遺跡群周辺の扇状地近くではこの時期の遺跡は確認されておらず、むしろ上記遺跡の立地する南側のより平坦な沖積平野に展開する傾向が見受けられる。これは水稻耕作に適した生産域と比較的安定した微高地の居住域を求めた結果であろう。

古墳時代

古墳時代になると、天竜川東岸の磐田原台地、西岸の三方原台地の縁辺には前・中期には大型古墳が、後期には群集墳が築造されるようになる。当遺跡北東には沖積平野では稀ともいえる後期段階の築造とされる蛭子森古墳（9）が存在する。立地や右片袖式石室という石室構造から、群集墳の築造者とは隔絶した有力な被葬者が想定されるとの指摘がなされ（浜松市2001a）、恒武遺跡群の古墳時代後期の集落との関連が注目される。

沖積平野を囲む台地上には多くの古墳が成立し、その背景となる集落城も当然存在していたと思われる。しかし、沖積平野全体で見れば、調査例が多くはなく、集落の様相は必ずしも明らかになっていない。その中にあって近年の恒武遺跡群周辺の発掘調査は貴重な資料を提供しているといえよう。笠井地区において確認できる最も古い時期にあたる遺跡の調査は恒武西宮遺跡3次調査である。古墳時代前期の方形周溝墓が発見され、多量の土器が出土している（浜松市2002）。中期段階では山ノ花遺跡と恒武西浦遺跡で検出された旧河道が特筆される。この旧河道からは大量の土器とともに祭祀に使用された木製品や石製品が出土しており、上位階層による祭祀行為の一端が明らかになった。また、恒武西宮遺跡1次、恒武西浦遺跡では古墳時代中期から後期にわたる集落城も確認され、堅穴住居跡や掘立柱建物跡など生活の痕跡が数多く発見されている（埋文研2000）。

奈良・平安時代

律令体制の確立によって、遠江国も中央集権体制に組み込まれることとなる。律令国家による地方支配は国郡制の整備とともに強固となっていく。恒武遺跡群のある笠井地区が所属したと考えられる郡は磐田（石田）、長田、龜玉郡の3郡が想定される。このうち長田郡は和賀2（709）年に長上、長下郡に、磐田郡は12世紀後半までには磐田、豊田郡にそれぞれ分割されるが、その場合は長上郡、豊田郡が該当すると思われる。しかし、その都境は明らかにはっていない。また、律令期には天竜川下流域である、長上郡、長下郡、豊田郡域には広域条理が施工されたことが指摘されている（歌川1962）。笠井地区の南に位置する貴平町においても、天竜川等、河川による破壊を受けているため分断されてはいるものの、N8.5° W の表層条理が復原されるという。

沖積平野におけるこの時期の遺跡は増加傾向にあるらしく、発掘調査で確認された遺跡が多い。宮竹野際遺跡（25）では奈良時代後期から平安時代前期にかけての規格性の高い掘立柱建物跡が検出された。円面鏡や布目瓦が出土したこともあり、長上郡の郡衙に比定されている浜松市和田町周辺（旧永田村）との関連も指摘される（浜松市1994）。宮竹野際遺跡の南東に位置する木船遺跡では版築状造構と瓦が発見されており、これを寺院跡とすることができるならば、郡の中心施設に近いことを補強するものと思われる。また、沖積平野ではないものの、恒武遺跡群から約5km西の三方原台地の東端に所在する下瀬遺跡群は、古墳時代末から奈良時代後半にかけて大規模な集落が営まれていたことが判明している（浜松市1997b）。恒武遺跡群のような沖積平野上の集落との対比という点で注目できる。

笠井地区においても奈良・平安時代の遺跡は確認されている。奈良時代においては社口遺跡で円面鏡の出土が知られ、笠井町下組遺跡でも遺構・遺物の存在が確認された。山の花遺跡と恒武西浦遺跡では旧河道の発掘調査がなされ、多量の遺物が出土している（浜松市1998・埋文研2000）。中でも墨書き土器や人面墨書き土器、土馬や人形等の土製品が出土したことは特筆でき、当該期の川辺における祭祀のあり

方に多くの見知を与えるものであろう。平安時代に関しては恒武西浦遺跡では掘立柱建物跡と木組みの井戸が発見されており、笠井若林遺跡4次調査では綠釉陶器や移動式竈を含む遺物が出土している（浜松市2001）。

中世

平安時代末期には遠江でも多くの荘園が成立する。荘園自体は8世紀から存在するが、中世的な土地所有制度であるいわゆる荘園公領制の確立は平安時代末期の12世紀代といわれ、笠井地区を含むと見られる羽鳥荘と美園御厨が文献に見えるようになるのもこの頃のことである。直接その領域を示す史料は存在しないが、概ね羽鳥荘は羽鳥の地名が残る浜松市旧豊西村周辺（豊田郡）、美園御厨はその北西に隣接する長上郡内と推定されている（静岡県1994）。両者に隣接する池田荘の嘉応3（1171）年の立券状（静岡県史資料編古代1864、以下県史～と略）の中で、荘域を示す四至傍示に見えるのが初出とされる（家永1990）。羽鳥荘は後白河法皇が勅請した京都の新熊野社領である。下って南北朝期の建武4（1337）年には足利尊氏によって浜松市貴平町周辺と思われる羽鳥荘貴平郷の地頭職を遠江国府八幡宮に寄進する文書（県史中世2-184）が見える。この時期の足利家と遠江の緊密な関係の一端がうかがえ、当荘の一部もその所領の一部であったことが推定される。さらに明応7（1498）年には今川氏親によって貴平郷の地頭職が府八幡宮に返付されているため（県史中世3-258）、戦国期に至るまで断続的にではあるが、府八幡宮領として存続していたのである。永正8～9（1511～2）年には今川の被官である福島範為が幕府奉行人である飯尾貞寛に対して羽鳥荘の年貢進納について数々の文書を取り交わしている（県史中世3-534・546～7・549～52・570～3）。戦国時代の羽鳥荘における所領関係は判然としないが、羽鳥荘は守護諸の荘園で、この時期遠江守護であった今川家が幕府に対し年貢を請負っていたのではないかとの指摘がなされている（静岡県1997）。

一方、美園御厨は御厨の名が示すように伊勢神宮領であった。しかし、建久3（1192）年の伊勢神宮神領注文（県史中世1-370）にみえる美園御厨の記事には、給主は九条女三位家の子息藤原惟方で、古くは神領であったが天義2（1145）に改めて立券されたとある。藤原惟方は久安5（1149）年から保元元（1156）年まで2期にわたり遠江守を勤めている。嘉元4（1306）年の昭慶門院領目録案（県史中世2-1573）によれば、惟方は後に美園御厨を含む荘園を父藤原顯頼の建立した興善院領として寄進したとされる。このように御厨の荒廃の後に立券された美園御厨は御厨の名を持ちながら、実態として院領荘園の一部を構成していた荘園であるといえる。

また、永正8～10（1511～13）年に遠江守護今川氏親は遠江平定のために、領国の回復を期して引佐郡深嶽城に築いた前述江守護斯波氏の当主義達とそれに与する大河内貞綱や井伊衆を討つべく出陣した。その際に笠井庄楞嚴寺に陣をとったと『重編応仁記』、『今川家譜』、『宗長手記』に見える（県史中世3-582～584）。楞嚴寺という寺院は浜松市半田町に存在するが、果たして文献のいう楞嚴寺かどうかはわからない。笠井庄は他の文献にはその名はなく、この時期には美園御厨をこのように呼称していたのではないかとの指摘もあるが（浜松市2001b）、その実態はまったく不明である。

沖積平野における中世の遺跡を概観してみると、宮竹野跡遺跡1次調査（25）では12～13世紀前半を中心とした集落が発見され、小規模な区画溝を有する掘立柱建物跡と井戸が確認された。14世紀には集落は衰退し、島畠となることも判明している（浜松市1988）。隣接する山の神遺跡（26）でもやはり12～13世紀の集落が発見されている。この集落は大規模な溝によって、耕地をも含んだほぼ一辺1町の方形区画がなされていることが特筆できる。山の神遺跡で出土した「長田」の墨書きが残る山茶碗は蒲御厨内の長田を示すと思われる（浜松市1989）。越前遺跡（28）は山の神遺跡の南東に位置するが、山の神遺跡で確認された溝と方向を一にした13世紀代の区画溝が検出されている（浜松市1982）。飯田遺跡群とも総称される山寺野遺跡（36・浜松市2000a）、寺西遺跡（38・浜松市2000b）でも13世紀代の井戸

や区画溝が検出されている。この飯田遺跡群、前述の宮竹野際、山の神、越前遺跡は中世において蒲御厨に含まれており、中世前期には蒲御厨を中心とした集落の広がりが見える。

笠井地区においても中世の遺跡は多く発見されている。御殿山遺跡では調査範囲は狭いものの、13世紀代とみられる溝状遺構が検出された（浜松市2000）。恒武西宮1次・恒武西浦遺跡でも中世前半とみられる掘立柱建物跡、溝状遺構が検出されている（埋文研2000）。笠井地区では中世前半期の遺構、遺物が見つかっているが、集落の具体像を知る、まとまった資料はまだ確認されていない。中世後半期の遺構は恒武西宮遺跡3次調査で発見されている（浜松市2002）。15～16世紀代の屋敷地を区画する溝が検出され、今回報告する恒武西宮遺跡2次調査地点の当該期の遺構と関連するものと考えられる。このように笠井地区での発掘調査では中世に関わる資料が蓄積されつつある。

近世

近世に至ると笠井地区は一時期天領となるようだが、概ね浜松藩領となる。笠井町には江戸時代の早い段階には市がたてられ、遅くとも慶安年間以前には成立していたともいわれる。安定した立地に加え、浜松城下や見附とも近く、陸水路の利便性から江戸時代中期以降木綿の取引を中心にかなりの賑わいをみせていた。笠井は水田がほとんどなく、皆畠の村でもあった。そのため収穫量の少なさを補い、換金作物として木綿を多く栽培したことから、笠井市は木綿の集散地として機能することとなる。その経験や知識は、近代に至って浜松における織物工業に重要な役割を果たしたものといわれている。笠井における市の発達は唐突ではなく、おそらくは中世後半にはその萌芽があったと思われる。

引用・参考文献

- 歐川 学 1962 「浜松付近における条里制の遺構」『愛知大学文学論叢』開学十五周年記念特輯
愛知大学文学会
- 家永二郎 1990 「遠江国」『講座日本歴史5』東北・関東・東海地方の歴史 吉川弘文館
- 浜北市 1986 『浜北市史』浜北と天龍川
- 磐田市 1993 『磐田市史』通史編上巻
- 静岡県 1994 『静岡県史』通史編原始・古代
- 静岡県 1997 『静岡県史』通史編2中世
- (財)浜松市文化協会 1982 『越前遺跡』
- (財)浜松市文化協会 1988 『宮竹野際遺跡』
- (財)浜松市文化協会 1989 『山の神遺跡』
- (財)浜松市文化協会 1994 『宮竹野際遺跡2』
- (財)浜松市文化協会 1997a 『宮竹野際遺跡4』
- (財)浜松市文化協会 1997b 『下浅遺跡群』
- (財)浜松市文化協会 1998 『山ノ花遺跡』
- (財)浜松市文化協会 2000a 『山寺野遺跡』
- (財)浜松市文化協会 2000b 『寺西遺跡』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000 『恒武西宮・西浦遺跡』
- (財)浜松市文化協会 2001a 『八ツ面遺跡』
- (財)浜松市文化協会 2001b 『東畠遺跡』
- (財)浜松市文化協会 2002 『恒武西宮遺跡』3・6・7次発掘調査報告書
- 浜松市立笠井町公民館編 1993 『わが町文化誌 笠井』

第Ⅲ章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

現地調査

今回報告する調査区は南北に伸びる浜松環状線の建設予定地にあたるため、必然的に南北に長く、東西に短い調査区となった。調査年度が複数にまたがる笠井若林遺跡に関しては、第Ⅰ章で述べたように調査区を年度順に大きくⅠ区(1次)、Ⅱ区(2次)、Ⅲ区(3次)と分割し実施している。基本的には両遺跡とも、2遺構面にわたる調査を実施した。

調査区の掘り下げに関しては、恒武西宮遺跡の場合平成8~10年度調査結果に基づき、また笠井若林遺跡は確認調査の結果に基づいて重機により表土除去を実施した。表土除去は遺構検出面より10cmほど上面まで行い、以下は人力によって掘削した。中間層はその厚さに応じて重機掘削と人力掘削を併用して行った。掘削により生じた堆土は、重機によった場合は10tもしくは4tダンプで即時搬出し、人力によった場合は調査区内に仮置した後、同様に搬出した。また調査区は平地のため、降雨時には雨水が溜り遺構の崩壊を招くこともあるため、周間に排水溝を掘削し、数カ所に水中ポンプを設置した。

調査の際の測量や遺物の取り上げの基本となるグリッドは、平成8~10年度の恒武西宮・西浦遺跡の調査で設定したものそのままを使用した。国土座標にあわせて10m単位で設定したメッシュは、一連の恒武遺跡群発掘調査地点では南端となる恒武西宮遺跡1次調査地点の南西端を基点とし、東西軸は東に向かってA、B、C・・・、南北軸は北に向かって1、2、3・・・とした。各グリッドはこれらアルファベットと番号の組み合わせにより、A-1、B-1という具合に南西杭の名称をもって呼称した。

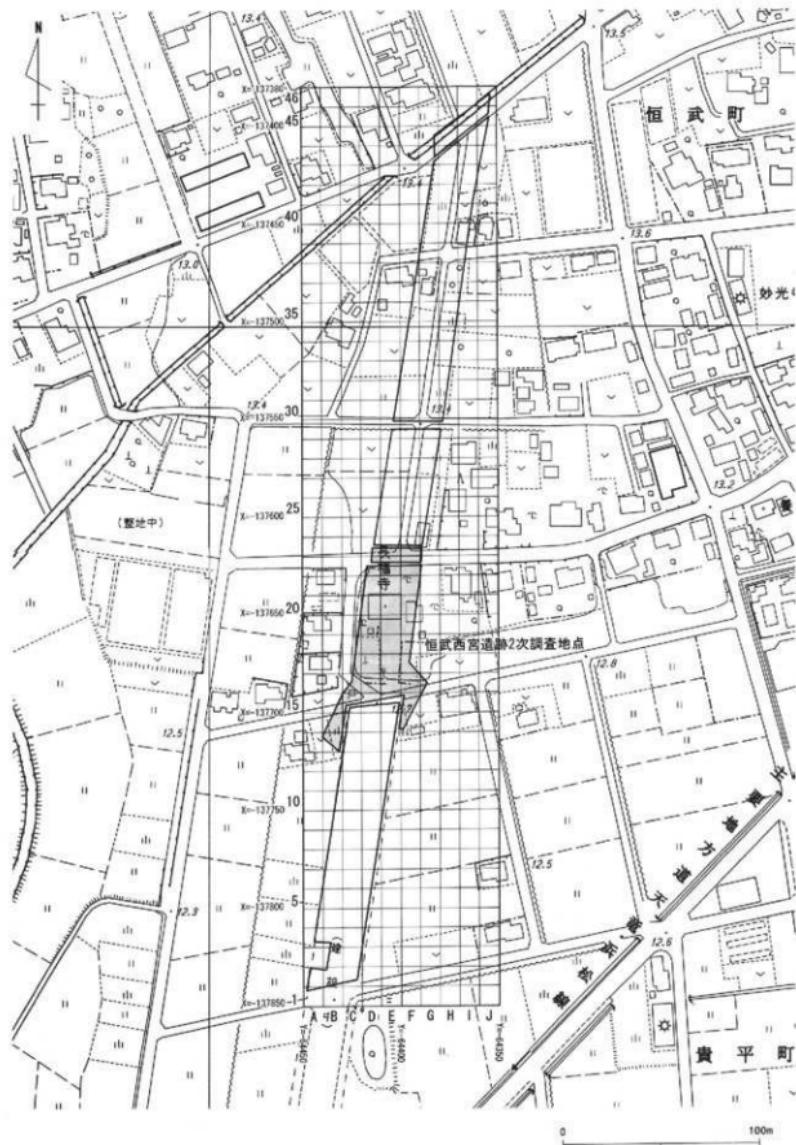
遺物の取り上げは上記グリッドを基準とし、包含層内の遺物は各グリッドをさらに四分割し、A-1南西、B-1北東というように表記した。遺構内出土遺物は遺構ごとに取り上げ、状況に応じてポイント、出土状況図等の記録をとり、番号を付した。

遺構・遺物の測量はトータルステーションを用いて、1/20を基本として実施した。遺物出土状況図のように詳細なものは1/10の図面を作成した。完掘状況の測量は調査の迅速化を図るために、多くを(株)フジヤマに委託し空中写真測量を行い、1/20と1/100の図面を作成した。

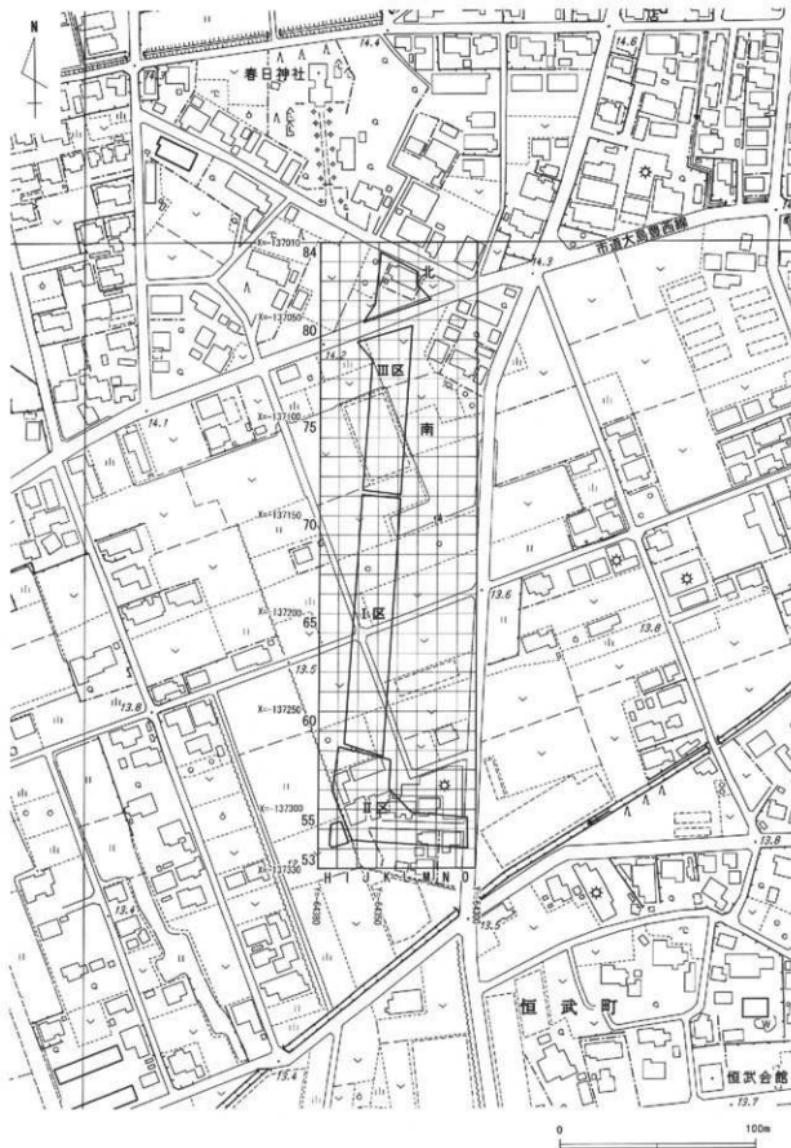
記録写真の撮影は基本として6×7判モノクロ、35mmカラーリバーサル、35mmモノクロ、35mmカラーネガを使用した。高所からの撮影は高所作業車やローリングタワーを適宜使用し、遺跡の完掘俯瞰状況はラジコンヘリコプターによる撮影を委託によって行った。

整理作業

現地調査終了後には島田整理事務所で本格的な整理作業を実施した。遺物については恒武西宮遺跡・笠井若林遺跡でボリコンテナ250箱以上の多量の遺物が出土した。土器は総破片点数にして17万点以上である。現地調査と併行して出土遺物の洗浄、注記作業を実施し、接合作業は種別、器種ごとに分類し各調査区、遺構ごとに実施した。復原可能な土器については樹脂を用い、復原作業を行なった。主に全体の形状がわかるもの、資料的価値の高いものを抽出し、実測図を作成し、6×7判モノクロを中心に行なった。金属製品や木製品についてはクリーニング、保存処理を必要に応じて実施している。また、現地で作成した遺構図は編集作業の後、遺物実測図とともに净書して報告書挿図の版として使用した。なお、遺物実測及び净書の一部を(株)フジヤマに委託した。



第5図 恒武西宮遺跡グリッド配置図



第6図 笠井若林遺跡グリッド配置図

第2節 調査の経過

<平成10年度の作業経過>

平成10年度には恒武西宮遺跡2次調査、笠井若林遺跡1次調査（I区）を併行して実施した。調査期間は平成10年10月から平成11年3月までである。

恒武西宮遺跡では調査区の北端と南端に東西方向の道路が走っており、それを同時に通行止めすることができなかつたため、10月には北端道路（市道恒武23号線）部分の調査を先行して実施した。その調査が終了し、埋め戻して道路が供用できる状態となるのに時間がかかるため、11月から南端道路（市道恒武30号線）部分以北の調査にとりかかった。恒武23号線の供用が開始された後、調査区全体の掘削が可能となった。さらに排土の処理のために調査区を南北2つに分割した。ここでは北区、南区として説明する。南区の調査を実施している時には北区が排土置き場、というようにそれぞれ反転しながら3月まで調査を行った。また、市道恒武30号線の部分には農業用水の大型管が通っており、そこは残しながら調査を進めた。

笠井若林遺跡I区でも同様に調査区を南北に分割しながら行うことで、排土置き場の確保を図り10月から3月まで調査を行った。3月には恒武西宮遺跡において現地説明会の実施、向坂鋼二氏による現地指導を受けた。

<平成11年度の作業経過>

平成11年度には5月から6月まで、先年度に継続する形で恒武西宮遺跡北区第2面の調査を実施した。平成11年7月から10月まで笠井若林遺跡II区の調査を実施した。10月には加藤芳朗氏による調査指導を受けた。調査終了直前には現地説明会を開催し、現地を公開した。

<平成12年度の経過>

平成12年度は4月から11月まで笠井若林遺跡III区の調査を実施した。市道大島豊西線以北をIII区北、以南をIII区南とし、さらにIII区南は南北に2分割して排土置き場を確保しながら実施した。III区北は4月から6月まで、7月から11月までIII区南に調査を実施した。現地調査終了後の12月からは島田整理事務所にて整理作業を実施した。3月には笠井公民館において「笠井の埋もれた歴史展」を浜松市博物館と共に開催し、遺物や調査時の写真を公開した。

<平成13年度の経過>

昨年度に引き続き、4月から3月まで島田整理事務所において報告書刊行に向けて、第1節で述べた内容の整理作業を実施した。8月には藤沢良祐氏、2月には伊藤通玄氏による調査指導を受けた。

3月には整理作業を終了し、報告書を刊行した。並行して収納作業を実施している。

第3節 基本土層について

基本土層については、恒武西宮遺跡と笠井若林遺跡では状況が異なるため、分けて記述する。

＜恒武西宮遺跡＞

恒武西宮遺跡の調査は前回の1次調査で把握された基本土層をもとに進めた。よってここで示す基本土層は同様にI～VI層としたい。1次調査では東西グリットでいうところの13ライン以北は微高地であり、以南に比べると砂質が強いため畑としての利用が行われていたとしている。昭和11年の豊西村土地法典（第194図）を見ると、今回の調査区である長福寺付近を境に水田として利用されていた南側の地区と、畑地や宅地として利用されていた北側の地区とにはっきりと分かれていることがわかる。南側の水田域では天竜川下流域の平野部で典型的に見られる、所謂島畑景観が広がるのも確認できる。島畑とは一筆ごとにそれぞれ水田と畑地に分けられた耕地の入り混じる様をいう。島畑は中世において効率的な耕作を行うために施行されたという説と洪水被害による土砂の除去処理によって形成されたとの説があるが（金田1993・矢田1994）、いずれにしても当地区においても島畑による耕地化が進められていたのである。島畑の起源は今回の調査では明らかにはできなかったが、宮竹野跡遺跡の発掘調査によれば、14世紀代には形成されたことが想定されている（浜松市1994）。以下、①～⑨地点の柱状図（第7図）をもとに詳述する。

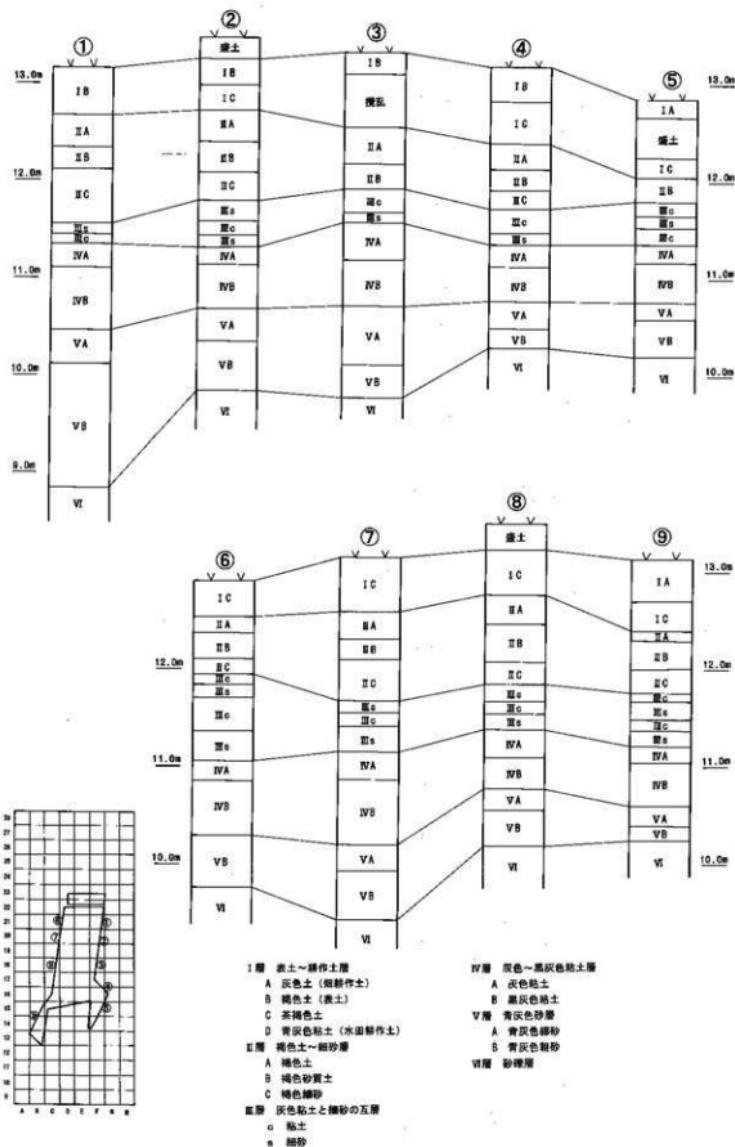
I層は表土や耕作土が主体となり、古墳時代から現代にいたる遺物が出土する。IA層は灰色土で現代の畑や耕作土である。⑤地点では先述した戰前までの水田耕作土ID層を埋め立て、畑として利用していた。同じく低地部分である⑨地点では水田耕作土は見られない。地盤図で確認するとこの部分は水田ではなく、当時より畑となっている。IB層は主に北側の長福寺跡地部分の表土で、樹木の根が多い。③地点ではIB層の下層に擾乱が見られた。擾乱の埋土には多量の炭化物が混入しており、特に下部は層を成すほど多量であった。遺物の出土がないため断定は難しいが、記録にある長福寺の火災に伴う可能性が高い。

II層は下層ほど砂が強い傾向となるため、砂質の度合いにより3つに分層した。II層ではIIA、IIB層で多量の遺物を包含する。IIC層ではほとんど遺物は確認できない。上層においても遺跡年代の上限である古墳時代の遺物が中世の遺物と共に多量に出土しており、耕作や居住に伴う攪拌の影響が見てとれる。基本的にはIIB層上面で第1面遺構を、IIC層の上面で第2面遺構の検出を行っている。しかし、すべての遺構がこれにあてはまるわけではなく、攪拌によるものか小穴や小溝などは特に検出が困難であった。そのため、第2面遺構はさらに平面的に掘削して検出を試みており、実際には数面にわたる調査を余儀なくされた。

III層は灰色粘土と細砂の互層で、すべての層は自然堆積を示す水平堆積層である。遺物は全く出土せず、管鉄が発達する。IV層は灰色または黒灰色の粘土である。1次調査でも指摘されているが、炭化物や植物遺体が出土することもある。調査後にトレンチによる深堀を実施したが、遺構、遺物は確認できなかった。III層同様、管鉄が発達する。V層では上層は細砂、下層は粗砂層となる。地点によってはかなりの厚さで堆積している。VI層は恒武遺跡周辺で広範に見られる基盤層となる砂礫層である。湧水を伴い、検出された井戸の多くはこの層まで掘り下げられている。

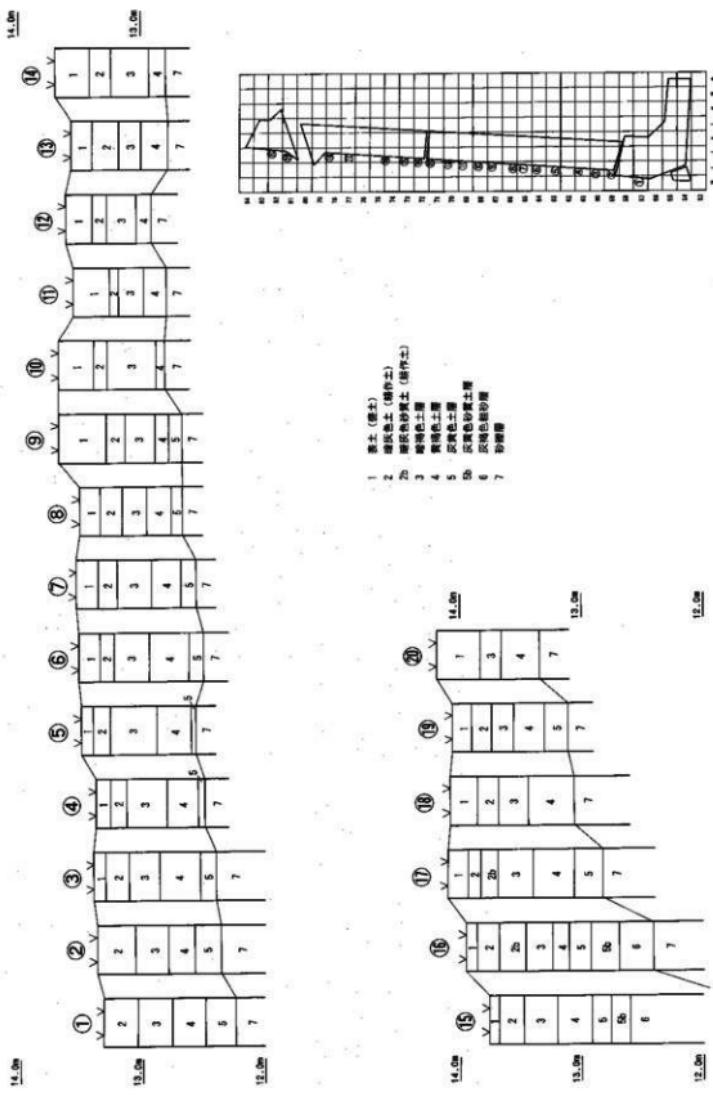
＜笠井若林遺跡＞

笠井若林遺跡の基本土層は恒武西宮遺跡とはやや様相が異なる。そのため層位にはアラビア数字を用い、区別して表記する。恒武西宮遺跡に比べ標高が全体として高くなり、沖積微高地としてはより安定していたことをうかがわせる。以下、第8図の①～⑩地点の柱状図をもとに記述する。



第7図 恒武西宮遺跡土層柱状図

第8图 立井若林造脉土层柱状图



1層は⑯、⑰、⑱地点が盛土、他は表土である。多くは現代の耕作土として利用されていたのである。実際に昭和11年の笠井村土地法典図（第196図）を見ると、Ⅱ区の南西部が水田であることを除けば、すべて畠として土地利用がなされていることが確認できる。現在においてもそれは基本的には変化しておらず、一部が宅地化されている以外は同様の土地利用状況である。2層は暗灰色土で、砂質が強い2b層はⅢ区の一部で見られるのみである。古墳時代～近世の遺物を含み、1層以前の耕作土と推定される。

3層は暗褐色土層で、やや細砂が混じる場合もある。古墳時代～中世の遺物を含む。おおむね20cm程度の厚さで堆積するが、Ⅰ区南ではやや厚く堆積する。この層の下部または下面で第1面の遺構検出を行った。中・近世の遺構が主となるが、古墳・奈良・平安時代の遺物も多く包含するため恒武西宮遺跡同様、耕作等による攪拌や自然侵食を受けていると思われる。よってこの時期に属するすべての遺構を第1面で検出できたわけではなく、第2面調査時に検出した遺構はかなりの数にのぼる。

4層は黄褐色土層であるが、上層同様細砂が混じる部分もある。古墳～奈良時代の遺物や炭化物を含む。酸化鉄を多く含むのも特徴のひとつである。この層の下部または下面で第2面の遺構検出を行った。上層と同じく、遺構検出が困難であったため、Ⅲ区中央から南にかけては第2面の調査が終了した後にさらに平面的に掘り下げて遺構検出を行った。

5層は灰黄色土層である。砂質が強く、特に強い⑯・⑰地点では5b層としている。酸化鉄や管鉄が見られる。遺構・遺物ともに確認されない。6層は⑯・⑰地点でのみ見られる。この地点は7層である砂礫層が落ち込んでいるようなので、小規模な河道が存在している可能性がある。遺構・遺物は全く確認できないため、少なくとも古墳時代以前のものであろう。7層は砂礫層である。前述のように笠井地区周辺で広範に見られる基盤層であるといえ、天竜川をはじめとする河川に由来するものと思われる。7層は今回の調査では南端にあたる恒武西宮遺跡で標高9～10m、Ⅱ区では12.2～3m、Ⅰ区では12.4～8m、Ⅲ区では12.8～13.4mと南に向かって傾斜しているようである。Ⅱ区北とⅢ区北では砂礫が高まっており、第2面検出時に一部が露出したことから平滑に傾斜しているわけではなく、起伏を持っていますがわかる。露出した砂礫には水流堆積を示すインブリケーション（覆瓦構造）と呼ばれる現象が確認できる。Ⅱ区で露出した砂礫層ではその方向性を加藤芳朗氏に実見していただき、その平均値を求めた結果、北東から南西方向の流れの方向を推定することができた。これは恒武西浦遺跡で確認された河道の方向（埋文研2000）とほぼ一致しており、第Ⅱ章でふれた天竜川と付随する小河川の洪水に伴う流路変更の一端を示す可能性がある。

引用・参考文献

- 金田章裕 1992 「島畑の展開と微細微地形」『微地形と中世村落』吉川弘文館
矢田 勝 1994 「表層条理型地割の分布からみた遺跡周辺（天竜川平野右岸中央部）の地理的環境」
『箕輪遺跡』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
(財)浜松市文化協会 1994 「宮竹野跡遺跡2」
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000 「恒武西宮・西浦遺跡」

第IV章 恒武西宮遺跡の調査

第1節 調査の概要

恒武西宮遺跡の調査は、平成8年度に行われた1次調査の北に隣接する地区で実施した。調査は2面にわたる遺構面を確認した。1次調査地点は低地にあたり、近年まで水田であったため、上面遺構がほとんど確認されなかった。それに対し、今回の調査地点は微高地となっており、少なくとも江戸時代には当地に存在したと思われる長福寺の跡地にもあたっていたため、上層遺構が良好に保存されていた。第III章3節でも述べたように、2面調査としているが實際には遺構のプランがわかりづらく、面による遺構検出が困難であったため数面にわたる調査となつた。そのため、全体図は面的に把握できた遺構というよりは、遺構・遺物の検討によって遺構の年代を判断した上で、第1面を中近世、第2面は古墳時代～奈良時代と編集した図であることを了解していただきたい。また、分割して調査した調査区北端の市道部分は中央に深い攪乱の跡があり、遺構が検出できなかつた。これは第194図の地籍図を見てもわかるように水路のような細長い水田があつたことによる。地元の方によれば、用水溝を兼ねるような機能があつたとのことである。第9～12図に第2面、第23～26図に第1面の平面図を掲載したが、第10・11・24・25図には当調査区南の恒武西宮遺跡1次調査（埋文研2000）の平面図を合成した。

古墳時代～奈良時代の遺構は基本的にはII C層上面で確認した。包含層となるII A～II B層中からは古墳時代中～後期の土器が多く出土しているが、古墳時代中期と確実に認定できる遺構は少なく堅穴住居跡や数基の土坑が確認される他は、後期段階の遺構がほとんどを占めると考えられる。後期と考えられる遺構は掘立柱建物跡2棟の他、恒武西宮遺跡1次、恒武西浦遺跡でも確認されているように並行または直交する小溝群が特徴的に検出される。断定はできないが、これは畑等の耕作に伴うものと考えられ、出土土器からは古墳時代後期を中心とした遺構と思われる。おそらく耕作は中期から続いていると考えられるが、その後も長期間継続する耕作によって擾拌されているため、遺物は出土しても中期の遺構として明確に抽出できない状態となつたのではないだろうか。奈良時代の遺構は比較的規格性のある掘立柱建物跡群を5棟検出した。遺物がほとんどなく、その性格については明らかではない。ここでの年代観はおまかに古墳時代中期を5世紀代、後期を6～7世紀代、奈良時代を8世紀代として記述する。

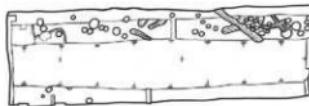
中世～近世の遺構はII B層上面で確認した。中世前期は山茶碗を指標としたため、12～13世紀代の平安末期から鎌倉時代をその対象としてとらえている。この時期の遺構は掘立柱建物跡2棟、井戸、溝状遺構があるが、調査区南にほとんど集中しており、大規模なものではない。なお、この時期に多く出土する山茶碗類の産地は特に触れてない場合、湖西・渥美産である。中世後期は瀬戸美濃系施釉陶器が多く搬入される15～16世紀代を対象とする。遺構は掘立柱建物跡6棟、土坑群、溝状遺構を確認した。これらは溝によって区画された屋敷地であると考えられる。近世の遺構は18～19世紀の井戸、墓を検出した。これらは平成10年に移転した長福寺に伴う遺構であろう。

以下上記区分のもと、第1面、第2面検出遺構を分け、種別ごとに主な遺構と土器を中心とした出土遺物について記述を進める。なお、小穴以外の遺構については計測値を含む一覧表（第2～4表）を掲載した。また、第III章でも述べたようにこの遺跡の調査区は北と南に分割して実施したが、特に分けずに一括して報告する。

23

X-137620

第9図 恒武西宮遺跡
第2面遺構全体図



22

21

20

X-137659

19

18

17

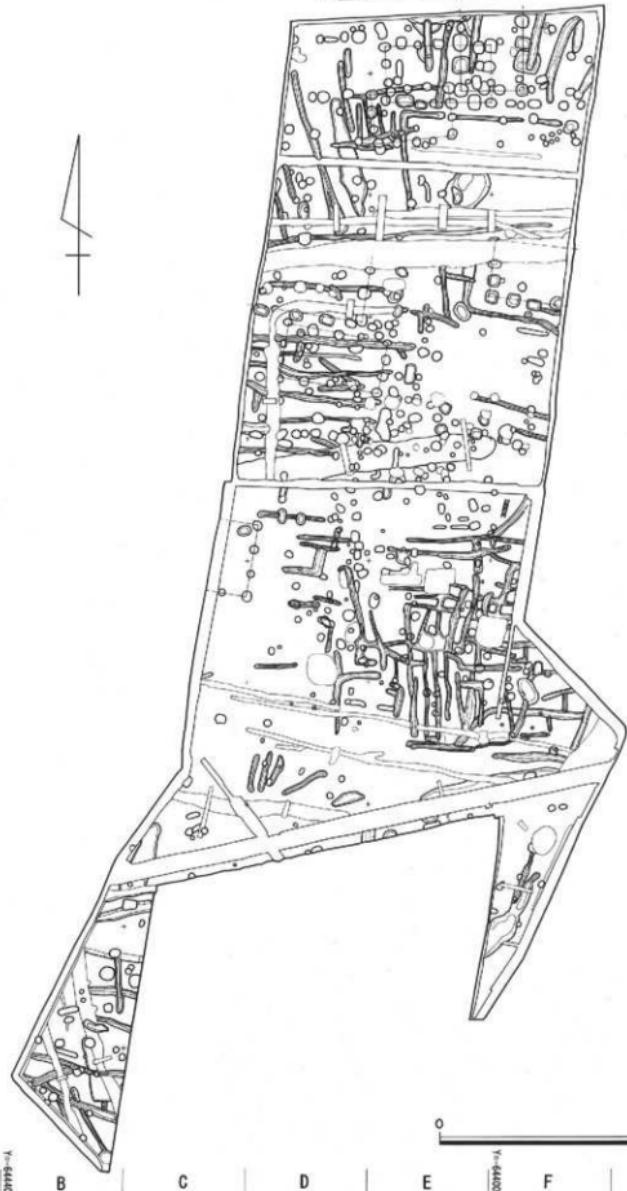
16

15

X-137700

14

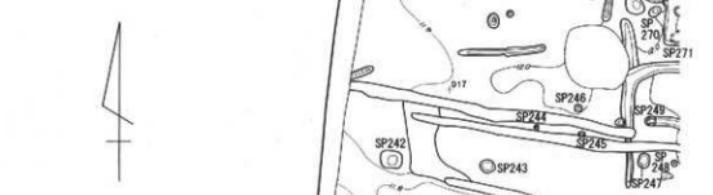
13



0 20m
100m
E F G

第10図 恒武西宮遺跡
第2面平面図1

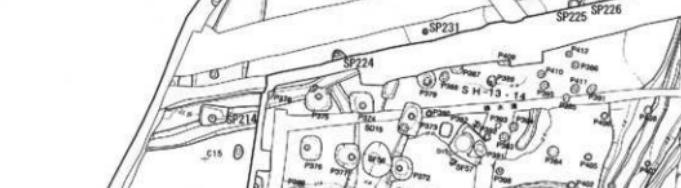
17



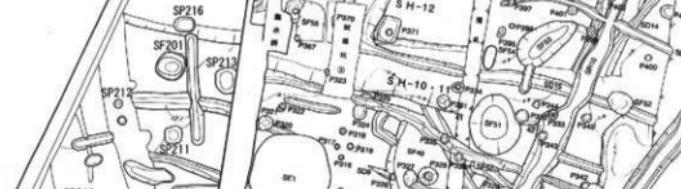
16



15



14



13



B

C

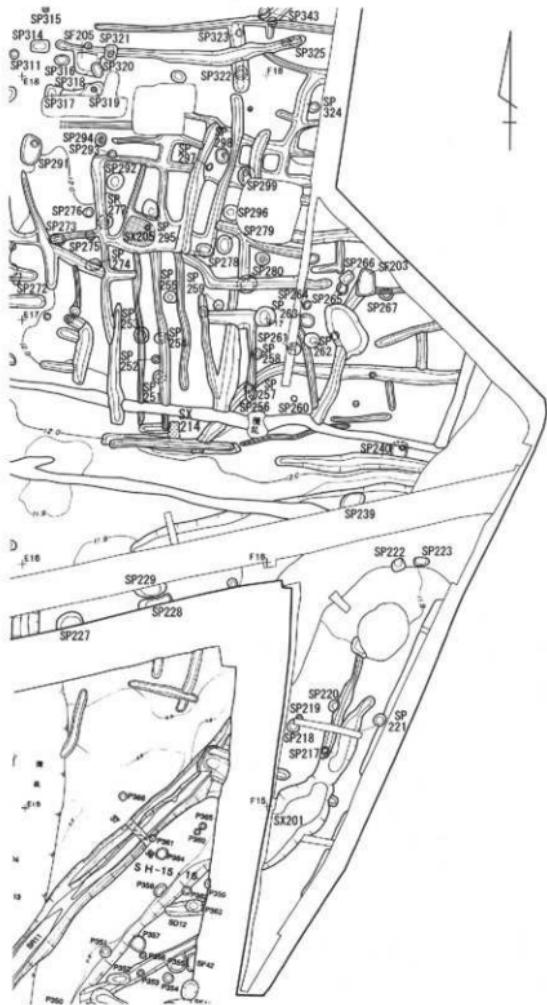
D

17

16

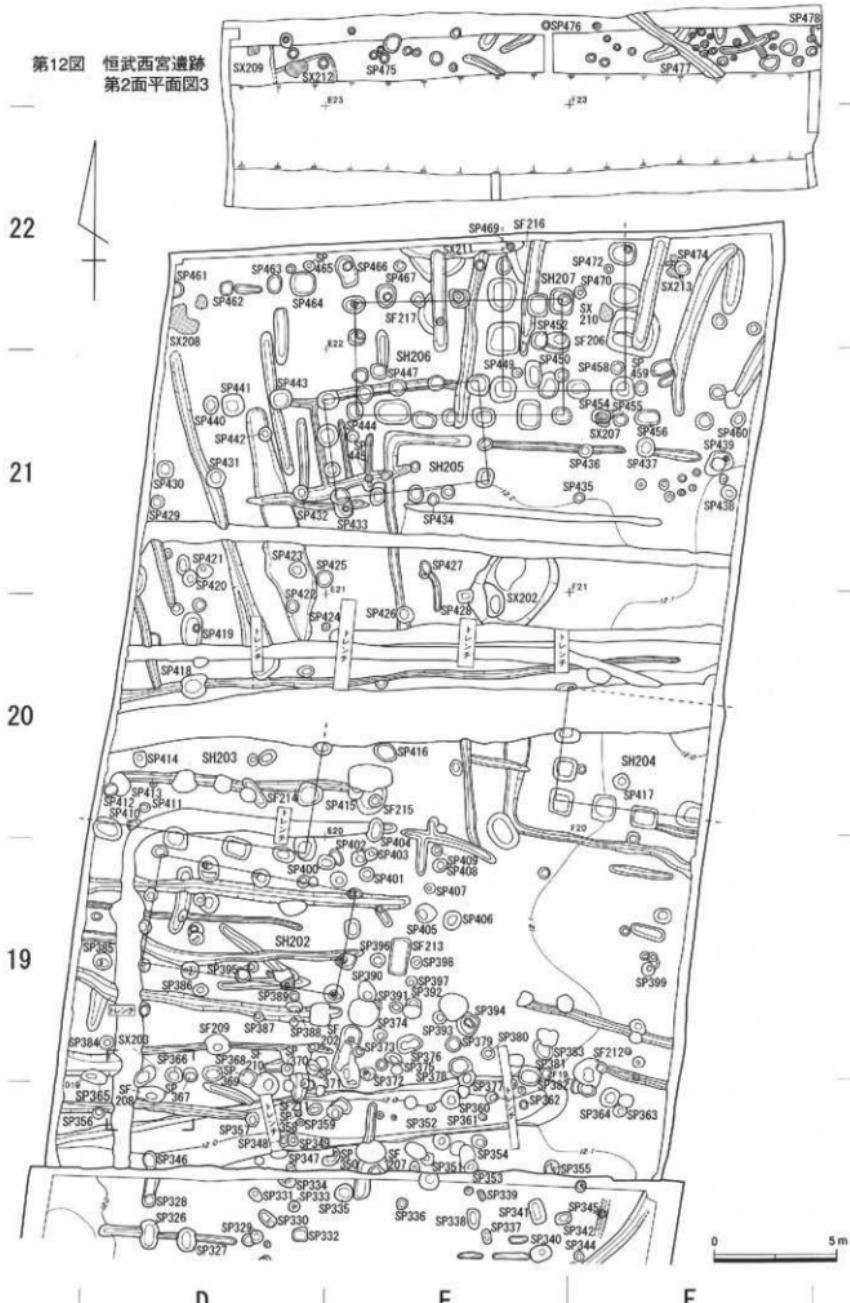
15

14



第11図 恒武西宮遺跡第2面平面図2

第12図 恒武西宮遺跡
第2面平面図3



第2節 古墳～奈良時代の遺構と遺物

掘立柱建物跡

SH201 (第13図)

C17・18区で検出した。一部は調査区外となってしまうため、全貌が明らかになったわけではないが、少なくとも1間×3間以上の側柱建物であることが確認できた。梁間、桁行が不明確なため、南北方向を主軸とするとN10°Eの方向となる。柱間はそれぞれ約2mを測る。それぞれの柱穴の底面には柱による圧痕と思われる小穴が確認された。検出面からの柱穴の深さは20～50cmである。8世紀代の須恵器、土師器の壺の小破片が出土していることから、遺構はその時期に求められよう。

SH202 (第13図)

D・E19区で検出した梁間3間×桁行4間の建物である。桁行方向はE11°Sである。柱間はほぼ2m間隔である。基本的には桁行4間の側柱建物と思われるが、建物内西側に柱穴が確認されるため底がついていた可能性も否定できない。柱間は桁行が1.9～2.1mとやや広く、梁間は1.4～1.5mと狭い。柱穴には柱による圧痕と見られる小穴があり、P5では土層断面に径15cmほどの柱の痕跡が残っていた。検出面からの柱穴の深さは20～60cmである。西側のP1・P6は中世のSD12によって一部破壊されている。また、P1・P2・P6・P7・P9・P10は上層で遺構が確認されているので、本来は検出面よりも上面から掘り込まれていたと考えられる。遺構は8世紀代の須恵器壺蓋や土師器壺の小破片の出土から、その時期に位置付けられよう。

SH203 (第14図)

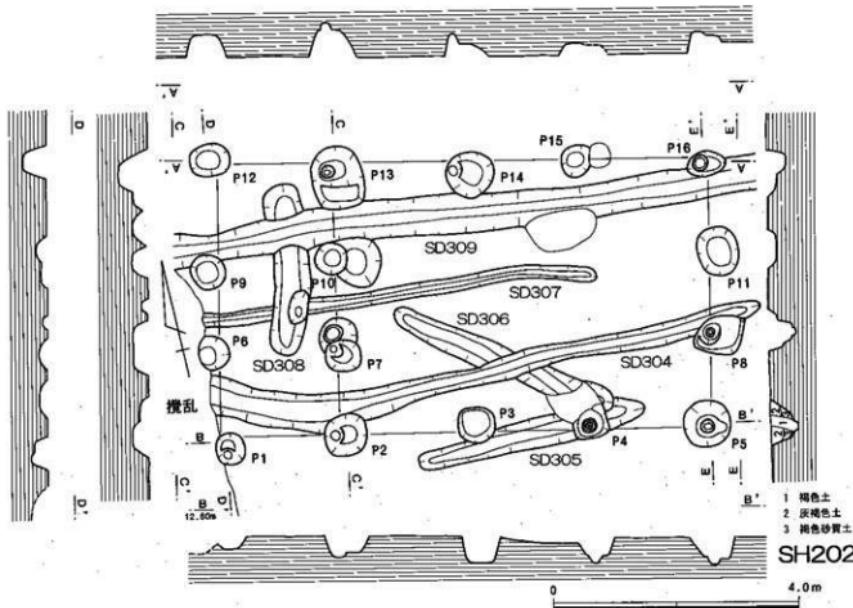
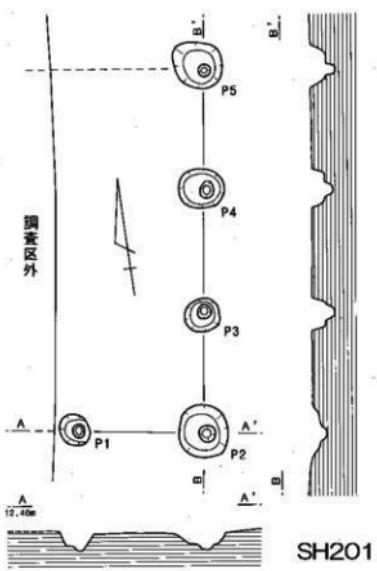
D20区で検出した遺構である。中世溝SD16によって北側が壊され、西側は調査区外となるため全体は明らかではないが、確認できた梁間2間×桁行3間以上の規模はあると思われる。桁行方向はE8°Sの側柱建物である。柱間はやや不規則で、P1とP2間のように3mに近いものもあるが、他は2.5m程度である。柱穴は長軸が1mを超える大型の略方形に近いもので、深さは30cm前後と浅く、SH202のように本来は上層から掘り込まれていたと考えられる。8世紀代の須恵器壺蓋や土師器壺の小破片が出土したため、その時期の遺構と判断した。また、馬具と推定される大型の鉄製品18-6がP1から出土している。

SH204 (第14図)

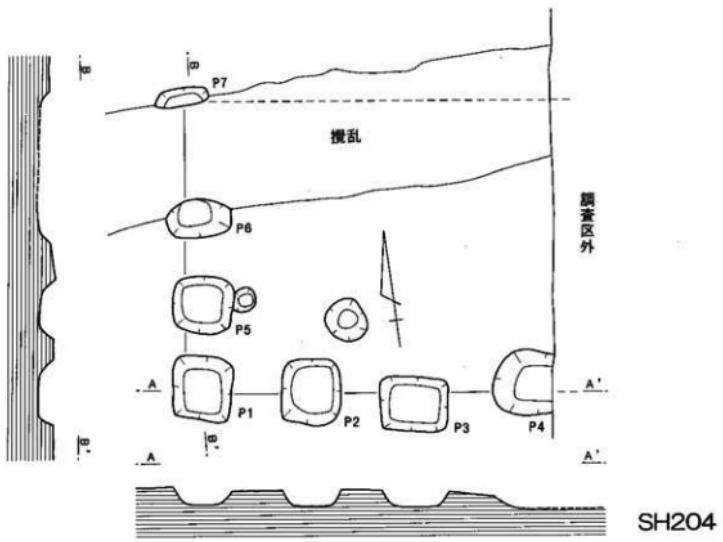
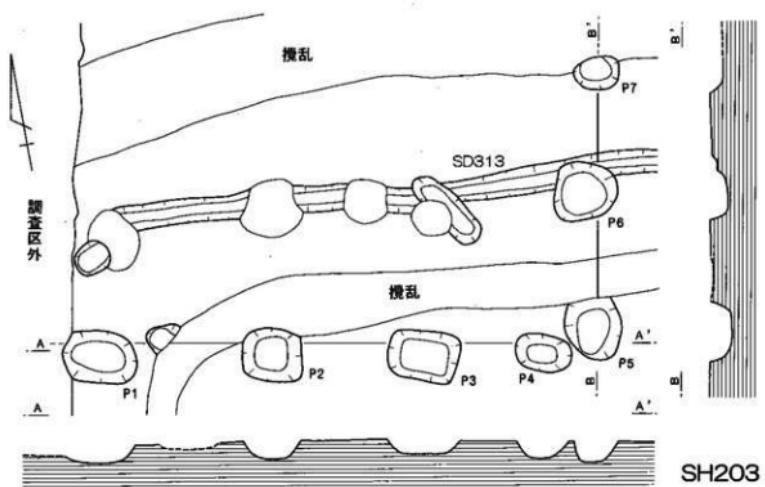
F20区で検出したこの建物も、中世溝SD16に北側がほとんど壊され、東側が調査区外となるため規模は明らかではない。少なくとも確認できた梁間3間×桁行3間以上の規模はあると推定される。桁行方向はE5°Sの側柱建物である。柱間はP2とP3間が芯々で約1.8m、他は約2mである。柱穴は1辺がほぼ1mの方形を呈し、規模も大きい。また、建物南面と西面には建物を巡るように溝SD316が掘られている。これは雨落ち溝と捉えられる。このような施設を持った建物は他に確認できず、SH204は当該期における中心的な建物であったと思われる。遺構の年代は8世紀代の土師器壺の小破片が出土していることからその時期のものと考えられ、上記SH203と方向、柱穴の規模の点で共通性が高く、同時期に存在したと考える。

SH205 (第15図)

E22区で検出した梁間3間×桁行4間の側柱建物跡である。主軸方向はE5°Nで、他の建物とは方向が若干異なる。柱間は約1.5m間隔である。柱穴はかなり浅く、10～20cm程度であったがこの遺構も本来は上層から掘り込まれていたものと考えられる。少なくとも上層では全く見えず、人為的、自然的な攪拌を受けた結果と推測する。遺物はP6から1-1が、P14から1-2が出土した。ともに須恵器壺蓋や、6世紀代の遺物と思われる。2は明瞭な縁を持ち、口縁がやや外反することから前半代と思われる。これ

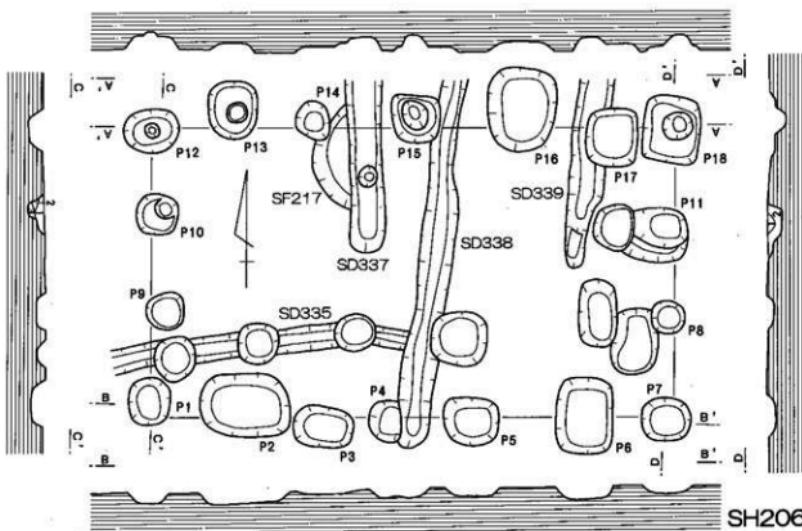
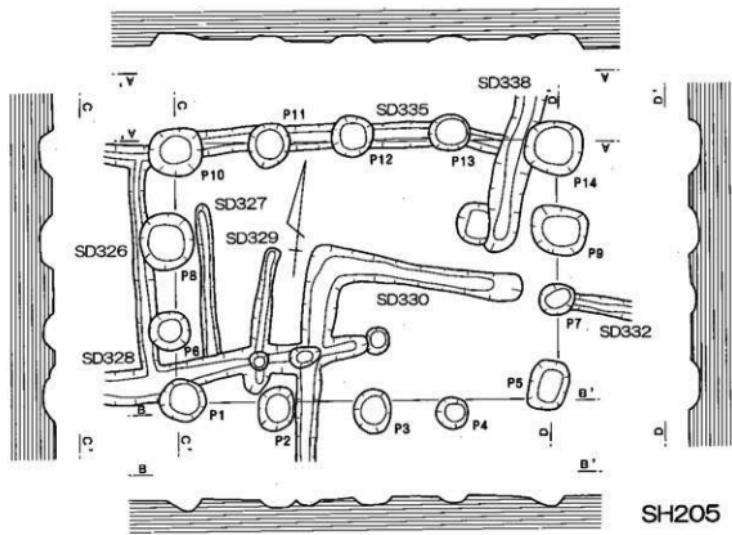


第13図 SH201・202 実測図



0 4.0m
(L=12.80m)

第14図 SH203・204 実測図

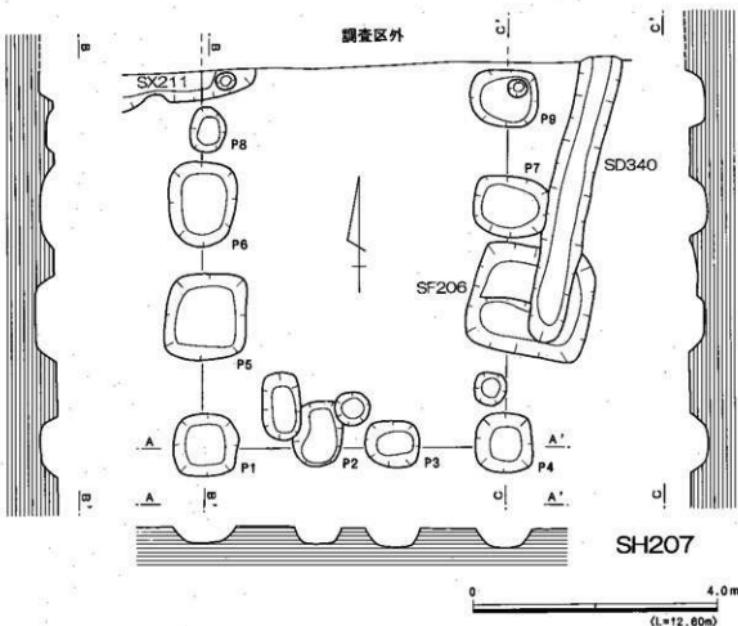


P10
1 灰褐色土
2 黄色砂質土
3 灰黄色土

P11
1 暗褐色砂質土
2 灰褐色砂質土

0 4.0m
(L=12.80m)

第15図 SH205・206 実測図



第16図 SH207 実測図

を遺構の年代の上限と捉えられるが、ほぼ同時期と思われる溝状遺構SD304・305・309等よりも新しいため、古墳時代後期の範疇で、6世紀後半以降の建物と考えたい。

SH206（第15図）

E21・22区で検出した遺構である。柱穴が密集する部分があるため不明瞭な部分もあるが、梁間3間×桁行5間の側柱建物である。桁行方向はE0°である。柱間は約1.5~1.8mと不規則である。SH205同様柱穴は10~30cmと浅く、上層からの掘り込みであったことが想定される。P11の土層断面には柱の痕跡らしき堆積が一部認められる。遺物は1~3~5が出土している。3は古墳時代中期の小型壺の口縁であろう。4は8世紀代の須恵器壺蓋の口縁部破片である。5は甕の口縁部で、7世紀代に比定できる。出土土器には年代幅が認められるが、8世紀代の遺構と考えた。

SH207（第16図）

E21・E・F22区で検出した建物跡である。一部調査区外となるが、北端市道部分の調査区では柱穴は確認されなかつたため、北へ延びたとしても1間分程度の梁間3間×桁行4間までであろう。桁行方向はN2° Eである。柱間はP2とP3の間が約1.3mと狭いが、他は2m程度でまとまりそうである。桁行東の柱穴の一部はSF206に壊されている可能性がある。図示できた遺物はP7から出土した土師器壺1~6のみである。遺物から、建物の年代は7世紀代に求められると考える。

豊穴住居跡

SF201 (第17図)

今回の恒武西宮遺跡で検出した唯一の豊穴住居跡である。規模は南北5.5m、東西は一部調査区外となるが最大で4.1mを確認した。南北方向を中心とする軸方向はN9°Wである。埋土は灰褐色土と暗褐色土であるが、遺構のプラン検出はかなり困難であった。北側には焼土ブロックと炭化物のやや集中する部分があり、土器もその周辺からまとめて出土したことからこの付近に窯が存在したことが想定されるが、構築材の粘土は確認できず、炉を使用していた可能性もある。明確に柱穴と認定できる遺構は見つかっていないが、北西隅のP3は貯蔵穴と考えられる。貼り床、壁溝も検出できていないが、遺物の出土レベルから2層上面が本来の床面と想定している。遺物は1~14を図示した。いずれも土師器である。7~12は甕である。7の胴部は比較的球形に近く、頸部付近に膨らみが見られる。8~10は口縁部で、いずれも横ナデが施される。11・12は底部である。13は形態から甕と思われるが、胴部下半に被熱の痕跡が認められ、甕の可能性もある。底部はほぼ平底で、胴部はほぼ球形である。14は甕の上半部である。把手が比較的上部にあり、口縁部は横ナデ、体部は摩滅しているがナデ調整であろう。また、図示はしていないが、第8表に法量を記載した石製模造品の白玉が埋土から13点出土している。この遺構は土器の特徴から5世紀中頃～後半のものと推定される。

土坑

調査区全体で当該時期の土坑は17基を検出した。概ね直径1m前後以上の遺構を土坑としたが、厳密に小穴と分離した訳ではない。第3表に計測値と形態を掲載したので、ここでは遺物が出土している代表的なものについて触れたい。

SF201 (第18図)は一辺が約1.2mの隅丸方形を呈する土坑である。底部中央がさらに掘り窪められている。比較的上層から2~1の須恵器坏身が伏せた状態で出土した。底部はヘラ切り未調整で、7世紀後半位に位置付けられよう。遺構の性格は明らかではない。

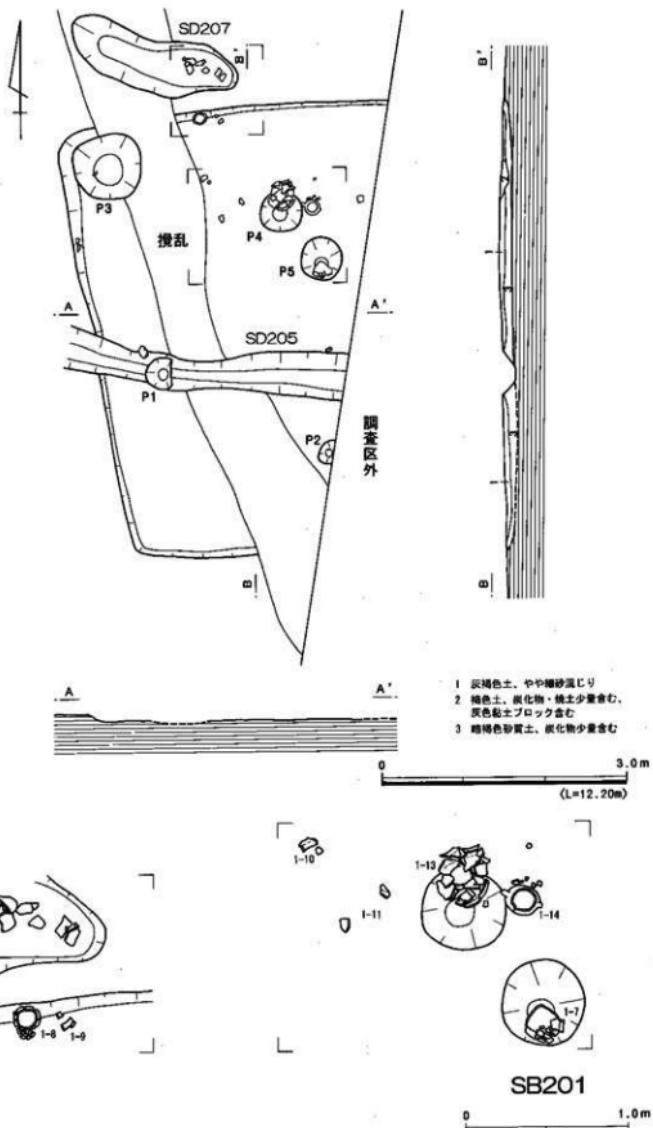
SF209 (第18図)は長径98cm、短径86cmなどの不整形の土坑である。土器がやや集中して出土したことが注目される。出土土器は2~5~9を図示した。5は高杯の脚部である。6~8は小型甕である。6は丸底で胎土は良質なのに対し、7は平底で胎土が荒い。6・8の口縁はほぼ直線的だが、7はやや外反する。9は平底の甕底部である。これらは5世紀中頃～後半に位置付けられ、小型甕の完形品が認められるところから、この時期の祭祀的な土坑と推定する。

SF210 (第18図)は本来長径1.0m程度の土坑と思われるが、西側に小穴が重複しているようである。埋土はほとんど同じであるため、新旧は不明である。遺物は2~10~12が出土した。10・11は高杯の脚部である。共に脚部の屈折は比較的緩やかである。12は甕の上半部である。口縁部はやや外反し、横ナデ調整がなされる。これらは5世紀後半頃の遺物と考えられる。

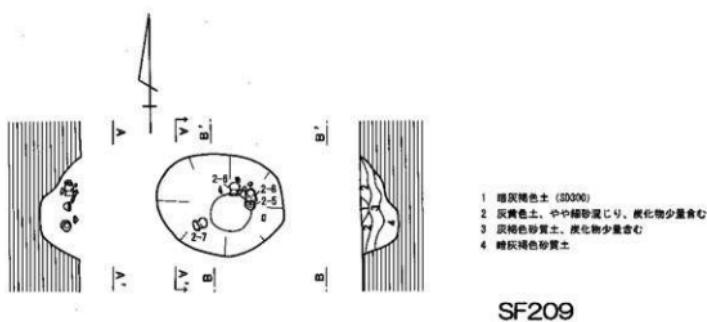
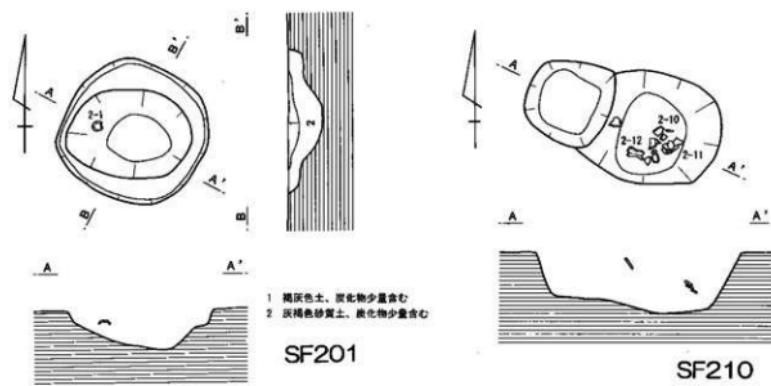
溝状遺構

調査区内で所謂小溝と呼べるような溝状遺構が数多く検出された。断定はできないが、畑等の耕作に関わる可能性が考えられる。恒武西浦遺跡では類似する規模の並行する小溝が検出され、畑に関わる可能性が指摘されている(埋文研2000)。また、北神馬遺跡では弥生時代末とされる畑状遺構が検出されているが(埋文研1997)、格子状に直交する溝は当遺跡の小溝群と類似点がある。方向や規模といった計測値は第4表にまとめた。第19図に溝状遺構を抽出し、調査区内である程度まとまりのある範囲で南からA~E群として任意の単位を設定した。以下それに沿って記述する。

A群は調査区南東隅を中心とする。第10図には1次調査を含めた平面図を掲載しており、それを見る



第17図 SB201 実測図



0 2.0m
(L=12.40m)

第18図 SF201・209・210 実測図

と周囲にはさらに広がりを持っていたことがわかる。東西方向を向くものが多く、SD205は古墳時代中期の竪穴住居跡SB201を切っている。溝状造構全体に言えることだが、時期の判明する遺物は少ない。遺物はSD211から出土した2-14・15が図示できただに過ぎない。いずれも古墳時代中期の土器であるが、図示できない小破片には古墳時代後期の土器が含まれ、混在して出土する傾向がある。溝状造構が畠等の耕作に関わるものとすれば、第1節でも触れたように古墳時代中期から後期の長期間にわたる耕作により土壤が攪拌されたため、最終段階の古墳時代後期造構として認識されたと理解している。

B群は調査区南中央で検出した溝群である。東西、南北を向く小溝がほとんど直交しているかのように検出された。SD243とSD250では土器がややまとまって出土した（第20図）。SD243からは3-4の土師器壺の上半部が出土した。肩が張らない長胴壺になると思われる。5世紀末～6世紀初頭の遺物であろう。SD250からは3-7・8が出土した。7は須恵器壺身で7世紀前半、8は小型壺の下半部で5世紀後半代のものと思われる。時代差のある遺物が疊などと共に出土していることは、土壤の攪拌を示すとも考えられる。SD217からは8世紀代の須恵器蓋が出土したため、この周辺の溝は奈良時代の造構と推定される。SD244では3-5・6が出土した。いずれも土師器壺で、口縁部はやや内側する。5世紀末～6世紀初頭に比定されよう。SD266から出土した3-13は土師器壺の上半部で、肩が張らない長胴壺である。顯著な輪積み痕が残り、外面には上下方向のハケ調整が明瞭である。5世紀後半に位置付けられよう。

C群は平行する溝が目立ち、B群のように直交する溝が少ない。規模も類似する。SD299のみやや広いが、東側のSD300を見ると本来は同様の規模を持っていたと思われる。SD299（第20図）からは4-5～8の土器が出土している。5は7世紀前半代と思われる須恵器壺身である。体部から口縁部はほぼ直線的に開く。6～8は土師器壺である。6は5世紀中頃の平底の壺と思われる。全体的にかなり薄手につくられ、底部に近い下半部は明瞭ではないがミガキ調整が施される。7は7世紀前半～中頃の長胴壺の口縁である。8は同時期の壺の底部であろう。このように遺物にはかなり時期差があり、重複していた中期と後期後半の造構をひとつの造構として認定してしまった可能性がある。SD296から出土した4-3・4は複合口縁の壺の口縁部で、古墳時代前期に遡る可能性がある。

D群はSH204に密接に関わると考えられる。特にSD316はSH204を巡るかのようであり、雨落ち溝の可能性がある。時期はSH204同様、奈良時代と考えられる。SD314から出土した4-10は須恵器の無蓋高壺の壺部で、口径はやや小さく体部には波状文が施される。5世紀末に位置付けられよう。

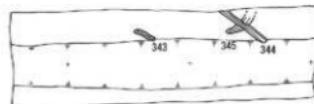
E群は調査区の北側で検出した溝群である。SD330・332・333・324・336・337はSH206と方向や位置関係から関連が深いと思われる。建物に伴う区画を示す可能性がある。SD324からは4-13・14が出土した。いずれも須恵器壺蓋で、8世紀前代の遺物と思われる。SD319～323は方向が類似しており、SH205の主軸方向ともほぼ同一であることからこの建物に関わる可能性が高い。SD319からは6世紀初頭の須恵器壺身4-11、SD321からは7世紀代とみられる鉢4-12が出土している。その他はA～C群同様耕作に関わる可能性が高いといえる。ただし、古墳時代後期としたSH205・207に切られるため建物よりは古いと考えられる。

小穴

恒武西宮遺跡では当該期の掘立柱建物跡の柱穴と認定したものを除いて小穴478基を検出した。認識できなかった掘立柱建物跡が多かったと思われる。遺物は5-13・16がそれぞれSP425・444から出土している。13は明瞭な稜を持ち5世紀末に、16は6世紀前半に位置付けられよう。5-2・12・14はSP262・415・434から出土した土師器壺である。2は壺部が球形に近く、14は長胴形態となると思われる。5世紀中頃～後半に位置付けられよう。5-4はSP282、5-6・7はSP328から出土した壺の口縁である。いずれも長胴壺で、6世紀後半から7世紀前半の年代を考えられる。5-15はSP400から出土した鉢である。7

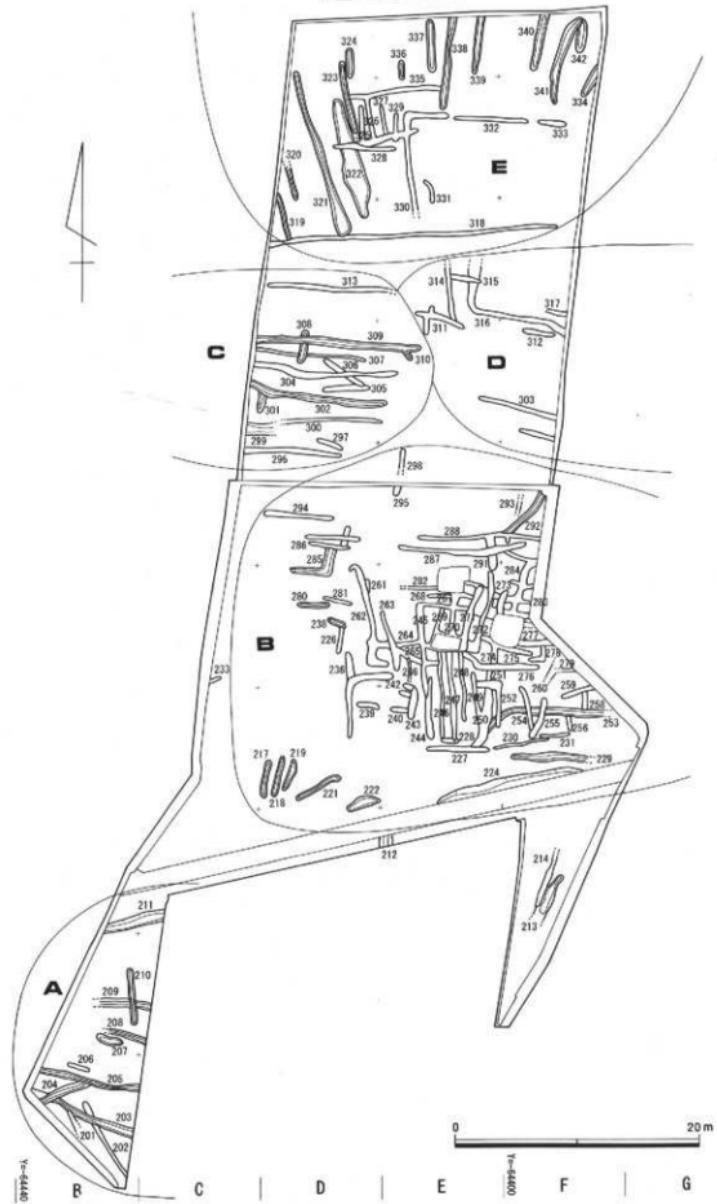
X-137620

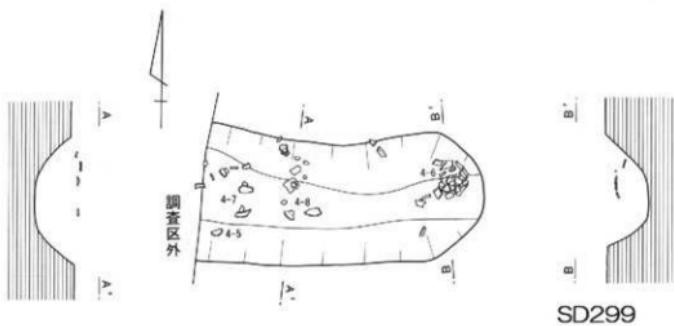
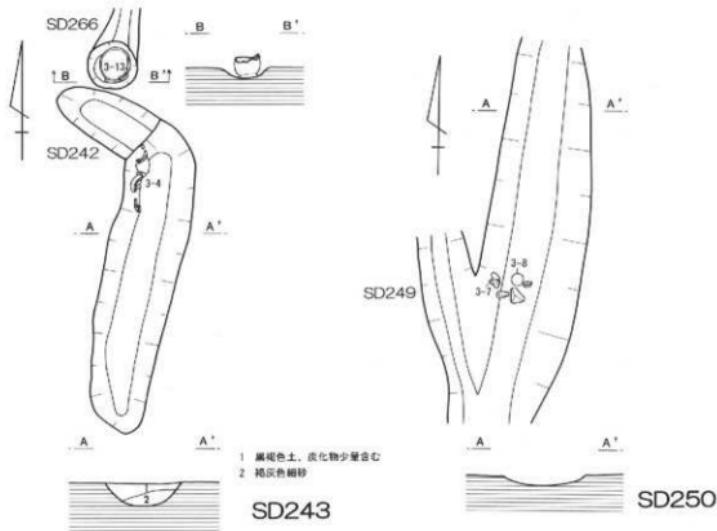
第19図 恒武西宮遺跡
第2面溝状造構抽出図



X-137650

X-137700





第20図 SD243・250・299 実測図

世紀前半の遺物と考えられる。5-3・5はSP273・289から出土した8世紀代の土師器壺である。いずれも丹が塗られる。SP327からは24-31の輪の羽口が出土した。このように出土遺物は古墳時代中期から奈良時代にわたるものであり、遺物の混在がかなり認められるため、明確な時期の認定は困難である。

性格不明遺構

不定形の大型土坑や土器・焼土の集中遺構を不明遺構として報告する。

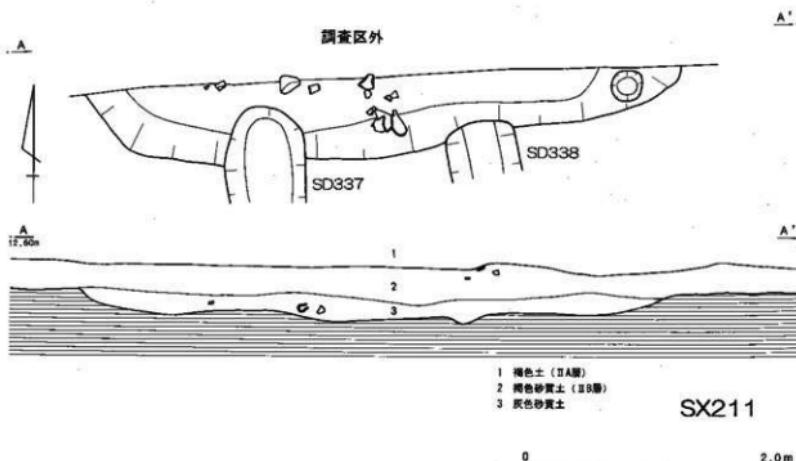
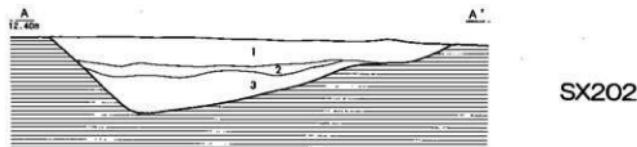
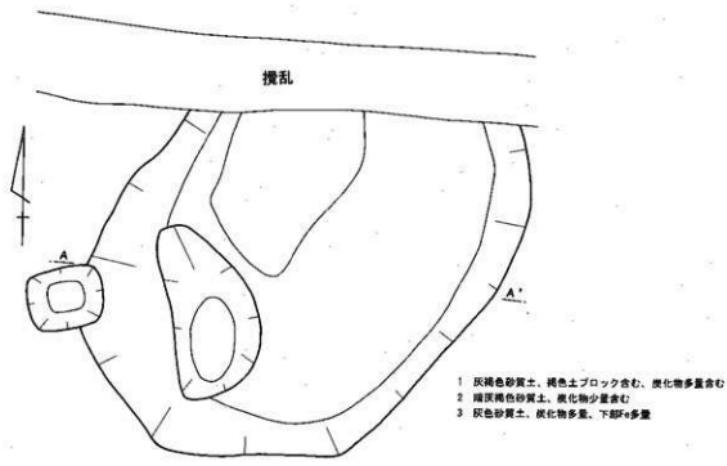
SX202(第21図)は不定形の土坑である。北側をSD22に壊されている。西側がやや深くなり、東側には40cm程度の高差がある。埋土には炭化物を多量に含むが、その機能は不明である。遺物は6-1が出土している。端部が受け口状となる小型甕の口縁であろう。内面は横、外面は縱方向のハケ調整が認められる。7世紀代の遺物であろう。他にもこの時期の土師器の小破片があることから古墳時代後期後半の遺構と思われる。

SX203(第22図)は平面的に土器が集中した個所である。第1面の検出面からやや下がったII B層中で確認した。出土遺物は6-2~10である。2は7世紀中頃の須恵器壺蓋である。3~6は土師器小型甕である。3は口縁部がかなり短く、ナデによって口縁内面が瘤む。4の口縁は直線的に立ち上がり、体部はやや扁平となる。5は器壁が薄く、口縁はやや内彎気味に立ち上がる。胴部は肩が張らない。6の口縁は直線的に立ち上がり、胴部は丸みを欠く。これらは5世紀中頃~後半に位置付けられようが、5はやや古い様相を持つ。7~9は土師器高杯である。7・9は杯部で、底部から口縁には稜を持ち、やや外反気味に立ち上がる。接合部は杯側に突起を造り出している。8は脚部で、裾は強く屈曲する。10は台付甕である。口縁はやや肥厚する。胴部は楕円形を呈し、内外面は丁寧な板ナデが施される。高杯と台付甕には5世紀中頃のものと思われる。このように5世紀中頃を中心とした古墳時代中期の遺構と考えられるが、2のような土器が混在することから耕作による影響があるようで、一括性には疑問がある。

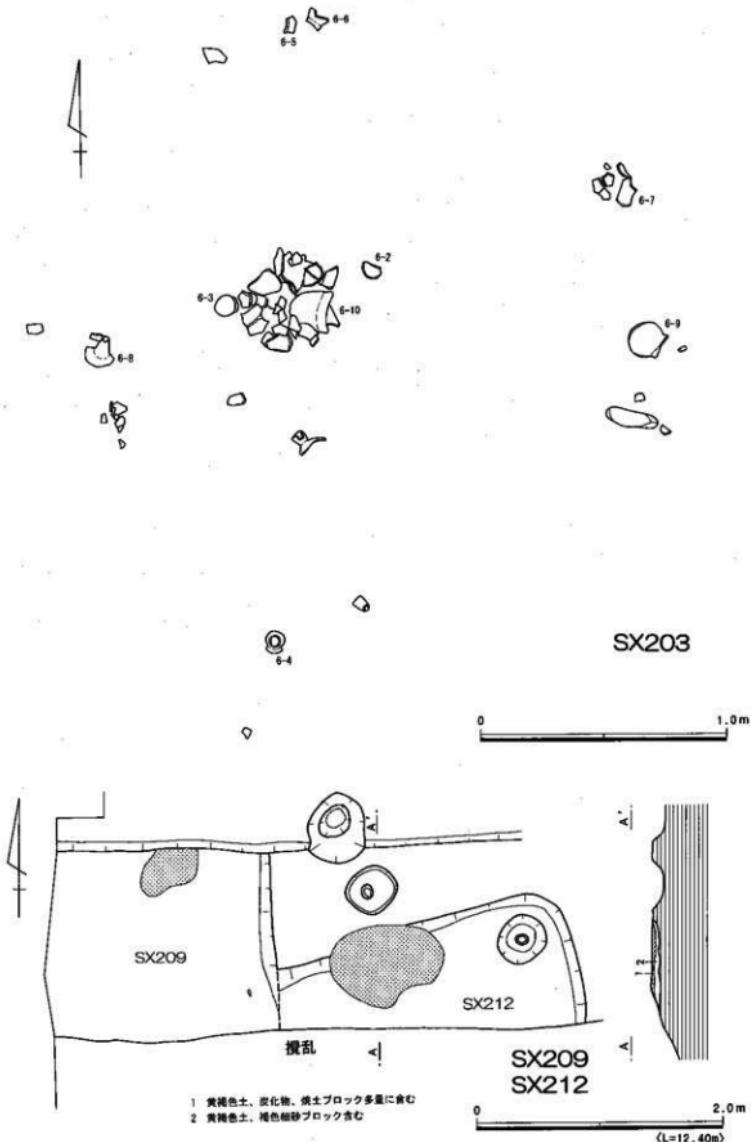
SX211(第21図)は北側が調査区外となるが、市道部分の調査では確認できなかったことから大きくなっているものではないと思われる。SD337と338が重複するがこれら溝よりも古いと考えられる。中央部で遺物がややまとまって出土した。図示した6-12~16はいずれも土師器である。12は高杯の杯部である。体部には稜を持ち、口縁はやや外反して立ち上がる。13~15は甕の口縁である。13・14の口縁は頸部近くがやや肥厚し、わずかに外反するが直線的に立ち上がる。15は外反する短い口縁を持つ。16は小型甕である。口縁はやや長く、胴部はそろばん玉状を呈する。底部は径が小さく平坦である。これらは5世紀中頃~後半に比定されよう。溝との重複関係もこの遺構が古墳時代中期に属することと矛盾しない。

SX209・212(第22図)は北端市道部分で検出された遺構である。南側は擾乱によって壊されている。重複して検出されたが、土層断面の観察ではSX209のほうが新しいと思われた。いずれも焼土が集中する部分があり、炭化物も多く確認された。竪穴住居跡であった可能性もあるが、全貌が明らかではないため不明遺構とした。図示できる遺物はないが、古墳時代後期と思われる土師器の小破片の出土から、遺構の時期はそこに求めたい。

焼土集中遺構はSX204~208・210・213・214が検出されたが、その性格は明らかではない。竪穴住居跡等の遺構に伴う可能性もあるが、確認することはできなかった。SX214からは6-17の土師器甕が出土した。口縁はあまり外傾せず、直線的に上方に立ち上がる。胴部は球形に近い。5世紀後半代のものと考えられ、遺構の時期もそこに求められよう。



第21図 SX202・211 実測図



第22図 SX203・209・212 実測図

第3節 中世～近世の遺構と遺物

掘立柱建物跡

SH1（第27図）

D・E18区で検出された2間×2間の建物である。後述するSH5とは規模や形態がほぼ一致する。南北方向を基準とする軸方向はN3°Wである。柱間は1.8～1.9mで、平面形はほぼ正方形となる。P4・5はSH2の柱穴と切合うが、埋土がほぼ同一のため新旧は確認できなかった。P1とP5では礫が出土しているので、これは根石の可能性もある。柱穴の深さは検出面から10～20cmほどと浅く、その規模とも合わせて考えると付属施設的な建物であったと思われるが、その平面形態から特殊な建物、たとえば小規模な持仏堂のような建物の可能性もある。なお、南面の柱穴はSX3によって切られている。

遺物は7-1・2が出土している。1はP1から出土した常滑窯の口縁で、N字状に折り返された口縁縁部は密着し、突出する縁部は折り返し部より下方につくことから赤羽・中野氏編年（中野1994）10型式となる。外面には自然釉が付着し、口縁内面端部には重ね焼きのために上に乗せられたであろう製品の一部が溶着している。2はP6から出土した擂鉢の底部であるが、かなり使いこまれ歯目はほとんど摩滅しており、底部には糸切り痕が明瞭に残る。藤澤氏編年（藤澤1996）古瀬戸後IV期併行期の志戸呂窯製品である。これら遺物から建物の年代の上限は15世紀後半に求められるが、周囲の遺構と埋土やあり方が類似するため16世紀代の可能性もある。

SH2（第27図）

E18・19区で検出された梁間3間×桁行5間規模の側柱建物と思われる。桁行方向はE3°Nである。梁間の柱穴に関しては明確に検出できていない。SH1の柱穴とは切合っているが、先述のとおり、新旧の確認はできていない。比較的並びのよい南面の柱間を見るとほぼ1.8mを基準として設計された可能性が高い。柱穴からは礫がいくつか出土しているため根石があったと考えられる。第1面で検出した建物では最も規模が大きく、柱穴も検出面から30～60cmと深い。検出された建物群の中に限れば、母屋的な建物であったと考えられる。

遺物は7-3～5が出土した。いずれもかわらけである。3と4はいずれもP16からの出土である。3は非ロクロ成形で、内面はヘラ状工具で切れ目を入れた後、ナデで滑らかに仕上げてあるが、外面は口縁部がナデである以外はほとんど未調整で底部には明瞭に指頭痕が残る。色調は灰白色である。4は底部のみの残存しかないが、ロクロ成形である。底部には糸切り痕が残り、色調は黄橙色である。5はP19から出土したロクロ成形かわらけである。やはり底部の一部のみの残存で口径は明らかではない。色調はやはり褐灰色である。かわらけのみの出土で細かい年代の判断は困難であるが、16世紀代と推定する。

SH3（第28図）

E18で検出した梁間2間×桁行2間の側柱建物である。桁行方向はN4°Eで、梁間の柱間はほぼ1.8mだが、桁行は約2.4mとやや広くなるようである。P9はSH2のP12と切り合い、これよりも新しいと思われる。P11には根石があるが、他の柱穴では検出できていない。柱穴の深さは検出面から20～40cmである。

7-6は藤澤氏編年（藤澤1993）大窯2段階の灰釉丸皿の底部破片で、P11から出土している。内面には丸盤状の工具によりいわゆるソギが施されている。これにより建物の年代は16世紀前半と想定される。

SH4（第28図）

D・E19区で検出した梁間1間もしくは2間×桁行3間の側柱建物と考えられる。桁行方向はE1°Nで

23

X-137700

第23図 恒武西宮遺跡
第1面遺構全体図

22

21

20

19

18

17

16

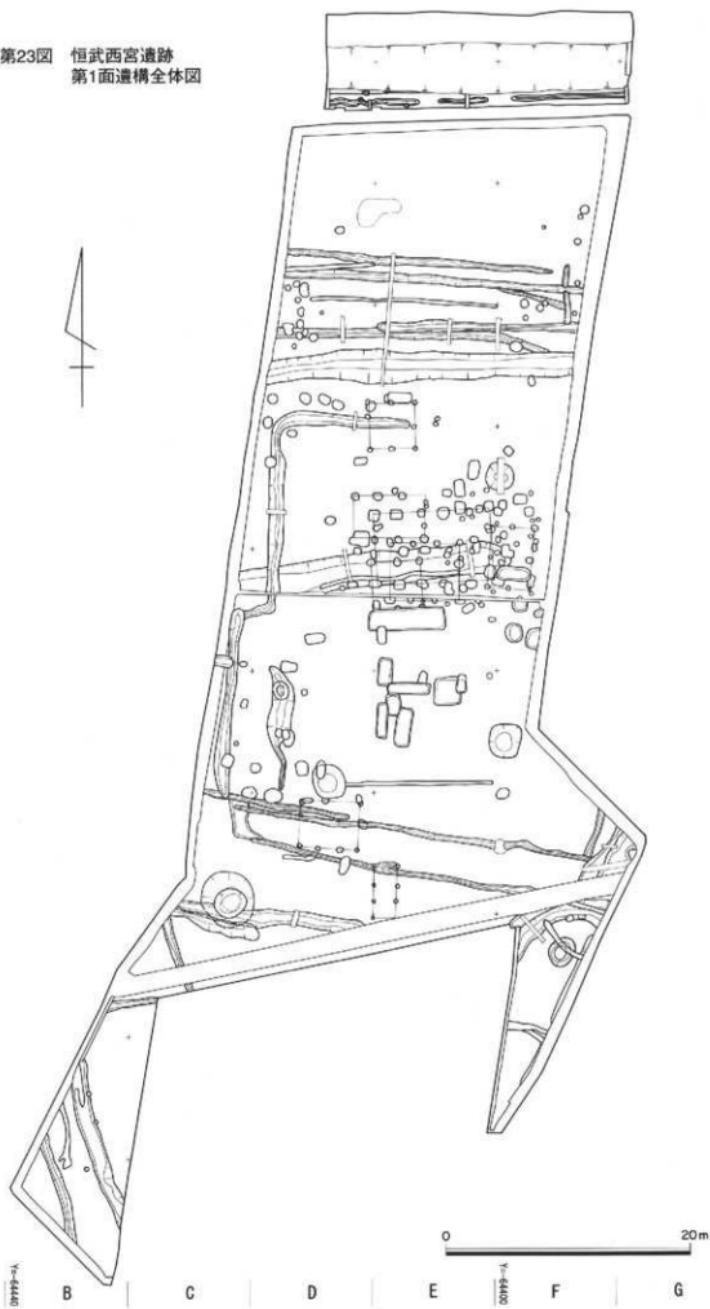
15

X-137700

14

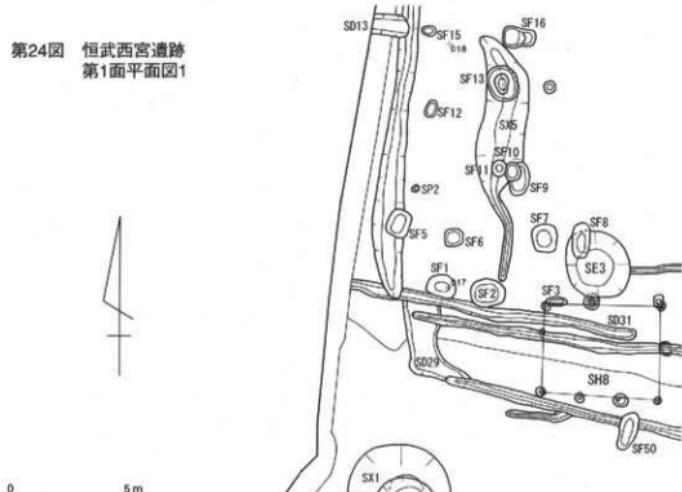
13

X-137700

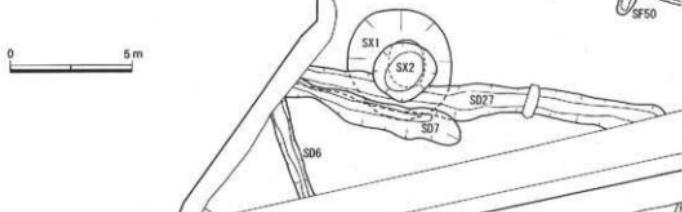


第24図 恒武西宮遺跡
第1面平面図1

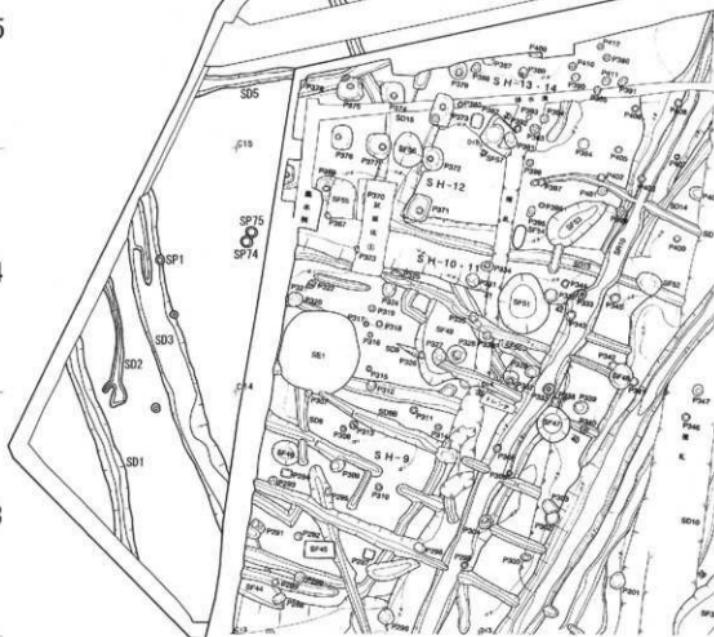
17



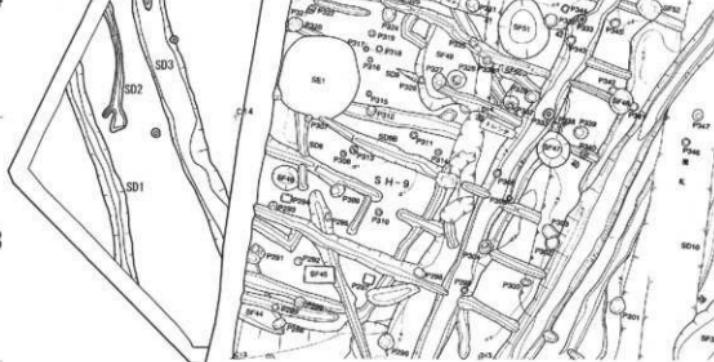
16



15



14



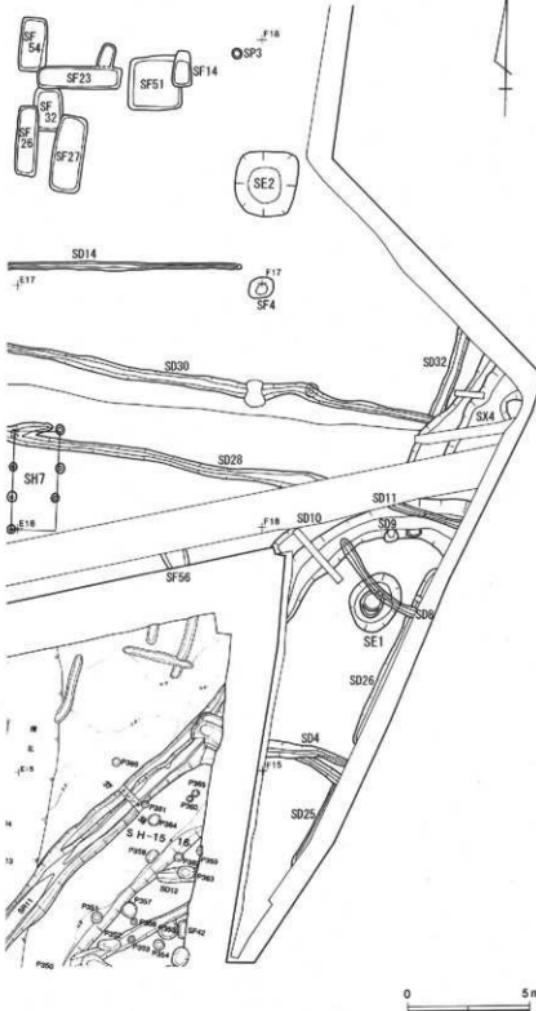
13

B

C

D

17



16

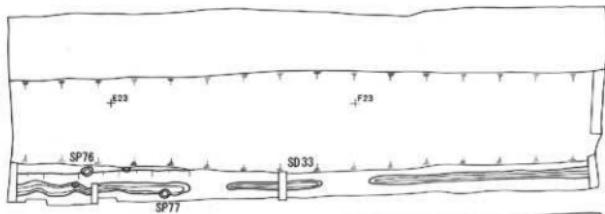
15

14

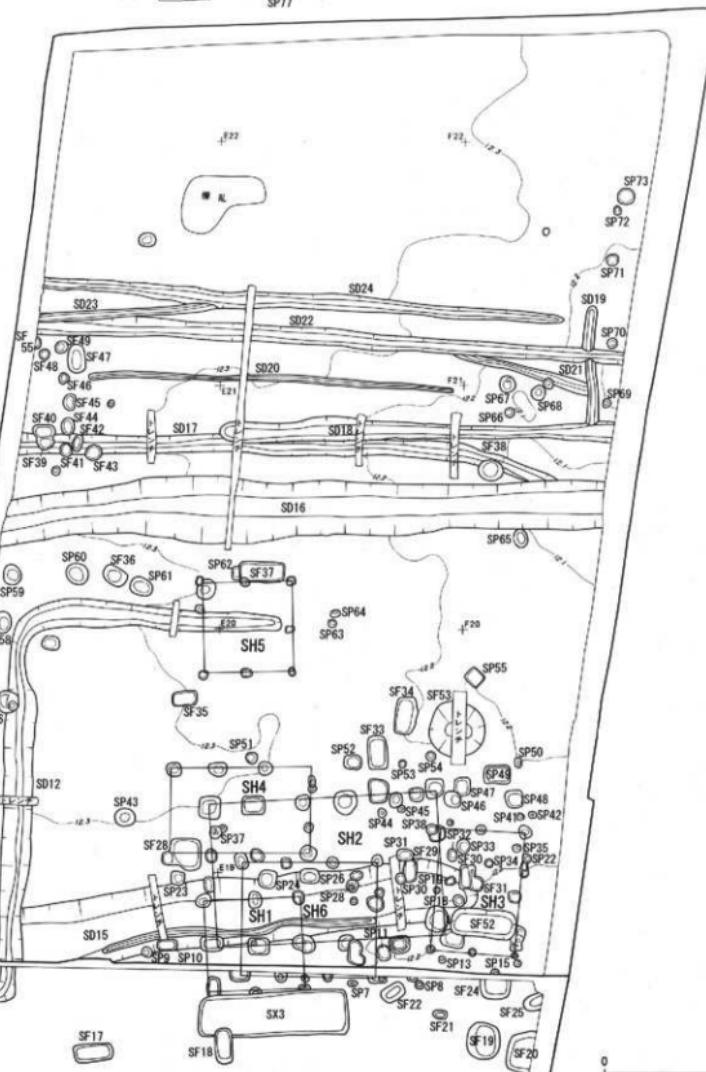
第25図 恒武西宮遺跡第1面平面図2

第26図 恒武西宮遺跡
第1面平面図3

22



21



20

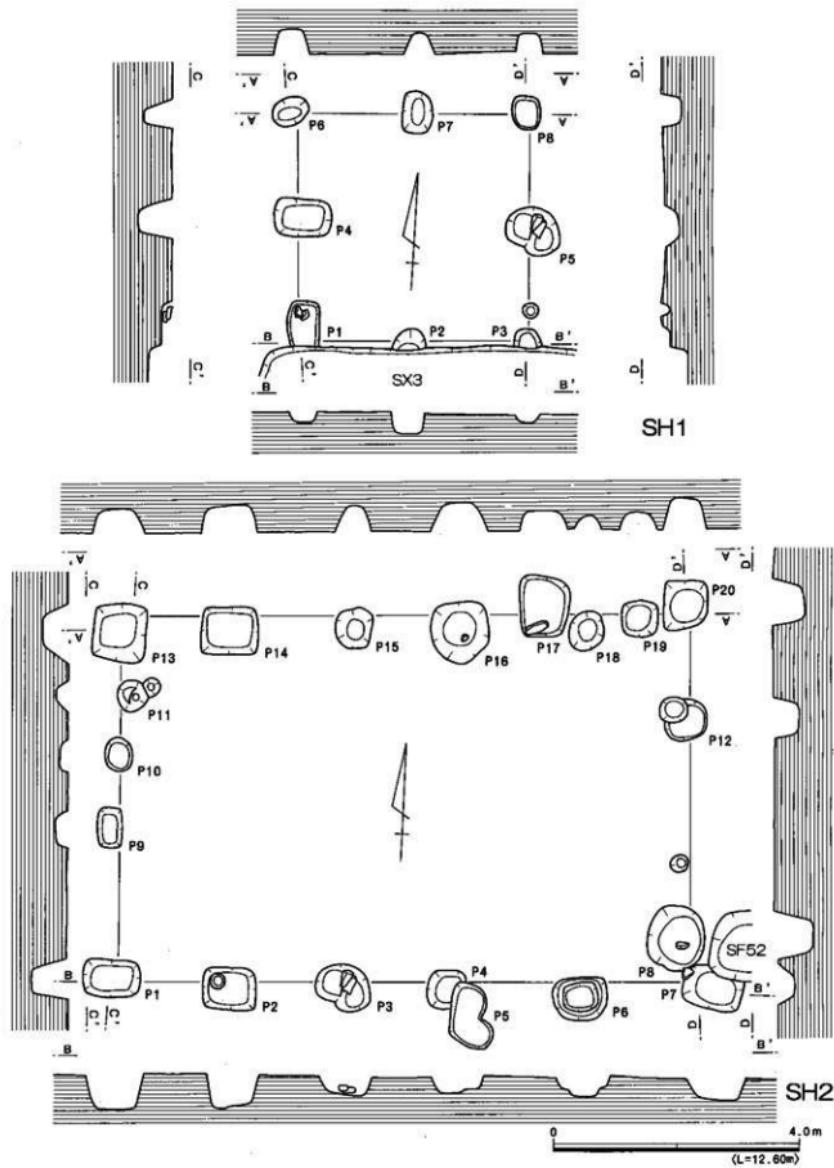
19

0 5m

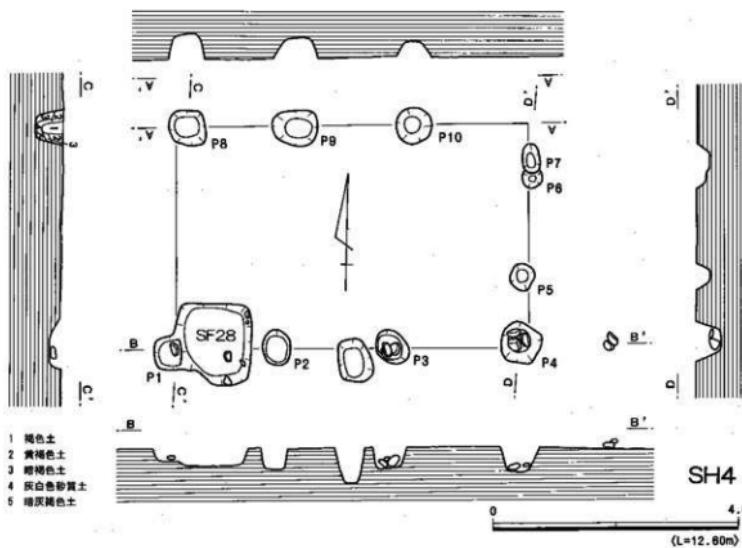
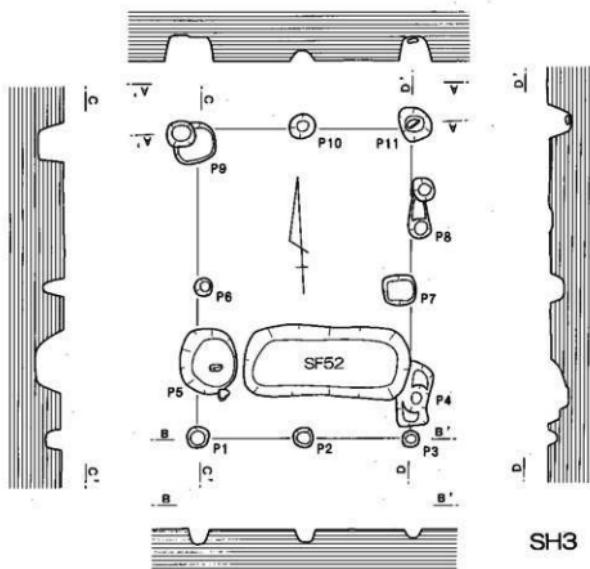
D

E

F



第27図 SH1・2 実測図



- 1 黄色土
- 2 黄褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 灰白色砂質土
- 5 墨灰褐色土

0 4.0 m
(L=12.80m)

第26図 SH3・4 実測図

ある。梁間東面は柱間がやや不規則である。梁間西面には柱穴が見つかっていないが、P1とP9の間隔は約3.6mで、本来は梁間1間であったとも想定できる。桁行はほぼ1.8mを基準としたようである。柱穴の深さは検出面から20~40cm程度であるが、P1・P4・P5では根石が検出された。根石は長軸20cm程度の礫を2~3個柱穴の底に据えてある。また、P5の東ではほぼ桁行南面の延長線上に礫が据えられていた。検出面上での確認であることから、東面に底があり、それを支えた柱の礫石という見方もできよう。しかし、他の部分では検出されていないため、明確ではない。また、南西端にはSF28があり、切合関係にあるが、新旧ははっきりしなかった。

遺物は7-7のかわらけがP9より出土している。非クロロ成形で内面はナデによって仕上げられている。外表面は口縁部も含めて指押さえで指頭痕が明瞭に残る。色調は浅黄橙色である。遺構の年代は16世紀代と推定される。

SH5（第29図）

E19・20区で検出した2間×2間の建物で、前述のようにSH1とは規模や形態が酷似する。前後関係は判断できないが、似たような機能を持つ建物が位置を変えて建て替えられたとも想定できる。南北方向を基準とした軸方向はN1° Wで、柱間はほぼ1.8mである。柱穴は10~30cmと深いものが多い。SH1同様、小規模な付属施設的な建物を想定すべきであろう。時期を示すような遺物は出土していないが、埋土や周囲の遺構との関係から遺構の年代は16世紀代と推定する。

SH6（第29図）

D18・19区で検出した梁間1間もしくは2間×桁行3間の側柱建物と推定される。桁行方向はE1° Nである。梁行は東西面いずれも不規則で、東面のP6・P7も柱穴としては不明瞭である。西面は間の柱穴が検出できず、梁間1間の可能性も十分ある。桁行の柱間に關していえば、やや乱れる部分もあるが、ほぼ1.8m間隔である。P1・P5では柱穴底に柱の痕跡と見られる小穴を検出したが、軸がややずれている。なお、南面の柱穴は排水溝にかかる部分は検出できなかった。時期を示す遺物の出土は確認していないが、埋土や周囲の遺構との関係から遺構の年代は16世紀代と推定している。なおP2からは砥石23-1が出土した。

SH7（第30図）

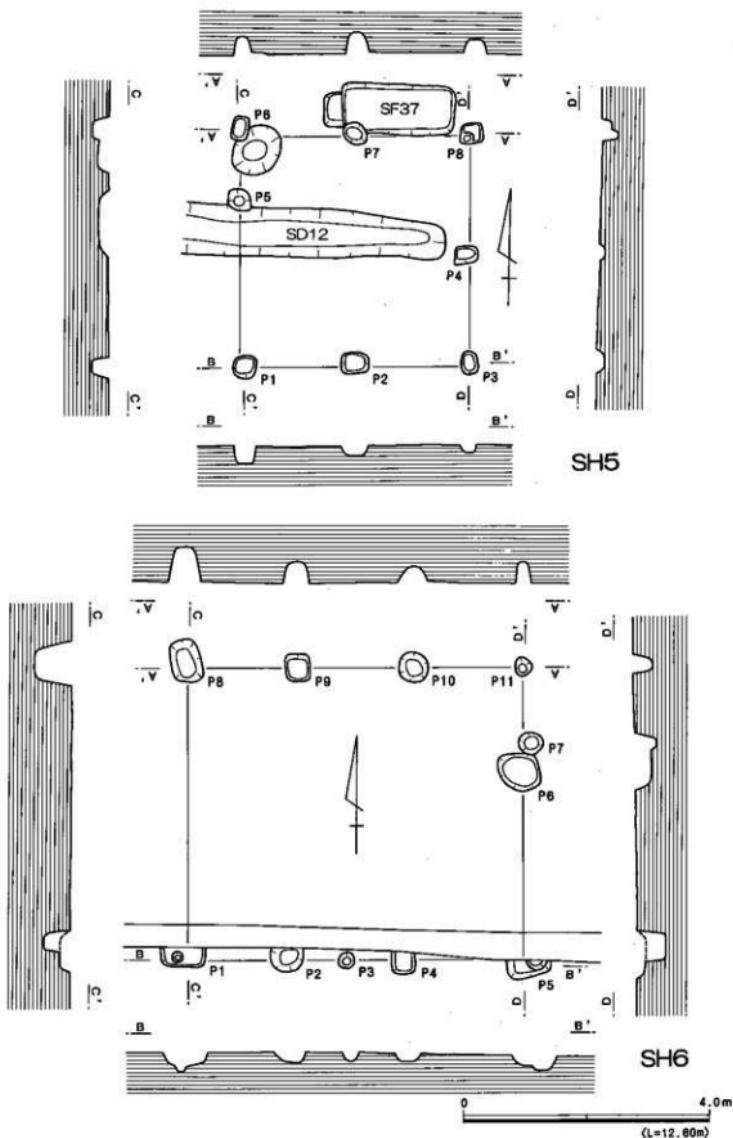
D・E16区で検出した梁間1間×桁行3間の極めて小規模な側柱建物である。桁行方向はN1° Eである。現代までの水田耕作土によって1面遺構がほとんど削平された部分で検出した遺構である。柱穴は検出面から30cm程度であるが本来はさらに深かったと思われる。梁行はほぼ1.8mだが、桁行は約1.5m程度とかなり狭くなっている。その規模から付属建物としての機能が想定できる。P4は近世溝SD28に切られる。遺物は出土していないが、後述するSH8と組み合わせが成り立つと考え、12世紀代を中心とした時期の遺構と考えられる。

SH8（第30図）

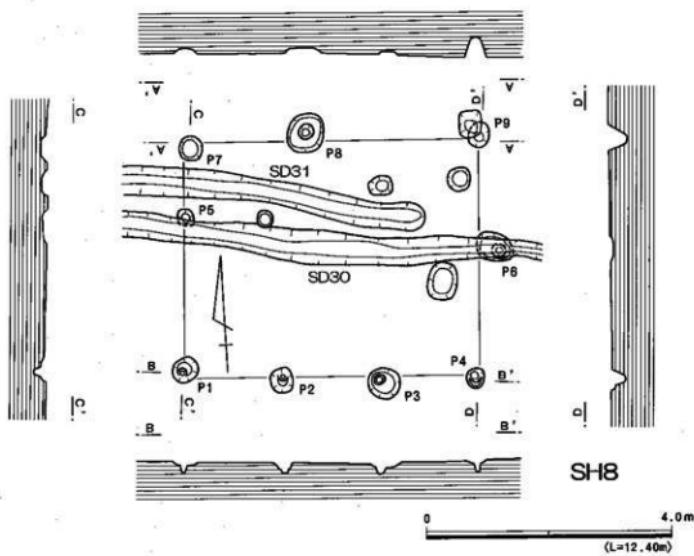
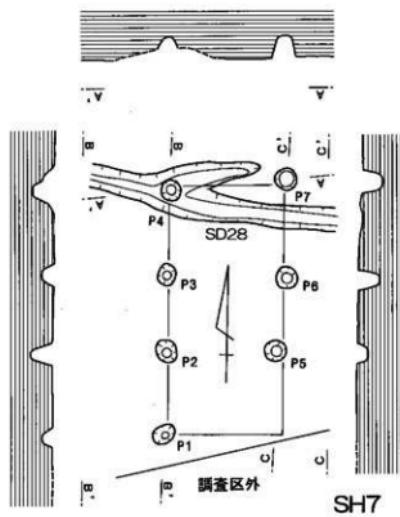
D16区で検出した梁間2間×桁行3間の側柱建物である。桁行方向はE1° Sで、SH7とは桁行方向が直交しており、位置関係から同時期に建てられていたと考えられる。柱穴は検出しきれていないものも多い。桁行南面の柱穴では底に柱の痕跡と思われる小穴が検出できた。小穴は12~13cmで、柱材は4寸程度の太さであったと推定される。遺物は出土していないが、P5・P6が15世紀後半以降と考えられるSD30に切られるため、これより以前の遺構と考えられる。付近にはSE1やSX1といった12世紀代の井戸があるため、これらとの関係から12世紀代を中心とした時期の遺構と推定される。

土坑

当該期の土坑は56基を確認した。中世後半、建物と同時期の16世紀代においては長方形の大型土坑



第29図 SH5・6 実測図



第30図 SH7・8 察測図

が多くみられることが特徴的であるといえ、SF18・23・25～27・33・37・52・54がそれにあたる。調査当初は埋葬施設等の可能性を考えたが、その性格を明確にすることは困難である。出土遺物があまり見られないことや埋土が類似するなど共通する特徴はあるようである。類例も見当たらないため、確認が得られたわけではないが、穴蔵的な施設の可能性を指摘しておく。

SF14はSF51と切り合い関係にあり（第34図）、SF14のほうが新しい。SF14は北側が狭い長方形の土坑である。深さ30cm程度で、遺物は7-11の古瀬戸後IV期新段階に位置付けられる天目茶碗の口縁が出土地した。SF51は一辺2.2m前後のほぼ正方形の土坑である。西側が浅く、東側が深い形状で、中央部には段差がある。両遺構では時期のわかる遺物は古瀬戸製品のみであり、これを根拠とすれば遺構の時期の上限は15世紀後半と考えられる。

SF17（第31図）は長方形を呈するが、かなり浅いため機能的には相違するものと思われる。

SF23（第32図）は長辺3.42m、短辺90cmの細長い長方形を呈する。埋土には炭化物を含む。北東側にはもうひとつ土坑状の遺構が重複する。埋土はほぼ同一で、灰色土のブロックを顕著に含む。新旧関係がないと思われるため、同時期に機能したと考えられる。非ロクロかわらけの小破片が出土しており、16世紀代の遺構と思われる。

SF26（第32図）は長辺2.8m、短辺88cmとかなり細長い長方形を呈する土坑で、SF32を切っている。他の平面形態の類似する遺構と比べ、深さは20cm程度と浅い。年代のわかる遺物はないが、埋土や形態から16世紀代の遺構と思われる。

SF27（第32図）も長辺3.1m、短辺1.28mと細長い長方形を呈する。こちらは深さ約40～50cmとやや深い。埋土には灰色土のブロックが混じる。遺物は7-13の非ロクロ成形のかわらけの口縁部である。16世紀代のものであろう。

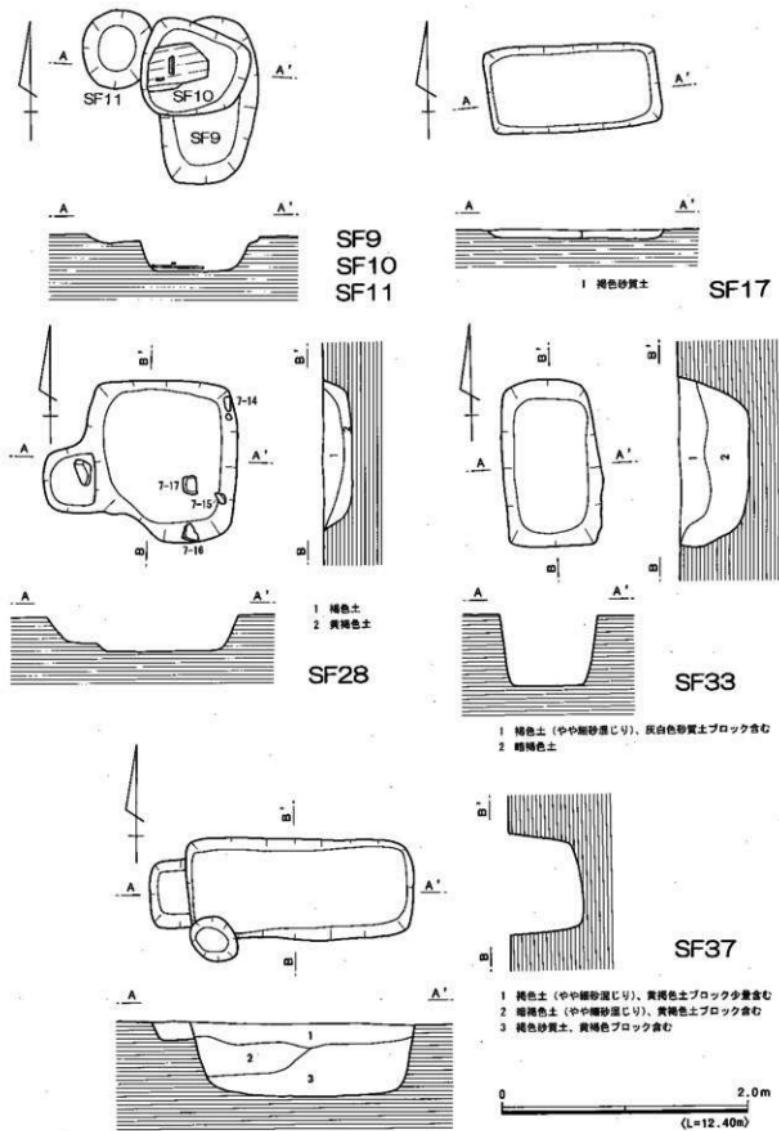
SF28（第31図）はSH4-P1と重複することは先述のとおりである。長辺1.58m、短辺1.28mの不整形を呈する。遺物は7-14～17を示した。14は古瀬戸後IV期古段階の灰釉平碗の口縁部である。15・17はかわらけである。いずれも非ロクロ成形で、内面はナデ、外面は指頭が明瞭に残りほとんど未調整である。17は煤が付着するため、灯明皿として使用されたのである。16は瓦器の火鉢と考えられる。一般的に瓦器の表面には炭素が吸着し黒色を呈すが、これは2次焼成によるものか橙色である。遺構の年代は15世紀中頃を上限とすると思われるが、かわらけが16世紀代になると考えられるため、幅をみて15世紀中頃～16世紀代と推定したい。

SF32（第32図）は底面や壁面が焼けた状態で検出された遺構である。長辺1.8m、短辺1.2m程度の規模であるが、北側と南側を中心としてかなり焼けている。炭化物はほぼ全面に広がっていることからここで何かを焼いていることが予想される。浜松市中平遺跡（浜松市1982）などで検出された類似する土坑は近世の火葬墓とされており、時代はやや隔たると考えられるが、類似する遺構という可能性もある。しかし、中平遺跡例のようにそれを示す骨片などの明確な遺物は出土しておらず、断定はできない。なお、南北端は前述したSF26に切られることから少なくとも16世紀代を下らない年代が与えられよう。

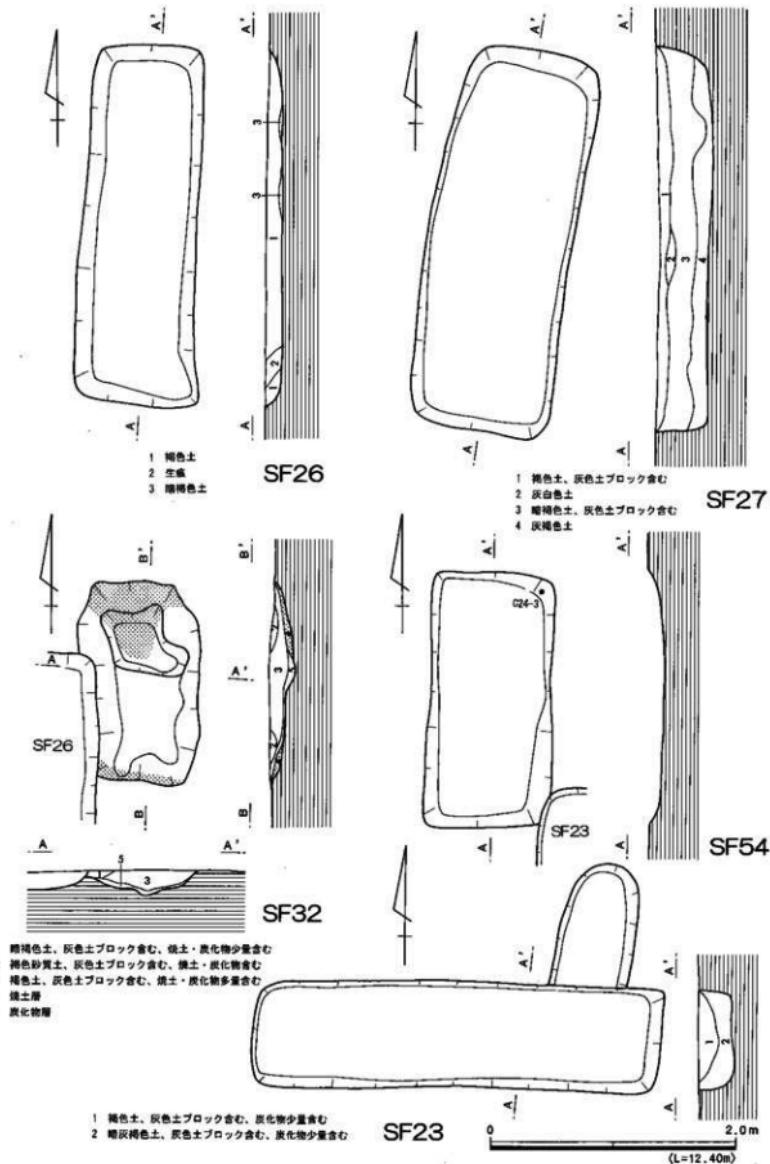
SF33（第31図）は平面長方形の土坑である。建物群に伴って機能したと考えられ、埋土も酷似する。しかし、出土遺物もなく詳細は不明である。

SF37（第31図）は長方形のやや大型の土坑である。SH5-P7に切られている。西側には小穴があり、それを切っている。年代のわかる遺物の出土はなかったが、埋土や形態の類似から16世紀代の遺構と推定される。

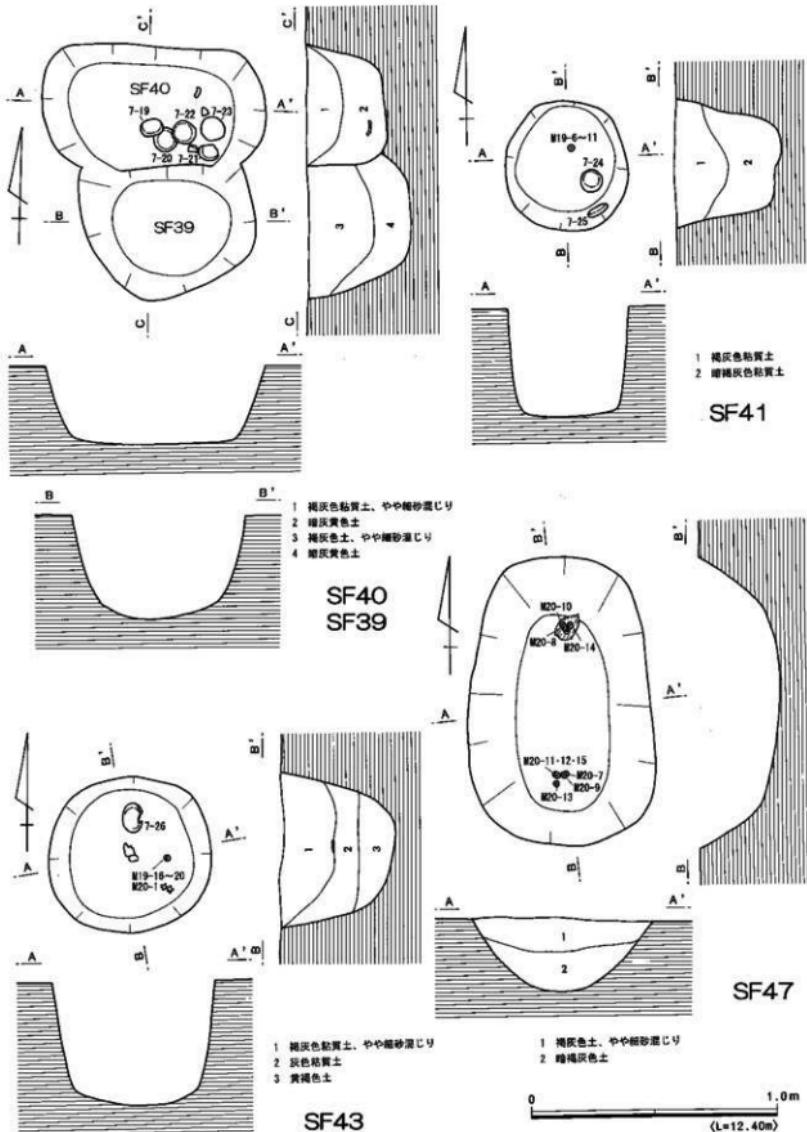
SF52（第34図）は長辺2.66m、短辺1.18mの長方形に近い梢円形をなす。SH3の建物内となるが、同時にあたるものかは確認できなかった。出土遺物はなく、年代の特定はできないが、他の土坑同様16世紀代と推定したい。



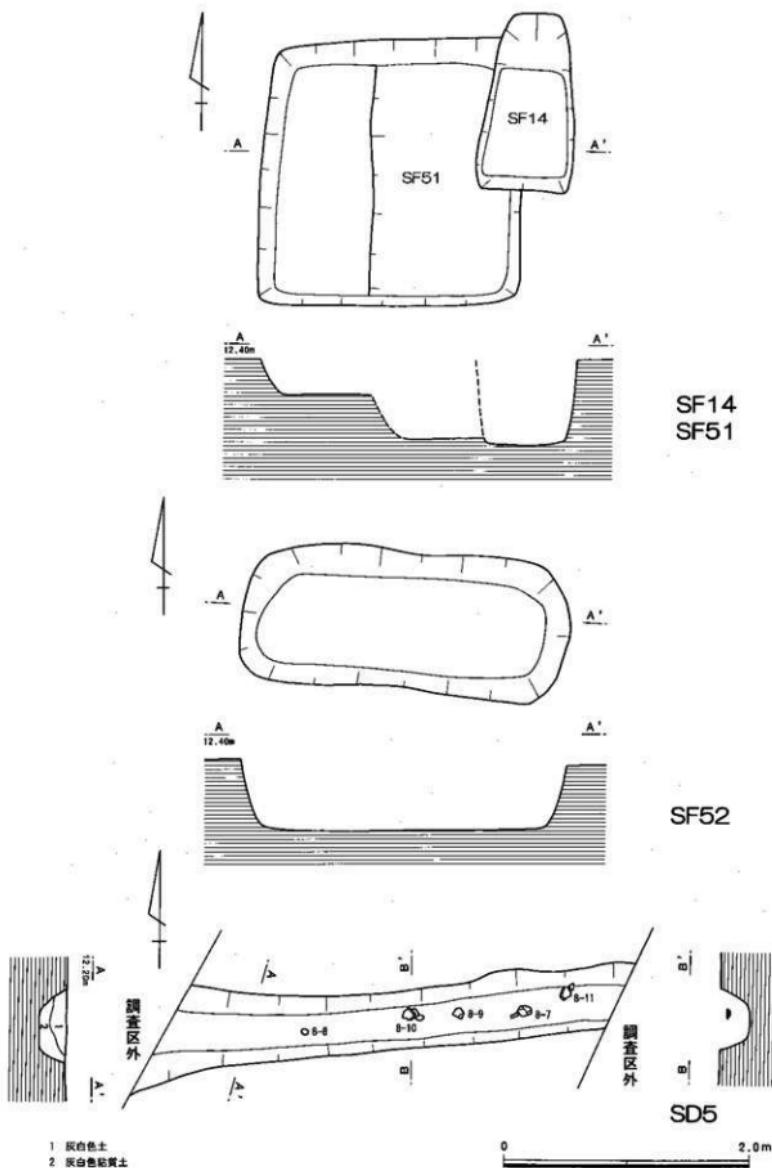
第31図 SF9・10・11・17・28・33・37 実測図



第32図 SF23・26・27・32・54 実測図



第33図 SF39・40・41・43・47 実測図



第34図 SF14・51・52 SD5 実測図

SF54（第32図）も長方形の土坑である。これもSF17同様かなり浅く、出土遺物もない。

その他中世後期の遺構と考えられる土坑ではSF50から古瀬戸後IV期新段階の擂鉢7-28が、SF56からは15世紀後半～16世紀前半代の羽釜7-30が出土している。

D17区付近のSF1～13・15・16、D20・21区付近のSF39～49・55は近世墓と思われる土坑である。これらは近世長福寺に関連すると考えられる。長福寺移転の際には墓地も含めて移転しているが、長期間にわたり営まれた墓域の中には忘れ去られ、無縁となったものもあると考えられ、これらはそうした墓ではないかと推定する。土坑は楕円形または円形で、大きいものでも長径は1.5m程度である。第4節でも触れるように出土銭貨の多くは火を受けており、火葬墓であったと考えられる。しかし、炭化物や焼土が多量に検出された例はなく、他の場所で火葬された骨のみを埋葬したものと考えられる。木片や陶器の破片が確認される遺構もあることから、桶や陶器などを蔵骨器としたことが考えられる。これら土坑の時期は全ての遺構から時期を特定できる遺物の出土に恵まれている訳ではないが、出土する寛永通寶のほとんどが新寛永、それも3期（第4節参照）とされるものが多いことから元禄年間以降と考えられる。

SF9～11（第31図）は重複して検出された土坑である。SF10が最も新しい。SF10では底部に木片が確認され、桶等が蔵骨器として使用されたと考えられる。SF9からは7～8～10が出土している。8・9は藤澤氏編年（藤澤1998）連房8～9小期の鉄軸有耳壺である。蔵骨器として使用されたものであろう。10は土師質の蓋であろう。壺とセットになっていたと思われる。鉄軸有耳壺の年代観は18世紀末から19世紀初頭前後に位置付けられ、これら遺構はこの時期前後のものであろう。

SF12からは24-32の土製人形や24-33の土製狛犬が出土している。かわらけや銭貨と同様に副葬されたものであろう。

SF39・40（第33図）は重複して検出された。SF40のほうが新しい。SF40からは7-19～23のかわらけが出土した。いずれも非ロクロ成形であるが、つくりは16世紀代のかわらけと酷似する。口径は若干小さくなり、色調は橙色に近くなり、また胎土は精緻になる。内面はナデ、外表面は指頭が残る未調整である。19～22は底部内面中央が盛り上がるようになっている。

SF41（第33図）は直径50cm程度の楕円形で深さは90cmである。上層から7-24・25のかわらけ、19-6～11の寛永通寶が出土した。24は口縁内面の端部にナデによって面を造り出す。

SF43（第33図）は直径70cm程度の円形土坑である。上層から出土した7-26のかわらけはSF41出土の7-24と類似する。銭貨は19-16～20・20-1の6枚が出土した。骨片も少量出土した。

SF45からは20-2～4の寛永通寶、SF46からは7-27のかわらけ、20-5・6の銭貨が出土した。SF46出土の銭貨である20-6は北宋の熙寧元宝である。

SF47（第33図）は長径1.2m、短径74cmとやや大型の楕円形の土坑である。20-7～15の銭貨9枚を図示した。図示できない破片も出土している。全て寛永通寶であるが、被熱しているものも多い。また、北側には木片が確認され、銭貨がその上に乗っていた。銭貨にはわずかに纖維が付着しているものもあり、布等で包まれていた可能性が高い。

溝状遺構

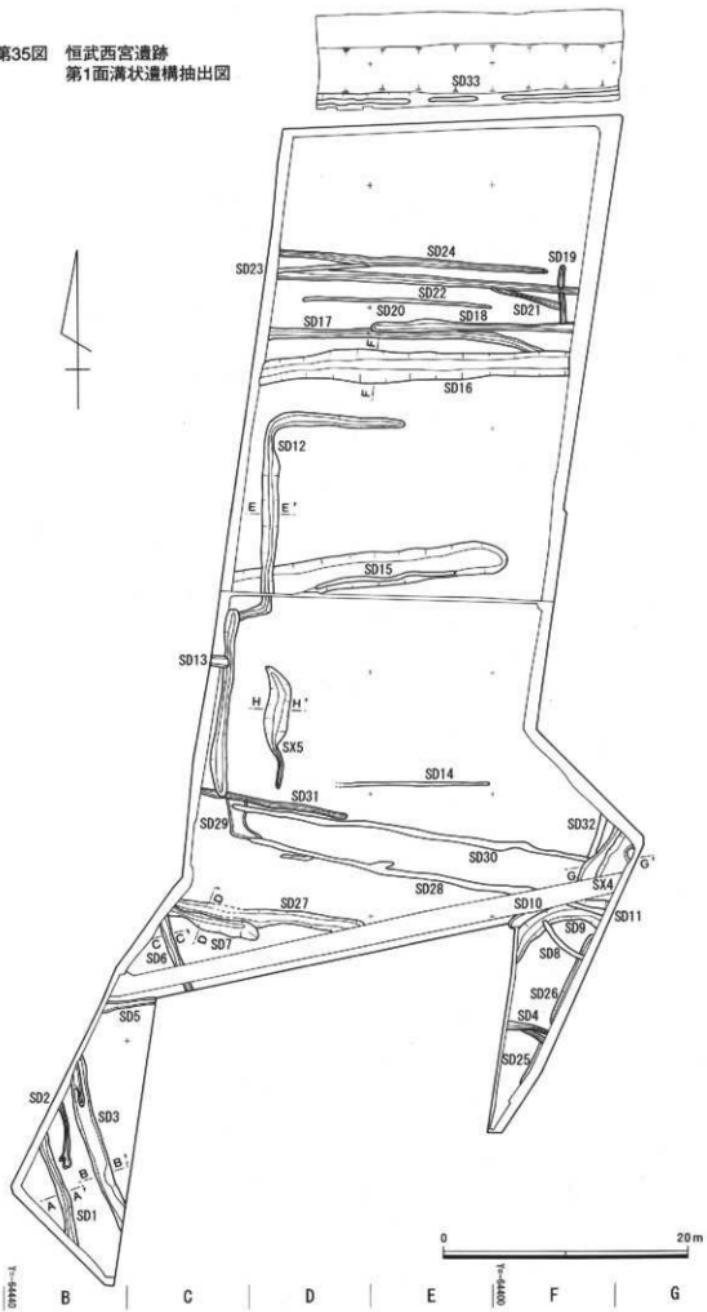
この時期の溝状遺構は33条確認した（溝状遺構抽出図第35図・土層断面第37図）。近世の遺構は確認できず、ほとんどが中世後期の遺構であると考えられる。中世前期の遺構は調査区南側で検出されたSD1～6などが見られる程度である。

SD1～3はB13・14区で検出された溝である。SD1と3は平行して検出されており、道状の遺構となる可能性も考えられる。恒武西宮遺跡1次調査（埋文研2000）でもSD3の南に続く部分の一部がSF44と

X-137620

第35図 恒武西宮遺跡
第1面溝状遺構抽出図

X-137720



して検出されているようであるが、他の遺構と切合うためか途中で途切れてしまうようである。埋土はSD1・3とともに水性堆積を示すラミナが見られ、通水していた時期があると推定できる。SD3は土層断面の観察から再掘削を受けている可能性も考えられる。SD1からは8-1~3が出土している。1・2は山茶碗で1は輪花碗の口縁部、2は碗の底部である。1は12世紀中頃、2は12世紀後半に位置付けられよう。3は古墳時代の壺の口縁で混入品である。SD3からは8-4~6が出土した。いずれも山茶碗の碗である。4は高台の高い底部である。5はほぼ完形の輪花碗である。四方に指押さえの輪花が施され、三方に灰釉がつけ掛けされる。6も輪花碗で、高台にはやや厚みがあり、灰釉がつけ掛けされている。いずれも12世紀前半の年代が与えられよう。

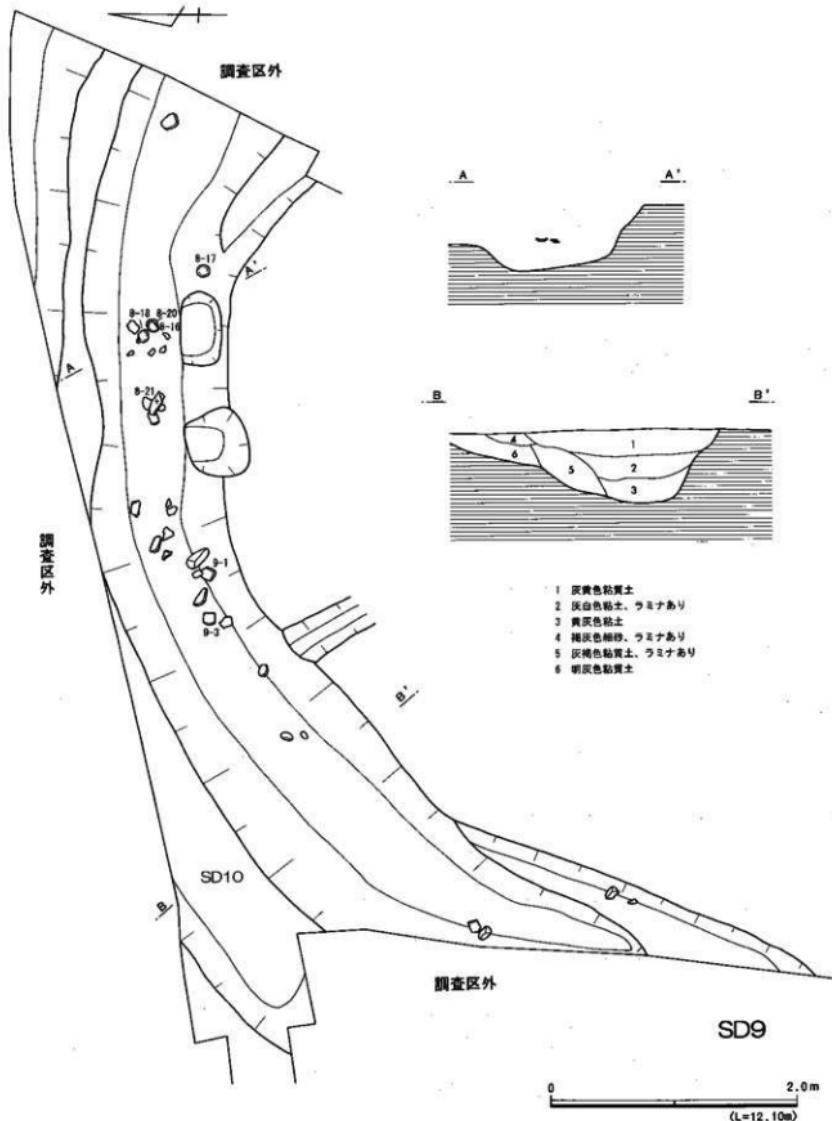
SD5（第34図）は東西方向の溝である。山茶碗等がややまとまって出土した。SD1・3とは直交する関係となり、区画溝であった可能性が高い。遺物は8-7~11が出土している。7は小碗である。口縁がやや外反気味に立ち上がり、高台もしっかりとしたつくりである。8は碗の底部である。9は輪花碗で、四方に指押さえの輪花があったと思われ、灰釉がつけ掛けされている。10は底部破片であるが、8に比べ低くなり新しい様相が見える。11は渥美産の壺底部である。外面下半に縦方向の調整痕が見られる。

遺構の年代はこれら遺物から12世紀前半～中頃と思われる。

SD6はSD1・3と同様の方向を示し、SD5とともに区画溝の可能性がある。遺物は山茶碗8-12が出土した。四方の輪花が施され、灰釉つけ掛けが三方になされる。12世紀前半に位置付けられ、遺構の年代もその頃であろう。

SD9（第36図）は恒武西宮遺跡1次ではSR11とされた遺構に続く。土層断面の観察状況でも水性堆積が確認されたため、おそらく1次調査の見解どおり流路であったと考えられる。検出された範囲内では東側でやや南に曲がる、北側のSX4との関連も考えたが、接続部分が不明瞭なので不明である。後述する区画溝とは方向が異なる。8-16~18・20のかわらけは完形で正位置に置かれたかのような出土状況を示し、意図的なものを感じる。かわらけ自体にも煤が付着するなどの生活に使用された形跡もない。かわらけに限っていえば単純に遺物を廃棄したとは言い切れないため、祭祀等、何らかの目的があった可能性がある。遺物は8-13~21、9-1~3を図示した。8-14・15は施釉陶器である。14は大窯1段階の端反皿で、釉の発色がやや悪く、灰白色を呈する。15は口縁部がわずかに残存していた丸皿である。工具による刻文（ソギ）が入り、大窯2段階前期に位置付けられる。8-13はロクロ成形、8-16~20は内面ナデ、外面未調整の非ロクロ成形のかわらけである。13は底部のみの残存で、色調は浅黄色に近い。16・17・19・20は底部から体部の境は緩やかで、16の内面には工具によって上下方向につけられた傷がある。18は器高がやや高く、底部と体部の境は比較的明瞭である。8-21・9-1は内彎形の内耳鏡である。8-21は底部に三方の脚がつく。9-1は口縁部がやや外反気味に開く。いずれも外面は煤が厚く付着するため調整はよくわからない。内面はハケ目調整の後ナデ調整がなされるようである。9-2は鉄付鏡である。鉄部よりも口縁部のほうが若干高い。9-3は羽釜である。SF55出土（7-30）と似た形態を示すが残存状態が悪く詳細は不明である。他に図示はできなかったが大窯3段階後半に位置付けられる初山窯（大窯3段階後期併行）産の鉄釉丸皿の小破片があり、これら遺物からSD9は16世紀前半～後半に位置付けられよう。

SD12（土層断面第37図）は調査区西側で検出された。C17区付近で矩形に屈曲し、遺構北端のD19区付近では東に直角に屈曲する。溝の東側には掘立柱建物跡が集中しており、こうした特徴からこの遺構の性格は掘立柱建物そのものを区画する溝と考えられる。遺物は9-4・5が出土した。4は古瀬戸後IV期の灰釉端反碗の高台部分破片である。5は古墳時代中期の高杯の脚部で、混入品である。また24-5~7の土鏡も出土した。9-4は15世紀後半の年代を示すものと考えられるが、掘立柱建物跡との位置関係、埋土の類似から16世紀代にも機能したと考えられる。



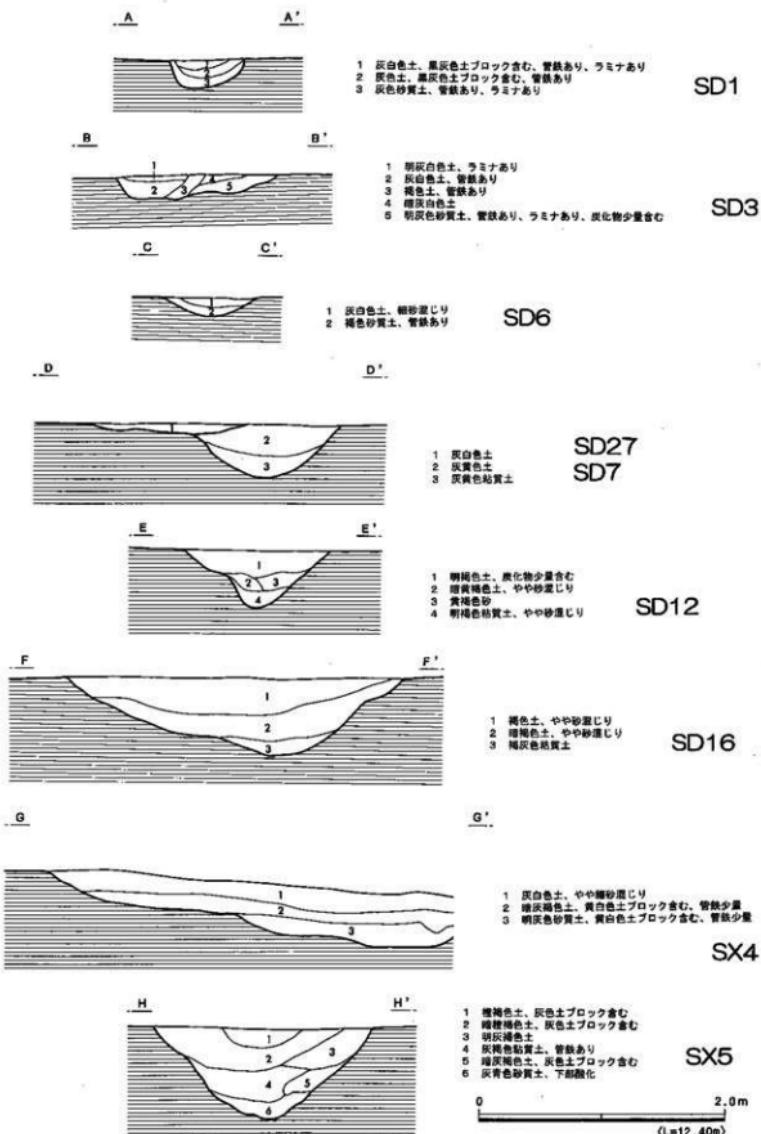
第36図 SD9 実測図

SD15は幅2.7m前後と広いが、深さは25cm程度と浅い。調査区中央西で検出された遺構である。掘立柱建物跡よりも古い段階にあたると思われるが、埋土はかなり類似しており、中世前期の遺構の埋土とは全く異なる。掘立柱建物跡以前のものではあるが、それほど隔たらない時期の遺構と推定される。出土遺物は9-6の山茶碗小碗であるが、上記理由により遺構の年代を示すとは思われない。

SD16は調査区北側C20～E20区にかけて検出された遺構である。幅は1.8～2.3mと広く、深さは70cm程度ある。調査区の中では規模が大きく、深い。北側にはこの溝に付随するとみられる小溝SD17～24があるが、これより北側にはSD33が同方向で確認されるにどまり、それ以外の遺構は確認できないことからSD16が居住域の北側を区画する基本的な区画溝であった可能性が高い。埋土は底部に粘質土がみられるが、通水していた形跡はない。また、徐々に埋没したという所見も得られなかつたため比較的短期間に埋没したと考えられる。遺物は9-7～13が出土している。7～9は施釉陶器である。7は大窓3段階前半期の擂鉢である。口縁外面に縁帯が形成される。8は連房2小期の天目茶碗である。体部上半部は鉄軸が掛けられ、下半部は露胎である。高台は削り出しだ。9は古瀬戸後期後IV期の灰釉縁襷小皿である。底部のみの残存で、糸切り痕が見られる。10は非ロクロ成形、11はロクロ成形のかわらけである。10は内面ナデ、外未調整である。色調は10が灰白色であるのに対し11は浅黄橙色である。12は瓦質土器の風炉の可能性が高いが、肩部のみの残存であるため詳細は不明である。13は内彎形内耳鍋である。口縁部は横ナデ、内面は横方向のハケ及びナデ調整、外面は煤が付着するため明確ではないが縦方向のハケがみられる。底部は削りがなされ、三方に脚がついている。また、23-2の砥石も出土している。このように遺物には上限は15世紀後半、下限は17世紀前半と時期差が認められる。17世紀前半に位置付けられる連房2小期の天目茶碗9-8はSD16の最上層の検出面で出土したことから、この頃には埋没していたといえる。よってこの溝が機能していたのは掘立柱建物跡群と同様、15世紀後半～17世紀初頭と考えられ、長期間にわたって継続機能した可能性がある。

SD17～24・33はこれらに直交するSD19を除いてほぼ東西方向を向き、埋土も似るため前述したようにSD16と関連が深い遺構と捉えられる。この中で切り合いがあるのはSD17・18、SD22・23で、それぞれSD18、SD23が新しい。埋土は酷似し、年代に大きな隔たりはないと考える。小区画を志向した可能性もあるが、周囲に対象となる遺構がなく、判然とはしない。出土遺物のうちSD22から9-14・15、SD23から10-1、SD33から10-8・9を図示した。9-14は連房5・6小期の灰釉丸碗である。近世墓が付近にあることから混入の可能性がある。9-15は半球型内耳鍋である。口縁がわずかに残存していた。口縁内面は横ナデ調整であるが、一部ハケ調整の痕跡がある。10-1は連房2小期の天目茶碗である。SD16同様、埋没後の遺物であろう。10-8・9は擂鉢である。ともに古瀬戸後IV期に位置付けられ、9は新段階のものである。8は口縁内面に突起が巡り、9の口縁は端部丸く收まりやや内傾する。これら遺構の年代はSD16と同時期と推測する。

SD27～30は調査区南C～E15・16区で検出された遺構である。SD30の南はこの部分に市道が建設されるまでは水田となっており、耕作土が検出面にまで及んでいたため、その水田が営まれた低地部分は本来規模の大きい溝であった可能性もある。SD16が北の区画ならばこの溝が南の区画溝であったとも考えられる。SD27～30はその水田部分となっていた溝と関連するのかもしれない。遺物はSD27から10-2～4、SD28から10-5、SD30から10-6がそれぞれ出土している。2は13世紀前半代の山茶碗である。3は古瀬戸後III～IV期の灰釉御皿で底部の一部のみ出土した。底部内面に工具により御目が施される。4は内彎形内耳鍋である。口縁がわずかに残存していたのみである。5は連房3～4小期の白天目で、混入品と思われる。体部全体に丸みがあり、口縁端部は明瞭に外反し、S字に近い。6は古瀬戸後IV期新段階から大窓1段階の擂鉢の底部である。12本1単位程度の御目が確認され、底部外面には糸切り痕が残る。出土遺物にはやや幅があるが、埋土や検出から15世紀後半～16世紀代の遺構と考えられる。



第37図 SD1・3・6・7・12・16・27 SX4・5 土層断面図

小穴

調査区内は掘立柱建物跡周辺を中心として多くの小穴が検出された。埋土や形態からほぼ同時期の中世後期に位置付けられるものがほとんどである。本来は確認したよりも多くの掘立柱建物跡が存在していたことが考えられる。中世前期に抽出できる遺構はほとんど確認できていない。近世に至っては全く検出していない。図示できた出土遺物はSP38から10-10、SP46から10-11、SP75から10-12、SP76から10-13の4点と多くはない。10はロクロ成形のかわらけの底部破片である。11は内輪形内耳鍋で、外側に縦方向を中心としたハケ調整が見られる。12・13は山茶碗の底部である。12が13世紀前半に13が12世紀前半に位置付けられよう。

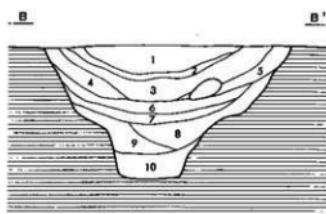
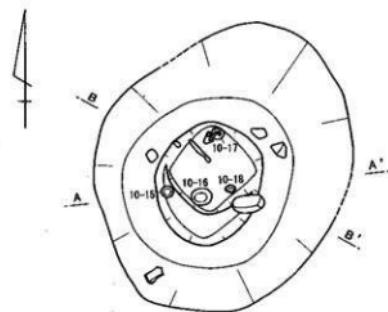
井戸・性格不明遺構

井戸は確実なものはSE1～3の3基である。性格不明遺構としたSX1も井戸である可能性が高い。SE1・SX1は中世前期、SE2・3は近世の井戸である。中世後期の明確な井戸は検出されていない。

SE1（第38図）はF15区で検出された井戸である。井戸側や水溜（宇野1982）などの施設は確認できなかったが、下部を一段掘り窪めていることから本来は存在したものと推定する。埋土は上層で特に炭化物を含み、全体として粘土や粘質土を主体とする。最下部が砂礫層に及んでいることは確認できなかつた。ほぼ完形の山茶碗10-15・16が正位置に近い状態で出土しており、また塔婆の一部とも考えられる木製品25-1が出土しており、井戸廃棄の際に祭祀行為を行った可能性が高い。遺物は10-14～18が出土している。14・15は小碗である。14は15に比べやや高台が低く、体部中程にナデによる棱が形成される。15は口縁がやや外反気味となっている。16・17は山茶碗である。16は完形で、四方に指押さえによる輪花があり、三方に灰釉が掛けられる。高台は高くしっかりしている。17は底部破片で、16よりも高台が低くなりやや新しい様相となると思われる。18はロクロ成形のかわらけである。中世後期のものと比べると胎土が悪く、色調はにぶい黄褐色となる。祭祀行為に使用したとみえ、底部には焼成後に内面側から穿孔される。外面はその衝撃により剥落してしまっている。これら遺物は12世紀前半から中頃に位置付けられ、出土状況から遺構の年代に直接反映すると思われる。

SE2・3（第39・40図）は近世の井戸である。おそらくは近世長福寺で使用していたと考えられる。SE2は底部に竹で編んだタガと思われる遺物が残存していた。おそらくSE3と同様、桶を水溜としていたが、廃棄の際に再利用を図るために抜き取られたと思われる。井戸側は検出できなかつたが、川原石が上層でかなり検出されていることから本来はあったと思われる。水溜同様、廃棄の際に壊されたと推定する。遺物は連房3～4小期の擂鉢11-1が出土し、これにより遺構年代は17世紀末から18世紀初頭と思われる。SE3は井戸側、水溜ともに検出された。井戸は下部の3段程度が確認されたが、上部は川原石が散乱しており、壊れてしまっていると思われる。水溜は長さ1m弱の桶を使用していた。水溜内には木片や植物遺体がかなり入っており、廃棄され埋没に至るまでかなり不要なものを捨てたことが予想される。遺物は11-2～5を図示した。いずれも近世の施釉陶器である。2・3は連房7小期の製品で2は掛け分け花瓶、3は灰釉小碗である。4は連房5～6小期の灰釉筒型香炉、5は連房8～9小期の灰釉片口である。18-5の煙管、木製品25-2～5も水溜内の埋土から出土している。塔婆の破片が含まれていることは、長福寺に伴う井戸であることを示すものでもあろう。これら遺物から遺構は18世紀末から19世紀初頭を上限に廃絶されたと考えられる。

C15区付近ではSX1・2（第41図）が重複して検出された。SX1は中世前期、SX2は中世後期に位置付けられる。ほとんど同位置に時期を違えて掘削されており、合理的な解釈には苦しむが、SX1は中世後期段階では完全には埋没しておらずに堆積程度は残っていて、それをさらにSX2として掘削したとするのが妥当と思われる。SD27とも重複しており、土層断面や平面形態の観察から古い順にSX1、SD27、SX2

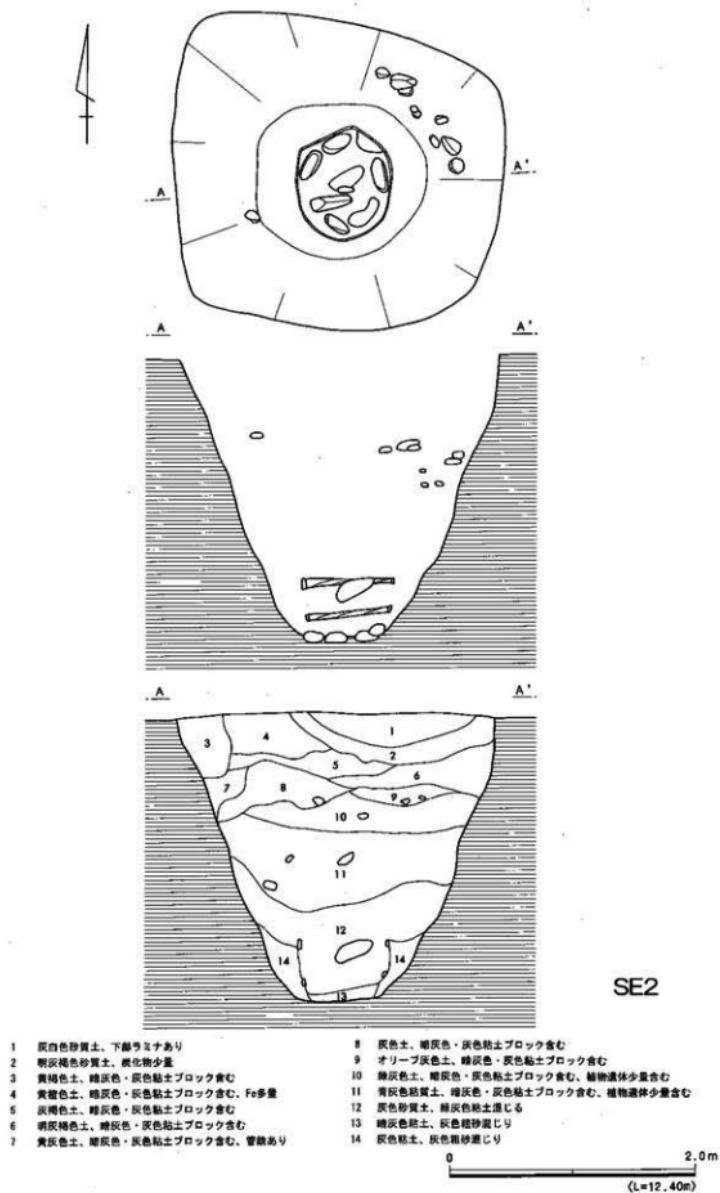


- 1 暗褐色土、黄褐色土ブロック含む、炭化物少量含む
 2 黒褐色土、鐵土、炭化物少量含む、炭色細砂ブロック含む
 3 深灰色質土、黄褐色土ブロック含む
 4 暗褐色土、黄褐色土、黒褐色土ブロック含む
 5 黑色粘質土
 6 灰褐色粘土、青褐色粘土ブロック少量含む
 7 綠灰色粘土、青褐色粘土ブロック少量含む
 8 淡黄色粘質土、黑褐色粘土ブロック少量含む
 9 暗褐色粘土、綠灰色粘土ブロック多量含む、植物遺体少量含む
 10 黑色粘土、綠灰色粘土ブロック含む、植物遺体少量含む

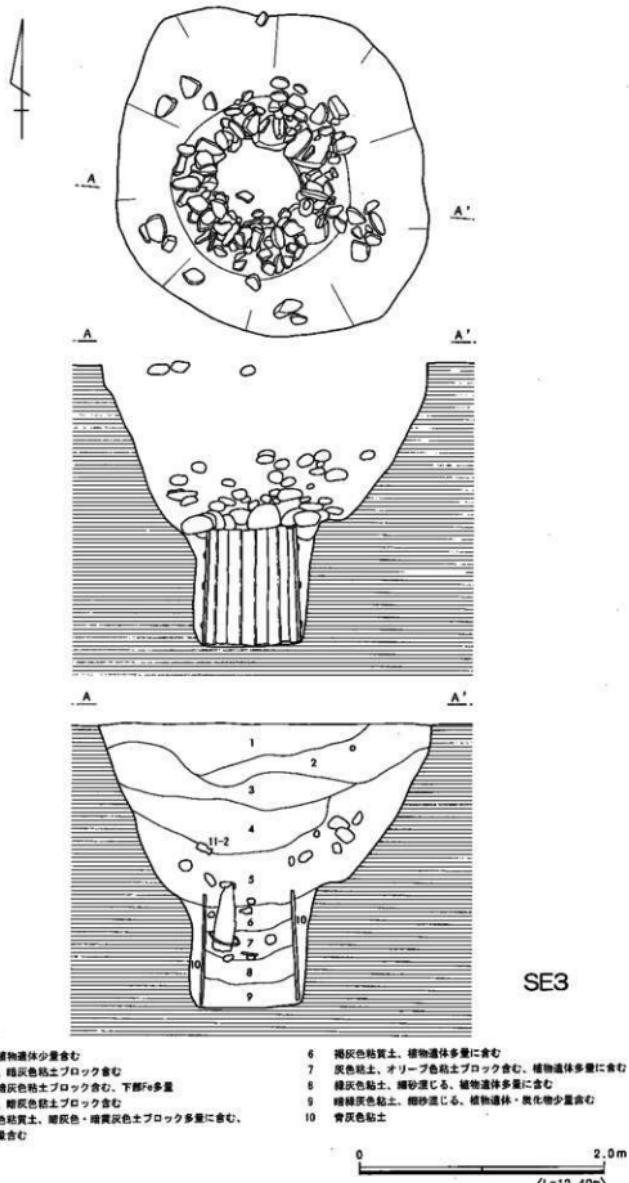
SE1



第38図 SE1 実測図



第39図 SE2 実測図



第40図 SE3 実測図

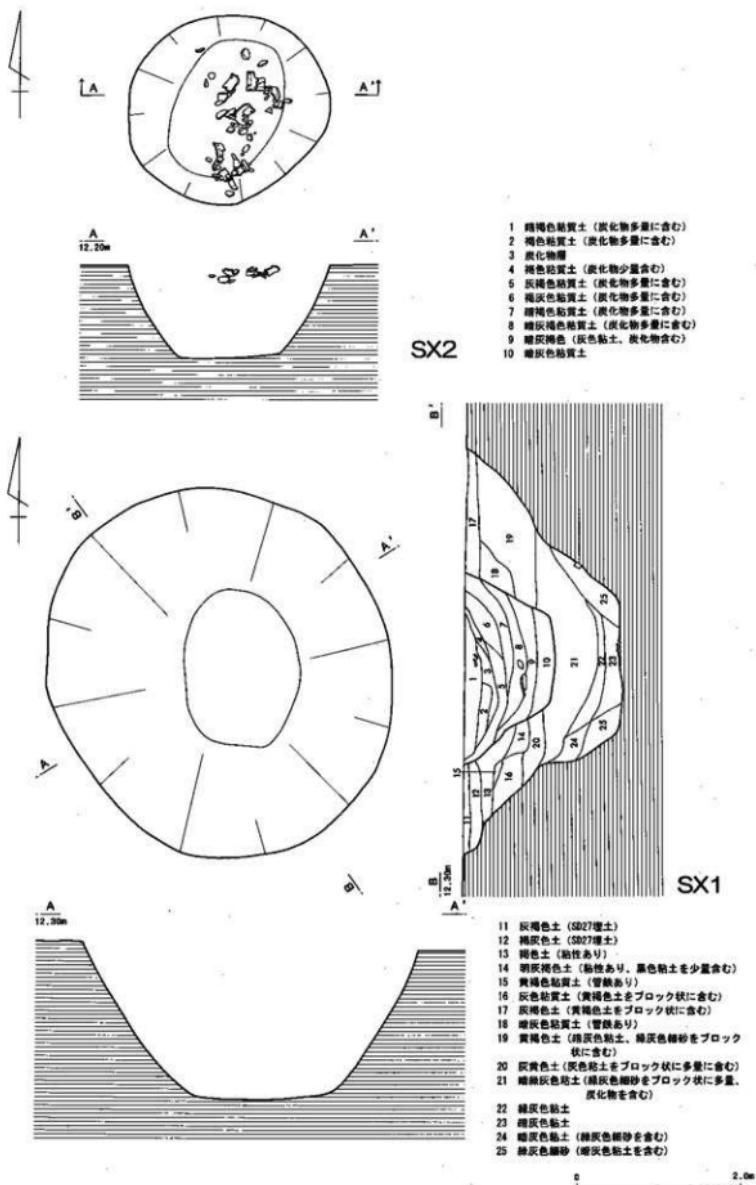
であることが確認された。

SX1は長径4.55m、短径4.2mの大型の楕円形土坑状を呈し、検出面からは約2mの深さを測る。不明遺構としたが、最下部は湧水のある砂礫層にまで及び、井戸側や水溜は確認していないものの土層観察では構造物の存在が予想されることから井戸と推定される。遺物は11-6~9が出土している。6~8は小碗である。ほぼ同じ形態を示し、口縁はほぼ直線的に伸び、6・7は口径9.4~9.7cmと似た値を示す。6の底部には墨書きが認められるが、判読はできない。9はロクロ成形のかわらけである。SE1出土の10-18に形態や胎土は似るが、こちらの方が大ぶりである。また、24-10~12の土錘、25-6~16の木製品が出土している。山茶碗は12世紀前半のものであることから、遺構の年代もそこに求められよう。

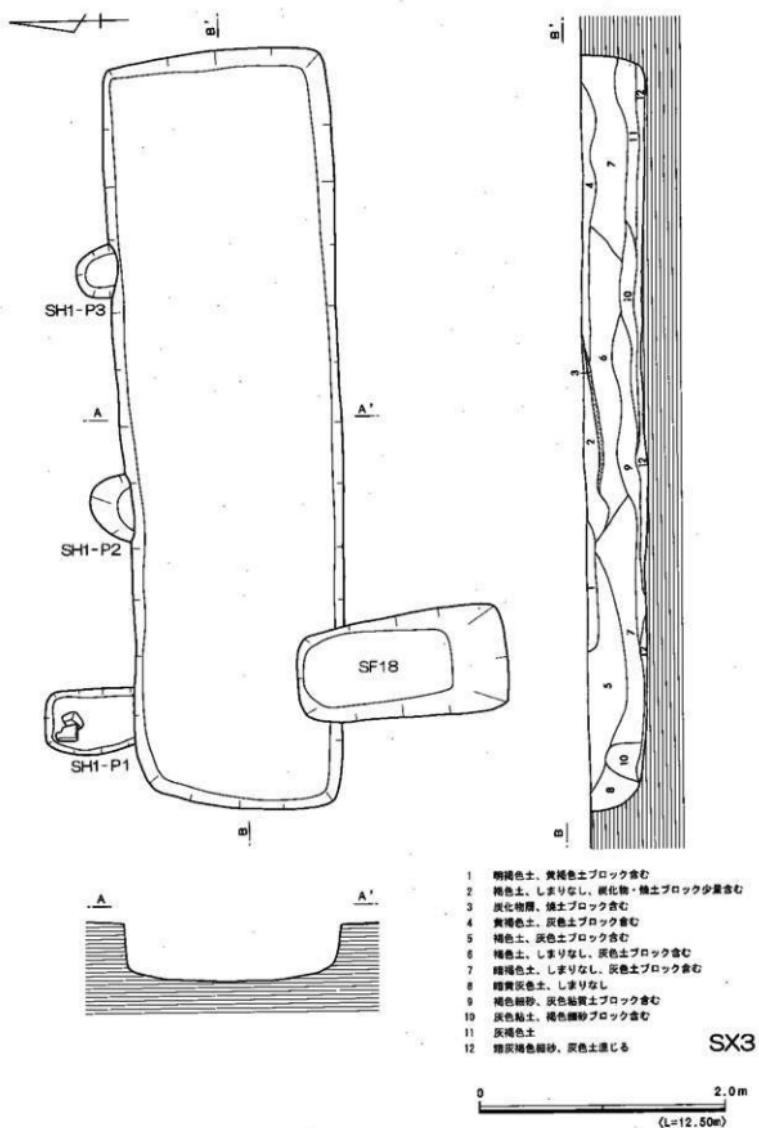
SX2はSX1に比べると長径2.48m、短径2.34mと規模も小さく、深さも1.1m程と浅い。掘立柱建物を中心とする屋敷地と同時期と考えられるため、屋敷地に付随するものと思われる。上層では内耳鍋を中心とする土器がまとまって出土しており、本来は何らかの目的のために掘削されたが、廃絶段階で廃棄土坑としたものと考えられる。本来の目的は明らかにはできなかった。遺物は11-10~17、12-1~4、13-1~3が出土した。11-10・11は山茶碗である。10は高台が高くしっかりしているが、11の高台は低く、体部もやや直線に近いため新しい様相を示す。11-12は涅ね鉢の底部破片である。11-13・14は施釉陶器で、13は古瀬戸後IV期新段階の擂鉢である。口縁端部は丸く收まり、やや内彎する。14は大窓2段階の天目茶碗の底部破片である。15~17は鎧付鉢である。15は口縁よりも鉢のほうが高い形態である。口縁には縦方向に穿孔がみられる。16・17は口縁部のほうが鎧よりも高く、口縁端部は折り返され上方に突出する。外面上部は横方向のハケ、下部は残存部分ではヘラ削りが施され、内面横方向ハケもしくはナデ調整である。12-1~3は半球型の内耳鍋である。1・2の口縁はやや内彎気味で、3は上方にそのまま立ち上がる。1・3は内耳が確認され、内面の口縁直下に粘土を貼り付け、横方向の穴を貫通させている。調整は判然としないが、外面はハケ、内面はハケとナデを併用しているようである。底部はヘラ削りのようである。12-4・13-1~3は内彎形内耳鍋である。13-2は口縁上端部の面があり、その他は強いナデによって凹みが造り出される。いずれも内耳が確認され、内面の口縁と体部の境となる稜の直上に粘土を貼り付けた上に、横方向の穿孔がなされる。12-4はその他に口縁部に穿孔が1箇所確認された。完形品でないため不明確だが、内耳が壊れたためにその代用として施されたものと考える。外面は煤によつて明瞭ではないが縦方向のハケ調整がなされ、底部はヘラ削り、内面はハケ調整とナデ調整が併用される。これら鍋類は外面にはかなり厚く煤が付着しているが、内面は黒く変色しているのみであり、何かが焦げて付着している例は見当たらなかった。この遺跡でも福田町元島遺跡（埋文研1999）の報文で指摘されているような「水を煮沸するために使用された」、との見解を支持する使用方法が考えられる。また、24-13~16の土錘、25-17の木製品が出土している。これら遺物から施釉陶器は16世紀中頃の天目茶碗を下限とするが、内耳鍋が後半にまで下る可能性があるため、遺構は16世紀中頃から後半にかけてのもとのと思われる。

SX3（第42図）は土坑の頂で述べた長方形土坑の大型判であるという見方ができる。埋土も類似しているが、長辺6.08m、短辺1.92m、深さは50cm程度と極端に規模が大きいため、性格不明遺構として報告する。SH1-P1~3と重複しており、これを切っているためSH1より新しい。SF18とも重複するがこちらは切られているため、SX3のほうが古い。土層の観察では他の長方形土坑と比べ、埋土が細分でき、段階的に埋没していった形跡がある。また、中央付近では炭化物が多量に確認されていることも異なる要素である。出土遺物も少なく、性格は不明であるが、他の土坑同様穴藏的な性格を推定する。遺構の時期は非ロクロかわらけの破片程度の遺物しかなく、断定はできないが16世紀代と考えられる。

SX4は一部調査区外となるため、落ち込み状の遺構としか認識できていない。SD9と関連があるとも想定するが、そのつながりの部分は農業用水が通っていたため明らかではない。遺物は13-4・5が出土し



第41図 SX1・2 実測図



第42図 SX3 実測図

表2 恒武西宮遺跡 壓穴住居跡・据立柱建物跡一覧表

壓穴住居跡

遺構名	旧遺構	図番	位置 (グリッド)	規模 (南北×東西) (m)	床面積 (m ²)	深さ (m)	棟方位	備考
SB201	SB1	17	B13.14	5.5×4.1～	22.55	0.08	N 9° W	一部検出できず

据立柱建物跡

遺構	図番	位置 (グリッド)	規模 (梁行×桁行) (m)	間数	規模 (m ²)	桁行方位	備考
SH1	27	D.E18	3.8×3.8	2×2	14.44	N 3° W	根石使用か
SH2	27	E18.19	6.0×9.4	3?×5	56.4	E 3° N	根石使用か
SH3	28	E.F18.19	3.5×5.1	2×2?	17.85	N 4° E	根石使用か
SH4	28	D.E19	3.7×5.8	2?×3	21.46	E 1° N	根石使用
SH5	29	E19.20	3.8×3.8	2×2	14.44	N 1° W	
SH6	29	D18.19	4.8×5.5	2×3	26.4	E 1° N	
SH7	30	D.E16	1.9×4.1	1×3	7.79	N 1° E	
SH8	30	D16	3.9×4.9	2×3	19.11	E 1° S	
SH201	13	C17.18	2.1～×6.0	1～×3	12.60～	N10° E	一部調査区外
SH202	13	D.E19	4.8×8.2	3×4	39.36	E11° S	
SH203	14	D20	4.5～×8.1～	2～×3～	36.45～	E 8° S	一部調査区外
SH204	14	F20	5.0×5.6～	3×3～	27.50～	E 5° S	一部調査区外 雨落溝?を持つ
SH205	15	E22	4.3×6.3	3×4	27.09	E 5° N	
SH206	15	E21.22	4.8×8.6	3×5	41.28	E 0°	
SH207	16	E21. E.F22	5.0×5.7～	3×3～	28.50～	N 2° E	一部調査区外

表3 恒武西宮遺跡 土坑・井戸・性格不明遺構一覧表

遺構名	旧遺構	大きさ(m)		平面形	遺構名	旧遺構	大きさ(m)		平面形
		長径	短径				長径	短径	
SF1	SF8	1.24	0.86	橢円形	SF48	SF218	0.40	0.46	橢円形
SF2	SF10	1.40	1.22	橢円形	SF49	SF217	0.52	0.56	円形
SF3	SF12	0.85	0.35	橢円形	SF50	SF35	1.60	0.66	不整形
SF4	SF23	1.22	0.88	不整形	SF51	SX6	2.22	2.18	方形
SF5	SF3	1.12	0.92	長方形	SF52	SX202	2.66	1.18	橢円形
SF6	SF9	0.76	0.68	方形	SF53	SX201	2.32	2.30	円形
SF7	SF7	1.14	1.04	不整形	SF54	SF14	2.20	1.12	長方形
SF8	SF11	0.92	0.72	橢円形	SF55	SF214	0.45~	0.15~	橢円?
SF9	SF6	1.38	0.80	橢円形	SF56	SID136	1.05~	0.70~	橢円?
SF10	SF38	0.80	0.64	橢円形	SF201	SF33	1.20	1.18	方形
SF11	SF20	0.66	0.60	円形	SF202	SX213	2.60	0.92	不整形
SF12	SF2	0.70	0.48	橢円形	SF203	SF31	1.12	0.62	不整形
SF13	SF5	1.50	1.18	橢円形	SF204	SF36	1.12	0.80	橢円形
SF14	SF21	1.48	0.64	長方形	SF205	SF39	1.10	1.08	方形
SF15	SF1	0.60	0.42	橢円形	SF206	SX212	2.04	1.86	方形
SF16	SF4	1.30	0.70	不整形	SF207	SF237	1.24	0.52~	不整形
SF17	SF22	1.56	0.68	長方形	SF208	SF234	1.10~	0.78	不整形
SF18	SF13	1.52	0.68	長方形	SF209	SP401	0.98	0.86	不整形
SF19	SF17	1.60	1.26	橢円形	SF210	SF225	1.00~	0.96	不整形
SF20	SF18	1.68	0.60~	不整形	SF211	SF233	1.22~	0.62	不整形
SF21	SF16	0.52	0.42	橢円形	SF212	SF235	1.16	1.10	不整形
SF22	SP60	0.98	0.56	長方形	SF213	SF232	1.58	0.80	長方形
SF23	SF27	3.42	0.90	長方形	SF214	SF229	1.44	0.48	橢円形
SF24	SF25	1.20	0.80~	方形?	SF215	SF230	1.18	0.98~	不整形
SF25	SF19	0.62~	0.62	橢円?	SF216	SX214	1.84~	0.88~	不整形
SF26	SF15	2.80	0.88	長方形	SF217	SF241	1.20~	0.58~	橢円?
SF27	SF26	3.10	1.28	長方形	SX1	SX16	4.55	4.20	橢円形
SF28	SF201	1.58	1.28	不整形	SX2	SX12	2.48	2.34	橢円形
SF29	SF223	0.98	0.56	長方形	SX3	SX3	6.08	1.92	長方形
SF30	SF206	1.00	0.40~	長方形	SX4	SX10	3.90~	2.64~	不整形
SF31	SP257	1.10	0.40~	不整形	SX5	SD1	10.80	1.94	不整形
SF32	SF24	1.80	1.20	長方形	SX201	SX13	3.20~	2.18	不整形
SF33	SF202	1.42	0.82	長方形	SX202	SX203a	3.30~	2.76	不整形
SF34	SF203	1.56	0.90	不整形	SX203	SX206	-	-	土器集中
SF35	SF205	1.02	0.66	長方形	SX204	SX4	1.82	1.42	焼土集中
SF36	SF216	1.02	0.72	橢円形	SX205	SX7	1.30	1.14	焼土集中
SF37	SF222	1.38	0.86	長方形	SX206	SX5	1.72	1.00	焼土集中
SF38	SF204	1.06	0.88	橢円形	SX207	SX203b	0.68	0.62	焼土集中
SF39	SF224	0.74	0.50	橢円形	SX208	SX215	1.22	0.70	焼土集中
SF40	SF220	0.96	0.52~	橢円形	SX209	SX1	(0.19~)	(0.17~)	長方形?
SF41	SF221	0.58	0.50	橢円形	SX210	SX207	0.80	0.54	焼土集中
SF42	SF212	0.86	0.40	橢円形	SX211	SX211	5.10~	0.62~	不整形
SF43	SF213	0.70	0.70	円形	SX212	SX2	(2.35~)	(0.90~)	方形?
SF44	SF219	0.74	0.58	橢円形	SX213	SX216	1.20	0.15	焼土集中
SF45	SF215	0.72	0.50	橢円形	SX214	SX9	-	-	焼土集中
SF46	SF211	0.50	0.44	橢円形	SE1	SX11	2.40	2.10	橢円形
SF47	SF210	1.20	0.74	橢円形	SE2	SX2	2.70	2.55	不整形
				SE3	SX1	2.70	2.60	橢円形	

表4 恒武西宮遺跡 清状遺構一覧表

遺構名	旧遺構	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	方向	遺構名	旧遺構	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	方向
SD1	SD60	8.8~	0.8	0.23	N17° W	SD213	SD83	3.8~	0.4~1.0	0.22	N33° E
SD2	SD72	5.2~	0.2~0.7	0.05	N7° W	SD214	SD79	4.4~	0.2~0.5	0.15	N22° E
SD3	SD56	12.8~	1.3	0.10	N18° W	SD217	SD124	3.0	0.4	0.12	N8° E
SD4	SD76	1.8~	0.4	0.17	N55° W	SD218	SD125	3.4	0.5	0.06	N10° E
SD5	SD81	4.0~	0.5	0.17	N91° E	SD219	SD126	2.7	0.4	0.05	N21° E
SD6	SD74	6.2~	0.7	0.15	N20° W	SD220	SD127	0.7	0.3	0.09	N28° E
SD7	SD78	7.4~	0.4~1.3	0.33	N74° W	SD221	SD128	4.1	0.5	0.10	N63° E
SD8	SD71	4.6~	0.4	0.09	N43° W	SD222	SD129	2.7	0.8	0.14	N73° E
SD9	SD73	8.0~	1.0~1.5	0.57	N47° ~ 東方向	SD224	SD133	10.8~	0.8~	0.21	N78° E
SD10	SD84	2.4~	0.9	0.18	N62° E	SD226	SD41	2.1	0.3	0.08	N8° E
SD11	SD70	2.8~	0.3	0.28	N77° W	SD227	SD143	5.1	0.4	0.11	N88° W
	SD132				N90° E~N3° E	SD228	SD139	1.2~	0.4	0.19	N87° W
SD12	SD134	43.0	0.6~1.2	0.38	~N79° E ~N4° E	SD229	SD130	5.9~	0.4~0.8	0.22	N88° W
	SD124					SD230	SD57	4.4	0.2	0.05	N80° E
SD13	SD138	0.4~	0.8	0.21	N90°	SD231	SD68	2.3	0.3	0.06	N89° E
SD14	SD2	11.9~	0.3	0.08	N88° E	SD233	SD108	1.0~	0.3	0.14	N72° W
	SD102					SD235	SD51	2.0~	0.5	0.20	N2° W
SD15	SD216	22.1~	2.7	0.25	N85° E	SD236	SD90	7.9	0.4~0.7	0.08	N88° E
SD16	SD201	24.6~	1.8~2.3	0.68	N88° E	SD237	SD35	1.5	0.4	0.09	N70° W
SD17	SD215	21.5~	0.8	0.34	N89° W~ N67° W	SD238	SD35	1.7	0.4	0.07	N75° W
SD18	SD210	16.4~	0.5~1.0	0.17	N90°	SD239	SD47	7.9	0.4	0.08	N76° W
SD19	SD211	4.6	0.5	0.12	N1° W	SD240	SD53	1.3~	0.4	0.14	N72° W
SD20	SD207	15.1	0.3	0.06	N87° W	SD241	SD52	0.8~	0.5	0.06	N63° W
SD21	SD212	5.2	0.3~0.6	0.06	M75° W	SD242	SD49	0.8~	0.5	0.06	N7° E
SD22	SD208	24.2~	0.7	0.41	N85° W	SD243	SD3	2.6	0.6	0.15	N7° E
SD23	SD209	7.2~	0.4	0.16	N85° E	SD244	SD91	5.0	0.3~0.7	0.11	N0°
SD24	SD202	21.4~	0.7	0.13	N86° W	SD245	SD26	7.5~	0.5	0.10	N6° W
SD25	SD75	4.0~	0.2~	0.07~	N30° E	SD246	SD92	7.0	0.3	0.07	N1° W
SD26	SD77	7.8~	0.3~	0.09~	N25° E	SD247	SD6	7.3~	0.4	0.09	N3° W
SD27	SD80	14.3~	0.8~1.4	0.18	N82° W	SD248	SD89	5.6	0.5~0.9	0.09	N7° E~ N33° E
SD28	SD109	22.6~	0.3~0.8	0.12	N78° W	SD249	SD140	4.8~	0.3	0.07	N10° W
SD29	SD135	3.6~	0.7~1.5	0.06	N4° W~ N60° W	SD250	SD29	0.9~	0.4	0.15	N7° E
SD30	SD20	29.2~	0.5	0.06	N81° W	SD251	SD112	5.2~	0.3~0.8	0.07	N1° E
SD31	SD19	12.0~	0.5	0.14	N80° W	SD252	SD114	0.9~	0.4	0.15	N7° E
SD32	SD119	3.9~	0.5	0.12	N18° E	SD253	SD86	5.6	0.5~0.9	0.09	N87° W~ N48° E
SD33	SD6	24.0~	12.0~	0.07~	N83° E	SD254	SD61	3.2~	0.3	0.07	N13° W
SD201	SD107	2.2~	0.3	0.10	N29° W	SD255	SD100	3.3	0.5	0.06	N19° E
SD202	SD105	6.1~	0.3	0.13	N29° W	SD256	SD69	1.2	0.3	0.05	N10° W
SD203	SD95	7.1~	0.4~0.8	0.15	N66° W	SD258	SD108	1.5~	0.4	0.06	N0°
SD204	SD106	3.6~	0.7	0.18	N71° E	SD259	SD66	2.6~	0.4	0.09	N66° E
SD205	SD96	8.0~	0.3~0.6	0.10	N79° W	SD260	SD110	1.1~	0.5	0.18	N33° E
SD206	SD123	1.8	0.4	0.07	N74° W						
SD207	SD137	2.1	0.6	0.08	N85° W						
SD208	SD131	3.1~	0.4	0.12	N70° W						
SD209	SD97	4.1~	0.7	0.12	N75° W						
SD210	SD98	4.6	0.5	0.12	N5° W						
SD211	SD82	4.5~	0.9	0.15	N75° E						
SD212	SX14	1.1	0.9~	2.90	-						

遭構名	旧遭構	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	方向	遭構名	旧遭構	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	方向
SD261	SD50	0.8~	0.4~	0.13	N2° E	SD297	SD227	2.0~	0.4	0.13	N68° W
	SD30					SD298	SD253	1.7~	0.3	0.11	N7° E
SD262	SD34	10.0	0.6	0.08	N15° W~N6° E ~N79° W	SD299	SD222	2.3~	1.0	0.22	N85° W
	SD99					SD300	SD228	7.6~	0.3	0.11	N90°
SD263	SD33 II	4.9	0.3~0.6	0.06	N17° W	SD301	SD233	1.5~	0.6	0.20	N15° E
SD264	SD32	1.9~	0.3	0.05	N86° E	SD302	SD223	11.2~	0.6	0.28	N66° W~ N83° W
	SD118					SD303	SD247	6.1~	0.4	0.12	N73° W
SD265	SD33	2.1	0.5	0.06	N59° W~ N86° E	SD304	SD224	11.5~	0.3~0.6	0.11	N74° W~ N88° E
SD266	SD48	1.7~	0.2	0.04	N2° W	SD305	SD235	8.6	0.5	0.15	N88° E
SD267	SD22	4.0~	0.3	0.06	N4° W	SD306	SD234	3.8	0.5	0.17	N54° W
	SD116					SD307	SD257	8.9~	0.3	0.08	N83° W
SD268	SD21	3.7~	0.3	0.03	N87° W	SD308	SD256	2.8	0.6	0.09	N19° E
SD269	SD45	3.6~	0.3	0.04	N19° E	SD309	SD225	13.3~	0.6	0.21	N81° W
	SD103					SD310	SD252	0.9	0.4	0.10	N32° W
SD270	SD25	4.7~	0.4	0.04	N3° E	SD311	SD251	3.9	0.4	0.08	N70° W
SD271	SD23	5.5	0.6	0.16	N16° W	SD312	SD206	2.5	0.4	0.06	N82° W
	SD87					SD313	SD255	9.3~	0.4	0.09	N85° W
SD272	SD24	7.4~	0.3~0.9	0.09	N9° E~ N85° W	SD314	SD204	4.5~	0.4	0.13	N5° W
	SD88					SD315	SD205	2.5~	0.4	0.12	N77° W
SD273	SD93	2.2~	0.5	0.12	N11° E	SD316	SD203	11.1	0.3~1.0	0.11	N 5° E~ N80° W
SD274	SD40	1.4~	0.5	0.08	N0°	SD317	SD213	1.7~	0.3	0.11	N76° W
SD275	SD39	4.4	0.4	0.08	N64° W	SD318	SD219	23.1~	0.4	0.09	N88° E
						SD319	SD250	3.7	0.4	0.17	N16° W
SD276	SD9					SD320	SD249	2.8~	0.4	0.06	N15° W
	SD64					SD321	SD217	14.0	0.5~1.2	0.20	N14° W
	SD101	6.6~	0.5	0.05	N0° ~ N48° W	SD322	SD245	9.0~	0.8~1.8	0.11	N12° W
	SD113					SD323	SD221	5.9	0.5	0.21	N11° W
	SD141					SD324	SD218	2.3	0.6	0.27	N0°
SD277	SD54	2.5~	0.5	0.10	N88° E	SD325	SD220	2.9~	0.4	0.06	N0°
	SD111					SD326	SD244	3.2	0.3	0.08	N10° W
SD278	SD62	2.1	0.3	0.06	N1° W~ N87° E	SD327	SD243	2.3~	0.2	0.07	N10° W
	SD63					SD328	SD240	6.8	0.5	0.07	N80° E
SD279	SD65	1.1~	0.2	0.07	N86° W	SD329	SD242	2.3	0.3	0.09	N2° E
SD280	SD18	2.5	0.4	0.09	N84° W	SD330	SD241	10.9~	0.3~0.7	0.13	N86° W~ N6° W
SD281	SD15	2.4	0.3	0.08	N72° W	SD331	SD249	1.6~	0.3	0.06	N10° W
SD282	SD31	3.0~	0.3	0.06	N90°	SD332	SD238a	5.4~	0.3	0.07	N86° W
SD283	SD27	5.4~	0.2~0.6	0.04	N71° W	SD333	SD238b	1.9~	0.4	0.07	N86° W
SD284	SD37	4.6~	0.6	0.11	N15° E	SD334	SD239	2.2~	0.6	0.11	N31° E
	SD94					SD335	SD246	6.9~	0.4	0.10	N83° E
SD285	SD16	4.5	0.5~0.9	0.11	N17° E~ N86° W	SD336	SD248	1.3~	0.5	0.12	N0°
						SD337	SD229	4.1	0.6	0.24	N2° W
SD286	SD14	3.3	0.3	0.05	N82° W	SD338	SD230	7.2~	0.6	0.09	N2° W
SD287	SD12	10.2	0.3~0.7	0.06	N89° E	SD339	SD237	4.7~	0.6	0.25	N10° E
SD288	SD11	9.8~	0.3	0.09	N88° W	SD340	SD236	4.8~	0.6	0.47	N14° E
SD289	SD46	1.1	0.3	0.10	N90°	SD341	SD231	7.4	0.7	0.27	N22° E
SD290	SD44	1.5	0.3	0.09	N90°	SD342	SD232	2.7	0.7	0.31	N10° E
SD291	SD13	3.0	0.7	0.13	N5° W	SD343	-	1.9	0.4	0.11	N72° W
SD292	SD10	4.5~	0.6	0.13	N43° E	SD344	SD2	4.45~	0.6	0.31	N58° W
SD293	SD36	1.4~	0.3	0.04	N14° E	SD345	-	2.1	0.7	0.10	N36° E
SD294	SD17	5.6	0.4	0.06	N83° W						
SD295	SD117	0.9~	0.7	0.16	N1° E						
SD296	SD226a	7.5~	0.5	0.26	N85° W						

た。4はぐの字形内耳鍋である。口縁端部は折り返され外側は突起状となる。口縁直下の内面には1対の内耳があり、粘土を貼り付けた後横方向の穿孔がなされる。調整について外面は斜め方向のハケ、底部はヘラ削り、内面はハケとナデの併用である。5は非クロクロ成形のかわらけである。外面未調整、内面ナデで他の非クロクロ成形かわらけと同様である。口径は推定ではあるが、8.3cmとやや小ぶりかと思われる。遺構年代はこれら遺物から16世紀代と思われる。

第4節 その他出土遺物について

①遺構外出土土器（第56～59図）

ここでは前節で述べることができなかつた遺構外からの出土土器のうち特徴的なものについて記述する。第三章第3節でも述べたようにIIA・IIB層中からは古墳時代中～後期の土器を中心として多量の土器が出土している。

14-1は灰釉陶器の手付小瓶である。把手、頸部から上は残存していない。この中には金属製品18-16・18と銭貨とみられる銅の破片が入っており、祭祀的な行為に使用した可能性もある。14-2～14は須恵器である。7世紀段階のものが多いが、4は8世紀後半、6・9・13・14は6世紀代のものと思われる。5は須恵器蓋としたが、口径が7.6cmと小さく坏蓋ではなく、壺などの蓋となる可能性がある。9は大型の有蓋高杯の坏部とした。内面にはヘラなどの工具による調整痕が確認される。全体的につくりは雑な感じを受ける。13は壺の口縁もしくは捏ね鉢と思われる。内面にはヘラ状工具による調整痕が残る。つくりが9と類似する。14は壺の口縁と思われ、外面は格子状、内面には同心円のタタキ痕が残る。かなり歪みが激しい。14-15～17は土師器の坏である。15は口縁端部が内彎し、16・17は外に折れる。14-18-21、15-1-11は土師器高杯である。いずれも5世紀中頃～後半に位置付けられよう。21はほぼ完形に近い。20・21ともに坏部の底部から体部の境には明瞭な稜があり、やや外反して立ち上がる。脚部はやや膨らみを持つ。20の裾部は緩やかなものに対し、21は強く屈曲する。15-8～11も20と同じく緩やかであり、15-2～7は14-21と同様に屈曲する。15-12～16は土師器小型壺である。13は頸部の屈曲がやや弱く、大きく開く。14は口縁部がかなり短い。15-17・18は土師器鉢である。17は把手付鉢と思われる。把手とその周辺のみの残存であるが、内外面の調整はハケでなされ、丹が塗られた痕跡がある。7世紀前半代のものであろう。15-19は土師器壺である。胎土がかなり精緻で、上部が残存していないが複合口縁の壺の可能性が高い。古墳時代前期に遡るかもしれない。16-1～5は土師器壺で、5世紀中頃～後半に位置付けられると考える。1～3は複合口縁の壺である。1はやや稜が鈍く、3は稜の部分が垂れ下がるかのような形態を示す。4・5は壺との区別が困難だが、外面の調整が壺と比べ丁寧なことから壺とした。16-6～11は土師器壺である。10は6世紀代となろうが、他は5世紀中頃～後半のものであろう。7は頸部の屈曲がやや弱く、外面のハケはナデ消される。9は胴部下半に煤がみられる。口縁部はやや外反し、胴部は梢円形に近いが丸みを残す。10は口縁がやや長く、外反する。胴部は肩が張らず、長胴化が著しい。

17-1～8は山茶碗である。1～4は高台も高く、12世紀前半のものであろう。3・4には高台底部に粗糞の痕跡が認められる。5～7はやや高台が低くなり、12世紀中頃～後半段階の遺物であろう。いずれも高台底部に粗糞痕がみられる。8は高台がほとんど潰れてしまっており、13世紀中頃に位置付けられよう。17-9～20は施釉陶器である。9は連房1～2小期の志野丸皿の口縁部破片で、17世紀前半頃の製品である。10は志戸呂産の鉄釉灯明皿である。灯芯を支える受けは細長い粘土板を貼り付けて製作されている。18世紀代の製品であろう。11は連房2小期の鉄釉灯明皿である。上に油皿を置いて使用された受皿であ

る。棟部は狭い切り込みがあり、ほぼ直立する。18世紀後半の製品であろう。17-12~14は天目茶碗である。12・13の高台は輪高台であり、胎土はやや粗で、灰色を呈する。いずれも初山窯（大窯3段階後期併行）の製品である。14の高台の断面は逆台形を呈する。連房4小期の製品と思われる。17-15~19は播鉢である。15・16は口縁部破片で、15は口縁に弱い緑帯が形成される大窯2段階、16はやはり緑帯がつくが、下方にはあまり伸びないことから大窯3段階の後半の製品と思われる。17・18は底部破片で、17は胎土がやや軟質である。櫛目は摩滅している。古瀬戸後IV期の製品と思われる。18は10~11本1単位の櫛目が確認できる。胎土は灰色を呈し、初山窯（大窯3段階後期併行）の製品と思われる。19は連房4小期の口縁部破片である。口縁がやや外反し、内面には稜が造り出される。17世紀末頃の製品であろう。17-20は鉄軸徳利の体部である。口縁と底部は残存しておらず、全体の形状は判然としない。胎土はにぶい黄橙色を呈する。初山窯の製品であろう。17-21は内彎形内耳鍋である。口縁上面にはナデによって面が造り出される。内耳は口縁と体部の境にある内面の稜直上に付される。17-22は貿易陶磁である。龍泉窯系の青磁連弁文碗の口縁部破片である。体部外面には錦連弁文が施される。13世紀後半~14世紀前半に位置付けられよう。

②金属製品（第60~62図）

恒武西宮跡から出土した金属製品は鉄製品、真鍮製品、銅・青銅製品、錢貨があり、図化できる個体のみ掲載した。鉄製品では武器（鉄鎌）、工具（刀子、鍔・鋸先）、建築材料（釘）、馬具（轡の引手の可能性がある）、その他用途不明品がある。真鍮製品ではキセル（煙管）が、銅・青銅製品では装身具（簪）が出土している。また、近世墓を中心として多数の錢貨も出土した。なお、金属製品が出土した遺構や遺物の法量は表6・7に記載している。

鉄製品

鉄鎌 細身の長頭鎌が出土している。茎間の形態からすると少なくとも2種類確認できる（18-9と18-10・11）。9は茎尻を欠損する片丸（鎌）造棘状闊柳葉形の長頭鎌である。鎌身関は無闇である。断面は、頭部・茎共に方形である。その形状から古墳時代後期~終末期に位置付けることができる。

10・11は頭部・茎の破片である。頭部は茎に向かって若干広がる。関は角関で、断面は頭部が横長長方形、茎が方形を呈する。包含層出土であり、かつ鎌身が欠損していることから時期や形状を断定できないが、中世の盤状鎌身の長頭鎌である可能性が高い。

刀子 18-14は関部の破片であり、両関である。棟側・刃部側とともに直角関である。断面は、刃部が三角形、茎は刃部側がやや幅の狭い長台形である。18-13・15・17は茎片であり、ともに茎尻に向かって先細りし、断面縦長方形である。18-16は刃部片（切先）であり、断面三角形を呈する。鎌は確認できない。18-18は茎片であると推測する。先細りする形状を示し、断面は長方形であるが、厚さが1mmと薄いため刀子と断定するのは躊躇する。16・18は先述したように、14-1の手付小瓶の中に入っていたことから、祭祀的な遺物の可能性もある。

釘 18-2は頭部がL字形に曲げられた釘であり、身部の断面は縦長長方形である。18-3は頭部がT字形の釘であり、断面横長長方形。身部の断面は方形である。

鍔・鋸先 18-8は断面がY字形で、図面左側が刃部を形成していること、図面右側下部のみが緩やかに広がることから判断して、U字形鋸先の破片である可能性が高い。内側（図面右側）には台木を受けるための溝（割り込み）が切られているが、溝を形成する技法は一枚の鉄板の鑄による溝切り技法か、2枚の鉄板を「沸かし付け」技法により鍛接したか判然としない（古瀬戸1991）。SD280から出土であり、古墳時代中期~後期に位置付けることができよう。

馬具 馬具の可能性のある鉄製品が3点（18-6）出土している。ここでは図上の位置関係から、上・中・

下として説明する。6（上）はX線写真では、図面上部に環状部分を確認できる。環状部分は外径2.0cm、内径5mmを測る。その断面は縦長長方形であるが、鋸化が著しく本来は内径がもう少し幅広いと考える。環状部分は棒状部分に対し、くの字形に曲げられる。棒状部分の断面は台形であるが、鋸化が著しく本来は方形であったと推測する。この鉄製品は環状部分を有すること、さらに環状部分はくの字形に折り曲げられることから、轡の引手（特に引手壺）の可能性がある。6（中）は断面が台形である6（上）と同様の部品と推測するが、6（下）と直接接合しない。6（下）は断面横長長方形であるが、6（上）と同様の鉄製品の破片である可能性が高い。

用途不明鉄製品 18-1は緩やかに彎曲しており、本来は環状鉄製品であった可能性が高い。この仮定が正しければ内径3.8cm、外径4.6cmと推測できる。断面は円形であり、直径5mmを測る。復原できる内径が狭すぎるため環状であっても鉄釘の可能性は低い。18-7はU字形の鉄製品であり、図面上部が欠損している。断面は縦長の長方形である。18-12（上）は上部を折り曲げて環状部分を形成する棒状の鉄製品である。断面は円形である。12（中）・12（下）も12（上）の近辺から出土し、断面の形状と直径が12（上）と同一であることから同一個体である蓋然性が高い。

真鍮製品・銅・青銅製品

キセル、簪とともに土葬墓に副葬されたものと推測でき、近世に位置付けることができる。

キセル（煙管） 18-5は真鍮製と推測する雁首・火皿であり、やくすんだ黄橙色を呈する。火皿内部には炭化物（刻み煙草か？）が残存している。厚さ1mm程度の銅版を円形に折り曲げて溶着したものである。かなり使い込んでいると見え、灰落としを繰り返したために上部が窪んでしまっている。18-19（上）は真鍮製のキセル吸口であり、やくすんだ黄橙色を呈する。厚さ1mm程度の銅版を円形に丸めて、接合したものである。18-19（下）は木製のキセルの羅宇である。縞状の紋様が確認できる。簪 18-4は青銅製あるいは銅製の簪である。最上部（頭部）は小筒状を呈し、その下部（身）には棘状の突起が確認できる。断面は円形を呈する。髪に挿す部分（脚）は二股に分かれている。

錢貨

錢貨は近世墓から出土した寛永通寶が大半を占める。図示できない小破片と化したものも多数にのぼる。寛永通寶は鋳造年代により3期に区分がなされる（永井1996）。それによれば1期は寛永13年～万治2年（1636～1659）、2期は寛文8年～天和3年（1668～1683）、3期は元禄10年～延享4年（1697～1747）に区分される。1期のものは古寛永、2期以降を新寛永と称するが、2期は特に背に「文」字が入るため文錢と呼ばれる。図示した寛永通寶のうち古寛永は6点、新寛永は不明確なものも含めて28点で、うち文錢は3点である。これらは近世墓と思われるSF12・41・42・43・45・46・47から出土したいわゆる六道錢と考えられる。被熱しているものが多く、おそらくは火葬によるためと考えられる。20-6はこれら寛永通寶とともにSF46から出土した北宋時代の熙寧元寶である。やはり火を受けた痕跡がある。なお、SF12の出土錢の中には鉄錢と思われる寛永通寶の破片も含まれていた。20-16～18はいずれもSD30から出土した遺物である。16は明代の永樂通寶、17は天聖元寶、18は元祐通寶でいずれも北宋錢である。SD30出土の錢貨もすべて被熱しているようである。

③石製品（第63～65図）

恒武西宮遺跡からは、石製品は全295点が出土している。本来石製品ではないが、便宜上ガラス丸玉2点についてもこの項で述べる。石製品は紡錘車1点と砥石7点以外の287点はすべて石製模造品（玉類を含む）である。種別としては劍形石製品（以下、～形品と略称）4点、有孔円板2点、勾玉6点、管玉3点、白玉272点がある。しかし、一覧表（第8表）に明記したとおり、遺構に伴って出土したものは一部のみである。大半は白玉の集中する範囲で行った調査区排土の水洗によって確認したものであ

る。これら石製模造品の石材は蛇紋岩、滑石片岩、滑石の3種類にほぼ限定される。伊藤通玄氏のご教示によれば、当遺跡周辺でこうした石材を产出するのは天竜川の支流阿古川流域の浜北市と天竜市の境付近であるという。しかし、現地で石材入手したのか、下流に流されてきた石材を利用しているかにわかには判断できない。計測値等の詳細は一覧表に譲ることとし、以下製作技法を中心に記述する。一覧表において（ ）内の数値は、現状での遺存値を示す。

剣形品（21-1～4） 1は切先部破片、2は基部破片である。接合はしないが、同一の特徴をそなえる。錐は造り出さず、両面とも平坦である。全体に研磨される。刃部は角度を変えて削り出し、その上に研磨を重ねる。側面も同様に研磨を施すため、非常に狭い平坦面を有する。2の基相当部は両側面を斜めにカットし、ほぼ中央に緒貫孔を穿つ。

両者とも黄灰色の結晶片岩を使用しており、さらに厚み・調整技法の近似することから同一形式のものと推測され、図のように上下に並べた形が本来の形態であると判断できる。

3・4は不完全な三角形を呈するが、1箇所のコーナーが弧を描くのが特徴である。錐はつくり出さず、両面とも平坦に研磨される。刃部は造り出さない。側面は各辺に沿う方向へ削り出し、平坦に仕上げる。したがって、断面は長方板状を呈する。茎に相当する部分は表現しない。この両者は一見すると勾玉の頭部破片のようにも見えるが、3の側面には、鉄製工具で割りを入れ、その結果下半部が分裂した痕跡を明瞭にとどめており、略方形に造り出した板の一部を切り取ることで成形したものと判断できる。したがって、従来からの形態解釈に従う限り、剣形品の一種と推定する。

有孔円盤（21-5・6） 両者ともに中央部に最大厚をもち、縁部に向かって若干厚みを減ずる。5の側面は、表・裏面より中央へ向かって削り出し、結果として鈍い稜を有する。6は中央と縁部の厚みの差が大きく、側面は一方向の削りによって成形される。したがって非常に狭い平坦面を有する。両者とも2箇所に緒貫孔を設けるが、5は貫通しない緒貫孔の痕跡を1箇所観察できる。

勾玉（21-7～12） 大型品3点（7～9）および小型品3点（10～12）である。前者は全体に研磨した後、内側面を抉るように削り取るが、その際円弧に沿った方向へ工具を移動している。8では削り出した痕跡を明瞭にとどめているが、逆に工具の移動がスムーズに行えず、移動方向と直行する傷を残す個体もある（7・9）。外側面も同様に、円弧に沿う方向へ削り出す。したがって、断面はいずれも長方板状を呈する。小型品（10～12）は、外表を入念に仕上げており、調整痕を留めていない。したがって、技法という面では不明である。いずれの個体も、加工時の擦痕を留めていたり、不自然なほど小さいことから、装身具としての勾玉ではなく、勾玉形の石製模造品であると推測できる。

管玉（21-13～15） 13および15は両端面より緒貫孔を穿孔するのに対して、14のみ片面からの穿孔である。外表は風化が進行しており、調整痕の観察は困難である。緑灰色の結晶片岩を使用する。装身具か模造品かを判断する根拠が明瞭ではないが、勾玉と石材が類似することから、同様の意図をもって製作されたものと考える。

臼玉（21-16～22-272） 総数272点を確認し、この内257点を図示した。図示した白玉に関しては、形態を観察すると、断面形状に基づいて以下のように分類できる。すなわち、A：側面に稜を有し、算盤玉状を呈するもの、B：側面に膨らみを有し、樽状になるものの、C：側面が直線的であるものの三者である。さらに、調整技法の面では側面に遺存する擦痕の状態が同じく3通りある。すなわち、I：上・下端面より中央に向かって加工するもの、II：上端面から下端面へ（またはその逆）一方向の移動で加工するもの、III：横方向への加工を重ねるもの、という三者である。

断面別にみると、Aに対してI技法が93.3%を占めており、II・III技法はほとんどない。Bに対して

はⅠ技法が71.7%と大半であるが、Ⅱ技法が10.0%と若干数存在する。また、Cに関しては判然としないものが多いが、技法の判明する中ではⅡが68.9%と大半を占める。この結果から、Ⅲ技法はあくまで偶発的なもので、技法の一種として確立されたものではないと考え得る。また、AとⅠ技法の相関性が高いのは稜を造り出す意識が明瞭に働いていたことを示しており、さらに縦方向へ工具を移動するⅠ・Ⅱ技法が卓越することは、円筒状の製品を分断したのではなく、一個体ずつ小片から製作したことを示している。

紡錘車（22-275） 上・下端面は研磨を施し、側面は削り出した痕跡が明瞭に残る。形態上は通有の紡錘車と変化なく、実用品の一種と捉え得る。

ガラス丸玉（22-273・274） 石製品ではないが、玉であることから便宜上この項にて述べる。ガラス丸玉は2個体のみ検出されている。いずれも埴土中より、白玉に混在する状況で確認しており、遺構に伴う形では確認されていない。273は孔と平行に伸びる気泡が観察できる。両個体とも淡い青色を呈しており、ソーダガラス製と判断できる。

砥石（23-1～7） 7点の砥石が出土した。その形状や大きさから持ち砥石としての使用が想定される。石材は2・4～7の流紋質凝灰岩が5点と多く、1の珪質安山岩、3の凝灰質頁岩とともに比較的緻密で平滑なため、仕上げに使用されたと考えられる。1は四面が使用されているが、平滑な部分だけでなく砥ぎによってできた2条ほどの凹面が確認できる。3・7は遺存する面は非常に摩耗が進み、研ぎ減りが著しい。研ぎ面のカーブの状態から、ほぼ中央で欠損したものと判断できる。反対側の端部は遺存しないため本来穿孔があったかどうかは不明であるが、法量が小さいことから提げ砥石という可能性もある。

④土製品（第66図）

土製品は漁労具である土錐が図示したものだけでも30点出土した。中世後期の遺構からの出土と遺構外からの出土が大半を占め、いずれも管状の土錐である。24-1・13・17のように大型のもの、24-3・8・16・28・29・30のようにやや短いもの、その他は両端がややすぼまる細長い形態である。重さは大型の1・13・17が10gを超える以外は3～8g台である。おそらくは天竜川とその支流となる小河川における漁労の際、網の錐として使用されたと思われる。SX1・2、SD12から集中して出土しており、この時期における集落の住人が漁労に関わっていたことを示すものであろう。31は輪の羽口の一部である。推定では径4.65cm程度の円筒形を呈すると思われる。かなり熱を受けた痕跡があり、一部に鉄滓と見られるスラッグ状の物質が付着する。前述のように小穴は年代の特定が困難だが、おそらくは古墳時代のものと推定される。32・33はいずれも近世墓であるSF12から出土した。型づくりによって製作された人形の頭部と狛犬である。副葬品であろう。34は上部に穿孔される土玉のようなものかと思われる。35は紡錘車である。下端面、側面には顕著にハケメを残している。穿孔は上から下に向かって施すと見られる。垂直に貫通するのではなく、斜行していることから、紡錘車として正常に機能するかどうかは疑問もあるが、土師器的な胎土・焼成の特徴から、実用品と捉える。

⑤木製品（第67図）

恒武西宮遺跡は基本的には土壤の性質上、木製品はほとんど遺存していないかったが、検出した遺構のうち、湧水を伴うほど深く掘り込まれた井戸か井戸と推定される遺構にのみ木製品が残存していた。以下出土遺構ごとに遺物概要を記す。なお、木製品に関しては中川律子氏（静岡県教育委員会文化課）に実見していただき、ご教示を得た。

SE1

図示したのは25-1の用途不明木製品1点のみである。厚さ0.2cmのヒノキの柾目材を薄板に加工し、

下端部は細く尖る。小片のため全体の形状は明らかでないが、塔婆の一部とも考えられる。

SX3

25-2・3は栓状木製品、25-4は曲物、25-5は用途不明木製品である。

25-2・3は栓と思われる木製品である。2はアカマツの割材を粗く削り、下方に向かい細くなる。表面の加工痕は顕著に残存している。3はツブラジイの芯持材でつくられた製品で、表面には樹皮が残存している。上端は丸みを帯び、直径2.6cmを測る。下半部を削って下端に向かい細くしてある。表面には加工痕が残る。25-4は曲物である。厚さ1.5cm、直径が約20cmの正円形を呈する。別々につくられた半円形の板同志を2本の木釘によって固定している。木釘は約3mm角のもので、X線観察の結果、4cm以上の長さがあることが解っている。側面形態は直角で、側面には特に木釘などの痕跡は見られない。曲物の底板とも考えられるが、側面に側板を固定した痕跡が見られないことから、桶底もしくは蓋等の用途も考えられる。25-5は用途不明木製品であるが、下端部を尖らせてある形状から塔婆の一部と思われる。本遺構から出土した木製品は、曲物・栓等を見る限りでは日常的な生活用具である。塔婆をはじめ、この遺構の遺物は近世長福寺に伴うものと予想される。

SX1

25-6・7は曲物、25-8は木筒、その他25-9～16は用途不明木製品である。

8は赤外線観察で両面に墨痕が確認できるものの判読不明である。そのため製品の上下も不確実である。材質はヒノキの柾目板である。形状は幅2.5cm、表面はやや膨らみを持つ板材で、下端部は浅いV字状に加工されている。塔婆の可能性もある。

6はヒノキ板目材を使用した円形曲物の底板である。中心部位ではないが復原直径は約20cm程の底板であろう。側板が装着される面には木釘の痕跡が2箇所ある。上部に一部木釘が残存しているが、直径3mm、約3cmほどの長さがあったと思われる。両側面の割面は欠損によるものであろう。7は小片であるが、表面に斜格子状のケビキが残存していることから、曲物の側板と思われる。こうした曲物容器は、8世紀以降ごく一般的に見られる「底板側面は上下面と直角をなし、側板下端内面を底板側面にあて、外側から木釘で固定する。」（上原1994）ものであり、日常的な用途で用いられたものであろう。

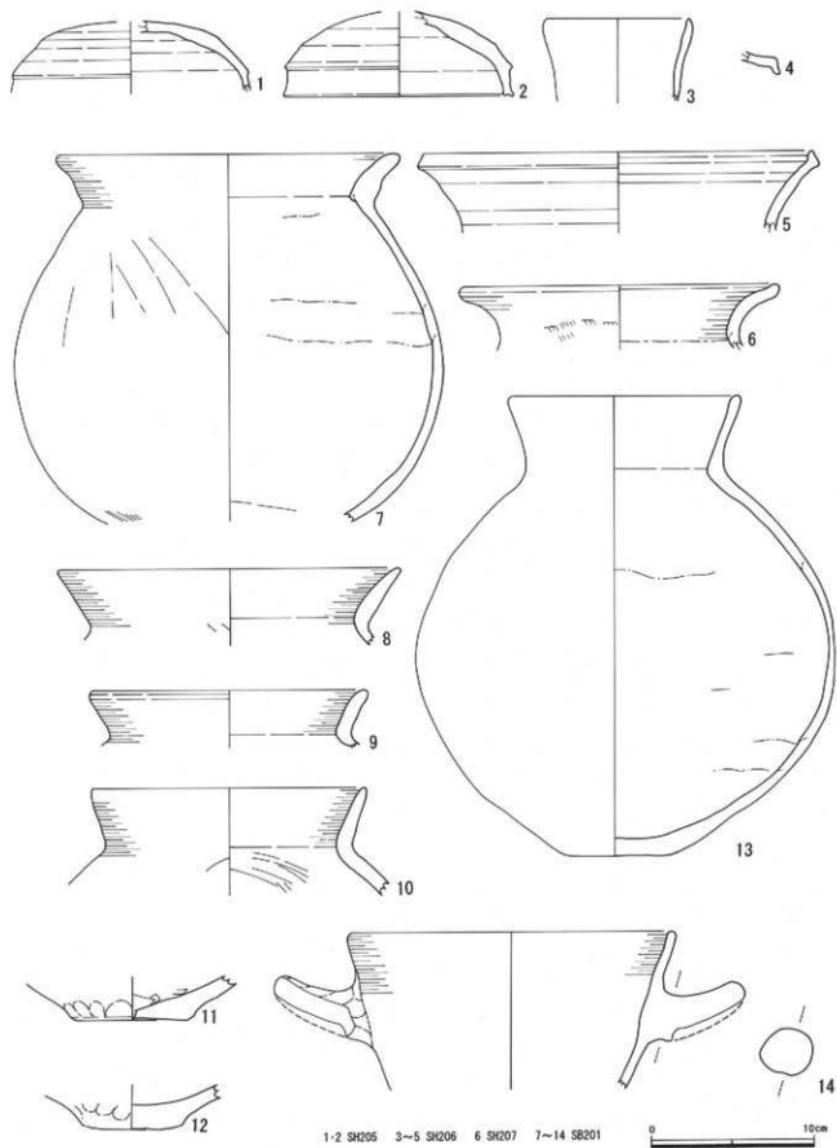
12・13はヒノキの板材である。いずれも人為的な加工はあるものの、用途の特定できない不明品である。12は木表面が著しく風化した柾目材である。両側面と下端部は加工されている。13は左側面と下端部に加工の痕跡が残る。木表面は平坦ではなく丁寧な表面調整は見られない。

25-9～11・14～16は、全面に加工された痕跡を残すものの、製品として加工されたものではなく、端材と思われる。15はスダジイ材、9～11・14・16はヒノキ材である。9・14・15は、小口面側を三方又は四方から鋭利な刃物で切断され、残った中心部分は折り取られている。木表面に平坦に整形された面を持つものは少なく、材を分割した際の割面がそのまま残っている。15は上端部に幅1.6cmの方形孔の痕跡が残存している。ヒノキ材を多用していることからも、建築用材の端材とも考えられる。

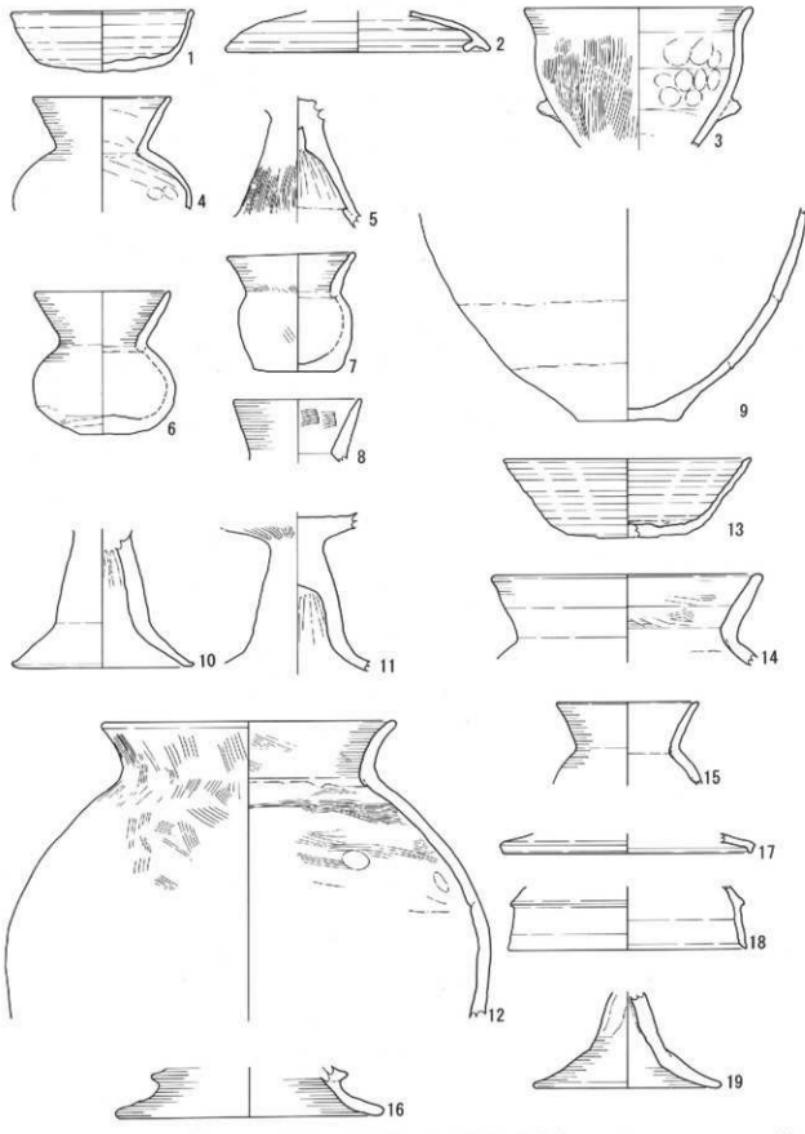
SX2

25-17はヒノキの柾目材を使用した用途不明木製品である。裏面は発掘時に損傷したものだが、もともとは四面とも整形されていたものであろう。上下両端は鋭利な刃物で切断された痕跡がある。SX1出土木製品に見られるような端材と思われる。

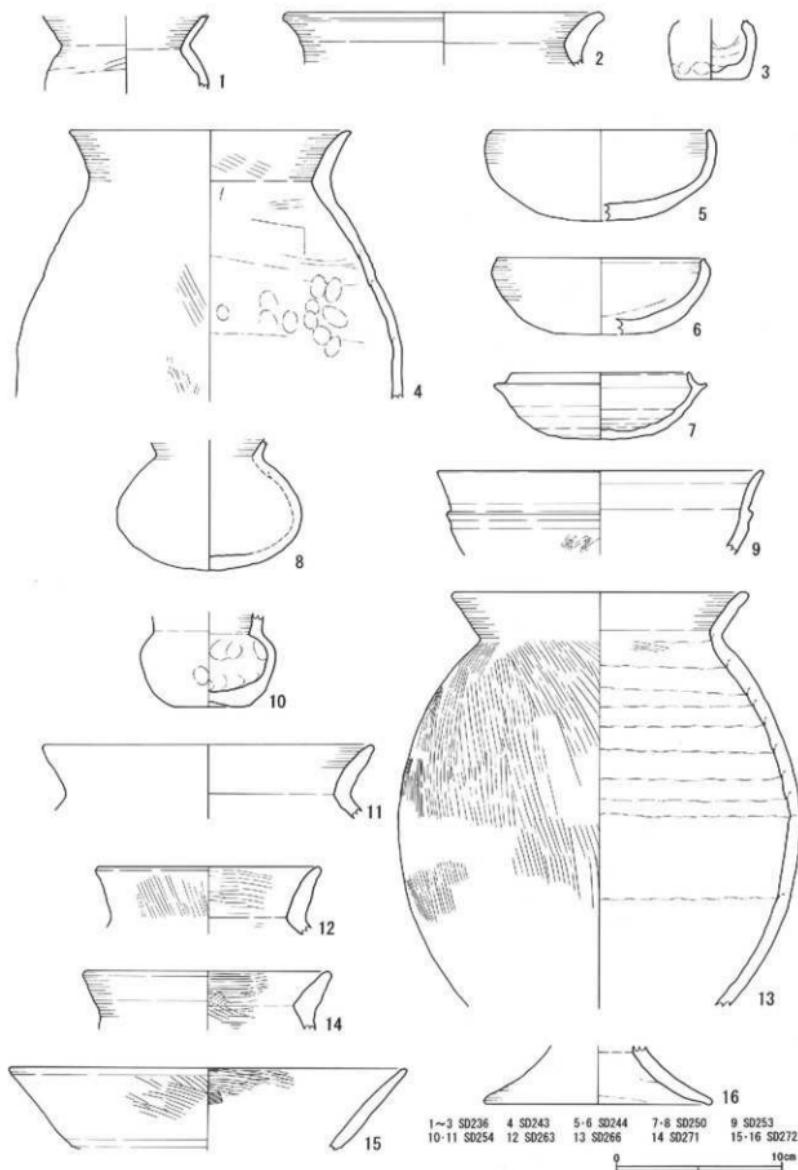
以上、遺構ごとの遺物概要を述べた。いくつか特徴的な部分をまとめてみると、木製品全体の材質は、スギ・ヒノキ材といった針葉樹材を多用していることがあげられる。また、当遺構から出土した木製品は、集落遺構に近い井戸遺構から出土したこともあり、生活用具を中心とした製品が多い。ただし井戸という遺構の性格柄、塔婆等は「井戸神様」を祀る矢崎遺跡（埋文研2001）、土橋遺跡（菊川町2001）などで見られるような、信仰を象徴する出土遺物がみられることは特筆すべきであろう。



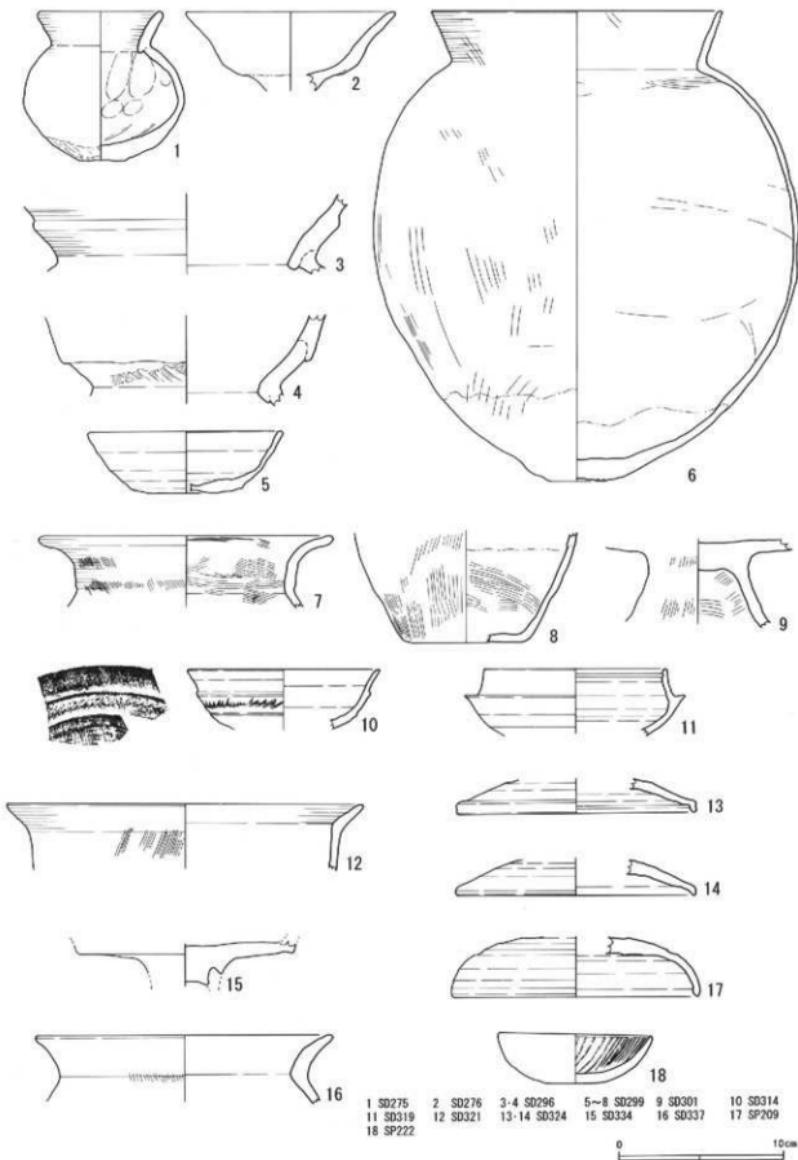
第43図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(1) 第2面遺構出土土器



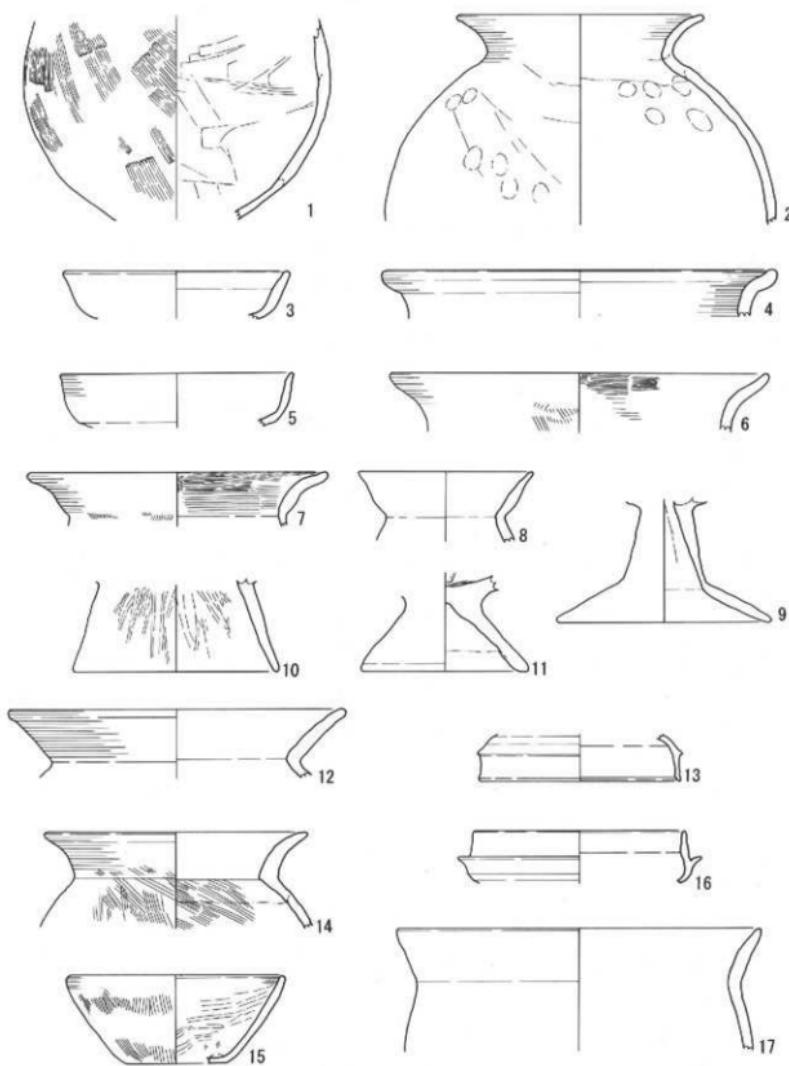
第44図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(2) 第2面遺構出土土器



第45図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(3) 第2面遺構出土土器



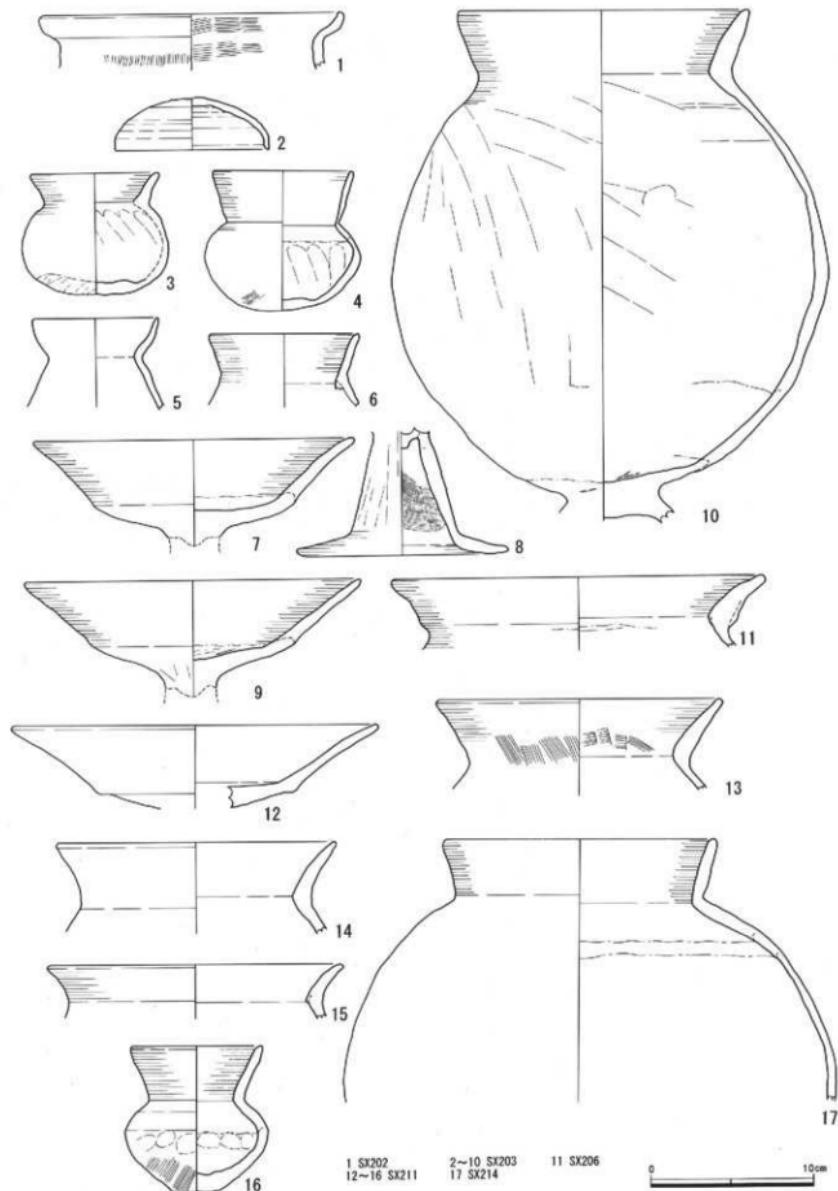
第46図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(4) 第2面遺構出土土器



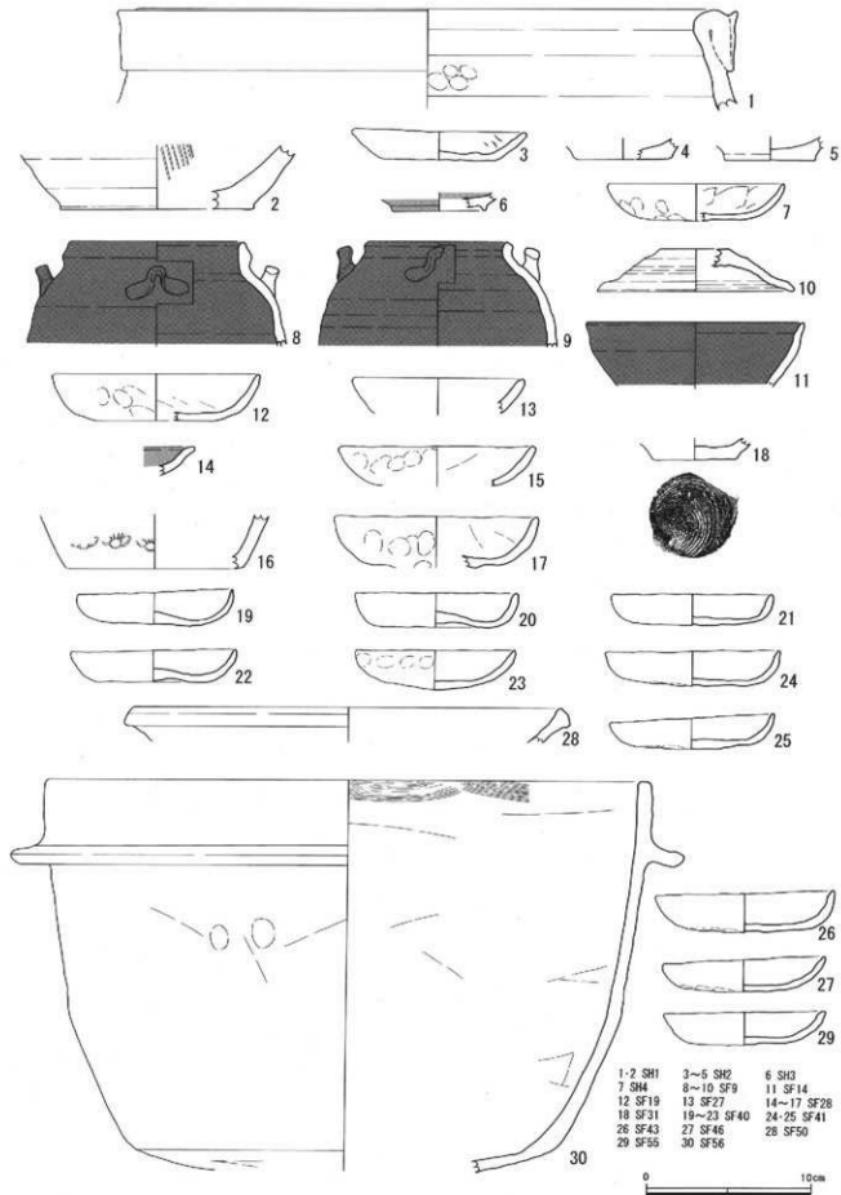
1 SP261 2 SP262 3 SP273 4 SP282 5 SP289
 6-7 SP328 8-9SP322 10 SP338 11 SP350 12 SP415
 13 SP425 14 SP434 15 SP400 16 SP444 17 SP464



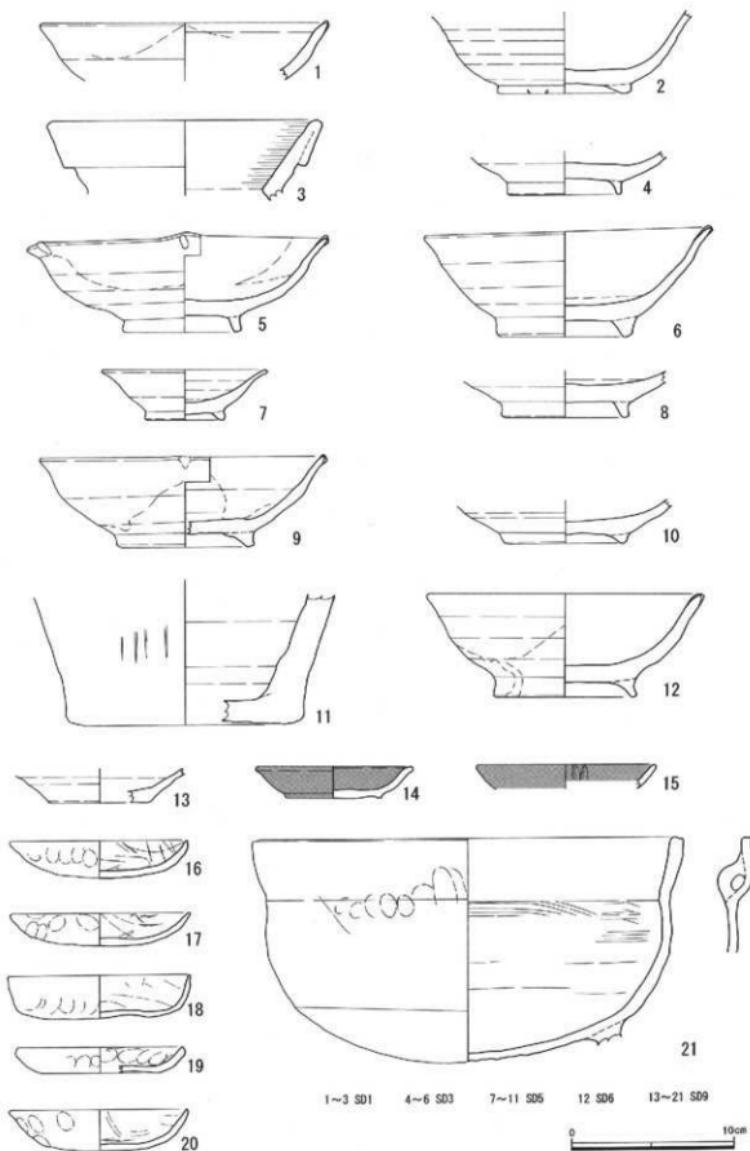
第47図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(5) 第2面遺構出土土器



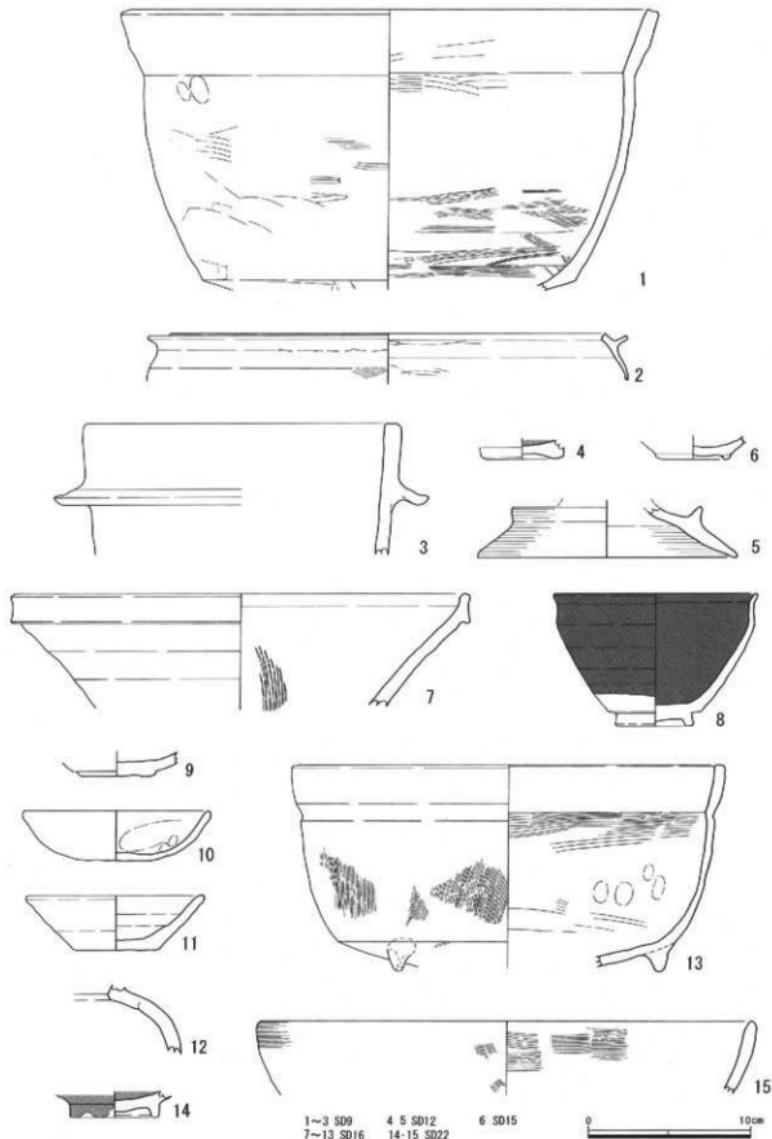
第48図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(6) 第2面遺構出土土器



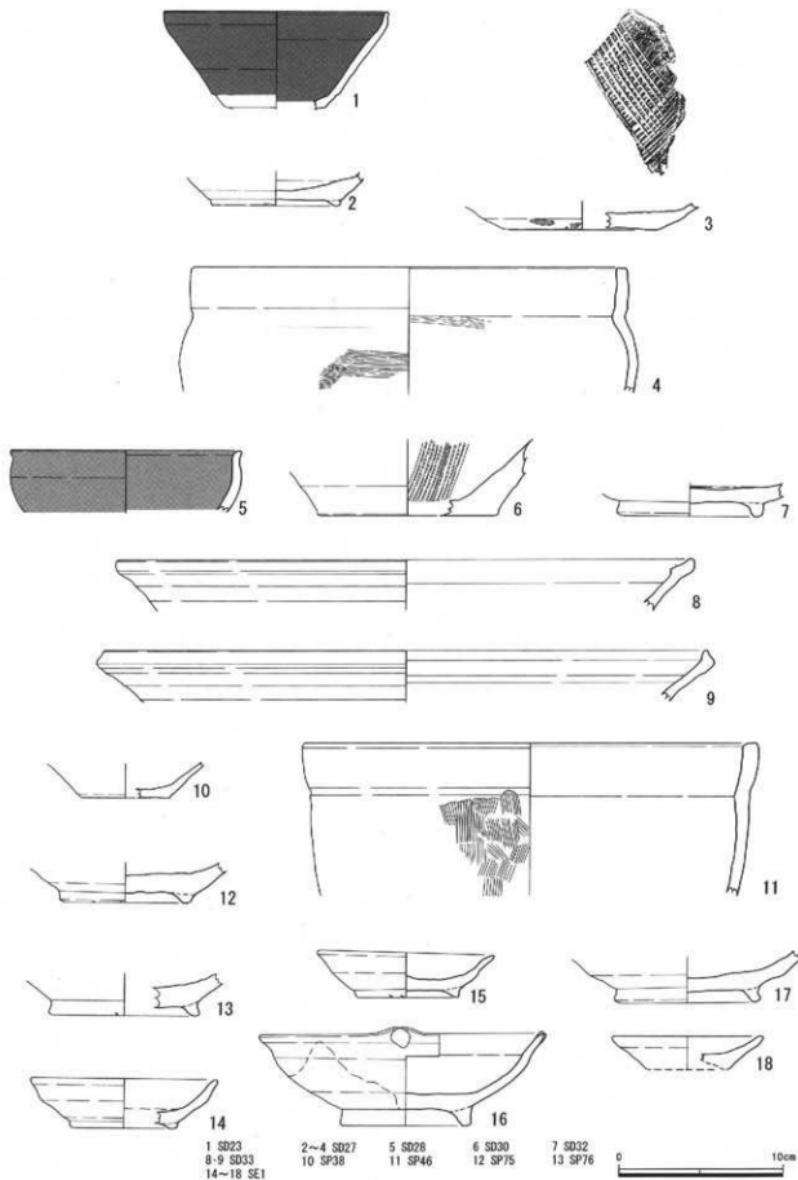
第49図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(7) 第1面遺構出土土器



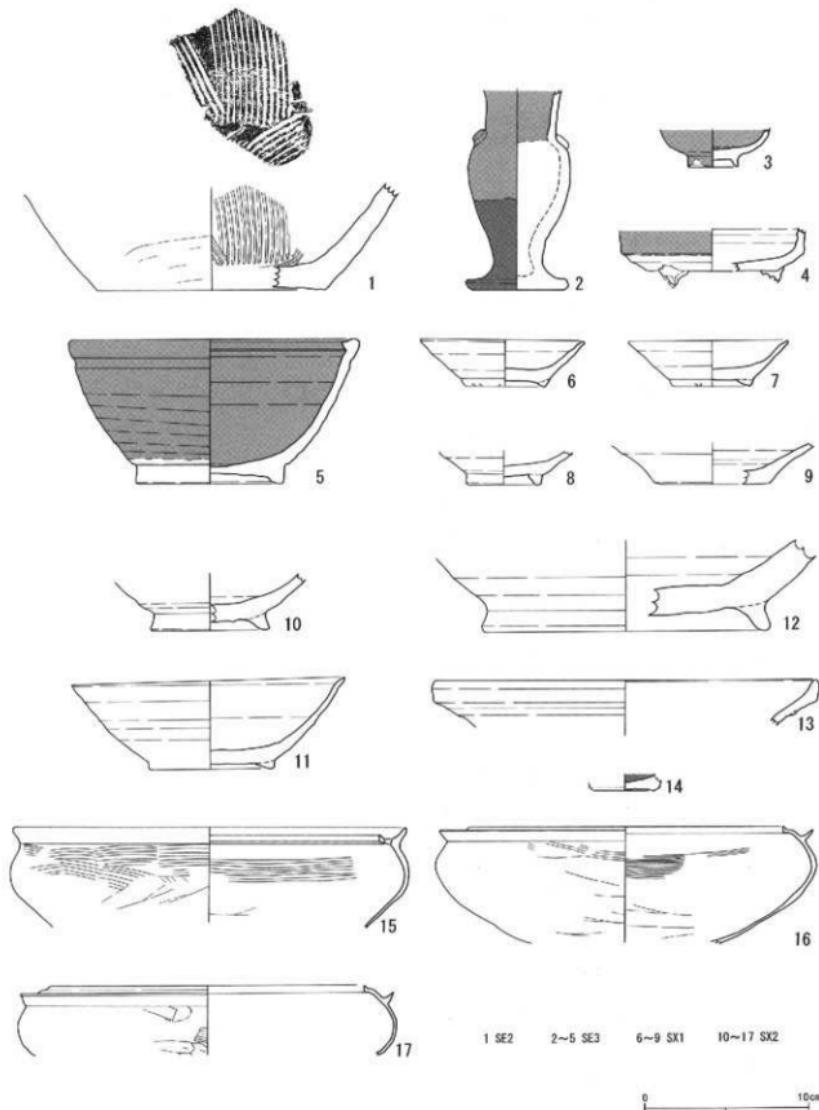
第50図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(8) 第1面遺構出土土器



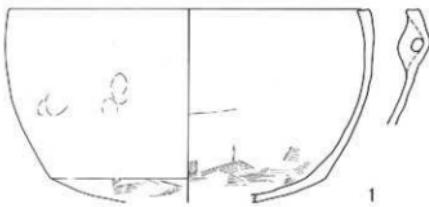
第51図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(9) 第1面遺構出土土器



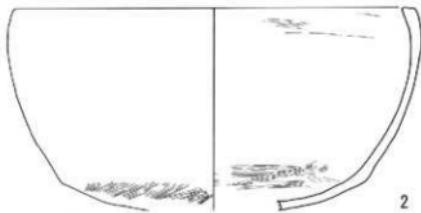
第52図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(10) 第1面遺構出土土器



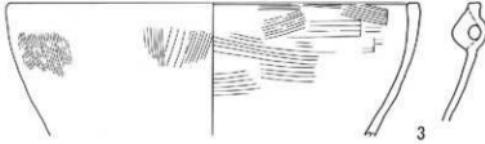
第53図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(11) 第1面遺構出土土器



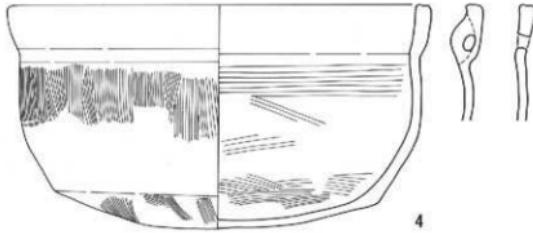
1



2



3

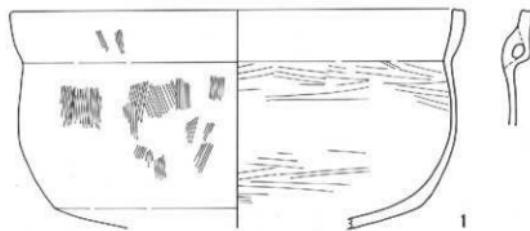


4

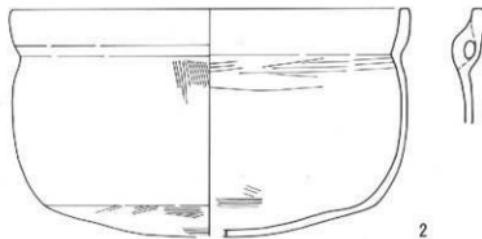
1~4 SX2



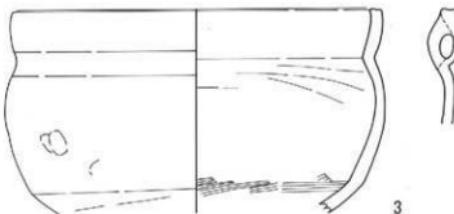
第54図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(12) 第1面造構出土土器



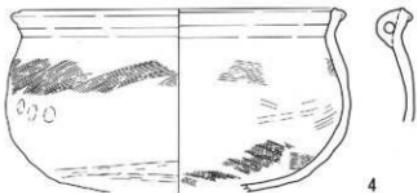
1



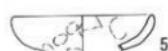
2



3



4

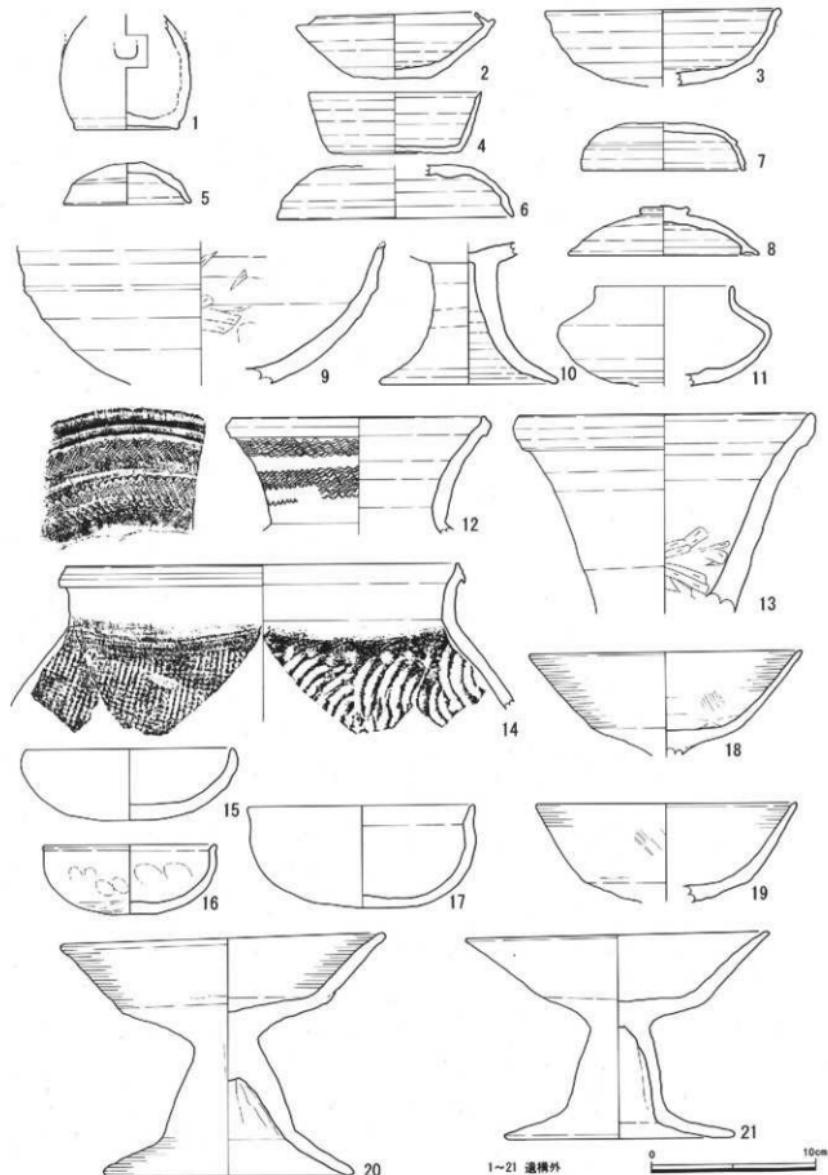


5

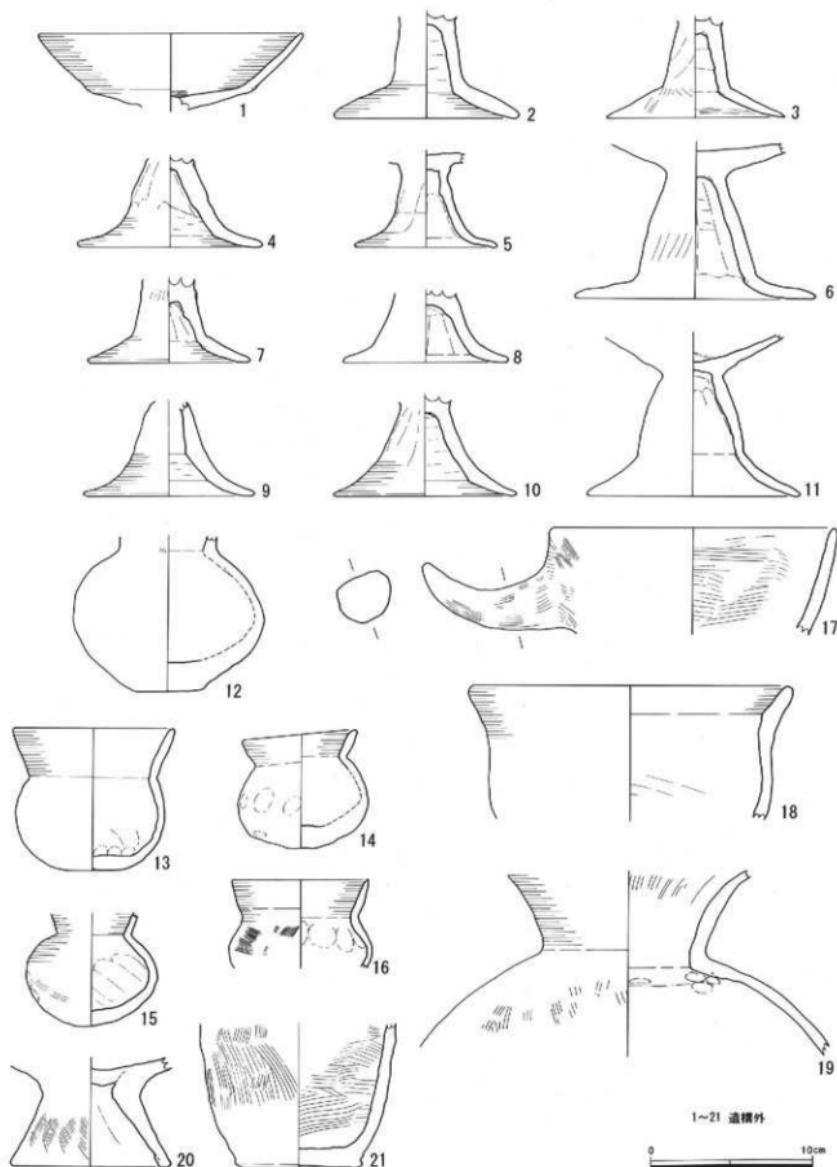
1~3 SX2 4~5 SX4



第55図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(13) 第1面遺構出土土器



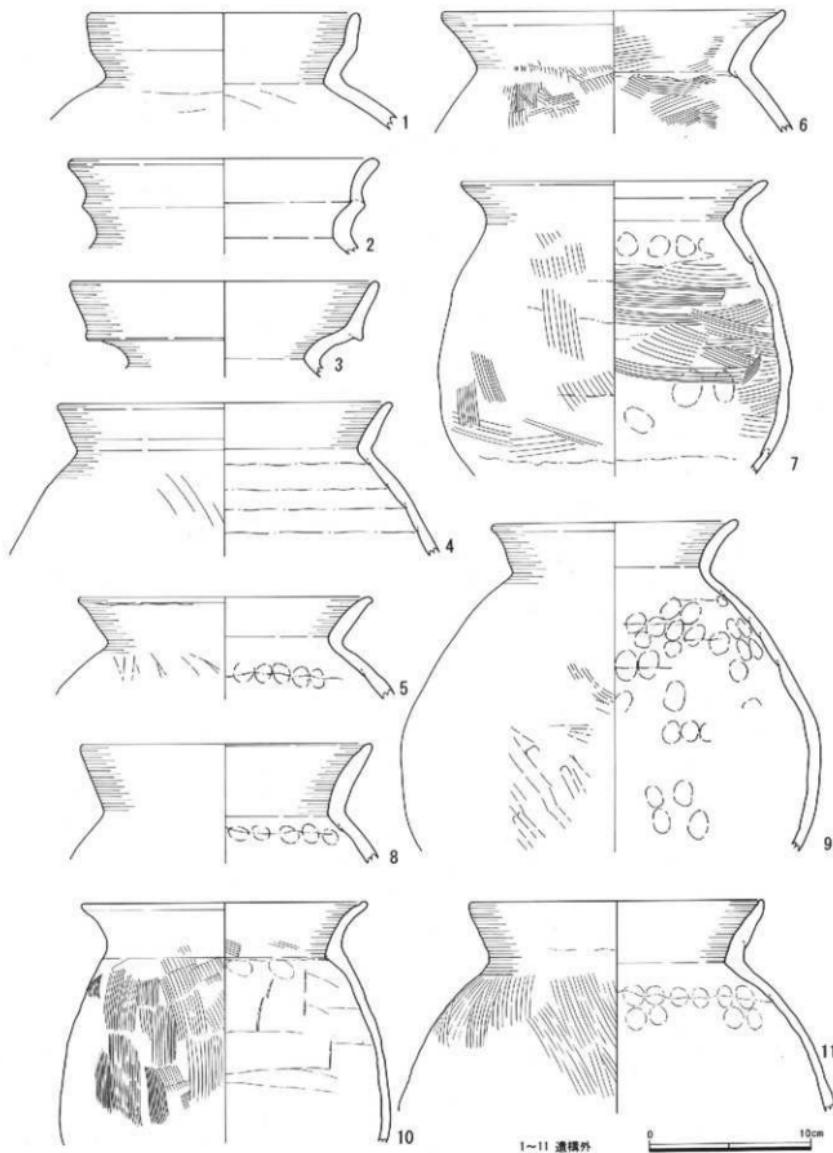
第56図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(14) 遺構外出土土器



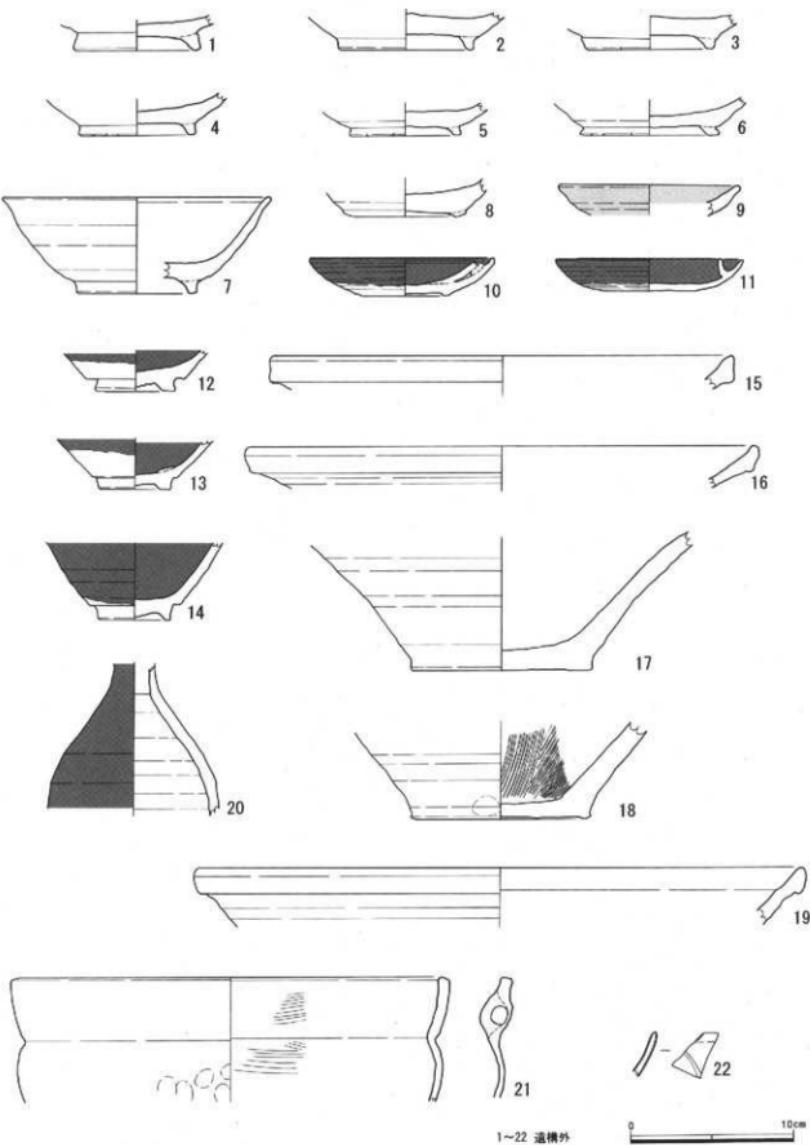
第57図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(15) 遺構外出土土器

1~21 造構外

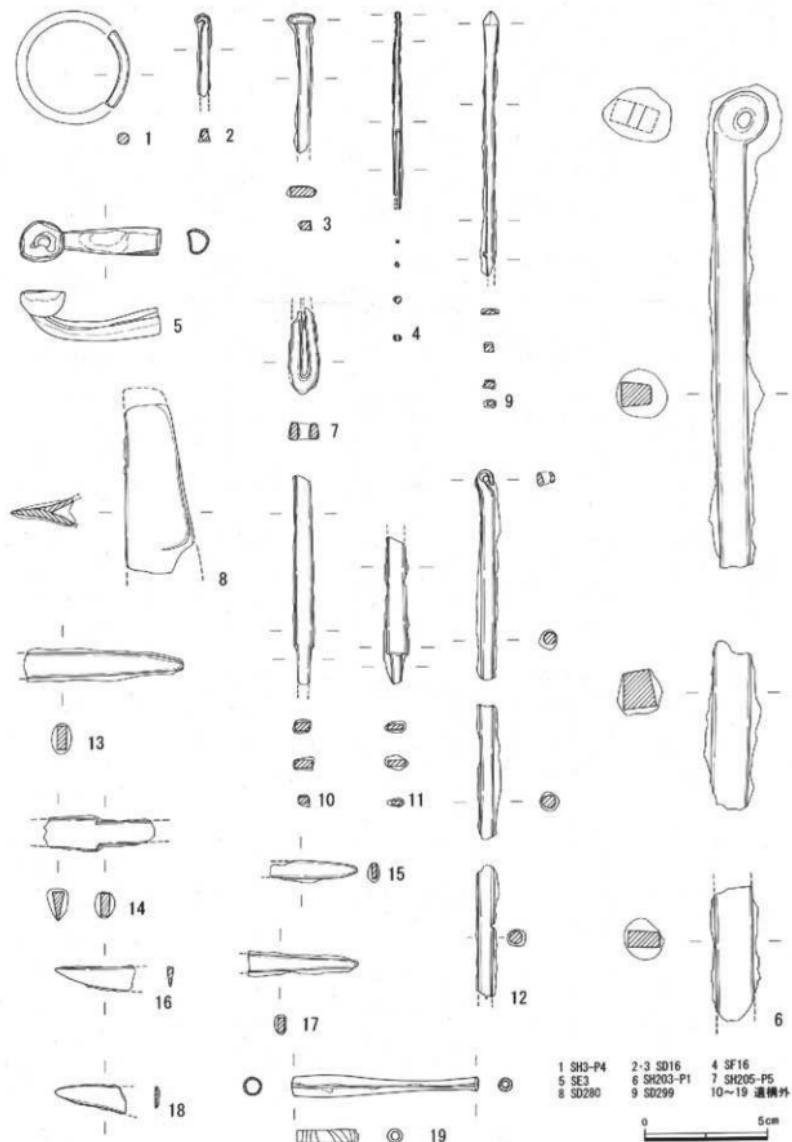
0 10cm



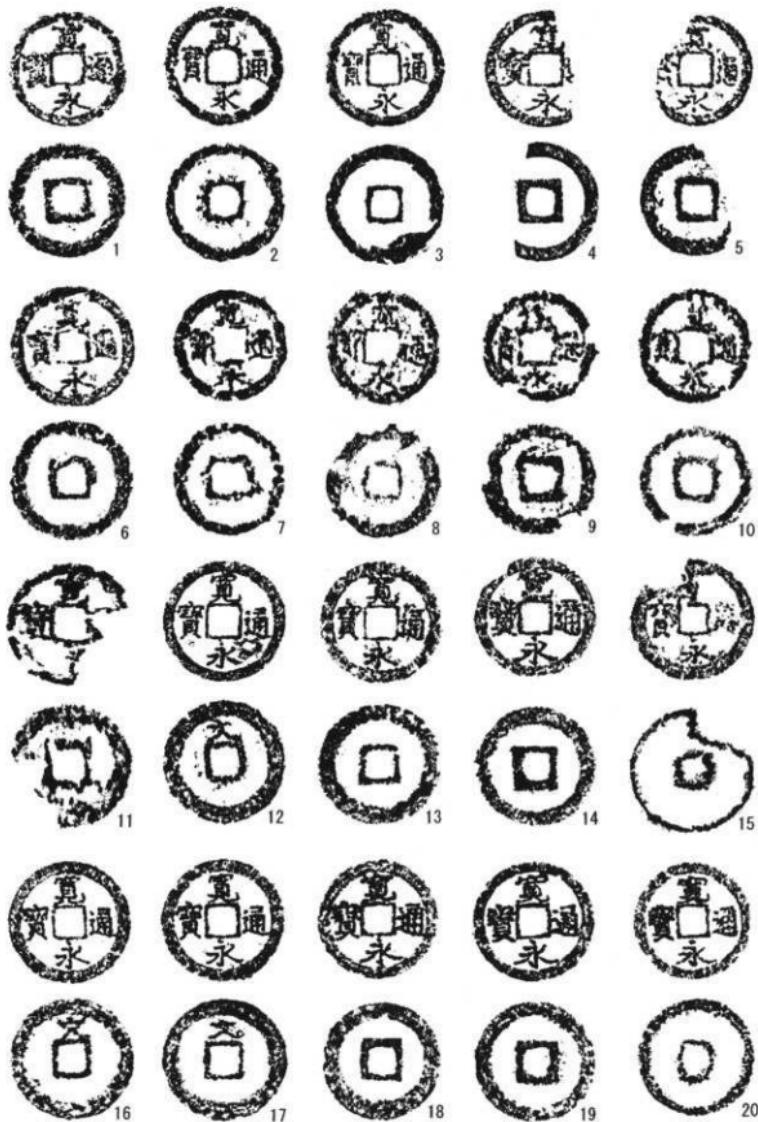
第58図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(16) 遺構外出土土器



第59図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(17) 遺構外出土土器



第60図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(18) 金属製品



1~5 SF12

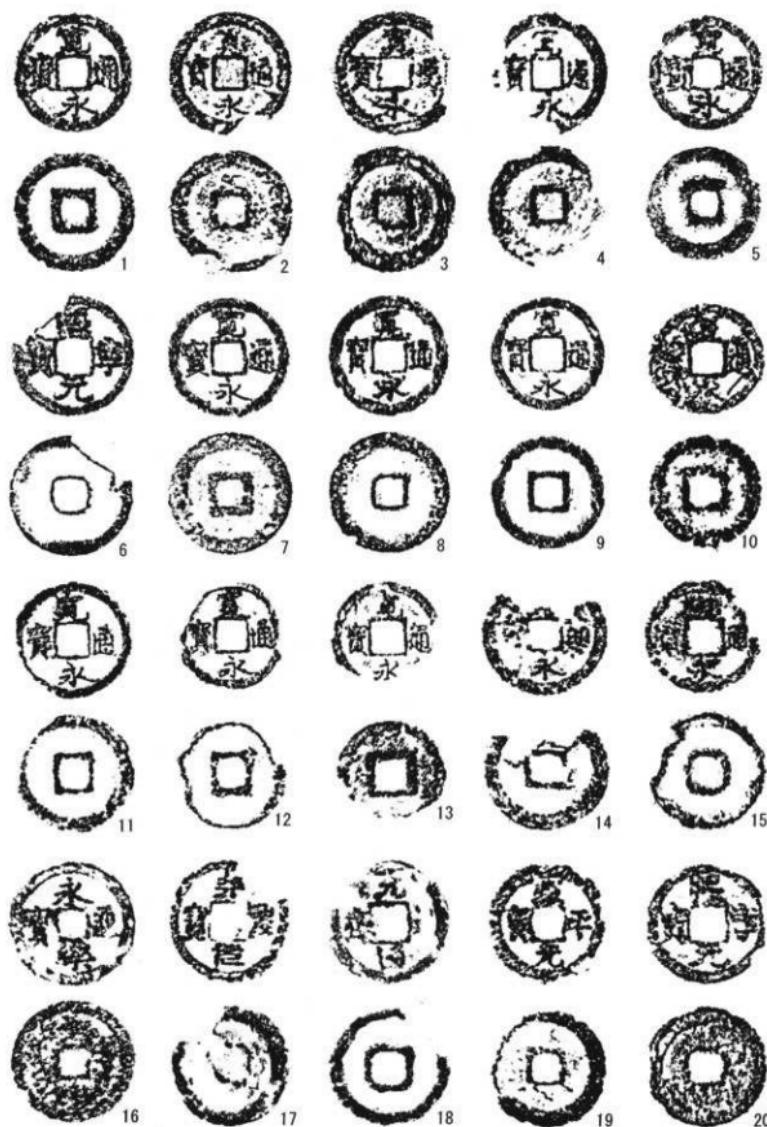
6~11 SF41

12~15 SF42

16~20 SF43

0 3cm

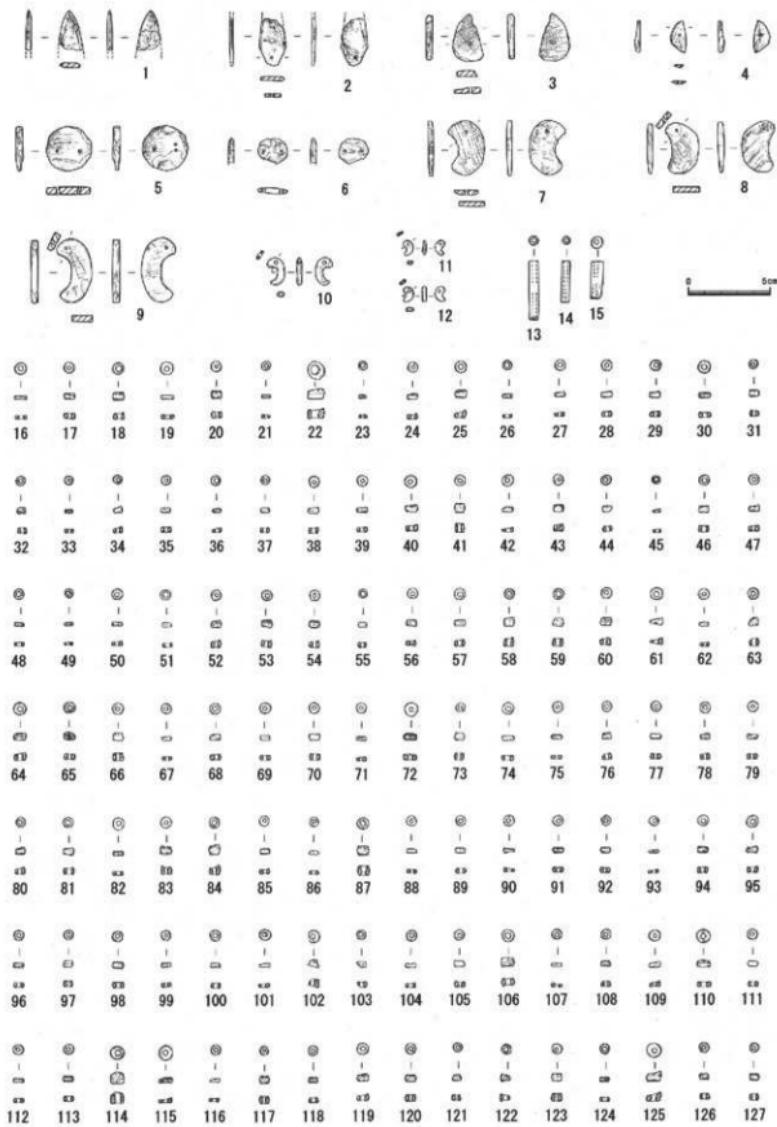
第61図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(19) 錢貨



1 SF43 2~4 SF45 5~6 SF46
7~15 SF47 16~18 SD30 19~20 遺構外

0 3cm

第62図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(20) 錢貨

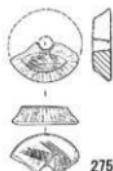


1-2・5-7・9-15-22-127 遺模外
3 SF212 4 SF202 8 SP203 16 SD254
17 SD211 18 SP419 19 SB201 20 SF44 21 SB202

0 3cm

第63図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(21) 石製品(石製模造品)

128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143
144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159
160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175
176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191
192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207
208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223
224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239
240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255
256	257	258	259	260	261	262	263	264	265						
266	267	268	269	270	271	272	273	274							



275

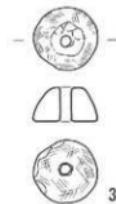
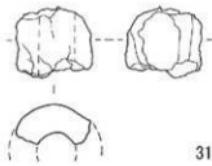
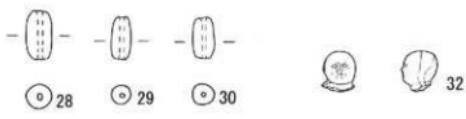
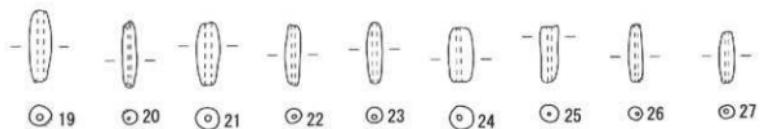
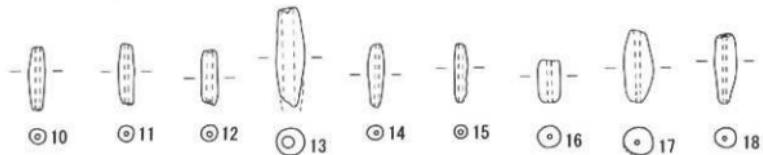
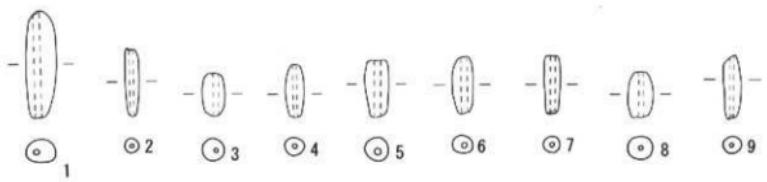
128~131·133~135·137~139·143~149·151~192·196·197·199~208·210~213·217~242·244~259·262~275 造模外
132 SF244 136 SF275 140~260 SF253 141 SF210 142 SX201 150~193·261 SF32 194 SX204
195 SF15 198 SF262 209~214 SF230 215 SF326 216 SH2·P19 243 SF202



第64図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(22) 石製品(石製模造品等)



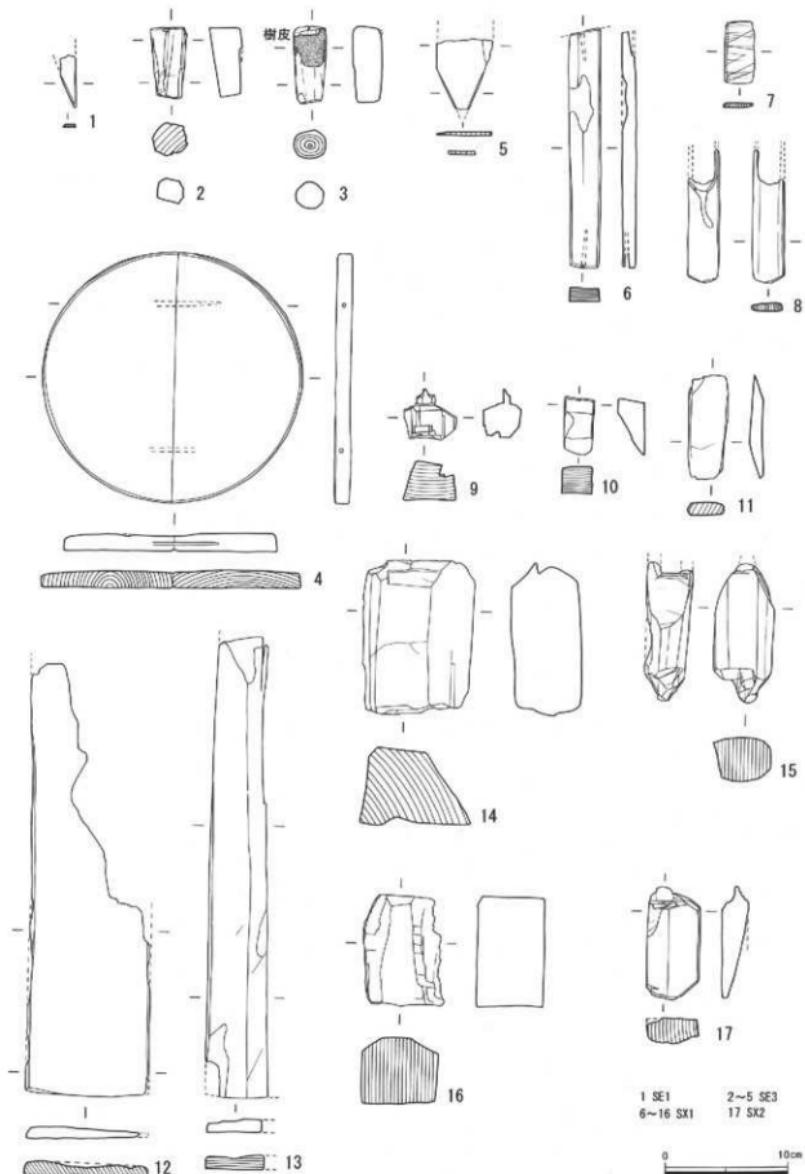
第65図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(23) 石製品(砥石)



- | | | |
|-----------|-----------|------------|
| 1 SP224 | 2 SF27 | 3 SF54 |
| 4 SD6 | 5~7 SD12 | 8 SD27 |
| 9 SD30 | 10~12 SX1 | 13~16 SX2 |
| 17~30 造模外 | 31 SP327 | 32~33 SF12 |
| 34~35 造模外 | | |

0 10cm

第66図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(24) 土製品



第67図 恒武西宮遺跡出土遺物実測図(25) 木製品

表5 恒武西宮遺跡 土器一覧表

東京真夏考古学社カラー図版

国番	文書記載	遺構	種別	器種	寸法(cm)					色調	釉	焼付	焼付等号	既存率	反転実測	備考
					口径	最大径	底径	高台	縦高							
1 1	SH205 -P12	須恵器	壺	壺						灰白				1/4	○	
1 2	SH206 -P14	須恵器	壺	壺	(14.0)					灰白				1/3	○	
1 3	SH206 -P14	土師器	小型壺	壺	(8.6)					にぶい褐色				口縁部1/6	○	
1 4	SH206 -P14	須恵器	壺	壺						灰白				口縁部1/6	○	
1 5	SH207 -P14	須恵器	壺	壺	(23.6)					灰白				わざかに焼付	○	
1 6	SH207 -P7	土師器	壺	壺	(18.0)					にぶい褐色				口縁部1/3	○	
1 7	SH201	土師器	壺	壺	(20.2)	(25.9)				褐色				口縁部～全体	○	
1 8	SH201	土師器	壺	壺	(20.4)					褐色				口縁部1/6	○	
1 9 42	SH201	土師器	壺	壺	16.4					にぶい褐色				口縁部	○	
1 10	SH201	土師器	壺	壺	(16.4)					灰黄				口縁部～兩頭	○	1/4
1 11	SH201	土師器	壺	壺					7.5	灰黄褐色				直筒2/3	○	
1 12	SH201	土師器	壺	壺					(6.2)	にぶい褐色				直筒4/5	○	
1 13 42	SH201	土師器	壺	壺	12.6	25.3	8.6	28.1		浅黃褐色				ほぼ完形	○	黒底有り
1 14 42	SH204	土師器	壺	壺	19.5					褐色				口縁部～全体	○	黒底有り
2 1 42	SP201	周邊部	环	环	16.8				3.7	明灰灰				ほぼ完形	○	
2 2	SP201	須恵器	壺	壺	(12.7)	(16.0)				灰白				口縁部～全体	○	1/4
2 3	SP201	土師器	壺	壺	(13.4)					灰褐色				1/5	○	
2 4 42	SF208	土師器	小型壺	壺	(8.2)	(16.9)				にぶい黄褐色				口縁部～全体	○	
2 5	SP209	土師器	高环	环						にぶい褐色				脚部	○	
2 6 42	SP209	土師器	小型壺	壺	8.0	8.6	2.7	8.8		にぶい褐色				完形	○	黒底有り
2 7 42	SP209	土師器	小型壺	壺	7.5	8.3		7.1		浅黃褐色				ほぼ完形	○	黒底有り
2 8	SP209	土師器	小型壺	壺	(7.7)					にぶい黄褐色				口縁部1/2	○	
2 9	SP209	土師器	壺	壺				6.2		灰白				にぶい褐色	○	
2 10	SP210	土師器	高环	环				(8.3)		にぶい褐色				脚部1/3	○	
2 11	SP210	土師器	高环	环						にぶい褐色				脚部2/3	○	
2 12	SP210	土師器	壺	壺	(16.8)	(29.6)				浅黃褐色				口縁部～全体	○	
2 13	SP215	須恵器	环	环	(15.0)			4.8		灰白				1/4	○	
2 14	SH211	土師器	壺	壺	(15.7)					にぶい褐色				口縁部1/6	○	
2 15	SH211	土師器	小型壺	壺	(8.3)					にぶい黄褐色				口縁部～兩頭	○	
2 16	SH214	土師器	高环	环				(16.2)		褐色				脚部	○	
2 17	SH217	須恵器	壺	壺	(15.1)					灰白				口縁部～全体	○	
2 18	SH224	須恵器	壺	壺	(14.3)					灰				口縁部～全体	○	
2 19	SH229	土師器	高环	环				(11.4)		にぶい褐色				脚部1/3	○	
3 1	SH236	土師器	小型壺	壺						にぶい褐色				口縁部～脚部	○	
3 2	SH236	土師器	壺	壺	(18.0)					にぶい褐色				1/5	○	
3 3	SH236	土師器	手平ね	壺	(5.3)	4.5				にぶい黄褐色				1/2	○	漆器
3 4 42	SH243	土師器	壺	壺	(16.7)	(23.3)				にぶい褐色				口縁部～全体	○	
3 5 42	SH244	土師器	环	环	(13.2)			8.6		輕				1/2	○	
3 6	SH244	土師器	环	环	(13.4)			4.7		輕				1/3	○	
3 7	SH256	須恵器	环	环	(16.7)	(12.9)		4.1		灰白				1/2	○	
3 8 42	SH256	土師器	小型壺	壺				11.1		浅黃褐色				脚部	○	黒底有り
3 9	SH263	須恵器	高环	环	(18.7)					灰				わざかに焼付	○	
3 10	SH264	土師器	小型壺	壺	(8.2)	4.2				にぶい褐色				体部1/2	○	
3 11	SH264	土師器	壺	壺	(18.6)					にぶい褐色				脚部1/4	○	
3 12	SH265	土師器	壺	壺	(13.2)					浅黃褐色				口縁部1/4	○	
3 13 43	SH266	土師器	壺	壺	17.6	24.3				にぶい褐色				2/3	○	
3 14	SH271	土師器	壺	壺	(14.4)					灰褐色				口縁部	○	
3 15	SH272	土師器	高环	环	(25.0)					浅黃褐色				脚部1/8	○	
3 16	SH273	土師器	高环	环				(18.9)		にぶい黄褐色				脚部1/4	○	
4 1 43	SH275	土師器	小型壺	壺	(7.1)	(9.7)	2.8	8.1		灰黃褐色				1/2	○	
4 2	SH276	土師器	高环	环	(12.6)					にぶい褐色				环部1/3	○	
4 3	SH296	土師器	壺	壺						浅黃褐色				脚部	○	
4 4	SH296	土師器	壺	壺						にぶい黄褐色				わざかに焼付	○	
4 5	SH299	須恵器	环	环	(11.0)			3.8		灰				1/4	○	
4 6 43	SH299	土師器	壺	壺	(17.6)	25.7				浅黃褐色				4/5	○	
4 7	SH299	土師器	壺	壺	(17.3)					にぶい黄褐色				口縁部1/4	○	
4 8	SH299	土師器	壺	壺				(8.0)		にぶい褐色				口縁部～底部1/4	○	

固 定 番 号	写 真 通 数	遺 情	種 別	器種	法量(cm)					色調	神	保 持 付 者	残 存 率	反 応 実 測	備 考
					口括	最大径	底径	高台幅	幅高						
4 9	S0301	土師器	高盤							にぶい 黄 褐色		椎原～脚筋	○		
4 10	S0214	須毛器	高杯	(13. 6)						灰		坪部1/6	○		
4 11	S0219	須毛器	杯	(11. 0) (13. 3)						灰		口縫部～体部	○		
4 12	S0221	土師器	便	(25. 4)						灰 黒褐色		口縫部 わざかに残存	○		
4 13	S0224	須毛器	盞	(14. 3)						灰白		口縫部～体部	1/5		
4 14	S0224	須毛器	盞	(14. 3)						灰白		口縫部～体部	1/4		
4 15	S0234	土師器	高杯							灰白		坪部～脚筋	○		
4 16	S0237	土師器	盞	(17. 8)						にぶい 黄		坪部1/6	○		
4 17	SP209	須毛器	盞	(14. 9)						灰		1/4	○		
4 18 43	SP222	土師器	井	9. 2					3. 0	橙					堆文
5 1	SP261	土師器	便							棕		○ 体部1/3	○		
5 2 43	SP262	土師器	盞	(14. 6) (23. 6)						浅黃褐		○ 口縫部～体部	1/2		
5 3	SP273	土師器	杯	(13. 4)						にぶい 黄褐色		1/6	○		丹波
5 4	SP282	土師器	便	(23. 6)						にぶい 黄褐色		口縫部 わざかに残存	○		
5 5	SP283	土師器	杯	(13. 9) (11. 6)						浅黃褐		1/8	○		丹波
5 6	SP288	土師器	井	(22. 6)						褐灰		○ 口縫部1/8	○		
5 7	SP228	土師器	便	(17. 8)						にぶい 黄		口縫部1/4	○		
6 8	S2332	土師器	小瓶	(10. 5)						褐		口縫部～井部	1/4		
5 9 43	SP332	土師器	高杯							浅黃褐		脚筋	○		
5 10	SP338	土師器	台付甕							にぶい 黄		脚筋1/6	○		
5 11	SP360	土師器	台付甕							にぶい 黄褐色		脚筋2/3	○		
5 12	SP416	土師器	便	(30. 3)						棕		口縫部1/8	○		
5 13	SP425	須毛器	盞	(12. 2)						灰白		口縫部～体部	1/8		
5 14	SP434	土師器	便	(16. 6)						にぶい 黄褐色		口縫部～体部	1/4		
5 15	SP490	土師器	鉢	(12. 9) (5. 1)					5. 4	にぶい 黄褐色		○			
5 16	SP444	須毛器	杯	(12. 6) (14. 7)						灰白		口縫部～体部	1/4		
5 17	SP464	土師器	鉢	(23. 0)						棕		口縫部～体部	1/5		
6 1	SX202	土師器	小瓶	(18. 6)						にぶい 黄		にぶい 黄褐色	○		受け口状
6 2	SX203	須毛器	盞	(9. 3)					3. 2	灰白		1/2	○		
6 3 43	SX203	土師器	小型甕	(2. 6) 8. 9 3. 6					7. 4	にぶい 黄		1/2	○		
6 4 43	SX203	土師器	小瓶	(9. 3) 9. 4					8. 6	浅黃褐		2/3	○	黒斑有り	
6 5	SX203	土師器	小型甕	(7. 5)						褐		口縫部～肩部	1/2		
6 6	SX203	土師器	小型甕	(6. 8)						褐		口縫部～肩部	1/5		
6 7	SX203	土師器	高杯	(19. 0)						にぶい 黄		坪部1/3	○		
6 8 43	SX203	土師器	高杯							にぶい 黄		脚筋	○		
6 9	SX203	土師器	高杯	(20. 0)						にぶい 黄		坪部1/2	○		
6 10 44	SX203	土師器	合付甕	17. 3 26. 4						浅黃褐		4/5	黒斑有り		
6 11	SX206	土師器	甕	(22. 0)						にぶい 黄		口縫部1/8	○		
6 12	SX211	土師器	高杯	(22. 0)						にぶい 黄褐色		坪部1/6	○		
6 13	SX211	土師器	甕	(17. 1)						にぶい 黄		○ 口縫部 わざかに残存	○		
6 14	SX211	土師器	甕	(16. 7)						にぶい 黄褐色		口縫部1/6	○		
6 15	SX211	土師器	便	(17. 5)						灰白		口縫部1/8	○		
6 16 44	SX211	土師器	小型甕	(2. 8) (8. 6) 2. 7					8. 9	にぶい 黄褐色		1/3	○		
6 17 44	SX214	土師器	便	16. 2 36. 0						褐		口縫部～体部	2/3		
7 1	SH- P1	陶器	甕	(34. 0)						灰	灰床	口縫部1/8	○	常滑10型式	
7 2	SH- P16	陶器	擂鉢							にぶい 黄褐色	にぶい 黄	体部～底部1/8	○	常滑窯(志戸呂)	
7 3	SH- P16	土師質土器	かわらけ	(10. 2)						2. 8	灰白	1/2	○	井口クロ	
7 4	SH- P16	土師質土器	かわらけ	(5. 6)						にぶい 黄褐色		体部～底部1/5	○	ロクロ 亲切り直	
7 5	SH- P19	土師質土器	かわらけ	(8. 4)						褐灰		体部～底部1/6	○	ロクロ 亲切り直	
7 6	SH- P11	陶器	灰土質大甕 (ゾウ)	(5. 6)						灰白	オリーブ灰	体部～底部1/5	○	大塚2的	
7 7	SH- P9	土師質土器	かわらけ	(10. 6)					2. 3	浅黃褐		1/5	○	井口クロ	
7 8	SP9	陶器	鉄輪有耳甕	(10. 2)						にぶい 黄褐色	褐灰	口縫部～底部 1/3	○	8・9小期(美濃)	
7 9	SP9	陶器	鉄輪有耳甕	(8. 3)						灰白	時尚	口縫部～底部 1/5	○	8・9小期か(美濃)	
7 10 44	SP9	土師質土器	甕	(11. 5)					2. 6	浅黃褐		1/2	○	ロクロ 亲切り直	

試験番号	実験回数	構造	種別	部位	計量(cm)					色調	触	重さ(g)	生存率	以伝死率	備考
					口径	最大幅	底高	高台高	幅高						
7 11	SP14	脚部	天井蓋板	(13.0)						にぶい黒	にぶい黒	口縁部～体部 わざかに生存	○	後IV期断	
7 12	SP19	七面質土器	かわらけ	(12.3)			2.0			浅黄緑		口縁部/B	○	非クロ	
7 13	SP27	土師質土器	かわらけ	(16.1)						灰白		口縁部	○	非クロ	
7 14	SP28	南楚	灰釉平磚							灰オリーブ	灰オリーブ	わざかに生存		僅存断	
7 15	SP28	土師質土器	かわらけ	(11.6)						浅黄緑		口縁部	○	非クロ	
7 16	SP29	瓦質土器	火鉢?		(16.8)					にぶい緑		体部～底部 一部	○	スキンブズ	
7 17	SP29	七面質土器	かわらけ	(12.0)						灰白		○	1/4	○	非クロ
7 18	SF31	土師質土器	かわらけ			2.0				灰黄緑		体部～底部	○	ロクロ	余切り模
7 19	SF40	土師質土器	かわらけ	9.2			1.9			浅黄緑		口縁部	○	非クロ	
7 20	SF40	土師質土器	かわらけ	9.8			2.1			浅黄緑		口縁部	○	非クロ	
7 21	SF40	土師質土器	かわらけ	9.6			1.9			浅黄緑		口縁部	○	非クロ	
7 22	SF40	土師質土器	かわらけ	9.8			1.9			浅黄緑		口縁部	○	非クロ	
7 23 44	SP40	七面質土器	かわらけ	9.6			2.4			灰白		口縁部	○	非クロ	
7 24	SF41	土師質土器	かわらけ	10.3			2.1			灰黄緑		口縁部	○	非クロ	
7 25 44	SP41	土師質土器	かわらけ	9.7			1.9			浅黄緑		口縁部	○	非クロ	
7 26	SF42	土師質土器	かわらけ	10.6			2.3			浅黄緑		口縁部	○	非クロ	
7 27	SF46	土師質土器	かわらけ	9.8			2.0			灰白		口縁部	○	非クロ	
7 28	SF50	南楚	檻跡	(26.9)						根	灰	口縁部	○	後IV期断	
7 29	SI55	土師質土器	かわらけ	9.6			2.6			浅黄緑		口縁部	○	非クロ	
7 30	SI56	土師質土器	屏蓋	(26.6) (41.0) (26.3)						にぶい緑		口縁部～体部 1/4	○	後I期断	
8 1	SD1	山茶瓶	瓶	(17.2)						灰黄		口縁部	○	I-2期 輪花	
8 2	SD1	山茶瓶	瓶			8.1				灰白		口縁部～高台1/2	○	セミ断 頭ねじ模	
8 3	SD1	土師瓶	瓶	(15.8)						にぶい緑		口縁部	○		
8 4	SD5	山茶瓶	瓶			(6.9)				灰白		体部～高台	○	I-期古 糞ねじ模	
8 5 44	SD5	山茶瓶	瓶	17.7		7.5	5.6			灰		口縁部	○	I-期古 糞ねじ模	
8 6 44	SUS	山茶瓶	瓶	17.1		8.2	6.6			灰黄		口縁部	○	I-期古 糞ねじ模	
8 7	SD5	山茶瓶	小瓶	(9.7)		4.8	3.1			灰白		口縁部	○	I-1期断	
8 8	SD5	山茶瓶	瓶			(7.7)				灰白		体部～高台1/2	○	I-1期	
8 9	SD5	山茶瓶	瓶	17.1		(6.3)	5.6			灰白		口縁部	○	I-1期断 輪花	
8 10	SD5	山茶瓶	瓶			7.4				灰白		口縁部	○	糞ねじ模	
8 11	SD6	陶器	甕			(14.0)				灰灰		体部～高台	○	糞ねじ模	
8 12 44	SD6	山茶瓶	瓶	(16.8)		8.7	6.3			灰白		体部～高台1/5	○	I-2期断	
8 13	SD9	土師質土器	かわらけ			(5.3)				淡黄緑		口縁部	○	糞ねじ模	
8 14 44	SD9	陶器	灰釉陶瓶豆皿	(9.3)		5.8	3.0			灰白	灰白	口縁部	○	ロクロ 糞切り模	
8 15	SD9	陶器	灰釉丸瓶(ソゾ)	(10.6)						灰白	灰白	口縁部	○	大腹断	
8 16 44	SD9	土師質土器	かわらけ	10.6			2.3			灰白		わざかに生存	○	大腹2筋	
8 17 44	SD9	土師質土器	かわらけ	10.6		2.0				然黃		口縁部	○	非クロ	
8 18 45	SD9	土師質土器	かわらけ	10.8		2.7				灰白		口縁部	○	非クロ	
8 19	SD9	土師質土器	かわらけ	(9.9)		1.6				灰黄緑		口縁部	○	糞ねじ模	
8 20 45	SD9	土師質土器	かわらけ	10.5		2.6				淡黄緑		口縁部	○	糞ねじ模	
8 21	SD9	土師質土器	内耳瓶	(26.2)	20.7					灰白		口縁部	○	1/2	内彌形 足付
9 1	SD9	土師質土器	内耳瓶	(31.6)	(22.8)					にぶい黄緑		口縁部	○	内彌形	
9 2	SD9	土師質土器	輝丹鍋	(26.6)						明灰緑		口縁部～体部 わざかに生存	○		
9 3	SD9	土師質土器	羽垂							にぶい黄緑		口縁部～体部 わざかに生存	○		
9 4	SD12	南楚	灰釉陶瓶豆甕			4.9				灰白	灰白	高台部分	○	後IV期	
9 5	SD12	十師器	高环			(15.6)				根		口縁部	○		
9 6	SD15	山茶瓶	小瓶			(4.4)				灰白		体部～高台1/3	○	I-2期 糞切り模	
9 7	SD16	陶器	椎跡	(27.2)						灰		口縁部	○	大腹3筋	
9 8 45	SD16	陶器	天目系瓶	(13.1)		4.6	8.1			灰白	暗赤褐色	口縁部	○	2小筋	
9 9	SD16	陶器	灰釉丸瓶小底			4.5				灰白	灰白	体部～底部2/3	○	後IV期	
9 10	SD16	土師質土器	かわらけ	(11.1)			3.0			灰白		口縁部	○	糞ねじ模	
9 11 45	SD16	土師質土器	かわらけ	(10.7)	(6.3)	3.5				青黄緑		口縁部	○	ロクロ 糞切り模	
9 12	SD16	灰釉質土器	風が?							灰		口縁部～体部 わざかに生存	○		
9 13	SD16	土師質土器	内耳瓶	(26.6)	(20.6)					淡黄緑		口縁部	○	内彌形 足付	
9 14	SD22	陶器	灰釉丸瓶			6.2				灰白	灰白	体部～高台	○	5-6小筋	
9 15	SD22	土師質土器	内耳瓶	(29.0)						にぶい緑		口縁部	○	平底形	
10 1	SD23	陶器	天目系瓶	(13.8)						にぶい緑	黑褐	口縁部～底部1/2	○	2小筋	
10 2	SD27	山茶瓶	瓶				0.9			灰白		体部～高台1/2	○	田-I周 糞切り模 モニ盛 底ねじ模	
10 3	SD27	陶器	灰釉陶器			(6.4)				淡黄緑	淡黄緑	体部～底部1/3	○	後II-IV期	

図 番 号	写 真 番 号	遺構	種別	器種	法量(cm)				色調	輪	焼 付 率	残 存 率	反 転 率	備考		
					口徑	最大径	底径	高台径								
10. 4	S027	土師質土器	内耳縁	(26.3)	(26.3)	(26.3)			に赤い黄緑	○	縦縫合~体部 わざりに焼付	○	内臂形			
10. 5	S028	陶器	白天目	(13.6)					灰白	灰白	○	縦縫合~体部 わざりに焼付	○	3・4小判		
10. 6	S030	陶器	擂鉢				(10.8)		灰白	灰	○	縦縫合~底部1/6	○	後IV期新か大室		
10. 7	S032	山茶碗	碗				8.8		灰白		○	体部~高台2/3	○	丸切り痕、窓ねぎらひ	1-2期	
10. 8	S033	陶器	擂鉢	(34.8)					に赤い黒	灰黒	○	口縫合~体部 わざりに焼付	○	後V期		
10. 9	S033	陶器	擂鉢	(36.6)					灰白	褐灰		○	縦縫合~体部 わざりに焼付	○	後IV期新	
10. 10	SP38	土師質土器	かわらけ				(5.4)		に赤い緑		○	体部~底部1/6	○	ロクロ、丸切り痕		
10. 11	SP46	土師質土器	内耳縁	(27.6)					灰黒		○	体部~底部 わざりに焼付	○	内臂形		
10. 12	SP75	山茶碗	碗				7.9		灰白		○	体部~高台	○	四-1期 ソミ板 使用痕、窓ねぎらひ		
10. 13	SP76	山茶碗	碗				(9.3)		灰白		○	体部~高台1/6	○	I-1期 丸切り痕 ソミ板		
10. 14	SE1	山茶碗	小瓶	(31.0)			(6.9)	3.1	灰白		○		1/4		I-2期 ソミ板	
10. 15	SE1	山茶碗	小瓶	(19.5)			6.0	2.8	に赤い黄緑		○				I-1期 ソミ板	
10. 16	SE1	山茶碗	小瓶	(16.9)			7.6	5.7	灰		○				I-1期 輪輪、輪出板 丸切り痕、焼付	
10. 17	SE1	山茶碗	碗				8.8		褐色		○	体部~底部	○	I-1期、丸切り痕		
10. 18	SE1	十師質土器	かわらけ	(6.8)					に赤い黄緑		○		3/4		ロクロ 窓孔	
11. 1	SE2	陶器	擂鉢				(17.6)		灰白		○	体部~底部1/5	○	3・4小判		
11. 2	SE3	陶器	掛花瓶				6.2		褐黒		○				7-8期(美濃)	
11. 3	SE3	陶器	灰釉小瓶				3.1		灰白		○	窓部~底部	○	7-8期(美濃)		
11. 4	SE3	陶器	灰釉筒型呑呑	(8.0)					灰白		○	体部~高台	○	7-8期(美濃)		
11. 5	SE3	陶器	灰釉口	(17.0)			8.9	8.8	灰白		○	体部~底部1/4	○	5・6-7期(美濃)		
11. 6	SE5	山茶碗	小瓶	(9.7)			4.7	2.9	灰白		○		2/3		8・9-10期(美濃)	
11. 7	SE5	山茶碗	小瓶	(9.4)			4.9	2.6	灰白		○				はぼり形	
11. 8	SE5	山茶碗	小瓶				(4.2)		黄灰		○	体部~高台	○	I-1期		
11. 9	SE1	上師質土器	かわらけ	(7.8)					に赤い黒		○	体部~底部	○	1-1期、圓蓋? ソミ板 丸切り痕		
11. 10	SE2	山茶碗	碗				(7.2)		灰白		○				I-1期	
11. 11	SE2	山茶碗	碗	(6.5)			7.2	5.4	褐オリーブ		○		2/3		II期、丸切り痕 使用痕、窓ねぎらひ	
11. 12	SE2	山茶碗	段わ縁				(17.3)		灰白		○	体部~高台1/8	○	I-1期		
11. 13	SE2	陶器	擂鉢	(23.1)					灰白		○				後IV期	
11. 14	SE2	陶器	天目瓦瓶				4.3		灰白	黒					大空2	
11. 15	SE2	土師質土器	跨付鉢	(20.7)	(24.3)				に赤い黄緑		○	口縫合~体部	○	内臂形		
11. 16	SE2	土師質土器	跨付鉢	(19.0)	(22.6)				に赤い黒		○		1/5			
11. 17	SE2	土師質土器	跨付鉢	(19.0)	(22.7)				褐黄緑		○	口縫合~体部	○	内臂形		
12. 1	SE2	土師質土器	内耳縁	(21.7)	(23.5)	(16.7)			に赤い褐		○		1/3		半球形	
12. 2	SE2	土師質土器	内耳縁	(23.0)	(25.3)	(18.5)			に赤い黄緑		○		1/3		半球形	
12. 3	SE2	十師質土器	内耳縁	(25.0)	(25.3)				に赤い黄緑		○	口縫合~体部	○	半球形		
12. 4	SE2	土師質土器	内耳縁	24.4	19.7		13.5		濃黃綠		○		3/4		内臂形	
13. 1	SE2	土師質土器	内耳縁	(26.3)	(22.2)				に赤い黄緑		○		1/3		内臂形	
13. 2	SE2	土師質土器	内耳縁	(24.1)	(29.1)				灰白		○		1/3		内臂形	
13. 3	SE2	土師質土器	内耳縁	21.5	23.2	20.2			に赤い黄緑		○		1/2		内臂形	
13. 4	SE2	土師質土器	内耳縁	(20.1)	(21.0)				灰白		○		1/2		くの字形	
13. 5	SE4	土師質土器	かわらけ	(6.3)					灰白		○		1/6		井ロクロ	
14. 1	E-16	G-16	灰陶胸器	小瓶			(7.9)	6.4	灰白		○	体部	○	丸切り痕		
14. 2	E-16	E-15	灰陶胸器	坪	9.6	11.7			灰		○				内臂形	
14. 3	E-22	須恵器	坪	(14.2)					灰白		○		1/3			
14. 4	E-22	須恵器	鋸坪	(10.4)			(7.2)	3.8	明緑灰		○		2/5			
14. 5	E-20	E-20	須恵器	坪	(7.6)				灰白		○		4/5			
14. 6	E-21	須恵器	坪	(9.4)					縞灰		○		3/5			
14. 7	E-22	須恵器	坪	9.8					灰白		○		3/5			
14. 8	D-16	D-16	須恵器	窓	9.3	11.3	3.1	3.0	灰		○		2/3			
14. 9	E-22	須恵器	窓坪						縞灰		○					
14. 10	F-15	須恵器	窓坪				(10.0)		灰白		○		坪部1/5	○		
14. 11	B-21	須山器	短縫蓋	(8.3)	(12.8)				黄灰		○		1/4			
14. 12	E-21	須恵器	蓋	(16.3)					灰		○	口縫合1/2	○			
14. 13	D-22	須恵器	窓	17.8					灰		○					
14. 14	E-19	E-19	土師器	広口盤	(23.9)				縞灰		○	口縫合~肩部 1/5	○			
14. 15	E-22	土師器	坪	12.4					に赤い黒		○				内臂形	
14. 16	B-14	土師器	坪	(10.3)			4.3		に赤い黒		○		1/2			
14. 17	E-17	土師器	坪	(13.6)			6.2		像		○		1/4			
14. 18	B-14	土師器	高坪	(16.3)					に赤い黒		○		坪部1/2	○		
14. 19	E-16	土師器	高坪	(15.6)					像		○		坪部1/2	○		

番号	方言	造構	種別	岩種	比重(%)					色調	粒	保付層	性存平	反転周波	備考
					口徑	底直径	底厚	高倍	基高						
14	20	D-18	土師器	高坏	(19.3)		16.1		14.8	透黄褐 にぶい緑		1/3	○		丹精
14	21	E-18	土師器	高坏	(18.3)		12.9		12.5	透黄褐 にぶい緑		2/3	○		
15	1	D-17	土師器	高坏	(15.4)					透黄褐 にぶい緑		环部1/2	○		
15	2	D-18	土師器	高坏			(10.6)			透黄褐 にぶい緑		环部1/2	○		
15	3	B-14	土師器	高坏			(8.6)			透黄褐 にぶい緑		环部1/2	○		
15	4	D-17	土師器	高坏			(11.2)			透黄褐 にぶい緑		环部1/2	○		
15	5	D-19	土師器	高坏			(8.6)			透黄褐 にぶい緑		环部1/2	○		
15	6	E-15	土師器	高坏			14.6			透黄褐 にぶい緑		环部～脚部	○		
15	7	F-17	土師器	高坏			(9.6)			透黄褐 にぶい緑		脚部1/3	○		
15	8	E-17	土師器	高坏			(10.0)			透黄褐 にぶい緑		脚部	○		
15	9	D-17	土師器	高坏			10.4			透黄褐 にぶい緑		脚部	○		
15	10	B-14	土師器	高坏			(11.1)			透黄褐 にぶい緑		脚部	○		
15	11	E-17	土師器	高坏			(12.9)			透黄褐 にぶい緑		脚部～脚部	○		
15	12	D-18	土師器	小型底		11.6	4.6		9.9	灰白		1/2	○		
15	13	E-17	土師器	小型底	(0.6)		2.6		8.7	灰白		2/3	○		
15	14	D-18	土師器	小型底	(0.3)	7.9	1.1		7.0	透黄褐 にぶい緑		2/3	○		
15	15	G-18	土師器	小型底		(7.6)				透黄褐 にぶい緑		脚部～体部	○		
15	16	F-21	土師器	小型底	(8.2)	(8.6)				透黄褐 にぶい緑		口縫部～体部	○	1/2	
15	17	D-19	土師器	把手付鉢	(17.1)					透黄褐 にぶい緑		口縫部～体部	○		丹地
15	18	S-17	土師器	鉢	(9.6)					透黄褐 にぶい緑		口縫部～体部	○	1/4	
15	19	E-17	土師器	鉢						透黄褐 にぶい緑		口縫部～肩部	○	2/3	
15	20	F-18	土師器	台付鉢			(9.7)			透黄褐 にぶい緑		脚部	○		
15	21	E-21	土師器	鉢			7.7			透黄褐 にぶい緑		体部～底部1/2	○		
16	1	D-17	土師器	甕	(16.1)					透黄褐 にぶい緑		口縫部～肩部	○	1/3	
16	2	C-19	土師器	甕	(16.1)					透黄褐 にぶい緑		口縫部1/5	○		
16	3	H-14	土師器	甕	(18.3)					透黄褐 にぶい緑		口縫部1/6	○		
16	4	B-13	土師器	甕	(20.6)					透黄褐 にぶい緑		口縫部～肩部	○	1/4	
16	5	B-13	土師器	甕	(17.6)					透黄褐 にぶい緑		口縫部1/4	○		
16	6	E-21	土師器	甕	(26.6)					透黄褐 にぶい緑		口縫部～肩部	○	1/2	
16	7	D-16	土師器	甕	(18.3)	(21.3)				透黄褐 にぶい緑		口縫部	○	1/4	
16	8	G-22	土師器	甕	17.4					透黄褐 にぶい緑		口縫部～肩部	○	1/2	
16	9	A-18	土師器	甕	14.7	(24.6)				透黄褐 にぶい緑		口縫部～体部	○	1/3	
16	10	F-18	土師器	甕	(16.9)	(20.0)				透黄褐 にぶい緑		口縫部～体部	○		
16	11	F-17	土師器	甕	(17.7)					透黄褐 にぶい緑		口縫部1/3	○		
17	1	F-16	山茶碗	碗			7.8			灰白		体部～高台	○	I-1期	糸切り板 使用痕 直ね引き板
17	2	C-16	山茶碗	碗			(8.2)			灰白		体部～高台1/2	○	I-1期	糸切り板 使用痕 直ね引き板
17	3	B-14	山茶碗	碗			7.8			灰白		体部～高台	I-1期	糸切り板 (直ね) 糸切り板	
17	4	F-15	山茶碗	碗			(7.23)			灰白		体部～高台2/3	○	I-1期	糸切り板 糸切り板 使用痕
17	5	瓦瓦	山茶碗	碗			(6.8)			灰白		体部～高台	○	I-2～II期	糸切り板 糸切り板 使用痕
17	6	F-15	山茶碗	碗			(6.4)			灰白		体部～高台1/2	○	I-2～II期	糸切り板 糸切り板 使用痕
17	7	B-16	山茶碗	碗	(16.2)		(7.2)	5.8		灰白		1/4	○		
17	8	C-16	山茶碗	碗			7.4			灰白		1/2	○		
17	9	D-24	陶器	志野丸	(10.6)					透黄	狀況	体部～高台2/3	○	1-2小箱	
17	10	A-17	陶器	灯罩皿	11.0		6.2	2.3		灰黄	狀況	体部～高台2/3	○	ほぼ完形	志野丸
17	11	庚士	陶器	灯罩皿	(8.5)	(11.2)	6.6	2.6		灰黄	狀況	3/4	○	8小箱(奥底)	
17	12	D-20	陶器	天目茶碗			4.9			透オーブ	狀況	体部～高台1/2	○	大藏3後(初山)	
17	13	F-16	陶器	天目茶碗			4.4			灰黄	狀況	体部～高台1/2	○	大藏3後(初山)	
17	14	G-16	陶器	天目茶碗			4.4			灰黄	狀況	体部～高台1/2	○	4小箱	
17	15	C-17	陶器	繪林	(27.9)					透黄	狀況	口縫部	○		大藏2
17	16	庚士	陶器	繪林	(30.7)					透黄	狀況	口縫部	○		大藏2
17	17	F-17	陶器	繪林			(18.6)			透黄	狀況	口縫部～高台1/2	○		後IV期
17	18	E-16	陶器	繪林			(11.6)			灰	明灰灰	口縫部～高台1/2	○		大藏3後(初山)
17	19	庚士	陶器	繪林	(36.8)					透黄	狀況	口縫部	○		4小箱(底内)
17	20	G-15	陶器	鉄筋飾利						透黄	狀況	類縫部1/4	○		大藏3後(初山)
17	21	F-15	土師質土器	内耳鉢	(25.6)					透黄	狀況	口縫部	○		内耳鉢
17	22	B-17	賀昌陶器	青磁連合文瓶						灰	状况	口縫部	○		B-1箱(I-5箱)

表6 恒武西宮遺跡 金属製品一覧表

図 番 号	写真 番 号	遺物 番 号	遺構	種別	器種	特徴・法量	備考
18 1	49	M-3	SH3-P4	鉄製品	用途不明品	残存長3.2cm、断面円形、直徑5mm。環状製品とした場合の復原外径4.6cm、内径3.8cm。	
18 2	49	M-2	SD16	鉄製品	釘	頭部が「L」字形に折り曲げられる。残存長3.2cm、頭部幅5mm、長さ2mm、厚さ3mm。身部断面綫長方形、残存長0.6cm、幅3mm、厚さ4mm。	
18 3	49	M-1	SD16	鉄製品	釘	頭部「T」字形、残存長4.7cm。頭部断面横長方形、長さ3mm、幅9mm、厚さ4mm。身部断面方形、残存長4.4cm、幅3.5mm、厚さ3.5mm。	
18 4	49	M-15	SF16 (近世墓)	銅又は 青銅製品	簪	全長1cm。頭部円筒状。頭部長4mm、直徑2mm。胴部断面円形。頭部長7cm、直徑3.5mm。脚部断面三日月形、長5.3cm、幅1mm、厚さ2mm。	近世 (18世紀)
18 5	49	M-33	SE3 (近世井戸)	真鍮製品	キセル雁首 ・火皿	厚さ1mm程度の板状の真鍮を折り曲げて形成される。全長9.7cm、高さ2.1cm。雁首は上部が土台などの影響により若干彎曲する。雁首先5.3cm、火皿との接合部7mm。雁首端部0.6cm、火皿直径1.7~1.8cm、高さ1.1cm。火皿内側の焼孔は橢円形。直徑7mm、焼軸5mm。内面に炭化物沈着。	近世 (18世紀)
18 6	49	M-32	SH203 -P1	鉄製品	馬具 (帶引手?)	(上)上部に横筋形成された棒状製品。帶引手の可能性が高い。環状部は神奈部分に対して「く」の字形に折り曲げられる。残存長19.7cm、横断部外径2.0cm、内径5mm。厚さ1.0mm。棒状部分は残存長17.5cm、幅1.2cm。断面台形、短辺0.8、長辺1.0cm。(中)棒状製品。残存長7.0cm、幅1.5cm。断面は輪廓れして形状を呈する。短辺1.1cm、長辺1.4cm。(下)棒状製品。残存長5.5cm、幅1.5cm。断面横長長方形、厚さ0.7cm。	古墳後期 ~奈良
18 7	49	M-5	SH205 -P5	鉄製品	用途不明品 (鑑?)	残存長3.6cm、最大幅1.2cm、断面綫長長方形。幅3mm、厚さ約0.7mm。	古墳後期
18 8	49	M-13	SD280	鉄製品	鑓・鍬先	内側に木台を受ける構(割込み)がある。横断面「Y」字形。残存長6.9cm、最大幅2.8cm以上、深幅1.2cm。溝内幅9mm、刃幅1.6cm、厚さ5mm。	古墳中期 ~後期
18 9	49	M-31	SD299	鉄製品	鎌	片刃波線状開闊葉形鎌。残存長10.9cm。鎌身闊は無し。鎌身長5mm、幅6mm。駒部9.4cm。断面方形幅、厚さともに3mm。闊は輪状闊、茎残存長8mm、断面方形、幅、厚さともに2mm。	古墳後期 ~終末期
18 10	49	M-6	包含層	鉄製品	鎌	長頸鎌の頭部～茎片。頭部は刃部側がやや狭く、間に向かって若干広がる形態。残存長8.6cm、直角闊。頭部残存長7.0cm。断面横長長方形。幅7mm、厚さ3mm。茎残存長1.6cm。断面横長長方形、幅5mm、厚さ2mm。	中世
18 11	49	M-10	包含層	鉄製品	鎌	長頸鎌の頭部～茎片。頭部は刃部側がやや狭く、間に向かって若干広がる形態。残存長6.0cm、合形闊。頭部残存長4.8cm。断面横長長方形。幅8mm、厚さ3mm。茎残存長1.2cm。断面横長長方形、幅4.5mm、厚さ2mm。	中世
18 12	49	M-12	包含層	鉄製品	用途不明品	同一個体か。(上)上部を小覆面に曲げられた棒状鉄製品。残存長8.7cm。環状部外径7mm、内径2.5mm、厚さ4~5mm。棒状部断面円形。残存長8.0cm、直徑5mm。(中)棒状製品。断面円形、直徑5mm。残存長5.5cm。(下)棒状製品。断面円形、直徑5mm。残存長5.5cm。	
18 13	49	M-23	包含層	鉄製品	刀子	茎片。茎尻に向かって先細りする。断面長方形。残存長6.4cm、幅1.1cm、厚さ4mm。	
18 14	494	M-20	包含層	鉄製品	刀子	刃前～茎片。残存長4.5cm、刃部残存長2.2cm、幅1.3cm、厚さ5mm。闊は刃削・被削とともに角闊。茎残存長2.3cm、幅9mm。断面台形、厚さ4mm。	
18 15	49	M-17	包含層	鉄製品	刀子	茎片。茎尻に向かって先細りする。残存長3.6cm、最大幅0.7cm。断面綫長長方形、厚さ2mm。	
18 16	49	M-29	包含層	鉄製品	刀子	切先片。残存長3.3cm、最大幅9.5mm、厚さ3mm。	
18 17	49	M-27	包含層	鉄製品	刀子	茎片。茎尻に向かい先細りする。残存長4.5cm、断面横長長方形、幅7.5mm、厚さ3mm。	
18 18	49	M-29	包含層	鉄製品	刀子	茎片。茎尻に向かい先細りする。残存長2.9cm、最大幅1.1cm。断面横長長方形、厚さ1mm。	
18 19	49	M-33	包含層	真鍮製品 ・木	キセル吸口 ・羅字	羅字は直徑5.5mmの木製品(鑑?)である。残存長2.5cm。燃焼状の紋様?が看取できる。吸口は厚さ1mm程度の板状の真鍮を丸めて接合している。野球のバットのような形状を呈する。全長7.5cm、最大幅8.5mm。羅字側端部外径7.5mm、内径6mm。吸口側端部外径5mm、内径2.5mm。	近世 (18世紀?)

表7 恒武西宮遺跡 錢貨一覽表

団番	番	写真 図番	遺物番号	遺構	錢貨	法量(cm)			備考
						直径	厚さ	重量(g)	
19	1	50	Z2-4	SF12	寛永通寶	2.42	0.12	3.08	新寛永
19	2	50	Z2-2	SF12	寛永通寶	2.45	0.11	3.13	新寛永
19	3	50	Z2-3	SF12	寛永通寶	2.48	0.13	3.30	新寛永
19	4	50	Z2-5	SF12	寛永通寶	2.46	0.12	1.63	古寛永
19	5	50	Z2-1	SF12	寛永通寶	2.33	0.11	1.81	新寛永
19	6	50	Z9-3	SF41	寛永通寶	2.55	0.13	3.40	新寛永
19	7	50	Z9-5	SF41	寛永通寶	2.34	0.12	2.38	新寛永
19	8	50	Z9-2	SF41	寛永通寶	2.36	0.12	3.05	新寛永?
19	9	50	Z9-4	SF41	寛永通寶	2.32	0.13	2.06	新寛永
19	10	50	Z9-6	SF41	寛永通寶	2.34	0.12	1.98	新寛永?
19	11	50	Z9-1	SF41	寛永通寶	2.54	0.14	1.23	新寛永
19	12	50	Z19-1	SF42	寛永通寶	2.51	0.12	1.81	新寛永 文錢被熱
19	13	50	Z18-2	SF42	寛永通寶	2.53	0.11	2.34	新寛永 被熱
19	14	50	Z15-1	SF42	寛永通寶	2.53	0.15	2.63	古寛永
19	15	50	Z18-1	SF42	寛永通寶	2.52	0.13	1.78	新寛永 被熱
19	16	50	Z10-3	SF43	寛永通寶	2.52	0.14	3.43	新寛永 文錢
19	17	50	Z10-5	SF43	寛永通寶	2.52	0.13	3.36	新寛永 文錢
19	18	50	Z10-6	SF43	寛永通寶	2.45	0.14	2.25	新寛永
19	19	50	Z10-1	SF43	寛永通寶	2.47	0.13	2.76	新寛永
19	20	50	Z10-4	SF43	寛永通寶	2.43	0.13	3.25	古寛永
20	1	50	Z10-2	SF43	寛永通寶	2.45	0.12	3.09	古寛永
20	2	50	Z11-3	SF45	寛永通寶	2.52	0.14	2.57	古寛永
20	3	50	Z11-2	SF45	寛永通寶	2.57	0.14	3.18	新寛永
20	4	50	Z11-1	SF45	寛永通寶	2.53	0.13	1.91	新寛永
20	5	50	Z8-1	SF46	寛永通寶	2.41	0.15	2.24	新寛永 被熱
20	6	50	Z16-1	SF46	熙寧元寶	2.52	0.11	1.78	初鑄1068 真書 被熱
20	7	50	Z7	SF47	寛永通寶	2.55	0.11	2.15	古寛永
20	8	50	Z6-1	SF47	寛永通寶	2.44	0.14	2.70	新寛永 被熱
20	9	50	Z7-1	SF47	寛永通寶	2.36	0.14	2.85	新寛永
20	10	50	Z6-2	SF47	寛永通寶	2.34	0.12	1.78	新寛永 被熱
20	11	50	Z4-3	SF47	寛永通寶	2.46	0.12	2.52	新寛永 被熱
20	12	50	Z4-2	SF47	寛永通寶	2.28	0.09	1.87	新寛永 被熱
20	13	50	Z12-1	SF47	寛永通寶	2.26	0.12	1.48	新寛永 被熱で曲
20	14	50	Z20-1	SF47	寛永通寶	2.59	0.13	1.37	新寛永 被熱
20	15	50	Z4-1	SF47	寛永通寶	2.38	0.13	1.26	新寛永 被熱
20	16	50	Z1-3	SD30	永樂通寶	2.56	0.14	1.99	初鑄1408 被熱
20	17	50	Z1-2	SD30	天聖元寶	2.56	0.12	1.32	初鑄1023 紫書 被熱
20	18	50	Z1-1	SD30	元祐通寶	2.53	0.12	1.73	初鑄1086 行書 被熱
20	19	50	Z3-2	E-19	咸平元寶	2.48	0.1	2.13	初鑄998 真書 被熱
20	20	50	Z3-1	E-19	熙寧元寶	2.50	0.13	3.01	初鑄1068 真書 被熱

表8 恒武西宮遺跡 石製品等一覧表

※写真図版欄はカラー回版

図番	番号	写真 図版 番号	遺物 番号	遺構	種別	器種	法量(cm)			色調	材質	その他
							全長	全幅	全厚			
21	1	#3	204	E-17	石製品	角形 石製品 模造品	(2.50)	1.50	0.30	濃灰色	蛇紋岩	縞は造り出さない
21	2	#3	205	E-17	石製品	角形 石製品 模造品	(2.90)	1.60	0.25	濃灰色	蛇紋岩	縞は造り出さない
21	3	#3	1016	SF212	石製品	角形 石製品 模造品	2.90	1.90	0.40	灰色	滑石片岩	側面は造り出さない
21	4	#3	1018	SF202	石製品	角形 石製品 模造品	1.90	1.00	0.30	濃灰色	滑石片岩	側面は造り出さない
21	5	#3	53	E-17	石製品	有孔 円板	2.80	2.80	0.35	濃灰色	黒色結晶片岩	側面は造り出さない
21	6	#3	247	表土	石製品	有孔 円板	1.80	1.60	0.50	濃灰色	黒色結晶片岩	にぶい側面を有する
21	7	#3	4	D-17	石製品	勾玉形 石製品 模造品	3.10	2.00	0.35	青灰色～ 黃灰色	滑石片岩	断面板状
21	8	#3	262	SP203	石製品	勾玉形 石製品 模造品	3.40	2.20	0.30	濃灰色～ 黃灰色	滑石片岩	断面板状
21	9	#3	1001	E-19	石製品	勾玉形 石製品 模造品	3.90	2.10	0.45	濃灰色	蛇紋岩	断面板状
21	10	#3	176	E-17	石製品	勾玉形 石製品 模造品	1.70	1.10	0.30	灰色	滑石	断面板円形 調整精緻
21	11	#3	106	E-17	石製品	勾玉形 石製品 模造品	0.90	0.60	0.30	淡青灰色	滑石	断面板状 調整精緻
21	12	#3	172	D-17	石製品	勾玉形 石製品 模造品	0.90	0.65	0.25	黄灰色	滑石	調整精緻
21	13	#3	1	E-17	石製品	管玉	3.70	0.60	0.30	緑灰色	結晶片岩	両側穿孔
21	14	#3	77	E-17	石製品	管玉	2.60	0.50	0.25	淡緑灰色	結晶片岩	片側穿孔 調整精緻
21	15	#3	1014	F-20	石製品	管玉	2.30	0.80	0.25	緑灰色	結晶片岩	両側穿孔

図番	写真 図版 番号	遺物 番号	遺構	種別	器種	法量(mm)			色調	材質	分類	備考	
						直径	全厚	孔径					
21	16		249	SD254	石製品	白玉	5.00	1.50	2.00	濃灰色	滑石片岩	A I	
21	17		257	SD211	石製品	白玉	4.50	2.50	1.50	灰色	滑石片岩	A I	
21	18		1019	SP419	石製品	白玉	4.50	3.00	2.50	灰色	滑石片岩	A I	
21	19		263	SB201	石製品	白玉	5.50	1.50	2.00	灰色	滑石片岩	A I	
21	20	#3	1006	SP44	石製品	白玉	4.50	3.00	1.00	灰色	滑石片岩	A I	
21	21		254	SB202	石製品	白玉	3.50	1.50	1.50	灰色	滑石片岩	A I	
21	22	#3	63	E-16	石製品	白玉	7.50	4.50	4.00	濃灰色	滑石片岩	A I	
21	23		21	D-17	石製品	白玉	3.00	1.50	1.50	灰色	滑石片岩	A I	
21	24		20	D-17	石製品	白玉	4.00	2.50	1.50	灰色	滑石片岩	A I	
21	25		23	D-17	石製品	白玉	5.00	3.50	2.00	灰色	滑石片岩	A I	両側穿孔
21	26		231	D-17	石製品	白玉	4.00	1.50	1.50	灰色	蛇紋岩	A I	
21	27		127	D-17	石製品	白玉	4.00	2.00	2.00	灰色	滑石片岩	A I	
21	28		131	D-17	石製品	白玉	4.00	2.50	1.50	灰色	滑石片岩	A I	
21	29		132	D-17	石製品	白玉	4.00	2.50	2.00	濃灰色	蛇紋岩	A I	
21	30		134	D-17	石製品	白玉	4.50	2.00	2.00	灰褐色	滑石片岩	A I	
21	31		135	D-17	石製品	白玉	4.00	3.00	1.50	濃灰色	蛇紋岩	A I	
21	32		145	D-17	石製品	白玉	3.50	2.50	1.50	濃灰色	滑石片岩	A I	
21	33		208	D-17	石製品	白玉	3.50	1.50	1.00	濃灰色	蛇紋岩	A I	
21	34		214	D-17	石製品	白玉	3.50	2.50	1.50	濃灰色	滑石片岩	A I	
21	35		215	D-17	石製品	白玉	4.00	2.00	1.50	灰色	滑石片岩	A I	
21	36		216	D-17	石製品	白玉	4.00	2.00	2.00	灰色	滑石片岩	A I	

図番	写真 回版	遺物 番号	造構	種別	器種	法量 (mm)			色調	材質	分類	備考
						直径	全厚	孔径				
21 37		229	D-17	石製品	白玉	4.00	2.00	1.50	濁灰色	蛇紋岩	A I	
21 38		238	D-17	石製品	白玉	4.50	2.50	1.50	灰色	蛇紋岩	A I	
21 39		240	D-17	石製品	白玉	4.50	2.00	1.50	灰色	滑石片岩	A I	
21 40		71	D-17	石製品	白玉	5.00	2.50	1.50	灰色	蛇紋岩	A I	
21 41		86	D-17	石製品	白玉	4.00	3.50	1.50	濁灰色	蛇紋岩	A I	
21 42		89	D-17	石製品	白玉	4.50	2.00	1.50	濁灰色	滑石片岩	A I	
21 43		93	D-17	石製品	白玉	4.00	3.00	1.00	濁灰色	滑石片岩	A I	
21 44		99	D-17	石製品	白玉	4.00	2.50	2.00	濁灰色	蛇紋岩	A I	
21 45		100	D-17	石製品	白玉	3.50	1.50	2.00	灰褐色	蛇紋岩	A I	
21 46		110	D-17	石製品	白玉	4.00	2.50	2.00	灰色	滑石片岩	A I	両側穿孔
21 47		111	D-17	石製品	白玉	4.00	2.50	1.50	灰色	滑石片岩	A I	
21 48		113	D-17	石製品	白玉	4.00	1.50	2.00	灰色	滑石片岩	A I	
21 49		114	D-17	石製品	白玉	3.5	1.5	1.5	灰色	滑石片岩	A I	
21 50		115	D-17	石製品	白玉	4.50	1.50	1.50	灰色	滑石片岩	A I	
21 51		138	D-17	石製品	白玉	4.00	1.50	2.00	灰色	滑石片岩	A I	
21 52		140	D-17	石製品	白玉	4.00	3.00	1.50	濁灰色	蛇紋岩	A I	
21 53		141	D-17	石製品	白玉	4.00	3.00	1.50	濁灰色	滑石片岩	A I	
21 54		142	D-17	石製品	白玉	4.50	3.00	2.00	濁灰色	滑石片岩	A I	
21 55		143	D-17	石製品	白玉	3.50	2.00	2.00	濁灰色	滑石片岩	A I	
21 56		144	D-17	石製品	白玉	4.00	2.50	1.50	濁灰色	滑石片岩	A I	
21 57		148	D-17	石製品	白玉	4.50	2.50	2.00	濁灰色	滑石片岩	A I	
21 58		149	D-17	石製品	白玉	4.00	3.50	2.00	濁灰色	滑石片岩	A I	
21 59		150	D-17	石製品	白玉	4.00	3.00	2.00	濁灰色	蛇紋岩	A I	
21 60		152	D-17	石製品	白玉	4.00	3.00	1.50	灰色	滑石片岩	A I	
21 61		155	D-17	石製品	白玉	5.00	3.00	2.50	濁灰色	滑石片岩	A I	
21 62		156	D-17	石製品	白玉	4.00	1.50	1.50	灰色	滑石片岩	A I	
21 63		157	D-17	石製品	白玉	4.00	3.00	2.00	灰色	蛇紋岩	A I	
21 64		160	D-17	石製品	白玉	5.00	3.00	2.00	灰色	滑石片岩	A I	
21 65		161	D-17	石製品	白玉	4.50	3.00	1.50	濁灰色	滑石片岩	A I	
21 66		163	D-17	石製品	白玉	4.50	3.00	1.50	灰色	蛇紋岩	A I	
21 67		164	D-17	石製品	白玉	4.00	1.50	1.50	灰色	蛇紋岩	A I	
21 68		165	D-17	石製品	白玉	4.50	2.50	2.00	濁灰色	蛇紋岩	A I	
21 69		170	D-17	石製品	白玉	4.50	2.00	2.00	灰色	滑石片岩	A I	
21 70		171	D-17	石製品	白玉	4.50	2.50	1.50	灰色	滑石片岩	A I	
21 71		180	D-17	石製品	白玉	4.00	1.50	1.00	灰色	滑石片岩	A I	
21 72		182	D-17	石製品	白玉	5.50	2.50	2.00	灰色	滑石片岩	A I	
21 73		183	D-17	石製品	白玉	4.00	3.00	1.50	濁灰色	蛇紋岩	A I	
21 74		189	D-17	石製品	白玉	5.00	2.00	2.00	濁灰色	蛇紋岩	A I	
21 75		190	D-17	石製品	白玉	4.00	1.50	1.50	灰色	蛇紋岩	A I	
21 76		191	D-17	石製品	白玉	4.00	2.50	1.50	濁灰色	蛇紋岩	A I	
21 77		192	D-17	石製品	白玉	4.00	2.00	1.50	灰色	滑石片岩	A I	
21 78		217	D-17	石製品	白玉	4.00	2.50	1.50	灰色	滑石片岩	A I	
21 79		219	D-17	石製品	白玉	4.50	2.00	1.50	灰色	滑石片岩	A I	
21 80		222	D-17	石製品	白玉	4.00	3.00	1.50	灰色	滑石片岩	A I	
21 81		223	D-17	石製品	白玉	4.50	3.00	2.50	灰色	滑石片岩	A I	
21 82		225	D-17	石製品	白玉	4.50	1.50	2.00	濁灰色	蛇紋岩	A I	
21 83		11	D-17	石製品	白玉	4.50	3.50	1.50	綠灰色	蛇紋岩	A I	
21 84		16	D-17	石製品	白玉	4.50	4.00	2.00	黃灰色	滑石片岩	A I	
21 85		14	D-17	石製品	白玉	4.00	2.00	1.00	濁灰色	滑石片岩	A I	
21 86		39	E-17	石製品	白玉	3.50	1.50	1.50	灰色	滑石片岩	A I	
21 87		44	E-17	石製品	白玉	5.00	3.50	2.00	灰色	滑石片岩	A I	
21 88		220	E-17	石製品	白玉	4.00	1.50	1.00	灰色	滑石片岩	A I	
21 89		27	E-17	石製品	白玉	4.00	2.00	2.00	濁灰色	蛇紋岩	A I	

図番	写真 図版	遺物 番号	遺構	種別	器種	法量 (mm)			色調	材質	分類	備考	
						直径	全厚	孔径					
21	90	28	E-17	石製品	白玉	4.00	2.00	1.50	濃灰色	滑石片岩	A I		
21	91	54	E-17	石製品	白玉	4.50	2.00	2.00	灰色	滑石片岩	A I		
21	92	61	E-17	石製品	白玉	4.00	2.00	1.00	濃灰色	蛇紋岩	A I		
21	93	62	E-17	石製品	白玉	4.00	1.50	1.50	灰色	蛇紋岩	A I		
21	94	232	D-18	石製品	白玉	4.00	2.50	1.50	灰色	滑石片岩	A I		
21	95	234	D-18	石製品	白玉	5.00	2.50	2.00	灰褐色	滑石片岩	A I		
21	96	67	D-18	石製品	白玉	4.00	2.00	1.50	灰色	蛇紋岩	A I		
21	97	70	D-18	石製品	白玉	4.00	2.50	1.50	灰色	蛇紋岩	A I		
21	98	96	D-18	石製品	白玉	4.50	2.50	2.00	灰色	滑石片岩	A I		
21	99	98	D-18	石製品	白玉	4.00	2.00	1.00	灰色	蛇紋岩	A I		
21	100	179	D-18	石製品	白玉	4.00	2.00	2.00	灰色	滑石片岩	A I		
21	101	198	D-18	石製品	白玉	4.50	1.50	1.50	灰色	蛇紋岩	A I		
21	102	199	D-18	石製品	白玉	4.50	3.50	2.00	灰色	蛇紋岩	A I		
21	103	201	D-18	石製品	白玉	4.00	2.50	1.50	濃灰色	滑石片岩	A I		
21	104	226	D-18	石製品	白玉	4.00	2.00	2.00	灰色	滑石片岩	A I		
21	105	230	D-18	石製品	白玉	4.50	2.50	2.00	綠灰色	蛇紋岩	A I		
21	106	65	E-18	石製品	白玉	5.00	3.50	2.50	濃灰色	蛇紋岩	A I		
21	107	66	E-18	石製品	白玉	4.50	1.50	1.50	灰色	滑石片岩	A I		
21	108	80	E-18	石製品	白玉	4.00	2.00	1.50	灰褐色	滑石片岩	A I		
21	109	1005	E-20	石製品	白玉	5.00	2.50	1.50	青灰色	蛇紋岩	A I		
21	110	251	B-13	石製品	白玉	6.00	2.50	2.00	灰色	滑石片岩	A I		
21	111	173	D-17	石製品	白玉	4.00	2.00	1.50	灰色	滑石片岩	A I		
21	112	174	D-17	石製品	白玉	4.50	1.50	1.50	灰色	滑石片岩	A I		
21	113	241	D-17	石製品	白玉	4.00	2.00	2.00	濃灰色	滑石片岩	A I		
21	114	244	D-17	石製品	白玉	4.00	1.50	2.00	灰色	滑石片岩	A I		
21	115	245	D-17	石製品	白玉	5.50	4.50	2.00	灰色	滑石片岩	A I		
21	116	6	D-17	石製品	白玉	6.50	2.00	2.00	灰色	滑石	A I		
21	117	8	D-17	石製品	白玉	4.00	3.00	1.00	灰色	滑石片岩	A I		
21	118	30	D-17	石製品	白玉	4.00	2.00	2.00	灰褐色	滑石片岩	A I		
21	119	35	D-17	石製品	白玉	4.50	3.00	2.00	濃灰色	滑石片岩	A I		
21	120	37	D-17	石製品	白玉	4.50	2.50	1.50	灰色	滑石片岩	A I		
21	121	48	D-18	石製品	白玉	4.00	2.50	1.50	灰色	滑石片岩	A I		
21	122	49	D-18	石製品	白玉	4.00	3.00	2.00	灰色	滑石片岩	A I		
21	123	52	D-17	石製品	白玉	4.00	3.00	1.00	灰色	蛇紋岩	A I		
21	124	58	F-18	石製品	白玉	4.00	1.50	2.00	灰色	滑石片岩	A I		
21	125	64	E-17	石製品	白玉	6.00	4.00	2.00	灰色	滑石片岩	A I		
21	126	92	D-17	石製品	白玉	4.00	2.50	1.50	灰色	滑石片岩	A I		
22	127	101	E-17	石製品	白玉	4.00	2.50	2.00	濃灰色	蛇紋岩	A I		
22	128	103	E-17	石製品	白玉	3.50	2.00	1.50	灰色	滑石片岩	A I		
22	129	104	E-17	石製品	白玉	7.00	4.00	2.50	濃灰色	滑石片岩	A I		
22	130	107	E-17	石製品	白玉	4.50	3.50	2.00	灰色	滑石片岩	A I		
22	131	122	E-16	石製品	白玉	6.00	2.00	2.00	灰色	滑石片岩	A I	両側穿孔	
22	132	125	SD244	石製品	白玉	6.50	3.50	3.00	灰色	滑石片岩	A I		
22	133	126	D-17	石製品	白玉	4.00	2.00	2.00	濃灰色	滑石片岩	A I		
22	134	137	F-17	石製品	白玉	4.50	2.50	2.00	濃灰色	滑石片岩	A I		
22	135	175	D-18	石製品	白玉	5.50	3.00	2.00	灰色	滑石片岩	A I		
22	136	195	SD275	石製品	白玉	5.00	2.00	1.50	灰色	滑石片岩	A I		
22	137	252	F-15	石製品	白玉	7.00	4.50	3.00	灰色	滑石片岩	A I		
22	138	253	F-15	石製品	白玉	6.00	3.50	2.00	灰色	滑石片岩	A I		
22	139	259	E-17	石製品	白玉	3.50	2.00	1.50	灰色	滑石片岩	A I		
22	140	260	SD253	石製品	白玉	5.50	1.50	2.00	灰色	滑石片岩	A I		
22	141	1013	SF210	石製品	白玉	4.50	2.50	1.50	灰色	滑石片岩	A II		
22	142	#3	258	SK201	石製品	白玉	7.50	4.00	3.00	灰白色	滑石	A II	断面台形に近い

図番	番	写真 図版	遺物 番号	構造	種別	器種	法量 (mm)			色調	材質	分類	備考
							直径	全厚	孔径				
22	143		19	D-17	石製品	白玉	4.50	2.50	1.50	濃灰色	蛇紋岩	A	
22	144		117	D-17	石製品	白玉	4.00	3.00	2.00	灰色	蛇紋岩	A	調整精緻
22	145		207	D-17	石製品	白玉	4.00	2.00	1.50	灰色	滑石片岩	A	調整精緻
22	146		121	D-17	石製品	白玉	5.00	2.50	1.50	褐色	滑石片岩	A	表面の黒化進行
22	147		159	D-17	石製品	白玉	3.50	1.50	1.50	灰色	滑石片岩	A	
22	148		218	D-17	石製品	白玉	4.00	1.50	1.00	濃灰色	蛇紋岩	A	調整精緻
22	149		235	D-18	石製品	白玉	4.50	1.00	2.00	灰色	滑石片岩	A	
22	150		178	SF32	石製品	白玉	4.00	2.00	1.50	灰色	滑石片岩	B I	
22	151	#3	24	D-17	石製品	白玉	5.00	3.50	2.00	灰色	滑石片岩	B I	
22	152		228	D-17	石製品	白玉	5.50	4.00	1.50	灰色	滑石片岩	B I	
22	153		90	D-17	石製品	白玉	5.00	3.00	1.50	灰褐色	滑石	B I	
22	154		42	D-17	石製品	白玉	4.00	2.00	2.00	灰褐色	滑石片岩	B I	
22	155		128	D-17	石製品	白玉	4.00	3.50	1.00	灰色	蛇紋岩	B I	
22	156		129	D-17	石製品	白玉	4.00	2.00	1.50	灰色	滑石片岩	B I	
22	157		210	D-17	石製品	白玉	4.00	2.00	1.50	濃灰色	滑石片岩	B I	
22	158		239	D-17	石製品	白玉	4.00	2.00	1.50	灰色	滑石片岩	B I	
22	159		69	D-17	石製品	白玉	3.50	3.50	1.50	綠灰色	滑石片岩	B I	
22	160		91	D-17	石製品	白玉	5.00	3.00	2.00	綠灰色	滑石	B I	
22	161		94	D-17	石製品	白玉	4.00	1.50	2.00	灰色	蛇紋岩	B I	
22	162		118	D-17	石製品	白玉	4.50	3.50	1.50	灰色	滑石片岩	B I	
22	163		119	D-17	石製品	白玉	4.00	3.00	1.00	濃灰色	蛇紋岩	B I	
22	164		146	D-17	石製品	白玉	4.50	2.00	2.00	灰色	滑石片岩	B I	
22	165		147	D-17	石製品	白玉	4.50	2.50	2.50	灰色	滑石片岩	B I	
22	166		151	D-17	石製品	白玉	4.00	3.00	2.00	濃灰色	滑石片岩	B I	
22	167		153	D-17	石製品	白玉	4.00	1.50	2.00	灰色	滑石片岩	B I	
22	168		166	D-17	石製品	白玉	4.00	1.00	2.00	濃灰色	滑石片岩	B I	
22	169		167	D-17	石製品	白玉	4.50	3.00	2.00	灰色	滑石片岩	B I	
22	170		168	D-17	石製品	白玉	4.50	3.50	1.50	灰色	滑石片岩	B I	
22	171		169	D-17	石製品	白玉	4.50	2.50	1.50	灰色	滑石片岩	B I	
22	172		187	D-17	石製品	白玉	5.00	3.50	2.00	濃灰色	蛇紋岩	B I	
22	173		13	D-17	石製品	白玉	5.50	1.50	1.00	灰色	滑石片岩	B I	
22	174		12	D-17	石製品	白玉	6.00	5.00	2.00	灰色	滑石片岩	B I	
22	175		81	E-17	石製品	白玉	4.00	2.50	1.50	濃灰色	蛇紋岩	B I	
22	176		60	E-17	石製品	白玉	4.50	2.00	1.50	褐色	滑石	B I	
22	177		97	D-18	石製品	白玉	4.00	1.50	2.00	濃灰色	蛇紋岩	B I	
22	178		83	D-18	石製品	白玉	4.50	3.00	2.00	濃灰色	滑石片岩	B I	
22	179		95	D-18	石製品	白玉	6.00	4.50	3.00	濃灰色	滑石片岩	B I	
22	180		227	D-18	石製品	白玉	4.00	2.00	1.50	灰色	滑石片岩	B I	
22	181		59	E-18	石製品	白玉	3.50	2.00	2.00	灰色	滑石片岩	B I	
22	182		57	E-18	石製品	白玉	4.50	1.50	1.50	灰褐色	滑石	B I	
22	183	#3	1002	E-18	石製品	白玉	8.50	4.50	2.50	淡黃灰色	滑石	B I	
22	184		1007	F-18	石製品	白玉	6.00	5.00	2.00	淡灰色	滑石片岩	B I	
22	185		1008	F-19	石製品	白玉	4.00	1.50	1.50	灰色	滑石片岩	B I	
22	186		1009	E-19	石製品	白玉	5.00	3.00	1.50	濃灰色	滑石片岩	B I	
22	187		1012	E-19	石製品	白玉	4.00	4.00	1.50	灰色	蛇紋岩	B I	
22	188		75	E-16	石製品	白玉	5.00	4.00	1.50	灰褐色	滑石片岩	B I	
22	189		108	E-17	石製品	白玉	5.00	3.50	2.00	灰褐色	滑石片岩	B I	
22	190		123	E-17	石製品	白玉	3.50	2.00	1.50	灰色	滑石片岩	B I	
22	191		124	D-17	石製品	白玉	8.50	5.00	3.00	灰白色	滑石	B I	
22	192		186	D-17	石製品	白玉	4.50	3.00	2.00	濃灰色	蛇紋岩	B I	
22	193		177	SF32	石製品	白玉	4.00	2.50	1.50	灰色	滑石片岩	B II	
22	194		246	SX204	石製品	白玉	4.00	2.00	1.50	灰色	滑石片岩	B II	
22	195	#3	50	SF15	石製品	白玉	4.50	3.00	2.00	灰色	滑石片岩	B II	

図番	写真 図版	遺物 番号	遺構	種別	器種	法量 (mm)			色調	材質	分類	備考
						直徑	全厚	孔径				
22 196	105	E-17	石製品	白玉	6.50	2.50	3.00	灰色	蛇紋岩	B II		
22 197	185	D-17	石製品	白玉	3.50	1.50	1.50	灰色	蛇紋岩	B II		
22 198	194	SD262	石製品	白玉	3.00	2.00	1.00	灰色	滑石片岩	B II		
22 199	#3 22	D-17	石製品	白玉	5.50	3.50	2.00	灰色	滑石	B III		
22 200	237	D-17	石製品	白玉	4.50	1.50	1.00	灰色	滑石片岩	B		
22 201	209	D-17	石製品	白玉	5.00	2.00	2.00	濃灰色	滑石片岩	B		
22 202	116	D-17	石製品	白玉	4.00	2.50	1.50	灰色	滑石片岩	B		
22 203	139	D-17	石製品	白玉	4.50	2.50	2.00	灰色	滑石片岩	B		
22 204	158	D-17	石製品	白玉	7.00	4.50	1.50	灰色	滑石片岩	B		
22 205	200	D-18	石製品	白玉	4.00	2.00	1.00	灰色	蛇紋岩	B	調整精緻	
22 206	203	D-18	石製品	白玉	4.00	2.00	1.00	灰色	蛇紋岩	B		
22 207	242	D-17	石製品	白玉	5.00	1.50	1.50	白褐色	滑石片岩	B		
22 208	255	F-18	石製品	白玉	5.00	4.00	2.00	灰色	滑石片岩	B		
22 209	256	SD230	石製品	白玉	3.50	1.00	1.50	灰色	滑石片岩	B		
22 210	26	E-17	石製品	白玉	4.50	2.00	1.50	綠灰色	滑石片岩	C I		
22 211	197	D-18	石製品	白玉	4.00	3.00	1.50	灰色	滑石片岩	C I		
22 212	202	D-18	石製品	白玉	4.00	2.00	2.00	濃灰色	蛇紋岩	C I		
22 213	#3 1010	D-21	石製品	白玉	6.50	2.00	2.00	灰白色	滑石	C I		
22 214	250	SD230	石製品	白玉	4.50	1.50	1.50	灰色	滑石片岩	C II		
22 215	1015	SD326	石製品	白玉	5.50	3.00	2.00	濃灰色	滑石片岩	C II		
22 216	#3 1004	SH2-P19	石製品	白玉	5.00	3.00	2.00	灰色	滑石	C II		
22 217	18	D-17	石製品	白玉	4.00	2.50	2.00	灰色	滑石片岩	C II		
22 218	233	D-17	石製品	白玉	4.50	2.50	1.50	濃灰色	滑石片岩	C II		
22 219	40	D-17	石製品	白玉	4.00	2.50	2.00	灰色	滑石片岩	C II		
22 220	46	D-17	石製品	白玉	5.00	2.00	1.50	灰褐色	滑石	C II		
22 221	130	D-17	石製品	白玉	4.00	2.50	1.00	灰色	滑石片岩	C II		
22 222	133	D-17	石製品	白玉	4.50	3.50	2.00	灰色	滑石片岩	C II		
22 223	136	D-17	石製品	白玉	4.50	2.00	1.50	濃灰色	滑石片岩	C II		
22 224	211	D-17	石製品	白玉	4.00	2.00	1.50	濃灰色	滑石片岩	C II		
22 225	212	D-17	石製品	白玉	5.00	3.00	2.50	灰色	滑石片岩	C II		
22 226	213	D-17	石製品	白玉	8.00	1.50	2.50	灰色	滑石片岩	C II		
22 227	68	D-17	石製品	白玉	5.00	2.00	1.50	灰色	滑石片岩	C II		
22 228	73	D-17	石製品	白玉	4.00	2.50	1.50	濃灰色	蛇紋岩	C II		
22 229	87	D-17	石製品	白玉	4.00	1.50	2.00	綠灰色	滑石片岩	C II		
22 230	112	D-17	石製品	白玉	5.00	4.00	1.50	濃灰色	蛇紋岩	C II		
22 231	162	D-17	石製品	白玉	5.00	3.00	1.00	黃灰色	滑石	C II		
22 232	181	D-17	石製品	白玉	5.00	4.00	1.50	灰色	滑石片岩	C II		
22 233	184	D-17	石製品	白玉	4.50	2.00	1.50	濃灰色	滑石片岩	C II		
22 234	188	D-17	石製品	白玉	4.00	3.00	1.50	灰色	滑石片岩	C II		
22 235	221	D-17	石製品	白玉	5.00	2.50	2.50	灰色	滑石片岩	C II		
22 236	224	D-17	石製品	白玉	4.00	4.00	1.50	灰色	滑石片岩	C II		
22 237	15	D-17	石製品	白玉	4.50	3.50	1.50	濃灰色	滑石片岩	C II		
22 238	25	E-17	石製品	白玉	5.00	3.50	2.50	灰色	滑石片岩	C II		
22 239	43	E-17	石製品	白玉	4.00	1.50	1.50	灰褐色	滑石	C II	両側穿孔	
22 240	109	E-17	石製品	白玉	6.00	5.00	2.00	灰色	滑石片岩	C II		
22 241	55	D-18	石製品	白玉	4.00	1.00	2.00	濃灰色	蛇紋岩	C II	両側穿孔	
22 242	196	D-18	石製品	白玉	5.00	2.00	1.00	濃灰色	滑石片岩	C II		
22 243	1017	SF202	石製品	白玉	5.50	1.50	1.50	灰色	滑石片岩	C II		
22 244	1020	E-20	石製品	白玉	5.50	4.00	2.00	灰色	滑石片岩	C II		
22 245	1021	E-22	石製品	白玉	4.50	3.50	2.00	濃灰色	滑石片岩	C II		
22 246	243	D-17	石製品	白玉	4.00	1.50	2.00	灰色	滑石片岩	C II		
22 247	3	D-17	石製品	白玉	6.00	3.00	1.50	黃灰色	蛇紋岩	C II		
22 248	5	D-17	石製品	白玉	5.00	3.50	1.50	灰白色	滑石	C II		

図番	写真 図版	遺物 番号	遺構	種別	器種	法量(cm)			色調	材質	分類	備考
						直径	全厚	孔径				
22 249	#3	7	D-17	石製品	白玉	8.00	4.00	2.50	灰褐色	滑石	C II	
22 250	31	E-17	石製品	白玉	5.00	4.00	2.00	灰色	滑石片岩	C II		
22 251	32	D-17	石製品	白玉	4.00	1.00	2.00	灰色	蛇紋岩	C II	両側穿孔	
22 252	45	D-18	石製品	白玉	4.00	1.50	1.50	灰色	滑石片岩	C II		
22 253	47	D-18	石製品	白玉	4.00	2.00	1.50	濃灰色	蛇紋岩	C II	両側穿孔	
22 254	74	E-16	石製品	白玉	6.00	4.00	2.00	灰色	滑石片岩	C II		
22 255	102	E-17	石製品	白玉	5.50	3.00	2.00	灰色	滑石片岩	C II		
22 256	41	D-17	石製品	白玉	5.00	4.50	2.00	灰褐色	滑石片岩	C III		
22 257	#3	120	D-17	石製品	白玉	5.50	3.50	1.50	灰白色	滑石	C III	両側穿孔
22 258	154	D-17	石製品	白玉	3.50	3.50	1.50	淡褐色	滑石片岩	C III	風化進行	
22 259	76	E-16	石製品	白玉	5.50	1.50	1.50	灰色	滑石	C III		
22 260	261	SD253	石製品	白玉	5.00	3.00	1.50	灰色	滑石片岩	C	調整精緻	
22 261	79	SF32	石製品	白玉	4.00	1.00	1.50	濃灰色	滑石片岩	C		
22 262	56	D-17	石製品	白玉	5.00	3.00	2.00	灰色	滑石片岩	C	両側穿孔	
22 263	206	D-17	石製品	白玉	4.50	2.00	1.50	灰色	滑石片岩	C		
22 264	84	D-17	石製品	白玉	3.50	1.50	1.50	灰色	蛇紋岩	C		
22 265	85	D-17	石製品	白玉	4.50	2.50	1.50	濃灰色	滑石片岩	C	調整精緻	
22 266	88	D-17	石製品	白玉	4.00	2.50	2.00	綠色	蛇紋岩	C	調整精緻	
22 267	10	D-17	石製品	白玉	3.50	1.50	1.00	灰色	滑石片岩	C	調整精緻	
22 268	82	D-18	石製品	白玉	3.50	1.00	1.00	濃灰色	蛇紋岩	C		
22 269	34	D-17	石製品	白玉	5.00	3.50	2.00	灰色	滑石	C	調整精緻	
22 270	38	D-17	石製品	白玉	4.00	3.00	1.00	灰色	滑石片岩	C		
22 271	1011	D-21	石製品	白玉	6.50	2.50	2.00	灰褐色	滑石		剥片状	
22 272	78	E-17	石製品	白玉	5.00	2.00	2.00	灰白色	滑石		剥片状	
22 273	#3	17	D-17	ガラス製品	玉	4.00	3.50	1.00	明青色	ガラス		孔と平行にのびる 気泡が観察可
22 274	#3	72	D-17	ガラス製品	玉	4.00	2.50	1.50	暗青色	ガラス		
22 275	#3	1003	E-19	石製品	鍊車	(4.40)	(1.10)	(0.90)	濃灰色	蛇紋岩		欠損
		264	SB201	石製品	白玉	4.00	2.50	1.50	灰白色	滑石片岩	B I	
		265	SB201	石製品	白玉	4.00	2.50	1.50	濃灰色	蛇紋岩	B I	
		266	SB201	石製品	白玉	4.00	2.50	2.00	灰白色	滑石片岩	B I	
		267	SB201	石製品	白玉	3.50	2.00	2.00	灰白色	滑石片岩	C II	
		268	SB201	石製品	白玉	5.00	2.50	1.50	灰白色	蛇紋岩	C II	
		269	SB201	石製品	白玉	4.00	2.00	1.50	濃灰色	蛇紋岩	C II	
		270	SB201	石製品	白玉	4.50	4.00	2.00	灰白色	滑石片岩	C II	
		271	SB201	石製品	白玉	4.50	2.00	1.50	濃灰色	蛇紋岩	A I	
		272	SB201	石製品	白玉	4.50	3.50	2.00	灰褐色	滑石片岩	B I	
		273	SB201	石製品	白玉	4.50	3.00	1.50	灰白色	滑石	C II	
		274	SB201	石製品	白玉	3.50	2.00	2.00	灰白色	滑石片岩	B I	
		275	SB201	石製品	白玉	3.50	1.50	1.00	灰白色	滑石片岩	C I	
		276	SB201	石製品	白玉	4.50	2.00	1.50	灰白色	滑石片岩	B I	

図番	写真 図版	遺物 番号	遺構	種別	遺物名	法量(cm)				石材	使用面	その他
						長辺	短辺	最大厚	重量(g)			
23 1	51	1427	SH6-P2	石製品	砥石	11.20	9.50	3.30	162	珪質安山岩	4面	
23 2	51	3002	SD16	石製品	砥石	6.40	6.20	4.20	139	流紋質凝灰岩	4面	
23 3	51	4093	SP46	石製品	砥石	3.20	1.70	1.50	9	基底質質岩	4面	
23 4	51	4019	SP52	石製品	砥石	7.70	4.30	3.90	181	流紋質凝灰岩	3面	
23 5	51	8105	D-18	石製品	砥石	6.80	4.80	1.65	84	流紋質凝灰岩	4面	
23 6	51	1002	表土	石製品	砥石	5.00	2.40	0.90	18	流紋質凝灰岩	5面	
23 7	51	193	SD284	石製品	砥石	3.90	2.00	2.00	16	流紋質凝灰岩	3面	

表9 恒武西宮遺跡 土製品一覧表

図番	番	写真 図番	遺物 番号	遺構	種別	遺物名	法量(cm)				色調	その他
							長さ	最大径	内径	重量(g)		
24	1	51	26	SP224	土製品	土鈴	6.60	1.90	0.40	18.01	にぶい黄橙	
24	2	51	8	SP27	土製品	土鈴	4.20	0.90	0.20	3.17	にぶい黄橙	
24	3	51	3	SF54	土製品	土鈴	2.65	1.40	0.30	5.50	にぶい黄橙	
24	4	51	11	SD9	土製品	土鈴	3.30	1.20	0.25	3.79	にぶい赤褐色	
24	5	51	1004	SD12	土製品	土鈴	3.50	1.50	0.40	8.33	黒	
24	6		1005	SD12	土製品	土鈴	3.60	1.30	0.35	4.94	にぶい黄橙	
24	7		1003	SD12	土製品	土鈴	3.60	1.00	0.28	3.89	にぶい褐色	
24	8	51	14	SD27	土製品	土鈴	2.80	1.55	0.30	6.80	黄灰	
24	9	51	25	SD30	土製品	土鈴	3.90	1.10	0.25	3.67	棕	
24	10		28	SX1	土製品	土鈴	3.80	1.00	0.28	3.74	にぶい黄橙	
24	11		27	SX1	土製品	土鈴	3.70	1.00	0.25	3.82	にぶい黄橙	
24	12		29	SX1	土製品	土鈴	3.40	1.00	0.35	3.47	にぶい黄橙	
24	13	51	15	SX2	土製品	土鈴	(6.10)	1.75	0.70	12.28	棕	一部欠損
24	14		18	SX2	土製品	土鈴	3.90	1.00	0.25	3.42	にぶい黄橙	
24	15		19	SX2	土製品	土鈴	3.60	0.80	0.23	2.10	黒褐色	
24	16	51	22	SX2	土製品	土鈴	2.60	1.40	0.24	6.47	にぶい黄橙	
24	17	51	1030	横乱	土製品	土鈴	4.40	1.85	0.25	13.95	にぶい黄橙	
24	18	51	1007	E-21	土製品	土鈴	(4.30)	1.30	0.25	7.60	黒褐色	一部欠損
24	19	51	1002	E-21	土製品	土鈴	4.50	1.35	0.30	7.21	棕	
24	20		1	C-17	土製品	土鈴	(4.20)	0.95	0.15	3.16	にぶい黄橙	一部欠損
24	21	51	24	D-16	土製品	土鈴	3.90	1.45	0.40	7.43	灰白	
24	22		21	E-22	土製品	土鈴	3.80	0.95	0.20	3.20	棕	
24	23		8001	D-20	土製品	土鈴	3.80	1.00	0.30	3.01	棕	
24	24	51	2	E-17	土製品	土鈴	3.40	1.50	0.30	8.86	棕	
24	25		1036	横乱	土製品	土鈴	(3.50)	1.10	0.20	4.10	にぶい黄橙	一部欠損
24	26		9	F-18	土製品	土鈴	3.60	0.85	0.15	2.49	明褐色	
24	27		1001	D-19	土製品	土鈴	3.20	0.90	0.30	2.31	棕	
24	28		7	E-17	土製品	土鈴	3.00	1.60	0.20	8.28	にぶい黄橙	
24	29		10	C-16	土製品	土鈴	1.60	1.20	0.25	4.33	灰白	
24	30		5	C-17	土製品	土鈴	2.50	1.40	0.20	5.11	灰白	
24	31	51	2079	SP327	土製品	輪羽口	(4.40)	(4.65)	-	37.77	浅黄橙	欠損
24	32	51	-	SF12	土製品	人形	(2.50)	幅	2.20	6.68	にぶい黄橙	人形の頭のみ残存
24	33	51	-	SF12	土製品	狛犬	高さ 3.70	幅 2.80	高さ 1.40	9.83	にぶい黄橙	
24	34		1007	F-17	土製品	土玉?	厚さ 0.75	1.5	0.2	1.35	にぶい黄橙	
24	35	51	4	E-18	土製品	紡錘車	高さ 2.1	3.85	0.60	3.13	にぶい黄橙	

表10 恒武西宮遺跡 木製品一覧表

図番	番	写真 図番	遺物 番号	遺構	種別	器種	法量(cm)			樹種	その他
							長さ	幅	厚さ		
25	1	52	60	SE1	不明	不明	(4.20)	(1.30)	0.20	ヒノキ:板目	
25	2		54	SE3	容器	栓	5.80	3.60	2.70	アカマツ	
25	3	52	48①	SE3	容器	栓	6.30	2.60	2.30	ツブライジ:芯持材	
25	4	52	40	SE3	容器	曲物 桶	20.40	20.80	1.50	杉	底板
25	5	52	55	SE3	不明	塔婆?	(5.80)	4.50	0.40	杉:板目	
25	6	52	15①	SX1	容器	曲物	(19.60)	(2.70)	1.10	ヒノキ:板目	底板
25	7	52	13⑤	SX1	容器	曲物	5.00	2.30	0.40	ヒノキ:板目	側板
25	8	52	13④	SX1	祭祀具?	木簡?	10.90	2.50	0.70	ヒノキ:板目	
25	9		12	SX1	不明	不明	4.20	4.10	3.20	ヒノキ:板目	
25	10		15②	SX1	不明	不明	4.70	2.40	2.20	ヒノキ:板目	
25	11		64②	SX1	不明	不明	8.50	3.30	1.10	ヒノキ:斜板目	
25	12	52	13②	SX1	不明	不明	35.30	10.00	1.20	ヒノキ:斜板目	
25	13	52	13①	SX1	不明	不明	37.60	5.00	1.70	ヒノキ:板目	
25	14	52	64①	SX1	不明	不明	12.70	8.90	6.40	ヒノキ:斜板目	
25	15		13③	SX1	不明	不明	11.40	4.70	3.50	スダジイ:板目	
25	16		14	SX1	不明	不明	9.00	6.50	5.40	ヒノキ:板目	
25	17	52	52	SX2	不明	不明	9.20	4.30	2.10	ヒノキ:板目	

第V章 笠井若林遺跡の調査

第1節 調査の概要

笠井若林遺跡は第I章でも述べたように恒武西宮遺跡から約500m北の地点で、3次にわたる調査を実施している。ここでは1次調査地点をI区、2次調査地点をII区、3次調査地点をIII区として報告する。このうちIII区については市道大島豊西線を挟み、南と北に調査区が分かれるがIII区として一括する。

確認調査の結果、2つの造構面が想定されたことから2面調査を行った。第III章第3節でもふれたように、基本的には第1面は3層下部または下面、第2面は4層下部または下面で検出した。しかし恒武西宮遺跡同様、面で全ての造構が検出できた訳ではなく、実際には数面にわたって確認している場合も多い。したがって各区における全体図は恒武西宮遺跡同様、造構・遺物を検討した上で第1面は中～近世、第2面は古墳・奈良・平安時代に帰属する造構を編集した図である。

古墳時代の造構は基本的には第2面で確認したが、プランが見えにくかったため、第2面の検出面よりも平面的に掘り下げて検出した造構も多い。ほとんどが古墳時代末となる7世紀代を中心とする時期の造構であった。それも調査区内ではかなり散在するあり方を示し、III区で竪穴住居跡1軒などが確認された程度である。恒武西宮・恒武西浦遺跡の方が散在的なあり方を示すとはい、集落としては中心に近く、笠井若林遺跡周辺はまだ人々の居住が本格的ではなかったのだろう。

奈良時代になると造構は第2面において数多く確認されるようになる。しかし、奈良時代前半期には造構・遺物共に前代とあまり変わらず少ない。中頃から後半にかけて造構・遺物は激増する。それは平安時代初頭にかけて続くが、平安時代中・後期になると急速に衰退していくようである。奈良時代後半から平安時代初頭の造構は竪穴住居跡27軒が検出された。特にIII区の南側調査区だけで18軒と集中する。掘立柱建物跡は6棟を確認したに過ぎず、竪穴住居跡を主体とする集落であったことが予想される。また、竪穴住居跡の中には焼土と炭化物の集中する小穴が検出されている例もあり、その中にはスラッグ状の鉄滓がみられることから集落内で鉄に関わるなんらかの作業を行っていることが判明した。

中世前期～後期の造構は第1面で検出した。時期についての考え方は第IV章と同様である。中世前期の造構はII区ではほとんどなく、I区からIII区にかけて掘立柱建物跡2棟、井戸1基などを検出したが、多くの人々が居住した形跡はない。なお、この時期に多く出土する山茶碗類の産地は特に触れてない場合、湖西・渥美産である。

中世後期について、II区では比較的小規模な掘立柱建物を囲うように方形区画を志向する溝が確認された。区画溝を持つ集落の一部と思われる。III区でも区画溝と掘立柱建物3棟が検出されたことから、そうした集落の一部があったと思われる。区画溝の方向は調査区内で検出した近世の溝ともほぼ一致しており、さらに昭和初期の地割（第196図参照）とも一致している部分があることから、現代に至るまでその区画は続いていることが確認できる。

以下、上記区分にしたがって古墳・奈良・平安時代、中～近世に大きく分け、各地区ごと、さらに造構の種別ごとに分けて記述する。なお、造構の計測値は第11～13表に掲載した。

第2節 I 区の遺構と遺物

①古墳・奈良・平安時代

掘立柱建物跡

SH203（第72図）

I 区で検出した唯一の掘立柱建物跡である。K68区で検出され、規模も梁間1間×桁行2間と小規模で、桁行方向はN10° Wである。柱間は梁間約2.2m、桁行は約1.7mであるが、東側のP5の柱痕と思われる柱穴を見ると必ずしも正確に基準を決めて建てているとはいい難い。柱穴は検出面からの深さが20～30cm程度とかなり浅い。特にP1・2・4・5はSD243によって切られており、残存状態も悪い。本来は上層から掘り込まれていた可能性が高い。柱穴の底はいずれも基盤層である砂礫層（7層）にまで達しており、建物としては安定していたと思われる。遺物は出土しておらず、詳しい時期のわかる資料はないが、8世紀末～9世紀初頭の遺構と思われるSD243よりも古いことは確実である。周囲には古墳時代まで遡る遺構が見当たらないため、消極的にではあるが、遺構の年代は8世紀前半～中頃の時期と推定する。

竪穴住居跡

SB205（第73図）

J68区においてSB206とは重複して検出され、こちらの方が古い。北を基準とした棟方位はN8° Wである。西側はSB206、東はSD28に切られているが、残存した部分では南北3.2m、東西2.9mの規模を測る。SD243とも重複するが埋土はオリーブ褐色土で、炭化物や焼土を含む。竪、明確な床面は見出せず、柱穴も検出していないが、平面形が方形となることから竪穴住居跡として捉えた。

遺物は1-1～7が出土した。1～4は須恵器である。1は有台坏で、高台は底部の中央に寄った形でつく。口縁端部は明瞭に外反する。2は箱坏で、底部と体部の境はナデによってやや丸みを帯びる。3・4は皿である。3は口径がやや小さく、体部下半はナデによるノタメが顕著である。4は口径が大きく、底部と体部の境は不明瞭である。いずれも口縁はやや外反している。5～7は土器である。5は皿で、底部と体部の境は緩やかである。6・7は長胴甌であるが、7の口縁は受け口状に上方に引き上げられ、6はそのまま引き出される。出土遺物は8世紀後半～9世紀初頭に位置付けられ、SD243よりも新しくSB206よりも古いことから9世紀初頭のかなり短期間に営まれた住居と思われる。

SB206（第74図）

SB205と切り合い関係があり、こちらが新しい。南北3.7m、東西3.7mを測り、平面形はほぼ正方形に近い。北を基準とした棟方位はN11° Wである。埋土は黄褐色土で、明確な床面や竪、柱穴は検出していない。特筆すべきは土器をはじめとした遺物が大量に出土したことである。遺物は遺構全体に広がり、出土レベルもまちまちであるため、遺構が廃絶した後に投棄されたものであろうと推測する。ここでは竪穴住居跡として捉えたが、別の性格を有する遺構である可能性も残る。

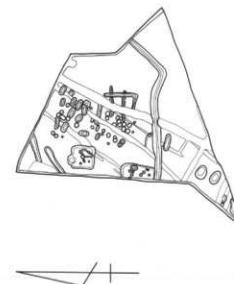
遺物は大量に出土しており、1-8～25・2-1～26・3-1～12の56点を図示した。図化できない小破片はさらに多量にのぼる。1-8～25・2-1～6は須恵器である。1-8～14は箱坏で、底部の調整については8が中央部と外周を削り2段になっている。9～11は中央部を削り、外周をナデすることで2段となる。12～14は平らに削られるが、14はやや中央部が膨らむようである。法量は口径8.5～15.7cmで、13は最も小型品である。12の口縁内面はナデによる凹みが沈線状に巡る。15～19は坏蓋である。口縁端部は15が強く折り返される他は、16～18のようにわずかに下方に折れる程度である。17・18は突起が巡る程度にしか折られない。

84 | 83 | 82 | 81 | 80 | 79 | 78 | 77 | 76 | 75 | 74 | 73 | 72 | 71 | 70 | 69 | 68 | 67 | 66 | 65 | 64 | 63 | 62 | 61 | 60 | 59 | 58 | 57 | 56 | 55 | 54

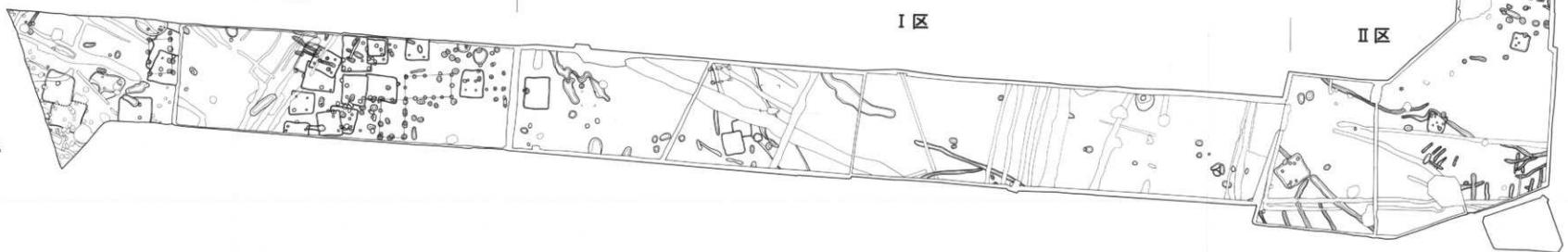
0
第68図 笠井若林遺跡第2面・第1面遺構全体図

N
2面

III区(北)

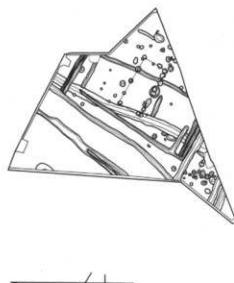


III区(南)

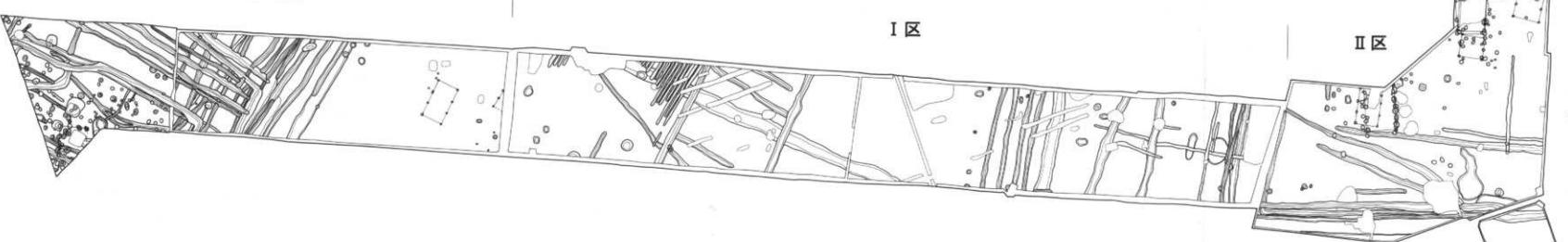


N
1面

III区(北)



III区(南)



84 | 83 | 82 | 81 | 80 | 79 | 78 | 77 | 76 | 75 | 74 | 73 | 72 | 71 | 70 | 69 | 68 | 67 | 66 | 65 | 64 | 63 | 62 | 61 | 60 | 59 | 58 | 57 | 56 | 55 | 54

-117.118 -

63

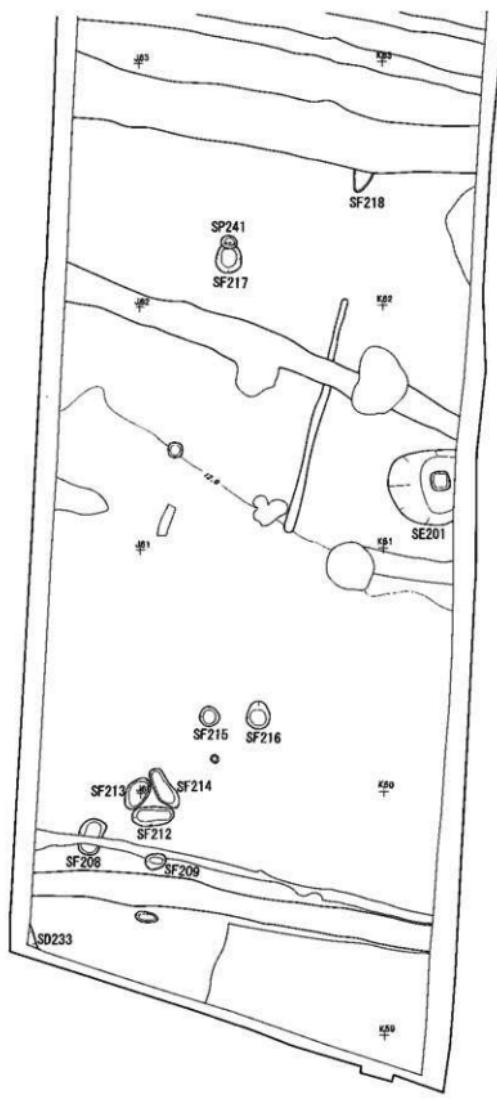
62

61

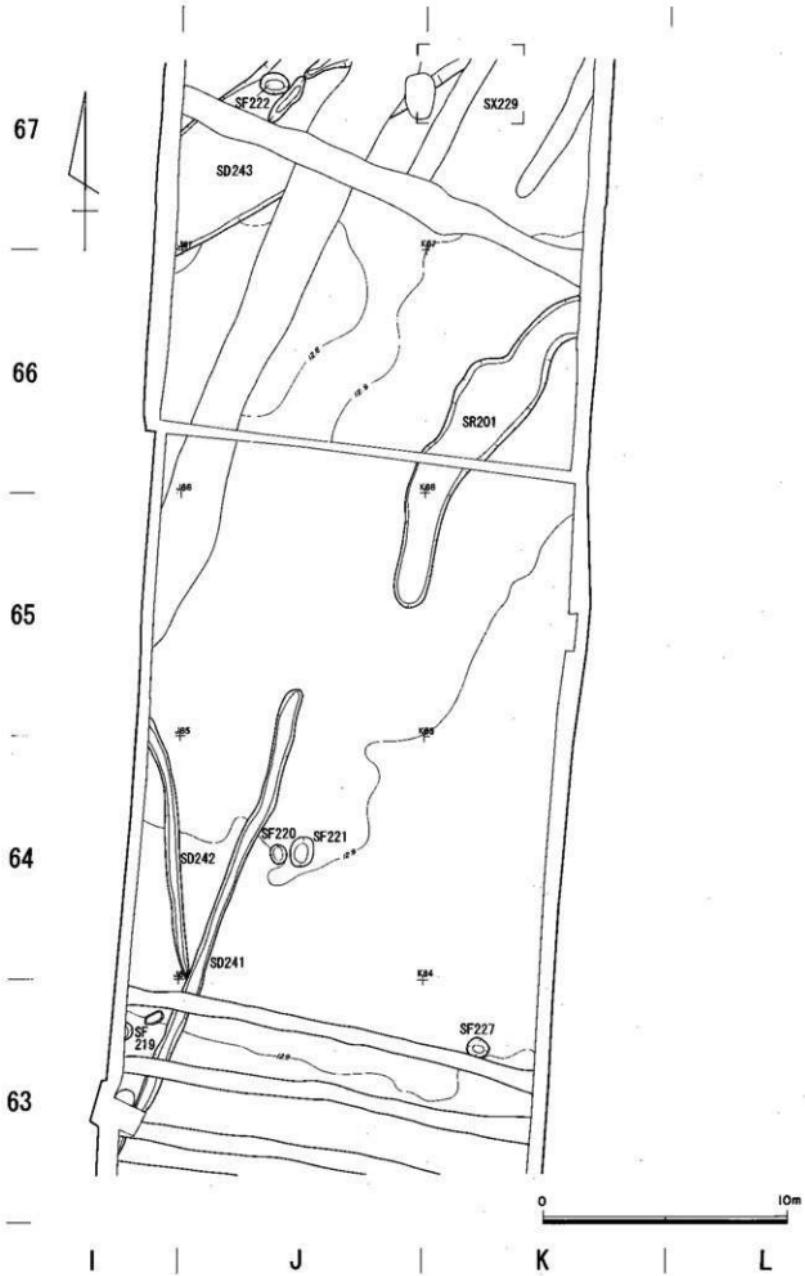
60

59

58



第69図 笠井若林遺跡I区第2面平面図1



第70図 笠井若林遺跡I区第2面平面図2

72

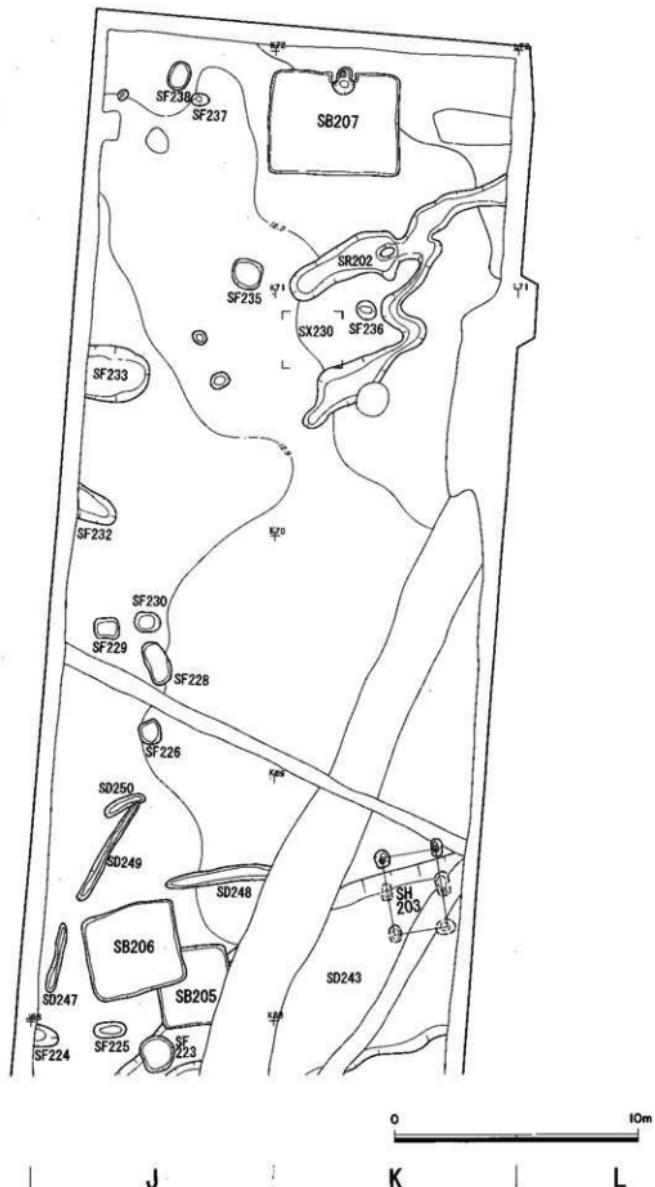
71

70

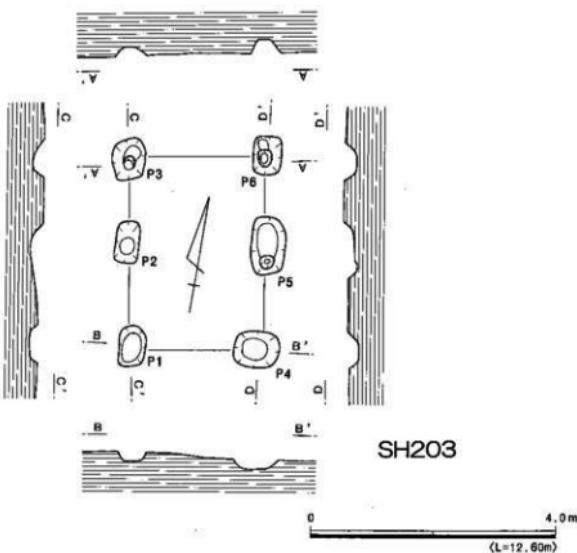
69

68

67



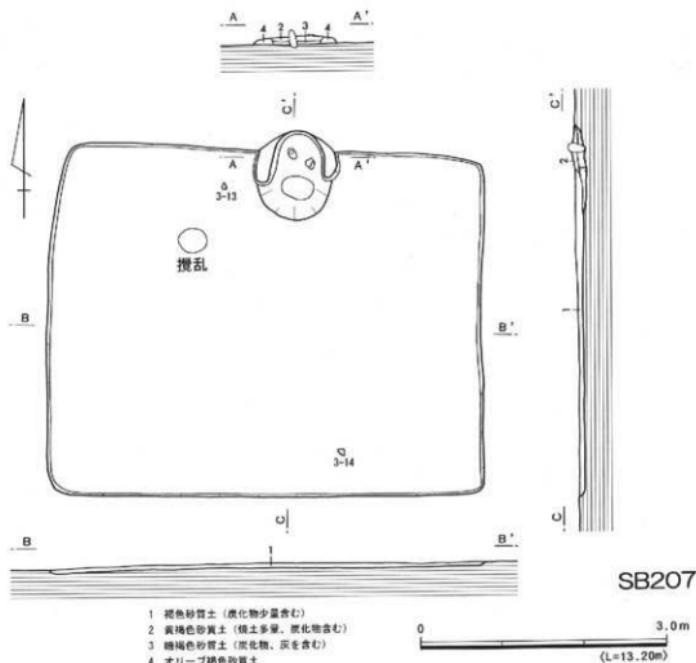
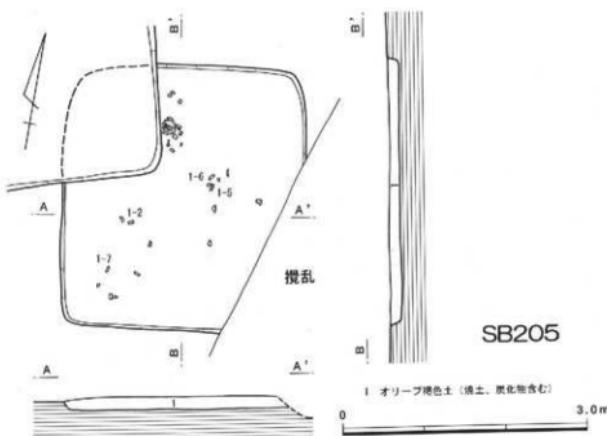
第71図 立井若林遺跡 I 区第2面平面図3



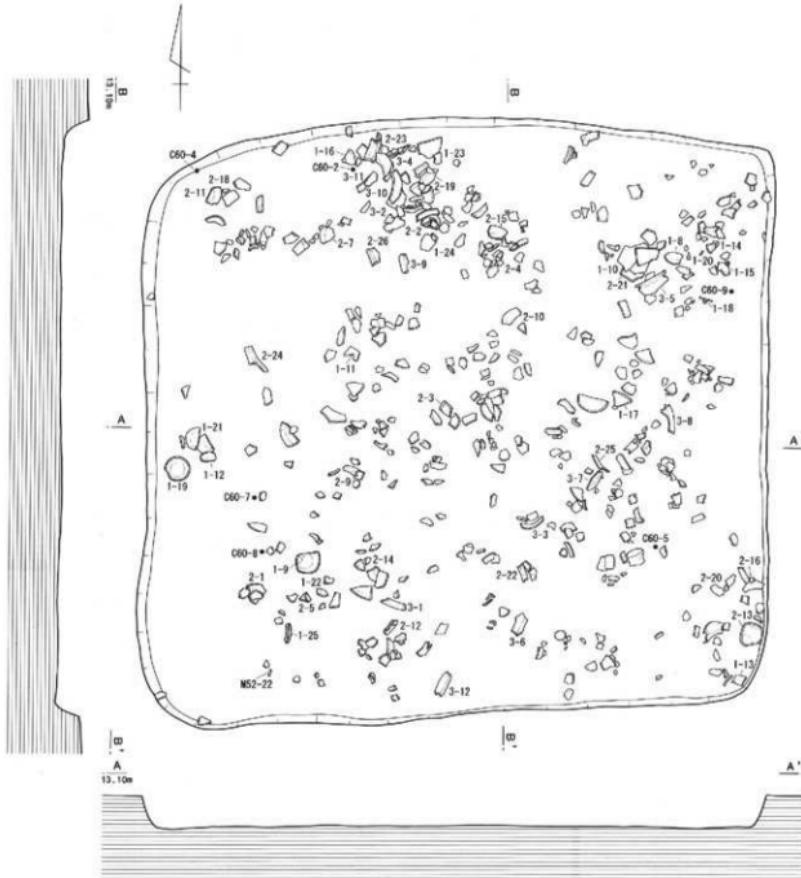
第72図 SH203 実測図

つまみは宝珠形で、15・16が扁平、17・18は高いが18のように径が小さくなるものもある。15と16には内面に墨書がある。15は「中」、16は「井」と思われるが墨痕の遺存状態が悪く、明確ではない。20～25は皿である。20は口縁端部を丸くつくり、20～24は口縁上部に面をつくり出している。25は口縁部のみの残存のため皿としたが、有台皿の可能性が高い。底部から体部にかけては明瞭に稜があり、大型品である。21の底部の中心部分には径2cmほどの窟みが確認された。底部はヘラ削り調整であるが、調整後の乾燥時についたとみられる圧痕が確認できる。これは蘿束や蘿のように比較的柔らかいものであることが、窟み部分についた圧痕の様子によって推定される。2-1~5は盤である。3~5は口縁部のみの残存のため盤に含めたが、高盤の可能性も高い。口縁端部はいずれも折られるが、1は内面を丸めながらや外反させ、2は上方に引き出す。3・4は上面にナデによる凹みを持ち、5は丸く仕上げている。2-6は円面観の体部破片である。上下に浅く広い沈線を同心円状に施し、透かしの間には縦方向の沈線を施す。

2-7~26・3-1~12は土師器である。2-7~11は坏で、体部から口縁はいずれもやや斜めに立ち上がり、内外面に丹が塗られる。2-12~15は有台坏である。いずれも高台が底部と体部の境付近につけられ、14・15は口縁端部が外反する。13は形態がやや異なり、全体が丸みを帯びており、高台も外に踏ん張るようにつけられ、高くしっかりとしたつくりとなる。内面は黒色処理され、ミガキが施される内黒土器の範疇に入るものであろう。16・17は坏蓋である。16のつまみは宝珠状だが、接合部がくびれない。18～20は皿である。20の口縁端部はやや外反する。21は鉢である。体部から口縁にかけて外反し、体部外面には縦方向のハケ調整がなされる。22は小型の台付壺である。小型壺の底部に台部を接合したような形となる。他にこの形態の台付壺はほとんど確認できない。2-23~26・3-1~11は長胴壺である。口縁の形



第73図 SB205・207 実測図



SB206

第74図 SB206 実測図

態について2-23~26・3-1はほぼ水平、3-2~11はやや内傾する。3-7~11はさらに端部を上方に引き出し、受口状となる。3-12は口径が大きいため、浅い広口の甕であろう。他に52-22の鉄製品である釘が、また60-2~9に示したように多くの土錐が出土している。

以上の遺物は8世紀末~9世紀前半の様相を示すが、SD243が8世紀後半~9世紀初頭の遺構とすればそれよりも新しいSB206は9世紀前半代には廃絶したと考えられる。

SB207 (第73図)

J・K71区で検出した南北4.2m、東西5.2mの東西方向に長い長方形の竪穴住居跡である。北を基準とした棟方位はN0°である。埋土は褐色砂質土で、炭化物を若干含む。甕が北側中央で検出され、オリーブ褐色砂質土で構築された袖の痕跡が確認できた。甕の内部には礫が長軸方向を上下にして据えられており、支柱として使用されたことが想定される。柱穴は全く検出できなかった。

遺物は3-13~16が出土した。13は須恵器杯身で、受けがつく。14は壺蓋である。口縁端部が下方に折られ、末端はやや外に引き出される。15は土師器壺である。外面には輪積み痕と指痕が残る。16は土師器長胴甕である。体部と口縁の境は屈曲するが、明瞭ではない。口縁端部はやや肥厚する。出土遺物にやや幅がみられるが、8世紀中頃の遺構と思われる。13は7世紀代の土器のため、混入品と捉えられる。

土坑

I区では27基の土坑を検出した。その性格を明らかにできるものは少ないが、まとまって遺物が出土する例もある。遺物の年代観から、これら土坑のほとんどは8世紀中頃~後半に位置付けられそうである。

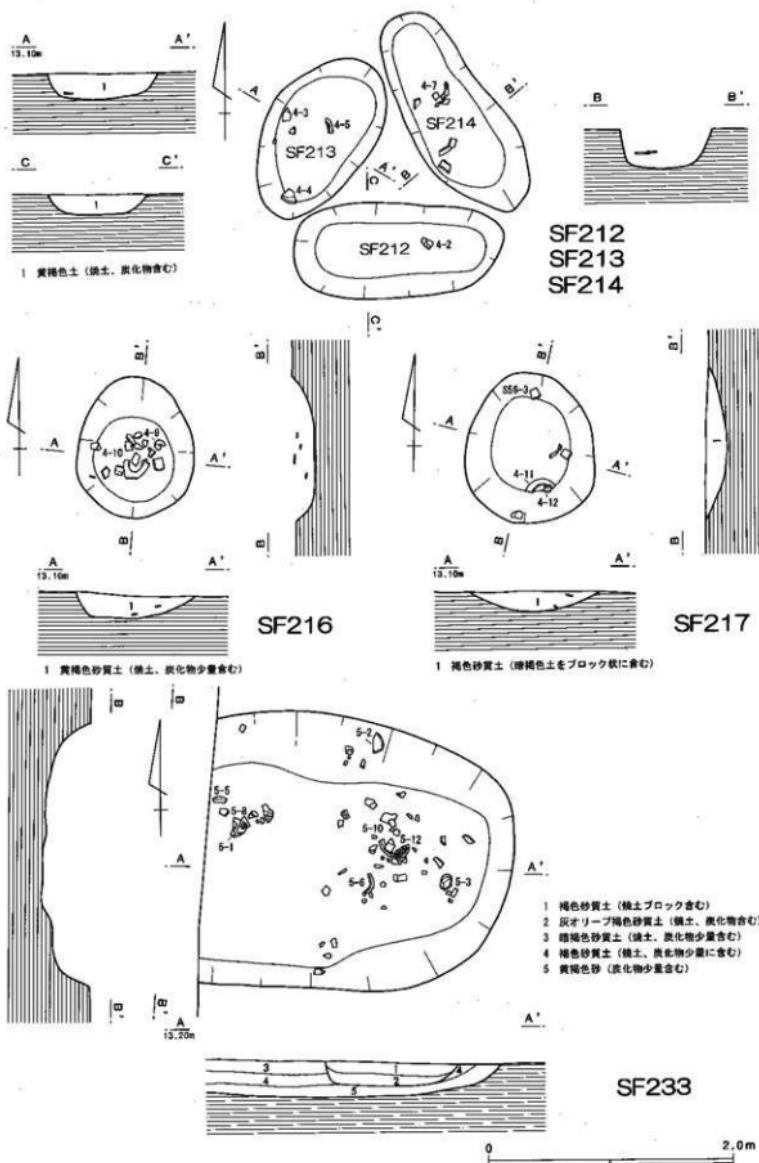
SF209 (第76図)はJ59区で検出された土坑である。底に張り付くように4-1の土師器壺が出土している。SF212・213・214 (第75図)はJ59区付近で近接して検出された楕円形を呈する土坑である。近接しているにも関わらず重複がみられないことから、同時期に掘削された可能性が高い。いずれの埋土にも焼土や炭化物が混じる。SF212からは4-2の土師器甕が出土した。口縁はほぼ水平となる。SF213からは4-3~5が出土している。3は須恵器壺で、底部から体部は丸く、口縁端部はわずかに外反する。4は土師器皿である。底部と体部の境は比較的緩やかで、口縁は短く端部で外反する。5は土師器甕で、口縁は内傾する。SF214からは4-6・7が出土した。いずれも土師器長胴甕の口縁部である。口縁の形態は、6はほぼ水平、7は内傾気味でやや肥厚する。これら遺物から遺構は8世紀中頃~後半のものと思われる。

SF216 (第75図)は楕円形を呈し、埋土には炭化物を含んでいる。遺物は底面よりもやや上層から出土している。遺物は4-8~10を図示した。8は須恵器高壺の脚部である。三方に透かしが入る。9は土師器壺である。口径7.1cmと小型の手捏ね土器である。10は土師器長胴甕で、口縁は内傾し肥厚する。8は混入品であろうと思われる。SF217 (第75図)はJ62区で検出した楕円形の土坑である。内部から4-11・12が出土している。11は土師器長胴甕で、肩部はあまり張らず、口縁は内傾気味である。12は小型甕で、内面にはやや目の粗いハケ調整がみられる。また、砥石56-3が出土している。

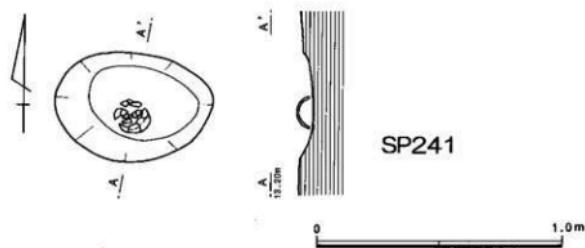
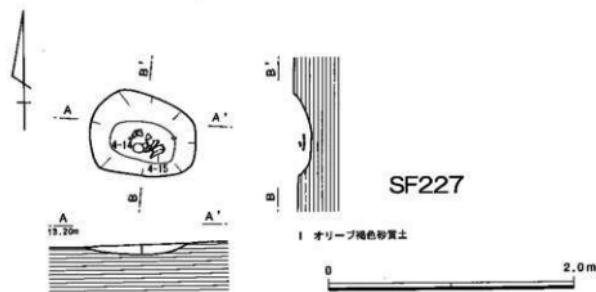
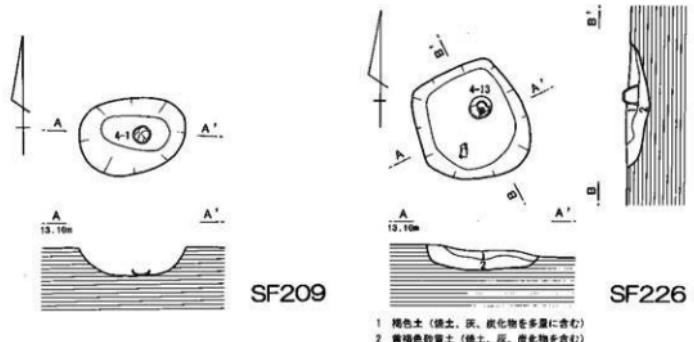
SF226とSP241 (第76図)は遺物の出土状況が類似する。底からやや浮いた状態でいずれも小型甕が伏せた状態で出土した。埋土には多量の焼土や炭化物が混じっており、後述するIII区SB223の例などを見ると本来は住居に伴う甕であった可能性が高い。しかし、周辺部分を何度も精査しても住居のプランは確認できなかった。SF226出土の小型甕は4-13に図示した。

SF227 (第76図)はK63区で検出した小型の土坑である。20cm弱と浅い。遺物は4-14・15が出土した。14は須恵器壺蓋である。端部はわずかに折れて外反する。15は土師器甕である。頸部は緩やかに屈曲し口縁は内傾し、端部は上方に折れ受け口状となる。

SF233 (第75図)はJ70区で検出した楕円形の土坑と思われる。一部は調査区外となることから長径は明らかでない。土層断面の観察では、この遺構が埋没した後にもう一度掘削された可能性が高い。埋土



第75図 SF212・213・214・216・217・233 実測図



第76図 SF209・226・227 SP241 実測図

は全体的に焼土や炭化物がみられ、土器片も多く出土した。遺物は5~1~12が出土した。1・2は須恵器である。1は口縁部のみの残存だが、箱坏と思われる。2は有台坏で、底部から体部はやや丸みを持ちながら屈曲する。口縁は外反気味に立ち上がり端部で外に引き出される。3・4は土師器の坏で、4は大型品である。5は底部と体部が屈曲する皿である。6~8は土師器長胴壺である。6の口縁はくの字状に折れ、やや内傾するのに対し、7・8の屈曲は6ほどではなく、口縁はほぼ水平となる。6・8の外面は縦方向のハケ調整が顕著である。9~11は土師器小型壺である。9・11は頸部の屈曲が弱く、9は口縁がやや短い。いずれもかなり摩滅するが、11の外面には縦方向のハケ調整が残る。12は土師器の広口壺である。頸部の屈曲は緩やかで、口縁は内傾する。体部は肩付近に最大径を持ち、そこから下半は直線的にすぼまる。外面には斜め方向のハケ調整が残る。

溝状遺構

I区ではこの時期の溝状遺構は、SD243を除くと、やや東に傾く南北方向の小溝が検出される程度である。流路としたSR201・202は水の流れなどによる浸食の跡と思われる。ほとんどの小溝はそれら流路と方向を一にしており、流路と同様の成因による溝という見方もできる。

SD243（第77図）はJ66・67~K67・68区周辺で検出した最大幅7.5mの溝状遺構である。自然流路であった可能性が高い。調査区をほぼ横断する形で検出され、その方位はN57°Eである。最下部は基盤層である砂礫層に達する。土層を見ると上層はシルト質であるが、下層は砂層を主体とし、粘土層やシルト層を挟むなど水性堆積を示していると思われる。ある時期までは水流もあり、徐々に埋没していたと考えられるが、上層は比較的短時間に埋没したことが予想される。遺物は図に示したように西側でかなりまとまって検出されている。廃棄状況が復原されるような出土状況ではなく、下層よりも上層の1・2層中で多く出土している。遺物は他の遺構に比べ須恵器の比率が多く、獸足付短頸壺や円面覗といった特殊な遺物も含んでいることは注目できる。

出土遺物は6-2~28・7-1~13・8-1~16を図示した。6-2~28、7-1~13は須恵器である。6-2は坏である。かえりのつく7世紀代の遺物であるため、混入品であろう。6-3~7は有台坏である。いずれも高台が底径に比べ小さく、底部から体部は丸く屈曲する。口縁部まで残る5~7は、体部は開き気味に立ち上がり、端部は外反する。6-8~20は箱坏である。口径15cmを超える大型の8~10、12~13cm台の中型の11~16、10cm前後の小型の17~20と法量によって大きく3つに分けられる。底部は11・18が平らにヘラ削りされるのみで、他はヘラ削りの後、底部の外周をナデている。11は他と比べ器高がかなり高く、器厚も薄く精緻である。6-21~23は蓋である。21~22は坏蓋、23は口径24.9cmとかなり大きく、大型の有台皿の蓋である可能性が高い。つまみは21が高く、22は扁平となる。22は口径13.5cmとやや小型で、口縁端部も突出する程度である。6-24~28は皿である。口縁端部は、26はナデによって上面が凹み、24・25・28は外反気味である。27は上方に立ち上がり、肥厚する。24の底部にはSB206出土の1-21と同様の圧痕が残る。底部の調整はヘラ削りだが、圧痕は調整後のものである。弧状の沈線も確認できるが、これは底部を切り離した際の痕跡が調整では消えずに残ったものであろう。7-1~4は盤である。2~4は高盤の可能性もある。1は体部が長く、深い形状から有台皿という方が適切かもしれない。口縁上面は内面側に面をつくり出す。2~4は口縁端部がやや外反し、4は短い。7-5は高盤の脚部である。端部は下方に折られ、接地面となる。7-6は長頸壺である。頸部以上は失われている。底部には高台がつき、体部は肩がやや丸く張る。肩部付近には沈線が數本巡る。7-7は壺の底部で、いわゆる壺Gとされる製品である。底部には明瞭に糸切り痕が残る。7-8・9は広口長頸壺である。いずれも口縁部は失われ、底部には高台がつく。肩部は折れ、稜を形成している。9はやや小型となる。7-10は平瓶である。上半部のみ残存している。体部上部の中央はふさがれ、穿孔した上で頸部が接合される。頸部の接合部分はやや肥厚し、ナデ



第77図 SD243 実測図

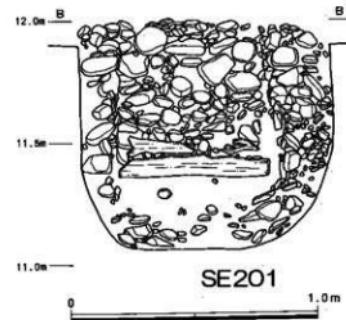
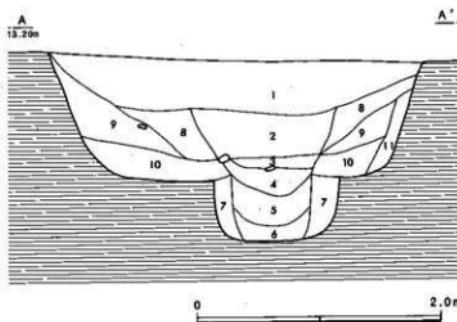
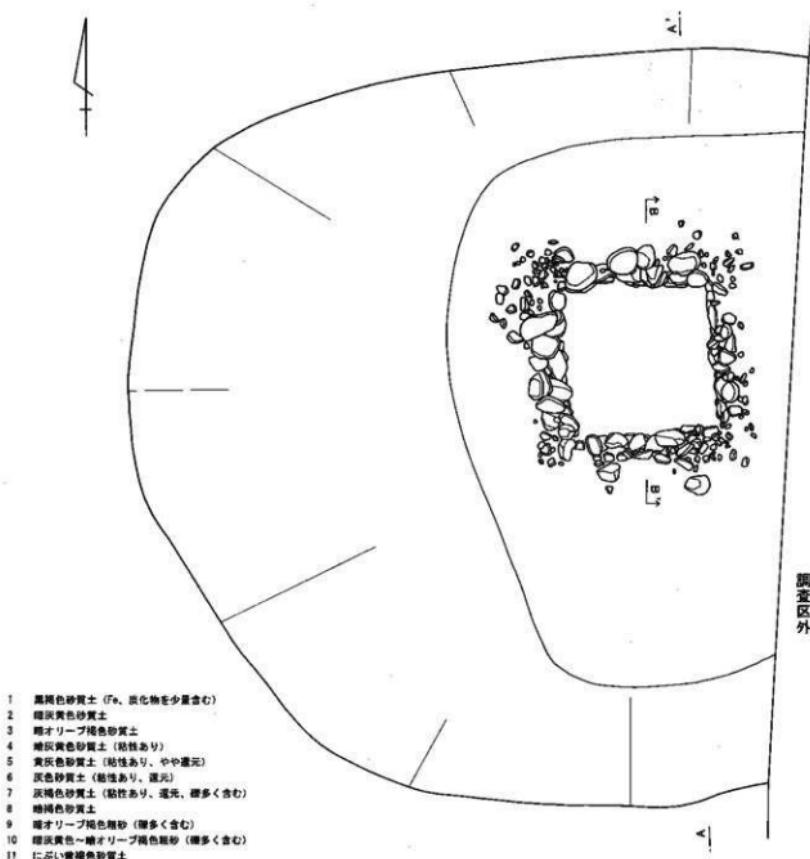
によって仕上げられる。口縁はわずかに外反し、端部はそのまま終わる。7-11は壺の口縁部である。体部にはタキ痕が残る。口縁端部は外反し、やや下に伸びる縁帯をつくり出す。7-12は獸足付短頭壺の獸足部分である。5本指をつくり出すために板状工具により、4条の切り込みを入れ、踵の部分は丸く抉ってある。全体的にヘラ削りにより精緻に調整がなされ、自然軸がわずかに付着する。遠江においては官衙関連遺跡からの出土が知られ、祭祀構造などからの出土もあることから官人や有力富農層の祭祀遺物としての性格を有するとし、またそうした性格や分布、遺物の状態から限定された受注品であった可能性も指摘されている（丸杉2000）。7-13は円面硯の上部破片である。上面端部には突帯が巡る。硯面は明瞭に使用痕がある。体部には八方に透かしを持つ。県内での硯出土例は窓か官衙に集中しているが、当遺跡の西に所在する社口遺跡でも円面硯が出土しており、注目できる。

8-1~16は土師器である。1~4は壺である。いずれも体部は開き気味に立ち上がり、口縁は外反する。5は有台壺である。1~4の壺に高台を付したような形態であるが、器高がやや高い。6~8は皿である。6は底部と体部の境が不明瞭で、8は口径25.8cmと大型品となる。底部には粘土の織目が顕著にみられる。9・10は有台皿である。6~8に高台を付した形状となる。11~15は長頸壺の口縁である。口縁はいずれもほぼ水平となるが、13はやや肥厚し、14・15は端部がやや上方に引き出され、わずかに受け口状となる。16は小型壺である。頸部の屈曲は弱い。これら遺物は8世紀後半から9世紀初頭のものと思われ、SD243の年代もその幅で捉えられよう。

井戸

I 区での当該期の井戸はSE201の1基が検出されているのみである。SE201（第78図）はK61区で検出された。一部は調査区外となるため掘り方の東側は明らかになっていない。掘り方はかなり大きく、東西は確認できた部分で2.98m、南北2.72mである。下部構造としては1辺約70cmを測る方形の井戸側が検出された。井戸側はさらに上方に伸びていたと考えられるが、失われていた。井戸側は本来木を組むなどしてつくられていたと考えられる。調査時点ではわずかな木片と化しておりその構造は明らかではない。井戸側は掘り方を持ち、その中に据えた後に礫を裏込めとして貼り、7層土を充填して固定したと思われる。出土遺物は8-17~20・9-1~14が出土している。土師器の小型壺や皮袋形土製品が多く出土しており、また小型壺がやまとまっていることも意図的なものを感じる。井戸の廃棄に伴って祭祀行為が行われた可能性を示していると思われる。

8-17~19は須恵器である。17は有台壺で底部がやや突出するようである。底部と体部の境は明瞭に折れ、稜を持つ。18は長頸壺で、体部は残存していない。体部に開けられた穴に頸部は接合され、ナデによって仕上げられる。口縁は開き、端部は断面三角を呈する。19は壺の口縁部破片である。端部は突帯状となり、断面は三角となる。8-20は土師器広口壺である。口縁は緩やかに内傾し、端部はやや上方に引き出される。口縁は横ナデだが、外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整が残る。9-1~5は土師器小型壺である。1~3は頸部のくびれが緩やかで、4はやや強く屈曲する。5は長頸壺の口縁に類似する形態である。いずれも外面は縦方向のハケ調整、内面は基本的にはナデであるが1・4はハケ調整がなされるようである。9-6~13は土師器小型壺である。口径は13が5.8cmと小型であるが、他は8cm前後である。粘土の接合痕が残るものが多く、外面は未調整に近く、内面はナデによって仕上げられる。7・12には口縁に横ナデが認められる。9-14は皮袋形土製品である。口縁部は残存していない。この皮袋形土製品は遠江の特徴的な祭祀遺物とされ、浜松市西畠屋遺跡（浜松市1999）でみられるように6~13のような壺とセットで出土することがあり、祭祀にあたって同時に使用されたと思われる。遺物の年代からSE201の年代は8世紀前半～中頃と思われる。



第78図 SE201 実測図

性格不明遺構

I 区では不明遺構として土器集中遺構が検出された。SX229（第79図）はK67区で検出された、SD243の埋没後の遺構である。第2面の検出面で捉えられた。多量の土器と共に礫が出土している。遺物は9-15・16を図示した。15は体部のみ残存していた長頸壺である。肩が張り、稜を持つ。16は口径44.2cm、体部の直径は70cmを測る大型甕である。口縁直下には2条の雑な波状文が施される。外面はタタキ痕が明瞭に残り、内面は同心円文がみられるが、ナデ消される。頸部の内面にも外面同様の工具によるタタキ痕が残る。口縁は外反し、縁帯状となる端部は下方にやや伸びる。

SX230（第80図）はK70区で検出された。第1面からやや下げた層位（4層上部）で捉えられた。各種壺や皿類など供膳具を中心にまとめて出土し、墨書き器が多いことが指摘できる。その出土状況はあまり整然としたものではなく、それ自体から性格を見出すことは困難である。遺物は9-17～20・10-1～27・11-1～17が出土している。9-17～20は須恵器である。17～19は箱壺である。18の底部には墨書きがあり、「仁」とも読みうるが、残存状況が悪く不明確である。20は壺であるが、口縁に比べ底径が小さい形態である。体部下半と底部はヘラ削りが施される。10-1～27・11-1～4は土師器の壺である。10-1～9の体部は直線的に外に開くが、10-10～27・11-1・2はやや外反して立ち上がる。10-10・11は小型品である。10-23は体部に、10-25～27・11-1～3は底部に墨書きが認められる。10-25・11-3は「田中」、11-1は「平」とかろうじて読める程度で、他は残存状況が悪く判読できない。11-4はおそらく9-20の須恵器壺の横倣形態と考えられる。11-5～7は有台壺である。7はやや大型となる。11-8は蓋である。内面はほとんど未調整で指頭が明瞭に残る。11-9～12は皿である。12は底部と体部の境が不明瞭で、底部には判読不能ながら墨書きがある。11-13～15は有台皿である。いずれも外面には指頭が残り、13の内面には板状工具による調整が残る。14の高台内には目の粗い横方向のハケ調整がなされる。11-16・17は長胴甕である。16の口縁は外反するが屈曲は緩やかである。17はコの字状に頸部が屈曲し、口縁はほぼ水平となる。また、53-11の青銅製鏡（柄縁装具）付刀子の片断が出土している。

SX229・230共に8世紀後半～9世紀初頭の遺物と思われる。遺構はSX229では大型甕、230は墨書き土器が出土しており、祭祀的な色合いも感じられる。その場合、祭祀行為がそのまま検出されたというよりは、使用した土器を片付けた跡という可能性の方が高いように思われる。

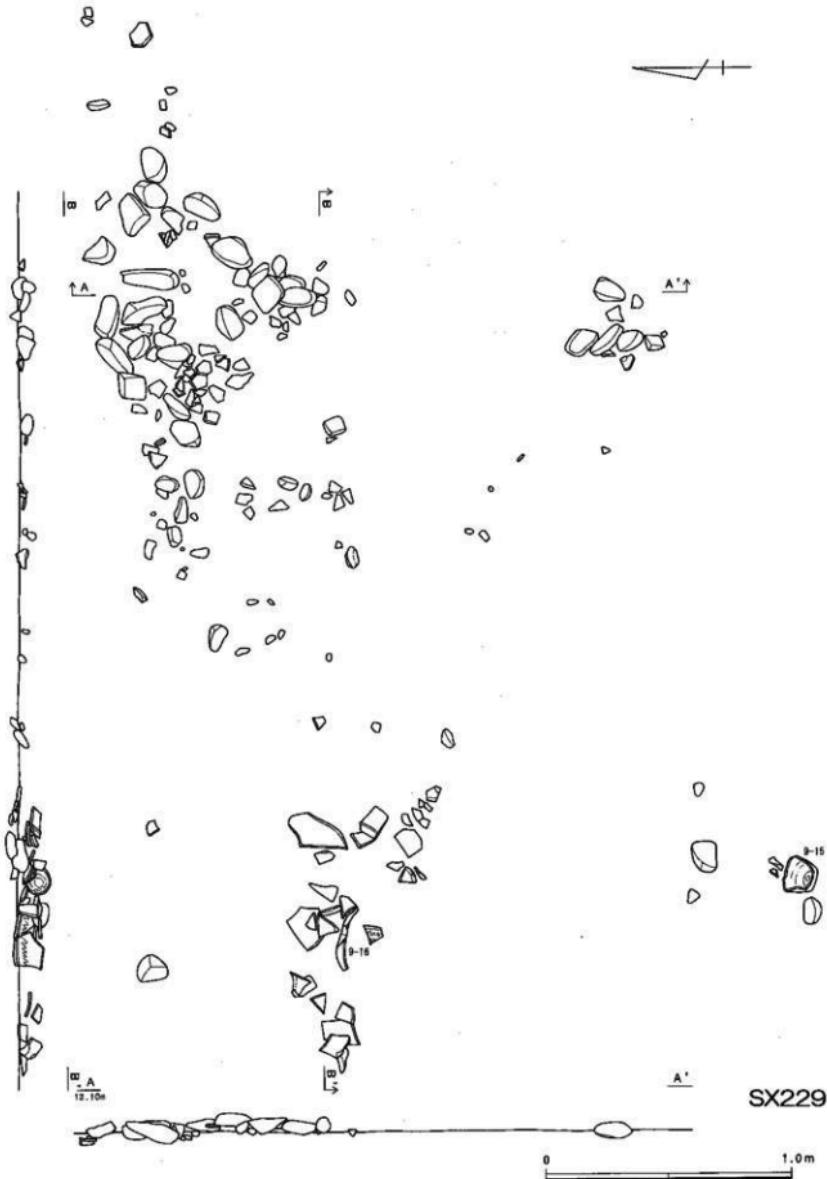
②中世～近世

土坑

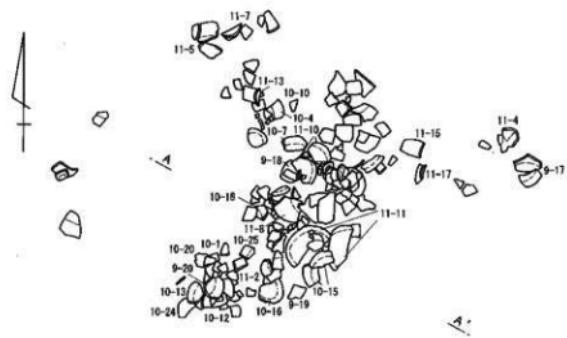
I 区ではこの時期の土坑を19基検出した。SF11（第84図）はJ59区で検出した楕円形の土坑である。長径4.52m、短径3.58mと大型だが深さは10cm程度と浅い。遺物は12-1～6が出土した。1～3は山茶碗である。1は体部から口縁が直線的に開いて立ち上がる。1・2に比べ3の高台はかなり潰れが著しく、やや新しい様相である。4は小皿である。器高が1.7cmとかなり扁平化が進んでおり、8.5cmと口径もかなり小さくなる。5・6は伊勢型鍋である。いずれも頸部は緩やかに屈曲し、5の口縁端部は内面側に折り返される。遺構の年代はこれら遺物から13世紀前半～中頃と推定できる。

SF33（第85図）はJ70区付近で検出されたが、西側は調査区外となり全体は明らかではない。下部はやすやすぼまるような形態を示し、深さは約1.3mと深い。遺物は12-8～10が出土している。8は指による輪花が施され、体部は丸みを持ち口縁は外反する。高台は高く、しっかりとしている。9・10の高台はそれに比べると低くなり、全体的なつくりも10のほうが粗い。遺物の年代幅があるが、遺構の年代は最も新しい10を指標として13世紀前半頃とした。

SF34（第84図）はJ71区で検出した土坑である。周辺にはSF35・36といった遺構も確認されており、その性格は類似すると思われるが特定はできない。SF36（第84図）からは12-11・12が出土した。11は箱壺、

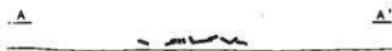


第79図 SX229 実測図



10-21

SX230



第80図 SX230 実測図

12は長胴壺であるが奈良時代の混入品である。

溝状遺構

I区での当該期の遺構の多くは溝状遺構で占められる。調査区を横断するような東西方向の溝が多く検出され、南北方向の溝は少ない。また、こうした溝の方向は戦前の地籍図（第196図）と比べると似かよっていることがわかる。なお、J68・69～K68・69区にかけて検出された並行する小溝群は、出土遺物はほとんどないが、近世以降の耕作によるものと思われる。

SD20～23は近接し、ほぼ東西方向の溝である。埋土も黄褐色砂質土で類似するため、同時期の遺構と思われる。SD20（第86図）はやや特異なあり方を示す。底面よりやや上層で径5～20cm程度の礫が東側を中心に詰まった状態で出土した。整然としている訳ではないため、溝の中に礫をそのまま流し込んだと思われる。おそらく暗渠としての機能を果たしたものと思われる。遺物は12～13～17が出土している。13は小皿である。口縁はやや外反するが、器高は1.6cmと扁平化する。14～16は山茶碗である。14は体部が直線的に立ち上がり、口縁端部は外反する。15・16は高台がほとんど潰れかけている。17は伊勢型鍋の口縁部破片である。これらは13世紀前半～中頃に比定でき、これ以降の遺物も出土していないため、調査時点では遺構の年代もそこに求められると考えていた。しかし、後述するⅢ区でもこうした暗渠的な溝（SD38等）が確認され、やはり石には山茶碗が混じっていたが、近世の遺物も出土したため近世の遺構とした。埋土も類似しており、他の中世前期と判断した遺構の埋土（黒色に近い）とは異なっていることからSD20は近世の遺構と考え、暗渠状であることは畑等の耕作に関わるためと解釈した。畑等を耕作する時に作土の中から礫と共に山茶碗が出土し、それを暗渠状とする際に利用したものと思われる。したがって、SD21～23もその時期に相当する可能性が高いと考えられる。

SD28は調査区中央から北にかけてN22°Eの方向で検出された溝である。最大幅2.6m、最深部分は検出面から48cmとI区では大規模な溝となる。埋土は暗褐色土でやや黒っぽく、中世後期や近世の遺構埋土とは明らかに相違する。地籍図と照らし合わせるとこの溝を境として地割に変化がみられるため、中世前期における区画であった可能性が高く、それは中世後期から近世に至るまである程度踏襲されていたと考えられる。遺物は12～21～27・13～1～24を示した。この他にも山茶碗類の破片が数多く出土した。12～21～24は小皿である。21・22は体部が直線的に立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。12～25～27・13～1～19は山茶碗である。12～25・26は体部が彎曲しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。26のほうが器壁も厚く、口縁端部の外反も弱いことからやや後出的と思われる。1～4は底部のみ残存している。2はやや厚みのある高台である。5・6はいずれも体部はほぼ直線的に開いて立ち上がるが、6は口縁端部を外反させる。7は底部に墨書きが確認できるが、判読はできない。9～15はほぼ同時期と思われるが、11・14の高台は断面三角となるのに対し、12・13・15は断面四角に近い。16の高台はほとんど潰れており、後出的である。17は高台が極めて細く、胎土も上記の山茶碗と異なる。時期や産地はよくわからぬ。18・19は胎土が青灰色を呈し、高台のつくりも異なる。産地は東遠江と考えられる。13～20・21は貿易陶磁で、白磁碗の底部である。いずれも高台は削り出しで露胎となり、底部内面には1条の沈線が巡る。13～22・23は灰釉陶器で、22は碗、23は段皿である。13～24は手捏ねの壺である。また、57～1の砥石が出土している。これら遺物は12世紀前半から13世紀中頃と幅があり、遺構の年代もその範囲で捉えられる。

SD29・32はSD28よりも新しいと考えられるが、SD32から13～29の藤沢氏編年（藤澤1996 以下同様）古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ期の灰釉小鉢と思われる遺物が出土しており、これを積極的に評価すれば、中世後期の15世紀中頃の遺構と推定できる。

SD89～92も東西方向の溝で、規模や埋土が類似する。SD92からは13～32～34が出土している。32は藤澤

63

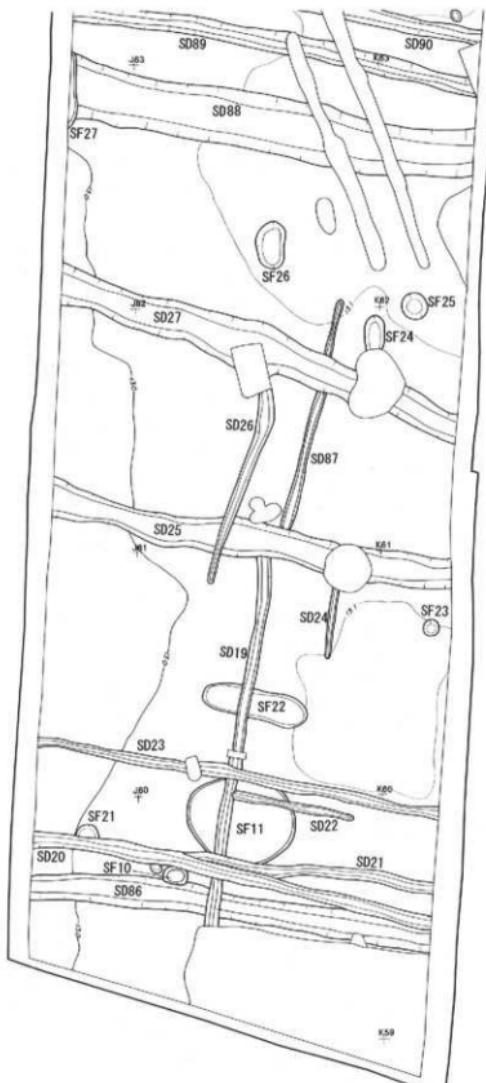
62

61

60

59

58



0 10m

J

K

第81図 笠井若林遺跡 I 区第1面平面図1

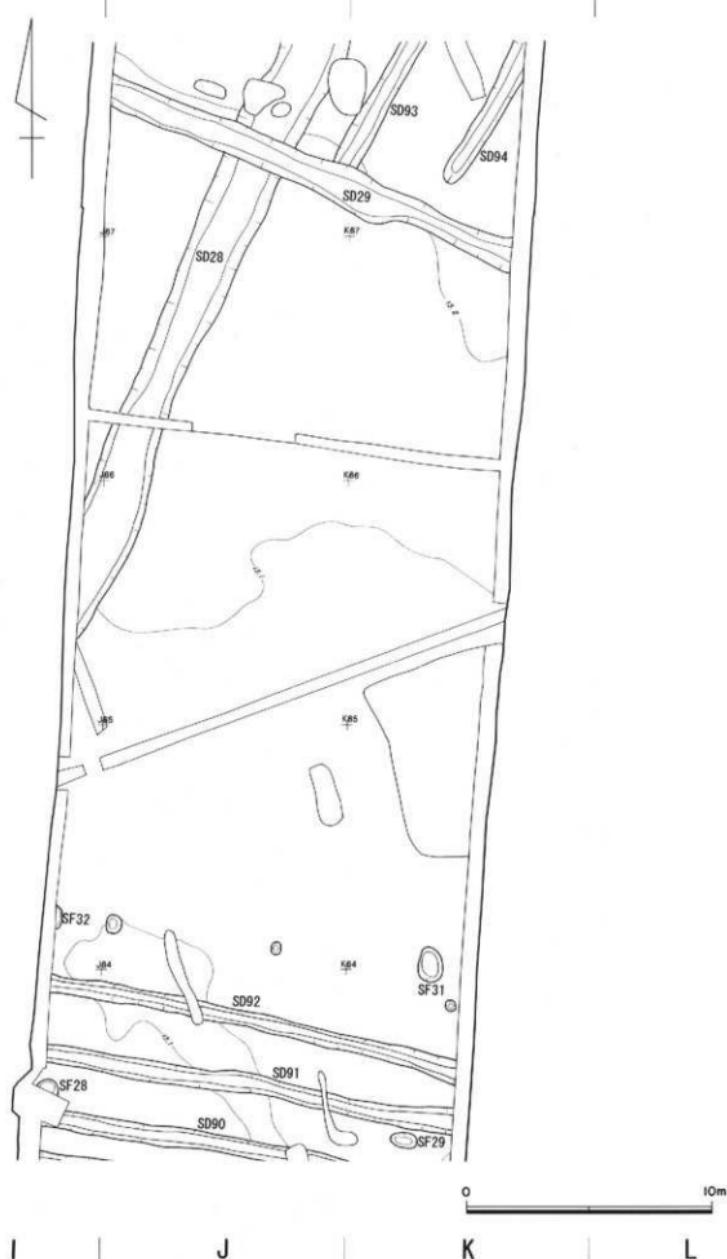
67

66

65

64

63



第82図 笠井若林遺跡I区第1面平面図2

72

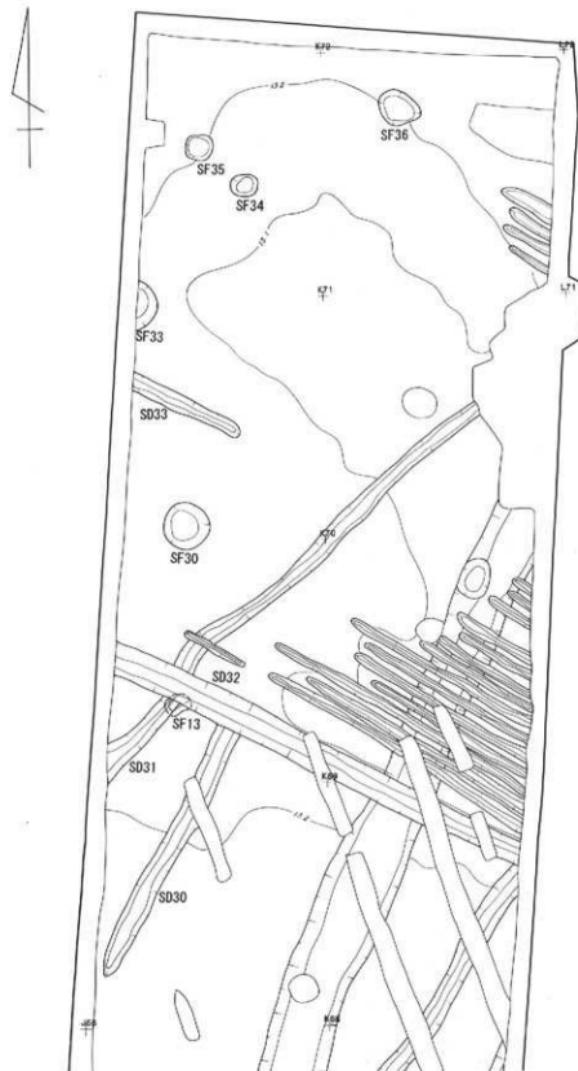
71

70

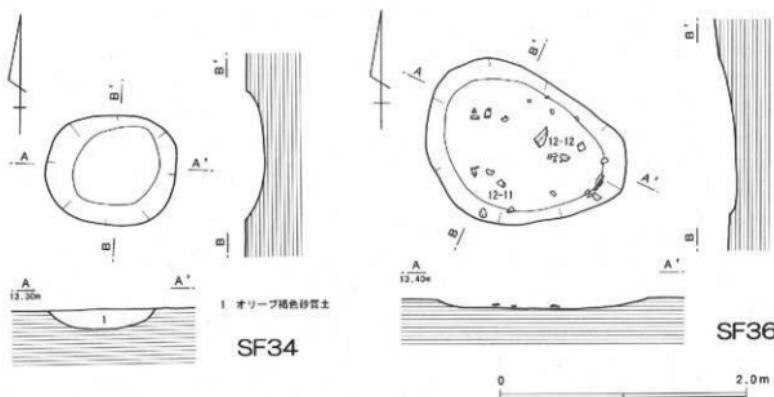
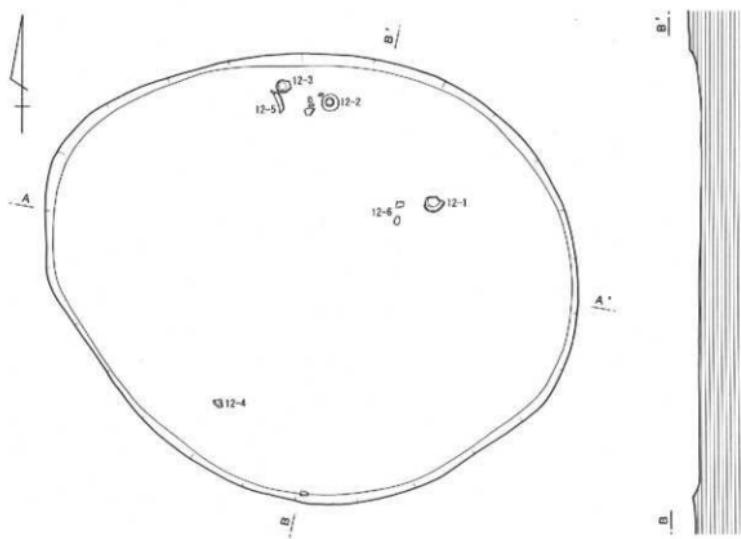
69

68

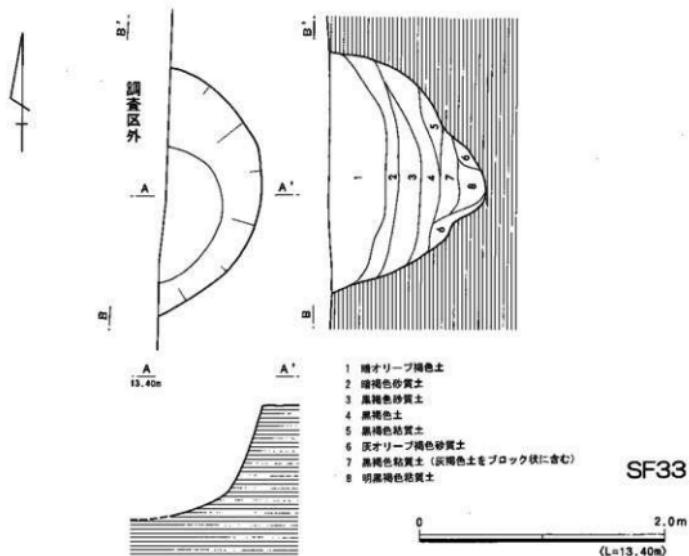
67



第83図 笠井若林遺跡 I 区第1面平面図3



第84図 SF11・34・36 実測図



第85図 SF33 実測図

氏編年（藤澤1998 以下同様）連房5～6小期の天目茶碗、34は17世紀代の唐津産刷毛目大皿が出土しており、18世紀代まで下る遺構と考えられる。よってSD89～92もその時期の遺構と推定される。

第3節 II区の遺構と遺物

①古墳・奈良・平安時代

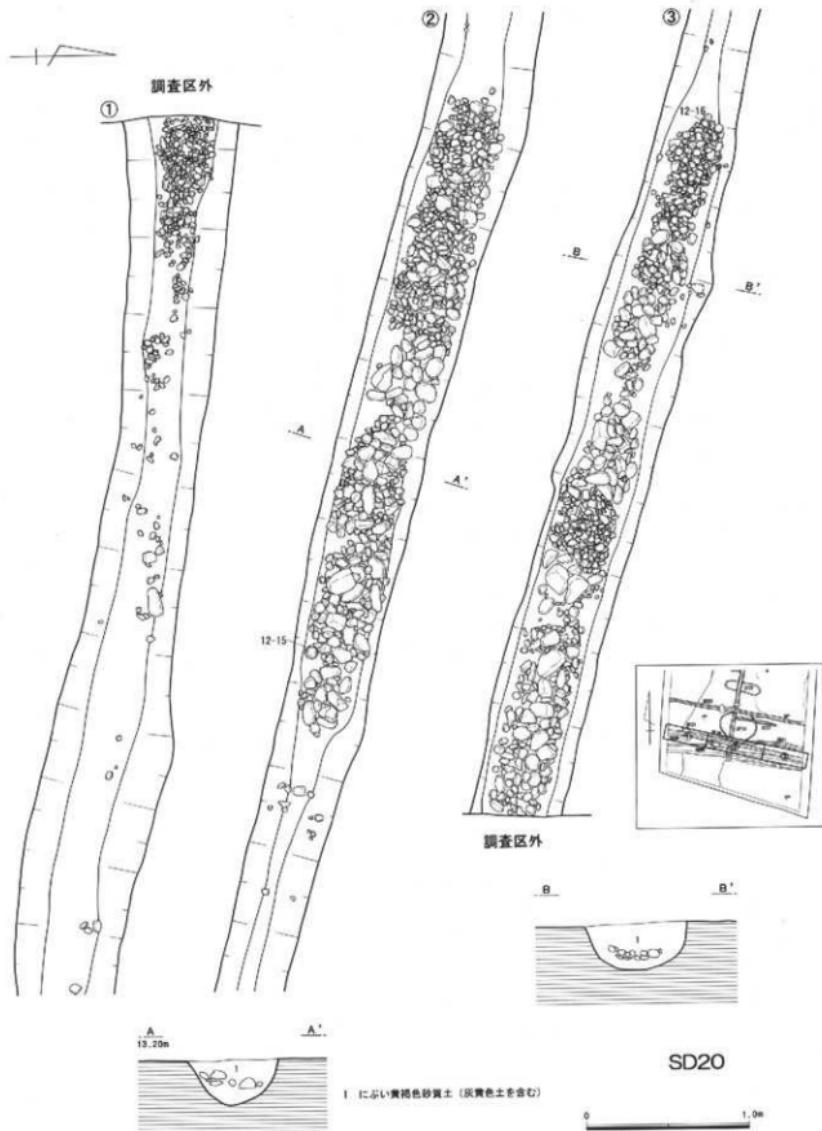
掘立柱建物跡

SH201（第88図）

O54・55区で検出されたが、SD1によって一部破壊を受け、調査区外にも続く可能性があるため全体は明らかではない。桁行方向はN5° Eである。残存する南北方向をここでは桁行とするが、柱穴を結ぶ線上には小穴が8つ検出されている。この内、SH201はP1・2・3・5・8を使って建てられていたと推定し、桁行4間の建物と考えられる。柱穴は円形もしくは略方形を呈し、深さは40～60cmである。SD205がP4と重複するが、P4の方が新しい。遺物はP3から15-1・2が出土している。1は土師器坏で底径が小さく、体部は弯曲し、かなり開いて立ち上がる。2は甕の口縁である。遺物はやや古い様相を示すが、位置関係や方向からSH202と関連が深いと考え、遺構年代はSH202同様、10世紀前半と推定する。

SH202（第88図）

M・N55区で検出した建物跡である。桁行方向はE3° Sで、やや柱間はまちまちながら梁間2間×桁行5間の建物と考えられる。桁行南面は柱穴の残りが悪く、推定した部分も多い。P9では土層断面に径20cm



第86図 SD20 実測図

程度の柱痕がわずかに観察できたが、それ以外では確認できていない。柱穴の深さは検出面からは10~30cm程度であった。P8・14では底面に柱の圧痕によるものと思われる小穴が検出されている。SD213・214が柱穴と重複するが、柱穴の方が新しい。遺物はP3から15-3、P7から15-4~8が出土した。P7(第93図)では土器が重ねられているように出土しており、地鎮等の祭祀が行われた可能性がある。15-3・4・6は土師器壺である。いずれも丹が確認でき、3は内面に暗文が残る。4・6は底径が小さく、口縁は直線的に開いて立ち上がる。また内面にはタール状の付着物があり、灯明皿としての使用が考えられる。15-7・8は灰釉陶器である。7は碗で高台は断面三角である。高台内はヘラ削りの後にナデている。8は皿である。体部は大きく開き、口縁端部は外反する。高台は断面三角で、高台内は糸切り痕が残る。これら遺物から遺構の時期は10世紀前半頃に求められよう。

竪穴住居跡

SB201 (第89図)

N・O54区で検出された。平面形は東側をSD1によって切られているため判然としない部分もあるが、南北3.4m、東西4.5mの長方形を呈する。南北を軸とした棟方位はN9° Eである。南側にやや張り出しており、やや不定形である。埋土は灰色粘質土を主体とし、炭化物を含んでいる。南東隅には焼土と炭化物を多量に伴う竈が構築されていた。竈は明確に粘土や構築材を使用した痕跡は確認できず、その構造は明らかではないが、U字状に焼けた土の内側には土師器壺が落ち込んだ状態のまま出土し、壺の下面にはおそらく支脚として使用されたであろう礫が据えてあった。礫は長軸方向を上下としており、下面は割るなどして平らな面をつくり出していた。また、U字状の焼土の開いた西側には炭化物が集中しており、焚口の痕跡であることがわかる。完形の土師器壺(16-1)が伏せた形で出土しており、竈祭祀が行われた可能性もある。柱穴と推定できるのはP1・P6のみで東側の柱穴と思われる。他にも小穴がいくつか検出されるが、並ぶような位置にはない。床は明確に確認できなかったが、遺物のほとんどが2層上面で出土しているため、この面が床面であると推定した。

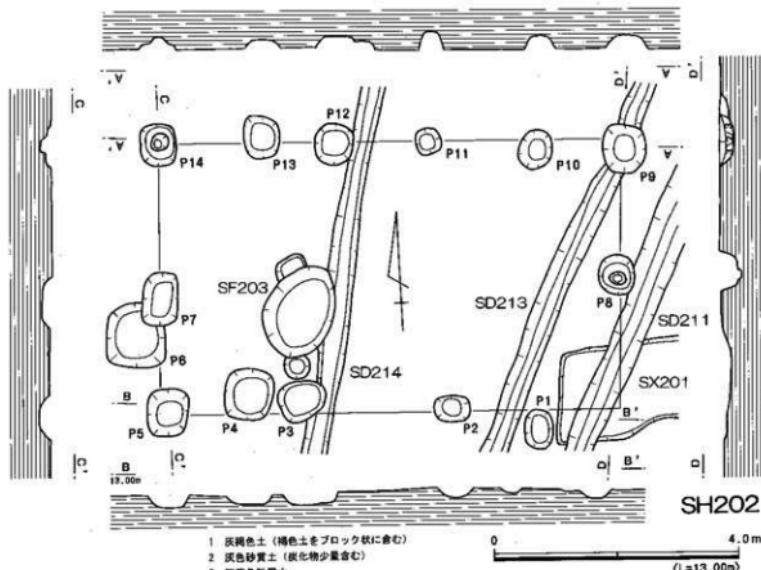
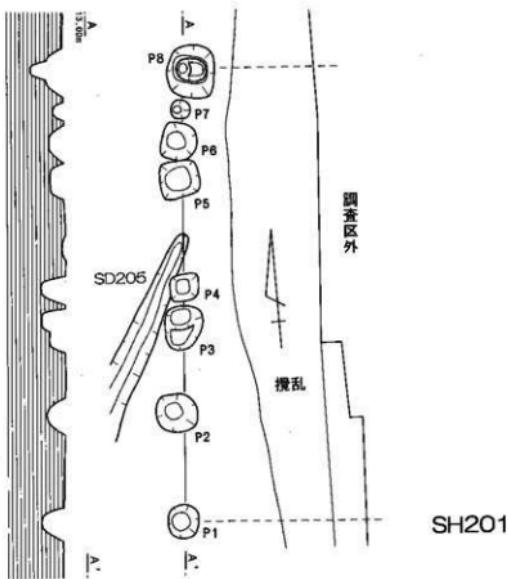
遺物は15-9~14・16-1~13が出土している。15-9~14は須恵器である。9・10は有台壺でいずれも底部と体部の境がかなりはっきりしたものとなる。15-11・12は壺蓋で、11は口縁端部を単純に折っている。12の口縁端部は下方に折られた後、強いナデで外に引き出される。15-13は長頸壺で、口縁部のみの残存である。口縁内面には自然釉が厚くかかり、窓体の一部が付着している。15-14は体部のみ残存している竈である。16-1~13は土師器である。16-1~3は壺で、いずれも底部から体部にかけて緩やかに折れ、口縁は開く。2・3の口縁はやや外反する。調整は基本的にナデで、丹が塗られる。16-4は皿で剥落しているが、丹が塗られる。16-5は有台皿で、脚部のみ残存する。皿部の彎曲が強いため、あるいは有台壺もしくは碗の可能性もある。16-6~13は長胴甕である。6・13は口縁をほぼ水平に引き出し、9~12はやや内傾気味に引き出している。10・11は口縁端部を肥厚させ、丸くおさめる。いずれも外面はハケ調整、内面はナデであるが13のようにハケ目の残るものも存在する。これら遺物から遺構の時期はは8世紀後半と推定する。

SB202 (第89図)

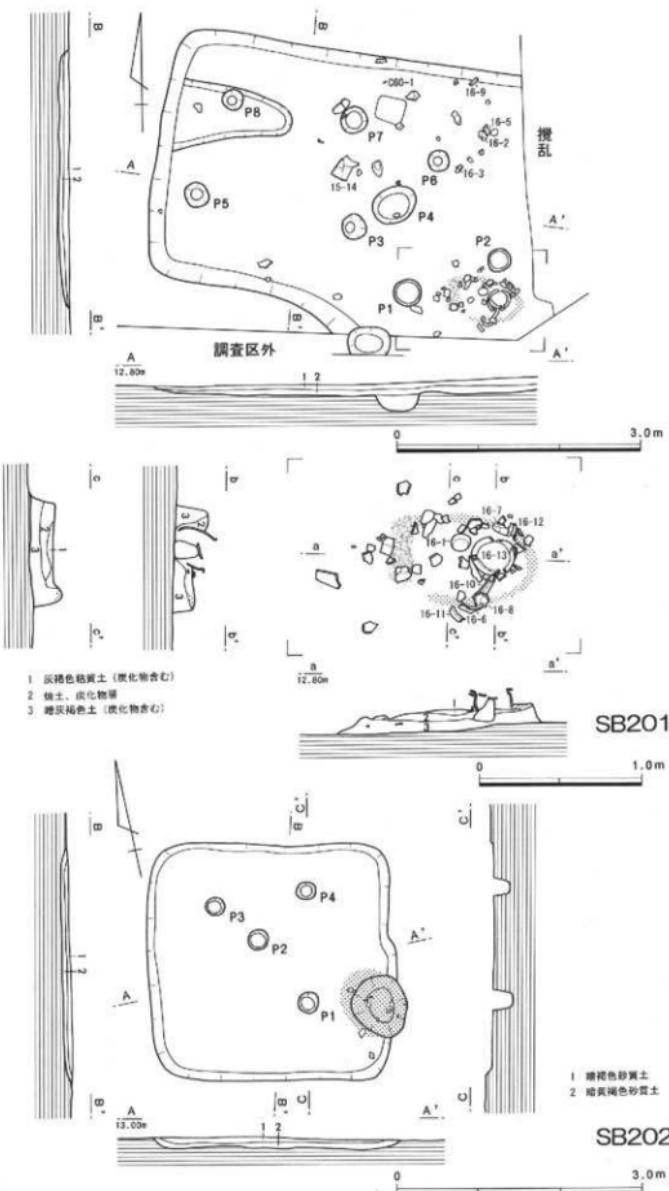
L54区で検出された。平面形は南北2.8m、東西3.0mとかなり小規模な方形を成す。南北を軸とした棟方位はN11° Eである。埋土は暗褐色砂質土で粗砂が混ざる。南東隅には焼土が集中する部分があり、ここに竈があったと思われる。焼土を除去すると浅い土坑となり、これが竈の掘り方となる。柱穴らしき小穴としてP1~3を検出したが、P1が竈の前にあり、南西側の柱穴が検出できなかつることもあり、やや疑問が残る。竈周辺には土器片が散乱していたが、時期がわかるような遺物ではなく、図化もできなかつた。後述するSB203と形態や方向が類似するため、ほぼ同時期の8世紀末~9世紀前半の遺構と推定する。

第87図 笠井若林遺跡Ⅱ区第2面平面図

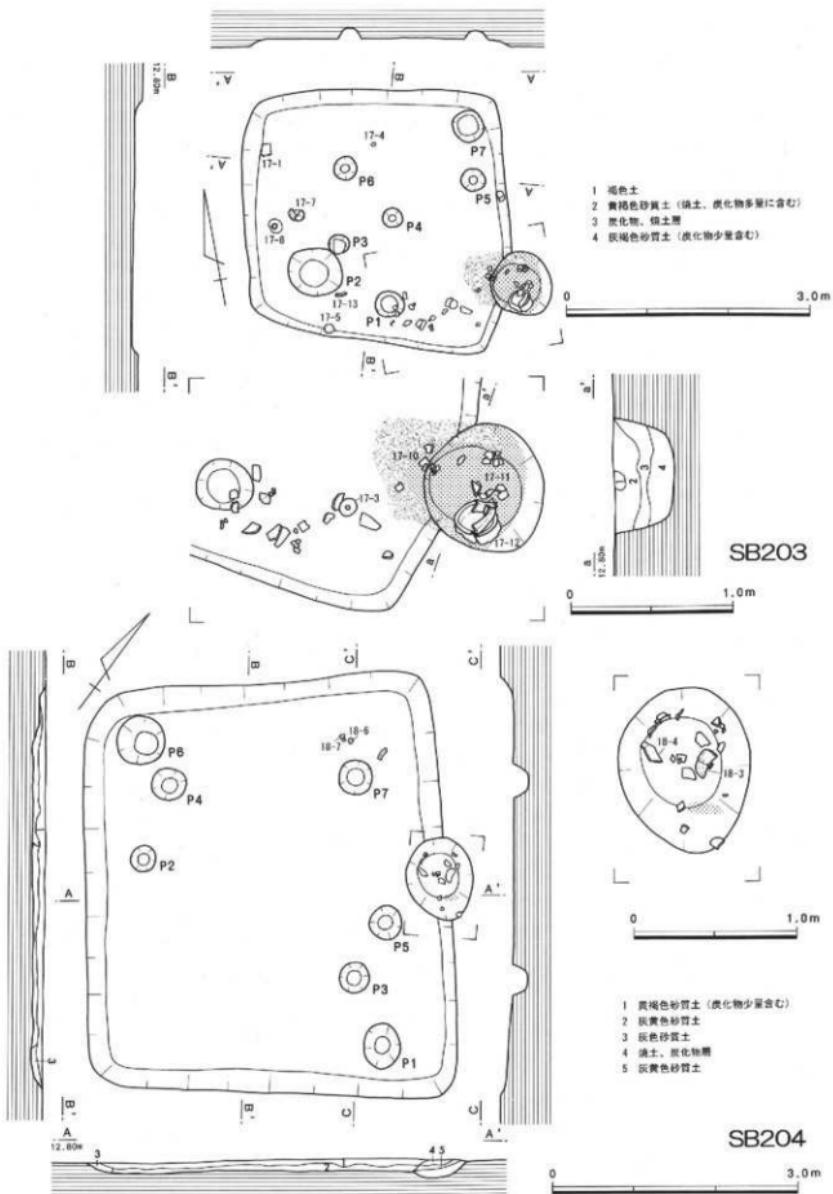




第88図 SH201・202 実測図



第89図 SB201・202 実測図



第90図 SB203・204 実測図

SB203 (第90図)

J・K56区で検出された南北3.1m、東西3.2mを測る竪穴住居跡である。規模はSB202とよく似ており、小規模である。南北を軸とした棟方位はN8°Eである。この遺構周辺は4層の堆積が厚く、当初第2面として設定した面では検出できなかった。しかし、炭化物の広がりが確認されたため、遺構の存在を想定して平面的に掘り下げたところ、この遺構が検出された。南東隅には焼土と炭化物が集中する部分があり、炭化物は西側へと広がっていた。焚口が屋内にあることが想定され、構造は明らかではないが、竈が構築されていたことが判明した。焼土、炭化物層の中から2個体分の土師器甕（17-11・12）が落ち込むような形で出土している。小穴はいくつか検出したが、並びが悪く柱穴であるかは不明である。

図示した遺物は17-1～13の13点である。17-1～3は須恵器で、1は外面に平行タタキのある甕の底部片である。2は底部の一部のみではあるが有台坏である。3は径10.5cmと小型の坏蓋と思われ、完形で出土した。内面に墨痕が確認されたが、判読できる文字はなかった。17-4～13は土師器である。4～6は坏で、4は小型の杯で内面にはハケ調整がみられる。重複するSD227からの混入品と思われる。5は口径が12cmで、口縁は6と比べると立ち気味である。6は復原ではあるが15.5cmとやや口径が大きく、口縁は外反気味に立ち上がる。いずれも丹が塗られている。7～9は有台坏である。7と8は底部以外丹塗り、高台が貼りつけられていることなど、つくりが酷似するが調整が若干異なる。7は外面に縱方向のミガキを施し、口縁・底部外面は横ナデ、内面はナデである。口縁端部は外反させており、内面には沈線が巡る。8は外面ナデ調整で、縱方向の暗文が施される。口縁付近は横ナデされ、端部はやはり外反する。9は底部片で高台も低く、つくりは異なる。丹塗りがなされるようである。10は口縁が斜め上方に引き出された皿である。11～13は長胴甕である。11・12はいずれも胴部に最大径を持ち、水平近くに引き出された口縁はやや立ち気味である。口縁端部は肥厚し、丸くおさめられる。外面はハケ調整で、11は内面もハケメが残る。13の口縁は肥厚していない。遺物はおむね8世紀末～9世紀前半の範疇におさまると思われるため、遺構の時期もそのあたりに求められるだろう。

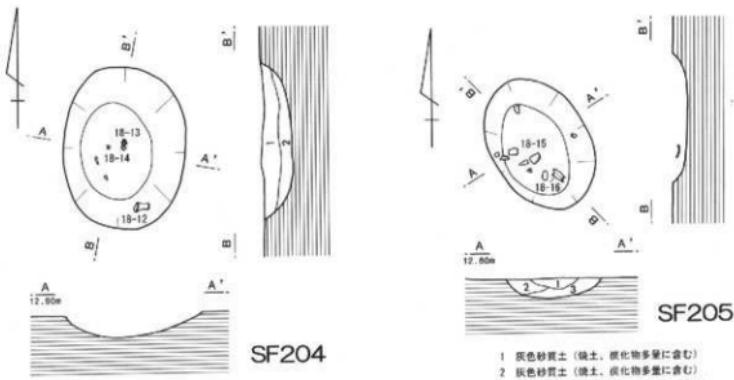
SB204 (第90図)

I・J58区で検出された遺構である。南北5.0m、東西4.4m、南北を軸とした棟方位はN34°Eと、この地区の竪穴住居跡と比べると大型で軸方向も異なる。平面形は南北方向にやや長い長方形を成す。埋土は黄灰色砂質土を主体とし、遺物の出土レベルから1層下面が床面と推定できる。柱穴はP3・4・7を検出し、これが主柱穴であろうと思われるが、南西隅の柱穴はトレチを掘削したことにより検出できなかった。東側中央に焼土が集中する部分があり、竈が構築されていたと考えられる。竈構造は明らかではなかったが、焼土内からは高盤（18-3）と甕（18-4）が出土している。

出土遺物は18-1～7の7点を図示した。18-1・2は須恵器の有台坏である。2は底部が高台よりも突出するのに対し1は突出していない。18-3～7は土師器である。6・7は小型の杯である。いずれも外面はナデ調整で、指頭痕が残る。内面は板状の工具により横方向の調整が確認できる。3は高盤である。盤部分のみの残存であるが、全面に丹が塗られていると思われる。また、内面は細かいハケメが明瞭に残り、煤が付着する。火を受けた痕跡であろうか。4・5は長胴甕である。4は口縁部がくの字状となるのに対し、5はコの字状となり頸部がやや長くなっている。これら遺物から、遺構の時期は8世紀後半と思われる。

土坑

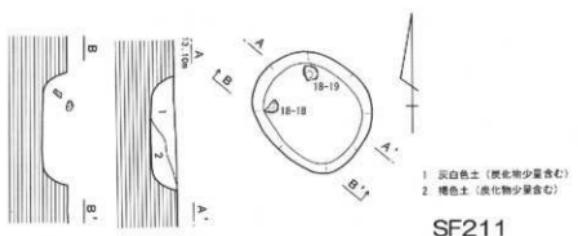
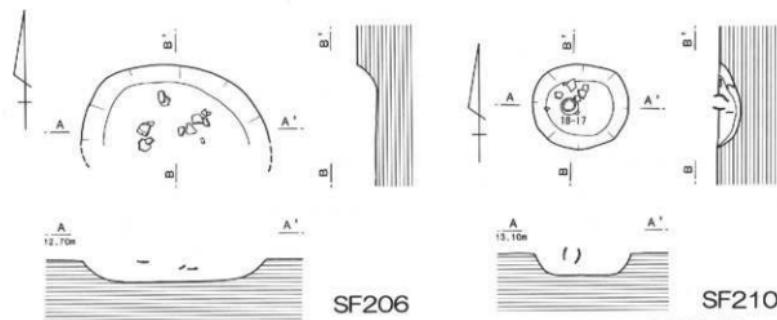
II区ではこの時期の土坑は9基検出している。現地調査段階で付したものを探し、直徑1m前後を目安に小穴との区分をしているが、曖昧となっている場合もある。SF204（第91図）はJ56区で検出した土坑である。18-12～14が出土している。12は長頸甕の頸部である。口縁は開いて立ち上がり、端部は上端に面を持つ。18-13・14は手捏ね土器である。13は把手がつくことから甕とした。14は高坏であろう。いず



1. 灰色砂質土（後土、炭化物多量に含む）

2. 灰色砂質土（後土、炭化物多量に含む）

3. 暗灰色砂質土（橋土、炭化物多量に含む）



0 2.0 m

第91図 SF204・205・206・210・211 実測図

れも指頭痕が残る。こうした遺物があることから土坑の性格は祭祀に関わる可能性がある。遺構は8世紀後半頃のものと思われる。

SF205（第91図）はI58区で検出した楕円形の土坑である。焼土と炭化物を埋土中に多量に含む。遺物は18-15・16が出土した。15は須恵器箱坏である。底部はヘラ削り、底部外周をナデている。口縁端部はやや外反する。16は土師器長胴甕である。頸部の屈曲は比較的緩やかで、口縁はほぼ水平となり、端部は上方に引き出され、受け口状となる。遺物から遺構の年代は8世紀後半と思われる。

SF206（第91図）はK58区で検出した。プランがかなりわかりにくく、平面面観察によって確認した。遺物がややまとまって出土したが、図示できるものはなかった。

SF210（第91図）はL55区で検出した。第1面からやや下げた4層上部で確認された。埋土には焼土や炭化物が多量に混じっており、18-17の小型甕が逆位で置かれた状態で出土した。堅穴住居跡は検出できなかったが、Ⅲ区SB223のように竈で使用されていたとすれば、堅穴住居跡の竈の痕跡であった可能性もある。

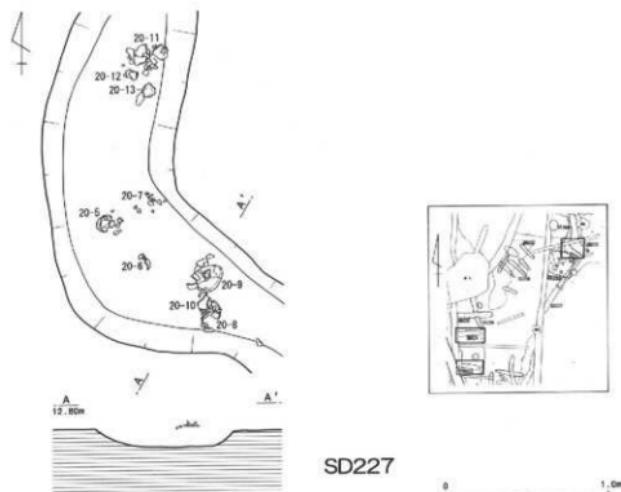
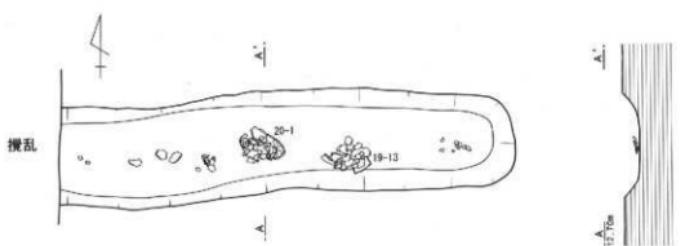
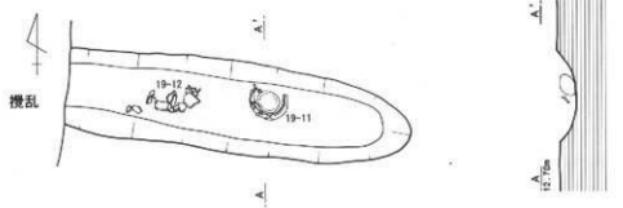
SF211（第91図）はM55区で検出した楕円形の土坑である。SF210同様4層上面で確認した。埋土には炭化物が少量混じっていた。18-18・19が出土し、共に灰釉陶器の碗である。18の体部はやや直線的に開くのに対し、19は弯曲しながら立ち上がる。口縁端部はいずれも外反する。高台はいずれも断面三日月形で、高台内はケズリ調整である。18は横掛けの施釉がなされるが発色は不良である。19の施釉は確認できない。出土遺物から、遺構の年代は9世紀後半に位置付けられよう。

溝状遺構

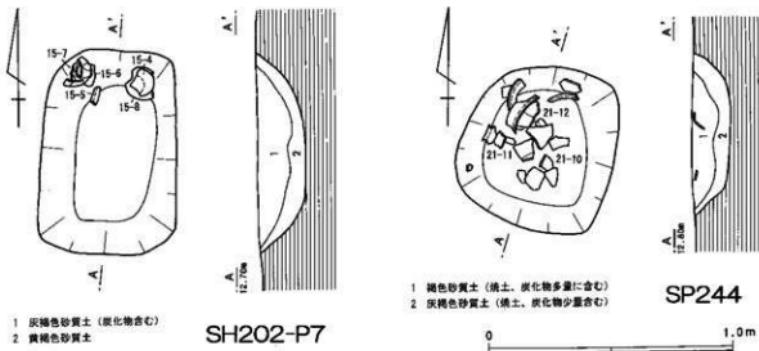
II区では調査区東端、M・N・O54～55区付近で、やや東にふれる南北方向の小溝とそれに直交する小溝SD201～215を検出した。埋土や形態からほぼ同時期の遺構と考えられる。先に恒武西宮跡で見た小溝群と類似する形態と検出状況であるが、それほど密ではない。やはり耕作に關わる遺構とも考えられるが、不明確である。掘立柱建物跡や堅穴住居跡と重複するが、検出状況から小溝群の方が古いと推定できる。耕作痕と仮定すれば、居住域となる以前には耕地であった可能性もある。SD204・205・209・212・215から19-1～6がそれぞれ出土している。19-1・4は小型品で、4には把手が表現される。19-2・3は土師器甕である。いずれの口縁もやや内傾気味で、3の器厚はかなり厚手となり、法量も小さい。19-5は須恵器坏蓋、19-6は須恵器有台杯である。これら溝群は遺物や周囲の遺構との関連から8世紀中頃～後半の遺構と思われる。

西側のI・J54～55区では並行する溝がみられる。これらはSD201～215よりもやや幅広で浅く、その性格は判然としない。このうちSD223～225からは土師器の甕類が類似した状況で出土している。SD223（第92図）では19-11・12が出土した。12は広口の甕で、頸部の屈曲が強く、口縁は内傾気味に外反している。破損していたが、口縁の中には径15cmほどの川原石が入ったような状態で出土した。11は頸部の屈曲が緩やかで、口縁端部はわずかに上方に引き出される。SD224（第92図）でも19-13・20-1が潰れた状態で出土している。いずれも甕であるが、19-13は頸部の屈曲が強めで、口縁は内傾しており、端部はそのまま細く引き出されている。20-1は口縁を欠き、胸部下半のみ残存していた。SD225でも同様に20-2・3が出土している。20-2は口縁がほぼ水平となる。20-3は胸部下半のみの残存だが、肩はあまり張らないようである。他にもSD221・222が同方向で同じような形態を示す。これらも含めてほぼ同時期の遺構と考え、遺物から8世紀中頃～後半の時期を推定する。

II区中央や西のJ・K55～58区にかけておおよそN30°～40°Eの溝SD227（第92図）が検出された。北側のSD230と南側のSD220は本来1本の溝であった可能性があるが、遺物に時期差があるため断定はできない。SD227では屈曲し、幅が広くなった部分で20-4～14に示した遺物がまとまって出土している。20-4は須恵



第92図 SD223・224・227 実測図



第93図 SH202-P7 SP244 実測図

器の壊身である。底部から体部は緩やかで、口縁までそのまま立ち上がる。底部はヘラ切りの後ナデを施す。20-5~8・12~14は土師器壊である。いずれも口径10~11cm程度で、5~6・12・14は内外面ナデ、8は内面に横方向のハケ調整、13は板状工具による横方向の調整が施される。20-9は土師器高盤である。内外面丹が塗られ、盤部はやや深みがあり、内面には火を受けたように煤が付着する。20-10・11は土師器壺である。10は底部に向かって体部が直線的となるのに対し、11はやや内側に絞られる。共に内面には横方向の目の粗いハケ調整が顕著に残り、外面にも縦方向のハケメがわずかに観察される。これら遺物は7世紀後半頃に位置付けられ、手捏ねともいえる土師器の壊がまとまっていることや、巣がミニチュア品の可能性が高いことから、祭祀的なあり方を示していると思われる。この溝はそうした遺物を使用した祭祀的な場所であった可能性が高い。

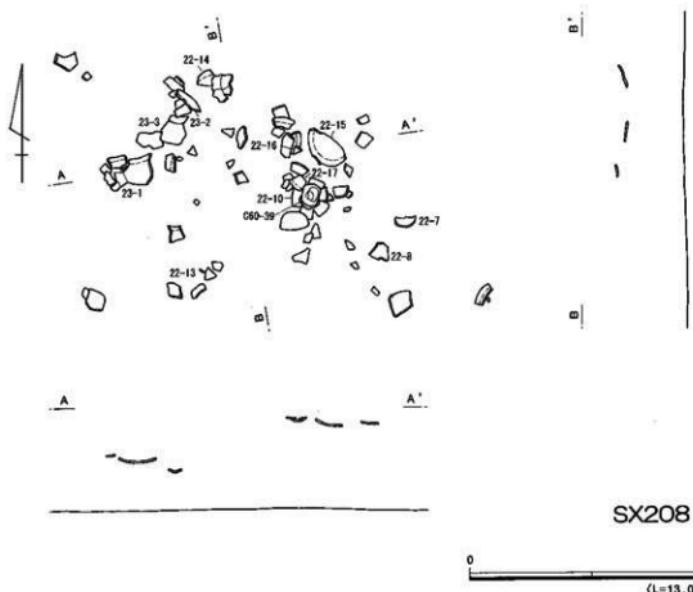
小穴

II区では掘立柱建物跡の柱穴以外の小穴が60基程度検出された。特にM・N・O54~55区付近では多くの小穴を検出しておらず、認定した掘立柱建物跡以外にも建物が建てられていた可能性が高い。小穴からはまとまった遺物の出土があまりなく、破片資料が大半を占めるため、帰属年代の判断は困難であった。

SP244(第93図)では土師器がまとまって出土しており、遺物は21-10~12に示した。いずれも土師器である。10は皿で、底部から体部が緩やかとなり口縁はわずかに肥厚する。11・12は長胴甕である。11は頸部がコの字状となるが、12はくの字状に近い。口縁は双方内傾気味だが、12は端部が若干受け口状となる。12は肩が張るのに対し、11はあまり張らない。11は古い様相を持つが、遺物はほぼ8世紀中頃~後半の年代が与えられよう。他の小穴もほぼSP244と同時期となると思われるが、SP272からは21-13~15が出土しており、13の須恵器壊身など7世紀後半頃に位置付けられるものもあることから、この時期に掘削された小穴も一部含んでいると思われる。

性格不明遺構

性格不明遺構は15基確認した。SX201のような落ち込み状の遺構、SX202~205・212・214のような焼土集中遺構、SX208のように土器集中遺構が検出されている。その性格は明らかではないが、焼土集中遺構は竪穴住居跡や掘立柱建物跡周辺のM・N・O54~55区付近で多く確認されており、居住域において何らかの火を使用した活動の痕跡と思われる。それらは、検出できなかった竪穴住居内窓や外窓の痕跡であつ



第94図 SX208 実測図

たことも可能性としては考えられる。

SX202～205・212・214の焼土集中遺構からは遺物も焼土に混じって出土している。SX202からは22-1の土師器壺口縁部が出土した。口縁は内傾気味で、端部はやや受け口状となる。SX203からは22-2・3が出土した。2は土師器壺で、内傾した口縁はそのまま引き出される。3は広口壺の口縁部である。SX204では22-4の土師器壺が出土した。底部から体部の境は明瞭に折れ、体部は直線的に開く。SX205からは22-5・6が出土した。5は土師器皿で、底部と体部の境は緩やかで、口縁はそのまま内轉気味に立ち上がる。6は土師器壺である。頸部の屈曲は強めで、口縁はほぼ水平となり端部は上方に引き出され受け口状となる。SX212から出土した23-4は須恵器壺の口縁と思われる。口径が18.4cmと大きいため、広口長頸壺の口縁かもしれない。SX214からは23-5～8が出土した。いずれも土師器である。5は蓋でおそらくつまみがついていたと思われる。内面は指痕が明瞭に残り、ほとんど未調整である。6は把手付の鉢である。頸部は弱く屈曲し、その直下に2つの把手がつく。輪積み痕が顕著で、それを消すための指痕も明瞭に残る。7・8は同一個体と思われる長胴壺である。頸部は胴部からそのまま屈曲し、ほぼ水平に近くなる。胴部は肩が張るがやや弱めである。

SX208（第94図）は土器集中遺構である。第1面からやや下がった4層上～中部で検出した。第94図の断面図には第2面検出面との関係を示した。この中からは60-39の土製支脚が出土し、また焼土や炭化物も一部で集中していることからこの遺構は本来、窯であった可能性が高い。現地調査時にもそのような状況を想定しながら慎重に精査したが、周囲には竪穴住居跡と判断できるプランは検出できなかった。遺物は22-7～17・23-1～3が出土している。22-7・8は灰釉陶器碗である。7は高台が断面四角形で、体部は

内彎しつつ立ち上がり、口縁端部は外反する。8は底部のみ残存しており、高台は断面三日月状、高台内はケズリ調整である。7は刷毛塗り、8は技法が不明ながら施釉される。いずれも発色が悪い。22-9は須恵器箱坏で、体部はやや開くが立ち気味となる。底部はヘラ削りで、底部外周はナデを施す。22-10～17・23-1～3は土師器で、22-10～16は丹が塗られる供膳具類であるが、底部を中心に2次焼成がみられる。22-10～14は坏である。10～12は底部が小さく、体部は直線的に開く。12は特にその傾向が顕著である。13・14の底部は10～12に比べ大きく、体部も立ち気味である。22-15は皿である。底部と体部の境は緩やかで、口縁はわずかに外反する。22-16・17は鉢である。16は体部は大きく開きながら立ち上がり、口縁はほぼ水平近くに外反する。体部外面にはミガキ調整が施される。17は体部から口縁にかけて内彎し、口縁端部はほぼ直立する。口縁部は横ナデ調整が施される。23-1～3は甕である。いずれも頸部は体部からそのまま屈曲し、1は内傾するのに対し、2・3はほぼ水平となる。2の口縁端部は明瞭に上方に引き出され、受け口状となる。これら遺物は22-8が9世紀後半のもので混入品と見られ、22-13・14にやや古い様相がみられるが、概ね8世紀末～9世紀前半に位置付けられよう。

②中世～近世

掘立柱建物跡

SH1・2（第96図）

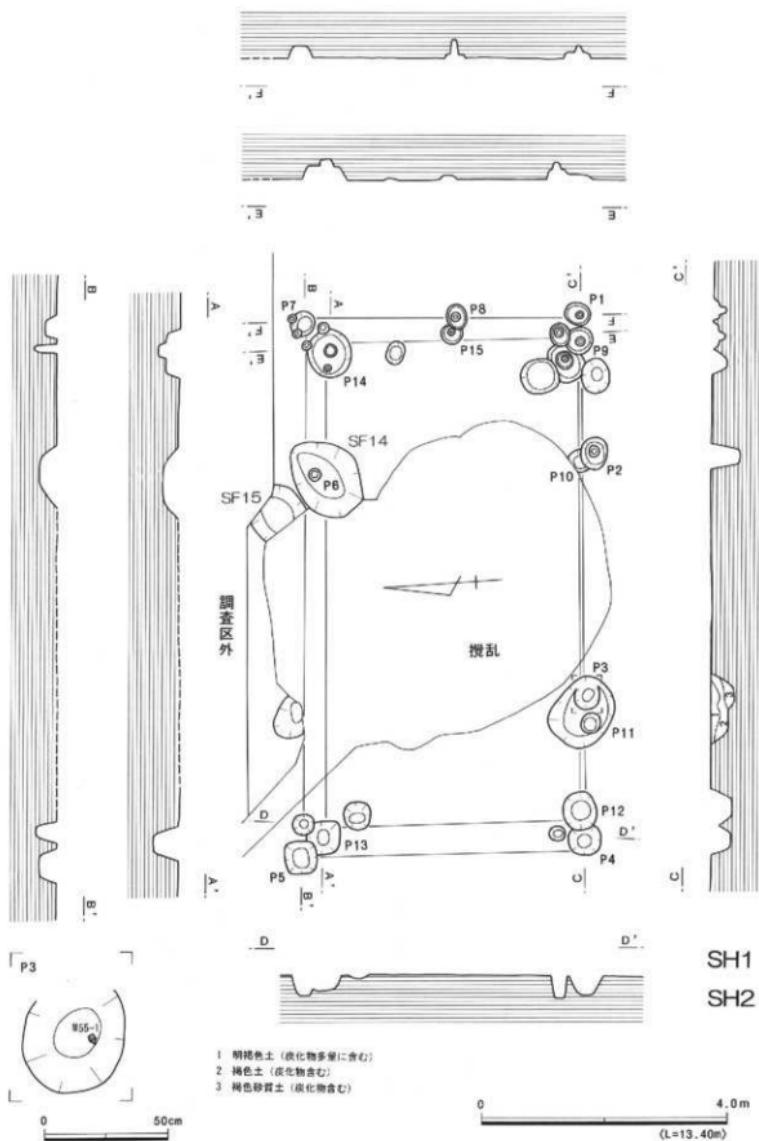
SH1・2はL・M55区付近で重複して検出された掘立柱建物跡である。おそらく建替えによる新旧関係があり、切り合い関係からSH1とした方が新しいと推定する。中央部分は櫛乱によって破壊されているため柱穴のはっきりした並びは明確ではないが、それぞれ梁間2間×桁行4間の規模で、桁行方向はE 4° Sである。SH1がP1～8、SH2がP9～15を使用して建てていると思われるが、P6の位置に該当する柱穴は不明確である。柱間は並びがあまりよくないが、梁間よりも桁行の方が広い傾向にある。双方の建物の東側には多くの小穴が検出されているため、建替えは2回とは限らないと思われる。また、柱穴底面には柱痕と思われる直径15～20cm程度の小穴が検出された。建物面積とも考え合わせると比較的小規模な建物であろう。小穴の埋土には炭化物が多く混じっており、火災等により廃絶した可能性もある。出土遺物はSH1のP4から24-1が出土している。非ロクロ成形のかわらけの口縁部破片である。SH2ではP12から24-2、P13から24-3、P11から24-4が出土している。24-2は非ロクロ成形のかわらけである。内面ナデ、外面は未調整である。24-3は瓦質土器の口縁部である。全体は明らかではないが、風炉と推定する。口縁は横ナデが施され、内外面には指頭が確認できる。24-4は灰釉陶器の碗で、混入品であろう。また、SH1のP3からは55-1の棹秤の錘が出土した。P3の底面からやや上層で出土しており、炭化物がかなり混ざっていた。建物が火災に遭ったとすれば、片付けを行った際などに混入したことと考えられる。他の柱穴からもかわらけ片が出土しているため、16世紀代の遺構と考えられる。

SH3（第97図）

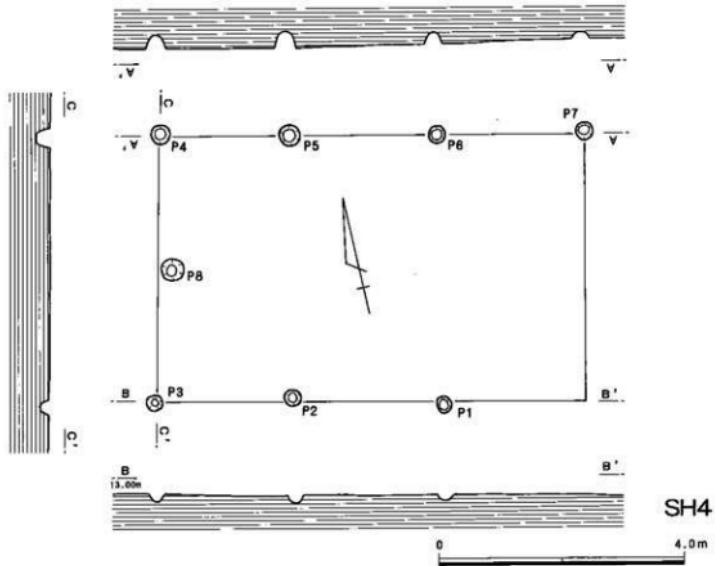
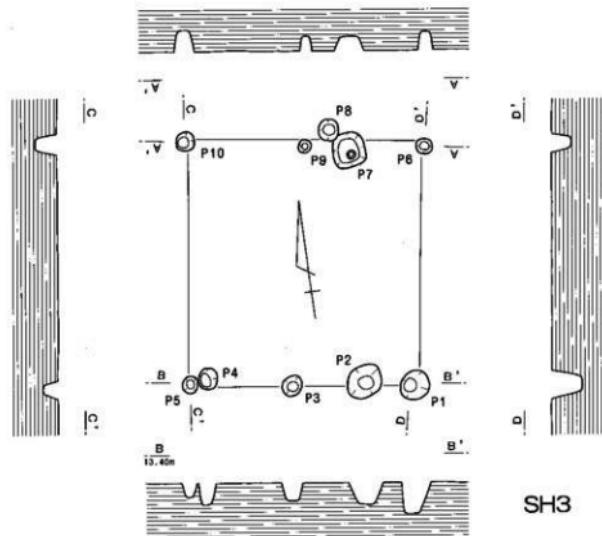
SH3はSH1・2の西側で検出した。近接し過ぎているため時期差があったと考えられる。南北面では1間分の柱しか確認できなかったため梁間1間×桁行2間としたが、規模からいえば2間×2間の建物となる可能性が高い。桁行方向はN7° Eである。いくつか柱穴がかかっているが、P1・3・5・6・9・10を使って建てていると思われる。柱間は2m程度で、検出面からの深さは約30～50cmである。規模からは付属的な施設を想定する。また、P2では非ロクロ成形のかわらけ24-8～10が逆位で重ねられるようにして出土しており、地鎮にともなう祭祀行為を行ったことが考えられる。遺物はP1から24-5～7、P2から24-8～10、P7から24-11が出土している。24-5・6は施釉陶器で、5は連房1小期の志野丸皿である。高台内以外は全面に長石釉が掛けられ、高台は削り出し高台である。6は初山窯（大窯3段階後期併行）の鉄釉筒型香炉の口縁部破片である。全面鉄釉が掛けられる。24-7～11は非ロクロ成形のかわらけである。7はやや深いが、

第95図 笠井若林遺跡II区第1面平面図





第96図 SH1・2 実測図



第97図 SH3・4 実測図

いずれも底部から体部は緩やかに立ち上がる。内面はナデ、外面は未調整で指頭が残る。8の内面には工具による斜め方向の傷がつけられる。遺物は16世紀後半から17世紀初頭のものであり、造構の年代もその時期に求められよう。

SH4（第97図）

SH4はL・M54区で検出された梁間2間×桁行3間の建物である。南東の柱穴は試掘坑にあったため確認できていない。桁行方向はE13° Sである。第2面で確認したが、方向や柱穴の規模、埋土の状態から第1面の造構と判断した。柱穴は10~30cm程度であるが、本来は上層から掘り込まれ、深かったと思われる。柱間は2.2~2.4mである。出土遺物はないが、埋土や規模から、16世紀代の造構と推定する。

SH5（第98図）

SH5はJ・K56~57区でSH6と重複して検出された建物である。東側は調査区外となる可能性もあり、柱並びも悪いが、梁間1間×桁行3間の規模と思われる。桁行方向はE4° Nである。桁行南面は数回掘り直されているかのような状況を示し、北面も柱間にいくつか小穴が確認されるため2回以上のほぼ同じ場所での建替えが想定される。比較的並びのよい北面の柱間では2~2.2mを測り、梁間は4.9mである。柱穴の深さは30~50cmである。遺物はP7から24-12が出土している。非ロクロ成形のかわらけで、やや浅く、内面ナデ調整、外面は未調整である。遺物が1点のみであるため限定は困難であるが、16世紀代の造構と考えられる。

SH6（第98図）

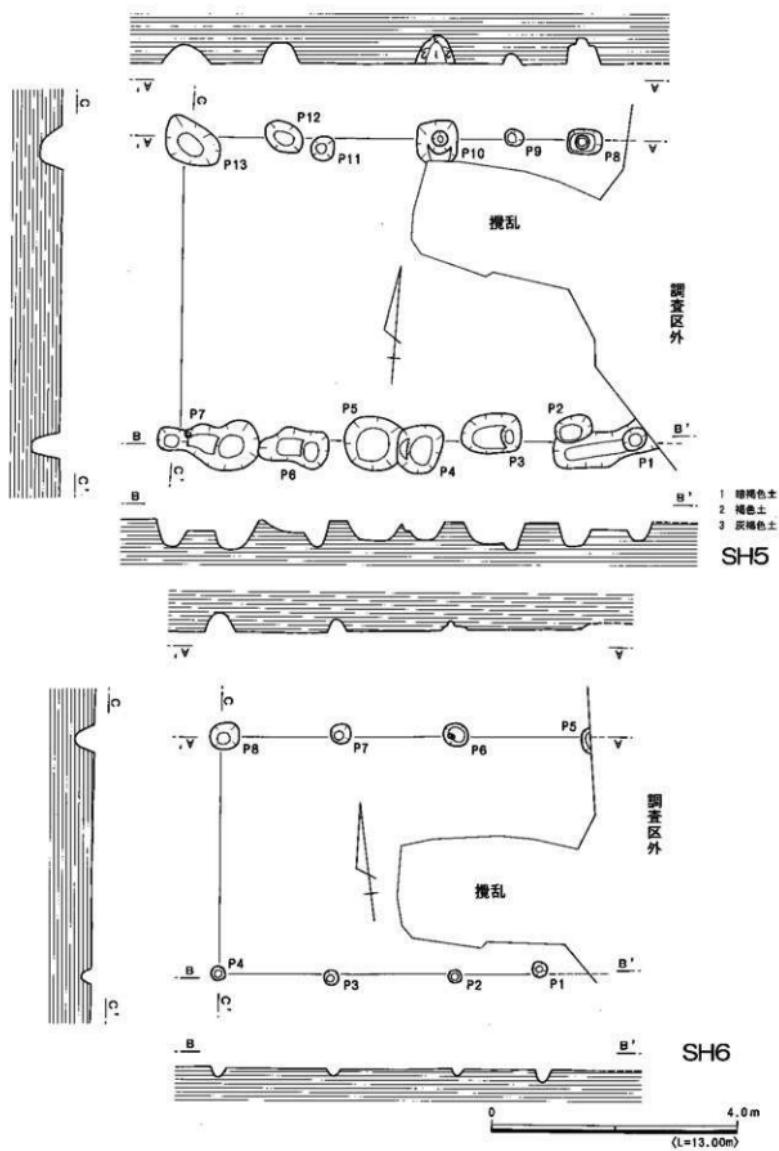
SH5と重複するが、新旧関係は不明である。やはり東側は調査区外となってしまうが、梁間1間×桁行3間の規模と思われる。桁行方向はE7° Sである。柱間は桁行についてはP5・6間を除いて1.9~2.1mで、梁間は3.9mである。柱穴の深さは検出面から20~30cm程度で、本来はさらに深かった可能性が高い。遺物はP1から24-13、P8から24-14が出土している。24-13は非ロクロかわらけで、内面ナデ調整、外面未調整である。24-14は藤澤氏編年（藤澤1993 以下同様）大窓2~3段階の鉄軸丸皿である。高台はかなり摩滅が激しい。削り出し高台の高台内外は鉄軸が掛けられる。これら遺物から造構は16世紀中頃~後半の年代と推定される。

土坑

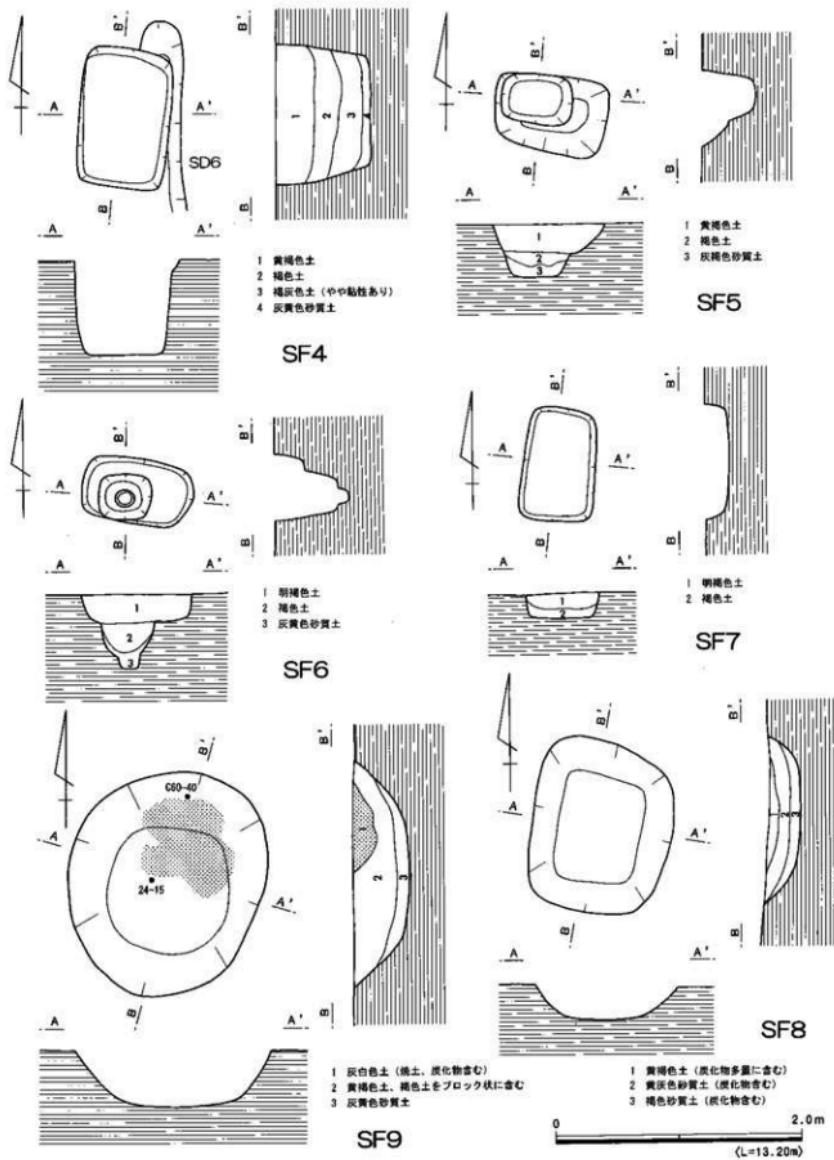
II区では17基の土坑を検出した。ほとんどが中世後期の造構と考えられる。SF4（第99図）はN54区で検出した方形の土坑である。SD6と重複するが、SF4の方が新しい。深さは80cmと他の土坑と比べて深い。遺物は出土していない。SF5・6（第99図）はM54区で検出した稍円形の土坑である。いずれも底面が方形に掘り窪められ、SF6はその底面でさらに小穴が検出された。掘立柱建物跡の柱穴とも考えられるが、周囲ではそれと判断できる造構は検出されておらず、遺物の出土もないため機能は明らかではない。SF7（第99図）はSF5・6に近接している方形土坑であるが、SF5・6と比べ浅い。埋土が類似するため同時期の造構と考えられるが、これも遺物の出土はないため性格を明らかにはできない。

SF8・9（第99図）はM55区付近で近接して検出された土坑である。いずれも埋土には焼土ブロックや炭化物を多く含む。SF9では上層でとくに焼土・炭化物が集中する部分があり、また24-15のほぼ完形の非ロクロかわらけや数珠玉とみられる水晶玉55-7・8が出土し、骨片らしい白色の粒子が埋土に混じっていることから墓坑である可能性が極めて高く、SF8も同様の性格を持つと思われる。土坑自体に焼けた痕跡はなく、ここで火葬したというのではなく、火葬された骨を埋葬したと考えられる。24-15のかわらけはやや歪みがみられ、底部と体部の境はやや強く屈曲させる。調整は内面ナデ調整、外面未調整である。24-16は混入品の土師器小型壺である。遺物から造構の年代は16世紀代と考えられる。

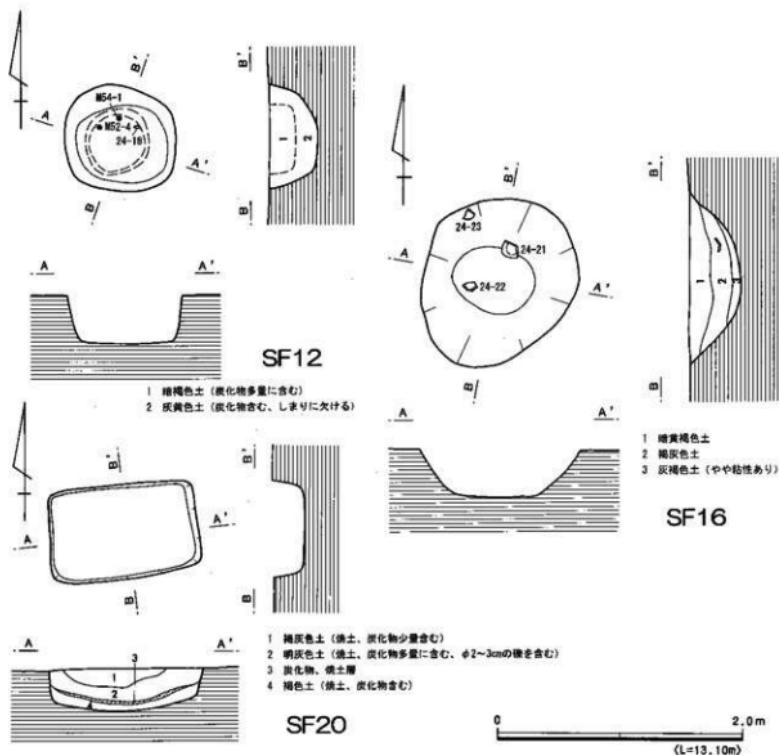
SF12（第100図）はN55区で検出された造構である。土坑は略方形に近いが、図に点線で示した円形の



第98図 SH5・6 実測図



第99図 SF4・5・6・7・8・9 実測図



第100図 SF12・16・20 実測図

遺構はおそらく桶などの容器の痕跡と考えられる。土層断面図でいえば、1層がそれにあたり、炭化物が多量に含まれる。その中から24-17・18の土器類、52-4~6の鉄製品、54-1の銭貨が出土している。こうした遺構の検出状況から桶などの容器に火葬骨を入れた墓坑とも考えられ、遺物は副葬品という捉え方もできると思われる。出土遺物については24-17~20がある。24-17は初山窯の鉄軸徳利である。胸部のみの残存である。下半は露胎となり、上部には鉄軸が掛けられる。24-18・19は非口クロカわらけである。口径はほぼ同じであるが、19のほうが浅い。これらの調整も内面ナデ、外面未調整である。24-20は2層から出土した土師器坏で混入品である。遺物からSF12の年代は16世紀後半と位置付けられよう。

SF16（第100図）はI55区で検出した楕円形の土坑である。II区では中世後期の遺構がほとんどを占めるが、この遺構は中世前期と認識できた唯一の遺構である。遺物はまとまりのない出土状況で、廃棄を目的とした土坑と思われる。遺物は山茶碗24-21~23が出土した。いずれも高台はかなり低くなり、高台には粉殻痕、高台内には糸切り痕が明瞭に残る。21の体部は直線的に開き、口縁端部は外反する。これらは13世紀前半の特徴を示すため、遺構の年代もそこに求められよう。

SF19はSH5に隣接して検出された不定形の土坑である。遺物は24-24~26が出土している。24は山茶碗

で、混入品であろう。25は古瀬戸後IV期の天目茶碗である。体部は彎曲しながら立ち上がり、口縁近くではほぼ直立し、端部は外反する。26は大窯1段階の灰釉丸皿である。口縁には灰釉がかかるが、それ以外は内外面共に露胎である。底部には糸切り痕が明瞭に残る。SH5のP1を切るために、遺物の年代とも併せて考えれば、15世紀後半を上限とした16世紀代の遺構と推定される。

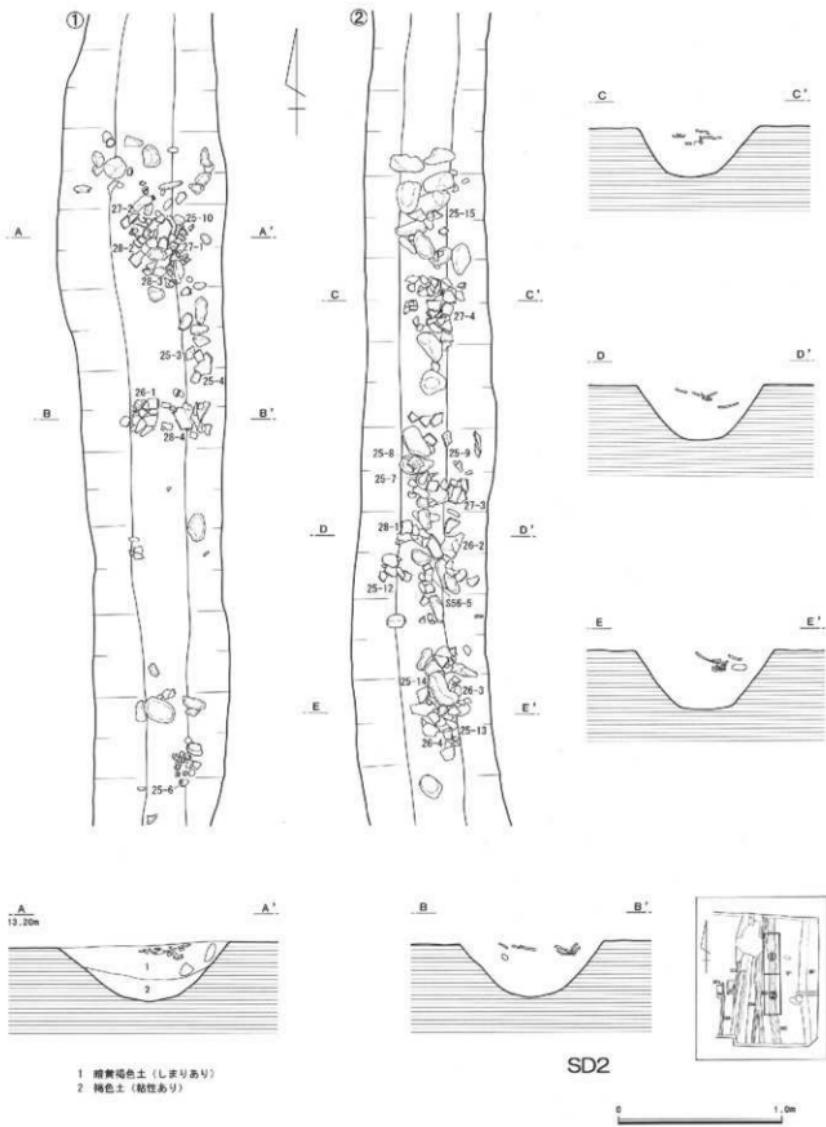
SF20（第100図）は焼土・炭化物が集中する土坑である。K57区で検出した方形の土坑であるが、埋土全体に焼土・炭化物が混じり、3層とした部分は特に集中して層を成すほどであった。SF9・12のように推定できる材料がないため、性格は明らかではない。遺物は手捏ね土器24-27が出土しているが、埋土は明らかに第1面で検出される中世後期の遺構のものと酷似するため混入品と考え、遺構年代は16世紀代と推定する。

溝状遺構

II区では第1面で、中世後期の溝状遺構を多く検出している。それらは調査区東端と西端に集中しており、その溝に挟まれた空間には掘立柱建物跡や土坑などが存在する。東端では南北方向の溝が多く検出され、西端では南北方向の溝とSD11・12のように20~25°ほど東にふれる方向の溝がある。また、SD15のように東にほぼ90°屈曲するものもみられるため、調査区内では全体は明らかにできなかったものの、こうした溝群は方形区画を志向したものと考えられる。溝からは16世紀後半を中心とした遺物が出土しており、内部の掘立柱建物や土坑から出土する遺物と大きな時期差ではなく、これも屋敷地を含んだ居住域を溝によって区画している傍証となるであろう。出土遺物の多いSD2~4で17世紀初頭の遺物が散見されるため、ほとんどの溝はこの頃までには埋没したと考えられる。

東端で検出した溝はSD1~6である。SD1は一部調査区外となる大規模な溝である。屋敷地を区画する基本的な溝となる可能性もあるが、全体が明らかでない上、西側では類似するような溝がないため推定の域を出ない。また、廃絶年代も若干下る可能性もある。遺物は24-28~31・25-1・2が出土している。24-28は連房3小期の志野丸皿である。高台以外は長石釉が掛けられる。24-29は常滑窯で、赤羽・中野氏編年（中野1994 以下同様）11型式に位置付けられる。口縁は折り返されて頸部に接着し、口縁外側には縁帯が巡る。これはSD2出土の25-4と同一個体の可能性があり、SD1と2が同時期に機能した可能性を示す。24-30・31は伊万里の製品で、30は徳利、31は中皿である。18~19世紀代の製品で、上層の攪乱と小溝に伴う遺物と考えられる。25-1・2は奈良時代の土師器壺と須恵器壺蓋で、混入品である。24-28の志野丸皿は中層の礫が集中する部分から出土したものである。溝自体はSD2同様に16世紀後半頃の遺構であろうが、溝の規模が大きいため、下層部分が埋没した状態で17世紀中頃まで残ったものと解釈した。

SD2では第101図に示したように多くの遺物が出土した。1層とした上層土からの出土がほとんどである。溝の廃絶段階に礫などと共に廃棄された遺物であろうと推測する。特に内耳鉢やかわらけが多く出土しており、屋敷地で使用していたものをそのまま廃棄した可能性が高い。遺物は25-3~15・26-1~4・27-1~4・28-1~4を図示した。25-3・5~8は施釉陶器である。3は大窯3段階の天目茶碗である。体部はやや丸みを持って立ち上がり、口縁近くでは直立し、端部は外反する。5は大窯1段階の擂鉢である。口縁端部は断面三角状となり、その外面には浅く凹みが巡る。内面には横目が11本程度を1単位として確認できる。6は大窯3段階後期とみられる灰釉丸皿である。底部内面には横の印花文がある。7はほぼ完形で出土した初山窯の鉄釉内禿皿である。底部内面はコテの押圧により凸部が形成され、底部内面と外面は露胎で、他は鉄釉が掛けられる。底部は削り込み高台となる。8は志戸呂窯（大窯4段階後期併行）の鉄釉丸皿である。高台は付け高台である。口縁のみ鉄釉が掛けられ、底部内外面は露胎となる。底部には焼成時にできた亀裂が残り、そのままでは使用に耐えないと思われる。7とは暗灰色の胎土は類似するが、8



第101図 SD2 実測図

の方が精選された目の細かい土である。25-9～13はいずれも非口クロ成形のかわらけで、調整は内面ナデ、外面未調整である。体部は緩やかに立ち上がるが、11のみやや口径が小さく、体部は長めとなり深い。底部内面中央は盛り上がっている。10は内面に工具による斜め方向の傷がつけられる。25-14・15・26-1～4・27-1～4・28-1は内彎形の内耳鍋である。いずれも外面には煤が厚く付着し、使用していることがわかる。しかし、恒武西宮遺跡SX2出土遺物と同じく、内面には内容物の痕跡は認められない。25-15・26-1～3は口縁と体部の境が内面側に稜を持ちながら屈曲するが、26-4・27-1・2はそれが弱く、27-3・4・28-1は特に弱く、わずかに外反する程度となる。内耳が残るものは少ないが、26-1は口縁直下に内耳があり、口縁も短い。底部には27-4のように脚が三方につくものもある。調整は残存状況がどれもよくはないが、基本的には口縁横ナデ、体部外面は縱方向のハケもしくは板状工具によるナデ、内面はナデもしくは板状工具によるナデ、底部はヘラ削りである。28-2・3は体部外面の突帯の有無で羽付釜、28-4は羽無釜とした。3は突帯が小さく、その機能を果たしたとはい難い。2は口縁が上方に短く折られるのに対し、4はやや長く肥厚させながら端部上面はナデによって面がつくれる。体部はいずれも丸みを持つが、4は肩が張る形態を示す。3・4には底部の三方に脚がつく。また、54-8の永楽通寶、56-5の砥石が出土している。これら遺物は大窯3段階の製品が多く、それらが使用されていたのは16世紀後半～末と考えられ、その頃が屋敷地の中心的な時期であったと思われる。その後、屋敷地の廃絶に伴って溝も埋没すると考えられ、その年代は大窯4段階の遺物を下限とすることから17世紀初頭と考えたい。

SD3・4はSD2と同方向の溝である。SD4からはSD2出土の28-2と接合した羽付釜が出土していることから、同時期に機能していた可能性が高い。SD3は埋土がSD2・4と類似し、重複もしていないためこれも同時期の遺構であろう。これらが群として区画溝の機能を果たしていたのではないだろうか。

SD3からは28-5～9、SD4からは28-10～20が出土している。28-5～7・10～13は施釉陶器である。5は連房1小期の志野鉄絵皿である。内面には鉄釉によって文様が描かれるが明らかではない。6・10は天目茶碗で、6は大窯1段階、10は大窯4段階後期に位置付けられる。10は器厚が厚くなる。7は古瀬戸中II期の灰釉卸皿である。口縁上面には面がつくり出され、内面には卸目が確認される。11は志戸呂窯（大窯4段階後期併行）の小天目である。体部は直線的に開き、口縁は直立する。12は大窯1～2段階の灰釉端反皿か丸皿である。底部破片のため、細部は明らかではない。13は初山窯の鉄釉内禿皿である。SD2出土の25-7とはほぼ同様の特徴を示すが、底部内面の凸部が低い。28-8・9・14～20は非口クロ成形のかわらけである。調整はSD2出土のもの同様内面ナデ、外面未調整である。9はやや浅く、14は口径12cmを超え、やや大型となる。

西側の溝群はSD7～17である。ほとんどは南北方向の溝となるが、これに直交する方向のSD9や、前述したSD11・12のようにやや方向が異なる遺構もみられる。SD14～16は重複がみられ、SD1～4のように同時期にではなく、時期差があると思われる。さらに方向の異なるSD11・12はそれらに切られているため、古くなる可能性がある。

SD7・8は屋敷地寄りとなり、共に北側で途切れてしまう。屋敷地全体というよりは区画内をさらに区画する溝という見方もできよう。遺物はSD8からは29-1～6が出土している。29-1～4は施釉陶器である。1は大窯1段階の天目茶碗の口縁部である。2・3は初山窯の製品で、2は鉄釉内禿皿、3は鉄釉丸皿の口縁部破片である。いずれの口縁にも輪花が施され、いわゆる斐皿となっている。4は古瀬戸後I～II期の灰釉盤類の底部破片である。29-5・6は貿易陶磁である。5は青磁連弁文碗である。体部外面には線描きによる連弁文が施される。6は青磁碗の底部破片である。おそらく内面には劃花文が描かれると思われる。12～14世紀代の遺物も出土するが、SD1～4同様、16世紀後半～末の遺構と考えられる。

SD11・12は方向が異なり、南北方向の溝により切られることは先述のとおりである。年代のわかる遺物が出土していないため、検証は困難であるが、16世紀後半～末とした南北方向の溝によって区画され

た屋敷地よりも古い段階のものであると考えられる。29-7の山茶碗、29-8の渥美産の壺が出土しているが、埋土や建物との関係から混入品と考えられる。よって、これら遺構の年代は16世紀代の後半以前としておきたい。

SD14・16は切り合っており、時期差がある。掘り直しを行った可能性もある。SD15が古く、16・17は重複せず、明らかではない。SD16・17は同時期の可能性もある。しかし、遺物の上では大きな差はないと思われ、短期間ににおける時期差と考えられる。SD14からは29-9、SD15からは29-10～18、SD16からは29-19・20が出土している。29-9～14は施釉陶器である。9・10は擂鉢でいずれも大窯1段階と考えられる。10の内面には11本1単位と思われる横目がある。11・12は共に大窯1段階の製品で、11は灰釉端反皿の口縁部破片である。12は灰釉丸碗の底部である。付け高台で、高台内にはトチンの痕跡が残る。13は大窯1～2段階の灰釉端反皿か丸皿である。底内面には菊の印花文が押される。14は大窯2段階の鉄釉丸皿である。高台内以外は鉄釉が施され、底部内面にはトチンの跡が残る。29-15・16は非クロコかわらけで、16はやや小型品である。29-17は内彎形内耳鍋である。口縁と体部の境は比較的明瞭に屈曲する。遺物は大窯1・2段階のものが多いが、図示できない破片には初山窯の鉄釉皿などもあり、東側溝群と同じく16世紀後半～末がこれら溝の年代と考える。

これら16世紀後半～末とした溝からはそれよりも古い時期の遺物である古瀬戸後IV期～大窯1・2段階の遺物が多く出土する。これは溝によって区画された屋敷地は15世紀中頃～後半を初源として継続し、16世紀後半～末に最盛期（最も遺物を使用していたという意味で）があったから、ということを示していると考えられる。ただし、それ以前の遺物である古瀬戸中期～後期段階の遺物の出土もあることから、14～15世紀前半代にも人々による何らかの活動があったと思われる。しかし、数点の遺物が出土しているに過ぎず、屋敷地の初源をそこまで遡らせるのはためらわれるため、その時期の遺構の様相は明らかではない。そしてその後、17世紀初頭には屋敷地は廃絶したと考えられる。

小穴

II区では溝に区画された屋敷地、それも掘立柱建物跡周辺に小穴が多く検出される。今回掘立柱建物跡と判断したもの以外にも、建物があったことが推定される。出土する遺物からも掘立柱建物跡や溝と同時期のものが出土しており、屋敷地と無関係ではないことを示していよう。また、小穴は調査区外にも続いている可能性が高いため、屋敷地の中心は北側に広がっている可能性が高い。

SP16とSP18からそれぞれ出土した29-22・23は共に連房1小期の志野皿で、屋敷地が廃絶する時期の遺物であることを示している。SP18の埋土には焼土と炭化物が多量に混じっており、29-23はその中から出土している。掘立柱建物跡の柱穴や溝でも多量とはいえないものの、焼土ブロックや炭化物が埋土に混じっていることが確認されているため、屋敷地における廃絶の契機が火災であることや、廃絶に際して不要なものを焼いていったことが考えられる。屋敷地自体が小規模なためかもしれないが、大規模な火災の痕跡は確認できることから後者の可能性の方が高いと考えられる。

76

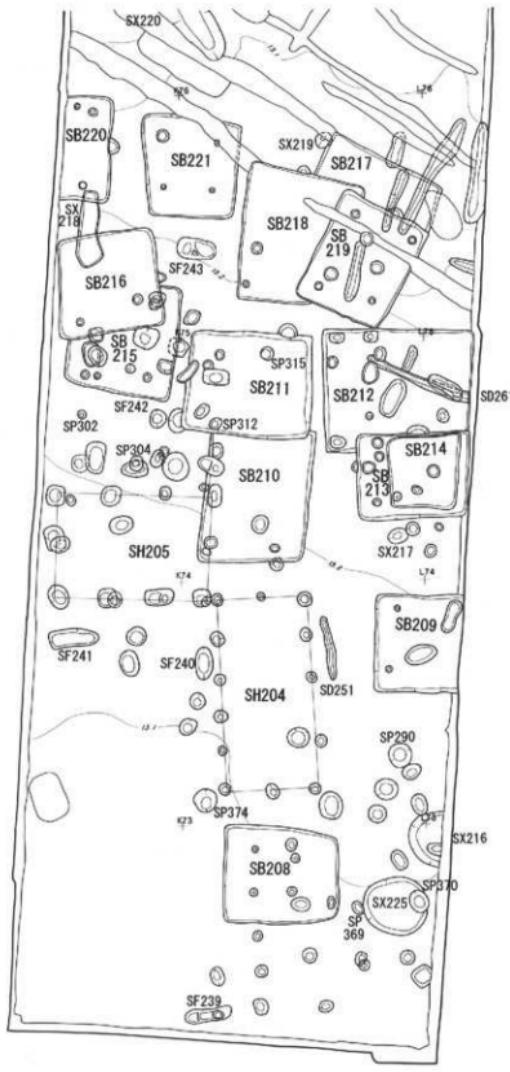
75

74

73

72

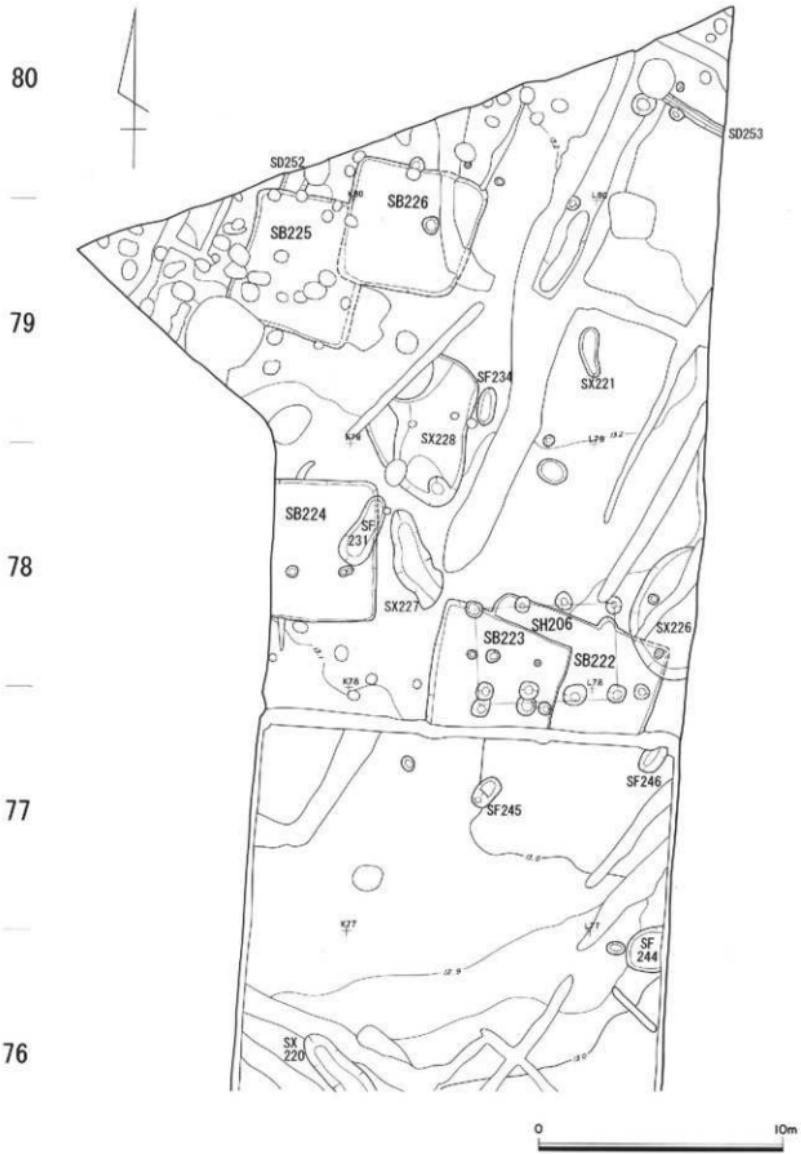
71



0 10m

J K L

第102図 笠井若林遺跡Ⅲ区第2面平面図1



第103図 笠井若林遺跡Ⅲ区第2面平面図2

84



83

82

81

80



J

K

L

M

第104図 笠井若林遺跡Ⅲ区第2面平面図3

第4節 III区の遺構と遺物

①古墳・奈良・平安時代

掘立柱建物跡

SH204 (第105図)

K73区で検出した遺構である。梁間2間×桁行5間の側柱建物で、桁行方向はN3° Wである。豊穴住居跡群を検出した第2面では柱穴が見えなかつたため、平面的に掘り下げて検出した。検出した柱穴の深さは20cm程度であり、本来はさらに深かったと思われる。柱穴の直径は直径30~50cm程度と小規模な円形となる。柱間は桁行が1.5~1.7m程度であるが、P3・5・8の部分では柱の並びが悪く、検出できなかつた柱があるのかもしれない。梁間の柱間はやや広く、1.8~1.9mである。北西に隣接するSH205とは同じ方向を志向していると考えられるが、近接し過ぎているため、同時期に並立してはいないと思われる。

遺物はP9から31-1の須恵器壺が出土している。底部はヘラ削りされ、底部外周はナデられている。8世紀後半の遺物と思われ、遺構の年代もその時期に求めることができよう。

SH205 (第106図)

J・K73~74区で検出した梁間2間×桁行3間の側柱建物である。桁行方向はE2° Sである。SH204同様、第2面から平面的に下げて検出した。SH204と柱穴の規模を比べると規模は大きく、深い。柱間は1.8~2.4mであり、柱並びの割にはあまり整った数値を示さない。P8・10はSB210の掘り方下面で検出されており、SB210よりも古いと思われる。土師器の小破片が出土している程度で、図示できる遺物はないが、SB210よりも古いことから8世紀中頃~後半と推定する。

SH206 (第106図)

K・L77~78区で検出した梁間1間×桁行3間の側柱建物である。桁行方向はE3° Nである。柱穴の規模は直径80~90cm程度の円形もしくは梢円形を呈する。柱間は桁行が1.8~2m前後で、梁間は3.8~4m程度である。SB222・223と重複しているが、P1~4がSB222・223の掘り方下面で検出されている。よってこれらよりも古いと判断した。遺物は出土していないが、SB222・223との関係から、8世紀末以前の遺構と思われる。

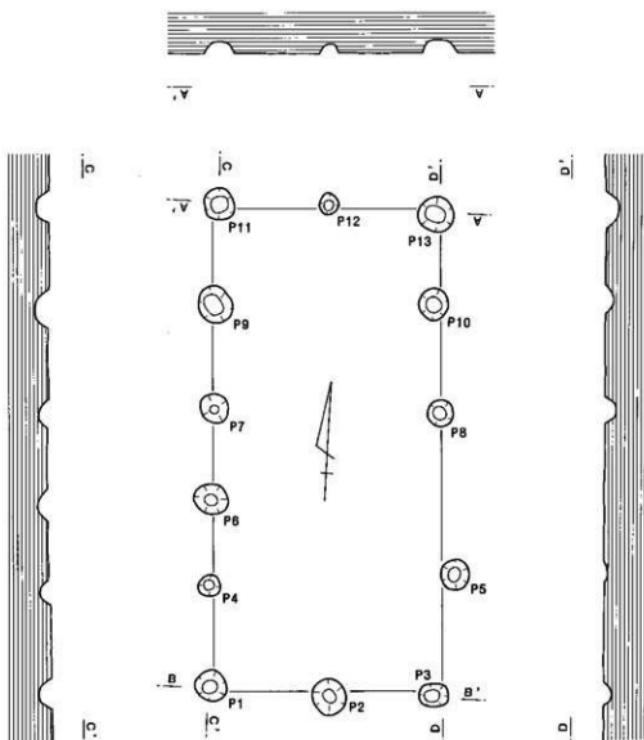
豊穴住居跡

SB208 (第107図)

K72~73区で検出した南北3.9m、東西4.6mの平面形がやや横長の長方形となる豊穴住居跡である。南北を軸とした棟方位はN1° Eである。規模の違いはあるが、SB207と平面形は類似する。埋土は暗褐色砂質土で、床面は確認できなかつた。甌は焼土や炭化物集中などの痕跡を含めて検出してない。柱穴はやや西側に寄つてはいるが、4本検出された。他にも3基ほどの小穴を検出したが、用途は不明である。出土遺物として31-2・3を図示した。2は須恵器壺蓋である。端部は下方に折られ、やや外に引き出される。3は土師器皿で、体部から口縁が短く、扁平である。内面には放射状となる暗文が施され、丹が塗られる。いずれも埋土からの出土のため不確定ではあるが、遺構の年代は8世紀中頃~後半と推定される。

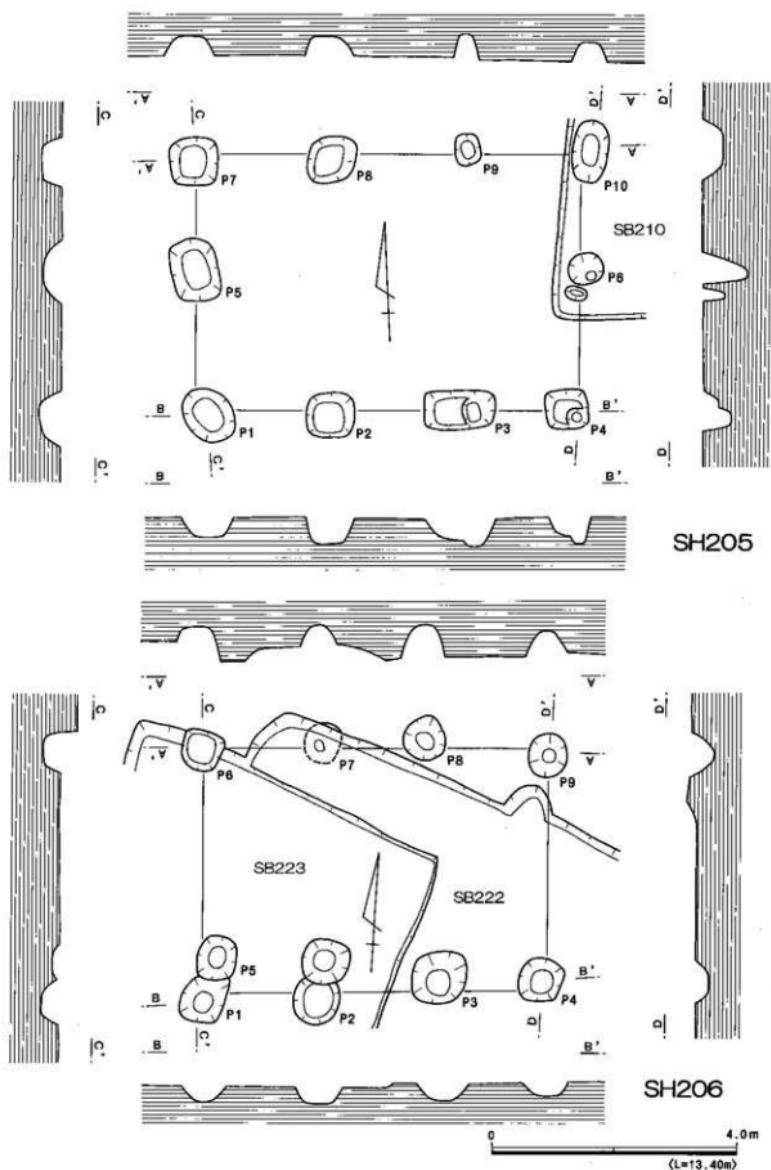
SB209 (第107図)

K・L73区で検出した豊穴住居跡である。東側は調査区外となるため全容は明らかではないが、検出した規模は南北4.0m、東西3.5m以上で、平面形は方形を成す。南北を軸とした棟方位はN1° Eである。埋土は1層とした暗褐色土を主体とし、灰白色土をブロック状に含む。1層下部に灰白色土が集中している部分もあった。明確な床面は確認できなかつたが、土器が2層上面で多く出土することからここが床面と考

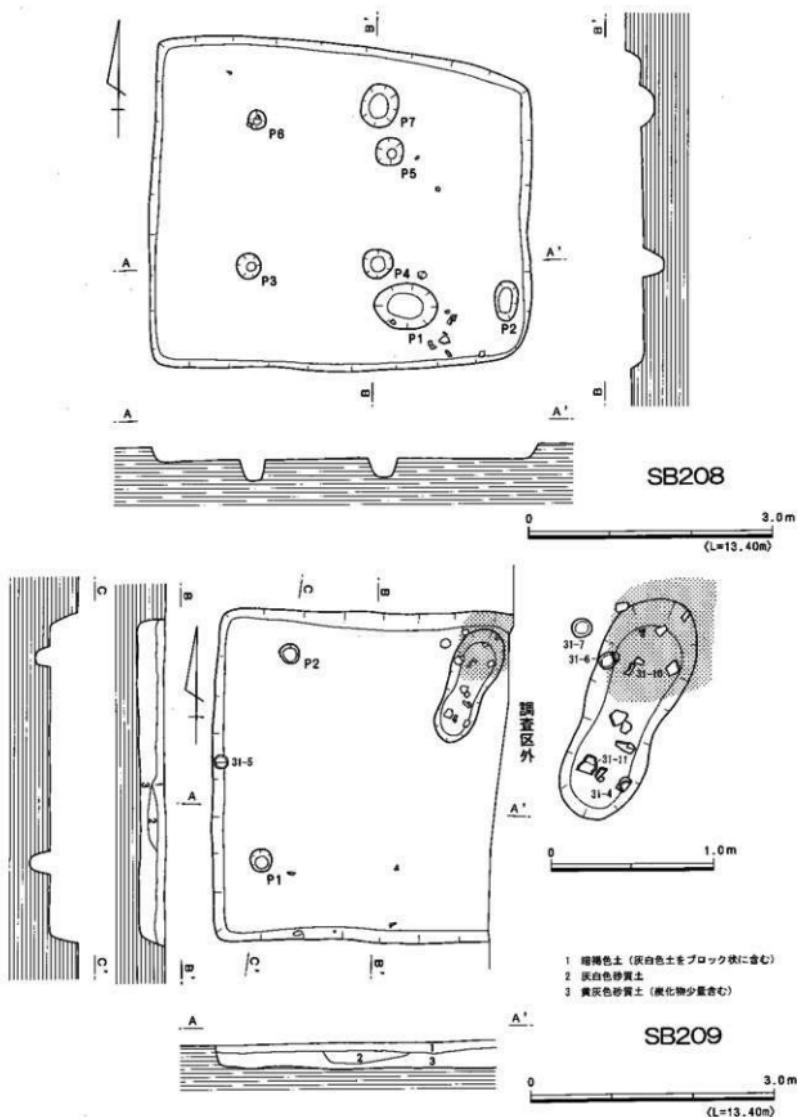


0 4.0m
(L=13.40m)

第105図 SH204 実測図



第106図 SH205・206 実測図



第107図 SB208・209 実測図

えられる。2層以下は掘り方であると考えられる。北東隅に近いところで焼土・炭化物が集中する部分があり、土器も多く出土することからここに竈があったと考えられる。焼土・炭化物集中部分は遺構中央にかけて広がっており、それを除去すると土坑状の浅い落込みとなった。土器も多く出土するため竈に伴う焚口となる可能性がある。柱穴は掘り方下面で西側の2本を確認したが、東側は検出しておらず、調査区外に存在するのかもしれない。

出土遺物は31-4~11を図示した。4・5は須恵器である。4は有台坏で底部が突出し、底部と体部の境は不明瞭である。5は皿である。底部から体部にかけて緩やかに立ち上がり、口縁は外反し、上端には面を持つ。6~11は土師器である。6~9は坏である。いずれも底部から体部にかけてやや外に開きながら立ちあがり、底部中央を除いて丹が塗られる。煤が付着していることから2次焼成を受けていると思われる。10は長胴甕で、口縁は内傾する。11は小型甕である。輪積み痕が顯著で、内外面には煤が付着している。また、鉄製品では52-23の用途不明品、53-1の釘が出土している。31-4はやや古い様相を示すが、他の遺物はいずれも8世紀後半の所産と考えられ、遺構の年代もその時期に求めたい。

SB210（第108図）

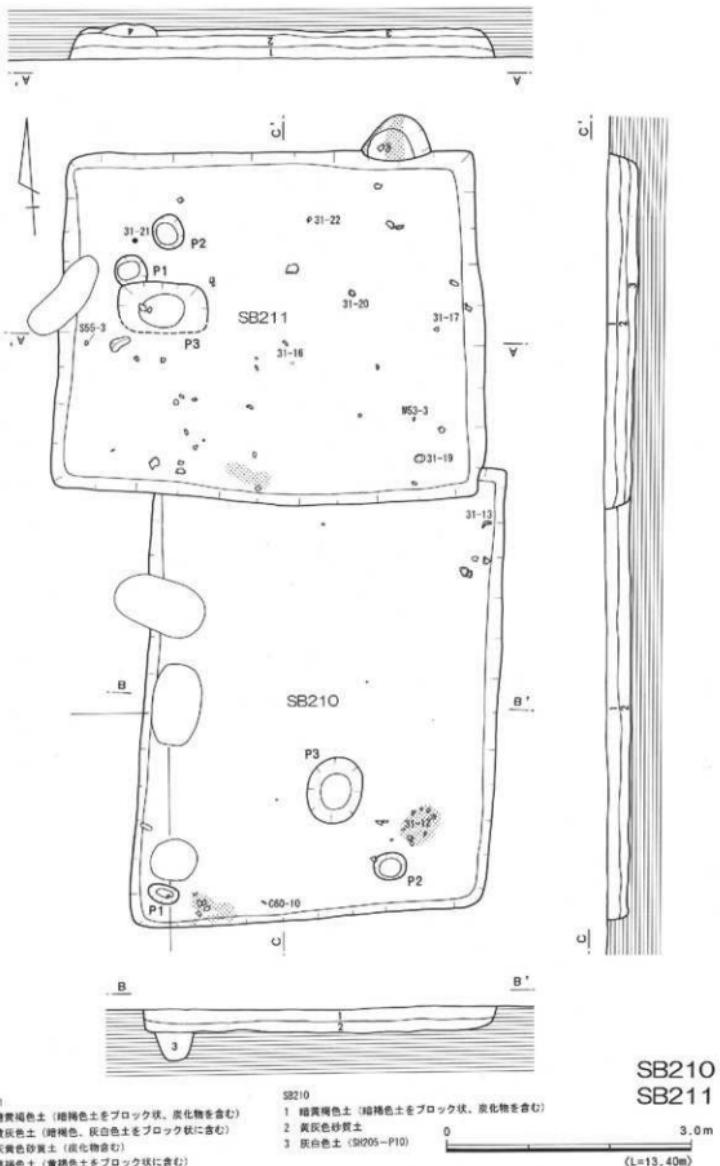
K74区で検出した遺構である。SB211とは重複しているが、土層観察からこちらの方が古いと判断した。南北5.4m、東西4.3mの規模で、平面形は長方形を呈し、南北を軸とした棟方位はN7° Eである。埋土は灰黄色砂質土を主体とし、黄褐色土をブロック状に含む。2層上面で土器が集中し、焼土の広がりがあることから、ここを床面と想定した。焼土・炭化物が集中する部分は南端西と東で検出したが、竈の位置は不明瞭である。60-35の土製支脚の出土から竈が使用されていた可能性は高い。東の焼土集中部分では31-12の土師器坏をはじめ、土器の小破片が出土した。掘り方下面で小穴は検出したが、位置関係から柱穴と判断することはできなかった。また、掘り方下面ではSH205の柱穴を検出しており、SH205よりもこちらの方が新しいと考えられる。

出土遺物は31-12~14を図示した。いずれも土師器である。12は土師器坏である。体部から口縁はほぼ垂直に立ちあがる。13は長胴甕で、口縁部のみの残存である。口縁はほぼ水平に引き出される。14は小型甕である。体部と口縁の境の屈曲が比較的明瞭である。これら遺物から、8世紀後半を中心とした年代の遺構と推定する。

SB211（第108図）

上記SB210と切り合い関係にあり、こちらが新しい。南北4.3m、東西5.1mを測り、平面形は長方形を呈する。南北を軸とした棟方位はN7° Eである。埋土は暗黄褐色土を主体とし、その中に暗褐色土と灰白色土をブロック状に含む。遺物のほとんどは3層上面までに出土しているため、明確な床面は検出できなかつたものの、床面がこの層上面と推定した。したがって3層以下は掘り方と思われる。遺構の北東では焼土が集中する部分を検出した。焼土を除去すると壁面が焼けた状態となっており、煙道の痕跡と考えられる。竈を構築したであろう痕跡は確認できなかった。南端付近でも焼土を検出し、土師器の小破片が伴に出土したが、何によるものかは判然としない。柱穴らしき規格性のある小穴は検出できなかった。なお、掘り方下面で小穴SP315（第117図）を検出している。5世紀段階の土師器甕38-15が出土したため、前代の古墳時代中期の遺構と判断した。

出土遺物は31-15~22を図示した。15は灰釉陶器の甕である。底部破片ではあるが、底部内面にはハケ塗りと思しき施釉がなされる。高台も断面四角に近いものであることから9世紀前半位に位置付けられよう。16・17は須恵器で、16は箱坏である。底部はヘラ削りが施され、平らとなる。17は坏蓋である。扁平な宝珠つまみを有し、口縁端部は折れてやや外に引き出される。18~22は土師器である。18~20は坏で、18・19は底部から体部が直線的に立ち上がるのに対し、20は緩やかに立ち上がる。19は口縁がやや外反する。18は底部に墨書きがあるが、残存状況が悪く「にんべん」が確認できるのみである。21は高坏である。坏部はほぼ半球形をなし、外面には沈線が巡る。22は長胴甕である。口縁はやや内傾しており、屈



第108図 SB210・211 実測図

曲が強めである。灰釉陶器が出土しているが、埋土中からの出土であり、他の遺物と比較すれば混入品の可能性が高い。また、鉄製品では53-2の刀子、53-3の釘が、石製品は55-3の紡錘車が出土している。60-36の轔の羽口も注目できる出土遺物である。出土土器は8世紀後半の様相を示し、遺構年代もその時期と思われる。

SB212（第109図）

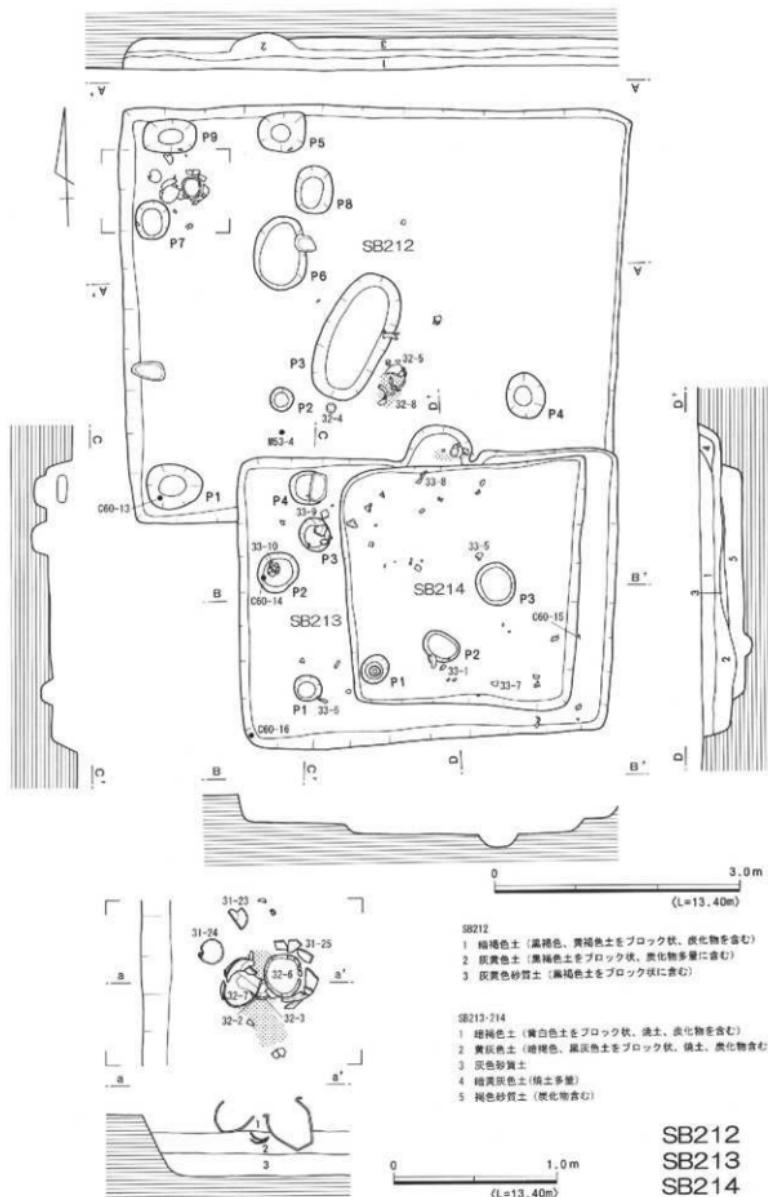
K・L74～75区でSB213・214と重複して検出された遺構である。南北5.4m、東西6.0mの長方形を呈し、南北を軸とした棟方位はN1°Wである。この付近にはかなりの量の炭化物が散っており、またSB213とは埋土が類似していたため検出が困難であった。トレンチを入れ、平面と断面の双方を観察した結果、切り合い関係からSB213・214よりも古いと判断した。埋土は暗褐色土で、黒褐色土と黄褐色土をブロック状に含む。2層土上面で遺物がまとまるため、床面はこの面と考えられる。明瞭な竈の痕跡は確認できなかつたが、北西隅には32-6・7の土師器甕が直立したような状態で出土し、また周辺に焼土や炭化物が多く見受けられることから、ここに竈があった可能性が高い。完形の土師器杯（32-2・3）が2枚重ねられた状態でその甕の下から出土した。またほぼ完形である31-23・24の須恵器坏蓋がその北側で出土した。どのような理由でそこに置かれたかは判然としない。中央やや南でも若干の焼土と土師器甕（32-5・8）がまとまって出土している。また、何らかの作業台としての使用が想起できる石も遺構中央付近と西端でそれぞれ出土している。中央付近の石は20cm角、西側の石は長辺40cm、短辺20cm程度の河原石で、いずれも平らな面を上に向けて置かれていた。下部は先に床面と推定した2層上面に接する。掘り方下部で小穴は検出できたが、柱穴として並ぶものは確認できなかった。

遺物は31-23～25・32-1～8が出土した。31-23・24は須恵器の坏蓋である。いずれも扁平な宝珠つまみを有し、口縁端部は下方に折れた後、外に引き出される。焼成が甘く、色調は浅黄橙色となる。31-25・32-1～8は土師器である。32-1～4は杯である。底部と体部の境は緩やかで、体部は外に開き、外反味に立ち上がる。31-25・32-5～8は長胴甕である。いずれも外面には縱方向のハケ、内面は板ナデ痕が顕著である。31-25・32-8は口縁がほぼ水平となり、31-25はやや頸部が長くコの字状となる。32-5・6の口縁は内傾する。口縁端部は5がやや内彎し、6は上方に折れ受け口状となる。また、鉄製品は用途不明品の53-4が、石製品は56-1の砥石が出土している。遺構年代は出土遺物から8世紀後半～末に位置付けられると思われる。

SB213（第109図）

前述のようにSB212、214と重複する。SB214よりも新しいと考えられる。南北3.5m、東西4.5mを測り、平面形は長方形となる。南北を軸とした棟方位はN1°Wである。埋土は暗褐色土で、黄白色土をブロック状に、また炭化物や焼土粒を含む。2層上面に遺物がまとまるため、ここが床面であろう。竈は北側中央にあったと考えられる。形状は不明瞭ではあるが、焼土が集中する部分があり、袖の痕跡らしき焼けた土が東側で検出できた。また、ここでもSB212で出土したものと類似する石が竈の西側で出土している。長辺35cm、短辺20cmの河原石で、やはり平坦な面を上にして置かれている。下部は2層上面に接する。掘り方下面で西側の主柱穴と思しき小穴を検出したが、東側は検出できていない。

遺物は33-1～10が出土した。1は須恵器坏蓋である。口縁端部の折れは小さい。2～10は土師器である。2・3は杯で、体部は開きつつやや外反して立ち上がる。4～6は皿である。底部と体部の境は緩やかで、体部はそのまま立ち上がる。4は口縁端部が外反する。6の底部には墨書があるが、残存状況が悪く判読できない。7・8は甕である。口縁は内傾しており、端部は肥厚し、丸く収められる。8の体部は肩の張りが弱いようである。9・10は小型甕である。いずれも肩の部分に最大径を持ち、9の口縁はまっすぐ立ち上がるのに対し、10はやや外反する。遺物から8世紀末頃の遺構と考えられる。



第109図 SB212・213・214 実測図

SB214（第109図）

SB214はSB212よりも新しく、SB213よりも古いと判断した。SB213の掘り方下部で検出した。南北2.9m、東西2.8mで、平面形はほぼ正方形を呈し住居の規模からいえば小型であるといえよう。南北を軸とした棟方位はN4° Wである。掘り方のみ残存していると考えられ、埋土は炭化物の混じる褐色砂質土である。竈はそれを推定させるような状況は確認できていない。主柱穴もはっきりしない。

遺物は33-11が出土したのみである。土師器広口壺と思われるが、他でみられるものよりもかなり小型品である。底部は欠けているが、台付壺の可能性もある。遺物からは遺構の時期が判然とないが、SB212・213との関係から8世紀後半～末と考える。

SB215（第110図）

J74～75区で検出した遺構である。SB216と重複しており、土層の断面観察からこちらの方が古いと判断した。南北4.6m、東西4.4mのほぼ正方形の住居跡である。南北を軸とした棟方位はN2° Wである。埋土は炭化物を含んだ黄褐色砂質土である。明確な床面を検出できていないが、遺物の出土状況から2層上面が床面であったと推定する。竈は痕跡を含めて検出できなかった。柱穴は南側でP2・4を検出していいるが、北側は検出できなかった。

遺物は33-12～18が出土した。いずれも土師器である。12～14は壺である。12は底径が小さく、体部は大きく開いてほぼ直線的に立ち上がる。13・14は12よりもかなり深く、内面には横方向のハケ調整がなされる。15・16は長胴壺である。口縁はいずれも内傾し、端部は丸く收められる。16はやや小型品である。17・18は手捏ね土器である。17は上部が欠けるが、壺形となろう。18は底部が平らで、口縁は外反している。その他、55-4のガラス玉が出土している。遺物は13・14が7世紀代の遺物と考えらるが、それ以外は概ね9世紀前半頃の特徴を示していると思われ、遺構の年代もその時期に求められよう。13・14はSB215の北側で検出したSX218に伴っていたものが、混入したものと考えられる。

SB216（第110図）

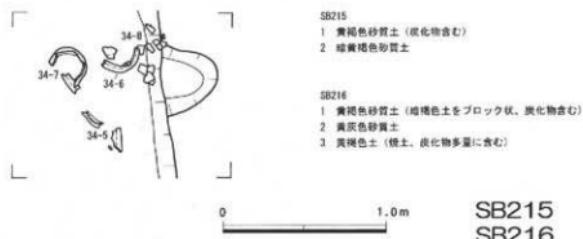
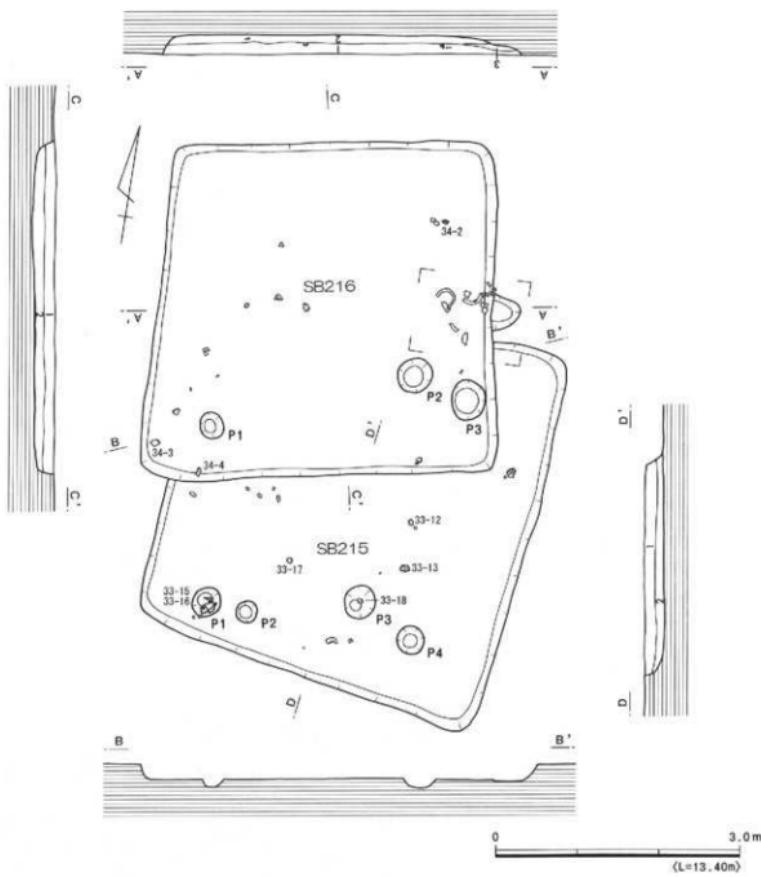
SB215と重複して検出され、こちらの方が新しいと考えられる。南北4.1m、東西4.1mの規模で、南北を軸とした棟方位はN7° Wである。埋土は炭化物を含んだ黄褐色砂質土を主体とし、暗褐色土を若干含んでいた。明確な床面を確認できなかったが、遺物の出土状況、炭化物の拡散状況から2層上面が本来の床面と思われる。竈は東側で検出した。軸などの構築材は全く残っていないが、煙道と思われる部分が確認できた。また、その周辺で土師器壺がまとまって出土している。小穴はP1～3を検出したが、柱穴とはなり得そうにない。

遺物34-1～8が出土した。いずれも土師器である。1は壺である。深く、丸みをもった形態を持つ。2・3は有台壺である。2は底径が大きく、体部との境は明瞭に折れる。高台はその境につけられる。3は全体的に丸みを帯びる碗形である。灰釉陶器の模倣品である可能性が高い。4～7は壺である。4の口縁はほぼ水平に屈曲するが、5～7は内傾する。8は鉢と思われる。体部は大きく開き、端部はやや外反する形態である。外面には指頭が明瞭に残る。鉄製品は53-5の鎌が出土した。これら遺物から遺構は9世紀前半頃のものと推定する。

SB217（第111図）

K75区でSB218・219と重複して検出された。切り合ひ関係からこの中でも最も古いと考えられる。南側は切られているため明らかではないが、東西は5.0mを測る。南北を軸とした棟方位はN23° Eである。床面、柱穴共に明らかではない。明瞭な竈の痕跡は検出していないが、北側に焼土の集中する部分があることから、この付近に竈があった可能性は高い。焼土集中部分は34-10の土師器壺が出土した。

出土遺物は34-9・10である。9は須恵器皿である。底部と体部の境は緩やかで、口縁は端部で外反する。10は土師器壺である。底径と口径の差が比較的小さく、体部はやや外反する。遺物は8世紀中頃～後半に



第110図 SB215・216 実測図

位置付けられると思われ、遺構年代もそこに求めたい。

SB218（第111図）

SB217・219と重複し、SB217より新しく、219よりも古いと考えられる。南北5.4m、東西4.7mの規模で、南北を軸とした棟方位はN6° Eである。埋土は黄灰色土を主体とする。明確な床面は検出できなかったが、土層観察と遺物の出土状況から床面は2層上面と推定する。竈は構造が明らかではないが、北側でその痕跡を検出した。煙道とみられる部分は小穴状となっており、周囲には焼土が集中する。小穴はP1・2を検出したが、柱穴となるものではなさそうである。

遺物は34-11・12が出土した。11は土師器壺で、口縁は内傾し、端部がやや引き上げられ受け口状となる。12は壺の把手である。形態は扁平で、縦方向に焼成前の穿孔がみられる。その他、鉄製品は53-6の刀子が、また55-5の瑪瑙製勾玉も出土した。遺物からは年代を測ることが困難であるが、SB217・219との関係から8世紀末と推定する。

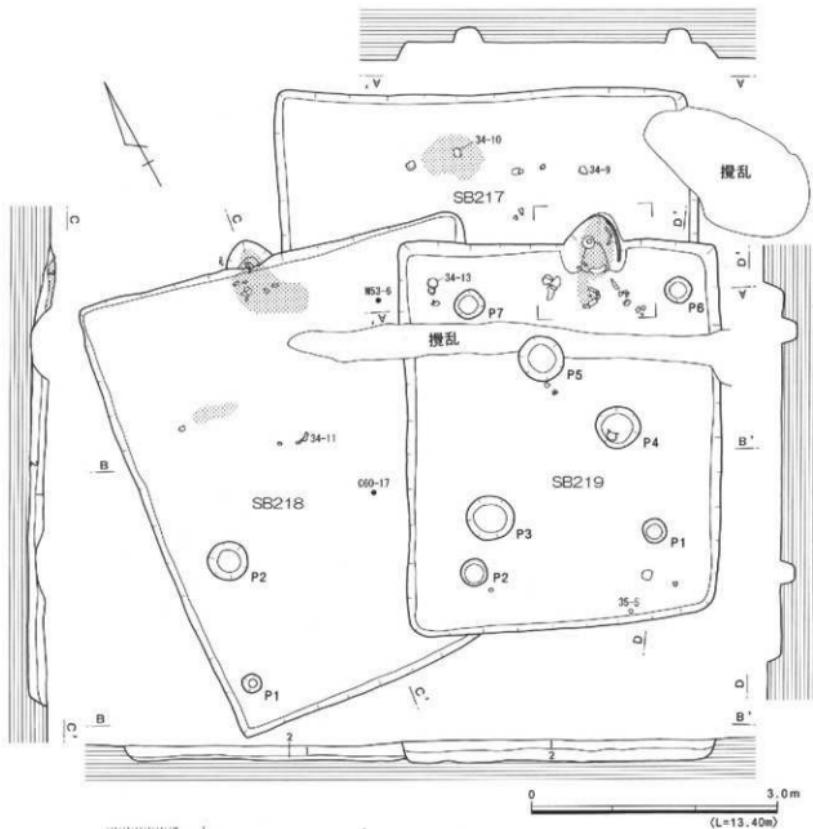
SB219（第111図）

SB217・218と重複し、最も新しいと考えられる。南北4.7m、東西3.8mの規模である。平面形はやや縦長な長方形を呈する。南北を軸とした棟方位はN26° Eである。埋土は黄褐色土を主体とする。明確な床面は確認できなかったが、竈周辺の焼土の拡散状況や遺物の出土状況から2層上面を床面と推定する。竈は北側中央部で検出した。粘土などの構築材は検出できなかったが、焼けた土によってその一部が確認できた。周囲には土師器壺などが散乱した状態で出土しており、竈において使用したもの一部と考えられる。また、竈内には34-14の須恵器高盤が逆位の状態で置かれていた。当初は支脚として転用されたものと考えて調査を進めたが、高盤には火を受けた痕跡が確認できず、竈がその機能を停止してから置かれた可能性が高いと思われる。よって、竈廻棄時に何らかの祭祀行為に伴ってここに置かれたことが想定される。柱穴は四隅にかなり寄った形となるが、P1・2・6・7が該当すると思われる。

遺物は34-13～16・35-1～5が出土している。34-13～15は須恵器である。34-13は壺蓋である。口径は10.8cmと小型で、高さがある宝珠つまみを有し、口縁端部は突起が巡るようにつくり出される程度である。34-14は高盤である。脚は裾の部分を欠く。割れ口が揃えられているかのようにきれいかため、意図的に欠かされた可能性もある。盤部は端部の折れがなく、断面四角となって終わる。34-15は鉢である。体部は肩の部分が張り、口縁は内彎する。口縁端部は上部に面を持ち、外側には突起が巡る。35-1～3は土師器壺である。竈周辺から出土した。口縁の形態は1・2がほぼ水平に折り曲げられるが、3はやや内傾する程度である。3は意図的ではないのかもしれないが、口縁の一部が下方に曲げられている。これら遺物からSB219は9世紀前半に位置付けられよう。

SB220（第112図）

J75～76区で検出した遺構である。西側は調査区外となるため全体は明らかではないが、南北4.3mの規模は確認できた。南北を軸とした棟方位はN3° Wである。張床、硬化面は検出していないが、検出された小穴や遺物の状況から2層上面が床面と推定できる。埋土には炭化物を含む。竈は東側中央で検出した。痕跡程度ではあるが、焼土がかなり集中している。注目すべきはP2とした小穴である。小穴は直径25cm程度の円形で、平面的には三重と観察できる。外側となる壁の部分は焼けており、その内側には炭化物が堆積する。さらにその内側は鉄滓、焼土ブロック、炭化物が混じる暗褐色土が埋土となっていた。断面で見ると内側の暗褐色土の詰まる部分は下部に突出している。類例は浜松市村前山東遺跡（浜松市1992）などでもみられる。周辺から出土した鉄滓を分析したところ（付録参照）、精錬（大鍛冶）過程で生成された可能性が高いことが判明した。規模に違いはあるが、南伊豆町日野遺跡SG01（南伊豆町1987）が類似するような遺構であると思われ、これは精錬炉とされる。規模の違いはそのまま生産過程の規模に比例すると思われるため、大規模なものではないかもしれないが、当遺跡の集落内においてこうした

SB218
1 黄灰色土 (高褐色土をブロック状に含む)

2 黄褐色砂質土

3 高褐色土 (粘土、炭化物基)

SB219

1 黄褐色土

2 黄褐色砂質土

3 粘土、炭化物基

4 黄褐色土 (粘土、炭化物多量に含む)

5 棕黄灰色砂質土 (粘土、炭化物多量に含む)

6 細黄褐色土 (灰黄色土をブロック状、炭化物を含む)

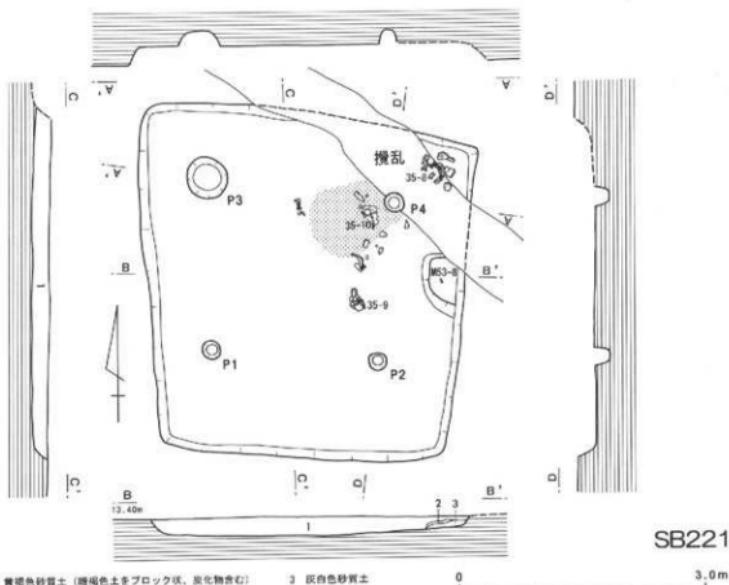
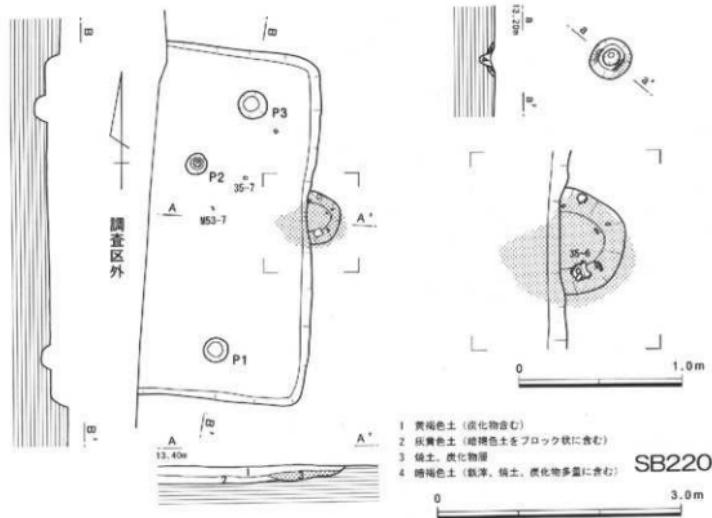
SB217

SB218

SB219



第111図 SB217・218・219 実測図



第112図 SB220・221 実測図

作業を行っていたことを推定できる資料といえる。鉄滓や繩羽口の破片のような関連遺物は遺跡内で多く出土するが、遺構としては検出したのはこのSB220-P2のみである。ここでは住居跡として報告しているが、工房であった可能性が高く、竈内より繩の羽口60-38が出土していることもそれを補強していると思われる。他の住居跡に問してもこうした工房的な性格を有するものがあるのかもしれない。

遺物は35-6・7が出土している。6は土師器小型壺である。竈内から出土したものである。7は壺形の手捏ね土器である。鉄製品は53-7の刀子が出土した。明確ではないが、遺構の年代は遺物から8世紀末～9世紀前半と推定する。

SB221（第112図）

J・K75区で検出した南北4.3m、東西3.8mを測る竪穴住居跡である。南北を軸とした棟方位はN6° Eである。埋土は黄褐色砂質土である。貼床や硬化面は検出していない。竈は検出できなかったが、北東付近に焼土、炭化物の広がりが認められた。また東側中央には灰白色土の高まりが検出され、上層の溝によって破壊されている部分もあり、断定はできないがこの高まりは竈の痕跡とも考えられる。柱穴はP1～4が検出され、主柱穴となろう。

遺物は35-8～10が出土した。いずれも土師器の壺である。8の口縁は水平近くまで折り曲げられるが、9・10はやや内傾する。8は口縁端部が受け口状となる。10の体部は肩がかなり張る。また、鉄製品では53-8の釘が出土した。これら遺物から遺構は8世紀末～9世紀前半に位置付けられよう。

SB222（第113図）

K・L77～78区でSB223と重複して検出した遺構で、こちらのほうが古い。SH206とも重複するがこれよりも新しい。南北を軸とした棟方位はN16° Wである。分割して調査した調査区の境となっており、南部分は検出できなかった。南北4.8m以上、東西7.4mとかなり大型の竪穴住居跡である。埋土は炭化物を含む暗褐色土である。北壁中央部で突起状に焼土が集中する部分を検出しておらず、これは竈の痕跡と考えられる。検出面に焼土、炭化物の拡散が確認できるため、床面は検出面上と推定できる。柱穴は検出していない。

遺物は36-1～5が出土した。1は灰釉陶器の碗底部である。高台は断面四角となる。2～4は須恵器である。2は小型壺である。体部が内縁気味に立ち上がり、肩が張る。口縁端部は外反する。3は箱坏の底部破片である。底部はヘラ削り、外周はナデられる。4は壺蓋である。口縁端部は内側に折れる。5は広口の小型壺である。遺構の年代はこれら遺物とSB223との関係から9世紀前半と推定する。

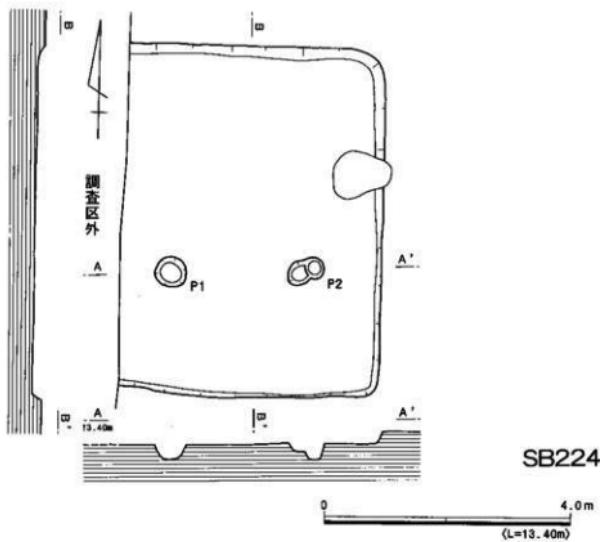
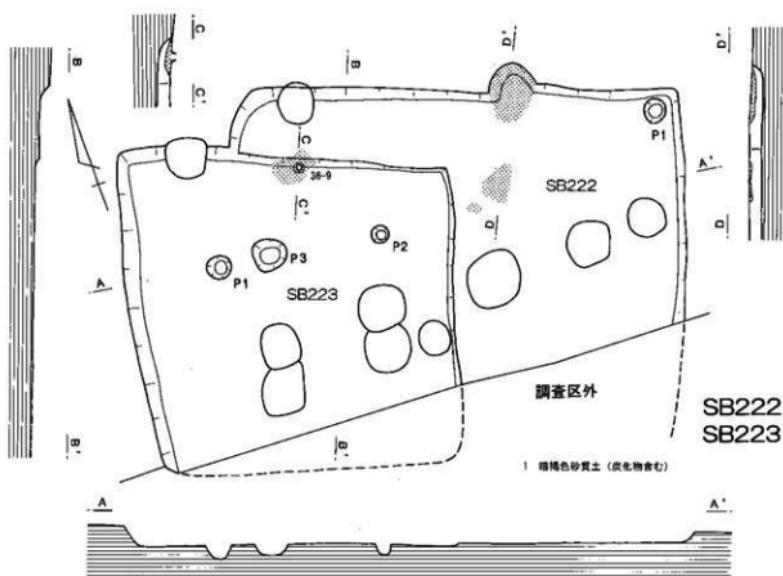
SB223（第113図）

SB222・SH206と重複して検出されたが、こちらの方が新しい。南北4.4m以上、東西5.3mの規模で、南北を軸とした棟方位はN15° Eである。南側はSB222と同じく検出できなかった。SB222同様、検出面で焼土の拡散が確認できるため、検出面が床面と推定できる。遺構として検出したのは掘り方であろう。北側中央に焼土が集中する部分があり、これを竈と考える。焼土中では36-9の土師器小型壺が逆位の状態で出土した。かなり被熱しているため、支脚として転用されていた可能性がある。

遺物は36-6～9が出土した。6・7は灰釉陶器である。6は大型の碗底部と思われる。高台はやや長く、爪形に近い。7は皿で、体部はわずかに彎曲し、口縁端部は外反する。高台は断面三角で、高台内は糸切り痕が残る。8・9は土師器である。8は壺の口縁部破片である。やや内傾する口縁を持つ。9は小型壺である。頸部の屈曲が明瞭となり、口縁は外反する。これら遺物から遺構は9世紀末～10世紀前半頃に位置付けられると考える。

SB224（第113図）

J・K78区で検出した竪穴住居跡である。西側は調査区外となるため、全体は明らかではないが、南北は5.8m、東西は4.2m以上の規模である。南北を軸とした棟方位はN1° Eである。床面は不明瞭であった。遺構周辺では砂礫層の標高が上がっており、掘り方の下部は砂礫層に達する。竈は検出できなかった。



第113図 SB222・223・224 実測図

P1・2が南側の柱穴となるようが、北側では検出できなかった。遺物は出土していないが、南北に軸を持つことから遺構の年代は8世紀末～9世紀前半と推定する。

SB225（第114図）

K79・J79～80区でSB226と重複して検出された。平面及び断面の観察からこちらのほうが古いと判断した。SB226や上層遺構に一部切られる。南北5.7m、東西4.9mの規模で、南北を軸とした棟方位はN14° Eである。床面は不明瞭で、SB224同様掘り方下部は砂礫層に達する。竈、柱穴共に検出できなかった。遺物は出土していないが、SB226との関係から9世紀後半頃と推定する。

SB226（第114図）

SB225と重複しているが、この遺構の方が新しい。南北5.1m、東西5.1mを測り、南北を軸とした棟方位はN16° Eである。床面は不明瞭で、SB224・225同様掘り方下部は砂礫層に達する。北辺から突起状に竈の煙道の痕跡と思われる遺構が検出され、焼土や炭化物が埋土中に多量に混じっていた。柱穴は検出できなかった。

遺物は36-10とした灰釉陶器の皿の口縁部破片が出土している。小破片ではあるが遺物の年代観から、遺構の時期は9世紀後半～10世紀前半と推定される。

SB227（第115図）

J・K82区で検出した遺構であるが、西側が調査区外となるため全体は明らかではない。南北は5.2m、東西は2.1m以上で、南北を軸とした棟方位はN8° Eとなる。遺構周辺は砂礫層の標高が上がっており、それを掘り込んでいる。床面は明らかではなく、竈も検出できなかった。小穴や土坑状の遺構を検出し、P4・9が位置から柱穴となる可能性が高い。P6は規模が大きく、貯蔵穴となるかもしれない。

遺物は36-11～15が出土している。11・12は須恵器の壺蓋である。11は焼成が甘いため胎土は脆い。12は上部外面がヘラ削りである。口縁は内彎する。13・14は土師器壺である。共に口縁が外反しつつ緩く折り曲げられるが、14は端部がやや肥厚する。13は肩がやや張るが、14はあまり張らない。14は外面が縦方向、内面は横方向にハケ調整が顕著である。15は土師器瓶である。把手は欠けていると思われる。口縁外面には貼り付けの突帯が巡る。14の壺と調整がよく似ており、ほぼ同様のハケ調整が施される。これら遺物から7世紀中頃の遺構と推定できる。

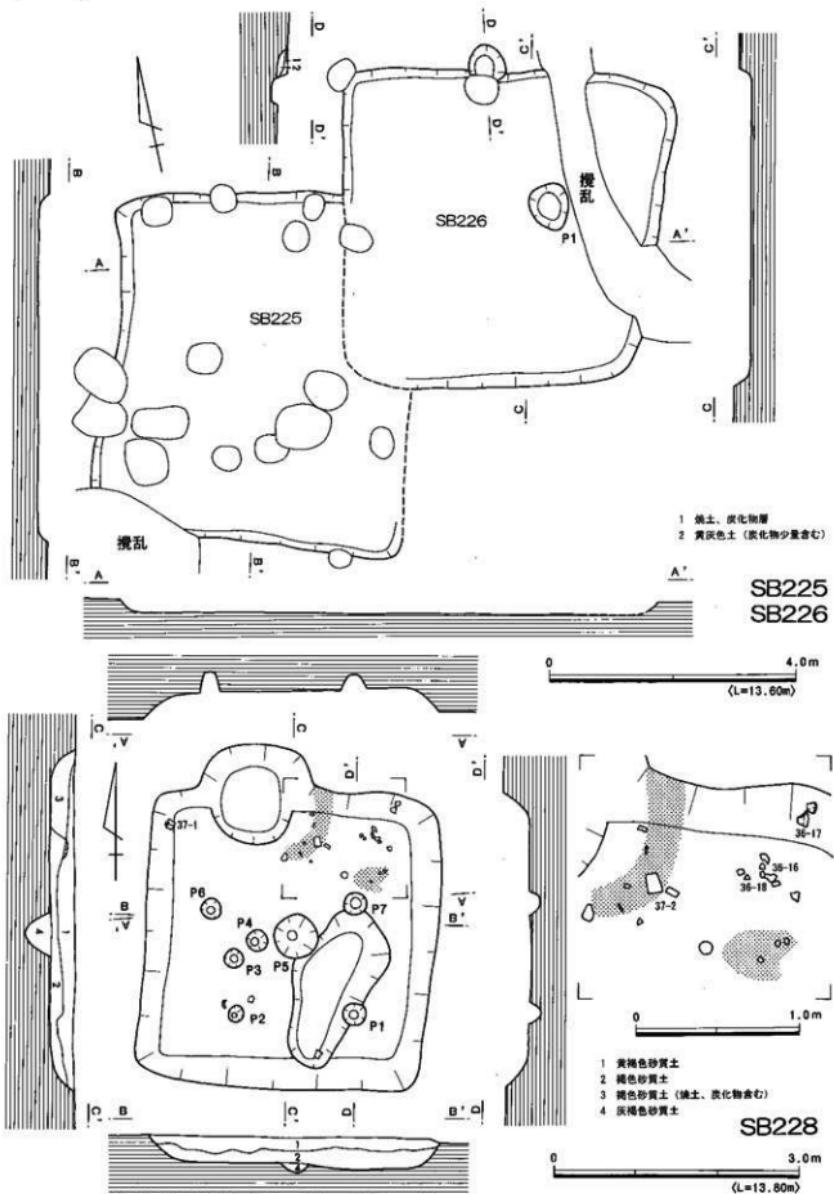
SB228（第114図）

K83区で検出した南北3.7m、東西3.5mと、やや小型の整穴住居跡である。南北を軸とした棟方位はN5° Eである。SB227同様、砂礫層を掘り込んでいる。床面は明らかではなかったが、北辺の西寄りで竈の痕跡を検出した。本体は掘り方と思われる土坑状の遺構として検出され、その東側を巡るように焼土の広がりを確認した。周辺では土器が散乱するかのような状態であった。南側ではP1・2が柱穴となるかもしれないが、北側は検出できていない。

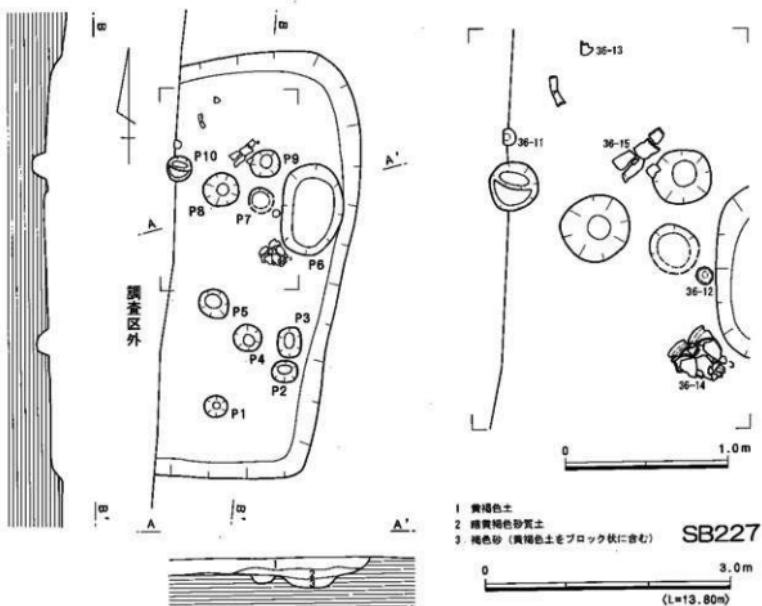
遺物は36-16～18・37-1・2が出土した。36-16は須恵器壺身である。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁端部は外反する。底部はヘラ削り調整となる。36-17・18・37-1・2は土師器である。36-17は壺で、底部と体部の境が明瞭に折れ、口縁は外反する。内面には暗文が施される。36-18は小型壺であろう。頸部が細く、内外面はハケ調整が顕著である。37-1は壺の口縁部である。口縁は内傾する。37-2は瓶である。体部はほぼ直線的に開き、口縁端部は上部に面をつくり出す。把手には縦方向に焼成前の穿孔がみられる。これら遺物から遺構は8世紀前半～中頃に位置付けられよう。

土坑

III区でこの時期における土坑は27基検出した。多くは奈良～平安時代に位置付けられる。他の遺構はと比べ、平安時代のものが多いことが指摘できる。



第114図 SB225・226・228 実測図

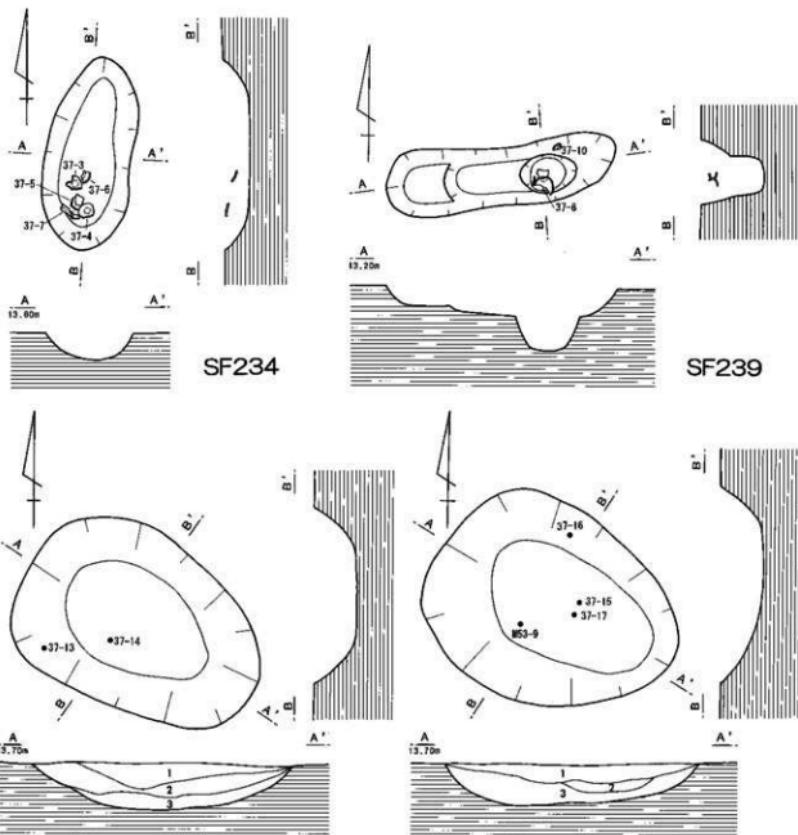


第115図 SB227 実測図

SF234は(第116図)はK79区で検出した長径1.58m、短径70cmの楕円形の土坑である。埋土には黒色土のブロックを多く含んでいた。南側の上層土中から遺物がやまとまって出土している。遺物は37-3~7を図示した。3は灰釉陶器皿である。体部はわずかに丸みを持ち、口縁端部は外反する。高台は断面三角に近く、高台内はナデである。内面は底部中央を除いて刷毛塗りによる施釉がなされる。4~6は土師器壊である。底径が小さく、体部は大きく開く。また4・6は口縁部がやや外反する。7は土師器壺の口縁部である。頸部がやや長く、口縁は水平近くまで折り曲げられ、端部はわずかに受け口状となる。これらは9世紀後半に位置付けられよう。

SF239(第116図)はK72区で検出した長さ1.9mの溝状といつてもよい形状の土坑である。東側底面には小穴状にさらに掘り込まれており、その上層付近で遺物が出土している。遺物は37-8~10を図示した。8は灰釉陶器の長頸壺である。口縁部と底部を欠くが、肩周辺を中心に灰釉が掛けられる。9は土師器壺である。口縁は水平に折り曲げられる。体部はあまり肩が張らない。これらから遺構は9世紀代のものと思われる。

SF262・263(第116図)はJ・K81区で近接して検出された土坑である。いずれも長径2.1m、短径1.5m程度の楕円形を呈し、埋土は上層が灰白色土であり酷似することから、同時期の遺構と推定する。埋土には炭化物を多量に含んでいる。遺物はSF262から37-12~14が、SF263から37-15~18が出土している。12・15・16は須恵器である。12は壺とした。体部が丸みを持って立ち上がり、体部下半と底部はヘラ削りが施される。底部外周近くには削り出されたごく小さな突起が高台状に巡る。15は箱壺である。底部



- 1 灰白色土（褐色土をブロック状、炭化物含む）
- 2 褐黄色土（褐色土をブロック状、炭化物含む）
- 3 棕色砂質土（炭化物含む）

- 1 灰白色土（褐色土をブロック状、炭化物を多量に含む）
- 2 褐色土（褐色土をブロック状、炭化物を多量に含む）
- 3 墓灰白色砂質土（灰白色土をブロック状、炭化物を多量に含む）



第116図 SF234・239・262・263 実測図

とその外周にはヘラ削りされ、段が形成される。さらにその外周にはナデ調整がみられる。体部は開き、器高は高い。16は坏蓋で、つまみのない、いわゆる平頂蓋である。口縁端部は突起が巡る程度で、頂部はヘラ削りが施される。13・14・17・18は土師器である。13・17は坏である。体部が大きく開くものである。14は皿で、底部と体部の境は比較的明瞭となり、口縁端部は外反する。18は有台坏の底部である。これら遺物から、遺構は9世紀前半～中頃のものと思われる。

溝状遺構

Ⅲ区ではこの時期の溝はあまり検出されていない。特に調査区南ではほとんど検出していない。Ⅱ区で検出された小溝もほとんど検出することができない。調査区北端で検出されたSD254、260からはやや遺物がまとまって出土した。SD254からは38-1～6、SD260から38-7～9が出土している。38-3は須恵器である。1は坏である。底部は丸みを持ち、ヘラ削りが施される。口縁端部は外反せず、そのまま終わる。2は高坏の坏部である。口縁端部内面には面がつくり出される。3は坏蓋で、かえりがつく。つまみは扁平の宝珠つまみとなるが、頂部が低い。4は土師器坏とした。5・6の高坏形の手捏ねと共に祭祀的な色合いが濃いと思われる。7・8は土師器蓋の口縁部である。口縁は緩やかに内傾し、体部はあまり張らない形態を持つものだろう。9は台付窓の脚部である。端部は内側に折り返され、内外共にハケ調整が顕著である。これら遺物からSD254・260は堅穴住居跡SB227とほぼ同時期の7世紀中頃の遺構と推定する。SB227とSD254は一部重複しており、厳密に並存したとはいえない。しかし、これら遺構は単独に存在したのではなく、周辺には調査区外を含めて7世紀代の散在的な集落がある程度の広がりを持っていたと推定される。

小穴

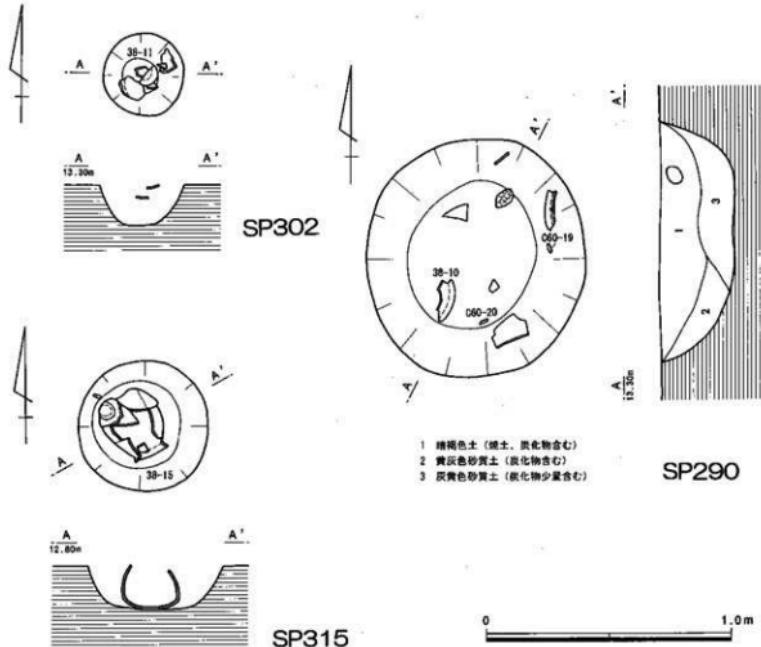
Ⅲ区では他の調査区ほど小穴は検出できていない。掘立柱建物跡が少なく、堅穴住居跡が多いという集落のあり方にも関わると思われる。こうした小穴の多くは居住に伴って營まれたと思われるが、機能についてはよくわからない。

SP302（第117図）はJ74区で検出した、直径60cm程度の小穴である。中から38-11の須恵器短頸壺の体部が、ややまとまって出土した。口縁部は欠けているが、体部は復原できた。SP290（第117図）はK73区で検出した。38-10の土師器窓や、60-19・20の土錐が出土している。SP315（第117図）はK74区、SB211の掘り方下面で検出した小穴である。ほぼ完形に復原できる38-15の土師器窓が出土した。体部外面には縱方向の板ナデが顕著に見え、ほとんど使用していないとさえ感じるほど保存状態はよい。5世紀後半頃の土器と思われるが、笠井若林遺跡ではこの時期の遺構はおろか、遺物もほとんど出土しておらず、単独の遺構に近いと思われる。

性格不明遺構

Ⅲ区で性格不明遺構とした遺構は13基である。ほとんどは不整形の大型土坑状の遺構である。時期としては7世紀代、9世紀代のものが多く、多くの堅穴住居跡が營まれる8世紀後半～9世紀前半以外の時期に多いように思われる。

SX218（第118図）はJ75区で検出した長径3.12m、短径74cmの不定形土坑である。SB216・220と重複し、SB216の掘り方下部で検出した。遺構の中からは土師器の窓などが大量に出土した。遺物は39-2～14・40-1・2を図示した。39-2は須恵器坏蓋の口縁部破片と思われる。39-3～14・40-1・2は土師器である。39-3～7は坏である。3・4・6・7は底径が小さく、体部は丸みを持って立ち上がる。6・7は器高が大きく、

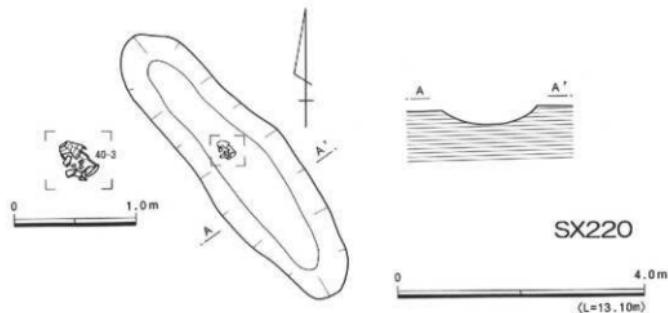
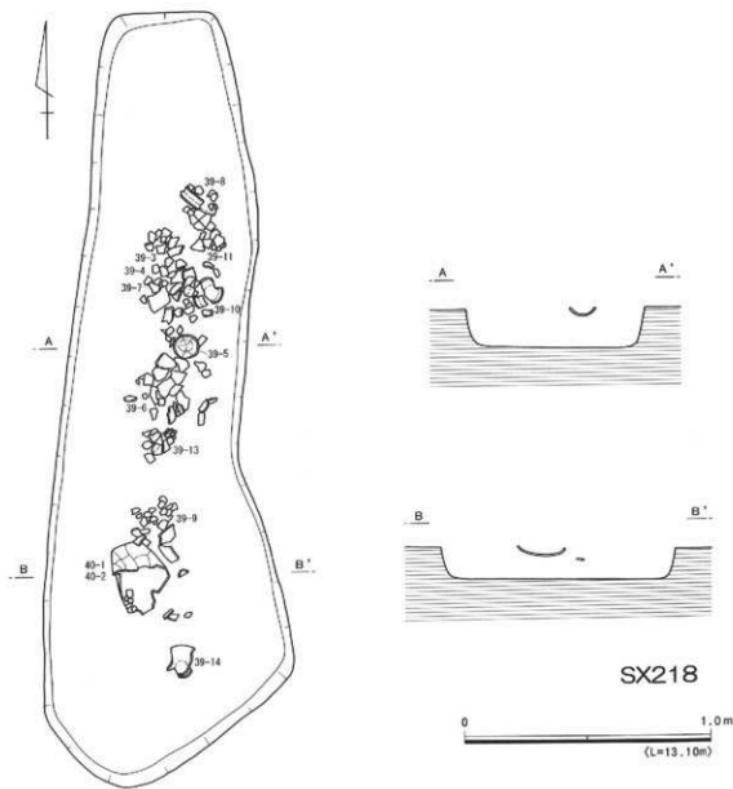


第117図 SP290・302・315 実測図

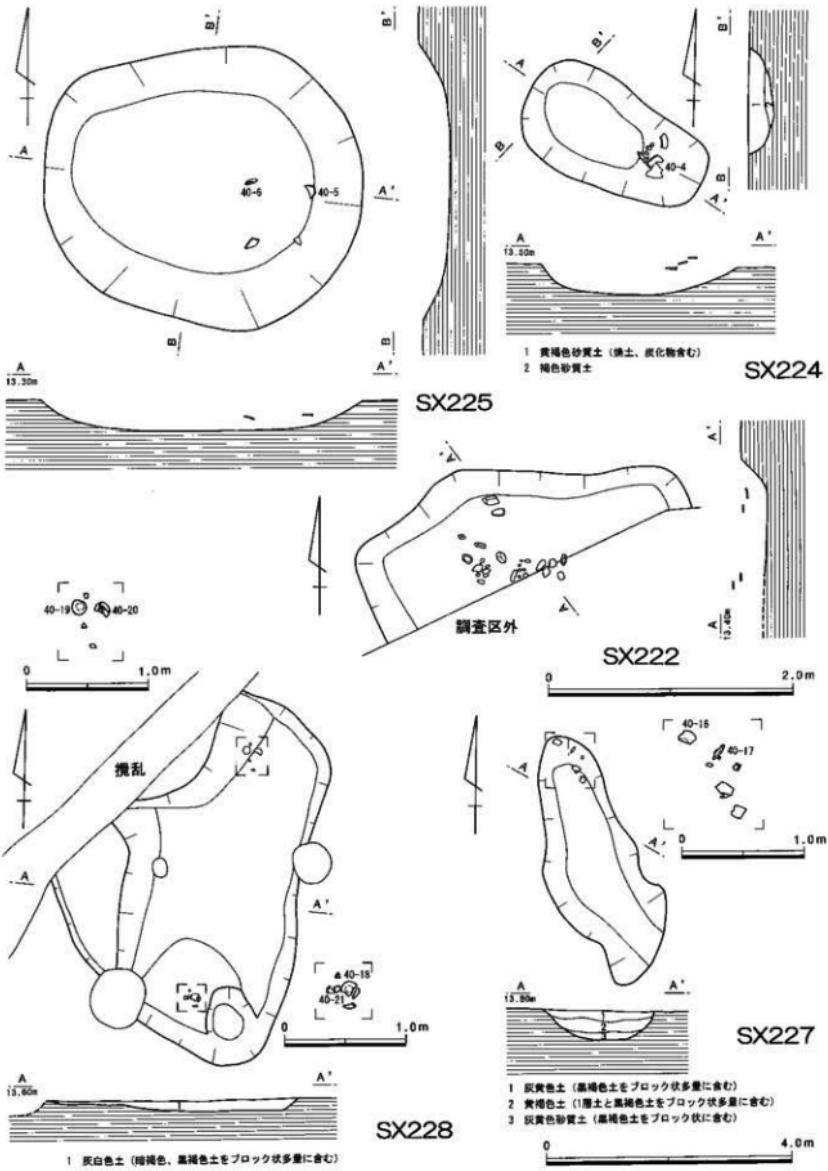
6は底部径が特に小さく、丸底に近い。5は底径と口径にあまり差がなく、体部はほとんど開かない。4~6は内面に横方向のハケ調整痕が顕著にみられる。39-8~13・40-1・2は長胴甕である。39-8・9・40-1・2はほぼ全体の形状がわかるもので、40-1・2は同一個体である。いずれも体部はあまり肩の張らない長胴形態で、外面には縦方向のハケ調整が顕著である。8・9は胴部下半に縦ぎ目が明瞭に表れており、内面の調整もそこを境として変わるものである。口縁はいずれも緩やかに屈曲し、口縁は内傾する。8は口縁の器厚が厚くなる。口縁部周辺は横ナデが施されるが、8・9は内面にハケ調整が残る。39-10・11は小型甕である。口縁の屈曲はいずれも弱く、口縁はやや外反している。10の体部下半は39-8・9と同様、縦ぎ目が顕著で、段を成すほどある。39-14は台付甕の脚部である。端部は内側に折り返される。これら遺物より、遺構の時期は7世紀中頃と考えられる。

SX222 (第119図)はJ80~81区で検出した不定形の遺構である。一部調査区外となるため、全体は明らかではない。遺物は破片のみで図示できるものはなかった。SX224 (第119図)はK83区で検出した梢円形を呈する遺構である。40-4の土師器甕が出土している。周囲には類似する遺構がいくつか検出された。SX225 (第119図)はK72区で検出された梢円形の土坑である。規模の割に浅い。遺物は40-5・6が底面よりやや上層で出土した。40-5は灰釉陶器の壺底部であろう。底部以外は施釉される。40-6は土師器の环である。体部外面には指頭が明瞭に残る。6世紀代のものであろう。

SX226はL78区で検出した梢円形を呈すると思われる遺構である。東側は調査区外のため全体は明らか



第118図 SX218・220 實測図



第119図 SX222・224・225・227・228 實測図

でない。暗褐色土を主体とする埋土中から遺物が散乱した状態で出土し、その内40-7~15を図示した。40-7~11は灰釉陶器である。7・8は碗の底部で、高台の断面は三日月形に近い三角形となる。9~11は皿である。9は体部に段を持つ段皿と呼ばれるものである。10・11は口縁がわずかに丸みを持って直線的に伸びる。口縁はやや外反する。内面には施釉されるが、発色はあまりよくない。高台は10が四角形、11が三日月形に近い断面形態である。40-12~15は上師器である。12・13は坏である。底径が小さく、体部は開いて立ち上がる。14は有台坏である。15は有台皿で、灰釉陶器の模倣形態と思われる。これら遺物からSX226は9世紀後半~末に位置付けられよう。

SX227（第119図）はK78区で検出した不定形の遺構である。南側は上層遺構に切られているため、全体は明らかでない。埋土には暗褐色土をブロック状に多量に含む。北側で遺物が出土し、40-16・17を図示した。16は須恵器の坏とした。体部は丸みを持ち、口縁端部はわずかに外反する。体部下半と底部はヘラ削りが施される。17は土師器裏である。口縁は水平に開く。体部は肩があまり張らない形態である。

SX228（第119図）はSX227と埋土や検出が類似する。北西部を上層遺構に切られるが、不定形の土坑状となる。遺物は40-18~21を図示した。18は灰釉陶器皿である。高台は断面四角形となり、高台内はヘラ削りである。体部は丸みを持って立ち上がる。19~21は土師器である。19・20は坏で、底径が小さく、体部は開いて立ち上がる。21は有台坏である。底部と体部の境に高台がつけられ、体部は直線的に立ち上がる。これら遺物から、SX227・228は9世紀前半~中頃の遺構と思われる。

②中世～近世

掘立柱建物跡

SH7（第123図）

K72区で検出した遺構である。調査区の境となっており、南側では検出できなかった。SH208とは方向、柱穴の規模、埋土など類似する点も多い。柱間が1.5~1.6m程度と小さく、SH208に対応する柵列である可能性も否定できないが、ここでは掘立柱建物跡として報告する。建物であるとすれば梁間1間×桁行2間以上の規模はあったと思われる。桁行方向はE32° Sである。柱穴の深さは検出面から約20~30cmである。遺物は出土していないが、SH8と関連性が高いと思われ、同時期の13世紀代と推定する。

SH8（第123図）

J73・K72~73区で検出した梁間1間×桁行3間の建物である。桁行方向はE27° Sである。上述のようにSH7とは関連が深いと考えられる。柱間は桁行2.1m程度、梁間は3.9mである。柱穴の深さは検出面から約30~40cmである。P5・7・8では柱穴が重複、あるいは近接しているが、建替えの痕跡は他には確認できなかった。建物の規模自体は大きいものではないが、比較できる建物がないため、どのような機能を持った建物かは明らかではない。図示できる遺物は出土していないが、13世紀代の山茶碗の破片が出土しているため、建物の時期もそこに求めたい。SH7を含めて、この建物も後述するように同時期の溝と同方向を示している。

SH9（第124図）

J79区で検出した掘立柱建物跡である。一部調査区外となる。梁間と桁行が判然とせず、南北3間×東西2間程度の建物となると思われる。桁行方向はN4° Eである。東側の柱間の並びがやや整っている以外は、かなり柱は不揃いである。柱間も1.3m~2.3mと幅がある。柱穴の深さは30~50cm程度である。SD61がP3・5と重複するが、柱穴のほうが新しい。出土遺物は41-1がP2から出土した。これは貿易陶磁の染付碗である。口縁の内外面には2重の界線が描かれる。この遺物は15世紀後半~16世紀初頭の遺物と考えられるが、周囲の遺構との関係から16世紀代として考えたい。

76

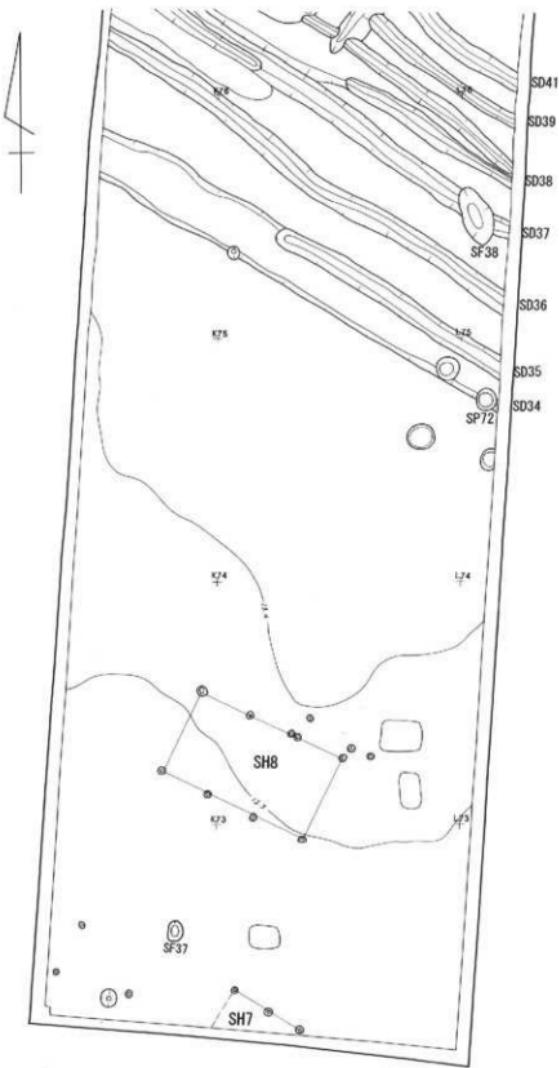
75

74

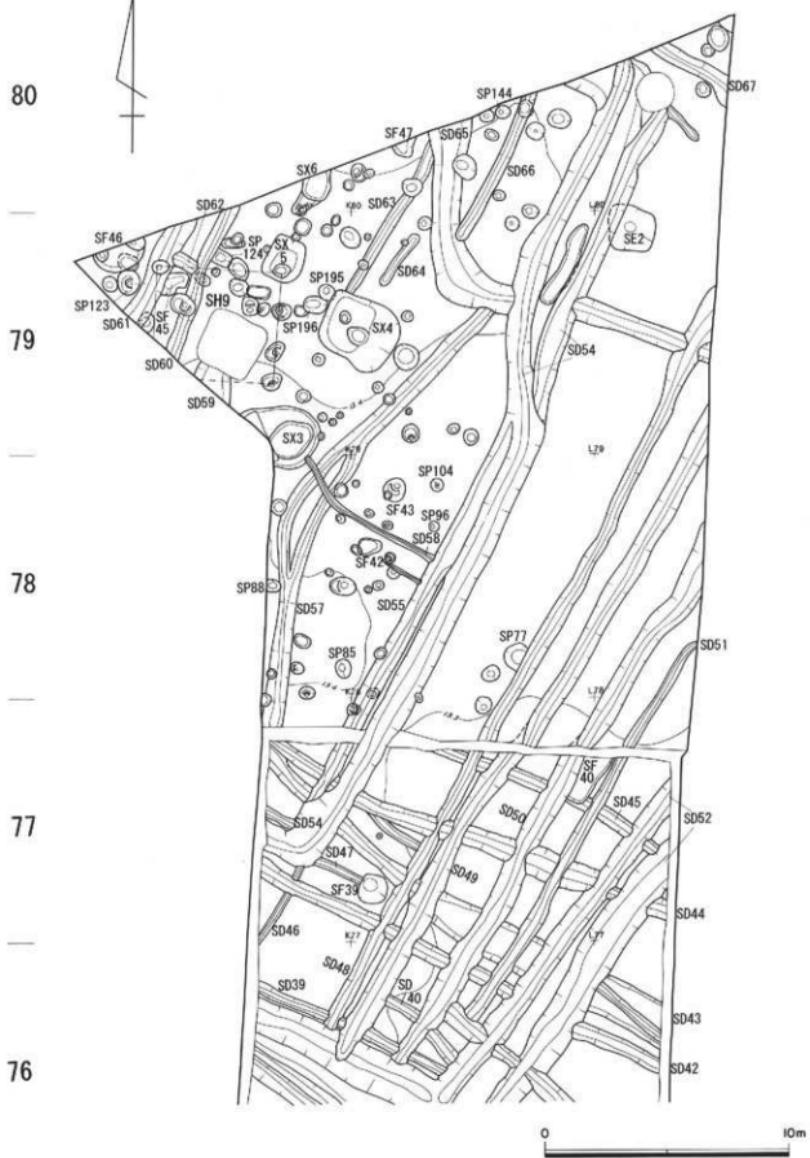
73

72

71



第120図 笠井若林遺跡Ⅲ区第1面平面図1



第121図 笠井若林遺跡Ⅲ区第1面平面図2

84

83

82

81

80

J

K

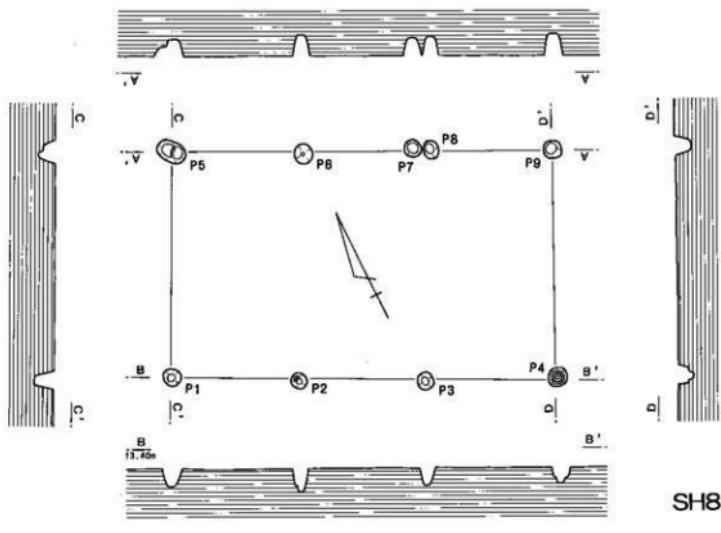
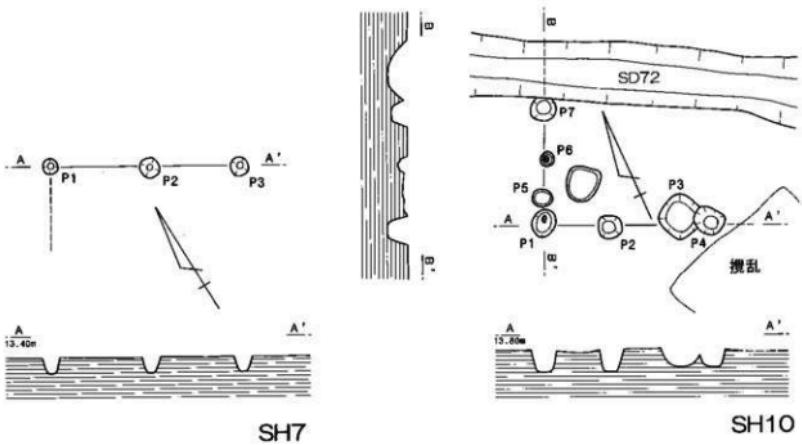
L

M

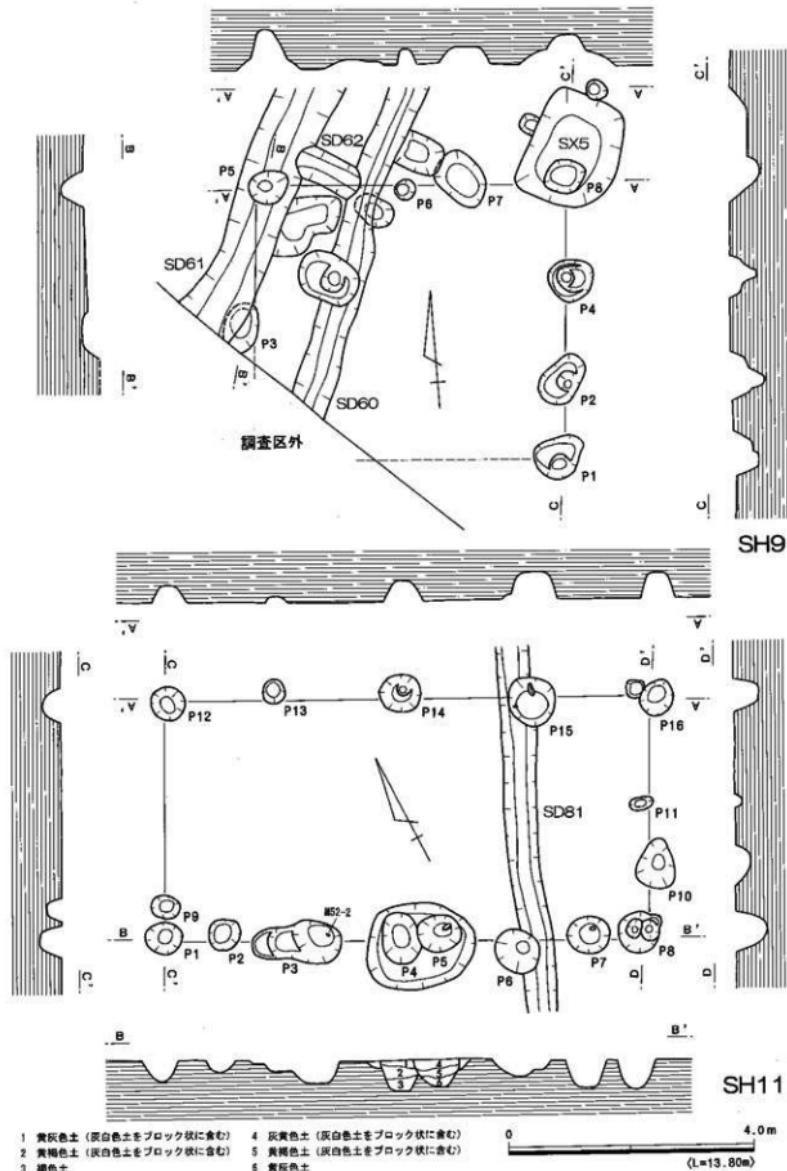


0 10m

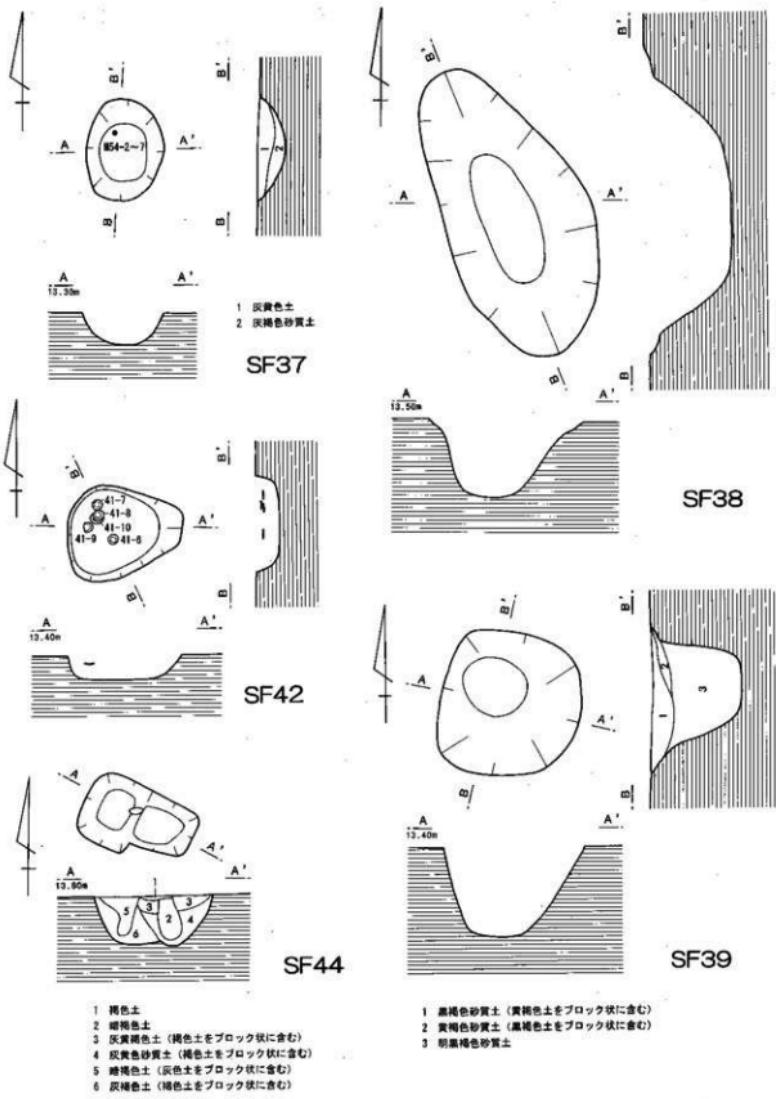
第122図 筑井若林遺跡III区第1面平面図3



第123図 SH7・8・10 実測図



第124図 SH9・11 実測図



第125図 SF37・38・39・42・44 実測図

SH10（第123図）

J・K81区で検出した遺構である。擾乱とSD72によって判然としない部分もあるが、梁間2間×3間以上の規模と思われる。桁行方向はE24° Sで、周囲の溝の方向とはほぼ同じである。柱間は1~1.2m前後でかなり不規則となる。柱穴は検出面から30~40cmの深さとなる。遺物が出土していないため、推定の域を出ないが16世紀代の溝SD72よりも古いと思われるが、埋土からそれほど隔たった時期ではないと考えられる。

SH11（第124図）

K・L82区で検出した梁間2間×桁行4間の建物である。桁行方向はE28° Sである。桁行南面は柱穴がやや密となるが、北側を見ると柱間は1.8~2.1mである。柱穴の深さは検出面から40~50cmである。この建物も同時期と推定されるSD68・69・72・77などと方向を合わせているかのようであるため、これら溝に区画された屋敷地内の建物と考えられる。SD71・81と重複するがこの遺構の方が新しい。遺物は41-2・4がP5、41-3がP15、41-5がP3からそれぞれ出土している。41-2~4は施釉陶器である。2・3は初山窯の鉄釉内堀皿である。底部内外面以外は鉄釉が掛かる。高台は抉り高台である。4は擂鉢である。大窯4段階後期併行の志戸呂窯産である。口縁外側には下方から外側に向く突帯が巡る。41-5は非ロクロ成形かわらけである。底部から体部は折れ、体部は直線的である。これら遺物から遺構は16世紀後半~17世紀初頭の遺構と考えられる。また、P3からは52-2の釘、P5から52-3の刀子が出土している。

土坑

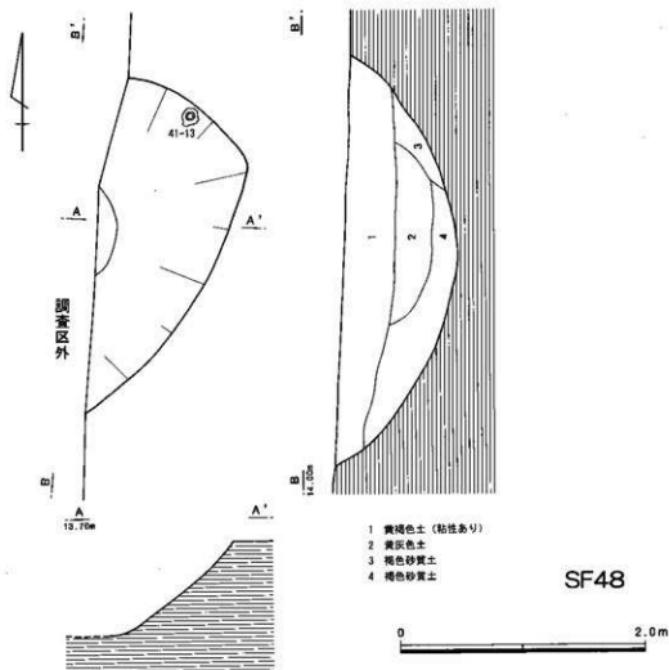
III区では該期の土坑を12基検出している。土坑墓や祭祀的なあり方を示し、その性格がある程度わかるものもあり、他の遺構についても集落域の中での居住に伴うと思われるが大半は判然としない。

SF37（第125図）はJ72区で検出した土坑である。長径84cm、短径60cmの梢円形を呈する。埋土は灰黄色土を主体とするが、かなりしまりに欠ける土であった。遺構からは54-2~7の錢貨が6枚出土したことから土坑墓と考えられた。被熱しているものが多く、火葬墓と推定できる。土坑自体に焼けた痕跡がないことから骨のみを埋葬したものと推定する。他に遺物はないが、永楽通寶が出土していることから中世後期の範疇に収まるだろう。集落全体を考えれば、遺構の年代は16世紀後半を中心とする時期と推定できる。

SF42（第125図）はK78区で検出した長径94cm、短径60cmの不定形の土坑である。この中から41-6~10がまとまって出土している。いずれもほぼ完形品であり、祭祀などのため意図的に埋納されたものか、もしくは土坑墓である可能性が高い。41-6は小皿で、底部は糸切り痕が残り、体部はやや外反しながら立ち上がる。器高は1.9cmと扁平となる。41-7~10はかわらけで、7~9はロクロ成形、10は非ロクロ成形である。7・8には底部に糸切り痕が明瞭に残る。いずれも底径は小さく、体部は内彎しながら立ち上がる9などはかなり小皿に近い形態となる。10は底部から体部が緩やかで、底部には焼成後の穿孔がなされる。非ロクロにこの1点のみ穿孔を受けているのはこの土坑が祭祀行為に伴うものとの認識を補強するものであろう。小皿の年代から遺構の時期は12世紀後半~13世紀初頭と考えられる。

SF44（第125図）はL82区で検出した遺構である。土坑としたが、おそらくは柱穴が2基重複していたものと思われる。出土遺物は41-11・12である。いずれも施釉陶器で、11は古瀬戸後IV期古段階の灰釉縁釉小皿である。口縁のみに灰釉が掛けられる。12は初山窯産の天目茶碗である。高台は内反り高台となる。この遺構はSH11に隣接しているため、やはり同様に16世紀後半~17世紀初頭の遺構と推定される。

SF48（第126図）はJ83区で検出した遺構である。ほとんど調査区外となるため、形状は明らかではない。遺物は41-13・14が出土している。13は山茶碗である。高台は高く、やや外側に開く。14は須恵器の小型壺である。これは混入品と考え、12世紀前半代を遺構年代と推定する。



第126図 SF48 実測図

溝状遺構

III区ではこの時期に属する溝状遺構を多く検出した。おおまかには中世前期、中世後期、近世の3時期に区分できる。いずれも類似する方向性を示すが、中世前期の溝は埋土が黒っぽく、方向もやや西にふれるため比較的容易に見分けられた。しかし、中世後期と近世の溝は埋土、方向共にほとんど区別がつかない。出土する遺物と溝状遺構間との関係、周囲の遺構との関連から所属年代は推定している。以下、時期を区分して主な遺構を取り上げながら記述する。

中世前期の溝はSD43～45・60・61・71・81が該当すると思われる。前述のように方向は 10° ほど西にふれる傾向があり、埋土が黒色に近い。関連しそうな同時期の遺構はSH7・8・SE2程度で全体的な集落のあり方まではよくわからないが、かなり大きな範囲を区画する溝として考え、居住域はその中に散在するような状況ではないかと推定する。

SD43（第128図）からは42-21～26・43-1～4が出土した。東端では底面の小溝に沿うようにかなりまとまって出土している。43-4の混入品とみられる灰釉陶器以外は全て山茶碗である。42-21～24は高台の断面は三角形に近く高い。23は高台内にスノコによるものと思われる痕跡がある。42-25・26は胎土が21～24に似るが、高台が低い。43-1は体部がわずかに外反しながら立ち上がる。高台はかなり低くなる。43-2・3はさらに高台が低くなる傾向があり、後出的である。12世紀前半～13世紀後半までの資料がある

が、遺構の年代は下限の13世紀後半と見たい。

SD44では全体の形状が復原できるような43・5～9が出土した。いずれも山茶碗である。5～8は体部に丸みを持ち、高台も高い。5・6・8は口縁の四方に輪花が施される。8はヘラ押さえによるものであろう。三方に横け掛けの施釉がなされる。5はかなり歪みが激しい。43・9は体部の丸みが5～8に比べ弱く、高台も潰れる。12世紀前半の資料が多いが、43・9のように13世紀前半の資料も存在するため、埋没年代を下限の13世紀前半としたい。

SD71からは47・7～17が出土した。47・7～9は小碗である。7は高台の断面が三角形に近く高いが、8・9はやや潰れており、後出的である。47・10～12は山茶碗である。いずれも高台が高く断面三角形に近い。10は体部が丸みを持って立ち上がり、4方に輪花を持つ。47・13は甕の底部であろう。14・15は灰釉陶器の皿である。16はロクロ成形のかわらけである。底部には糸切り痕が残り、体部は開き気味に立ち上がる。17は須恵器短頸壺である。遺物には混入品もあるが、遺構は12世紀前半を中心とする時期と考えられる。

中世後期と考えられる溝はSD42・54・65・68・69・72である。前述のように近世の溝と埋土や方向がかなり似る。近世の溝には前代の中世全般にわたる遺物が出土するが、破片まで見ていくと近世の遺物が混じっていることが多い。中世後期とした遺構にはそれがなく、またSD54とそれに接続または関連するSD65・68・69・72によって区画された空間（J・K78～80区周辺）には多くの小穴を中心とする遺構が集中する傾向がある。これは確認できなかった建物が他にも存在していた可能性があることを示していると考えられる。よってこの空間を中世後期における屋敷地と捉え、溝は区画溝と判断した。

SD54は南端と北端でほぼ90°西へ屈曲し、方形区画を志向していることがわかる。K79区付近では中央にテラス状に段をつくり出している。遺物は45・19～33・46・1～17・48・1～3が出土している。45・19～23は山茶碗類である。これは混入品と捉えられる。45・24～33・46・1～6は施釉陶器である。45・24・25は鉄釉皿である。いずれも連房1～2小期併行期の志戸呂窯製品である。24は付け高台で、底部内外面を除いて施釉される。45・26・27は天目茶碗である。いずれも大窯1段階の製品である。27は口縁端部の外反が目立つ。45・28は灰釉端反皿である。大窯1段階の製品で、底部内面には菊印と思われる印花文が押される。45・29は鉄釉小瓶である。大窯1段階の製品である。体部下半を除いて鉄釉が掛けられる。45・30は大窯3段階の鉄釉徳利の肩部のみ残存している個体である。45・31は鉄釉大皿の口縁部破片である。初山窯の製品である。45・32は初山窯の製品と考えられるえんごろもしくは匣体である。本来窯道具であるが、生産地に近いためかこの地域の集落にも流通し、実際使用したのであろう。45・33は鉄釉桶の底部破片である。古瀬戸後IV期併行期の志戸呂窯製品である。46・1～5は擂鉢である。1は口縁端部が直立するよう立ち上がる。古瀬戸後IV期新段階の製品である。2～4は口縁外側に縁帯が巡る形態となる。4は縁帯が下方に伸びる。2が大窯2段階、3が大窯3段階前期、4は初山窯の製品である。5は口縁内面に突帯が巡っている。大窯4段階後期の製品である。46・6は常滑産の甕の口縁部である。折り返された口縁は頸部と接着し、口縁外側には縁帯が巡る。常滑11型式の製品であろう。46・7・8はかわらけで、7は非ロクロ成形、8はロクロ成形である。7の内面には工具によって斜め方向に傷がつけられる。46・9・10は内耳鍋である。9は半球形、10は内彎形である。46・11～14は貿易陶磁の青磁窓である。11～13は外面に連弁文が入る。やや時期的には古いため、混入品であろう。46・16・17の手捏ね土器、47・1の灰釉陶器耳皿、47・2・3の灰釉陶器碗はいずれも混入品である。遺物は多量に出土するが、中世後期段階においては15世紀後半から17世紀初頭の幅で捉えられる。やはり多いのは大窯製品であり、3～4段階が特に多い。よってII区の溝同様、前段階から続くようではあるが、16世紀後半～末に居住者の活動が最も盛んであったと考え、17世紀初頭には廃絶したと考える。これはSD42・65・68・69・72の遺物をみても同様な傾向があり、やはり同時期に位置付けられよう。SD69・72（第129図）はSD54と接続する遺構と考えられる。SD69からは

47-6の内輪形内耳鍋、SD72からは47-18~20の非ロクロかわらけと47-21の内輪形内耳鍋がそれぞれ出土しており、出土状況を図示した。

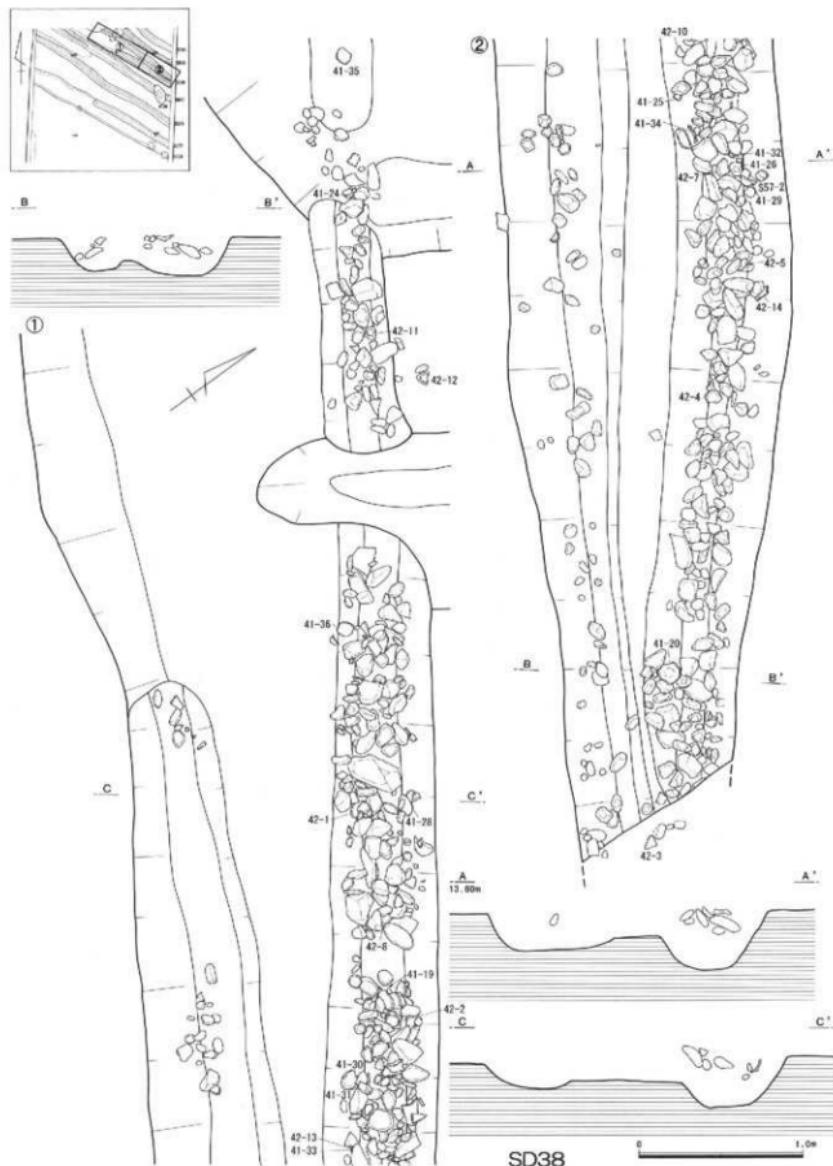
近世の溝と思われる主な溝はSD34~38・48~52である。近世の溝からは中世全般にわたる遺物が多量に出土することは既に述べた。特にI区で検出したSD20のような多量の礫を伴う溝も検出している。この中からは山茶碗の底部などがかなり出土し、調査当初は中世前期の遺構と考えたが、その時期の遺構埋土とは明らかに違いがあり、また整理作業の段階で遺物を詳細に観察すると、近世の遺物破片が出土していることが判明した。連房3~7小期が多く、多くの溝は17世紀後半~18世紀前半の頃の遺構と思われるが、おそらく耕地としては継続していたと考えられるため、溝の細かい年代を推定するのは困難である。出土するのは中世の遺物が多いため、時期分離は遺物だけでなく他の遺構との関係も考慮した。近世遺物がそれほど多くないのは、おそらく近世初頭には集落の再編が行われて廃絶し、それ以降は耕地となっていたからであると考えられる。近世段階の溝はその耕地にほとんどは関連すると思われ、耕作によって出土した前代の遺物が溝の中に多量に入る、または捨てられることは十分考えられることである。また、溝の方向が中世後期とほぼ同じであるのは、基本的な地割はそのまま近世に至っても踏襲されていたからと考えられる。さらに第196図に戦前の地籍図を見ると、その区画は現代にまでつながっていたこともわかる。

SD38(第127図)では幅の広い溝の底面に小溝が2条あるかのような形状を示す。本来は2条の溝であったものが、上層が何らかの要因で崩れるなどして1本の溝状の遺構となつたのであろう。その2条の溝の中に礫が詰まるようにして入っていた。底面からは浮いており、また粗密が激しいためI区SD20のような暗渠状の遺構ではないと思われる。おそらく耕作によって出土した遺物や耕作土に混じっている礫を溝が廃絶する段階で投棄したのではないかと推測する。

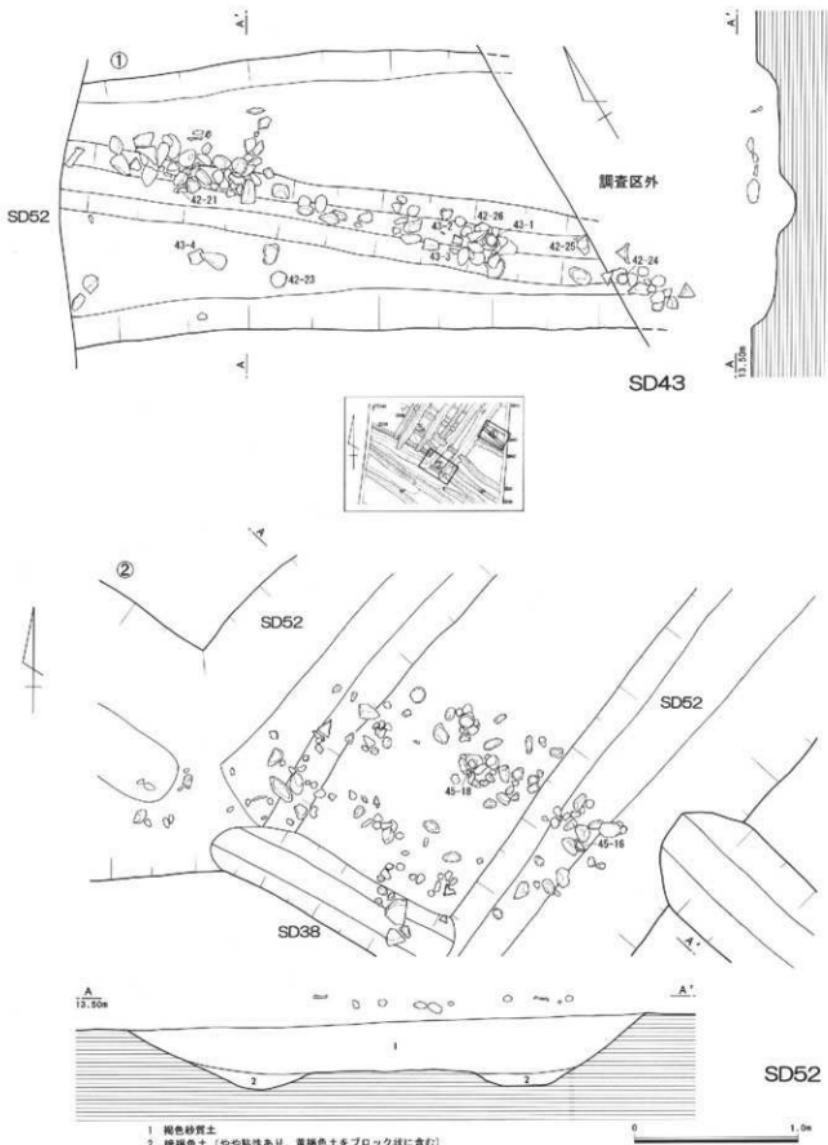
遺物は41-17~37・42-1~18が出土した。また、図示できない小破片の中には連房期の施釉陶器も含まれていた。41-17・18は小碗、41-19は小皿である。かなり扁平化している。41-20~37・42-1~14は山茶碗である。41-20~27は高台が高く、断面三角形となる。41-28は体部がやや丸みをもって立ち上がり、口縁はわずかに外反する。高台は低くなり、粗粒痕が顕著に残る。41-29~37はさらに高台が低くなり、胎土はやや砂っぽくなる。42-1~13の高台はほとんど潰れてしまいわずかに突起状に巡る程度となる。42-1~2は体部まで復原できる。体部はわずかに丸みを持つが、1はほとんど直線的、2はわずかに外反して立ち上がる。42-14は知多の製品である。胎土には多量の小石を含む。42-15~17は施釉陶器である。15は灰釉丸碗の体部破片である。大窯3段階後期の製品である。釉薬はかなり剥落してしまっている。16は灰釉鉢皿である。古瀬戸中Ⅰ~Ⅱ期の製品である。底部内面に工具によって御目が刻まれる。17は初山窯産の鉄釉茶壺である。遺物はこのように図示したものだけでも12世紀前半から16世紀後半までのものが出土している。

SD52はSD38とT字状に接続する溝である。SD38同様、幅の広い溝の底面に小溝が2条あるかのような形状を示す。一部SD38の礫群を切っているため、こちらのほうが新しい可能性がある。その接続している部分の上層ではかなり散らばった状況で遺物が出土している(第128図)。かなり浮いた状況で出土しているため、耕作等による擾拌の影響によるものと推定する。遺物は45-11~18が出土している。11は小碗、12・13は小皿である。14~17は山茶碗である。14は高台がやや高く、胎土が精緻である。15~17は高台が低くなり、胎土がやや砂質になる。18は貿易陶磁の白磁碗である。近世の目立った遺物は出土していないが、SD38と接続することから近世の溝と考えた。

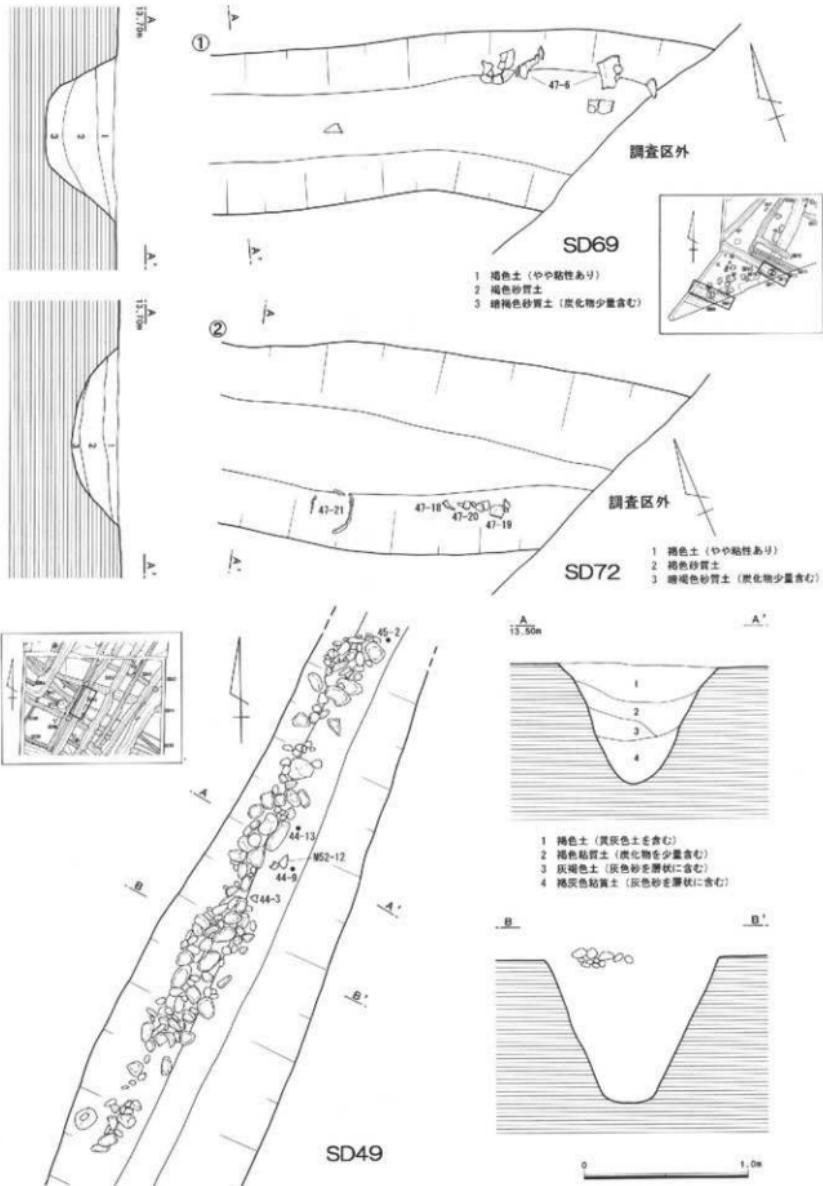
SD49(第129図)でも上層で礫が集中して検出されている。前述のように溝の廃絶段階で礫などを投棄した痕跡と考えられる。遺物は44-1~21・45-1~4が出土している。44-5~21が施釉陶器である。7は連房3~4小期の鉄釉丸碗である。8・9・11・12は天目茶碗で、8が大窯3段階後期、9は連房2小期、11は連



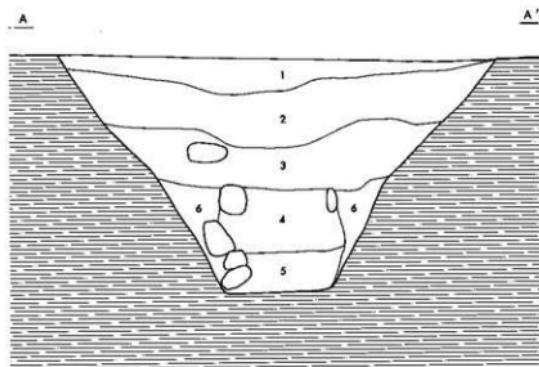
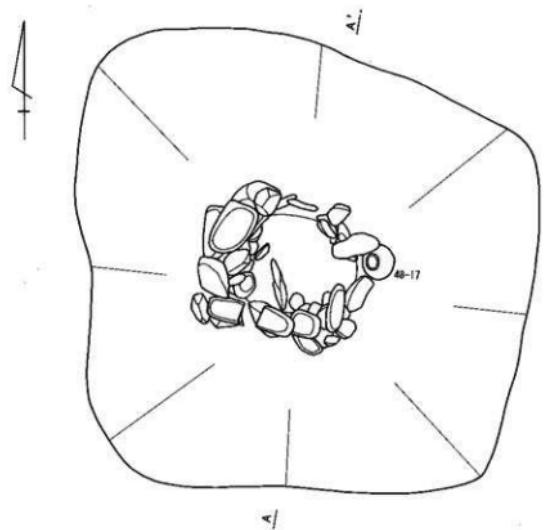
第127図 SD38 実測図



第128図 SD43・52 実測図



第129図 SD49・69・72 実測図



- 1 深褐色土（炭化物多量に含む）
 2 灰褐色土（褐色土をブロック状に含む、炭化物多量に含む）
 3 鮎沢色土（炭化物含む）
 4 雜褐色土
 5 雜青灰褐色粘土
 6 雜灰色粘質土

SE2



第130図 SE2 実測図

房5～6小期、12は連房7小期の製品である。10は段付天目で、連房2小期の製品である。44-15～21は擂鉢である。16・17は初山窯の製品である。18・19は大窯4段階併行の志戸呂窯製品である。20は連房4小期、21は連房6小期に位置付けられる。21の口縁は外に折り返され、扁平な縁帯状となり、口縁内面は凹む。45-2は半球形内耳鍋だが、器高がかなり低くなる。SD49からはこのように中世後期～近世の遺物が混在して出土した。遺構の下限は連房7小期を指標として18世紀中頃～後半となる。

小穴

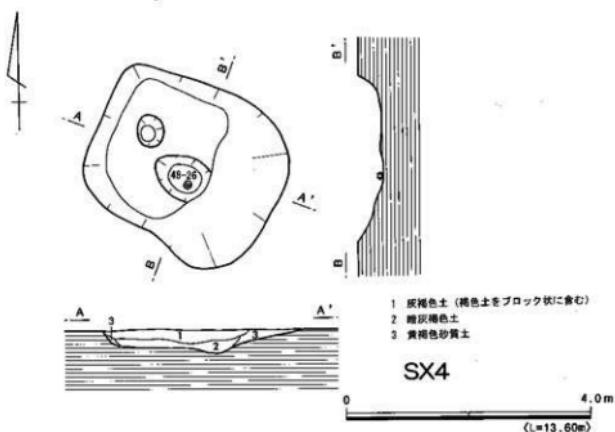
溝状遺構の項でも述べたが、SD54に区画された範囲で小穴がかなりの数、検出されている。この区画ではSH9以外には建物は確認できなかった。先述のようにこの区画を屋敷地と捉えれば、おそらく調査区外にも柱穴の広がりがあると思われる。この区画内の小穴ではSP85・123から遺物が出土している。SP85からは48-11の貿易陶磁の染付碗、SP123からは48-13の大窯4段階の鉄軸丸皿口縁が出土している。48-11は15世紀代、48-13は17世紀初頭に位置付けられる。

井戸

III区ではL79区で1基の井戸を検出した。中世前期に位置付けられるSE2（第130図）である。周囲には掘立柱建物跡など、直接居住に関わる遺構は発見されていない。SH7・8が該期の建物跡となるが、距離的に遠いため、調査区外にSE2を使用した人間が住んでいた建物が存在すると考えたほうが自然かもしれない。SE2は掘り方の平面形態が略方形を呈する。規模はやや北西が突出するが、長径1.95m、短径1.8mである。下部には石組が検出された。下部に水溜が出土しなかったことから、石組の井戸側というよりは水溜も兼用していたと思われる。石組が上部まで続いているかどうかははっきりしない。遺物は石組に入り込むようにほぼ完形の48-17が出土した。井戸を構築する際の祭祀的な行為も想起できる。図示した遺物は48-15～20である。15は小皿である。底部怪がやや大きいと思われる。16～19は山茶碗である。16・17は形態的に類似する。体部はほぼ直線的に開き、口縁端部もそのまま立ち上がる。高台はやや低くなる。19は高台がさらに低く、体部はやや丸みを残し、器壁は厚い。16・17は12世紀末～13世紀初頭、18・19は13世紀中頃～後半に位置付けられると思われる。17が石組内に入り込んでおり、構築時期を12世紀末～13世紀初頭、18・19は埋土から出土しているため、廃絶を13世紀中頃～後半としたい。

性格不明遺構

性格不明遺構はIII区では5基を検出した。SD54で区画された屋敷地と推定するJ・K78～80区周辺で4基が検出されている。いずれも不定形の大型土坑状となる。SX3からは48-21が出土した。施釉陶器の擂鉢で、古瀬戸後IV期の製品である。口縁内面に突帯が巡る形状を示す。SX4（第131図）は長径3.14m、短径2.44mの不定形の遺構である。西側がやや深くなり、底面には小穴状の遺構を検出した。この中から48-26の須恵器短頸壺が出土している。年代的に古い遺構が重複していたものと推定する。遺物は48-22～26が出土した。22～25は施釉陶器である。22は縁釉はさみ皿の口縁部破片である。23・24は天目茶碗である。ほぼ同じ形態で、共に大窯1段階の製品である。25は擂鉢である。大窯1段階の製品である。口縁は断面三角状となり、外面は凹みが巡る。SX5からは48-27・28が出土した。いずれも施釉陶器である。27は灰釉端反皿の口縁部破片で、大窯1段階の製品である。28は擂鉢口縁で、大窯3段階前期の製品である。外面の口縁直下には縁帯が巡り、口縁内面はわずかに凹む。11本一組程度の梯目が内面に確認できる。このように不明遺構でも16世紀代を中心とした遺物が出土しており、居住にかかる何らかの遺構であることが推定できる。



第131図 SX4 実測図

第5節 その他の出土遺物について

①遺構外出土土器

笠井若林遺跡では遺物包含層である3層、4層から多くの土器が出土している。ここでは調査区ごとの主なものを取り上げて報告したい。

I区（第145図）

14-1は灰釉陶器の小瓶の体部下半と思われる。底部はヘラ削りされ、底部外周は強いナデで凹みが巡る。14-2～7は須恵器である。5はやや新しい様相を持つが、概ね8世紀後半～9世紀前半のものであろう。14-2～5は壺蓋である。4・5は口径が11.0、12.2cmと小さい。2～4は宝珠つまみを持つが、2・3は扁平、4は高いつまみとなる。5はつまみを持たず、頂部には糸切り痕が残る。端部のつくりは2が明瞭に折られるのに対し、3～5はナデによって突起状につくり出される程度である。6は箱壺である。底部中央はやや突出し、全体的にヘラ削りがなされる。7は盤である。口縁端部は上方に折られ、外に引き出される。14-8は円面鏡である。観面には使用痕がみられる。体部は失われているが、おそらく20方の透かしがあったものと思われる。内面には自然軸が付着し、逆位での焼成が考えられる。

14-9～15は土師器である。9～11は壺である。9・10の体部は立ち気味となり、口縁はわずかに外反する。11は底部が凹み、口縁は内彎して立ち上がる。12は有台壺である。底部と体部の境に高台が巡り、体部はやや開いて口縁は外反する。13は高盤の脚部である。盤の底部外面の接合部には接合方法によるものか、「X」字状の刻みがつけられる。15は皿の底部破片であるが、墨書きがなされる。判読はできない。

14-17～29は山茶碗類である。17・18は小碗である。共に高台は高いが、17は底径がやや大きい。18は口径が8.3cmと小さく、体部の丸みも少ない。19・20は小皿である。19は体部が丸みを持っており、器

高も高い。21～29は山茶碗である。21～23は高台が高く、胎土は比較的精良である。21は体部が丸みを持ち、口縁端部は外反する。24～26は高台がかなり低くなり、胎土も砂質が強くなる。27は体部がやや丸みを持つが、口縁の外反は弱くなる。28はさらに高台が低くなり、形骸化が進む。29は胎土に小石を多く含み、ざらついた感じとなる。知多産と考えられる。

14～30～34は施釉陶器である。30・31は灰釉の縁釉はさみ皿である。大窯1段階の製品である。32・33は天目茶碗である。32は体部が丸みを持つのに対し、33はやや直線的に開く。32は大窯4段階、33は古瀬戸後IV期新段階の製品である。34は擂鉢で、口縁部外面は縁帶状となる。初山窯の製品であろう。14～35は貿易陶磁である。体部下半の破片資料である。内面には文様の一部が観察されるが、おそらく劇花文であろう。12世紀後半～13世紀前葉のものであろう。

II区（第161図）

30～1～8は須恵器である。1・2は壺である。いずれも底部はヘラ削りされ、2は平底に近い。体部は1が内縫気味で、2は直線的に開く。3・4は有台壺である。いずれも底部と体部の境は明瞭に折れる。体部はやや開き気味に立ち上がり、3は器高がやや低い。5・6は箱壺である。いずれも底部はヘラ削りされるが、5はナデ、6はヘラ削りによって底部外周に調整がなされる。8は盤である。口縁端部は上方に折られ、上面はナデによる面を持つ。

30～9～22は土師器である。9～15は壺である。9～11は底部と体部が比較的明瞭に屈曲し、体部はやや外反しながらほぼ直立する。12は体部が直立に近いが、底部と体部の境が丸くなる。13～15は底径が小さく、体部は開いて立ち上がる。15はそれが特に顕著である。14は底部内外面に煤が付着する。18は鉢である。体部は上部に最大径を持ち、口縁は内側する。丹が塗られるが、ほとんど剥離する。内面には横方向のハケ調整痕が残る。20は壺の口縁部であるが、丹が全面に塗られる。器厚は厚く、頸部は緩やかに屈曲し、口縁は横ナデ調整が施される。21は下半が欠損するが、把手があることから小型の懶と思われる。30～23～25は手捏ね土器である。23は高壺であろう。24・25は皮袋形土製品である。いずれも破損している。これらは祭祀に使用されたものであろう。

30～26～30は施釉陶器である。26は天目茶碗で、体部上半は鉄釉掛け、下半は錆釉掛けが観察される。大窯1段階の製品である。27は灰釉平碗である。口縁端部はやや尖り気味に引き出される。古瀬戸後IV期古段階の製品である。28は大窯3段階前期の鉄釉端反皿である。高台は極浅い削り込み高台で、内面は全面、外面は口縁部周辺に鉄釉が施される。29は古瀬戸後IV期古段階の灰釉折縁中皿である。30は大窯1段階の擂鉢の口縁部破片である。口縁端部は断面三角形状となる。

30～31～35は非ロクロかわらけである。いずれも内面ナデ、外面未調整となる。31～34は体部が丸みを持つのに対し、35は底部が平底気味で、体部は直線的に開く。また器厚は厚い。いずれも16世紀代のものであろう。

III区（第180～182図）

49～1～7は灰釉陶器である。1～4は碗である。濱掛けの施釉が施されていると思われるが、いずれも発色が悪い。高台はくずれた三日月状のものが多い。底部調整はいずれも糸切り痕が残る。1～3には底部に墨書が残る。残存状況が悪く明確ではないが、2は「二」、3は「衆」、4は「天」と推定する。5・6は皿である。5は高台が三日月状で、底部はナデ調整である。やや古い要素を持つといえよう。内面には墨痕が残るため、転用硯として使用されたのであろう。6には墨書が残るが、墨痕も薄く判読は困難である。7はほぼ完形の小瓶である。体部上半には施釉がみられ、底部には糸切り痕が明瞭に残る。これらは概ね10世紀前半頃に位置付けられよう。

49～8～22・50～1は須恵器である。8は壺である。底部から体部は丸く立ち上がり、底部はヘラ削りされるが、底部中央はヘラ切り未調整である。9～11是有台壺である。9は底部が高台よりも突出し、底部と

体部の境が明瞭に折られる。12~14は箱坏である。底部の調整は12・13がヘラ削りされ、底部外周はナデされる。14はヘラ削りのみで平らとなる。15~17は皿である。18は坏蓋であるが、内面にはかなりの使用痕が認められ、墨痕は確認できないが、転用硯と考えられる。19・20は高坏である。19は坏部で、口縁端部は明瞭に外反し、体部上方には沈線が巡る。21は鉢である。底部から体部は丸く、口縁はやや内轉気味となる。体部は下半がヘラ削りされ、上部には太い沈線が巡る。50-1は壺である。口縁端部は上下に拡張した形となり、外面はタタキ目が顯著に残るが、内面はナデ消される。49-22は円面硯の上部の破片である。上部には突帯が巡り、体部にはおそらく8方の透かしが入ると思われる。

50-2~12・14~16は土器器である。2~5・7は坏である。3・4は底部と体部の境が丸く、2・5は屈曲がやや強い。5は体部が長く、深い形態を示し、口縁は外反する。7は体部に墨書が残るが、判読できない。8は皿であるが、底部に墨書が残る。残存状態が悪く、判読できない。9は高盤である。脚部内面を除き、全面に丹が塗られる。浅い盤部の内面には細かいハケ調整が確認できる。脚部には縱方向に暗文が施されるようである。10は小型壺とした。器厚はやや厚く、頸部の屈曲は弱い。口縁は横ナデされるが、一部にハケ調整が残る。14~16は小型の坏である。50-13・17の手捏ね土器と同様に祭祀品として使用されたと思われる。

51-1~17は山茶碗類である。1~5は小碗である。1は高台も高く、体部は丸みを残している。2も高台が高く、4・5はそれに比べやや低く、底径も小さいことから小ぶりとなろう。6は小皿である。口径は8.5cmと小さくなり、器高も低く扁平となる。7~17は山茶碗である。7~14は高台も高く、断面は三角形に近い。胎土も比較的精良となる。12は高台がより高く、厚みがあり、形状がやや異なる。15・16は高台が低くなり、退化傾向にあるため後出的といえよう。17は胎土に小石を多く含む、知多産のものと思われる。51-18は緑釉陶器の底部破片である。当遺跡では他に体部小破片を1点確認している程度である。高台は断面四角となり、全体的に灰オリーブ色の緑釉が掛けられる。緑釉陶器片は隣接する笠井若林遺跡4次調査でも1点確認されている（浜松市2000）。

51-19~34は施釉陶器である。19は鉄釉丸皿か内禿皿の口縁部破片で、初山窯の製品である。20は灰釉内禿皿、21は鉄釉内禿皿である。いずれも底部内面と削り出し高台を除き、施釉される。20は灰釉、21は鉄釉である。20は大窯3段階後期、21は初山窯の製品である。22は志野丸皿である。連房1~2小期の製品である。23は灰釉緑釉小皿の口縁部破片である。口縁端部はやや尖り気味となる。古瀬戸後Ⅰ期の製品である。24は灰釉緑釉はさみ皿である。底部には「十」とみられる墨書がある。大窯1段階の製品である。25・26は天目茶碗である。双方、高台内の削り込みが浅く、25は露胎、26は鉢の化粧掛けが施される。25は大窯3~4段階、26は大窯3段階の製品である。27は小天目である。口縁端部が明瞭に外反する。初山窯の製品である。28は灰釉直縁大皿である。古瀬戸後Ⅲ期の製品である。29~32は擂鉢である。いずれも口縁端部が縁帶状となるが、30~32は下方に伸びて垂れるようになる。32はさらに外に引き出される。29は大窯2段階、30は大窯4段階前期、31・32は大窯4段階併行期の志戸呂窯の製品である。33は鉄釉片口である。連房3~4小期の製品であろう。34は鉄釉水差と思われる。底部のみの破片で、底部には施釉されない。初山窯の製品である。

51-35~43は貿易陶磁である。35・36は青磁連弁文碗の底部である。高台は削り出され、高台以外には緑灰色の釉が厚く掛かる。13世紀後半~14世紀前半の遺物である。37・38は白磁碗である。37は口縁端部が玉縁となり、膨らむ。38は体部下半の破片である。12~13世紀前半に位置付けられる。39は染付皿である。口縁端部は外反し、外面には唐草文とみられる文様が描かれる。15世紀後半のものであろう。40は青白磁合子である。体部は面取りされ、八角形となる。受け部以外は施釉される。13世紀代のものであろう。41は青磁であるが、器種は不明である。42は白磁皿で、口縁端部が外反する。15世紀後半~16世紀初頭に位置付けられよう。43は青磁無文折縁皿である。口縁端部が明瞭に折れ、上部は水平近く

となる。13~14世紀に位置付けられる。

②金属製品（第183・184図）

笠井若林遺跡から出土した金属製品は、鉄製品（一部金銅装）、銅製品、鐵貨である。鉄製品では、武器（鉄鎌）、工具（鎌・刀子）、建築材料（釘）等が出土している。銅製品では、棹秤の錘と用途不明品が出土した。特筆すべきは鉄製の帶金具（巡方）および銅製の棹秤の錘が出土したことである。なお、出土した遺構名や遺物の法量は表15に掲載した。

鉄製品

帶金具 長辺2.7cm、短辺2.3cm、厚さ3.5mmを測る透かし窓付の巡方（53-15）である。巡方は四辺が3mm程度箱蓋状に折り曲げられた鉄板（厚さ約1mm）と薄い鉄板（厚さ1mm）で構成される。下部には長辺1.1cm、短辺6mmの透かし窓が穿たれる。巡方には四箇所目釘孔が穿たれているため、目釘により固定されていたものと推測できる。しかし、X線写真では目釘が残存しているか判別できない。目釘孔は均等に穿たれておらず、下側の釘穴は透かし孔の左右に穿たれる。目釘孔の直径は1mm前後である。また、銹化が進行しており、巡方の表面に漆などの塗布は観察できない。したがって、鉄本来の銀色のままであったかあるいは別の彩色が施されていたのか不明である。包含層出土であることから時期を特定することはできないが、奈良時代に帰属する可能性が高い。

県内では銅製あるいは石製の帶金具は『静岡県史』作成時までに浜松市伊場遺跡、静岡市神明原元宮遺跡など12遺跡で確認されている（八木1992）が、鉄製の帶金具の出土は初例とみられ、全国的にみても青森県丹後平古墳群、宮城県伊治城跡、埼玉県殿山遺跡、新潟県山三賀遺跡出土例をはじめ、東日本を中心に二十数例を数えるのみであるという（奈良文化財研究所 次山 淳氏のご教示による）。こうした鉄製の帶金具は中央からの支給品とは別に、地方において補助的な生産を行っていた可能性を指摘する意見もある（新潟県1989）。

釘 釘頭がT字形のもの（52-1・53-13）と逆L字形（52-13・53-3）の2種類が確認できる。52-2・15・16・22、53-1・8は釘身の破片であり、断面は52-2が円形、それ以外は方形である。恒武西宮遺跡出土の鉄製品も含めて考えると、逆L字形の頭部を有する個体のほうが短く、細身であることから、細身の52-2・53-1は逆L字形の釘頭を伴う可能性が高い。

鍔 52-17の形状は、福田町元島遺跡（埋文研1999）で出土した鍔（報告書339頁184図31）や鍔の可能性が指摘される鉄製品（報告書341頁185図56~58）と形状が類似していることから鍔の可能性が高い。片方の端部が欠損しており、もう片方の端部がL字形に折り曲げられている。先端部は山形に先細りすると推測する。断面は横長長方形である。

刀子 53-11は青銅製鍔（柄縁装具）付刀子の関片である。鍔には現状で金銅装は確認できないが、本来は鍔金されていたと推測する。関は刀部、棟部共に角関であり、茎は茎尻に向かい先細りする。52-7は完形品であり、永年の継続的な使用により小型化したものと推測する。関は棟側のみの片角関であり、刃部側は緩やかに弧を描く。53-6・7は切先破片であり、53-7はやや大型の刀子である。53-10は刃部から茎の破片であり、刃部側がくの字形に緩やかに屈曲して関を形成している。屈曲部分より左側（刃部）が断面三角形、右側（茎）は断面台形である。52-3も刃部から茎の破片である。均等両関で共に角関である。茎は茎尻に向かい一直線に延び、断面は長方形である。53-12は刀子の関部分の破片と推測する。刃部側の片関であり、刃部幅の2/3ほどの切り込みが施されている。茎の断面は縦長の長方形である。52-14は刃部の破片であり、断面は三角形である。52-18・19は刀子茎片である可能性が高い。52-18は圓面下側が狭い長台形であり、52-19は縦長長方形である。52-8・9は刀子の茎片であり、茎尻に向かって先細りする。53-14は切先の破片の可能性が高い。刃部幅がやや広いことから刀子とするよりも短刀

と考えるほうが妥当かもしれない。断面は三角形であり、鎬は確認できない。

鎌 52-12は上部が緩やかに円弧を描くこと、刃部幅が3.2cmと幅広であること、また断面が三角形というよりも板に近いことを考慮すると鎌の刃部の可能性が高い。図面上部が棟、下部が刃部であり、棟側は緩やかに彎曲している。

鉄鎌 広身（53-5）と細身（53-9）の鎌身を有する長頭鎌が出土している。

9は茎闊以下を欠損する。両丸造の可能性が高い棘状関柳葉形長頭鎌である。頭部は断面横長長方形である。5は両丸造（直角関）三角形鎌であり、茎は欠損する。頭部断面は横長長方形である。共に古墳時代後期から終末期に位置付けることができる。

52-11は頭部・茎の破片であり、頭部は茎に向かってやや裾が広がる形状（台形関）である。断面は頭部が横長長方形、茎が方形を呈する。恒武西宮遺跡出土の鉄鎌（第60回18-10・11）と同様の形状であり、鑿状の鎌身をもつ中世の長頭鎌である可能性が高い。

馬具 馬具の可能性のある遺物が数点出土している。52-5はU字形に折り曲げられた鉄製品であり、図面左側が欠損する。断面は円形であり、銹化が進行し膨張している。形状から判断して鎧の兵庫鎖であろうか。断面円形であり銹化によりやや膨張している。52-6は図面右側が上に向かってやや彎曲する棒状の鉄製品であり、その形状から判断して6と同様鎧の兵庫鎖の破片であろうか。

用途不明品 以下に用途不明の鉄製品を記載する。

同様の形態、寸法の環状鉄製品が2点（52-4・10）出土している。やや銹化が進行している。内径約1.8～2.2cm、外径約2.5～2.9cmを測り、断面は縦長長方形である。また、52-21は変形した環状鉄製品であり、断面方形である。

52-20はL字形の折り曲げられた金具であり一方の面に2孔穿たれている。53-4はくの字形を呈するが、両端が欠損しておりU字形を呈するのか、環状であるのか判断できない。断面は円形であり、52-5と同様の金具の可能性がある。52-23（上）は、上部に小さな環状部を有する棒状の鉄製品であり、下部は刀子などの関のような形状である。52-23（下）は関部分のより下部の破片と考える。53-16はU字形に破断した金具と、やや彎曲した三本の細い鉄棒が銹着したものであり、彎曲した内面には木質が遺存している。その木目は鉄棒にほぼ直交する。

銅製品

鍤 55-1は形状から棹秤の銅錠であると判断した。SH1-P3から出土し、16世紀代の遺物と推定される。肩のやや張った胸部には13条の溝が刻まれ、本体の上部には一段の稜を持つ。そのさらに上部には紐状の突起がつく。重さは41.6gで、近世秤座の規格では秤量160匁（約600g）の銀試という秤に相当するとみられる。こうした秤は香や薬、紅などを量ったことが絵画資料等から推定できるが、当遺跡において何のために使用されたかは判然としない（溝口2000）。類例は滋賀県小谷城清水谷遺跡、福井県一乗谷朝倉氏遺跡、宮城県本屋敷遺跡など、城館や町屋集落のような流通の拠点となる遺跡に多いことが指摘できる（宮本1994）。なぜ当遺跡でこうした錠が出土したか。近世初頭になると笠井町において市が立つことが知られる。第Ⅱ章でもふれたが市のように流通の要となる地域は突然現れるのではなく、前段階からその動きはあったと思われる。こうした動きにこの集落の居住者が何らかの関わりを持っていたことが推定される。

用途不明品 銅製の小片が1点（55-2）出土している。図面右側が緩やかな円弧を描く。左側は直線的に破碎しているが、元来直線的であったのか、二次的に加工されたのか判断できない。断面は円弧側がやや厚く、図面左側に向かって緩やかに傾斜する。この銅製品を古墳時代に位置付けることができるとすれば、このような縁部に向かって厚さを増す形状を有する銅製品は、鏡の縁部あるいは金銅装が剥落した刀装具（無窓鏡）の可能性がある。

銭貨

出土した銭貨のうち、図示できたのは9点である。54-9の寛永通寶を除いて全て中世の銭貨である。永樂通寶がこのうち4枚と多い。中世後期の遺構が多いためであろう。銭貨がまとまって出土しているのは54-2~7の6枚を出土した土坑墓とみられるSF37からのみである。おそらく六道鏡として埋納されたと考えられる。54-5・6は被熱が激しく判読は困難であったが、いずれも皇宋通寶と思われる。54-1の永樂通寶も土坑墓の可能性があるSF12から出土しているが、これも被熱の痕跡が確認できる。SD2からも54-8の永樂通寶が出土しているが、これも火を受けている。

③石製品（第186～190図）

出土した石製品のほとんどは砥石で、それ以外の製品の出土はあまりない。55-3はSB211から出土した石製の紡錘車である。形状は上面よりも下面の直径が大きい裾広がり状となる。側面には縦方向の調整痕が明瞭に残る。形態・法量共には恒武西宮遺跡出土の紡錘車22-275と大きな違いはない。55-4はガラス玉である。青色を呈する。55-5はおそらく勾玉であろう。材質は瑪瑙であるが、穿孔のある頭部は破損している。腹部の成形などはかなり浅く、かろうじて勾玉の形態を呈するものである。55-6は粘板岩製の硯の破片である。55-7・8は水晶玉である。土坑墓としたSF9からの出土である。7は貫通させた孔に向け、さらにもう一方から穿孔する。おそらくは数珠玉であろうと思われる。

砥石は33点出土している。ほとんどは手に持つて使用する持ち砥石と思われるが、57-5・6は大型品であることから置き砥石と推定した。いずれもよく使われており、使用面は凹面となる程である。置いた時に安定する長辺側のみを使用していることも置き砥石と想定できる要素であろう。56-4・59-1は上部に穿孔されているため、提げ砥石と判断した。56-4はかなり使い込まれ、使用面が摩滅しているのに対し、59-1はほとんど全ての面に使用痕が認められるものの、あまり摩滅していない。形態が整いすぎており、また材質もこの遺跡ではあまりみられない粘板岩を使用しているなどの点から、砥石ではなく石製の錠としての用途も考えられる。とすれば各面で使用痕としたものは、調整盤となろう。58-4・59-7・59-9は火を受け、一部赤化している。材質は流紋質凝灰岩が19点と最も多く、凝灰質砂岩が5点、珪質安山岩が4点、細粒凝灰岩が3点、緑色片岩と粘板岩が1点ずつである。凝灰質砂岩は目が粗く、粗砾に使用したと考えられ、珪質安山岩、流紋質凝灰岩は粗砾の次の段階で使用されたと考えられる。さらに細粒凝灰岩、緑色片岩、粘板岩は目が細かいため仕上げに使用されたものであろう。流紋質凝灰岩が多いのは、おそらく入手が比較的容易で、その中間的な目の細かさによる汎用性が高かったためと思われる。

④土製品（第191～192図）

笠井若林遺跡で出土した土製品は土錐、轆の羽口、土製支脚、土馬、土製人形である。土錐は圓化したものだけ33点にのぼる。この他、破片も含めればさらにその数値は多くなる。これらは竪穴住居跡からも多く出土しており、生活に密着した遺物であったことがわかる。この集落の居住者が周辺の河川や湖沼において漁労に携わっていたことを想像できる資料である。土錐は60-1～33に図示したが、その形状はほとんどが細長い管状の製品となる。60-17・20・24のように短く、太い形状のものもあるが、少數である。破損しているものが多く、実際に網の錐として使用されたものであろう。

60-36・38・41は轆の羽口である。いずれも破片である。当遺跡では鉄滓が多量に出土しており、鉄に関する何らかの作業を集落内で行っていたことが想定された。出土鉄滓については今回、成分分析を実施した（付編参照）。その結果、集落内において精錬（大銀治）が行われていたことが判明した。また、鉄に関係すると思われる遺構を検出したⅢ区SB220からも60-38の轆羽口が出土しており、そうした作業に際して使用されたものと考えられる。いずれも破片であるが、おそらく直径6～8cm程度の管状となる

と考えられる。かなりの被熱が観察され、スラッグ状の物質が付着している。

60-35・37・39は竪穴住居跡の窓で使用された土製支脚である。図示したもの以外にも大量の土製支脚の破片とみられる遺物は出土している。35・37は破片であるが、SX208から出土した39はほぼ形状がわかるものである。上部が破損している可能性もあるが、長さ19.6cm、直径は7.5cmである。側面は面取りされ、断面は多角形となる。底部には成形に際してできたと思われる小穴が見受けられる。35・37も本来はこのような形状をしていたと考えられる。いずれもかなり焼けている。

61-1・2は土馬である。1はかなり大型のもので、2は破損しているが小型品と考えられる。いずれも脚部が欠損し、鞍などの表現は観察できない。こうした土馬は恒武西浦遺跡でも出土しており、祭祀に使用されたものとされる。これもそうした祭祀行為に使用されたものと考えられるが、包含層からの出土であるため、奈良時代頃の遺物とは考えられるものの、祭祀の具体像については明らかではない。60-34・42は土馬の脚部と思われる。61-3～5は土製の人形と考えられる。いずれも破損しているが、61-4などは足が表現されていると思われ、人形と判断した。先述の恒武西浦遺跡でも人形は出土するが、このように大型品ではない。やはり、その目的は祭祀にあると思われるが、遺構に伴うものではないため、詳細は不明である。浜松市に西畠屋遺跡ではこうした土馬・土製人形が多量に出土している。報文ではこうした遺物を使用した祭祀を、肥前国風土記に記載された例を引きながら土着の伝統的な祭祀と推定している（浜松市1999）。当遺跡周辺でも西畠屋遺跡とは規模が異なるものの、こうした祭祀行為が行われていたと思われる。

表11 筒井若林遺跡 壁穴住居跡・掘立柱建物跡一覧表

壁穴住居跡

区	遺構名	II	III	IV	位置 (グリッド)	規模 (南北×東西)(m)	床面積(m ²)	深さ(m)	棟方位	竪	備考
II	SB201	SX201	89	N.054	3.4×4.5~	15.30	0.07	N 9° E	○	一部SD1に廻される	
II	SB202	SB201	89	L54	2.8×3.0	8.40	0.12	N11° E	○		
II	SB203	SB203	90	J. K56	3.1×3.2	9.92	0.10	N 8° E	○		
II	SB204	SB202	90	I. J58	5.0×4.4	22.00	0.15	N34° E	○		
I	SB205	SB206	73	J68	3.2×2.9	9.28	0.14	N 8° W		SB206に切られる SB205を切る 遺物大量発見か	
I	SB206	SB205	74	J68	3.7×3.7	13.69	0.17	N11° W			
I	SB207	SB202	73	J. K71	4.2×5.2	21.84	0.05	N 0°	○		
III	SB208	SB210	107	K72.73	3.9×4.6	17.94	0.15	N 1° E			
III	SB209	SB207	107	K. L73	4.0×3.5~	14.00~	0.29	N 1° E	△	一部調査区外	
III	SB210	SB209	108	K74	5.4×4.3	23.22	0.32	N 7° E		SB211に切られる	
III	SB211	SB208	108	J. K74.75	4.3×5.1	21.93	0.38	N 7° E	○	SB210を切る	
III	SB212	SB206	109	K. L74.75	5.4×6.0	32.40	0.34	N 1° W	△	SB213・214に切られる SB212を切る SB214と重複	
III	SB213	SB205	109	K. L74	3.5×4.5	15.75	0.32	N 1° W	○		
III	SB214	SB212	109	K. L74	2.9×2.8	8.12	0.16	N 4° W		SB213と重複	
III	SB215	SB205	110	J74.75	4.6×4.4	20.24	0.22	N 2° W		SB216に切られる	
III	SB216	SB204	110	J75	4.1×4.1	16.81	0.16	N 7° W	○	SB215を切る	
III	SB217	SB210	111	K75	1.9××5.0	9.5~	0.18	N23° E		SB218・219に切られる	
III	SB218	SB211	111	K75	5.4×4.7	25.38	0.20	N 6° E	○	SB217を切り 219に切られる	
III	SB219	SB204	111	K75	4.7×3.8	17.86	0.25	N26° E	○	SB217・218を切る	
III	SB220	SK206	112	J75.76	4.3×1.9~	8.17~	0.19	N 3° W		一部調査区外	
III	SB221	SB203	112	J. K75	4.3×3.8	16.34	0.23	N 6° E	△	精錬に用わる焼土ピットか	
III	SB222	SB215	113	K. L77.78	4.8~×7.4	35.52~	0.18	N16° E	○	SB223に切られる 一部検出できず	
III	SB223	SB216	113	K77.78	4.4~×5.3	23.32~	0.33	N15° E	○	SB222を切る 一部検出できず	
III	SB224	SK214	113	J. K78	5.8×4.2~	24.36~	0.17	N 1° E		一部検出できず	
III	SB225	SK213	114	J79.80. K79	5.7×4.9	27.93	0.20	N14° E		SB226に切られる	
III	SB226	SB213	114	J79. K79. 80	5.1×5.1	26.01	0.18	N16° E	○	SB225を切る	
III	SB227	SB202	115	J. K82	5.2×2.1~	10.92	0.17	N 8° E		一部調査区外	
III	SB228	SB201	114	K83	3.7×3.5	12.95	0.28	N 5° E	○		

掘立柱建物跡

区	遺構	図番	位置 (グリッド)	規模 (梁行×桁行)(m)	間数	規模(m ²)	桁行方位	備考
II	SH1	96	L. M55	4.2×8.3	2×4	34.86	E 4° S	SH2より新しい
II	SH2	96	L. M55	4.5×8.3	2×4	37.35	E 4° S	SH1より古い
II	SH3	97	L55	4.1×3.8	1(2)×2	15.58	N 7° E	
II	SH4	97	L. M54	4.4×7.0	2×3	30.80	E13° S	
II	SH5	98	J. K56. 57	4.9×7.6~	1×3~	37.24~	E 4° N	SH6と重複
II	SH6	98	J. K57	3.9×6.1~	1×3~	23.79~	E 7° S	SH5と重複
III	SH7	123	K72	?×3.1~	1~×2~	-	E32° S	一部検出できず 柵列の可能性あり
III	SH8	123	J73. K72. 73	3.7×6.3	1×3	23.31	E27° S	
III	SH9	124	J79	4.6~×5.1	3×2(3)	23.46	N 4° E	一部調査区外
III	SH10	123	J. K81	2.0×2.7~	2×3~	5.40~	E24° S	一部調査区外
III	SH11	124	K. L82	4.0×8.0	2×4	32.00	E28° S	
II	SH201	88	054. 55	3.0×7.5~	7×4	22.50~	N 5° E	一部調査区外
II	SH202	88	M. N55	4.5×7.6	2×5	34.20	E 3° S	
I	SH203	72	K68	3.2×2.2	1×2	7.04	N10° W	SD243より古い
III	SH204	105	K73	3.8×8.0	2×5	30.40	N 3° W	
III	SH205	106	J. K73. 74	4.2×6.3	2×3	26.46	E 2° S	SB210よりも古い
III	SH206	106	K. L77. 78	4.0×5.7	1(2)×3	22.80	E 3° N	SB222・223よりも古い

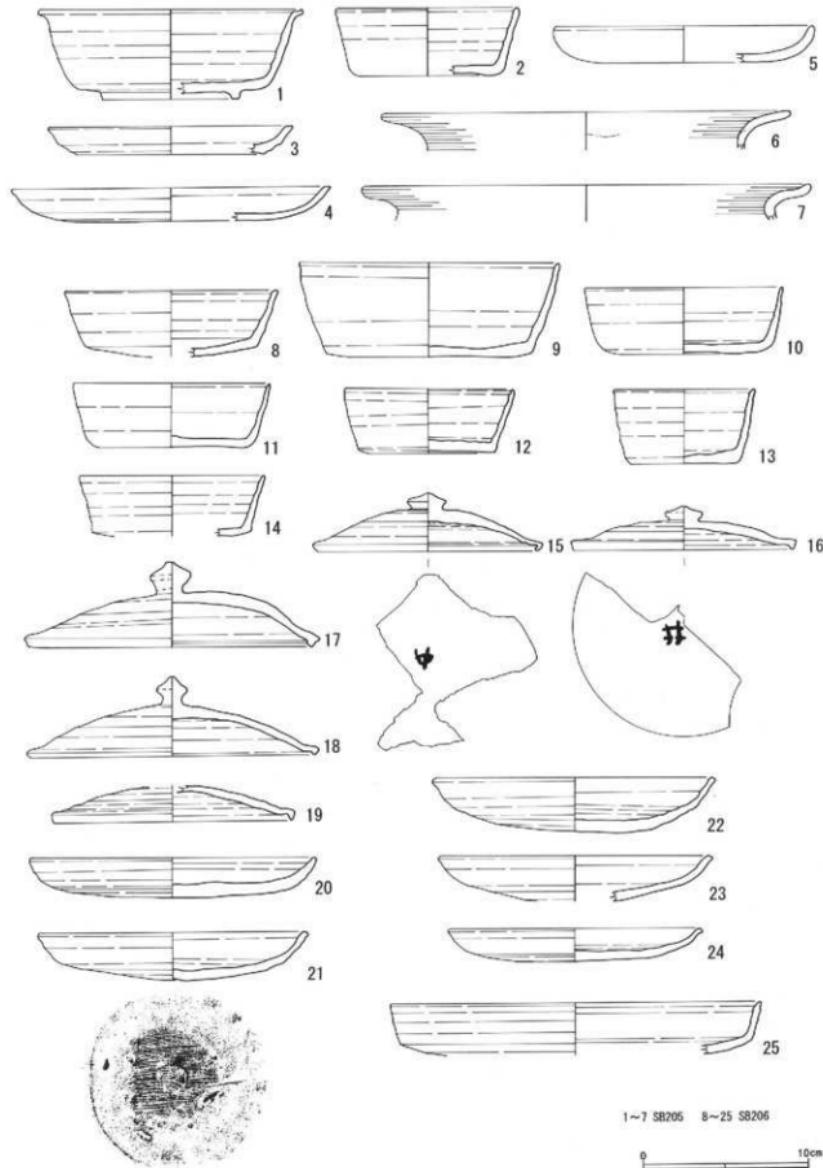
表12 笠井若林遺跡 土坑・井戸・性格不明遺構一覧表

区	遺構名	旧遺構	大きさ(m)		平面形	区	遺構名	旧遺構	大きさ(m)		平面形	区	遺構名	旧遺構	大きさ(m)		平面形
			長径	短径					長径	短径					長径	短径	
II	SF1	SF104	1.04	0.62	長方形	II	SF203	SF210	1.52	1.10	楕円形	III	SF252	SF212	1.50	0.78	楕円形
II	SF2	SF105	1.02	0.68	長方形	II	SF204	SF212	1.38	1.02	楕円形	III	SF253	SF209	1.42	0.74	不整形
II	SF3	SF101	1.30	0.84	長方形	II	SF205	SF218	1.16	0.78	楕円形	III	SF254	SF208	1.06	0.84~	不整形
II	SF4	SF102	1.12	0.78	長方形	II	SF206	SF220	1.54	0.82~	楕円?	III	SF255	SF207	1.18	0.70	楕円形
II	SF5	SF103	0.96	0.66	長方形	II	SF207	SF219	1.28	1.04	楕円形	III	SF256	SF216	1.60	0.74	不整形
II	SF6	SF146				I	SF208	SF225	1.54	0.96	不整形	III	SF257	SF203	1.00	0.56	楕円形
II	SF6	SF111	0.88	0.56	楕円形	I	SF209	SF224	0.86	0.66	楕円形	III	SF258	SF202	1.94	0.58	不整形
II	SF7	SF110	1.00	0.56	長方形	II	SF210	SX105	0.78	0.70	楕円形	III	SF259	SF206	7.80	0.72~	不整形
II	SF8	SX102	1.40	1.16	不整形	II	SF211	SF107	0.96	0.80	楕円形	III	SF260	SF204	1.18	0.62	楕円形
II	SF9	SX101	1.60	1.32	楕円形	I	SF212	SF226	1.36	1.10	楕円形	III	SF261	SF205	1.40	0.82	長方形
I	SF10	SF223	1.04	0.74	楕円形	I	SF213	SF230	1.46	0.90	不整形	III	SF262	SF105	2.12	1.50	楕円形
I	SF11	SF216	4.52	3.58	楕円形	I	SF214	SF227	1.88	0.70	不整形	III	SF263	SF106	2.14	1.66	楕円形
II	SF12	SF106	0.92	0.90	円形	I	SF215	SF228	0.84	0.82	円形	II	SX1	SX104	5.50~	1.10~	楕円?
I	SF13	SF214	0.98	0.68	不整形	I	SF216	SF229	1.18	0.98	不整形	II	SX2	SX103	8.80	3.60	不整形
II	SF14	SF108	1.52	1.10	不整形	I	SF217	SF217	1.26	1.06	楕円形	III	SX3	SX102	1.80~	1.44	楕円形
II	SF15	SF109	0.92	0.36~	楕円?	I	SF218	SF219	0.92	0.82~	楕円?	II	SX4	SX104	3.14	2.44	不整形
II	SF16	SF113	1.42	1.20	楕円形	I	SF219	SF222	0.82	0.46	楕円形	III	SX5	SX103	1.84	1.45	楕円形
II	SF17	SF114	1.20	1.04	楕円形	I	SF220	SF220	0.84	0.68	楕円形	III	SX6	SX101	1.10~	1.06	不整形
II	SF18	SF115	1.20	1.12	方形	I	SF221	SF221	1.28	1.00	楕円形	III	SX7	SX101	0.50	0.18	楕円形
II	SF19	SF217	1.42	1.30~	不整形	I	SF222	SF210	1.18	0.92	楕円形	II	SX201	SX215	2.40~	1.35~	不整形
II	SF20	SF116	1.22	0.80	長方形	I	SF223	SF213	1.48	1.36	不整形	II	SX202	SX205	0.55	0.30	焼土集中
I	SF21	SF105	0.96	0.54~	円形	I	SF224	SF211	0.98~	0.96~	円形?	II	SX203	SX207	1.05	0.20	焼土集中
I	SF22	SF108	4.40	1.22	不整形	I	SF225	SF209	1.34	0.66	楕円形	II	SX204	SX206	0.70	0.45	焼土集中
I	SF23	SF122	0.68	0.68	円形	I	SF226	SF204	1.00	0.90	不整形	II	SX205	SX204	0.80	0.20	焼土集中
I	SF24	SF118	1.32~	0.80	楕円?	I	SF227	SF113	0.90	0.68	楕円形	II	SX206	SX213	0.50	0.40	楕円形
I	SF25	SF117	1.12	1.16	円形	I	SF228	SF203	1.84	0.98	楕円形	II	SX207	SX208	0.80	0.65	不整形
I	SF26	SF106	1.96	1.16	不整形	I	SF229	SF201	1.06	0.82	長方形	II	SX208	SX202	1.40	0.45	上部集中
I	SF27	SF110	3.20~	0.28~	楕円?	I	SF230	SF202	1.08	0.78	楕円形	II	SX209	SX212	0.85	0.50	不整形
I	SF28	SF107	0.98~	0.50~	円?	III	SF231	SF110	3.02	1.00	不整形	II	SX210	SX211	0.40	0.35	不整形
I	SF29	SF116	1.14	0.72	楕円形	I	SF232	SF201	1.66~	1.34~	楕円?	II	SX211	SX210	0.65	0.40	楕円形
I	SF30	SF205	1.92	1.86	円形	I	SF233	SF215			楕円?	II	SX212	SX214	0.50	0.20	焼土集中
I	SF31	SF111	1.48	1.04	不整形	I	SF234	SF208	2.58~	2.14~	楕円?	II	SX213	SX209	0.70	0.20~	不整形
I	SF32	SF120	0.98~	0.30~	楕円?	I	SF235	SF212			楕円?	II	SX214	SX203a	0.85	0.40	焼土集中
I	SF33	SF103	2.04~	0.86~	円?	III	SF234	SF113	1.58	0.70	楕円形	II	SX215	SX203b	0.60	0.30	不整形
I	SF34	SF102	1.08	0.90	楕円形	I	SF235	SF206	1.24	1.18	楕円形	III	SX216	SX208	1.92~	1.30	不整形
I	SF35	SF101	1.12	0.94	不整形	I	SF236	SF203	0.90	0.78	楕円形	III	SX217	SX303	0.78	0.60	楕円形
I	SF36	SF104	1.28	0.88	不整形	I	SF237	SF207	0.78	0.54	楕円形	II	SX218	SX301	3.12	0.74	不整形
III	SF37	SF217	0.84	0.60	楕円形	I	SF238	SF201	1.18	0.86	楕円形	III	SX219	SX302	0.66	0.58	楕円形
III	SF38	SF107	2.50	1.28	不整形	III	SF239	SF303	1.90	0.48	不整形	III	SX220	SX211	5.30	1.90	楕円形
III	SF39	SF109	1.20	1.20	方形	III	SF240	SF218	1.34	0.74	楕円形	III	SX221	SX212	2.08	1.18	長方形
III	SF40	SF108	1.88~	0.68~	不整形	III	SF241	SF302	2.00	0.76	不整形	III	SX222	SX203	2.28	1.06~	不整形
III	SF41	SF103	1.70	1.08	不整形	III	SF242	SF219	1.12	0.40	不整形	III	SX223	SX202	1.26	0.90	楕円形
III	SF42	SF225	0.94	0.60	不整形	III	SF243	SF301	1.60	0.88	不整形	III	SX224	SX201	1.62	0.80	楕円形
III	SF43	SF112	0.98	0.84	楕円形	III	SF244	SF224	1.86~	1.40~	不整形	III	SX225	SX207	2.66	2.40	楕円形
III	SF44	SF102	0.94	0.50	不整形	III	SF245	SF222	1.38	0.84	楕円形	III	SX226	SX106	5.40~	2.56~	楕円?
III	SF45	SF114	1.06~	0.66	不整形	III	SF246	SF223	1.00~	0.82~	不整形	III	SX227	SX107	4.08	1.52	不整形
III	SF46	SF111	2.18	1.06~	不整形	III	SF247	SF214	2.56	0.78	楕円形	III	SX228	SX105	5.70	3.28~	不整形
III	SF47	SF444	0.80~	0.60~	楕円?	III	SF248	SF213	0.64	0.52	不整形	I	SX229	SX203	-	-	土器集中
III	SF48	SF201	1.58~	0.88~	楕円?	III	SF249	SF210	1.06	0.58	楕円形	I	SX230	SX102	-	-	土器集中
II	SF201	SF201	1.00	0.78	不整形	III	SF250	SF215	1.05	0.34	楕円形	I	SE201	SE101	2.98~	2.72~	略方形
II	SF202	SF202	0.98	0.44~	楕円形	III	SF251	SF211	0.56~	0.42~	楕円?	III	SE2	SE201	1.96	1.80	略方形

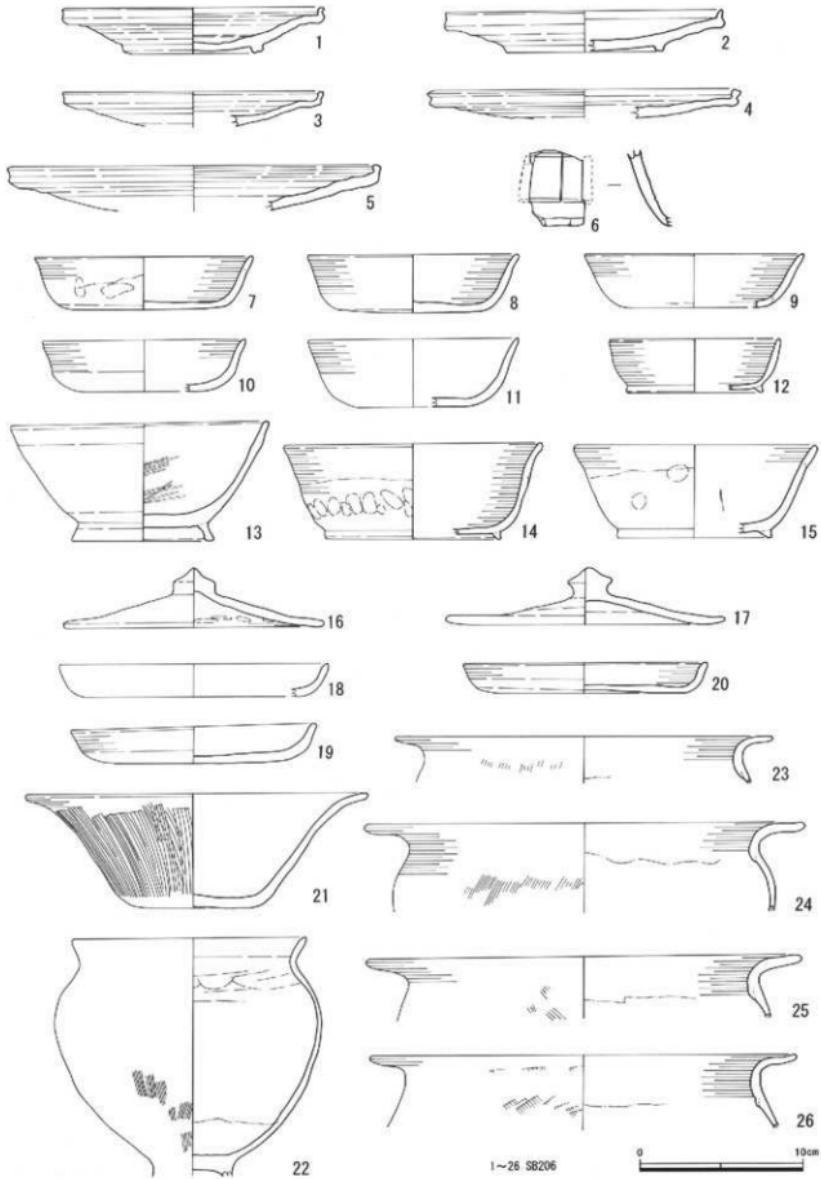
表13 笹井若林遺跡・溝状遺構・流路一覧表

区	遺構名	旧遺構	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	方向	区	遺構名	旧遺構	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	方向
II	SD1	SD104	15.5~	2.3~	0.63	N0°	III	SD37	SD119	19.5~	1.1	0.18	N56° W
II	SD2	SD101	15.5~	0.8	0.27	N2° W	III	SD38	SD121	18.8~	3.0~ 1.0	0.20~ 0.45	N59° W
II	SD3	SD102	15.5~	0.4~ 0.8	0.23	N4° E	III	SD39	SD127a	18.7~	0.4~ 0.8	0.08~ 0.24	N55° W~ N65° W
II	SD4	SD103	15.5~	1.4	0.26~ 0.48	N7° E	III	SD40	SD127b	14.2~	0.4~ 0.8	0.08~ 0.24	N55° W~ N49° W
II	SD5	SD106	5.2	0.4	0.13	N7° E	III	SD41	SD128	10.8~	0.5~ 0.9	0.23~ 0.42	N52° W
II	SD6	SD105	6.5~	0.3	0.10	N3° E	III	SD42	SD129	18.2~	0.7	0.17	N64° W
II	SD7	SD113	17.1~	0.5	0.20	N6° E	III	SD43	SD130	19.9~	0.6~ 1.2	0.12	N55° W
II	SD8	SD114	35.3~	1.1	0.31	N5° E	III	SD44	SD131	17.7~	0.6~ 1.3	0.24	N66° W
II	SD9	SD112	16.8	0.7	0.14	N87° W	III	SD45	SD132	9.7~	0.6	0.16	N64° W
II	SD10	SD117	6.6~	1.3	0.20	N3° W	III	SD46	SD134	3.5~	0.3	0.08	N31° E
II	SD11	SD107	34.4~	1.1	0.29	N25° E	III	SD47	SD133	2.0~	0.4	0.12	N66° E
II	SD12	SD108	26.6~	1.0	0.11	N22° E	III	SD48	SD124	33.2~	0.5~ 1.1	0.15~ 0.38	N28° E
II	SD13	SD115	8.7~	0.8	0.16	N1° W	III	SD49	SD125	29.7~	0.7~ 1.2	0.46~ 0.82	N31° E
II	SD14	SD109	28.8~	1.1	0.25~ 0.61	N1° W	III	SD50	SD122	23.9~	0.6~ 1.2	0.18~ 0.52	N31° E
II	SD15	SD118	50.9~	0.9	0.33	N1° W~ N79° W	III	SD51	SD123	17.9~	0.7	0.16	N31° E
II	SD16	SD110	37.5~	0.7	0.14	N0°	III	SD52	SD120b	15.6~	1.0	0.38	N38° E
II	SD17	SD111	17.7~	1.0~	0.15	N2° E	III	SD54	SD126a	37.0~	0.7~ 1.7	0.36~ 0.73	N65° W~ N29° E~ N0°~ N25° E
II	SD18	SD116	2.6~	0.6	0.25	N89° W	III	SD55	SD126b	17.5~	0.8~	0.24	N29° E
I	SD19	SD105	15.3~	0.4	0.10	N8° E	III	SD57	SD135a SD135b	19.9~	0.5~ 0.8	0.30	N8° E~ N44° E
I	SD20	SD106	17.0~	0.7	0.26	N77° W	III	SD58	SD140	7.2~	0.2	0.17	N63° W~ N32° W
I	SD21	SD107	10.1~	0.5	0.10	N82° W	III	SD59	SD146	0.9~	1.6	0.32	N21° E
I	SD22	SD108	4.9	0.3	0.08	N78° W	III	SD60	SD137	6.4~	0.6	0.18	N22° E
I	SD23	SD109	17.0~	0.5	0.16	N79° W	III	SD61	SD138	4.2~	1.0	0.31	N25° E
I	SD24	SD113	2.7	0.3	0.06	N7° E	III	SD62	SD139	1.1~	0.5	0.16	N61° W
I	SD25	SD111	17.0~	0.9~ 1.1	0.10~ 0.28	N78° W	III	SD63	SD141	6.5~	0.4	0.16	N31° E
I	SD26	SD110	8.3	0.5	0.10	N16° E	III	SD64	SD142	2.4	0.3	0.08	N37° E
I	SD27	SD112	17.5~	1.3~ 2.8	0.28	N69° W	III	SD65	SD136 SD145	17.2~ 1.9	0.8~ 1.9	0.42	N75° W~ N3° W
I	SD28	SD203	48.9~	1.7~ 2.6	0.24~ 0.48	N22° E	III	SD66	SD144	6.4~	0.5	0.28	N26° E
I	SD29	SD201	17.8~	0.9~ 1.7	0.16	N68° W	III	SD67	SD143	3.1~	0.6~ 1.2	0.41	N57° W
I	SD30	SD103	11.2~	0.9	0.20	N27° E	III	SD68	SD101	2.9~	1.1	0.41	N71° W
I	SD31	SD102	21.0~	0.8	0.09~ 0.20	N46° E	III	SD69	SD102	3.9~	1.1	0.43	N69° W
I	SD32	SD101	18.4~	1.4	0.30	N63° W							
I	SD33	SD104	4.7~	0.7	0.18	N63° W							
III	SD34	SD117a	19.1~	2.1	0.05~ 0.16	N60° W							
III	SD35	SD117b	10.6~	0.9	0.11~ 0.22	N60° W							
III	SD36	SD118	19.7~	1.0	0.32	N56° W							

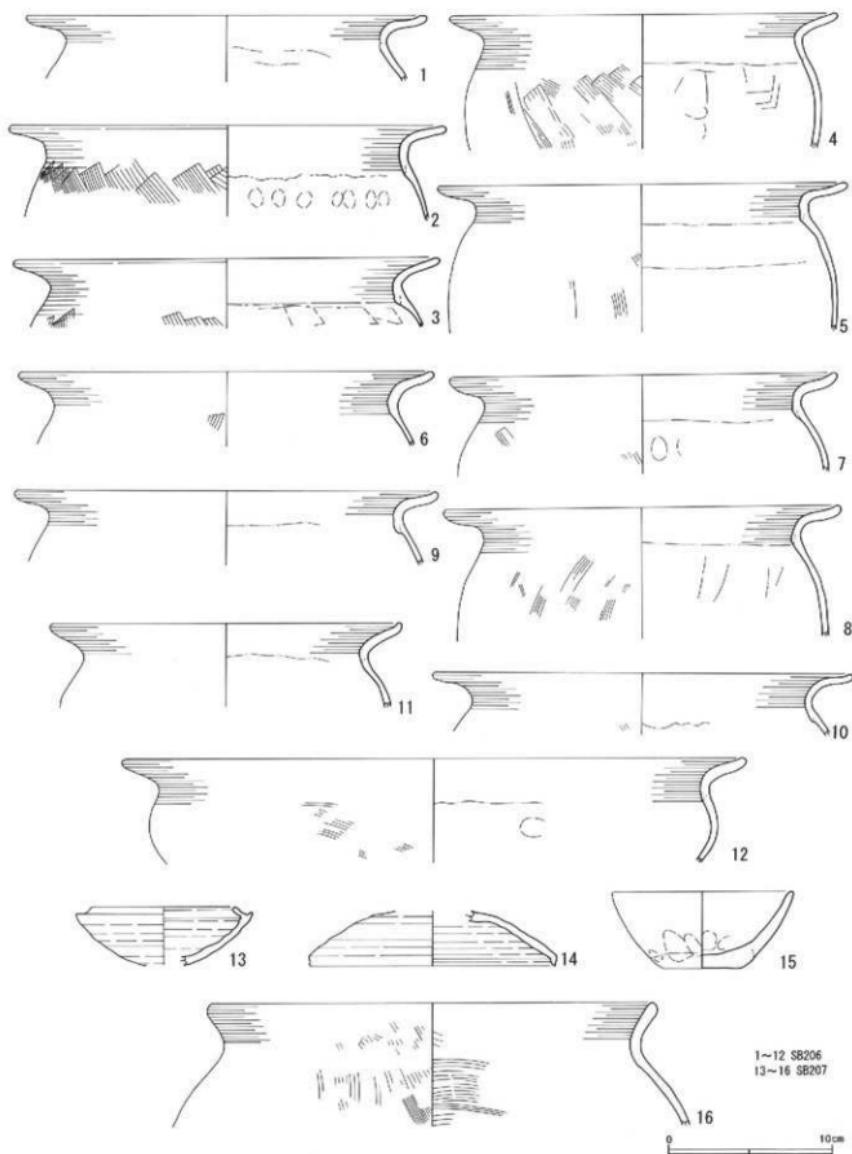
区	遺構名	旧遺構	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	方向	区	遺構名	旧遺構	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	方向
III	SD70	SD206	5.2~	0.7	0.26	N39° E	II	SD215	SD218	3.0	0.4	0.09	N8° E
III	SD71	SD107	26.4~	1.6	0.45	N24° E	II	SD216	SD220	0.6~	0.7	0.06	N1° E
III	SD72	SD103	8.1~	1.2	0.28	N67° W	II	SD217	SD212	0.9~	0.3	0.09	N26° E
III	SD73	SD112	5.6~	0.5	0.15	N60° W	II	SD218	SD213	3.5	0.9	0.15	N24° E
III	SD74	SD111	6.1~	0.4	0.20	N63° W	II	SD219	SD225	2.8	0.6	0.10	N10° E
III	SD75	SD110	5.1	0.7	0.17	N59° W	II	SD220	SD224	5.7~	0.7	0.12	N24° E
III	SD76	SD115	3.4~	0.6	0.12	N67° W	II	SD221	SD230	3.1~	0.4	0.10	N84° W
III	SD77	SD105a	16.2~	0.4~ 1.2	0.16	N35° W	II	SD222	SD223	2.1~	0.4	0.08	N78° W
III	SD78	SD105b	17.2~	0.4~ 1.2	0.16	N35° W	II	SD223	SD214	2.3~	0.5	0.09	N90° W
III	SD79	SD104	24.2	0.8	0.28~ 0.55	N37° E	II	SD224	SD215	2.8~	0.6	0.04	N90°
III	SD80	SD106	19.5	0.7	0.20	N33° E	II	SD225	SD216	4.4~	0.7	0.08	N89° E
III	SD81	SD114	15.2~	0.5	0.12	N24° E	II	SD226	SD217	4.1~	0.6	0.07	N15° W
III	SD82	SD116	3.1	0.4	0.14	N28° E	II	SD227	SD221	13.9~	0.3~ 1.0	0.10	N36° E~ N45° W ~N3° E
III	SD83	SD113	4.3~	0.6	0.23	N62° W	II	SD228	SD226	3.0	0.4	0.03	N47° W
III	SD84	SD108	6.9~	0.6	0.10	N60° W	II	SD229	SD227	2.4	0.4	0.06	N44° W
III	SD85	SD109	6.5~	0.4	0.10	N60° W	II	SD230	SD222	19.0~	0.6	0.11	N13° W~ N25° E
I	SD86	SD218	16.7~	1.1	0.24	N81° W	II	SD231	SD228	5.5~	0.4	0.03	N61° E
I	SD87	SD217	9.7	0.3	0.06	N14° E	II	SD232	SD229	9.0~	0.7	0.13	N65° E
I	SD88	SD210	17.0~	2.1~ 2.5	0.28	N79° W	I	SD233	SD219	-	-	-	-
I	SD89	SD211	17.1~	0.8	0.13	N79° W	I	SD241	SD215	19.9~	0.7	0.11	N20° E
I	SD90	SD212	17.2~	0.7	0.24	N80° W	I	SD242	SD216	10.2~	0.5	0.08	N10° W
I	SD91	SD213	17.2~	0.7	0.24	N80° W	I	SD243	SX204	20.6~	4.9~ 7.5	0.18~ 0.64	N57° E
I	SD92	SD214	17.3~	0.7	0.20	N78° W	I	SD247	SD204	2.9	0.3	0.11	N10° E
I	SD93	SD207	15.2~	0.9	0.31	N31° E	I	SD248	SD208	4.3	0.6	0.11	N88° E
I	SD94	SD206	6.1~	0.8	0.28	N30° E	I	SD249	SD205	4.5	0.4	0.08	N29° E
II	SD201	SD204b	2.8~	0.5	0.08	N74° W	I	SD250	SD209	1.8	0.4	0.08	N65° E
II	SD202	SD210	3.7~	0.4	0.12	N76° W	III	SD251	SD209	2.6	0.3	0.08	N10° W
II	SD203	SD204a	10.0~	0.3~ 0.8	0.08	N70° W~ N85° E	III	SD252	SD146	0.8~	1.0	0.10	N14° E
II	SD204	SD206	8.0~	0.3~ 0.7	0.07	N78° W	III	SD253	SD210	2.8~	0.4	0.16	N56° W
II	SD205	SD205	5.8~	0.5	0.05	N22° E	III	SD254	SD202	23.2~	1.4	0.20~ 0.45	N88° W~ E45° E
II	SD206	SD201	2.0~	0.4	0.19	N10° E	III	SD255	SD205	6.6~	0.6	0.10	N79° W
II	SD207	SD202	6.8	0.3~ 0.9	0.04	N23° E	III	SD256	SD204	4.7	0.4	0.08	N89° W
II	SD208	SD119	0.8~	0.4	0.04	N2° W	III	SD257	SD203	4.7	0.4	0.12	N90°
II	SD209	SD203	9.2~	0.5	0.04	N20° E	III	SD258	SD201	3.1~	0.6	0.16	N79° W ~N1° E
II	SD210	SD207	7.0~	0.5~ 0.8	0.15	N24° E	III	SD259	SD207	4.7~	0.8	0.08	N56° E
II	SD211	SD211	10.4~	0.4~ 0.9	0.11	N28° E	III	SD260	SD208	3.8~	0.8	0.14	N72° E
II	SD212	SD219	1.7	0.4	0.05	N24° E	III	SD261	SD301	4.1~	0.2	0.08	N65° W
II	SD213	SD208	10.8~	0.4	0.08	N24° E	I	SR201	SR202	15.0~	1.42~ 3.08	0.13	N65° W
II	SD214	SD209	15.2~	0.4	0.08	N11° E	I	SR202	SR201	13.2~	4.0~ 1.5	0.14	N50° W



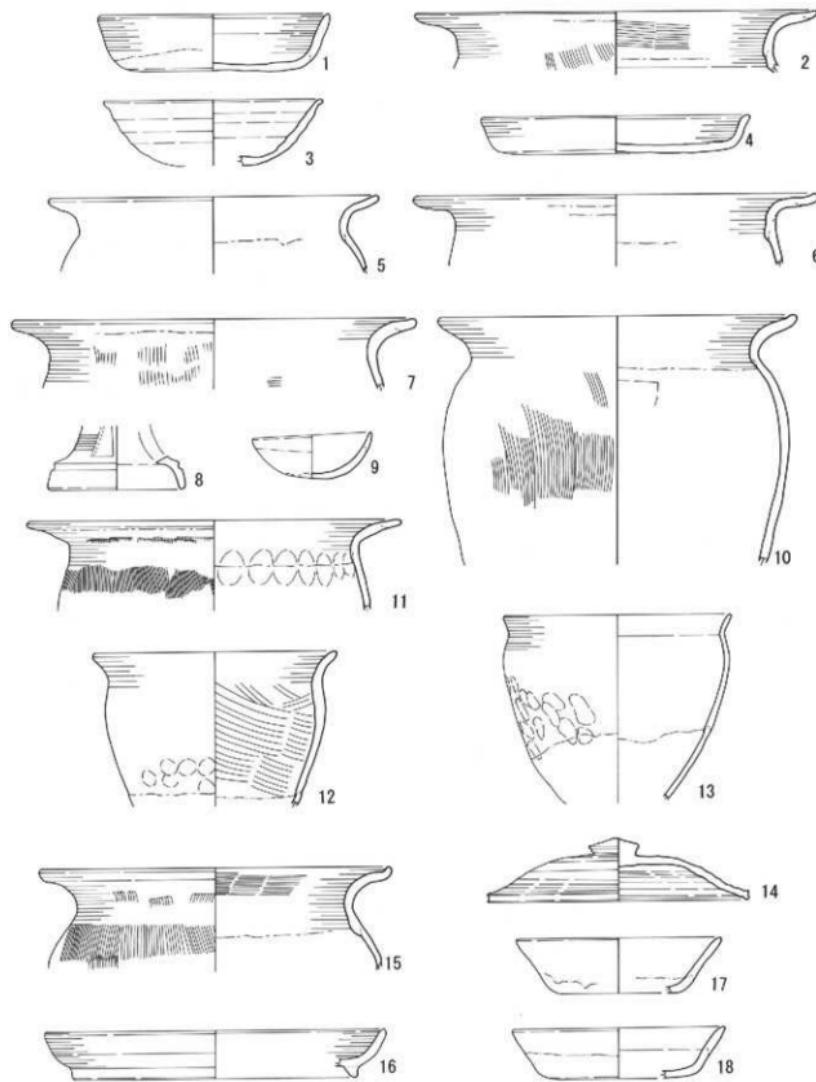
第132図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(1) I区第2面遺構出土土器



第133図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(2) I区第2面遺構出土土器

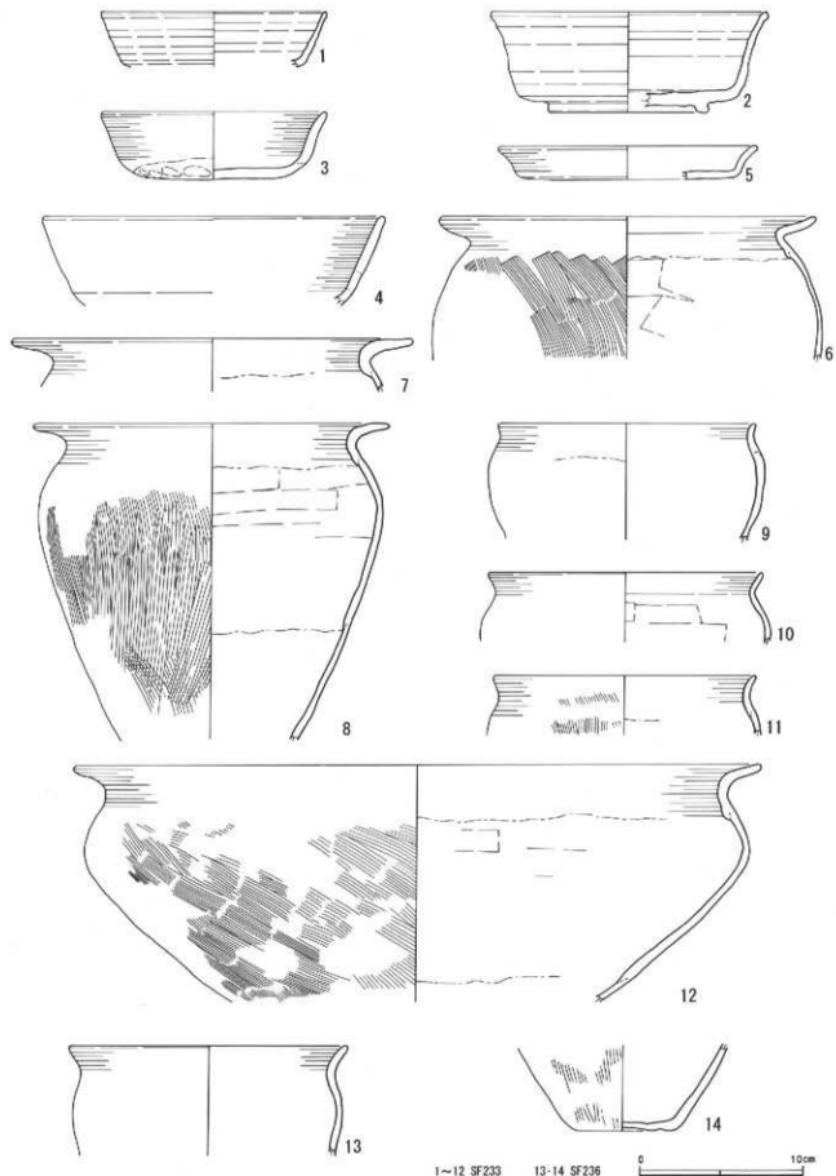


第134図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(3) I区第2面造構出土土器

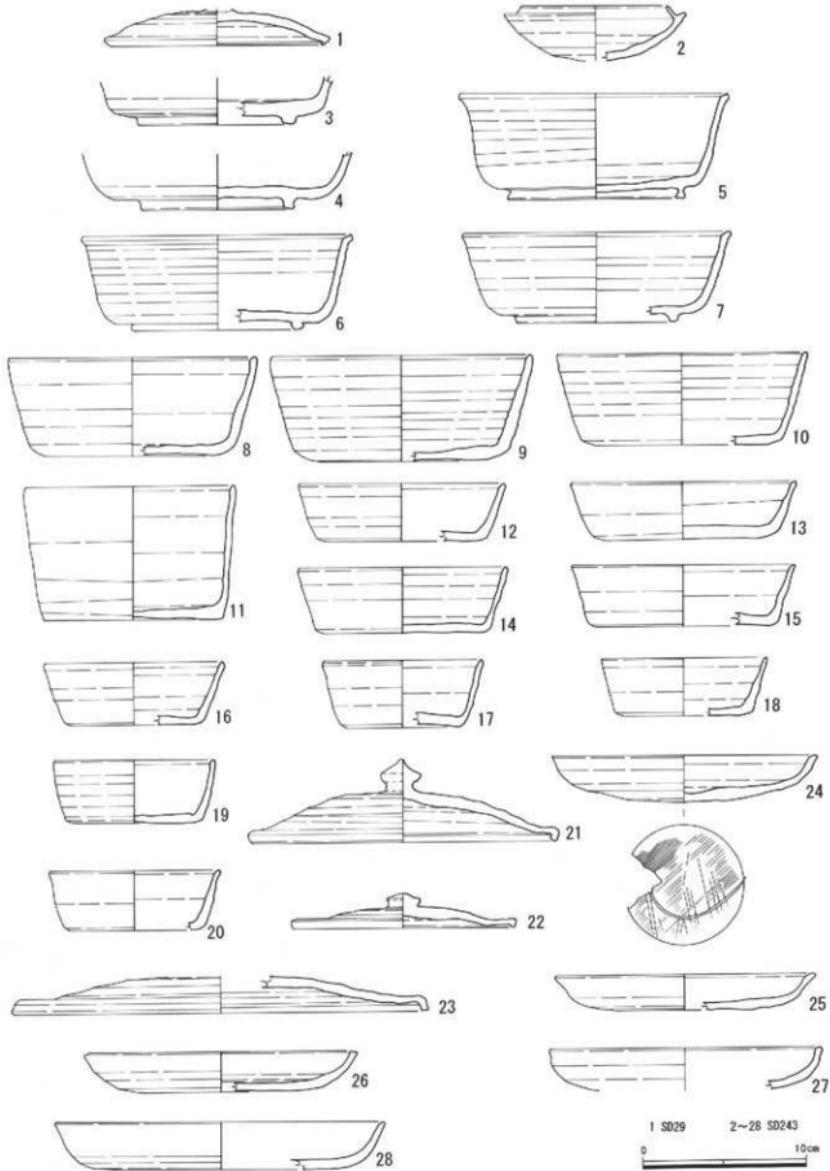


第135図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(4)

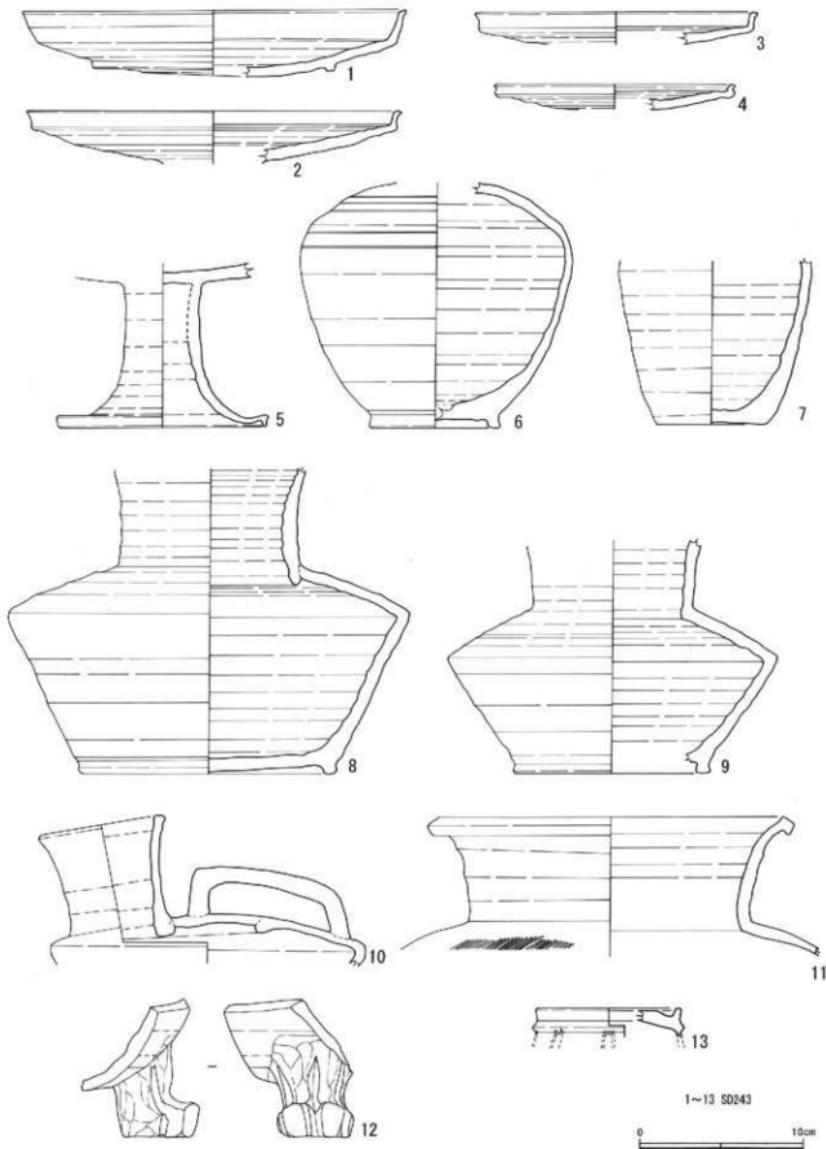
I区第2面遺構出土土器



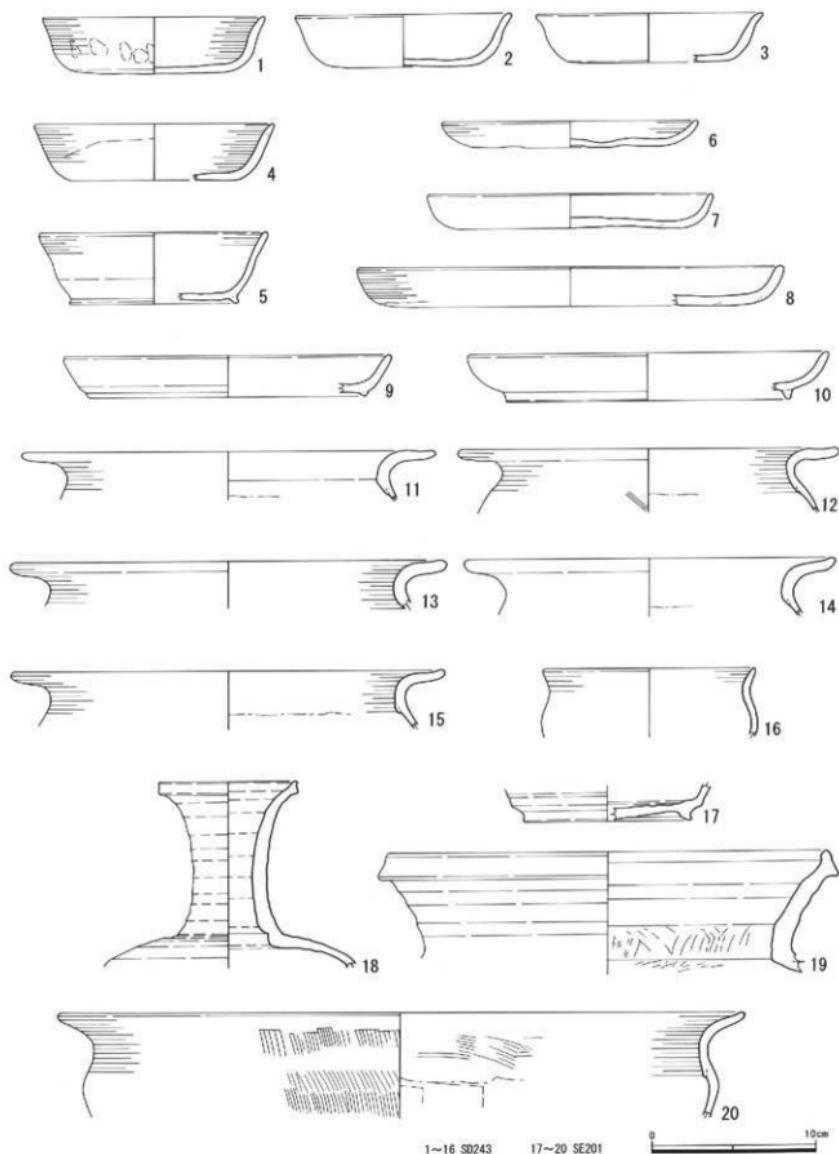
第136図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(5) I区第2面遺構出土土器



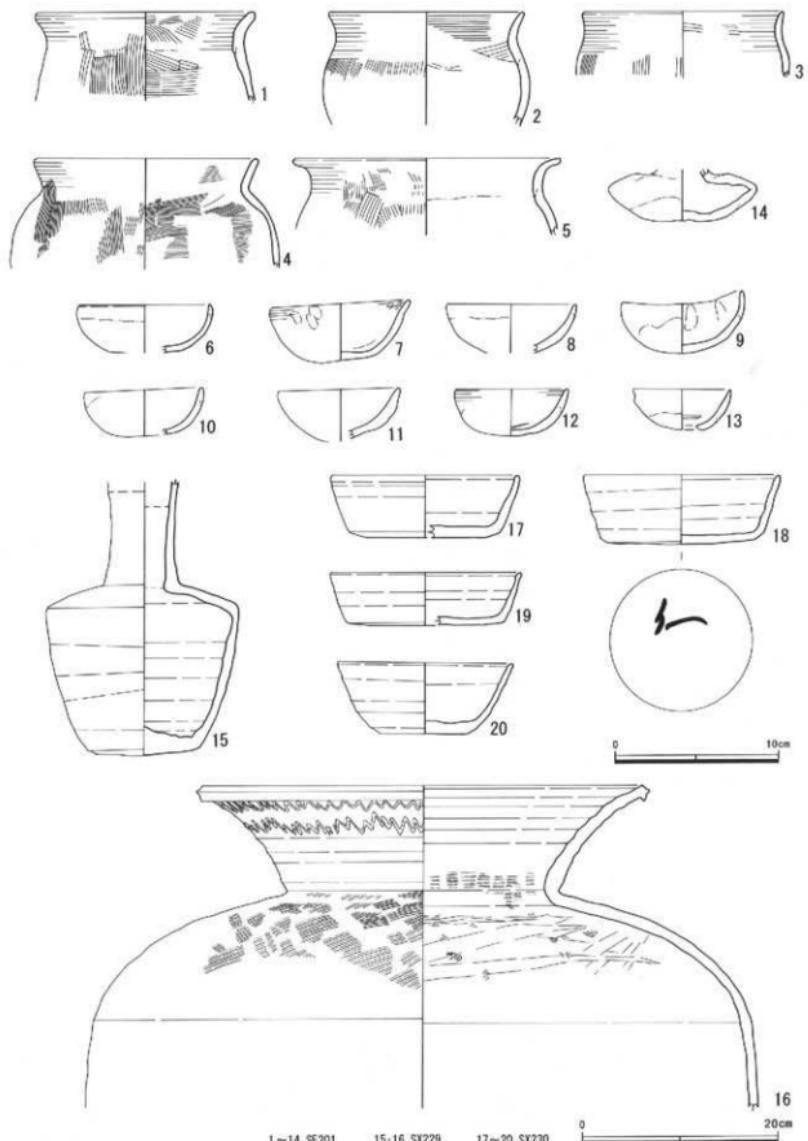
第137図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(6) I区第2面造構出土器



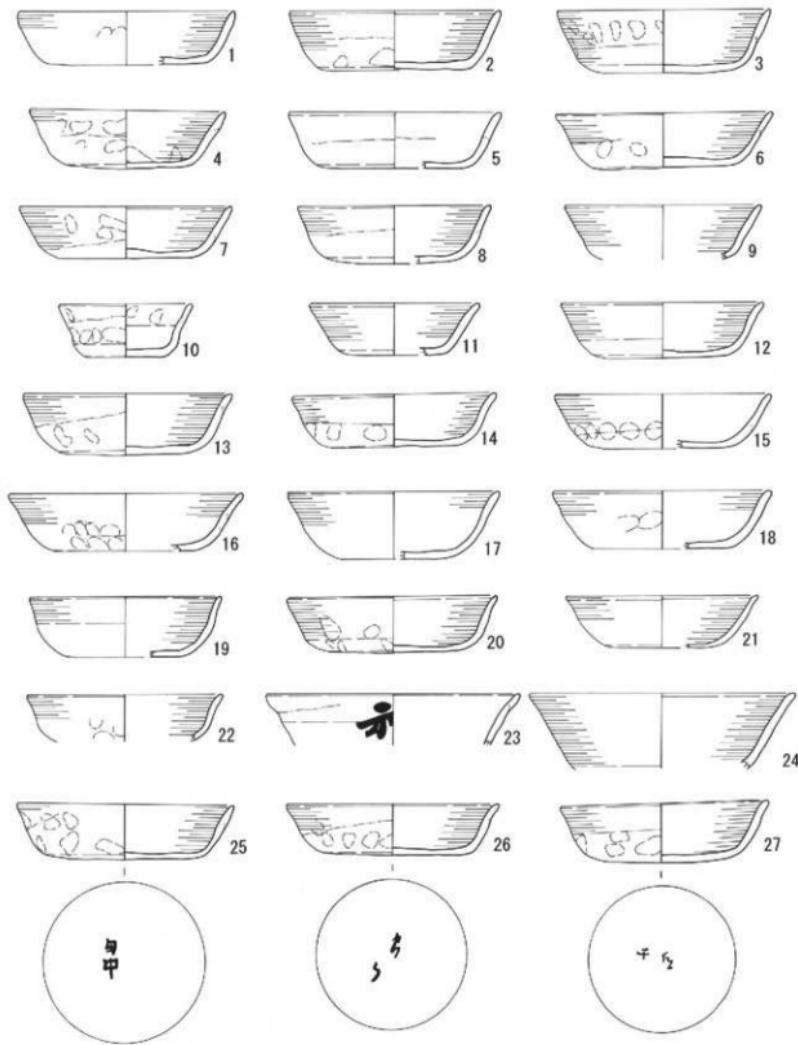
第138図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(7) I区第2面遺構出土土器



第139図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(8) I区第2面遺構出土土器



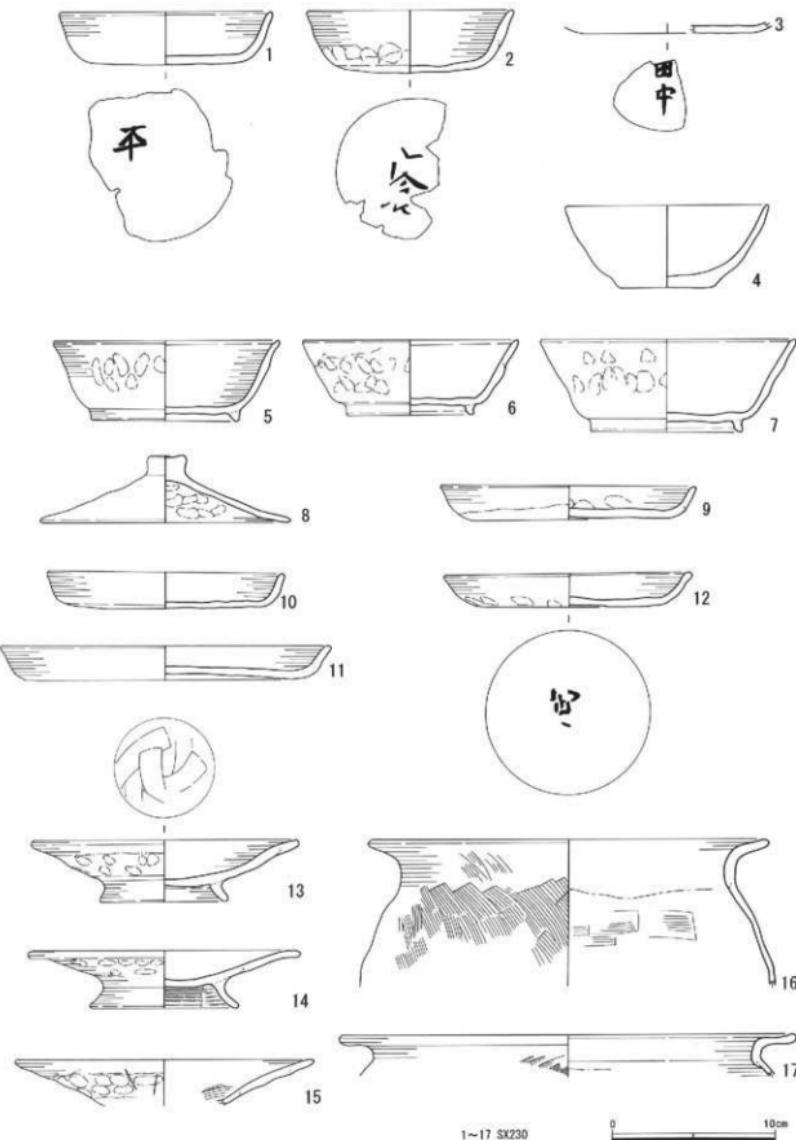
第140図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(9) I区第2面造構出土土器



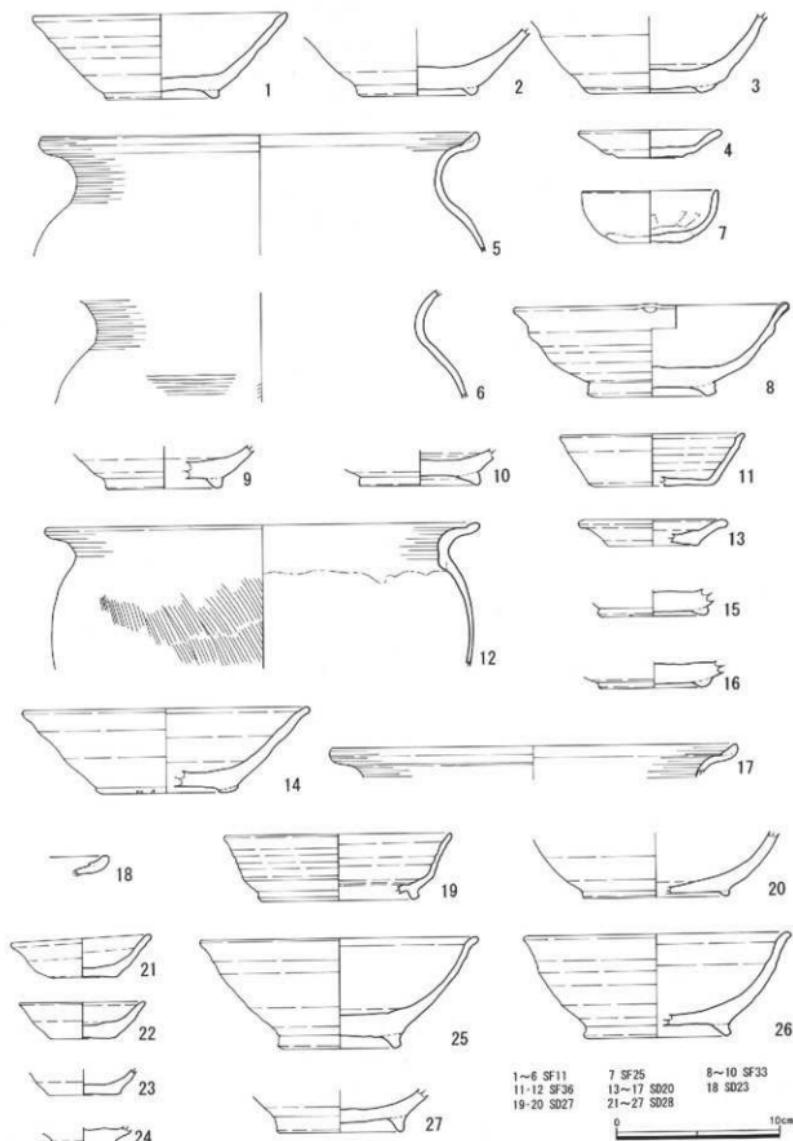
1~27 SX230

0 10cm

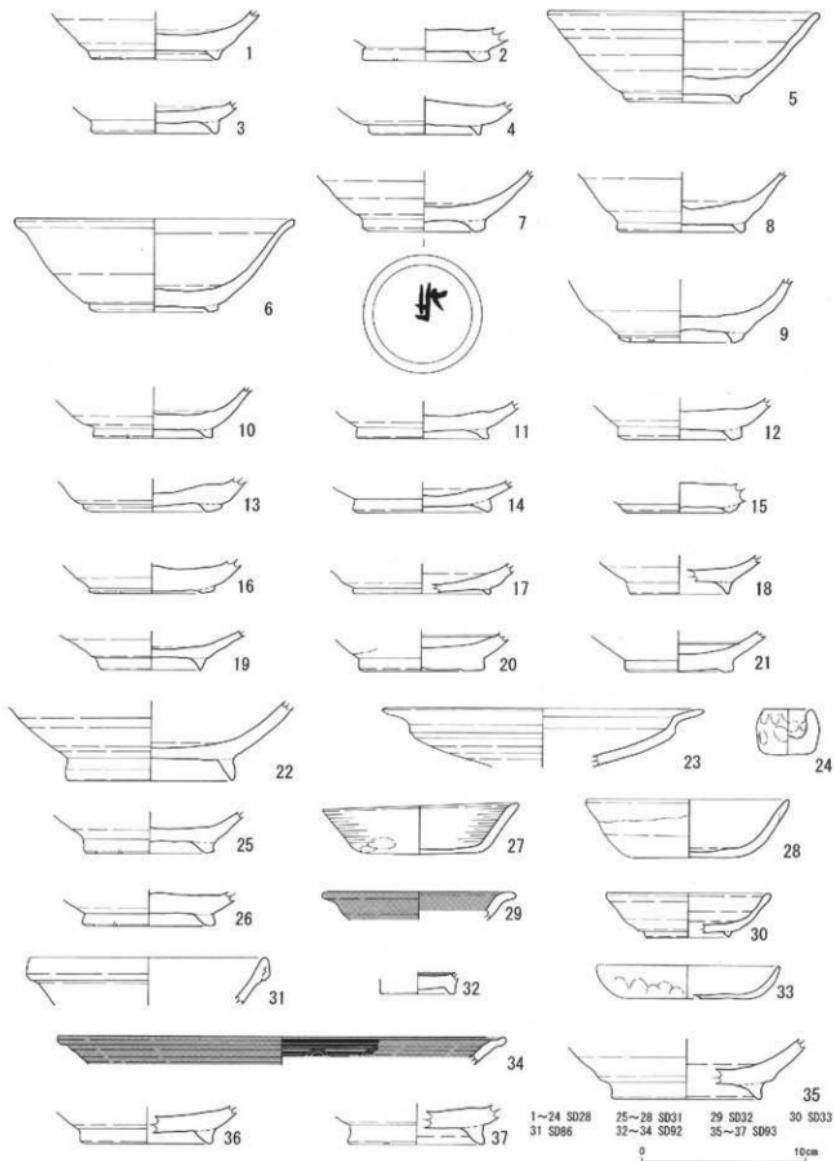
第141図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(10) I区第2面遺構出土土器



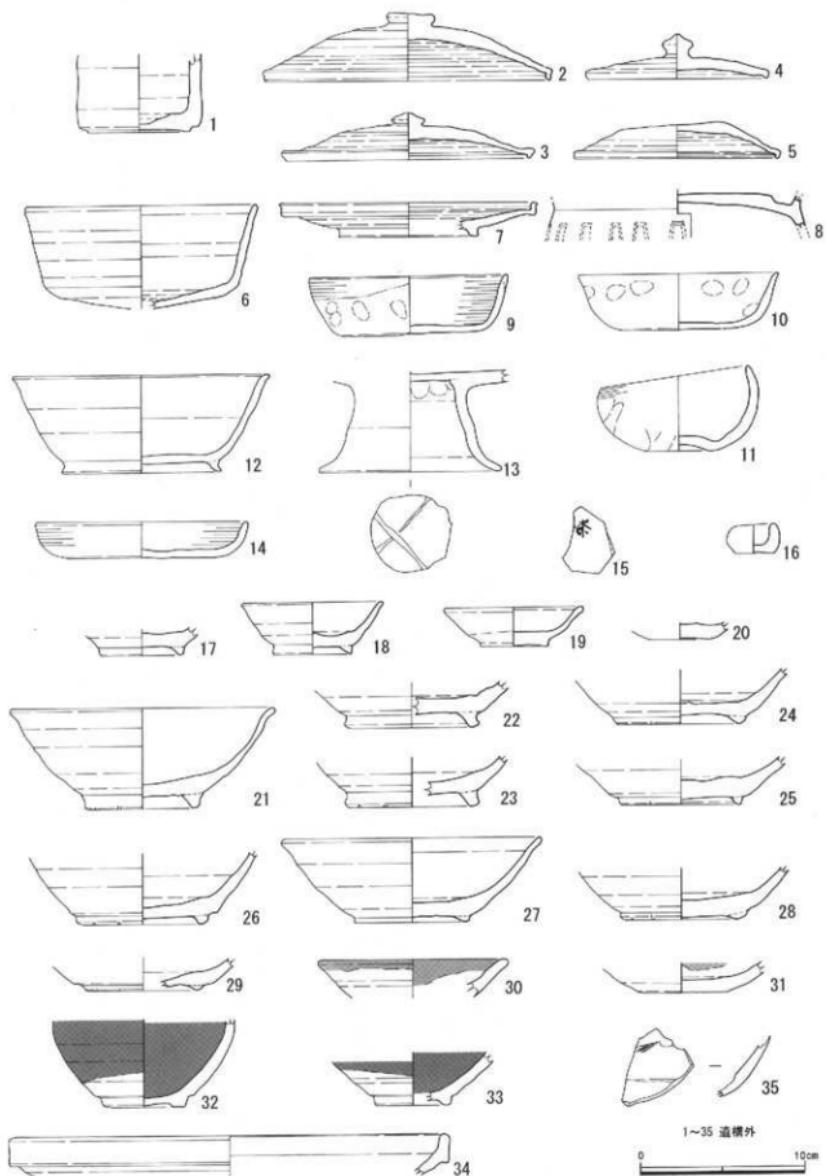
第142図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(11) I区第2面遺構出土土器



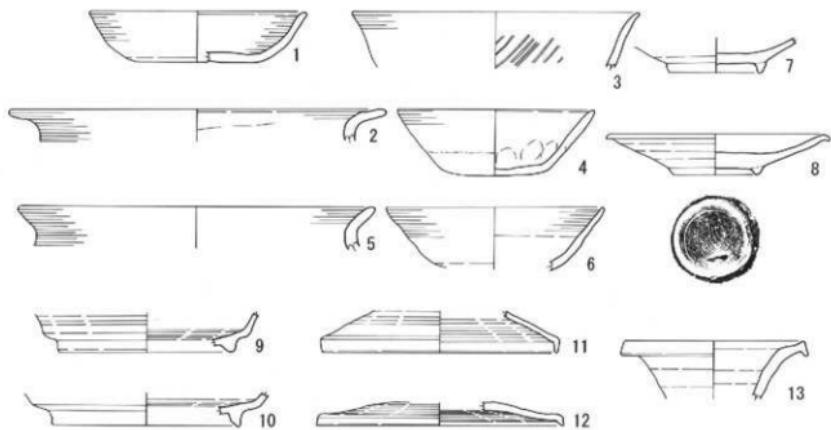
第143図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(12) I区第1面遺構出土土器



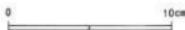
第144図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(13) I区第1面遺構出土土器



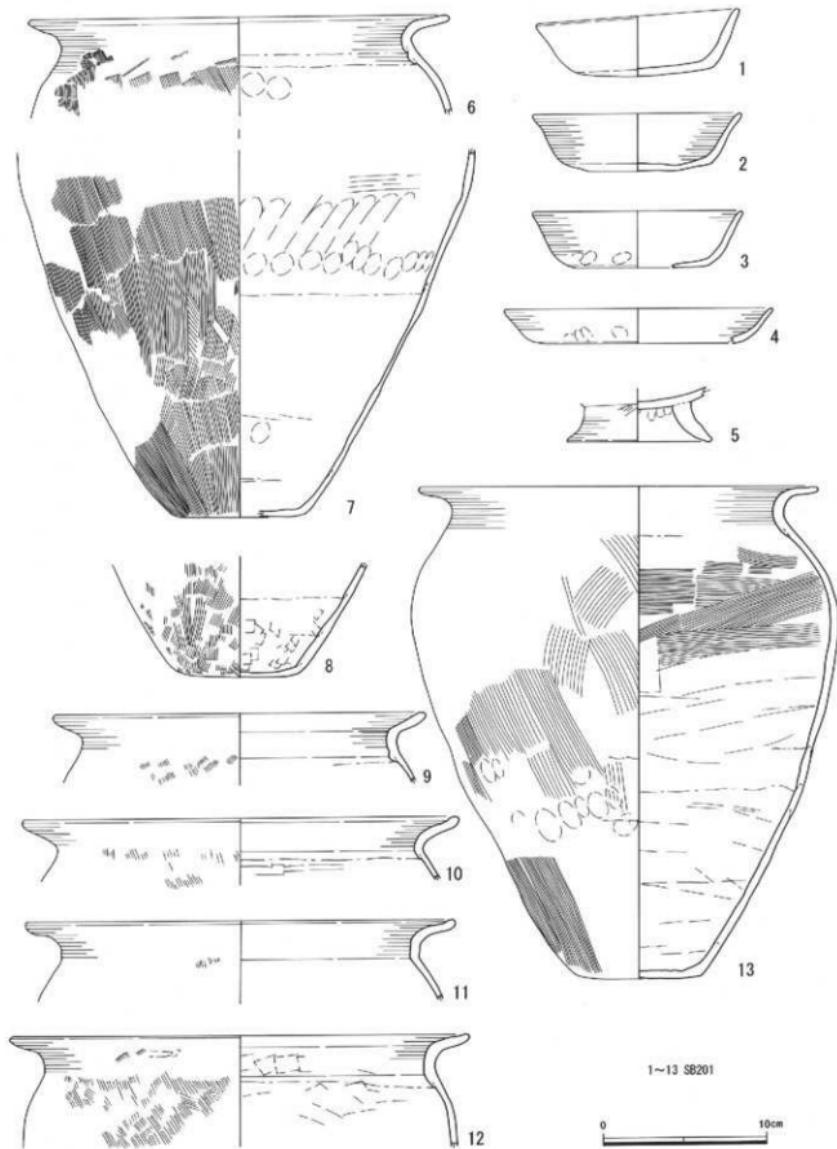
第145図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(14) I区遺構外出土土器



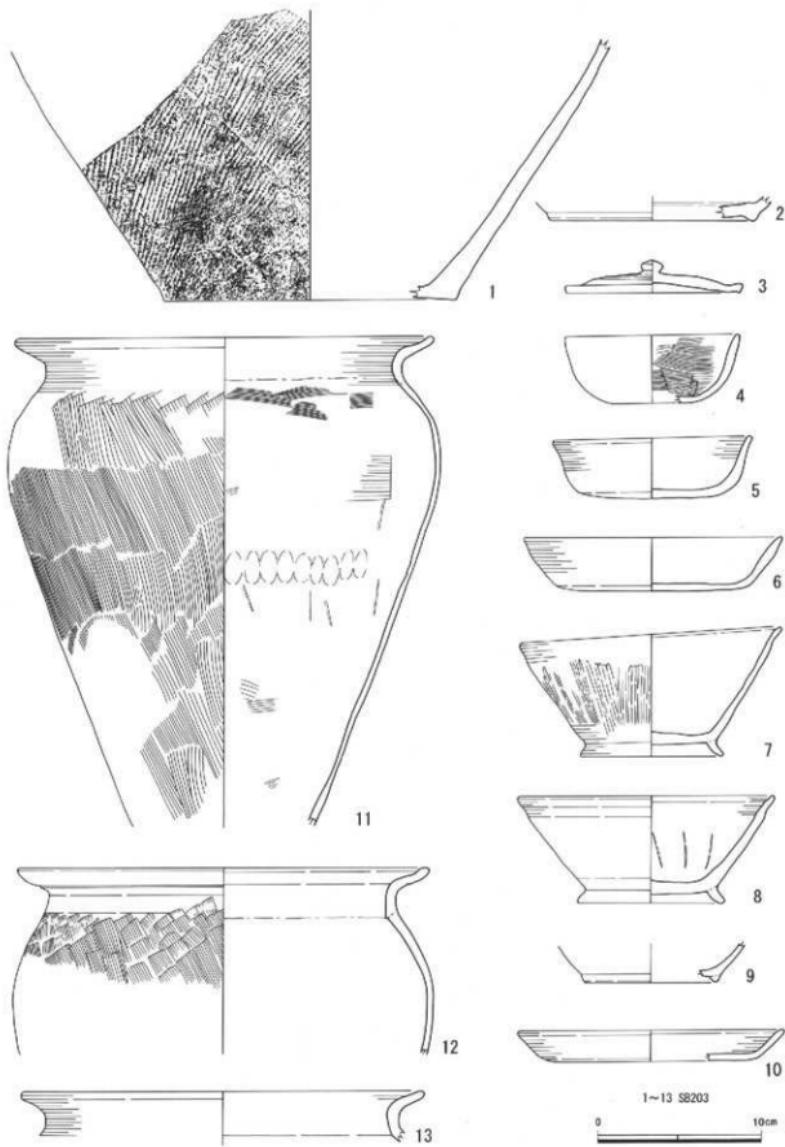
1~2 SH201 3~8 SH202 9~14 SB201



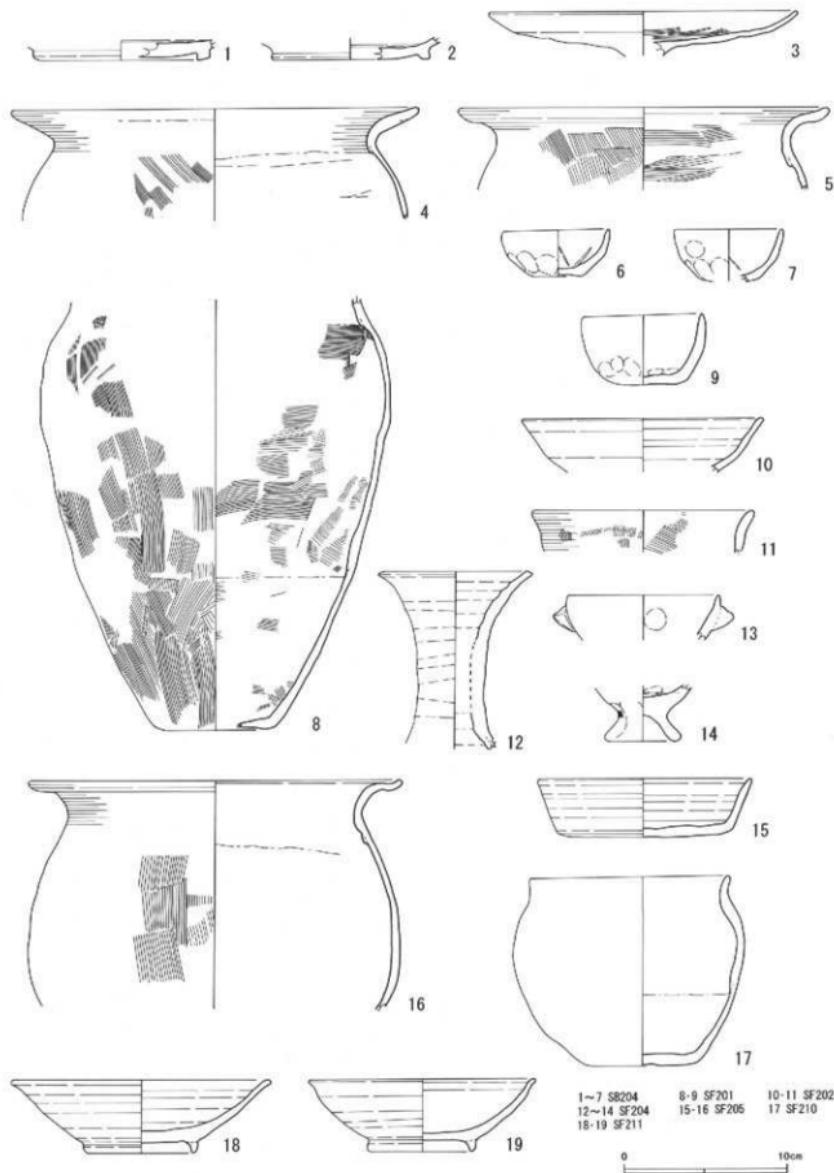
第146図 箕井若林遺跡出土遺物実測図(15) II区第2面遺構出土土器



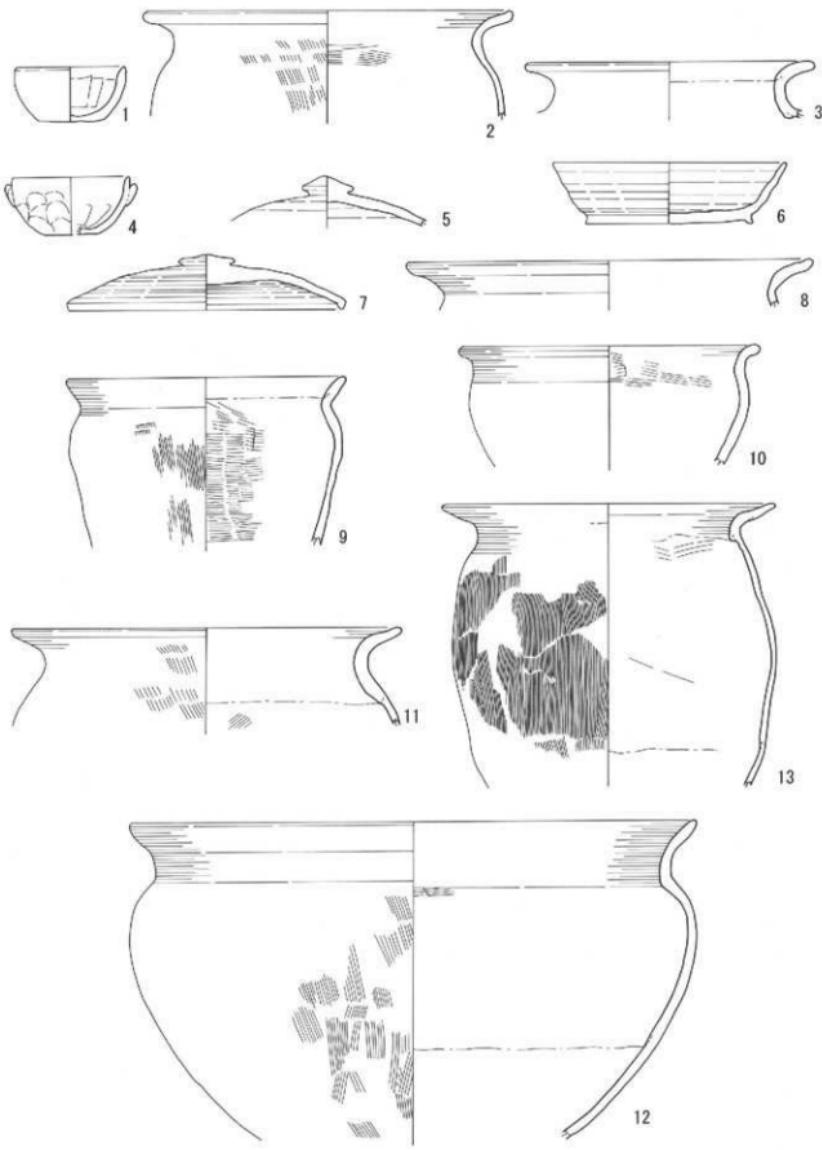
第147図 立井若林遺跡出土遺物実測図(16) II区第2面遺構出土土器



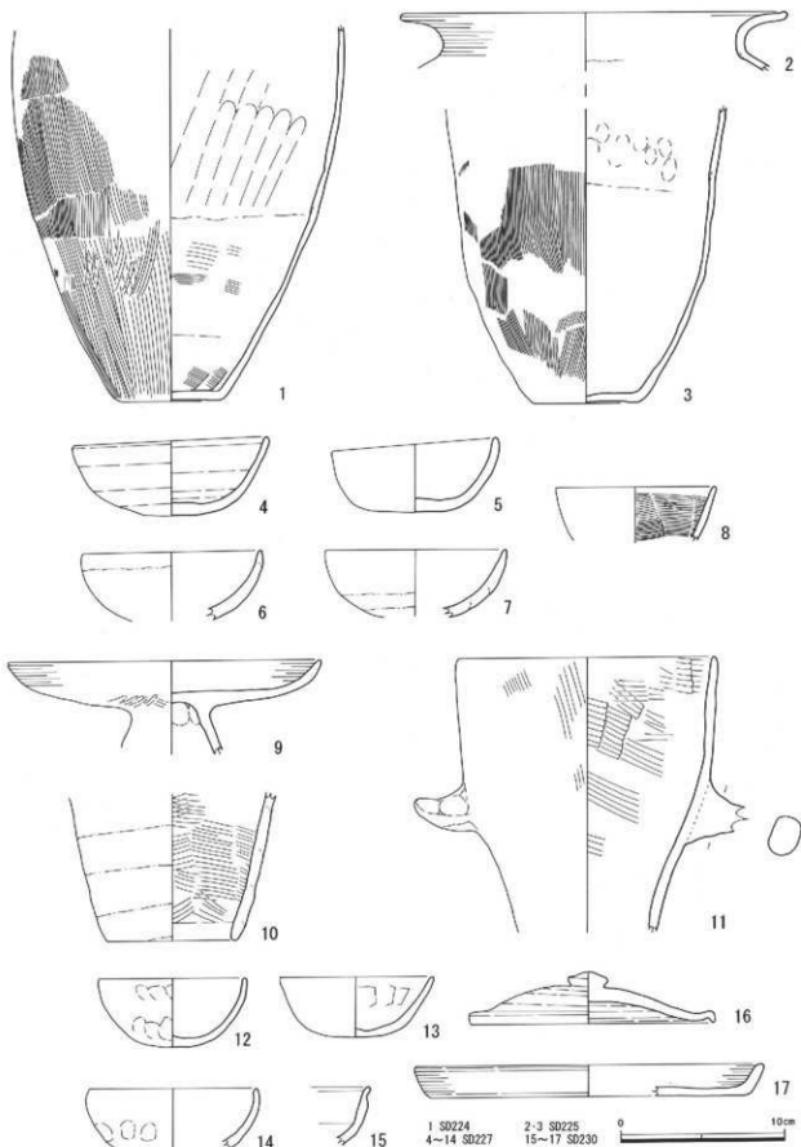
第148図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(17) II区第2面遺構出土土器



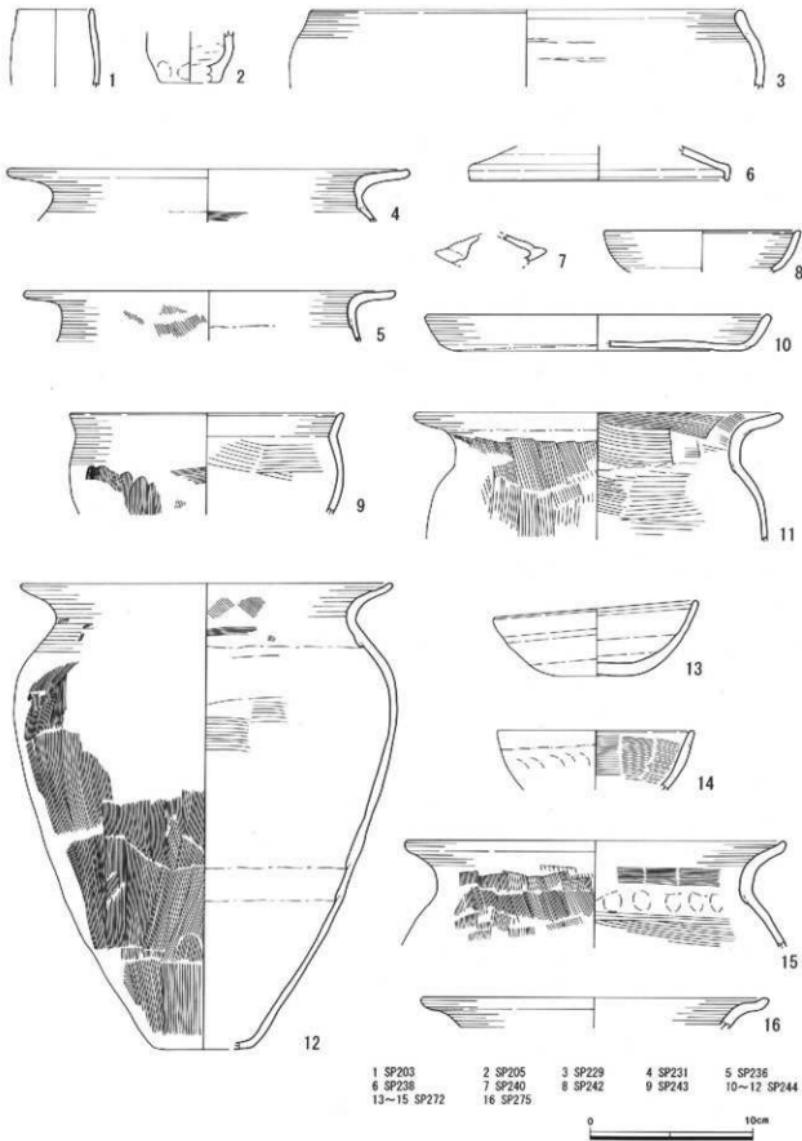
第149図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(18) II区第2面遺構出土土器



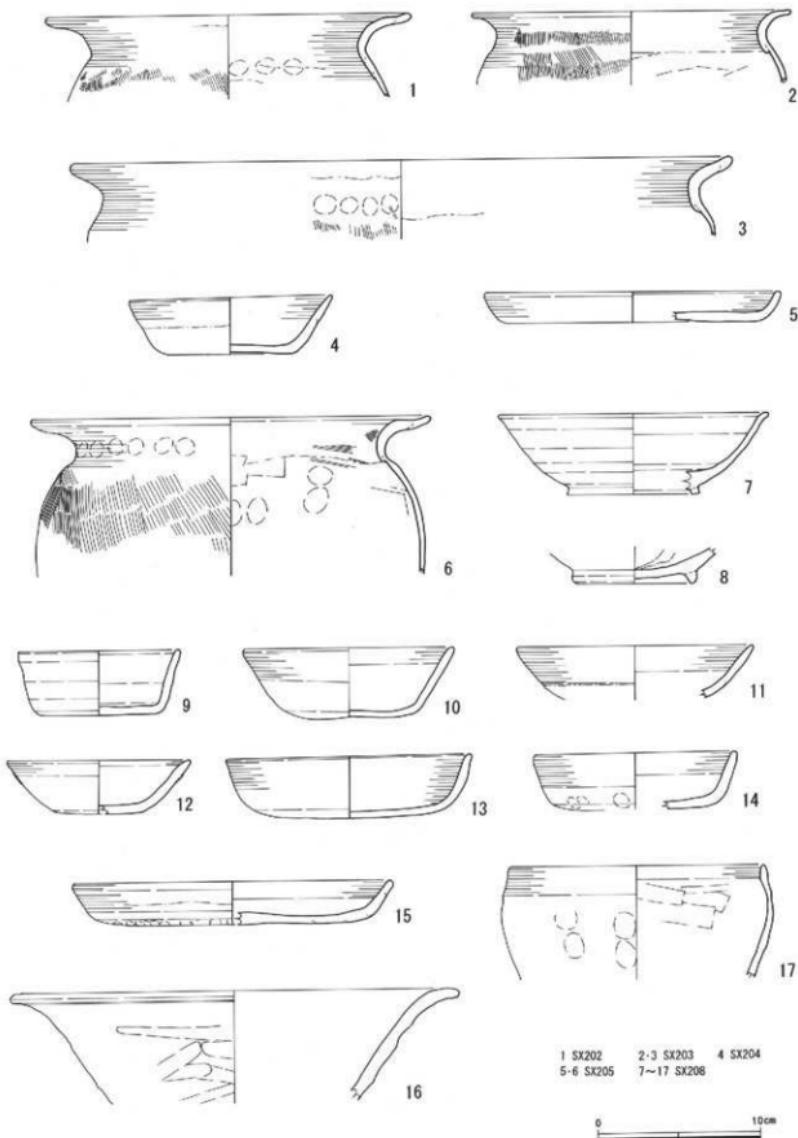
第150図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(19) II区第2面遺構出土土器



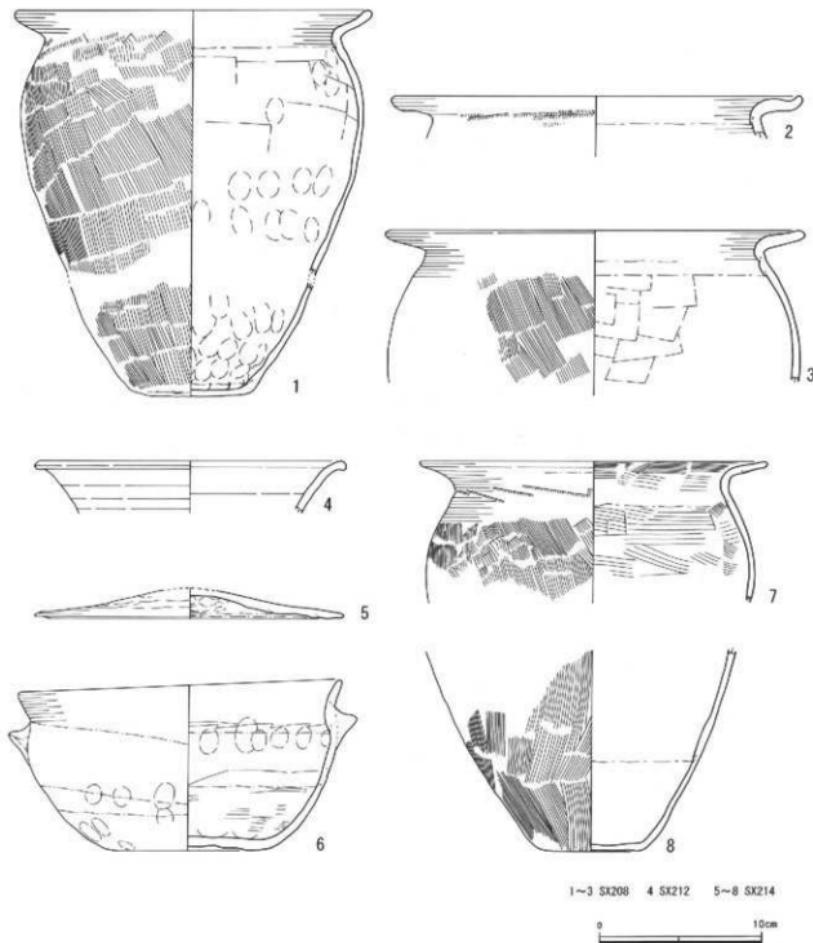
第151図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(20) II区第2面遺構出土土器



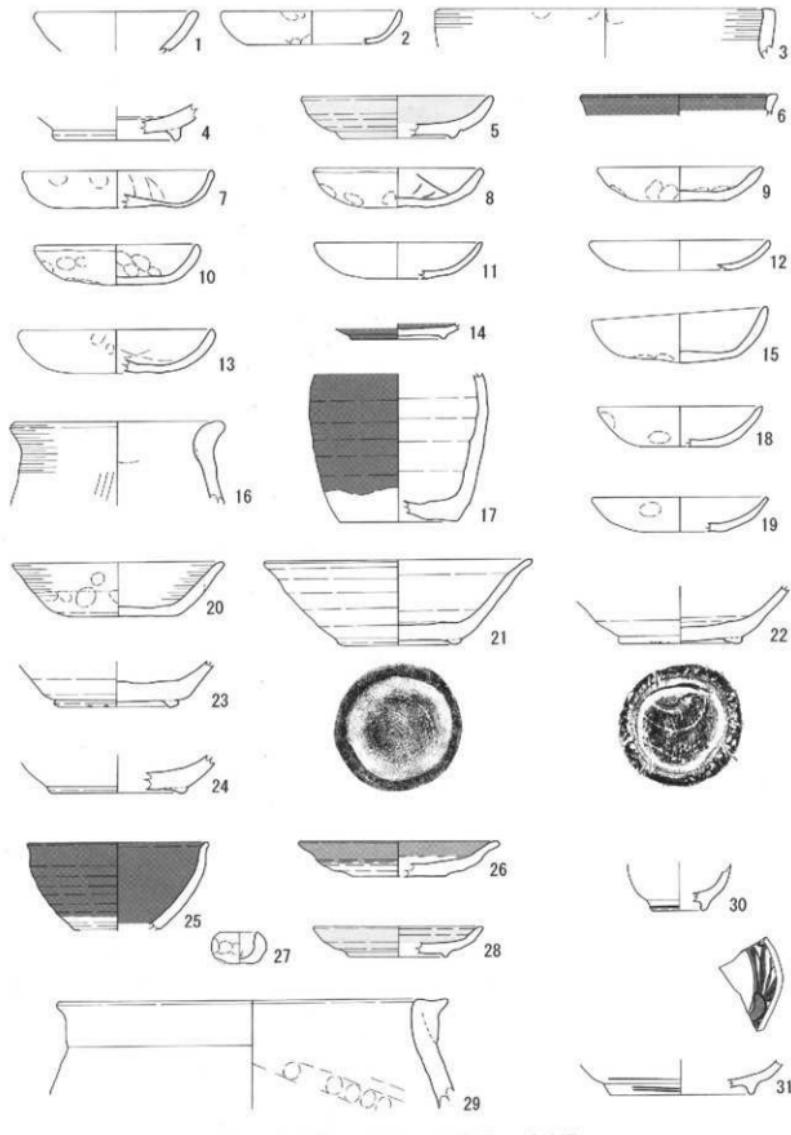
第152図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(21) II区第2面遺構出土土器



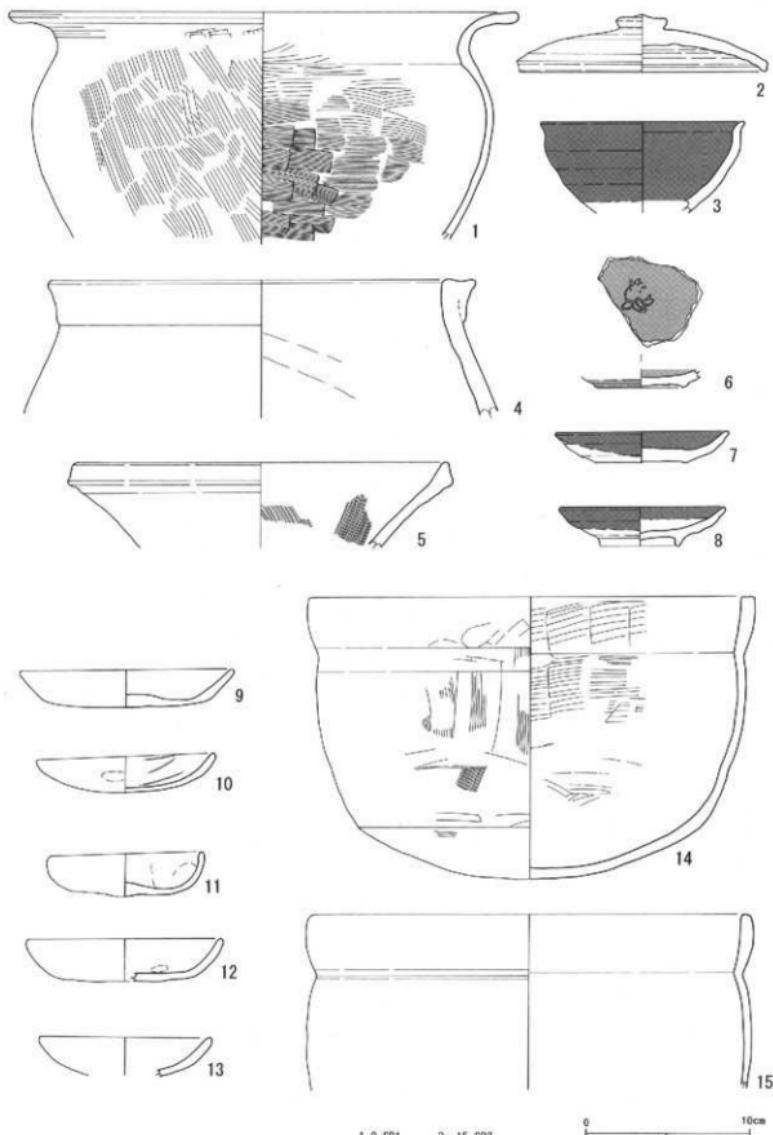
第153図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(22) II区第2面遺構出土土器



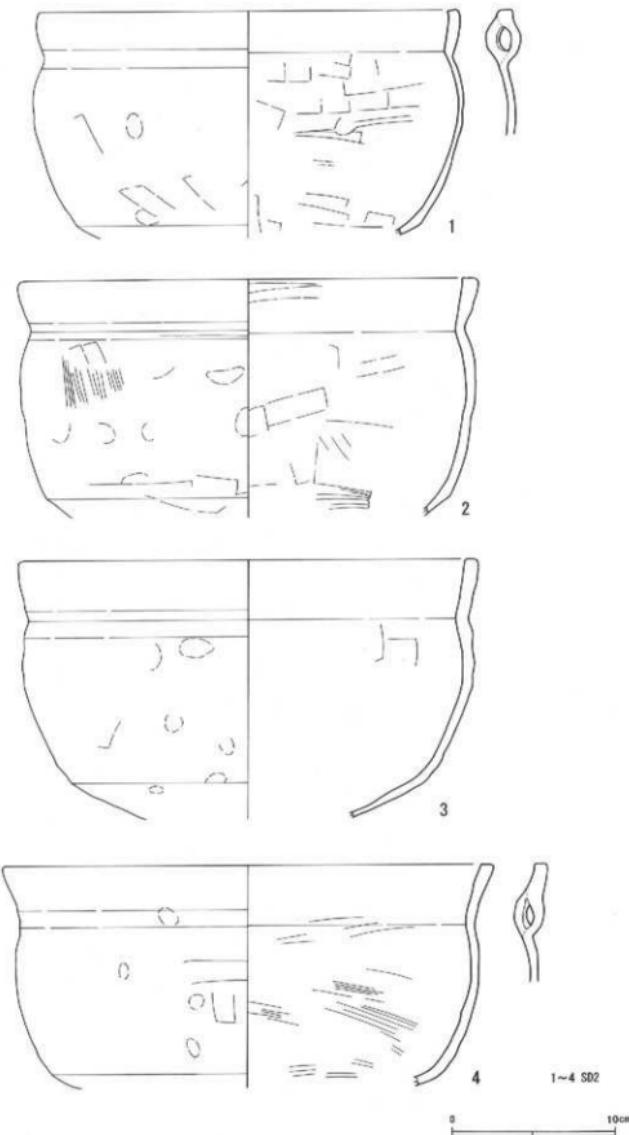
第154図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(23) II区第2面遺構出土土器



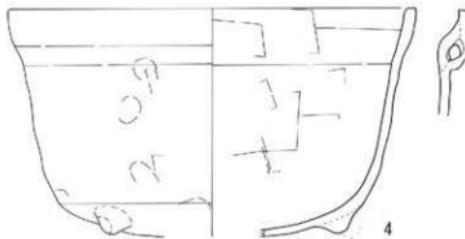
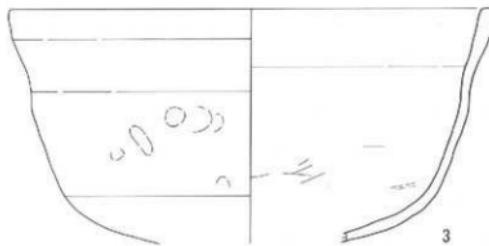
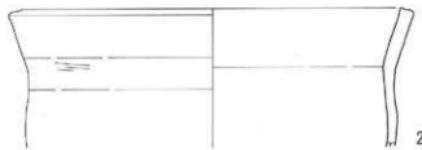
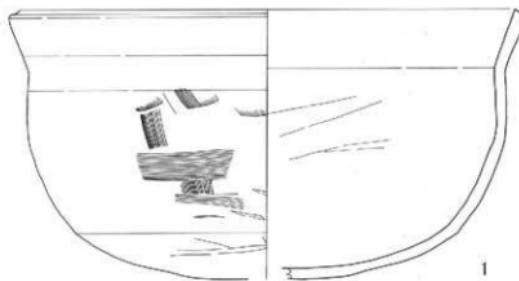
第155図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(24) II区第1面遺構出土土器



第156図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(25) II区第1面遺構出土土器



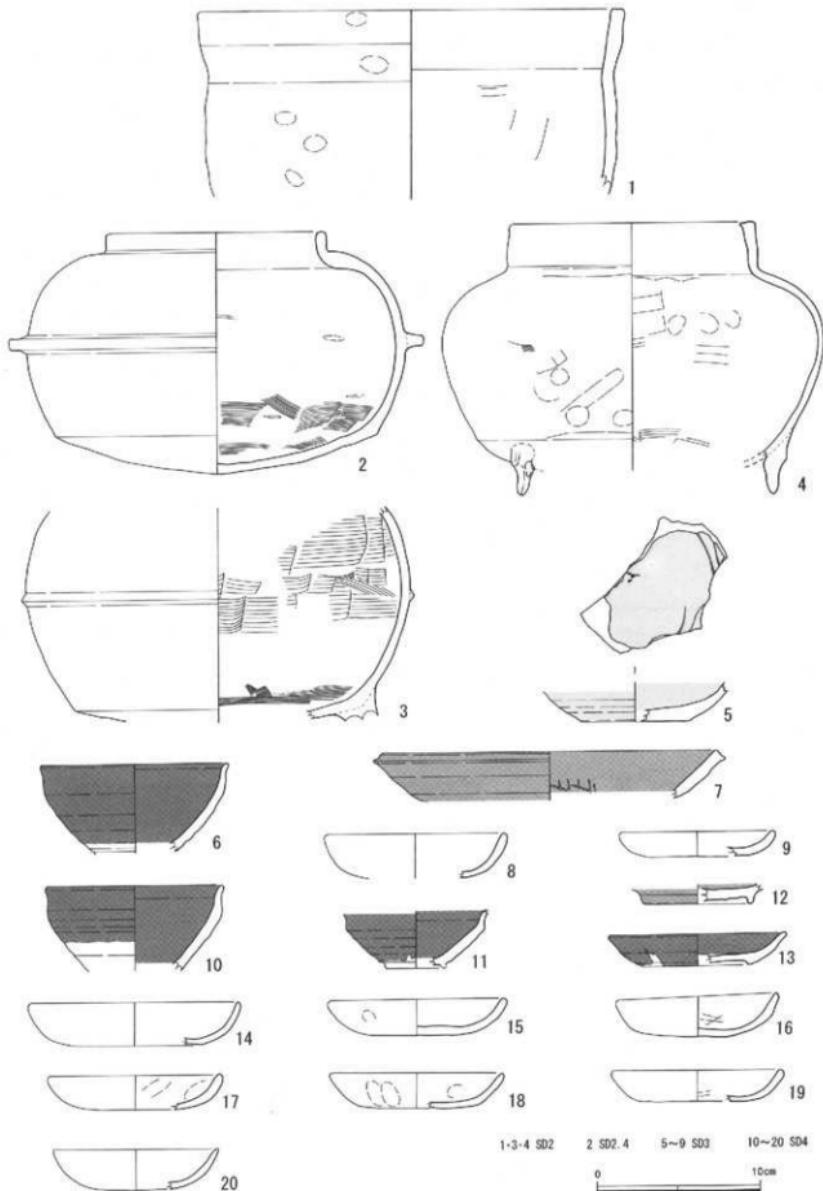
第157図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(26) II区第1面遺構出土土器



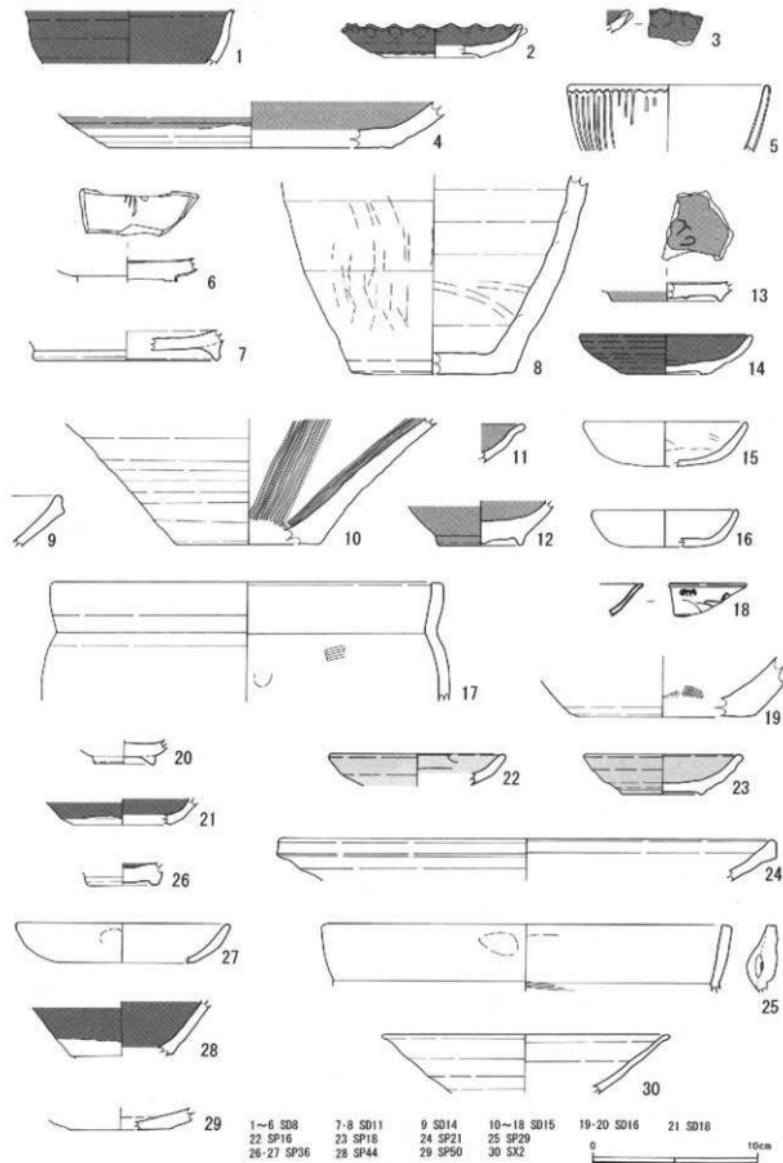
1~4 SD2



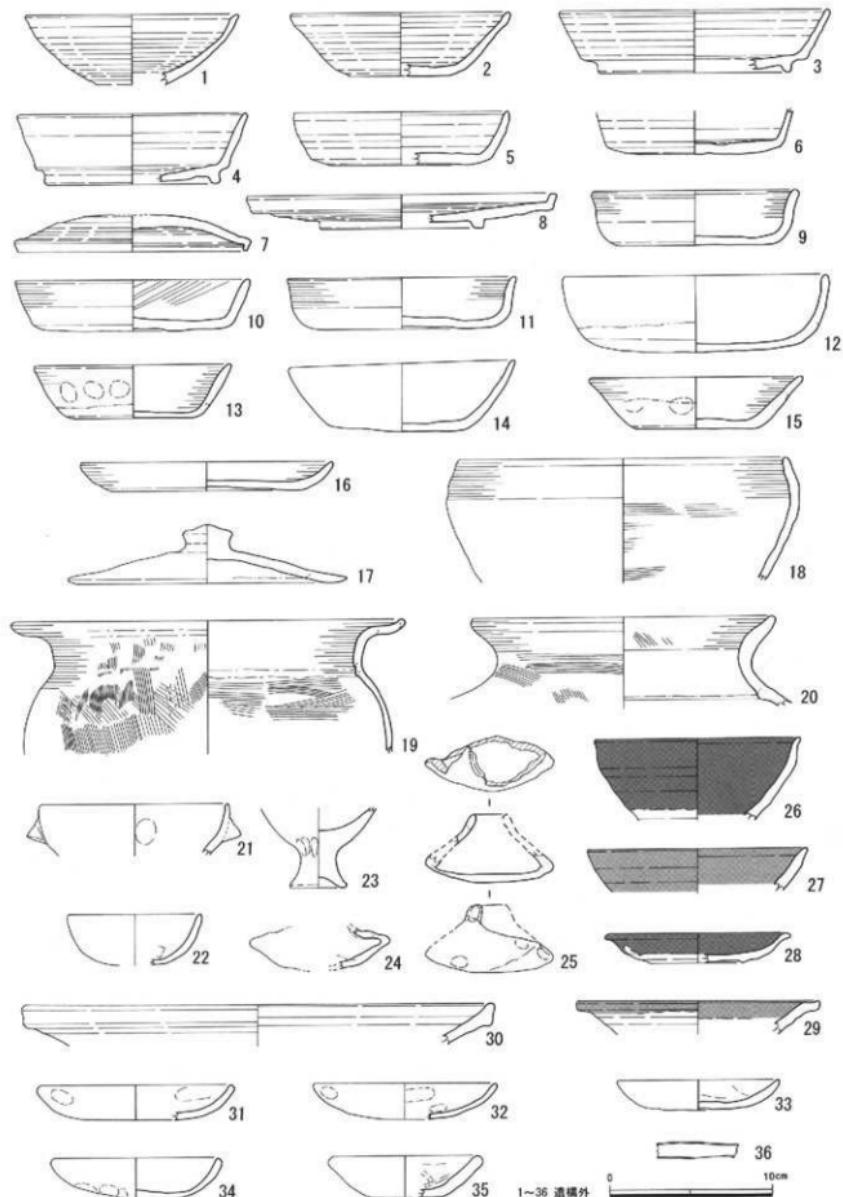
第158図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(27) II区第1面遺構出土土器



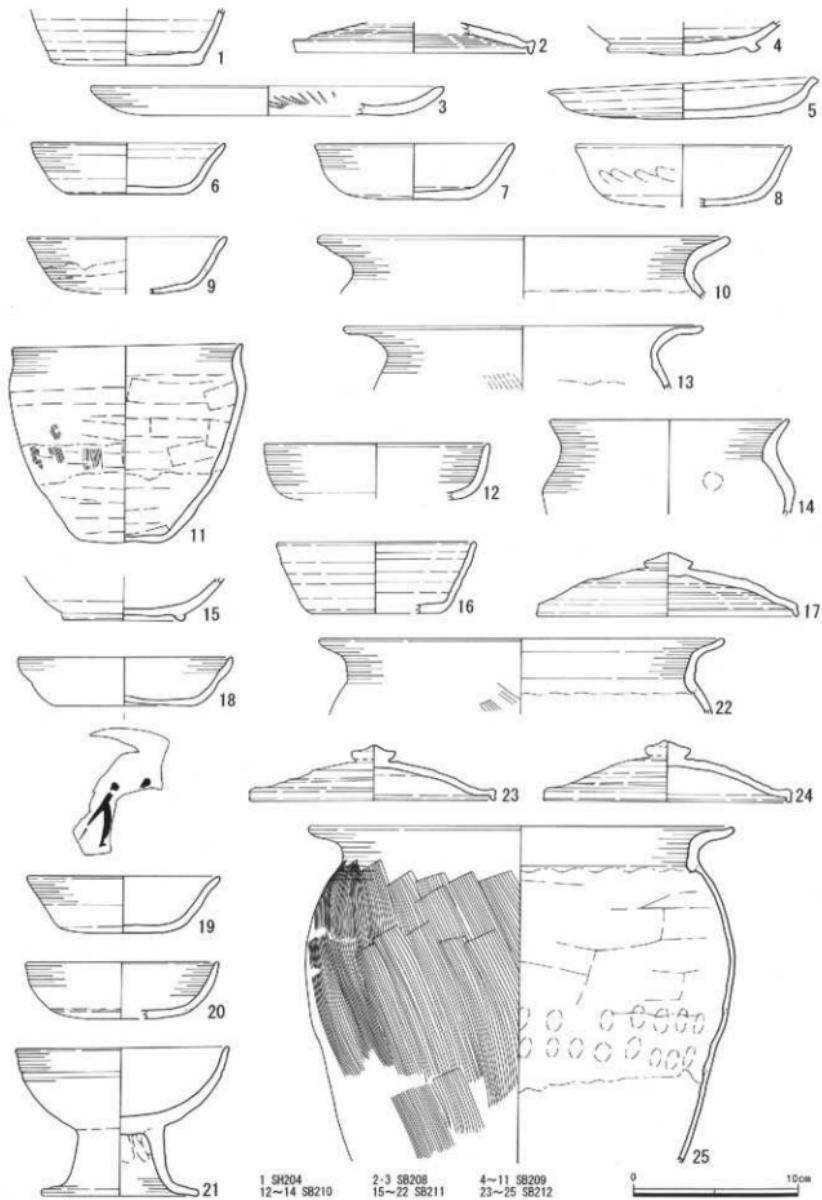
第159図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(28) II区第1面遺構出土器



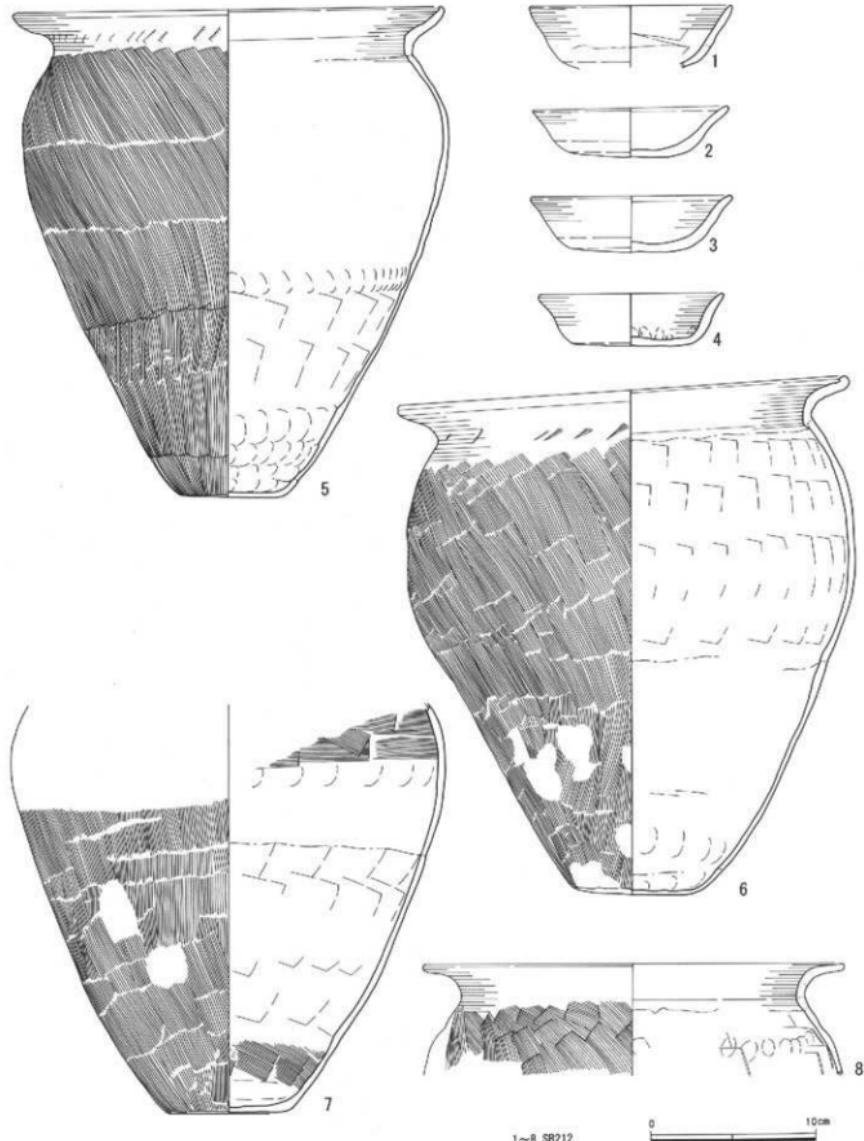
第160図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(29) II区第1面遺構出土土器



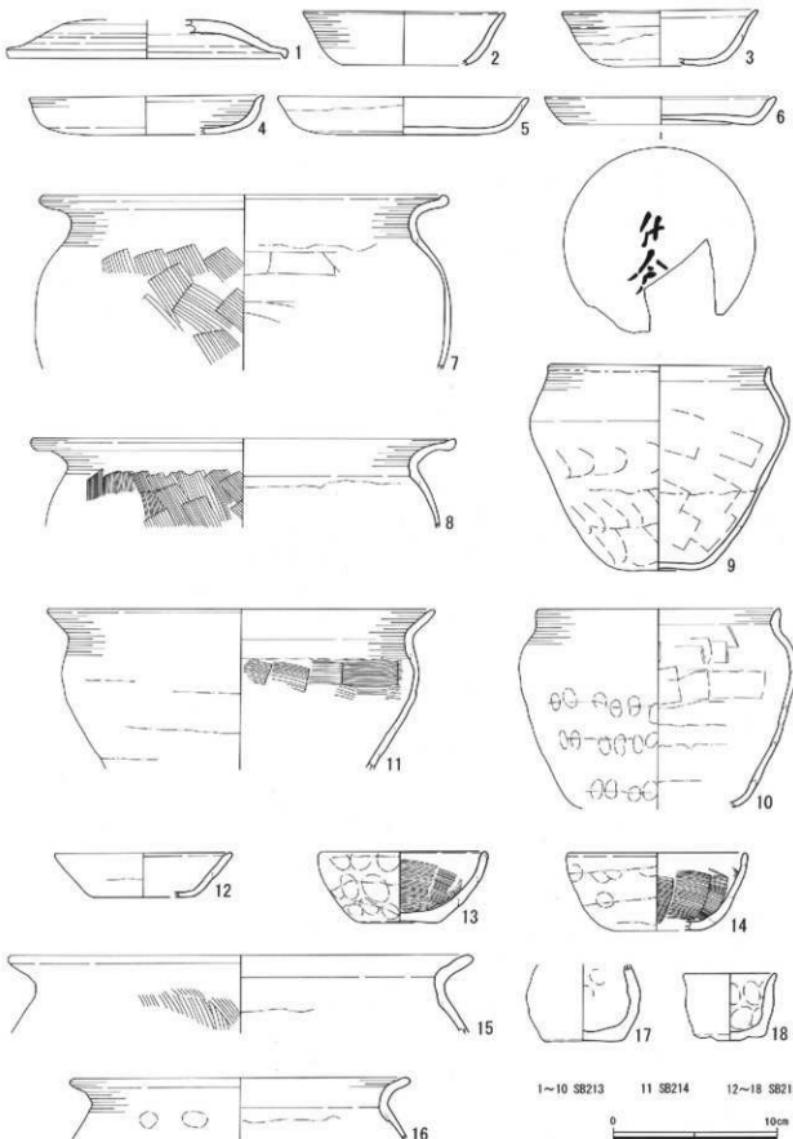
第161図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(30) II区遺構外出土土器



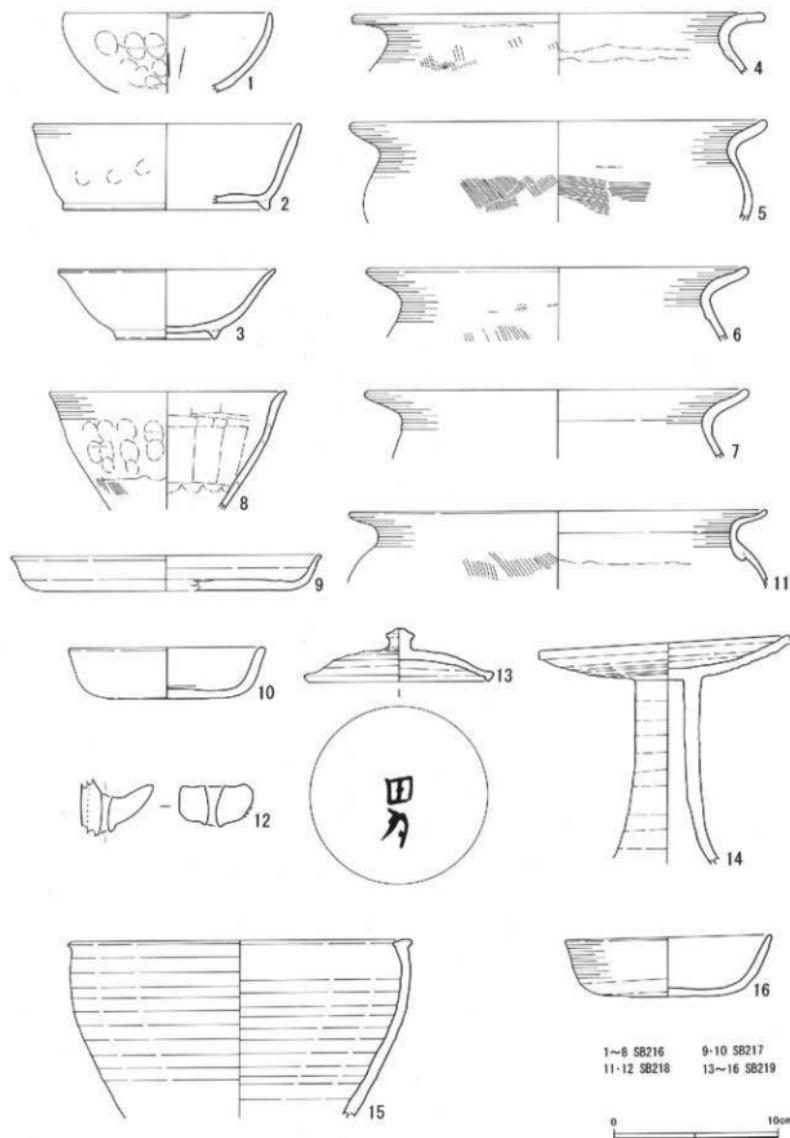
第162図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(31) Ⅲ区第2面遺構出土土器



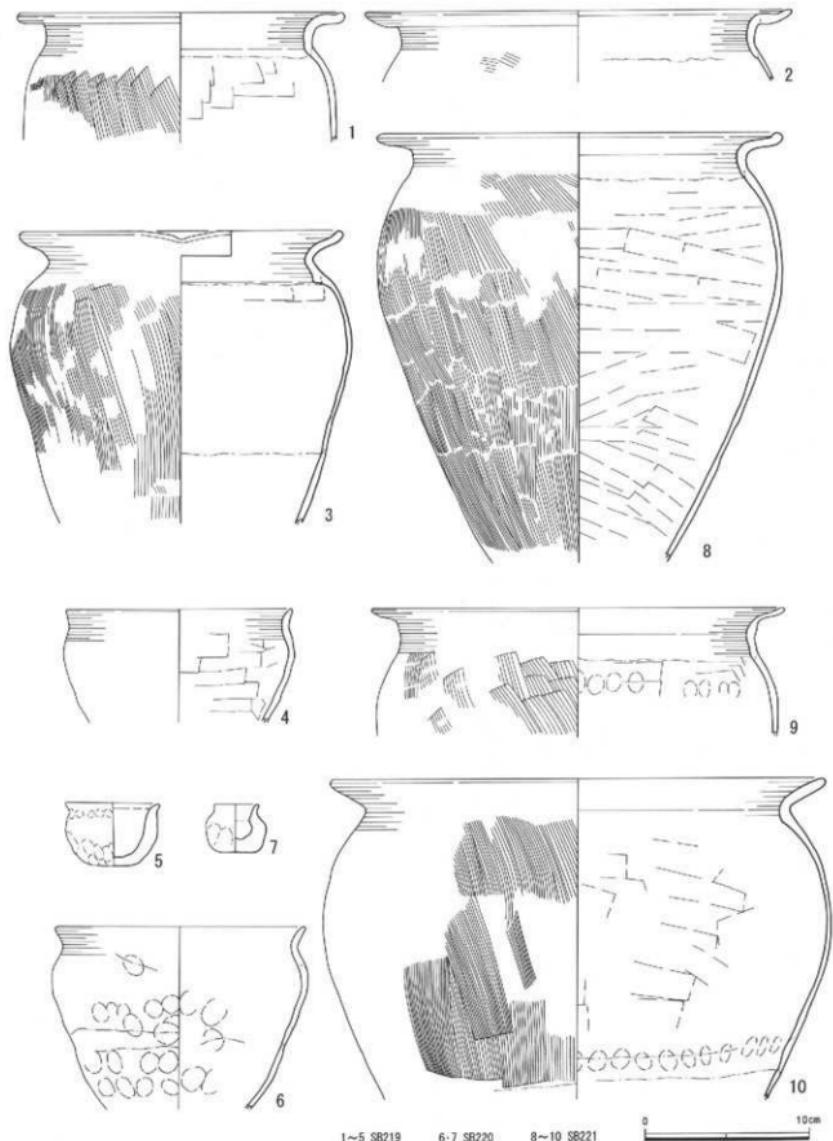
第163図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(32) III区第2面遺構出土土器



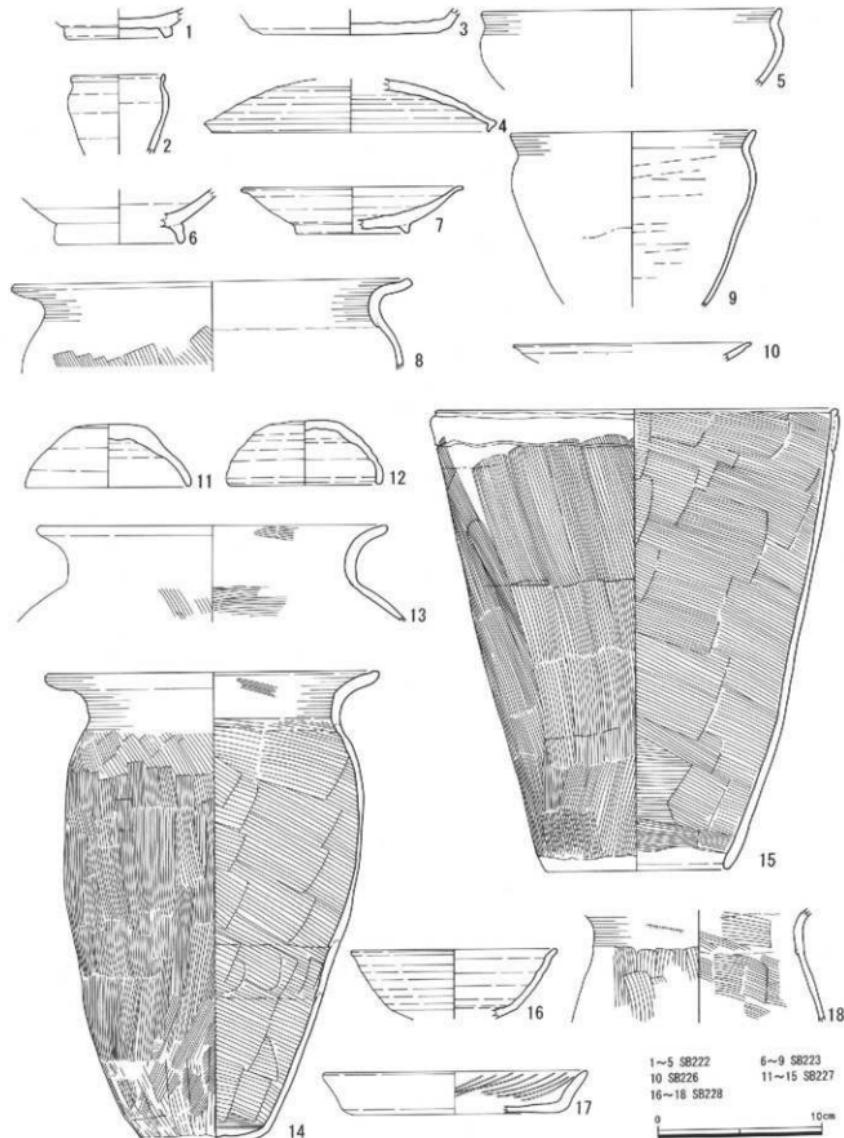
第164図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(33) Ⅲ区第2面遺構出土土器



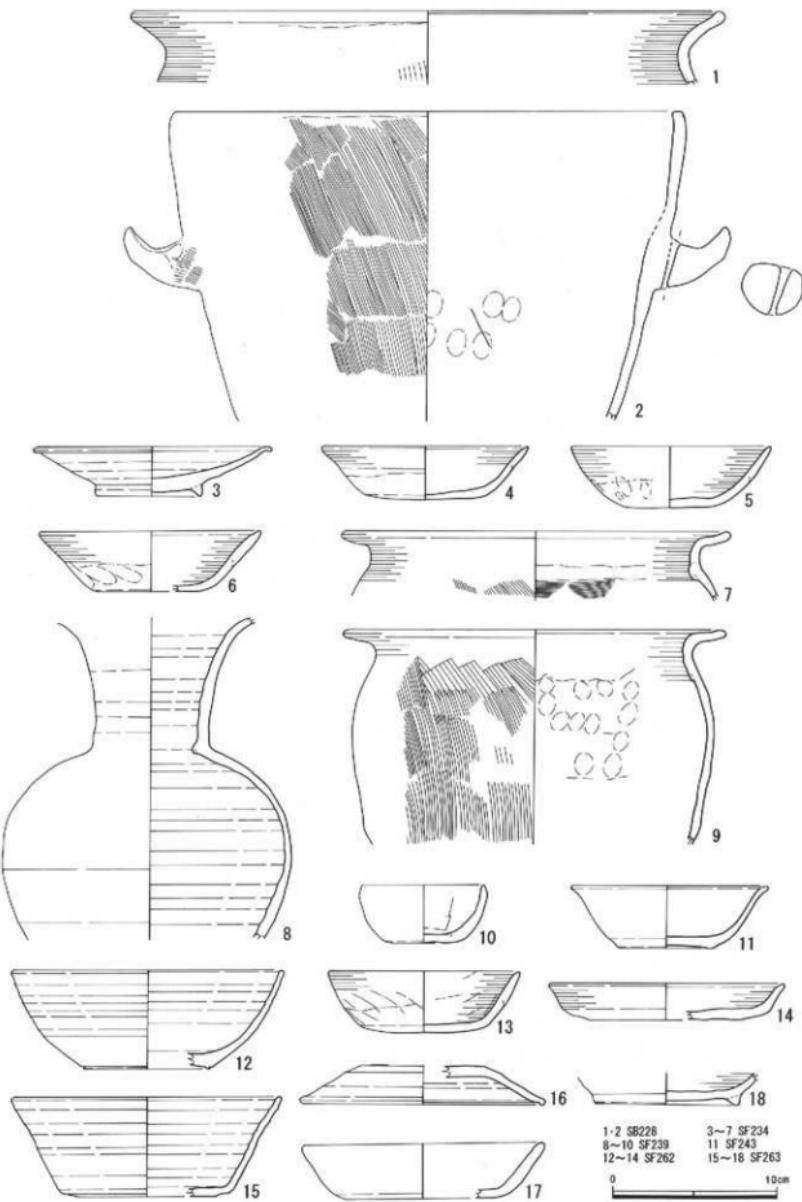
第165図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(34) Ⅲ区第2面遺構出土土器



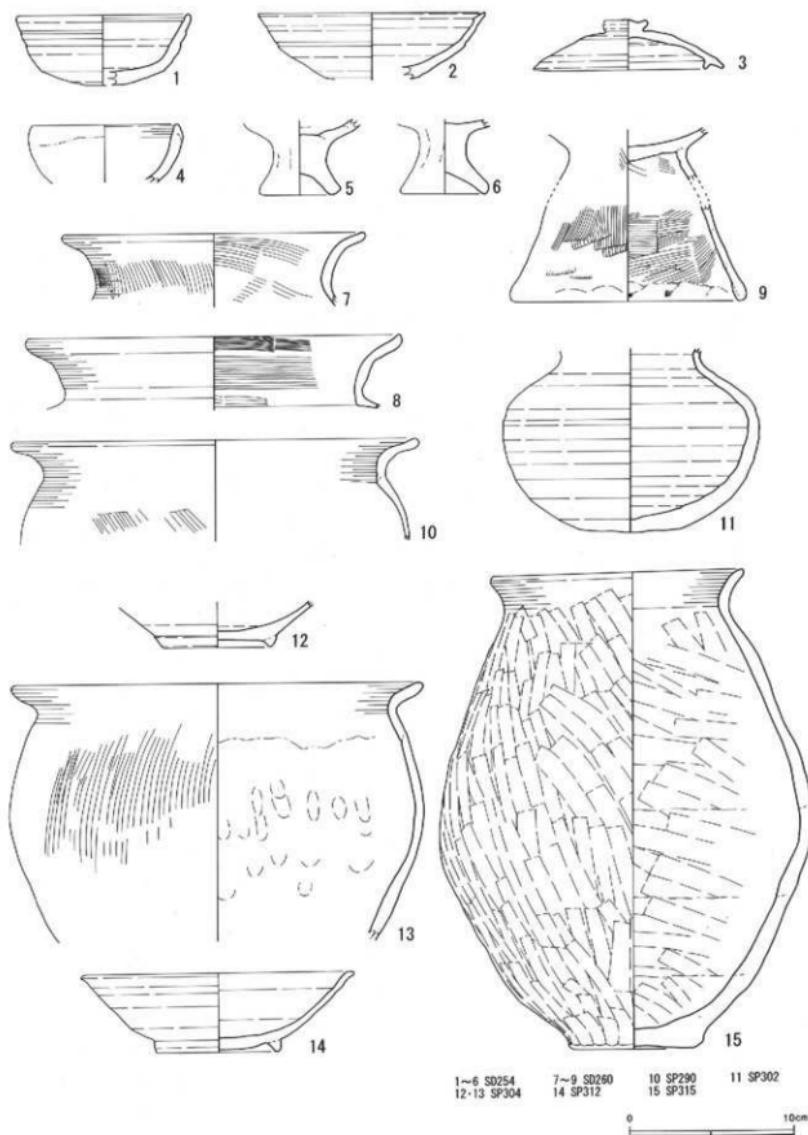
第166図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(35) III区第2面遺構出土土器



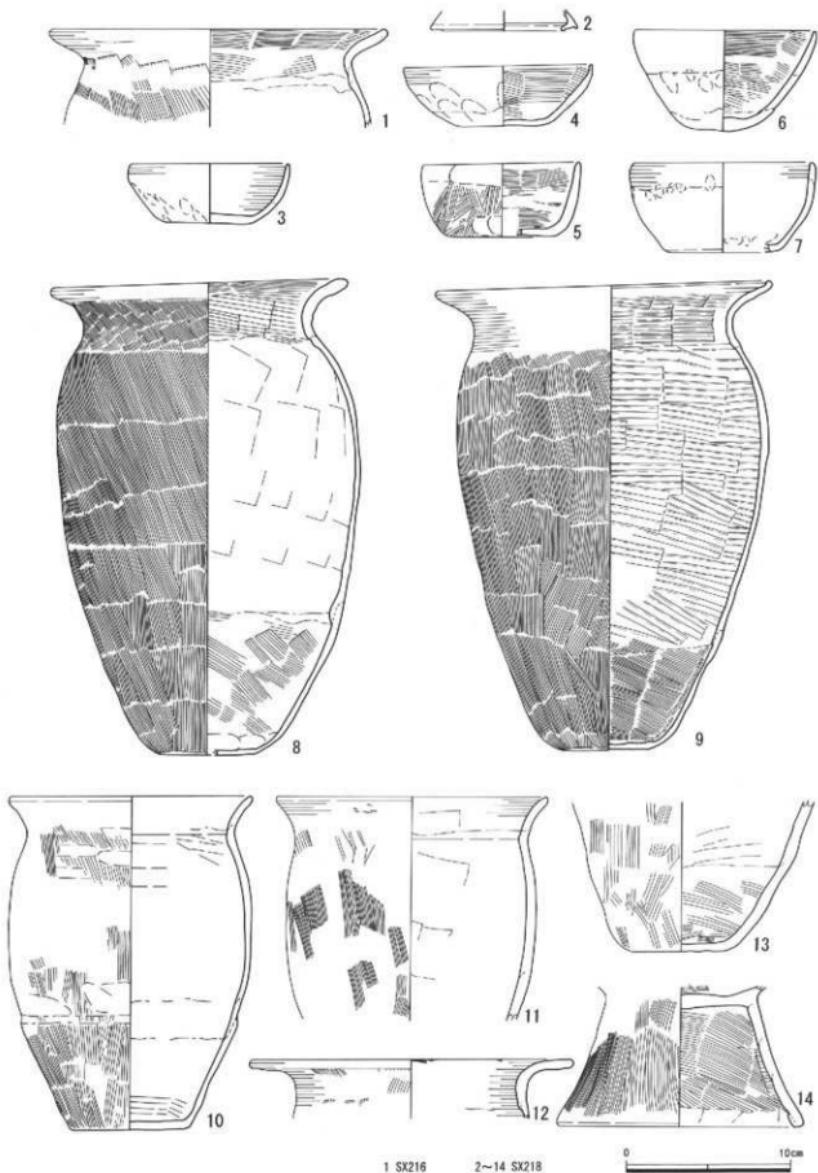
第167図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(36) III区第2面遺構出土土器



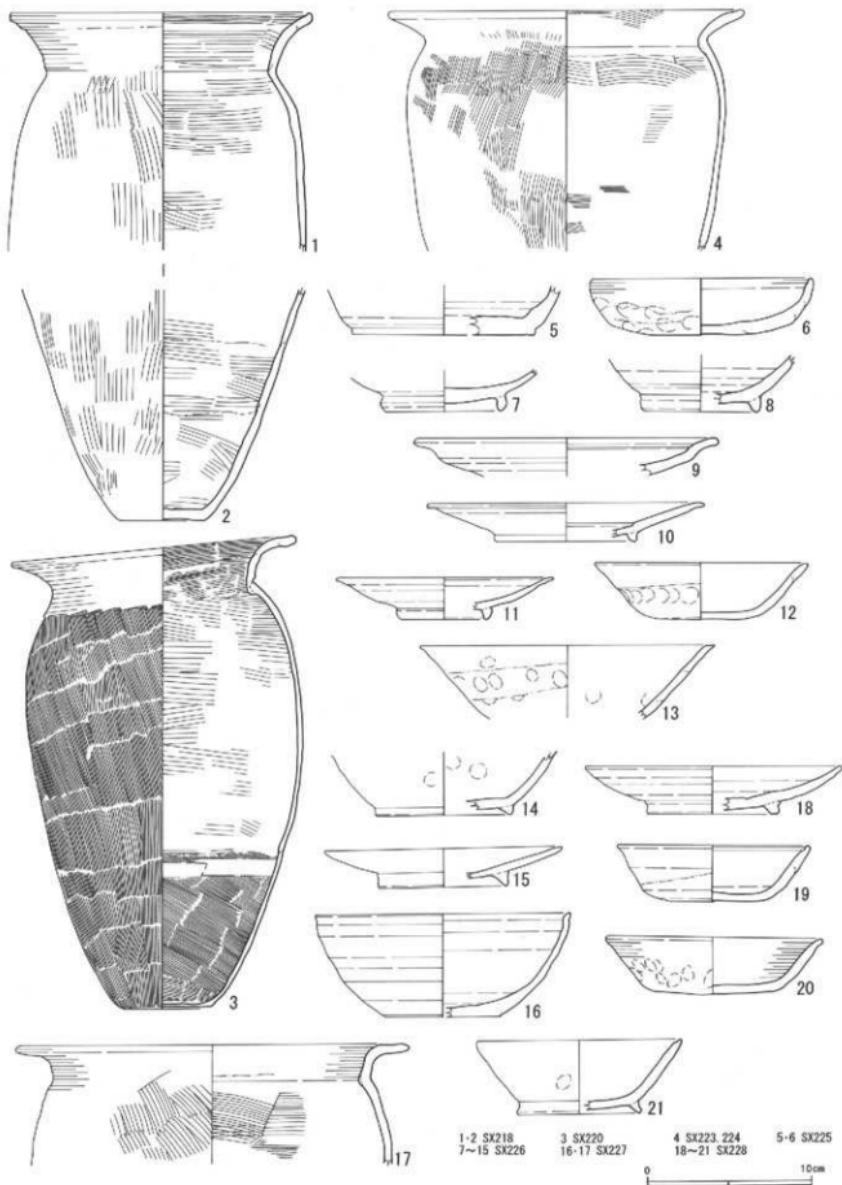
第168図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(37) III区第2面遺構出土土器



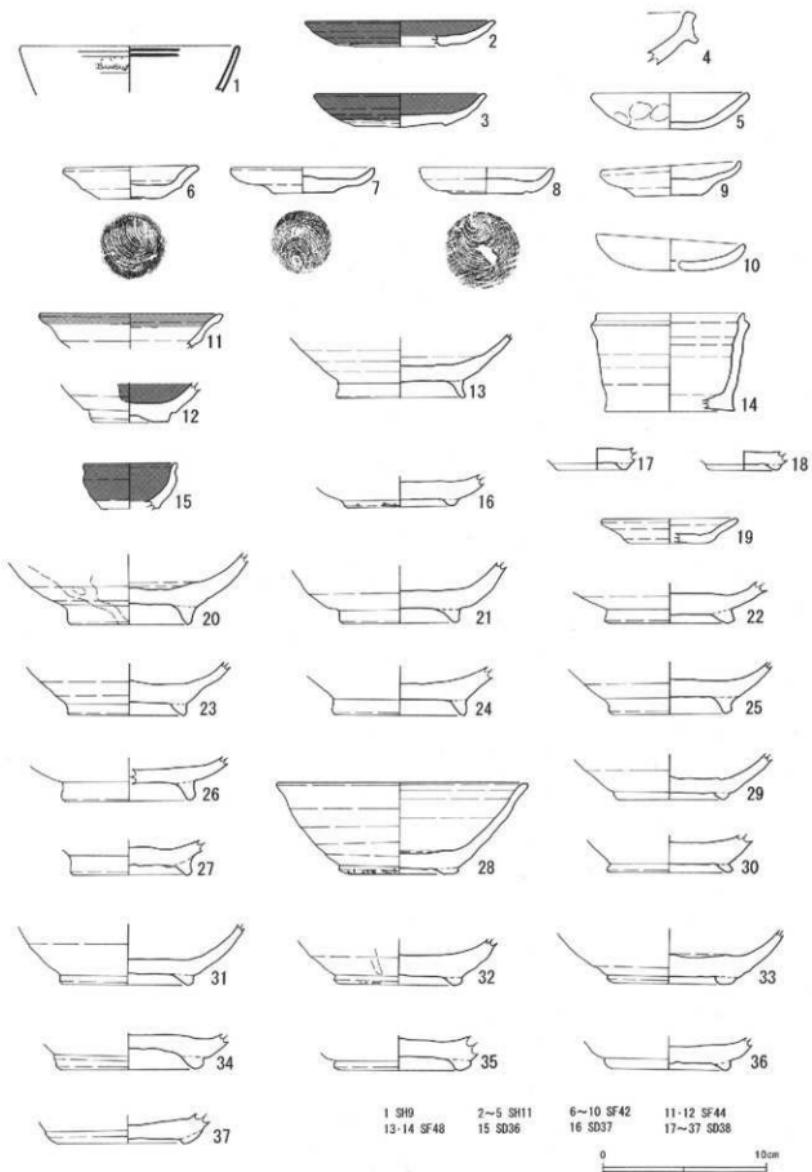
第169図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(38) Ⅲ区第2面遺構出土土器



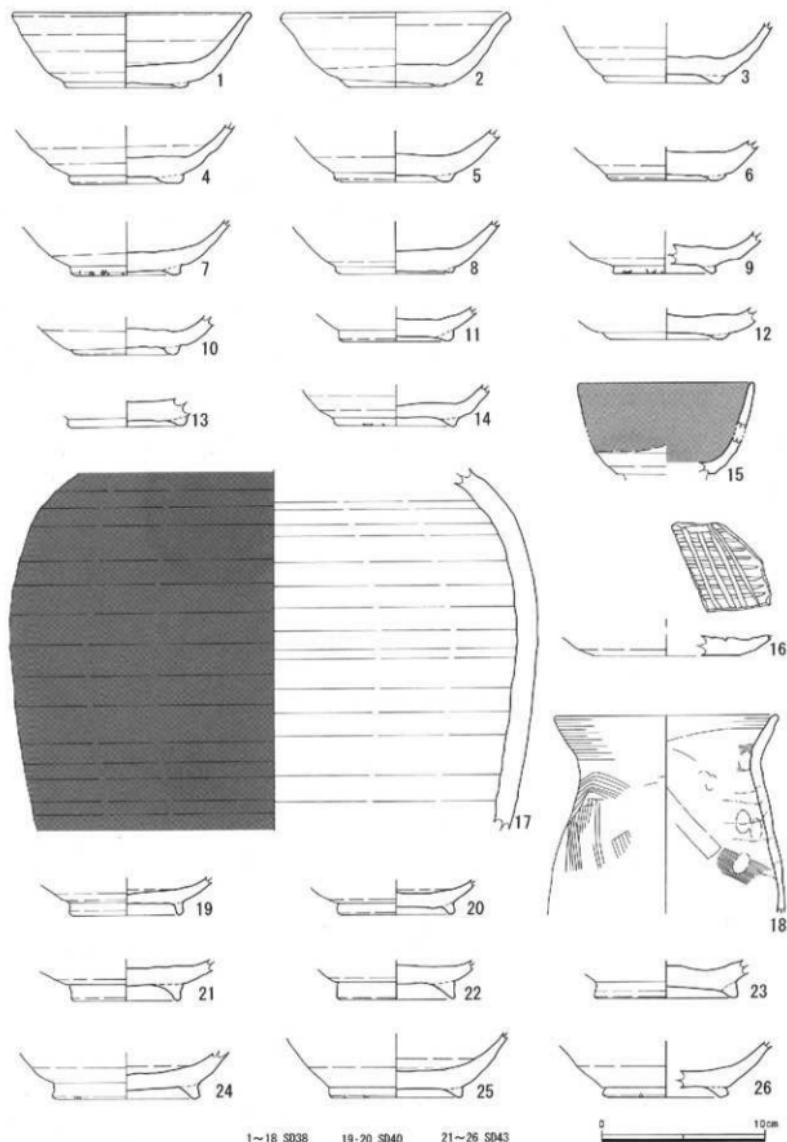
第170図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(39) Ⅲ区第2面遺構出土土器



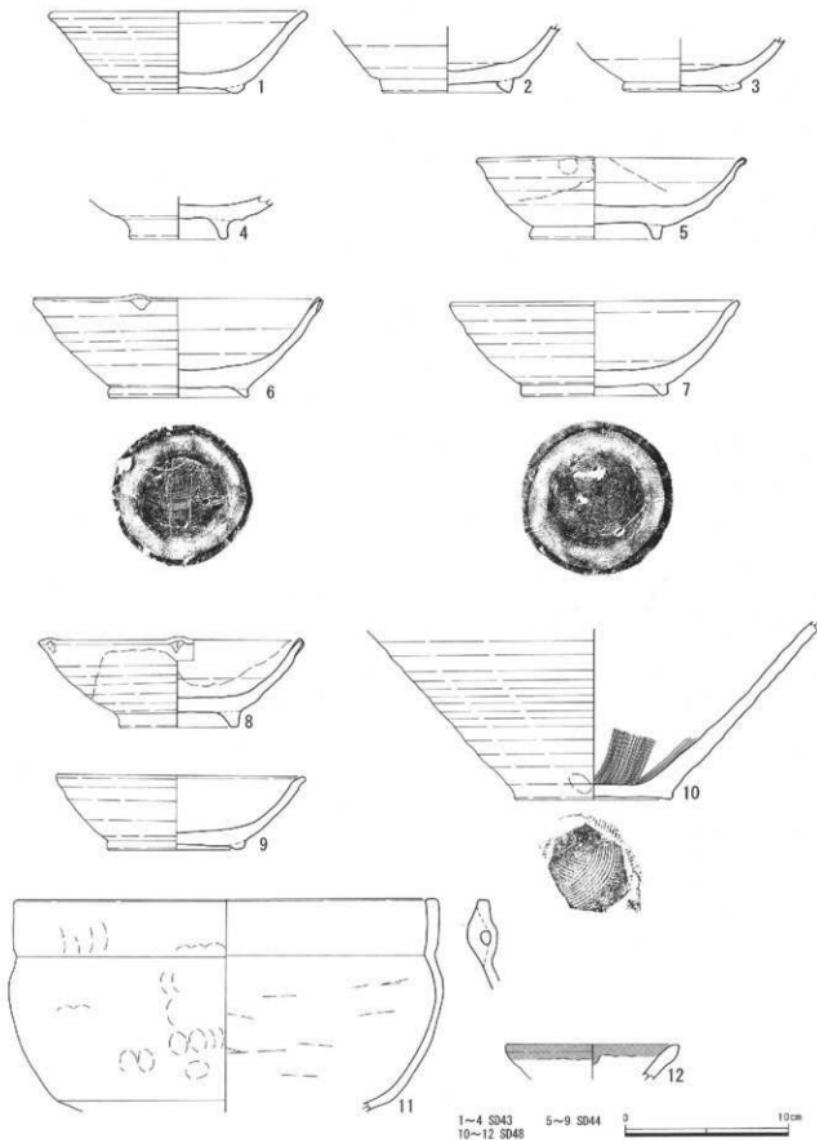
第171図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(40) Ⅲ区第2面遺構出土土器



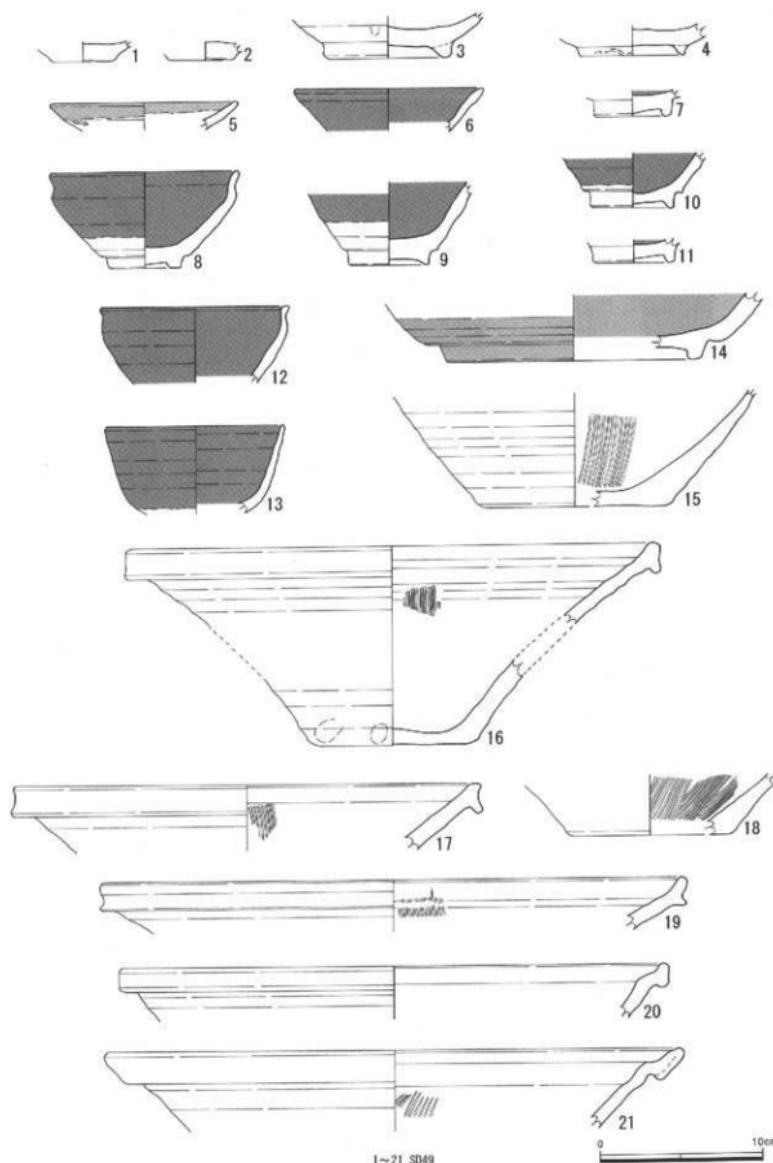
第172図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(41) III区第1面遺構出土土器



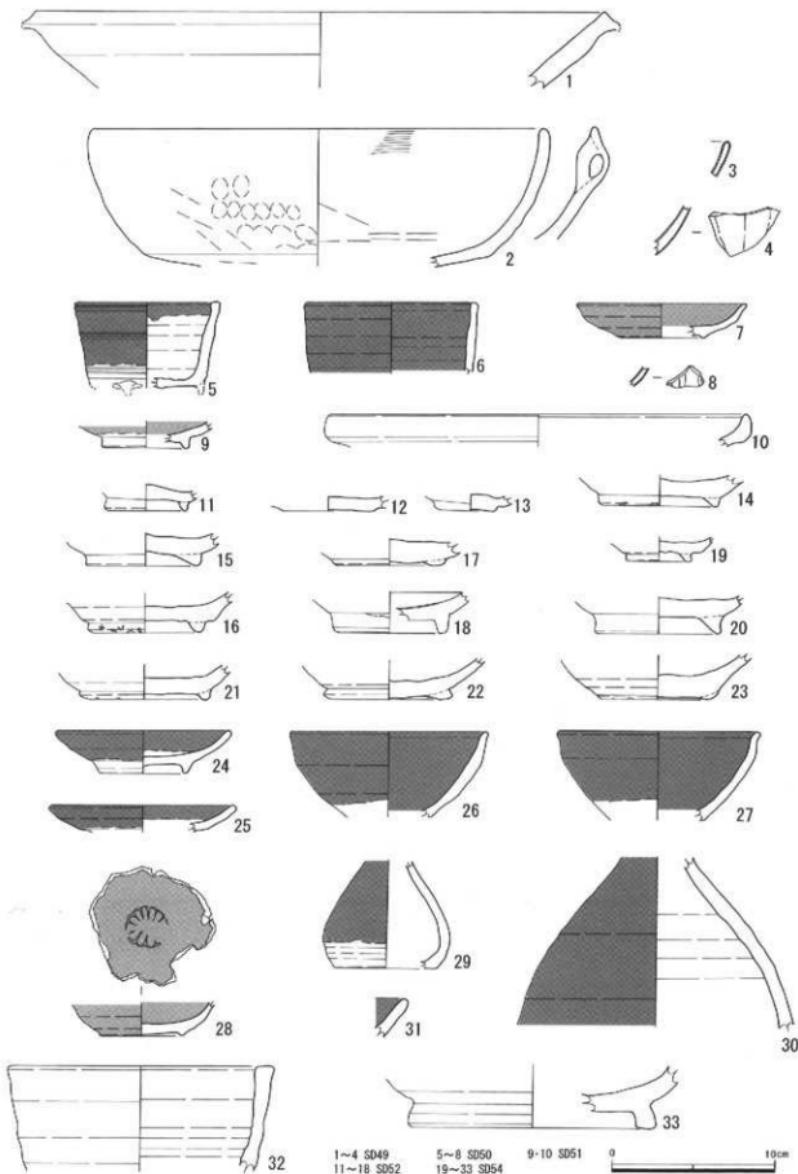
第173図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(42) Ⅲ区第1面遺構出土土器



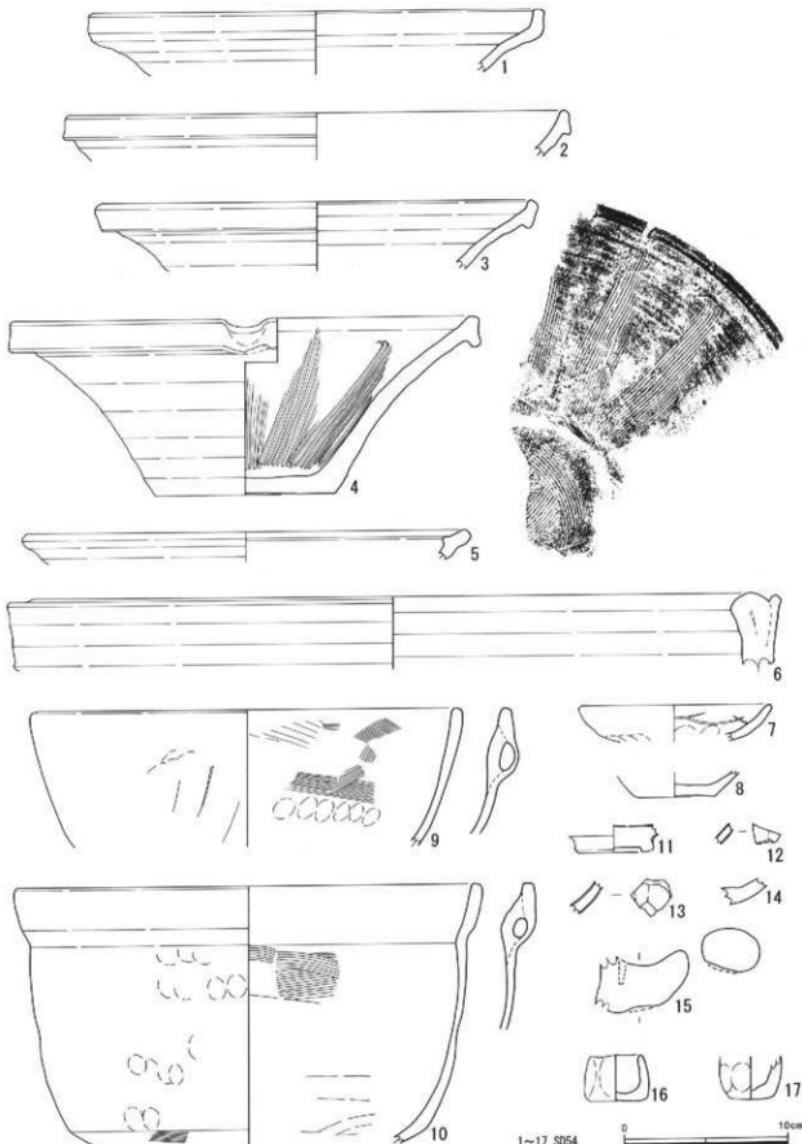
第174図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(43) Ⅲ区第1面遺構出土土器



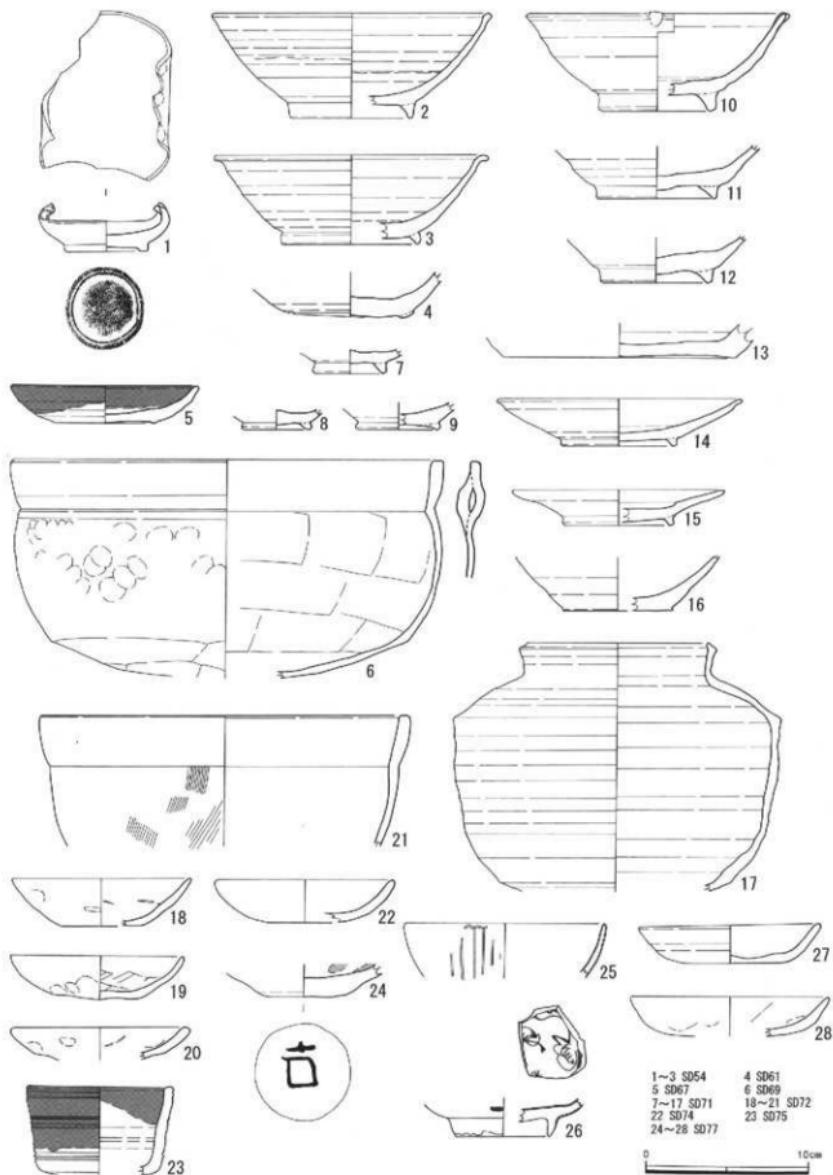
第175図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(44) Ⅲ区第1面遺構出土土器



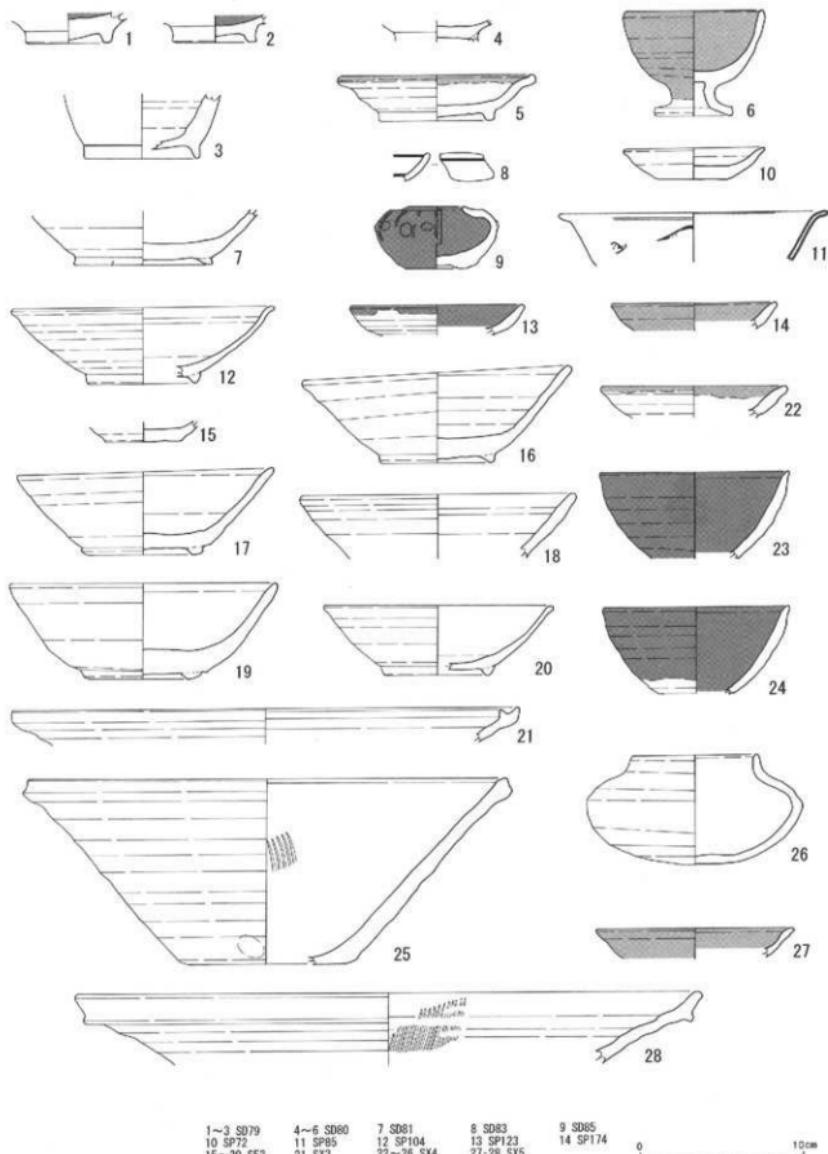
第176図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(45) Ⅲ区第1面遺構出土土器



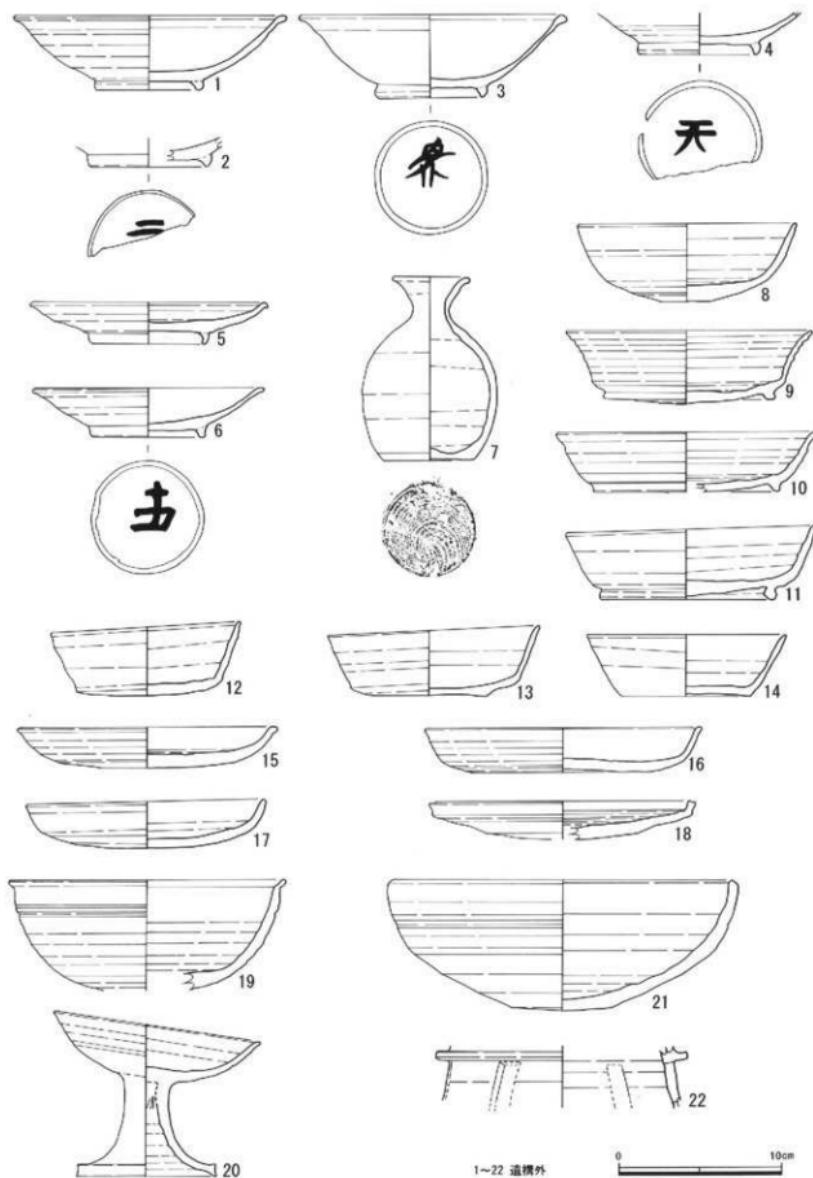
第177図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(46) Ⅲ区第1面遺構出土土器



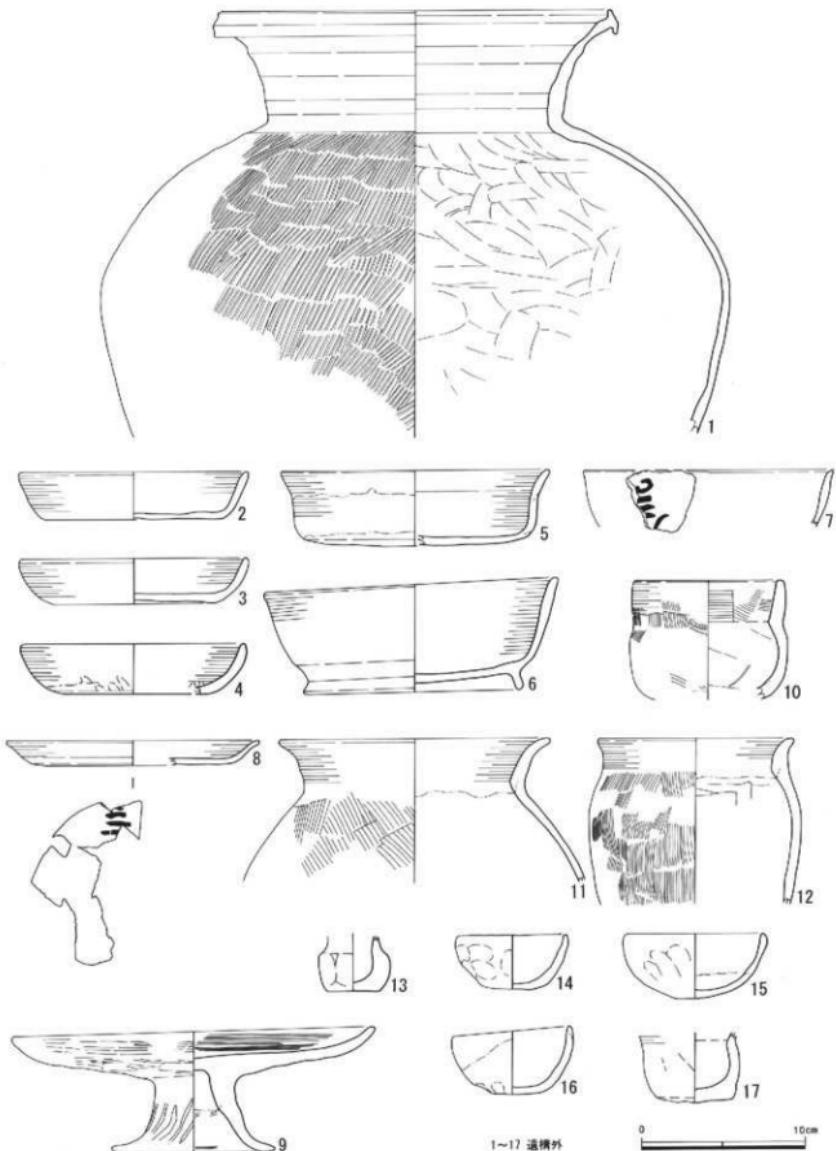
第178図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(47) Ⅲ区第1面遺構出土土器



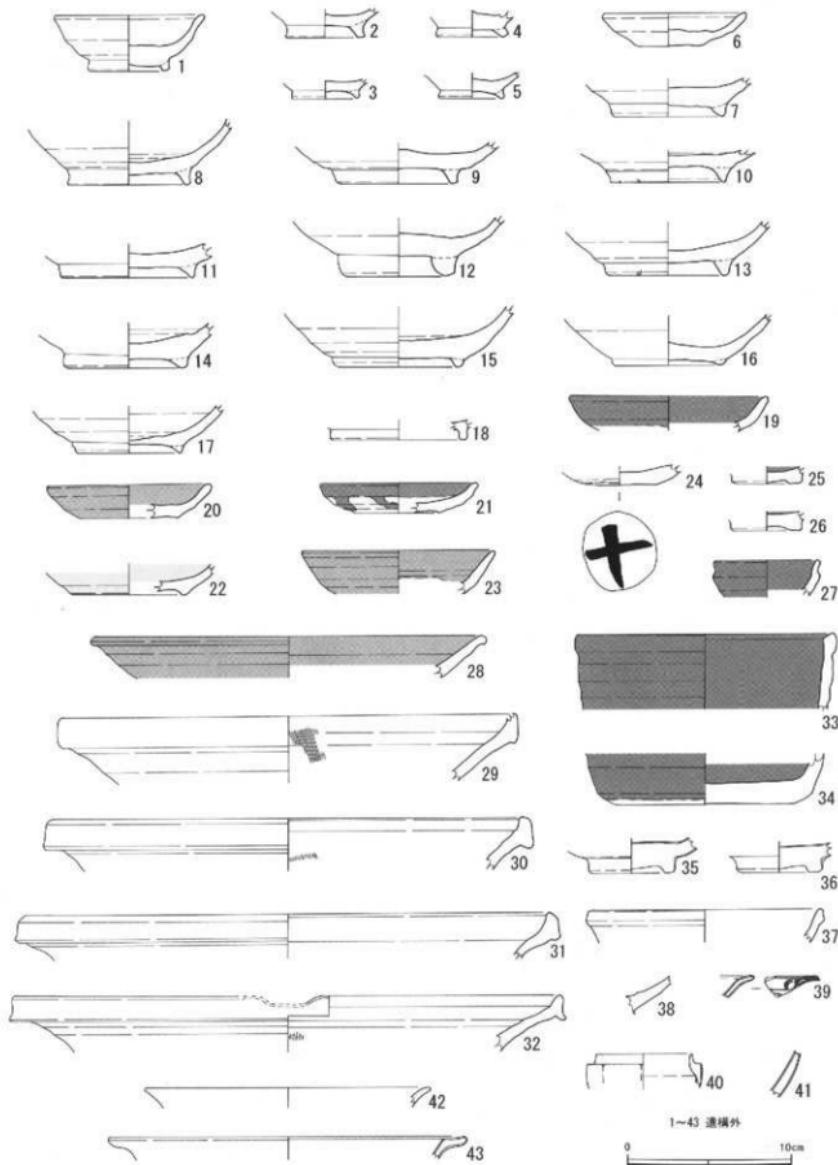
第179図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(48) III区第1面遺構出土土器



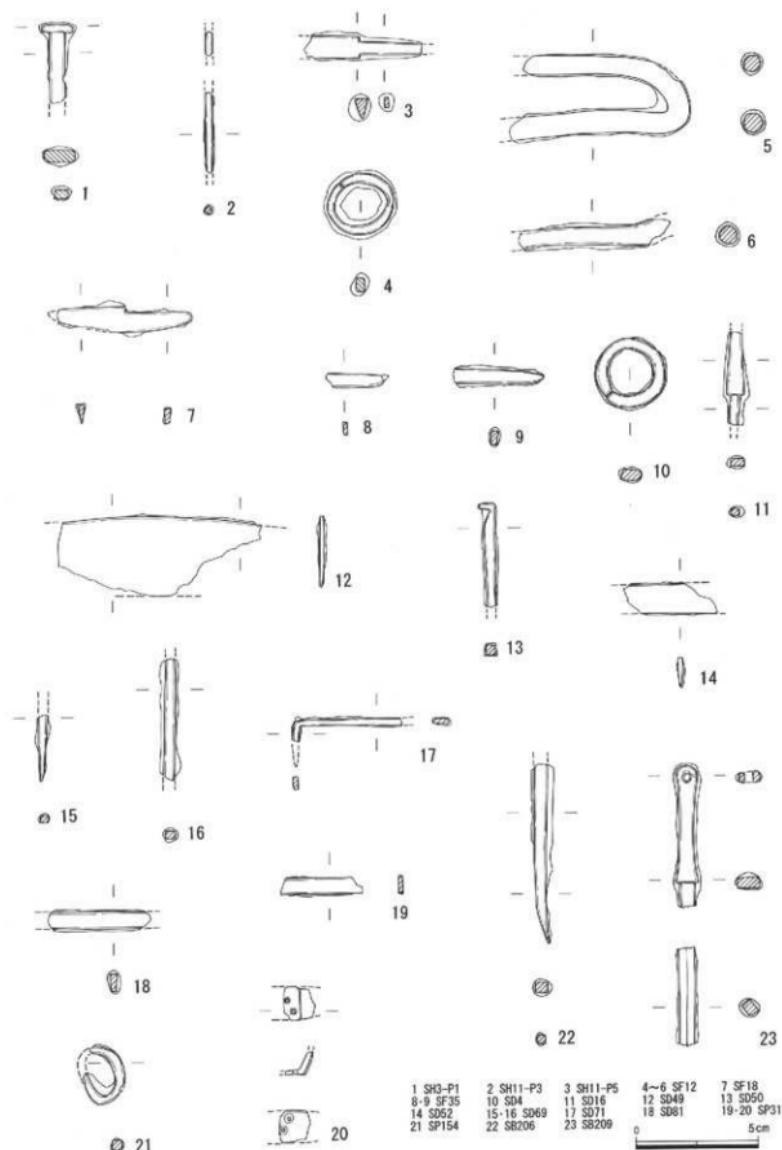
第180図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(49) III区遺構外出土土器



第181図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(50) Ⅲ区遺構外出土土器



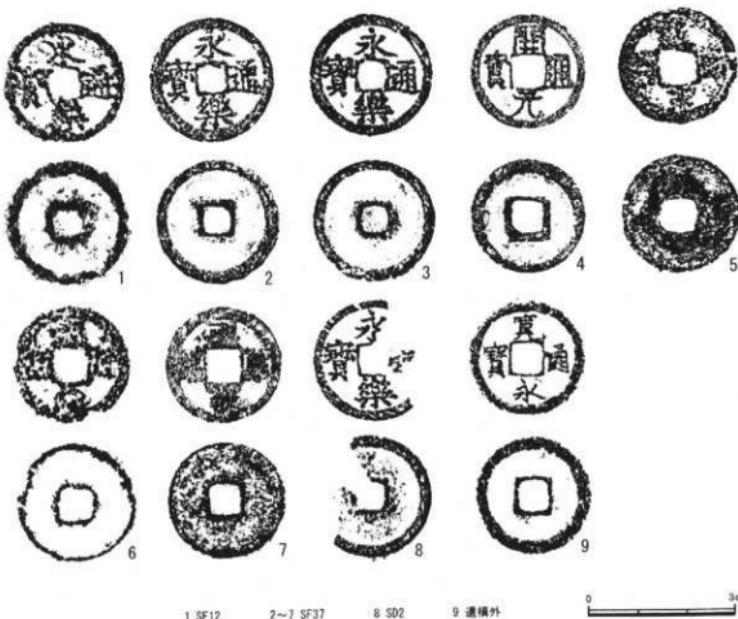
第182図 立井若林遺跡出土遺物実測図(51) III区遺構外出土土器



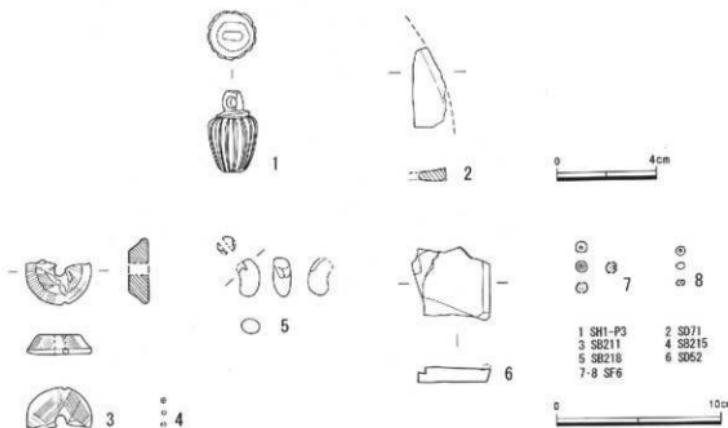
第183図 笠井若林跡出土遺物実測図(52) 金属製品



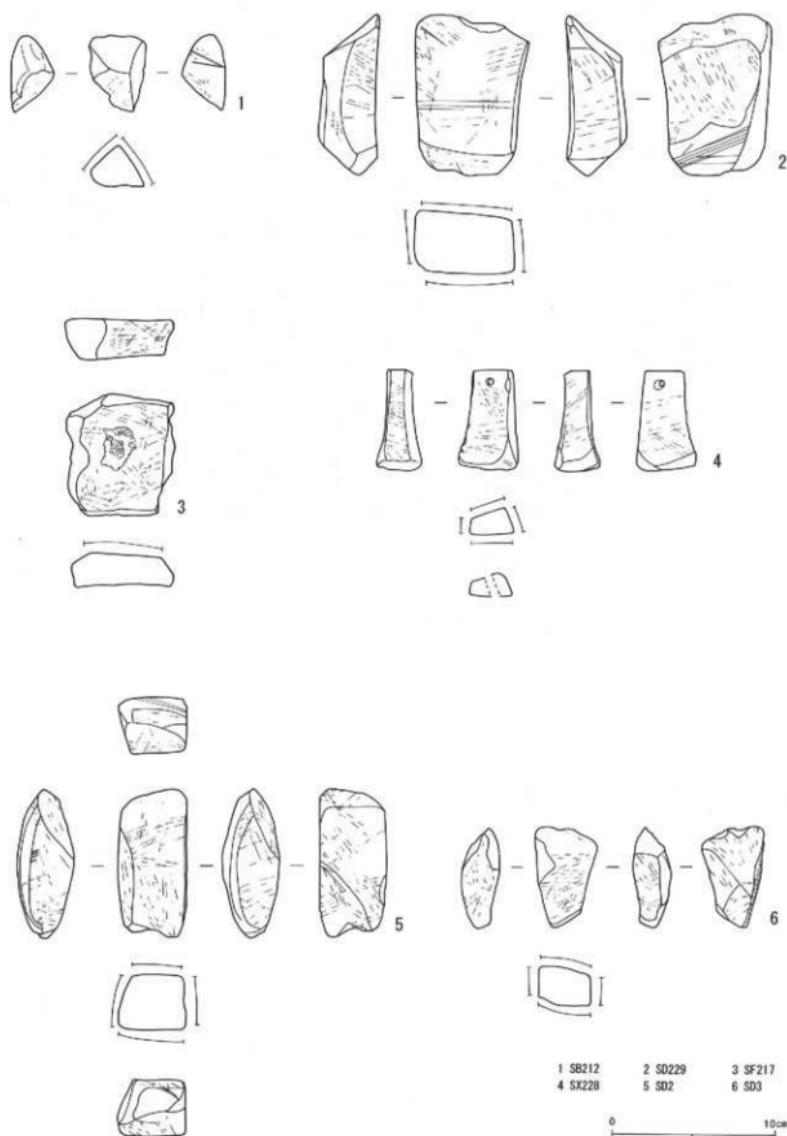
第184図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(53) 金属製品



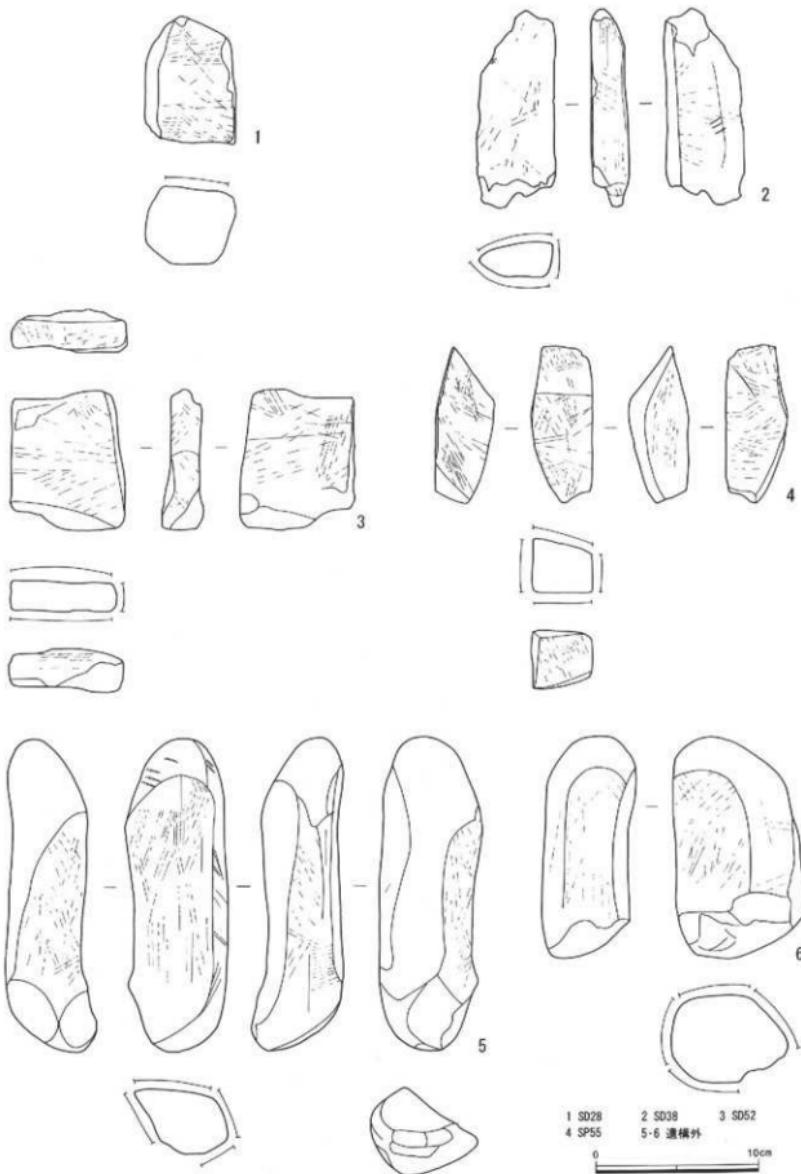
第185図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(54) 錢貨



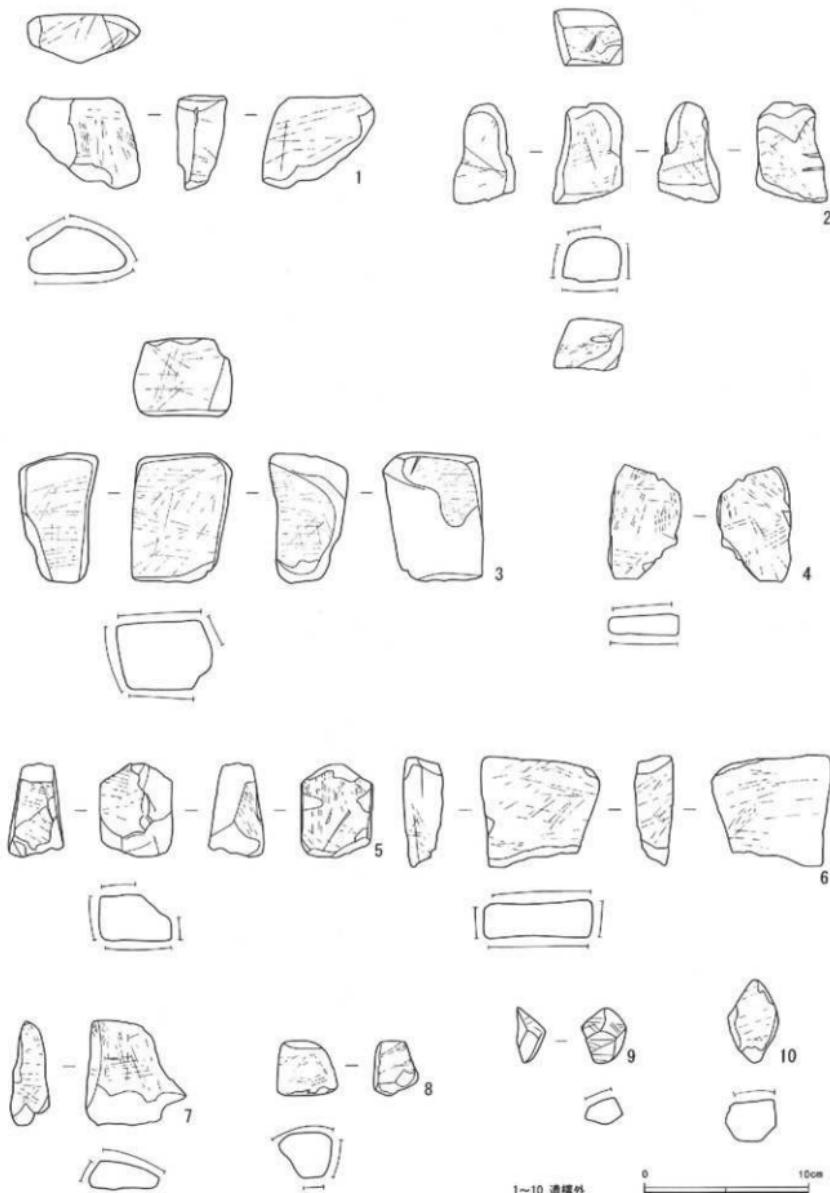
第186図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(55) 銅製品・石製品等



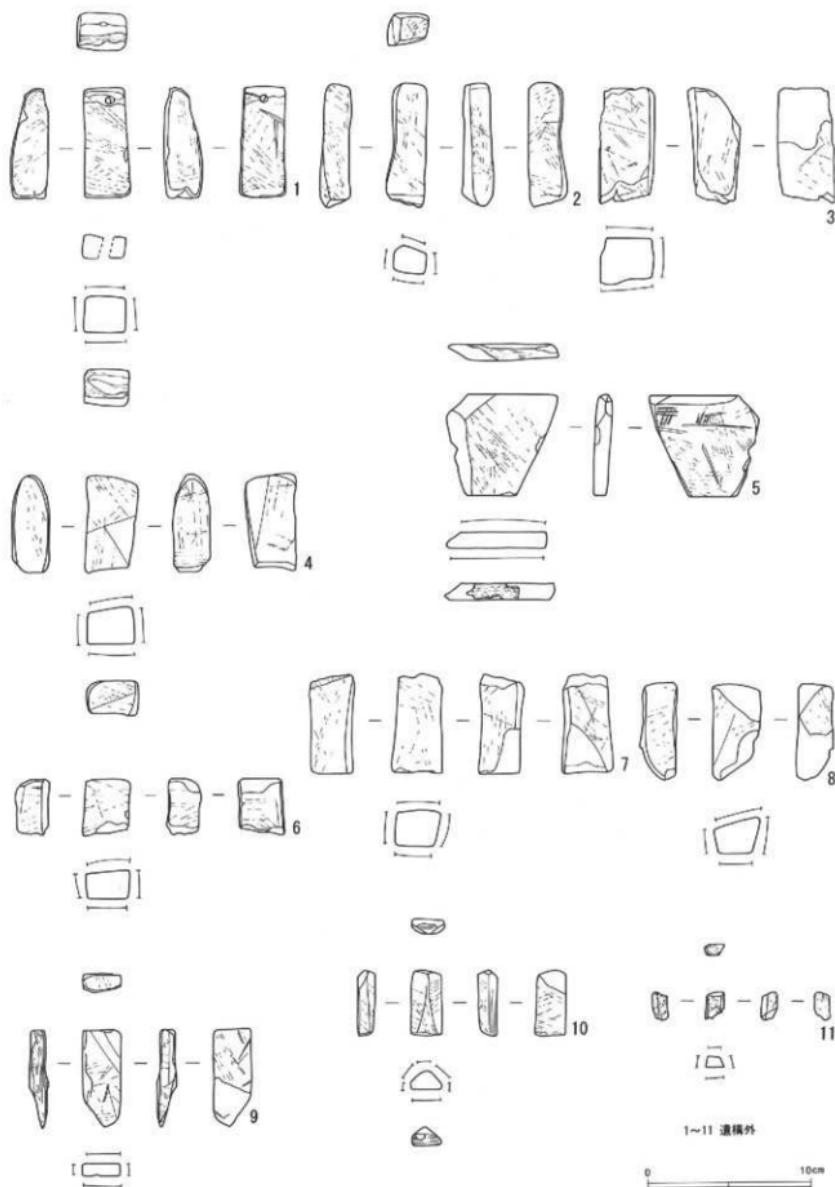
第187図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(56) 石製品（砾石）



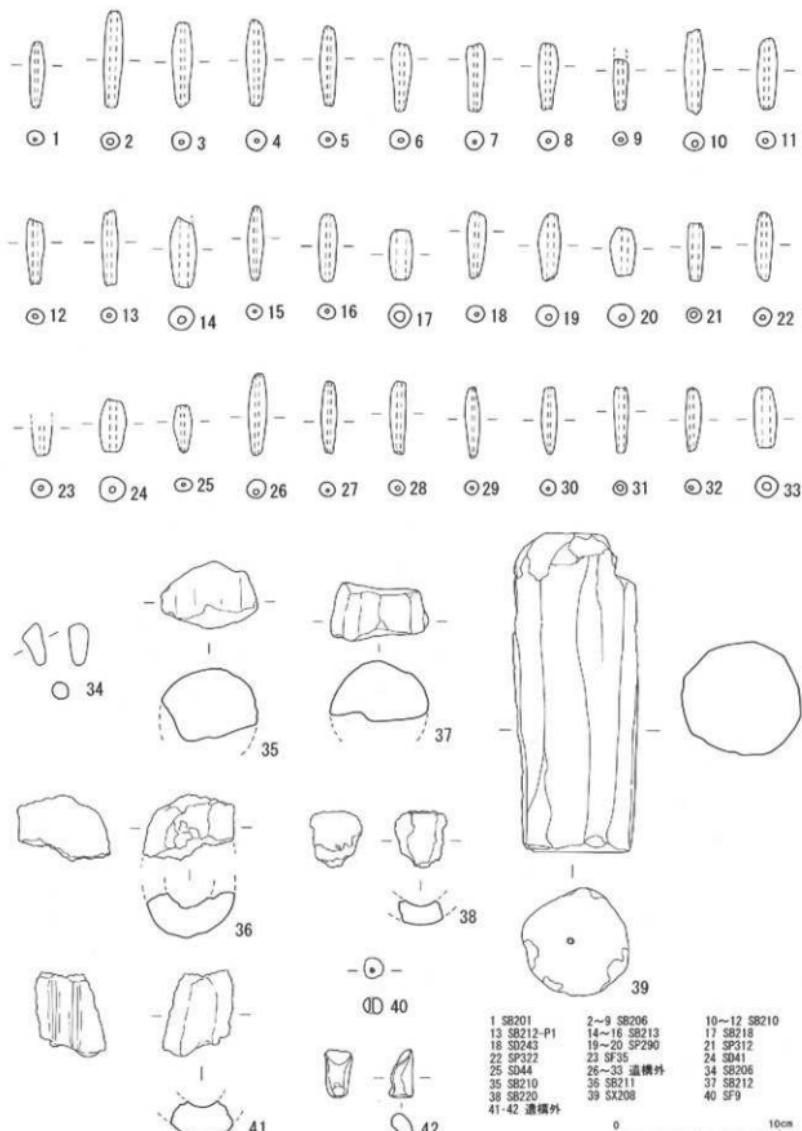
第188図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(57) 石製品(砥石)



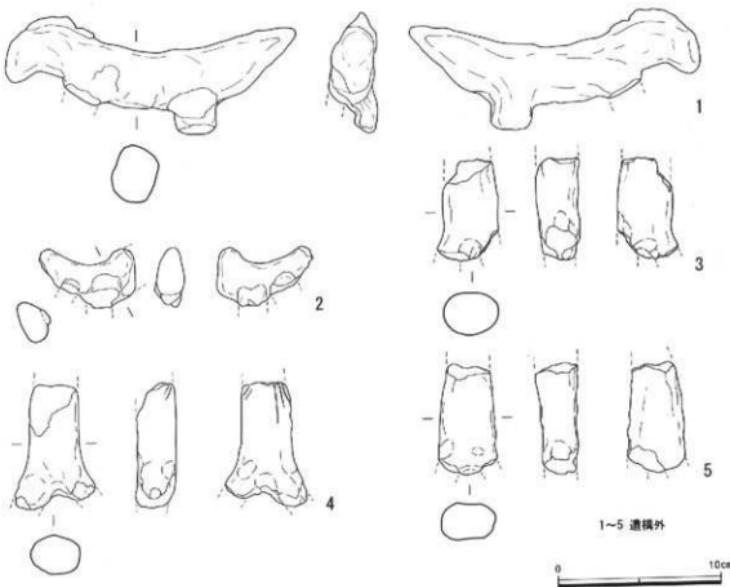
第189図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(58) 石製品(砾石)



第190図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(59) 石製品(砥石)



第191図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(60) 土製品



第192図 笠井若林遺跡出土遺物実測図(61) 土製品

表14 笠井若林遺跡 土器一覧表

回 数	字 高 度 直 径 長 さ	直 径 横 幅	縁 幅	縁 種	法表(cm)				色調	輪	底 付 等	底 存 率	反 転 率	備 考
					山 頂	最大径 底 幅	底 幅	高 台 幅	器 高 さ	つまみ 棒				
1 1	I	SB205	直底器	有合环	(6.0)		(8.2)	8.5			灰		1/2	○
1 2	I	SB205	直底器	縫合环	(11.0)		(9.1)	4.1			灰		1/4	○
1 3	I	SB205	直底器	縫	(11.0)		(11.3)	1.7			青灰		1/10	○
1 4	I	SB205	直底器	縫	(9.4)				2.0		灰白	わざかに底存		
1 5	I	SN205	上部縫	縫	(8.4)				2.2		淡黄緑	1%	○	
1 6	I	SB205	土師器	縫	(8.5)						淡黄緑	口縁1/10	○	
1 7	I	SB205	土師器	縫	(6.9)						淡黄緑	口縁1/10	○	
1 8	I	SB206	直底器	縫合环	(12.6)		(19.4)	4.0			灰白	1/3	○	
1 9	53	I	SB206	直底器	縫合环	(15.8)	12.6	5.7			灰	4/5		
1 10	53	I	SB206	直底器	縫合环	(12.0)	10.5	4.0			灰白	3/5	○	
1 11	I	R206	直底器	縫合环	(11.9)	(8.8)	3.9				灰白	1/2	○	
1 12	53	I	SB206	直底器	縫合环	(10.8)	7.4	3.9			灰	2/3		
1 13	53	I	SB206	直底器	(8.5)	(6.4)	4.5				綠灰	1/2	○	
1 14	I	SB206	直底器	縫合环	(10.2)	(9.7)					灰白	1/6		
1 15	53	I	SB206	直底器	縫	(3.4)			2.5 (2.3)		灰白	1/3	○	
1 16	53	I	SB206	直底器	縫	(3.3)			2.7		灰白	1/2	○	
1 17	53	I	SB206	直底器	縫	(2.7)			2.1	2.5	灰白	完形		
1 18	I	SB206	直底器	縫	(6.7)				4.6	1.9	灰	1/5	○	
1 19	53	I	SB206	直底器	縫	14.4					灰白	ほぼ完形 (つまみ支脚)		
1 20	53	I	SB206	直底器	縫	17.3			2.4		灰白	5/6		
1 21	54	I	SB206	直底器	縫	16.1			3.9		青灰	5/6		
1 22	53	I	SB206	直底器	縫	16.9			3.4		綠灰	2/3		
1 23	I	SB206	直底器	縫	(6.3)						灰	1/6	○	
1 24	54	I	SB206	直底器	縫	15.2			2.0		灰白	2/5		
1 25	I	SB206	直底器	直(有台脚)	(22.5)						灰白	3/5	○	
2 1	54	I	SB206	直底器	縫	(5.6)	(8.3)	3.8			綠灰	4/5	○	
2 2	54	I	SB206	直底器	縫	(5.6)	(9.6)	2.6			灰白	2/3	○	
2 3	54	I	SB206	直底器	縫(高脚か)	15.8					灰白	3/4		
2 4	I	SB206	直底器	縫(高脚か)	(9.0)						灰	2/5	○	
2 5	I	SB206	直底器	縫(高脚か)	(22.3)						灰	2/5	○	
2 6	54	I	SB206	直底器	円面鏡						灰			
2 7	54	I	SB206	土師器	縫	13.1	10.3	3.2			縫	1/2	丹波	
2 8	54	I	SB206	土師器	縫	(12.7)	9.0	3.6			縫	1/2	○ 丹波 番号?	
2 9	I	SB206	土師器	縫	(13.3)	(9.2)	3.3				縫	1/4	○ 丹波	
2 10	I	SB206	土師器	縫	(12.3)	8.6					縫	2/5	○ 丹波	
2 11	54	I	SB206	土師器	縫	(12.6)	(8.4)	4.1			淡黄緑	1/6	○ 丹波	
2 12	54	I	SB206	土師器	縫	(10.2)	(8.3)	3.3			赤褐色	1/2	○ 片倉	
2 13	55	I	SB206	土師器	有合环	15.5	8.6	7.2			縫	○ 2/3		
2 14	54	I	SB206	土師器	有合环	15.6	10.6	8.8			縫	3/4	丹波	
2 15	I	SB206	土師器	有合环	(14.5)		(9.5)	6.6			縫	2/5	丹波	
2 16	55	I	SB206	土師器	縫	(15.4)		5.6	2.7		縫	1/4	○	
2 17	55	I	SB206	土師器	縫	(17.0)		3.4	2.7		縫	1/2	丹波	
2 18	I	SB206	土師器	縫	(16.1)	(12.8)	2.6				底白 明るい縫	○ 1/5	○ 丹波	
2 19	55	I	SB206	土師器	縫	14.7			2.2			ほぼ完形	丹波	
2 20	55	I	SB206	土師器	縫	14.7	13.6	1.9			縫	2/3	丹波	
2 21	55	I	SB206	土師器	縫	(20.3)	7.4	7.6			縫	1/3	○ 丹波	
2 22	55	I	SB206	土師器	台付縫	(14.0)	16.2				縫	○ 2/3	小型	
2 23	I	SB206	土師器	縫	(22.4)						にぶい縫	わざかに底存	○	
2 24	I	SB206	土師器	縫	(23.4)						にぶい縫	口縁1/10	○	
2 25	I	SB206	土師器	縫	(25.0)						にぶい縫	口縁部1/4	○	
2 26	I	SB206	土師器	縫	(25.6)						にぶい縫	○ 口縁部1/5	○	
2 27	I	SB206	土師器	縫	(24.2)						にぶい縫	口縁部1/4	○	
3 2	I	SB206	土師器	縫	(20.3)						淡黄緑	口縁部1/3	○	
3 3	I	SB206	土師器	縫	(25.5)						縫	○ 口縁部1/4	○	
3 4	I	SB206	土師器	縫	(23.2)						にぶい縫	口縁部~体部 1/4	○	
3 5	I	SB206	土師器	縫	(24.7)						にぶい縫	口縁部~体部 1/4	○	
3 6	I	SB206	土師器	縫	(24.6)						にぶい縫	○ 口縁部1/10	○	
3 7	I	SB206	土師器	縫	(23.2)						縫	○ 口縁部~体部 1/5	○	
3 8	I	SB206	土師器	縫	(23.6)						黄緑	○ 口縁部~体部 1/5	○	
3 9	I	SB206	土師器	縫	(25.3)						にぶい黄緑	○ 口縁部1/5	○	

回数	写真番号	遺構	種別	器種	法量(cm)						色調	釉	灰付箇	既存率	反転位置	備考
					山根	最大幅	底根	高台根	器高	つまみ根						
3.10	I-SB206	土師器	甕		(26.1)						にぶい緑		○	口縁部2/3	○	
3.11	I-SB206	土師器	甕		(21.6)						緑			口縁部～体部 1/4	○	
3.12	I-SB206	上師器	甕		(37.6)						にぶい黄緑			口縁部～体部 1/19	○	広口
3.13	I-SB207	頸直器	坪		(8.7)	(16.8)					灰白			1/3	○	
3.14	I-SB207	頸直器	壺		(14.6)						灰黄褐			1/6	○	
3.15	I-SB207	土師器	坪		(11.0)	(4.6)			4.7		暗赤褐		○	1/2	○	
3.16	I-SB207	上師器	甕		(25.8)						にぶい緑			口縁部～体部 1/6	○	
4.1.55	I-SF209	土師器	坪		(13.8)	10.8		3.4			緑		○	ほぼ光沢	○	丹経
4.2	I-SF212	土師器	甕		(24.4)						にぶい緑			口縁部1/8	○	
4.3	I-SF213	頸直器	坪		(13.2)						灰白			1/4	○	
4.4	I-SF212	上師器	甕		(16.2)	(14.0)		2.3			緑			1/3	○	丹経
4.5	I-SF213	土師器	甕		(29.0)						緑			口縁部1/4	○	
4.6	I-SF214	上師器	甕		(24.3)						にぶい緑			口縁部 わざかに残存	○	
4.7	I-SF214	土師器	甕		(24.4)						緑			口縁部1/5	○	
4.8	I-SF216	頸直器	高杯			(8.4)					灰白			口縁部1/8	○	透かし
4.9	I-SF216	土師器	坪		7.1			2.8			にぶい緑			ほぼ光沢	○	井筒 小型品
4.10	I-SF216	土師器	甕		21.5						にぶい黄緑			1/6	○	
4.11	I-SF217	土師器	甕		(22.4)						にぶい黄緑		○	口縁部～体部 1/2	○	
4.12	I-SF217	土師器	小型甕		(14.5)						にぶい黄緑			口縁部～体部 1/4	○	広口
4.13.55	I-SF226	上師器	小型甕		13.6						緑		○	4/5	○	
4.14	I-SF227	頸直器	甕		16.0			2.8	3.0		灰			4/5	○	
4.15	I-SF227	土師器	甕		(21.3)						にぶい黄緑			口縁部～肩部 1/5	○	
4.16	I-SF228	上師器	有台皿		(26.5)		(17.3)	3.9			暗赤褐			1/10	○	丹経
4.17	I-SF230	土師器	坪		(12.4)	(7.5)		3.4			にぶい緑			1/5	○	丹経
4.18	I-SF230	土師器	坪		(12.9)	(9.6)		3.1			にぶい緑			1/4	○	丹経
5.1	I-SF233	頸直器	高杯		(13.7)						灰			1/8	○	
5.2.55	I-SF233	頸直器	卓台杯		(16.8)		(9.8)	6.1			灰			1/4	○	
5.3	I-SF233	土師器	坪		(18.8)	(8.5)		4.1			にぶい緑			2/3	○	丹経
5.4	I-SF233	土師器	甕								明赤褐			口縁部～体部 わざかに残存	○	丹経
5.5	I-SF233	土師器	甕		(15.5)	(13.2)		2.1			淡黄褐			1/3	○	丹経
5.6	I-SF233	土師器	甕		22.6	(23.6)					黄緑			口縁部～肩部 1/6	○	
5.7	I-SF233	土師器	甕		(24.2)						緑			口縁部1/8	○	
5.8.56	I-SF233	土師器	甕		(21.4)						にぶい緑			口縁部～体部 1/2	○	
5.9	I-SF233	土師器	小甕		(18.6)	(17.0)					にぶい緑			に縁部～体部 わざかに残存	○	
5.10	I-SF233	土師器	小甕		(16.4)	(17.6)					緑			口縁部1/8	○	
5.11	I-SF233	土師器	小型甕		(15.8)						にぶい黄緑			口縁部～肩部	○	
5.12	I-SF233	土師器	甕		(41.6)						にぶい緑			口縁部～体部 1/4	○	
5.13	I-SF236	土師器	小型甕		(16.8)	(17.0)					緑			口縁部～体部 1/5	○	
5.14	I-SF236	土師器	甕				6.0				淡黄褐			体部～底部	○	
6.1	I-SB229	頸直器	甕		(13.0)						灰白			1/3	○	
6.2	I-SB243	氣泡器	坪		(8.9)	(11.1)					灰			1/4	○	
6.3	I-SB243	氣泡器	有台坪			(9.6)					灰			体部～高台1/2	○	
6.4	I-SB243	氣泡器	有台坪			(9.3)					灰白			体部～高台1/2	○	
6.5.56	I-SB243	頸直器	有台坪		(16.3)			10.7	6.4		青灰			2/3	○	
6.6	I-SB243	頸直器	有台坪		(16.4)		(10.6)	6.7			灰			1/5	○	
6.7	I-SB243	頸直器	有台坪		(16.1)		(9.9)	5.5			黄灰			1/5	○	
6.8	I-SB243	頸直器	苗坪		(16.0)	(16.6)		6.0			灰			1/6	○	
6.9	I-SB243	頸直器	苗坪		(16.8)	(16.4)		6.4			灰			1/3	○	
6.10	I-SB243	頸直器	苗坪		(15.2)	(16.6)		6.5			灰			1/6	○	
6.11.56	I-SB243	頸直器	苗坪		(12.6)		10.8	8.1			明チーピー 灰			2/3	○	西高大
6.12	I-SB243	頸直器	苗坪		(12.4)	(10.3)		3.6			灰白			1/5	○	
6.13	I-SB243	頸直器	苗坪		13.5		10.0	3.5			灰			2/3	○	
6.14	I-SB243	頸直器	苗坪		(12.6)	(9.8)		4.0			灰			1/3	○	
6.15	I-SB243	頸直器	苗坪		(12.5)	(11.4)		3.7			灰白			1/4	○	
6.16	I-SB243	頸直器	苗坪		(12.6)	(9.3)		3.8			灰白			1/4	○	
6.17	I-SB243	頸直器	苗坪		(9.6)	(7.5)		4.1			オリーブ灰			1/3	○	
6.18.56	I-SB243	頸直器	苗坪		(10.0)	(9.4)		3.6			灰白			1/3	○	
6.19	I-SB243	頸直器	苗坪		(9.6)	(8.3)		3.8			灰			1/4	○	
6.20	I-SB243	頸直器	苗坪		(10.2)	(8.4)		3.6			灰白			1/2	○	

品番	写真 周辺 環境	遺傳	種別	形態	法量(cm)					色調	輪	輪付部	現存率	反転実測	備考
					口径	最大径	底径	高台径	基部						
6 21 16 I	S0243	須恵器	壺	18.4				5.0	2.5	灰			2/3		
6 22 I	S0243	須恵器	壺	(15.5)				2.1	2.0	灰			1/2	○	
6 23 56 I	S0243	須恵器	壺	24.9						灰			1/2		大型
6 24 I	S0243	須恵器	壺	(16.1)	(7.2)			2.6		灰			1/4	○	
6 25 I	S0243	須恵器	壺	(12.6)	(6.1)			2.1		灰白			1/4	○	
6 26 I	S0243	須恵器	壺	(16.1)	(8.8)			2.4		灰			1/4	○	
6 27 I	S0243	須恵器	壺	(16.5)						灰		口縁部～体部	1/4	○	
6 28 I	S0243	須恵器	壺	(20.1)	(15.5)			2.7		灰白			1/6	○	
7 1 56 I	S0243	須恵器	壺	(24.4)				14.7	4.0	灰			1/2	○	
7 2 I	S0243	須恵器	壺	(22.7)						灰白			1/2	○	
7 3 I	S0243	須恵器	壺	(16.7)						灰白			1/4	○	
7 4 I	S0243	須恵器	壺	(14.2)						灰			1/4	○	
7 5 I	S0243	須恵器	壺					(12.6)		灰			脚部:1/2	○	
7 6 I	S0243	須恵器	長颈壺					(8.4)		灰白		体部～高台	1/3	○	
7 7 I	S0243	須恵器	壺	(11.8)	6.5					灰		体部～底部	1/3		赤G
7 8 56 I	S0243	須恵器	貝頭壺	(24.6)	(15.7)					灰白		頸部～高台3/4	○	赤白	
7 9 I	S0243	須恵器	貝頭壺	(20.2)	(12.1)					灰		頸部～底部	1/4		赤白
7 10 I	S0243	須恵器	平底	6.7	19.2					青灰					
7 11 I	S0243	須恵器	壺		36.9					黄灰					
7 12 56 I	S0243	須恵器	釦付村							黄灰		就足～脚のみ 修理			
7 13 57 I	S0243	須恵器	内面鏡		(9.0)					灰		口縁部:1/3	○		
8 1 I	S0243	土師器	壺	(18.4)	(10.2)			3.4		にがい縫 縫		○	1/2	○	丹能
8 2 I	S0243	土師器	壺	(12.0)	(9.0)			3.2					1/3	○	丹能
8 3 I	S0243	土師器	壺	(18.6)	(9.0)			3.0		異色縫 縫			1/4	○	丹能
8 4 I	S0243	土師器	壺	(14.4)	(10.1)			2.5		にがい黄縫 縫		○	1/4	○	丹能
8 5 I	S0243	土師器	壺	(12.8)				(12.3)	4.4	にがい一縫 縫		○	1/4	○	丹能
8 6 I	S0243	土師器	壺	(14.4)	(9.0)			1.6		縫			1/3	○	
8 7 I	S0243	土師器	壺	(17.1)	(15.0)			2.1		縫		○	1/3	○	
8 8 I	S0243	土師器	壺	(25.8)	(22.8)			2.6		にがい縫 縫			1/4	○	丹能
8 9 I	S0243	土師器	有台皿		(19.8)			(18.4)	2.5	縫			1/8	○	
8 10 I	S0243	土師器	有台皿		(22.6)			(17.3)	2.3	縫			1/8	○	丹能
8 11 I	S0243	土師器	壺	(24.8)						にがい縫 縫		口縁部:1/10	○		
8 12 I	S0243	土師器	壺	(22.7)						にがい縫 縫		口縁部:1/8	○		
8 13 I	S0243	土師器	壺	(26.0)						にがい縫 縫		口縁部:1/6	○		
8 14 I	S0243	土師器	壺	(22.2)						にがい縫 縫		口縁部:1/6	○		
8 15 I	S0243	土師器	壺	(26.0)						にがい黄縫 縫		口縁部:1/6	○		
8 16 I	S0243	土師器	小型壺		(12.8)	(13.0)				にがい縫 縫		口縁部～体部	1/4	○	
8 17 I	SE201	須恵器	有台壺					(16.4)		灰白		体部～高台1/6	○		
8 18 I	SE201	須恵器	貝頭壺							灰黃		口縁部～頸部	1/2		
8 19 I	SE201	須恵器	壺		(36.6)					灰		口縁部:1/5	○		
8 20 I	SE201	須恵器	壺	(41.5)						灰		口縁部～肩部	1/3	○	
9 1 I	SE201	土師器	小壺		(13.2)					縫		口縁部～体部	1/6	○	
9 2 I	SE201	土師器	小型壺		(11.6)	(12.7)				灰白		口縁部～肩部	1/2	○	
9 3 I	SE201	土師器	小型壺		(12.9)					灰黃		○	口縁部～肩部	1/4	
9 4 I	SE201	土師器	小型壺		(13.4)	(16.6)				にがい黄縫 縫		口縁部～体部	1/3	○	
9 5 I	SE201	土師器	小型壺		(16.2)					縫		口縁部～体部	わざわざ:1/4	○	
9 6 I	SE201	七輪器	壺	(7.9)						にがい縫 縫			1/3		小型品
9 7 57 I	SE201	土師器	壺	8.4				3.4		縫			5/6	○	小型品
9 8 I	SE201	土師器	壺	(7.8)				3.0		にがい縫 縫			1/3	○	小型品
9 9 57 I	SE201	土師器	壺	(7.4)				3.2		縫			5/6	○	小型品
9 10 I	SE201	土師器	壺	7.1				2.9		黄縫			2/3	○	小型品
9 11 I	SE201	七輪器	壺	(7.3)				3.2		縫			5/6	○	小型品
9 12 57 I	SE201	土師器	壺	6.5				2.6		黄縫			3/4	○	小型品
9 13 I	SE201	土師器	壺	5.5				2.6		にがい縫 縫			1/2	○	底部に穿孔 小型品
9 14 I	SE201	土師器	手盆		最大径 (9.6)					にがい縫 縫			1/3	○	底袋形
9 15 57 I	S3229	須恵器	貝頭壺	11.8	6.8					灰白			2/4	○	
9 16 57 I	SX229	須恵器	壺	(44.2)						灰白		口縁部～体部	1/2	○	大型 壺部に波状文
9 17 57 I	SX230	須恵器	壺	(11.3)	(9.3)			3.8		灰オーブ			1/3	○	

固 番	写 真 名 称	通 道	種 別	部 位	測量(m)					色 調	輪	被 覆 材 料	被 覆 存 在 率	被 覆 實 驗 室	備 考	
					口徑	最大径	底径	高台径	器高	つまみ性						
9 16.57 I	S3220	直通管	筋环		11.8	9.9	4.2			灰白		3/4				
9 19 I	S3220	直通管	筋环	(11.6)	(9.4)	3.2				灰		1/4	○			
9 20.67 I	S3220	直通管	环	10.7	8.2	4.3				青灰		3/6				
10 1 I	S3230	上師器	环	(13.0)	(9.8)	3.2				にぶい緑 明赤褐色		1/5	○		丹波	
10 2 I	S3230	土師器	环	(12.7)	(9.6)	3.6				緑		1/2	○		丹波	
10 3 I	S3230	土師器	环	(12.6)	(9.9)	3.6				緑		1/5	○		丹波	
10 4 I	S3230	土師器	环	(11.6)	(9.6)	3.6				明黄褐色	○	2/3	○		丹波	
10 5 I	S3230	土師器	环	(12.6)	(9.6)	3.4				緑		1/3	○		丹波	
10 6 I	S3230	土師器	环	(12.1)	8.7	3.5				浅黄褐色		1/2	○		丹波	
10 7 57 I	S3230	土師器	环	(12.6)	(9.2)	3.1				緑		1/2	○		丹波	
10 8 I	S3230	土師器	环	(11.6)	(9.4)	3.5				緑		1/3	○		丹波	
10 9 I	S3230	土師器	环	(11.6)						明赤褐色 明赤褐色	○	1/7	○		丹波	
10 10.57 I	S3230	上師器	环	(7.8)	(5.6)	3.2				青灰		1/2	○		丹波	
10 11 I	S3230	上師器	环	(16.2)	(6.8)	3.1				緑		1/5	○		丹波	
10 12 I	S3230	土師器	环	12.2	8.3	3.4				明赤褐色	○	1/2	○		丹波	
10 13 I	S3230	上師器	环	12.5	8.5	3.7				緑		1/2	○		丹波	
10 14 I	S3230	土師器	环	12.3	(8.1)	3.2				黄褐色		1/2	○		丹波	
10 15 I	S3230	土師器	环	(12.0)	(9.0)	3.3				にぶい緑		1/4	○		丹波	
10 16 I	S3230	上師器	环	(14.1)	(8.8)	3.5				にぶい緑		1/4	○		丹波	
10 17 I	S3230	土師器	环	(12.8)	(6.9)	4.1				浅黄褐色 明赤褐色		1/4	○		丹波	
10 18 I	S3230	土師器	环	(13.2)	(8.4)	4.5				浅黄褐色 明赤褐色		1/2	○		丹波	
10 19 I	S3230	上師器	环	(11.6)	(7.2)	3.7				にぶい緑		1/4	○		丹波	
10 20.56 I	S3230	土師器	环	12.6	8.9	3.5				緑	○	2/4	○		丹波	
10 21 I	S3230	上師器	环	(10.6)	(7.0)	3.1				黄褐色	○	1/3	○		丹波	
10 22 I	S3230	土師器	环	(11.6)						緑		1/4	○		丹波	
10 23.58 I	S3230	土師器	环	(15.4)						浅黄褐色 緑		口跡記一全体部 1/10	○		丹波 墓石	
10 24 I	S3230	土師器	环	(15.9)						にぶい緑	○	1/3	○			
10 25.58 I	S3230	土師器	环	13.0	9.7	3.4				緑	○	7/8	○		丹波 墓石	
10 26 I	S3230	土師器	环	12.8	9.2	3.1				緑		2/3	○		丹波 墓石	
10 27 I	S3230	土師器	环	12.4	9.6	3.6				緑		2/3	○		丹波 墓石	
11 1 56 I	S3230	土師器	环	(12.8)	(9.4)	3.2				緑		1/3	○		丹波 墓石	
11 2 58 I	S3230	上師器	环	(12.3)	(9.0)	3.8				にぶい緑 明赤褐色		1/3	○		丹波 墓石	
11 3 58 I	S3230	土師器	环		(10.8)					にぶい緑 明赤褐色		紙部1/5	○		丹波 墓石	
11 4 58 I	S3230	土師器	环	(12.2)	(6.6)	5.9				にぶい緑		1/2	○			
11 5 58 I	S3230	上師器	有台环	12.6	8.8	6.6				緑		1/2	○		丹波	
11 6 56 I	S3230	土師器	有台环	12.1		7.6	4.6			緑		4/5	○		丹波	
11 7 58 I	S3230	土師器	有台环	15.5		9.2	5.7			黄褐色		4/5	○		丹波	
11 8 58 I	S3230	土師器	盖	15.3		3.1	2.3			緑		5/6	○		丹波	
11 9 I	S3230	土師器	盖	15.3	12.2	2.2				緑		ほぼ完形	○		丹波	
11 10 59 I	S3230	土師器	盖	14.2	12.2	2.2				緑		5/6	○		丹波 墓石?	
11 11 59 I	S3230	土師器	盖	19.6		2.1				明赤褐色 にぶい緑		ほぼ完形	○		丹波	
11 12 59 I	S3230	土師器	盖	14.9	10.0	2.0				緑		4/5	○		丹波 墓石	
11 13 59 I	S3230	土師器	有台盖	(16.0)		3.7				緑		1/2	○		丹波	
11 14 59 I	S3230	土師器	有台盖	(16.0)	(6.6)	3.5				緑		1/4	○		丹波	
11 15 I	S3230	土師器	有台盖	(17.9)						にぶい緑 明赤褐色		1/3	○		丹波	
11 16 I	S3230	上師器	魔	(16.0)	(16.3)					緑		口跡記1/8	○			
11 17 I	S3230	土師器	魔	(27.4)						地灰	○	口跡記1/8	○			
11 18 I	SF11	山茶瓶	瓶	(16.0)		6.7	5.1			灰		1/2	○		III-1期	
12 2 I	SF11	山茶瓶	瓶			7.3				灰黄		体部一高台部 1/1期	△	未切り底 使用底		
12 3 I	SF11	山茶瓶	瓶			9.0				灰黄		高台部分 体部一部	○	未切り底 使用底		
12 4 I	SF11	山茶瓶	小瓶	(6.6)	(6.0)	1.7				灰白		1/2	○		III-2期 未切り底	
12 5 I	SF11	上師質土器	伊勢空罐	(26.6)						浅黄褐色	○	口跡記一全体部 1/5	○			
12 6 I	SF11	土師質土器	伊勢空罐							灰黄褐色	○	類似一全体部 1/8	○			
12 7 I	SF25	土師器	环	(6.2)	(4.1)	3.2				緑		1/4	○		小型品	
12 8 I	SF33	山茶瓶	瓶	(16.6)		7.0	6.5			浅黄	○	1/2	○		I-1期 轮轴 使用底	
12 9 I	SF33	山茶瓶	瓶		(7.1)					灰白		体部一高台1/6	○		I-2~II期 使用底	
12 10 I	SF33	山茶瓶	瓶			7.4				灰白		体部一高台	○		Ⅱ-1期 使用底	
12 11 I	SF36	須惠器	环	(11.2)	(9.0)	3.1				オーバーブ灰		1/4	○			
12 12 I	SF36	土師器	魔	(26.2)	(26.4)					にぶい緑		口跡記一全体部	○			
12 13 I	SF20	山茶瓶	小瓶	(6.3)	(6.7)	1.6				灰黄		2/6	○		Ⅲ-1期 使用底	
12 14 I	SF20	山茶瓶	瓶	(7.2)		(8.7)	5.1			浅黄		1/3	○		Ⅲ-1期 使用底 モミ良	
12 15 I	SF20	山茶瓶	瓶				6.8			灰黄		高台部分 体部一部	○		Ⅲ-2期 使用底 モミ良	

固有番号	学名	原産地	通称	種別	器械	法量(cm)				色調	種	虚付箋	産率	反転実測	備考	
						口径	最大径	底径	高台径	脚高	つまみ徑					
12/16	I S029	山茶輪	鏡						6.5	1	灰黄			高台部分 体部一部	III-2期	使用版
12/17	I S029	上部質土器	伊勢型鏡			(24.0)					にぶい縁			口縁部 ねじり底	既存	○
12/18	I S023	上部質土器	伊勢型鏡								にぶい縁			口縁部 ねじり底	既存	
12/19	I S027	愛知鏡	有合环			(13.8)		(9.9)	4.0		灰白			1/7	○	
12/20	I S027	愛知鏡	鏡					(9.9)			灰黄			体部~高台1/7	○	
12/21~29	I S028	山茶鏡	小里			8.4	4.3		2.3		青灰			5/6	日期	角切り鏡
12/22	I S028	山茶鏡	小里			(7.6)	4.1		2.2		灰黄			3/5	○	日期 角切り鏡 丹羽用鏡
12/23	I S028	山茶鏡	小里						4.6		灰白			体部~底部	○	III-1期 角切り鏡
12/24	I S028	山茶鏡	小里						4.0		灰白			体部~底部	○	III-2期 角切り鏡
12/25	I S028	山茶鏡	鏡			(16.8)			7.5	6.6	灰白			1/3	○	III-1期 角切り鏡 使用版
12/26	I S028	山茶鏡	鏡			(16.8)		0.00	6.2		灰白			1/2	○	I-2期
12/27	I S028	山茶鏡	鏡					0.90			灰白			体部~高台1/3	○	III-1期 角切り鏡 使用版
13/1	I S029	山茶鏡	鏡					0.70			灰白			1/2~3 日期 角切り鏡 使用版	モミ板	
13/2	I S028	山茶鏡	鏡						7.7		灰白			体部~高台	○	I-2~3 日期 角切り鏡 使用版
13/3	I S028	山茶鏡	鏡						7.8		灰白			体部~高台	○	I-2~3 日期 角切り鏡 使用版
13/4	I S028	山茶鏡	鏡						6.8		灰白		○	体部~高台	○	I-2~3 日期 角切り鏡 使用版
13/5~59	I S028	山茶鏡	鏡			(16.3)			7.1	5.5	灰白			1/3	○	IV期 角切り鏡 丹羽用鏡
13/6	I S028	山茶鏡	鏡			(16.3)		0.80	6.6		灰白			1/2	○	IV-1期 角切り鏡
13/7	I S028	山茶鏡	鏡						7.4		灰白			体部~高台	○	IV-1期 角切り鏡 使用版
13/8	I S028	山茶鏡	鏡					0.90			灰白			体部~高台	○	IV-1期 角切り鏡 使用版
13/9	I S028	山茶鏡	鏡						7.5		灰白			高台部分 体部一部	○	IV-1期 角切り鏡 使用版
13/10	I S028	山茶鏡	鏡						7.3		灰白			体部~高台	○	IV-1期 角切り鏡 使用版
13/11	I S028	山茶鏡	鏡						8.1		灰白			体部~高台	○	IV-1期 角切り鏡 使用版
13/12	I S028	山茶鏡	鏡						7.9		灰白			体部~高台	○	IV-1期 角切り鏡 使用版
13/13	I S028	山茶鏡	鏡			(6.9)					灰黄			体部~高台1/2	○	IV-1期 角切り鏡 使用版
13/14	I S028	山茶鏡	鏡			(6.4)					灰白			高台部分 体部一部	○	IV-1期 角切り鏡 使用版
13/15	I S028	山茶鏡	鏡			(6.9)					灰黄			高台部分	○	IV-1期 角切り鏡 使用版
13/16	I S028	山茶鏡	鏡						7.6		灰白			体部~高台	○	IV-1期 角切り鏡 使用版
13/17	I S028	山茶鏡	鏡					0.60			灰白			体部~高台1/2	○	時期不明 使用版
13/18	I S028	山茶鏡	鏡					0.60			灰白			体部~高台	○	東道江 日期 角切り鏡
13/19	I S028	山茶鏡	鏡						6.25		灰			体部~高台1/2	○	IV期 角切り鏡 使用版
13/20~24	I S028	貿易陶器	白磁瓶						7.6		灰白			高台部分 体部一部	○	IV-1期 角切り鏡 使用版
13/21~24	I S028	貿易陶器	白磁瓶			(6.4)					灰白			高台部分	○	IV期 角切り鏡
13/22	I S028	灰地黒陶器	瓶			(16.2)					灰白			体部~高台1/2	○	時期不明 使用版
13/23	I S028	灰地黒陶器	段瓶			(16.8)					灰白			1/10	○	東道江 日期 角切り鏡
13/24	I S028	土師器	手形ね			3.5	3.0		2.8		青黄緑			体部~高台	○	IV期 角切り鏡
13/25	I S031	山茶鏡	鏡						7.9		灰白			体部~高台	○	IV-1期 角切り鏡 ソミ板
13/26	I S031	山茶鏡	鏡					6.90			灰黄			体部~高台1/2	○	IV-1期 角切り鏡 ソミ板
13/27~59	I S031	土師器	坪			11.8	7.6		2.9		桜			5/6	○	丹波
13/28	I S031	土師器	坪			12.2	7.6		3.6		桜			6/6	○	丹波
13/29	I S032	陶器	灰地小鉢か			(11.1)					灰黄			口縁~体部1/9	○	後期~IV期
13/30~59	I S033	山茶鏡	小帆			(9.6)		(5.4)	2.7		灰白			1/2	○	東道江 J-1~2期 豪華版
13/31~94	I S086	貿易陶器	白磁瓶			(14.5)					白			口縫跡1/10	○	IV期
13/32	I S092	陶器	天目						4.6		灰白			高台部分	○	5~6小期(廻内)
13/33	I S092	土師質土器	かわら7			(11.90)			2.6		灰黄			1/6	○	芦口クロ
13/34	I S092	陶器	刷毛目大皿			(27.1)					青黄灰			口縫跡1/10	○	唐津 17世紀代
13/35	I S093	山茶鏡	鏡					6.23			灰黄			体部~高台1/3	○	1-1期 使用版
13/36	I S093	山茶鏡	鏡			(6.0)					灰白			体部~高台1/3	○	1-1期 小切り板 使用版
13/37	I S093	山茶鏡	鏡			(6.4)					灰白			体部~高台1/3	○	1-1期 使用版 ソミ板
14/1	I J-09	灰地黒陶器	小瓶					4.5			灰黄			体部~底部1/7	○	
14/2	I K-09	須恵器	蓋			(17.4)			4.1	2.9	灰黄			1/3	○	
14/3	I J-07	須恵器	蓋			(14.0)			2.9	2.0	灰白			2/5	○	
14/4	I J-71	須恵器	蓋			11.6			2.8	1.8	灰			1/2	○	
14/5	I J-70	須恵器	蓋			12.2			2.2		青灰			1/2	○	
14/6	I J-71	須恵器	蓋			(12.9)		(11.0)			灰黄			1/3	○	
14/7	I J-70	須恵器	蓋			(11.2)		(8.1)	2.1		灰白			1/10	○	
14/8~59	I 残品	須恵器	円筒瓶								灰白			口縫跡1/4	○	丹波
14/9	I J-07	土師器	坪			11.9	8.0		3.6		にぶい縁			5/6	○	丹波
14/10	I J-07	土師器	坪			11.8	7.5		3.5		にぶい縁			5/6	○	
14/11	I J-71	土師器	坪			8.8	3.9		9.1		にぶい縁			3/4	○	

規番	年 月 日	調査 区域	種類	若様	法蓋(cm)						色調	輪	底付 蓋	機存率	反転 輪周率	備考		
					口徑	最大幅	底幅	高台幅	器高	つまみ 径								
14-12	I	E-70	土師器	有台坪	(16.4)		(8.7)	5.9			にぶい黄褐色 明赤褐色		○	1/3	○	丹霞		
14-13	I	E-69	土師器	高盤			(19.7)				淡黃褐色		○	脚部2/3	○	丹霞		
14-14	I	J-69	土師器	皿	(12.8)		(9.6)		2.2		にぶい黄褐色 明赤褐色			1/2	○	丹霞		
14-15	69	I	J-68	土師器	不明(破片)						黃褐色 褐鐵褐色			体部 わざりに残存		丹霞	壁面	
14-16	I	J-59	土師器	平腹ね	2.2		2.4		1.8		褐			3/4		环形		
14-17	I	K-68	山茶瓶	小瓶			(5.1)				灰白			体部~高台2/3	○	I-1期	赤切り直 使用直	
14-18	I	J-71	山茶瓶	小瓶	(6.3)			4.8	3.2		灰黃			2/3	○	I-2期	使用直	
14-19	I	K-68	山茶瓶	小瓶	6.1			4.1	3.4		青灰			ほぼ完形		豆期	赤切り直 使用直	
14-20	I	J-68	山茶瓶	小瓶				2.5			淡黃			体部~高台	○	III-1期	赤切り直 使用直	
14-21	I	J-69	山茶瓶	瓶	(15.8)			6.9	6.1		淡黃			1/2	○	I-1期	使用直 ソミ直	
14-22	I	J-68	山茶瓶	瓶			(8.2)				灰白			体部~高台3/5		I-1期	赤切り直 砂目直 灰ねじき直	
14-23	I	現代	山茶瓶	瓶			(8.1)				灰白			体部~高台2/5	○	I-1期	使用直 ソミ直	
14-24	I	J-60	山茶瓶	瓶				7.9			淡黃			体部~高台5/5	○	四-1期	赤切り直 使用直 ソミ直	
14-25	I	J-60	山茶瓶	瓶				(7.4)			淡黃			体部~高台2/5	○	四-1期	赤切り直 使用直 ソミ直	
14-26	I	K-68	山茶瓶	瓶				8.0			淡黃			体部~高台	○	III-1期	使用直 ソミ直	
14-27	I	J-60	山茶瓶	瓶	(15.5)			(7.0)	5.1		灰白			1/2	○	I-1期	赤切り直 使用直 ソミ直	
14-28	I	J-60	山茶瓶	瓶				7.4			淡黃			体部~高台	○	III-2期	使用直 ソミ直	
14-29	I	K-69	山茶瓶	瓶			(7.1)				灰白			体部~高台5/5	○	知多5型式	モミ直	
14-30	I	J-59	陶器	灰釉水輪 はくみん皿	(11.0)						灰白	灰オーラブ		体部~高台1/7	○	大堀1		
14-31	I	J-59	陶器	灰釉水輪 はくみん皿			5.6				灰白	灰オーラブ		体部~底部	○	大堀1		
14-32	I	J-65	陶器	天目茶碗			5.1				にぶい褐	淡黃		体部~高台2/5	○	大堀4		
14-33	I	J-59	陶器	天目茶碗			(4.7)				にぶい紫褐色	灰褐色		体部~高台1/6	○	後IV期新		
14-34	I	K-72	陶器	蟹住	(26.0)						灰黃	褐灰		口縁部 わざりに残存	○	大堀3後(朝山寺)		
14-35	69	I	K-69	貿易商標	青磁鉢						淡黃	翠綠灰		体部 わざりに残存		A-2頭のA-4頭 (1-2かう型)		
15-1	II	SRS201 -P3	土師器	坏	(12.9)	(8.0)		3.1			にぶい褐			1/3	○	丹霞		
15-2	II	SRS201 -P3	土師器	甕	(22.6)						灰黃褐色			口縁部1/10	○			
15-3	II	SRS202 -P7	土師器	坏	(18.4)						にぶい黄褐色			口縁部~底部 1/8	○	丹霞 壁文		
15-4	69	II	SRS202 -P7	土師器	坏	(11.8)	(6.3)		4.0		灰白			1/2	○	丹霞		
15-5	II	SRS202 -P7	土師器	甕	(21.4)						灰白			口縁部1/6	○			
15-6	69	II	SRS202 -P7	土師器	坏	13.1	(8.0)				灰白			口縁部~体部 5/6	○	丹霞		
15-7	II	SRS202 -P7	灰釉陶器	甕				5.7			淡黃褐色			体部~高台	○	使用直		
15-8	69	II	SRS202 -P7	灰釉陶器	甕	13.1		4.9	3.5		灰白			3/4		赤切り直		
15-9	II	SRS201	須恵器	有台坪			(19.4)				灰			体部~高台 わざりに残存	○			
15-10	II	SRS201	須恵器	有台坪			(11.3)				灰			体部~高台1/8	○			
15-11	II	SRS201	須恵器	甕	(14.3)						灰白			口縁部~一部 わざりに残存	○			
15-12	II	SRS201	須恵器	甕	(15.6)						灰白			口縁部~一部 わざりに残存	○			
15-13	II	SRS201	須恵器	長颈甕	(10.9)						灰オーラブ			口縁部2/5	○			
15-14	II	SRS201	須恵器	甕							灰白			体部~底部2/5	○			
15-15	69	II	SRS201	土師器	坏	11.9	8.5		3.6		にぶい褐			完形		丹霞		
15-16	69	II	SRS201	土師器	坏	12.5	9.9		3.5		にぶい褐			ほぼ完形		丹霞		
15-17	69	II	SRS201	土師器	坏	(12.6)	(8.6)		3.4		灰黃褐色 にぶい褐			1/6	○	丹霞		
15-18	II	SRS201	土師器	皿	(16.2)	(12.0)		2.1			灰褐色 灰褐色			1/6	○	丹霞		
15-19	69	II	SRS201	土師器	有台皿			(8.7)				淡黃褐色 明赤褐色			体部~高台	○	丹霞	
15-20	69	II	SRS201	土師器	甕	24.9					にぶい黄褐色			2/3	○	16-7と同一個所		
15-21	II	SRS201	土師器	甕			(8.2)				にぶい黄褐色			2/3	○	16-6と同一個所		
15-22	II	SRS201	土師器	甕			(7.3)				にぶい褐			口縁部1/4	○			
15-23	II	SRS201	土師器	甕	(22.4)						淡黃褐色			口縁部1/2	○			
15-24	II	SRS201	土師器	甕	(36.2)						褐			口縁部1/8	○			
15-25	II	SRS201	土師器	甕	(26.0)						褐			1/6	○			
15-26	II	SRS201	土師器	甕	(27.4)						にぶい粒			口縁部~体部 1/4	○			
15-27	II	SRS201	土師器	甕	23.7	(26.8)	7.6		36.1		にぶい褐			1/2	○			
15-28	II	SRS201	須恵器	甕			(17.8)				灰			体部~底部1/5	○			
15-29	II	SRS201	須恵器	有台甕				(12.7)			灰白			体部~高台1/8	○			
15-30	69	II	SRS201	須恵器	甕	10.8			2.0	1.3	灰					完形		墨書き

国 番 号	学 名 或 者 同 属 名	造形	種別	部類	法身(cm)					色調	袖	保 持 方 式	存 在 状 況	参考	
					口徑	最大径	底径	高台径	器高						
17.4	II SB203	土師器	坪	(10.4)	(4.7)	4.1				に赤い質感			1/4	○	丹波
17.5	60 II	SB203	土師器	坪	12.6	9.0		3.6		■		○	定多		丹波
17.6	II SK203	上師器	坪	(14.5)		(11.0)				に赤い質感			1/4	○	丹波
17.7	60 II	SB203	土師器	有台坪	15.8			8.7	7.4	灰白		○	3/4		片瀬
17.8	60 II	SB203	上師器	有台坪	15.3		(9.6)	6.5		■		○	3/4	○	丹波 稲文
17.9	II SB203	土師器	有台坪				(6.2)			に赤い質感			1/4	○	丹波
17.10	II SB203	土師器	坪	(15.9)		(13.1)		1.9		に赤い質感		○	1/4	○	丹波
17.11	II SB203	土師器	壺	(24.9)	(26.3)					■		○	1/4	○	
17.12	61 II	SB203	土師器	甕	24.7	(25.7)				に赤い質感		○	口縁部~全体		
17.13	II SB203	土師器	甕	(24.1)						に赤い質感			口縁部1/5		
18.1	II SB204	灰思器	有台坪				(10.8)			灰			高台部分1/6	○	
18.2	II SB204	灰思器	有台坪				(9.7)			灰白			高台部分1/6	○	
18.3	II SR204	土師器	高臺	(16.5)						燒灰		○	側部分		丹波
18.4	II SB204	土師器	甕	(24.3)						に赤い質感		○	口縁部~全体		
18.5	II SF204	七師器	甕	(22.0)						に赤い質感			口縁部~全体		
18.6	61 II	SB205	土師器	坪	6.4	3.1		2.8		に赤い質感			ほぼ丸形		小型品
18.7	II SB204	土師器	坪	(6.5)						に赤い質感			1/2	○	小型品
18.8	II SF201	土師器	甕	(21.3)	(7.2)					に赤い質感		○	1/3	○	
18.9	61 II	SF201	土師器	坪	7.3	3.8		4.2		赤棕			完形		小型品
18.10	II SF202	亞忠器	坪	(14.4)						灰类		○	口縁部~全体		
18.11	II SF202	土師器	小型壺	(13.2)						に赤い質感		○	口縁部1/4		
18.12	II SF204	灰思器	長颈瓶	(6.7)						灰白		○	口縁部~颈部		
18.13	II SF204	土師器	瓶	(9.1)						■		○	口縁部1/8		小型品
18.14	II SF204	土師器	手型ね	(4.7)						淡黄		○	全体部1/6		高环形
18.15	II SF205	灰思器	坪	(12.9)	9.9		3.6			灰			1/3	○	
18.16	II SF205	土師器	甕	(22.3)	(22.6)					に赤い質感		○	口縁部~全体		
18.17	61 II	SF210	上師器	小型甕	15.1	14.1	6.8	13.4		淡黄			ほぼ丸形		
18.18	61 II	SF211	灰抽軸器	瓶	(15.4)			6.7	4.4	灰白			1/2	○	高台内にスノコ状の板附
18.19	61 II	SF211	灰抽軸器	瓶	15.7			6.5	4.3	灰白			1/2	○	
18.20	61 II	SF204	土師器	坪	(6.6)	(4.1)		3.3		に赤い質感			口縁部~颈部		小型品
19.1	2 II	SD205	土師器	甕	(22.9)					に赤い質感			1/5	○	
19.2	II SD205	土師器	甕	(22.9)						に赤い質感			口縁部~全体		
19.3	II SD205	土師器	甕	(19.6)						に赤い質感			わざかに保存		
19.4	61 II	SD209	土師器	甕	(7.6)			3.5		に赤い質感			1/2	○	小型品
19.5	II SD212	灰思器	甕	(14.2)				3.1		灰白			1/2	○	
19.6	61 II	SD215	灰思器	有台坪	(10.2)		(0.2)	3.7		灰白			1/3	○	
19.7	II SD216	灰思器	甕	(16.7)			3.4	(0.4)		灰白			1/4	○	
19.8	II SG218	土師器	甕	(24.5)						に赤い質感			口縁部~底部		
19.9	II SD220	土師器	甕	(16.6)						に赤い質感		○	口縁部~全体		
19.10	II SD222	土師器	瓶	(17.6)						■		○	口縁部~全体		丹波?
19.11	61 II	SD223	土師器	甕	(22.4)					に赤い質感		○	口縁部~全体		やや小品
19.12	II SD223	土師器	甕	(34.2)	(34.5)					■		○	口縁部~全体		
19.13	61 II	SD224	上師器	甕	19.7	19.8				灰白			1/2	○	
20.1	II SD224	上師器	甕	(20.2)	6.3					粉白		○	全体~底部3/4		
20.2	II SD225	上師器	甕	(24.1)						灰白		○	口縁部1/3		
20.3	2 II	SD225	土師器	甕	(6.5)					灰白		○	全体~底部1/2		
20.4	61 II	SD227	灰思器	坪	11.7			4.6		灰白			2/3		
20.5	62 II	SD227	土師器	坪	9.8			4.1		■			1/2	○	小型品
20.6	62 II	SD227	土師器	坪	(16.4)					■			1/3	○	小型品
20.7	62 II	SD227	土師器	坪	(11.9)					■			1/4	○	小型品
20.8	II SD227	土師器	坪	(9.8)						に赤い質感			口縁部~全体		
20.9	62 II	SD227	土師器	高級	19.1					■			1/2	○	丹波 稲文?
20.10	62 II	SD227	土師器	甕	(6.6)					に赤い質感			全体~底部わざかに保存		
20.11	62 II	SD227	土師器	甕	(15.6)					に赤い質感			1/4	○	
20.12	62 II	SD227	土師器	甕	(9.6)			4.2		に赤い質感			口縁部~全体		小型品
20.13	62 II	SD227	土師器	坪	9.4			3.7		に赤い質感			ほぼ丸形		小型品
20.14	II SD227	土師器	坪	(10.10)						に赤い質感			1/6	○	小型品
20.15	II SD230	灰思器	甕							灰白			口縁部~全体		
20.16	62 II	SD230	灰思器	甕	14.9			3.1	2.3	灰			1/2		

固 有 形 資 産 登 録 書	平 成 2 年 度 国 内 生 産 区 域	業 種	種 別	品 種	数量(㌧)					色 調	種 類	監 査 書	積 存 率	反 転 率	備 考
					口 径	最 大 往 き	底 径	高 台 径	深 度						
20 17	II SNS30	土鋤器	鋤	(20.0)	(19.1)	1.9				明灰褐色		○	1/4	○	丹波
21 1	I SP203	上鋤器	不明	(4.6)						にぶい緑		○	1/4	○	
21 2	I SP205	上鋤器	手挽ね		(3.6)					にぶい緑		○	体部～底部1/3	○	西形
21 3	II SP229	土鋤器	鋤	(26.6)						にぶい緑	○	高台～底面	○	わざとしに残存	丹波
21 4	II SP231	土鋤器	鋤	(24.1)						にぶい緑		○	全体	○	わざとしに残存
21 5	II SP236	上鋤器	鋤	(22.3)						にぶい緑		○	口縁部1/10	○	
21 6	II SP238	須志器	鋤	(15.8)						灰白 灰		○	口縁部1/6	○	
21 7	I SP240	土鋤器	手挽ね		(11.8)					無色		○	1/4	○	皮袋形
21 8	I SP242	土鋤器	鋤	(11.8)						にぶい緑		○	1/6	○	丹波
21 9	I SP243	土鋤器	小型鋤	(16.5)	(16.7)					にぶい黄緑		○	口縫部～体部	○	
21 10	II SP244	土鋤器	鋤	(20.7)	(19.2)	2.2				にぶい緑		○	1/2	○	丹波
21 11	II SP244	土鋤器	鋤	(22.0)						にぶい黄緑	○	口縫部～底面	○	1/4	○
21 12	II SP244	土鋤器	鋤	(23.3)	(23.4)	0.60	26.1			にぶい緑	○	○	1/6	○	
21 13	II SP272	須志器	鋤	12.3		3.6	4.1			灰		○	はざな形	○	
21 14	II SP272	土鋤器	鋤	(11.8)						にぶい黄緑	○	口縫部～体部	○	1/4	○
21 15	II SP272	土鋤器	鋤	(22.9)						にぶい緑	○	口縫部～肩部	○	1/4	○
21 16	II SP272	土鋤器	鋤	(20.7)						にぶい緑		○	口縫部1/8	○	
22 1	II SNS22	土鋤器	鋤	(21.9)						にぶい黄緑	○	口縫部～肩部	○	1/2	○
22 2	II SNS23	土鋤器	鋤	(19.1)						にぶい黄緑	○	口縫部～肩部	○	1/4	○
22 3	II SNS23	土鋤器	鋤	(19.0)						にぶい黄緑	○	口縫部～肩部	○	わざとしに残存	○
22 4	6 63 II SNS24	土鋤器	鋤	12.0	7.3	3.4				にぶい緑	○	口縫部～肩部	○	1/4	○
22 5	II SNS25	土鋤器	鋤	(17.0)	(14.9)	1.9				にぶい黄緑	○	口縫部～肩部	○	1/6	○
22 6	II SNS25	上鋤器	鋤	(24.1)						にぶい黄緑	○	口縫部～肩部	○	1/4	○
22 7	II SNS26	灰鉄鋤22	鋤	(16.2)		(8.0)	4.9			灰白		○	1/6	○	
22 8	II SNS26	灰鉄鋤22	鋤			7.0				灰白		○	体部～高台	○	重ね焼き模
22 9	II SNS26	灰鉄鋤	鋤	(8.6)	(7.2)	3.8				灰白		○	1/7	○	
22 10	6 63 II SNS26	土鋤器	鋤	12.6	8.0	4.3				にぶい黄緑	○	完形	○	丹波	
22 11	II SNS26	土鋤器	鋤	(14.3)						にぶい黄緑	○	1/4	○	丹波	
22 12	II SNS26	土鋤器	鋤	(16.9)	(5.7)	3.2				にぶい黄緑	○	1/6	○	丹波	
22 13	6 63 II SNS26	土鋤器	鋤	14.8	11.7	3.7				にぶい緑	○	2/3	○	丹波	
22 14	II SNS26	土鋤器	鋤	(12.1)	(16.0)	3.4				淡黄緑	○	1/6	○	丹波	
22 15	6 63 II SNS26	土鋤器	鋤	(19.3)	(16.7)	2.6				緑	○	2/5	○	丹波	
22 16	II SNS26	土鋤器	鋤	(25.0)						淡黄緑	○	口縫部～底面	○	丹波	
22 17	II SNS26	土鋤器	鋤	(15.4)	(16.0)					にぶい緑	○	口縫部～体部	○	1/6	○
23 1	II SNS26	上鋤器	鋤	(21.3)		7.2	(22.7)			にぶい黄緑	○	1/4	○		
23 2	II SNS26	上鋤器	鋤	(24.6)						にぶい緑	○	口縫部1/6	○		
23 3	II SNS26	土鋤器	鋤	(24.9)						にぶい緑	○	口縫部～体部	○	1/6	○
23 4	II SNS213	忍者器	鋤	(18.4)						灰白		口縫部1/6	○	広口美濃型	合
23 5	6 63 II SNS214	土鋤器	鋤	16.7						にぶい緑	○	ほぼ完形	○	丹波	
23 6	II SNS214	土鋤器	鋤	19.5	(9.8)	10.0				緑	○	1/2	○	把手付	
23 7	II SNS214	上鋤器	鋤	(20.0)						にぶい緑	○	口縫部～肩部	○	1/2	○
23 8	II SNS214	土鋤器	鋤		6.3					緑	○	体部～底部3/4	○		
24 1	II SH1-P1	土鋤實上鋤	かわらけ	(9.2)						淡黄緑		1/10	○	非クロロ	
24 2	II SH2-P1	土鋤實下鋤	かわらけ	(19.8)		2.1				灰白		1/10	○	非クロロ	
24 3	II SH2-P1	瓦鋤器	風炉?	(19.0)						灰黃		口縫部1/5	○		
24 4	II SH2-P1	灰鉄鋤	鋤		(7.0)					灰白		体部～高台1/3	○		
24 5	II SH2-P1	陶器	志野丸瓶	(11.4)	(6.9)	2.5				灰白黒	灰白	1/8	○	1小瀬	
24 6	6 63 II SH2-P1	陶器	鉄袖丸型 香炉	(11.6)						黄灰	黄灰	口縫部 おひこに残存	○	大瀬3箇(初山)	
24 7	6 63 II SH2-P1	土鋤實土鋤	かわらけ	(11.4)		2.2				淡黄		2/5	○	非クロロ	
24 8	II SH2-P2	土鋤實土鋤	かわらけ	(9.9)		2.4				灰白		1/4	○	非クロロ	
24 9	6 63 II SH2-P2	土鋤實土鋤	かわらけ	(9.7)		2.2				褐灰		1/2	○	非クロロ	
24 10	6 63 II SH2-P2	土鋤實土鋤	かわらけ	9.6		2.6				褐灰		ほぼ完形	○	青ロクロ	
24 11	II SH2-P7	土鋤實土鋤	かわらけ	(16.0)		2.2				灰白		1/6	○	非クロロ	
24 12	II SH2-P7	土鋤實土鋤	かわらけ	(16.7)		1.6				にぶい黄緑		1/10	○	非クロロ	
24 13	II SH2-P7	土鋤實土鋤	かわらけ	(11.6)		2.6				灰白		1/10	○	非クロロ	
24 14	II SH2-P7	土鋤實土鋤	鉄袖丸瓶	(5.6)						褐灰		体部～底部1/5	○	大型2・3	
24 15	6 63 II SP9	土鋤實上鋤	かわらけ	15.4		2.9				淡黄緑		ほぼ完形	○	非クロロ	
24 16	I SP9	土鋤器	小型鋤	(12.2)						褐灰		口縫部1/5	○		
24 17	6 63 II SP12	陶器	紫釉施拂利		(7.2)					褐灰		体部～底部1/3	○	大瀬3箇(初山)	

登録番号	写真番号	測量区	測量	種別	器種	法規(cm)					色調	純	残存率	切削実測	備考	
						口径	最大径	底径	高台径	耐高						
2418	II	SF12	土師質土器	かわらけ		(10.0)				2.5	灰白			2/5	○	非クロ
2419	II	SF12	土師質土器	かわらけ		(10.0)				2.1	灰白			1/5	○	非クロ
2420	63	II	SF12	土師器		12.7		7.6		3.2	灰白			3/4		丹経
2421	64	II	SF16	山茶瓶	壺	15.6			4.5	5.2	灰白			2/3		Ⅲ-1期 本切り削 Ⅲ-1期 本切り削
2422	II	SF16	山茶瓶	壺					7.6		灰黄					モミハ
2423	II	SF16	山茶瓶	壺					(7.4)		にがい黄緑					Ⅲ-1期 本切り削 Ⅲ-1期 本切り削
2424	II	SF19	山茶瓶	壺					(6.4)		灰黄					モミハ
2425	II	SF19	山茶瓶	壺							赤灰					Ⅲ-1期 本切り削 後凹削削
2426	II	SF19	山茶瓶	壺							オリーブ墨			1/5	○	後凹削削
2427	64	II	SF20	土師器	子鉢ね	2.2				2.9	にがい墨					环形
2428	II	SU1	陶器	志野丸直	(16.1)	(6.1)				1.6	灰黄	灰白		1/5	○	3小期
2429	II	SU1	陶器	壺	(23.3)						灰白	灰白		1/5	○	常南II型式
2430	II	SU1	陶器	壺					(3.4)		灰白	灰白		1/5	○	25-4と同一個体の可能性 伊万里
2431	II	SU1	陶器	壺					(0.75)		灰白	灰白		1/5	○	伊万里
251	II	SU1	土師器	壺	(30.7)						にがい墨	にがい墨		1/5	○	
252	64	II	SU1	陶器	壺	14.6				2.5	灰白					ほぼ穴形
253	II	SU2	陶器	天目茶碗	(12.1)						褐灰	灰黄青		口縁部-全体部 口縁部-全体部	○	大室3
254	II	SU2	陶器	壺	(25.5)						にがい黄緑	褐		口縁部-全体部 口縁部-全体部	○	常南II型式
255	II	SU2	陶器	壺	(22.6)						淡黄緑	褐灰		1/6	○	24-29と同一個体の可能性 大室1
256	II	SU2	陶器	灰釉丸直	(5.6)						灰白	灰白		1/5	○	
257	7	64	II	SU2	陶器	灰釉丸直	16.4	8.6		1.9	赤灰	灰白		1/4	○	大室3後か 仰印
258	64	II	SU2	陶器	灰釉丸直	9.8	4.8		1.4		灰黄青	褐灰		1/3	○	大室4(志野)
259	II	SU2	土師質土器	かわらけ	(12.8)						淡黄青	灰白		1/10	○	非クロ
2510	64	II	SU2	土師質土器	かわらけ	(10.7)				2.3	淡黄青	灰白				
2511	64	II	SU2	土師質土器	かわらけ	9.2				2.6	にがい黄緑	淡黄		1/2	○	非クロ
2512	64	II	SU2	土師質土器	かわらけ	(11.6)					灰白			1/2	○	非クロ
2513	II	SU2	土師質土器	かわらけ	(19.2)						灰白			3/5	○	非クロ
2514	II	SU2	土師質土器	内耳綱	(27.0)	(20.9)					にがい墨			1/6	○	内耳形
2515	II	SU2	土師質土器	内耳綱	(26.4)						灰白			口縁部-全体部 1/5	○	内耳形
261	II	SU2	土師質土器	内耳綱	(25.0)	(26.2)	(30.9)				灰白			1/2	○	内耳形
262	II	SU2	土師質土器	内耳綱	(26.0)	(24.0)					西施形			1/2	○	内耳形
263	II	SU2	土師質土器	内耳綱	(27.4)	(21.6)					西施形			1/2	○	内耳形
264	II	SU2	土師質土器	内耳綱	(26.4)	(23.0)					西施形			1/3	○	内耳形
271	II	SU2	土師質土器	内耳綱	(30.2)	(23.4)					にがい黄緑			1/4	○	内耳形
272	II	SU2	土師質土器	内耳綱	(25.6)						灰白			口縁部-全体部 1/4	○	内耳形
273	II	SU2	土師質土器	内耳綱	(29.4)	(22.6)					灰白			1/3	○	内耳形
274	64	II	SU2	土師質土器	内耳綱	(24.0)	(19.6)				灰白			3/5	○	内耳形 足付
281	II	SU2	土師質土器	内耳綱	(26.6)						灰白			口縁部-全体部 1/5	○	内耳形
282	64	II	SU2	土師質土器	羽茎	(18.7)	(26.2)	(19.6)		14.6	にがい墨			2/5	○	
283	II	SU2	土師質土器	羽茎		(23.0)	(17.5)				灰白			口縁部-全体部 1/3	○	足付
284	64	II	SU2	土師質土器	羽茎並	(14.2)	(23.2)				にがい墨			2/5	○	足付
285	II	SU3	陶器	鉢		(6.7)					灰白	灰白		口縁部-全体部 1/2	○	小窓(志野)
286	II	SU3	陶器	鉢							にがい黄	黒褐		口縁部-全体部 1/6	○	大室1
287	II	SU3	陶器	鉢							淡黄	淡黄		口縁部-全体部 わずかに残存	○	中日期
288	II	SU3	土師質土器	かわらけ		(16.4)					灰白			1/5	○	非クロ
289	II	SU3	土師質土器	かわらけ		(9.0)				1.5	灰白			1/10	○	非クロ
290	II	SU4	陶器	天目茶碗	(10.5)						淡黄	黒褐		口縁部-全体部 1/6	○	大室4後
291	II	SU4	陶器	小天目				(2.6)			にがい墨	にがい墨		灰白-高台 わずかに残存	○	大室4(志野)
292	II	SU4	陶器	反輪幅反皿 か角皿		(6.6)					にがい黄	灰オリーブ		底部1/4	○	大室1・2
293	65	II	SU4	陶器	筋輪内丸皿	(16.4)	(6.3)			1.9	灰白	にがい黄		1/4	○	大室5後(志野)
294	II	SU4	土師質土器	かわらけ	(12.6)					2.5	にがい黄			1/10	○	非クロ
295	II	SU4	土師質土器	かわらけ	(14.4)					2.2	灰白			1/3	○	非クロ
296	II	SU4	土師質土器	かわらけ	9.5					2.4	反黄	反黄		3/5	○	非クロ
297	II	SU4	土師質土器	かわらけ	(18.3)					2.1	灰黄			2/5	○	非クロ
298	II	SU4	土師質土器	かわらけ	(10.3)					2.1	灰白			1/5	○	非クロ
299	II	SU4	土師質土器	かわらけ	(16.2)					1.9	淡黄			1/6	○	非クロ
300	II	SU4	土師質土器	かわらけ	(9.9)					2.6	淡黄			1/10	○	非クロ
301	II	SU8	陶器	天目茶碗							灰白	墨		口縁部-全体部 わずかに残存	○	大室1

回 番 号	原 産 地 名	通 名	種別	器種	法基(cm)					色調	釉	透 け 度	残存率	反 転 痕	備考
					口径	最大径	底径	高台径	脚高						
29.2	II	S28	陶器	鉢	鉢 内丸足	(8.7 ~ 16.9)	(6.4)	1.8~ 2.1	に赤い模 に赤い模	に赤い模	灰	1/4	○	大塚3巻(初山)	
29.3	II	S28	陶器	鉢	鉢丸足	(8.7)			に赤い模	に赤い模	灰	1/6	○	大塚3巻(初山)	
29.4	II	S28	陶器	灰釉 灰釉瓦瓶		(17.2)			灰黄	オリーブ黄	1/10	○	後 I・II 期		
29.5	II	S28	貿易陶器	青磁 通文瓶	(12.4)				灰白	灰綠	1/6	○	R-4型(麻糸通文)		
29.6	II	S28	貿易陶器	青磁瓶					灰	灰綠	1/3	○	A-2型(小4型 (1-2点型))		
29.7	II	S211	山系陶	瓶		(11.4)			灰白	灰綠	1/3	○	I-1期 赤切り板 使用板		
29.8	II	S211	陶器	壺		(10.6)			灰	灰綠	1/5	○	壺类		
29.9	II	S214	陶器	壺					灰	灰	1/6	○	口縁部 わざりに残存		
29.10	II	S215	陶器	壺		9.1			灰	灰	4/6	○	大塚1		
29.11	II	S215	陶器	灰釉罐					オリーブ黄	オリーブ黄	1/6	○	大塚1		
29.12	II	S215	陶器	灰釉罐			8.5		灰白	灰白	1/10	○	大塚1		
29.13	II	S215	陶器	灰釉罐反腹 丸足罐		(6.7)			灰	オリーブ 灰オリーブ	1/4	○	大塚1・2 素印		
29.14	IS	S215	陶器	鉢丸足	(10.4)	(5.4)	2.4		灰	灰白	1/3	○	大塚2		
29.15	II	S215	土師質土器	手わらひ	(9.7)		2.7		灰白	1/2	○	跡ロクロ			
29.16	II	S215	土師質土器	手わらひ	(8.7)		2.3		灰白	1/3	○	跡ロクロ			
29.17	II	S215	土師質土器	内耳罐	(23.2)				浅黄绿	1/6	○	内側形			
29.18	II	S215	貿易陶器	染付目					灰白	透明	1/6	○	日替		
29.19	II	S216	陶器	壺		(11.4)			に赤い模	灰	体部-底部/6	○	後IV期小 砂口瓶		
29.20	II	S216	山系陶	小瓶			3.5		灰白	1/6	○	I-2期 砂口瓶			
29.21	II	S218	陶器	灰釉罐		(6.0)			灰白	灰白	1/10	○	大塚3巻(5) 1小期(志野)		
29.22	II	SP16	陶器	鉢	(10.5)				灰白	灰白	1/4	○	1小期(志野)		
29.23	IS	SP18	陶器	志野丸足	(9.2)	(7.0)	2.4		に赤い模	灰白	1/4	○	1小期		
29.24	II	SP21	陶器	壺	(29.8)				灰白	灰白	1/6	○	後IV期板		
29.25	II	SP29	土師質土器	内耳罐					灰白	1/6	○	内耳罐			
29.26	II	SP36	陶器	天日茶碗					灰白	黑	1/6	○	3・4小期		
29.27	II	SP36	土師質土器	手わらひ	(12.8)	(3.9)	2.4		浅黄绿	1/10	○	跡ロクロ			
29.28	II	SP44	陶器	天日茶碗					灰白	1/4	○	大塚2			
29.29	II	SP50	土師質土器	手わらひ		(6.0)			浅黄绿	1/4	○	ロクロ 素切目			
29.30	II	S32	灰釉陶器	瓶	(17.2)				灰白	1/6	○	口縁部-体部			
30.1	I	N-55	灰瓦器	坪	(12.9)				灰白	1/4	○				
30.2	II	N-54	灰瓦器	坪	(18.2)	(6.2)	3.8		灰白	1/5	○				
30.3	II	N-54	灰瓦器	青台坪	(16.2)		(11.8)	3.8	灰白	1/5	○				
30.4	I	K-57	灰瓦器	青台坪	(13.9)		(10.7)	4.3	灰	1/2	○				
30.5	IS	L-55	灰瓦器	範坪	(13.0)	(8.6)	3.2		灰	1/3	○				
30.6	I	E-57	灰瓦器	範坪		(6.1)			灰白	1/4	○	体部-底部1/2			
30.7	I	N-55	灰瓦器	蓋	(13.8)				灰白	1/6	○				
30.8	I	L-55	灰瓦器	蓋	(18.8)		(10.9)	2.1	灰白	1/6	○				
30.9	I	L-55	灰瓦器	坪	(12.3)	(10.3)	2.3		に赤い模	1/2	○	丹経			
30.10	II	N-54	七寸器	坪	(14.2)	(12.2)	3.1		明赤模	1/2	○	丹経 岐山			
30.11	IS	N-55	七寸器	坪	(13.0)	(11.0)	3.1		明赤模	1/3	○	丹経 岐山			
30.12	IS	N-55	七寸器	坪	(16.0)	13.1	4.6		に赤い模	ほぼ先形	丹経 岐山?	○			
30.13	II	O-54	土師器	坪	(11.8)	(6.2)	3.2		に赤い模	1/2	○	丹経			
30.14	IS	N-54	土師器	坪	(13.5)	(7.7)	4.1		浅黄绿	3/4	○				
30.15	II	N-55	土師器	坪	(12.8)	(6.9)	3.1		浅黄绿	1/2	○	丹経			
30.16	I	I-58	土師器	蓋	(15.2)	(12.4)	1.6		に赤い模	1/2	○	丹経			
30.17	I	K-55	土師器	蓋	(15.4)		3.5	CL.0	に赤い模	1/3	○	丹経			
30.18	I	N-54	土師器	体	(20.0)	(23.4)			に赤い模	1/4	○	丹経			
30.19	I	N-54	土師器	蓋	(23.0)				に赤い模	1/6	○	口縁部-翼部			
30.20	IS	N-55	土師器	蓋	(18.2)				に赤い模	1/6	○	丹経			
30.21	I	I-56	土師器	瓶	(11.3)				に赤い模	1/6	○	口縁部-体部			
30.22	IS	I-55	土師器	坪	(8.0)		3.1		に赤い模	1/3	○	小型品			
30.23	I	N-54	土師器	手捏ね		(2.4)			模	1/6	○	高环形			
30.24	I	L-54	土師器	手捏ね					に赤い模	1/4	○	度鉢形			
30.25	IS	N-54	土師器	手捏ね	最大径 7.8	4.1			に赤い模	1/2	○	皮袋形			
30.26	I	I-55	陶器	天日茶碗	(12.3)				に赤い模	1/6	○	大塚1			
30.27	I	J-54	陶器	灰釉平瓶	(13.2)				灰白	オリーブ黄	1/6	○	後IV期古		
30.28	IS	I-55	陶器	鉢丸足反腹	(19.7)	(5.7)	1.8		灰	に赤い模	1/3	○	大塚3巻		

回数	番号	調査区分	遺物	種別	基準	法基(cm)				色調	種	保存者	保存状況	備考		
						口径	最大径	底径	高台径	基高	つまみ径					
30.29	3	K-54	陶器	灰陶	折縁中足	(14.6)						灰黄	淡黄	口縁部 わざりに残存	○	後凹窓古
30.30	3	K-56	陶器	繩目		(28.3)						灰黄	褐灰	口縁部 わざりに残存	○	大業1
30.31	3	N-55	土師質土器	かわらけ		(11.5)						漫黄褐		1/6	○	
30.32	65	N-54	土師質土器	かわらけ		(11.6)						漫黄褐		2/6	○	井戸クロ
30.33	3	N-55	土師質土器	かわらけ		(9.7)						漫黄褐		1/6	○	井戸クロ
30.34	3	K-57	土師質土器	かわらけ		(10.6)						漫黄褐		1/2	○	井戸クロ
30.35	3	M-53	土師質土器	かわらけ		(8.6)						漫黄褐		1/3	○	井戸クロ
30.36	34	K-56	青石陶器	青磁盤								灰白	明綠灰	わざりに残存	—	
31.1	3	SH204 -P2	須恵器	環		(9.3)						灰	体部～底部	○	—	
31.2	3	SH206	須恵器	環		(14.6)						黄灰		口縁部～体部 わざりに残存	○	
31.3	3	SH208	土師器	皿		(21.5)	(14.6)			1.8		明赤褐	口縁部～底部 1/9	○	丹焼 晴火	
31.4	3	SH209	須恵器	有台环						9.4		灰白	底部1/2	○		
31.5	66	SH209	須恵器	環		(16.7)						黄灰		ほびて形		
31.6	66	SH209	土師器	环		(11.7)		7.7			3.1	にぶい緑		完形	丹焼	
31.7	66	SH209	土師器	环		(11.8)		7.6			3.4	にぶい緑		完形	丹焼	
31.8	3	SH209	土師器	环		(12.6)	(10.6)					绿	口縁部～底部 1/4	○	丹焼	
31.9	3	SH209	土師器	环		(12.6)		(7.6)			3.6	明赤褐	口縁部～底部 1/4	○	丹焼	
31.10	3	SH209	土師器	便		(24.6)						にぶい緑	口縁部1/5	○		
31.11	66	SH209	土師器	小型盤		(14.0)	(14.4)	4.9		11.9		赤	赤	3/4	○	広山
31.12	3	SH210	土師器	环		(13.6)	(12.6)				3.4	にぶい緑	口縁部～底部 1/6	○	丹焼	
31.13	3	SH210	土師器	環		(21.6)						绿	口縁部1/6	○	丹焼	
31.14	3	SH210	土師器	小型盤		(14.5)	(16.6)					灰黄褐	口縁部～底部 1/4	○	丹焼	
31.15	3	SH211	灰陶器	碗						(7.4)		灰白	体部～高台1/6	○	条切り輪	
31.16	3	SH211	灰陶器	環坏		(12.0)		(7.4)			4.3	灰黄	口縁部～体部 1/6	○	丹焼	
31.17	3	SH211	灰陶器	盤		(16.8)					3.6	3.6	灰	1/4	○	
31.18	3	SH211	土師器	环		(12.9)	(8.4)				3.0	にぶい黄緑		1/5	○	丹焼 番書
31.19	66	SH211	土師器	环		(11.5)		7.7			3.5	绿	4/5	○	丹焼	
31.20	3	SH211	土師器	环		(11.6)	(8.2)				3.4	にぶい緑	1/6	○	丹焼	
31.21	66	SH211	土師器	高环		(12.7)		9.4			9.9	绿	1/2	○		
31.22	3	SH211	土師器	環		(24.4)						にぶい黄緑	口縁部 わざりに残存	○	丹焼?	
31.23	66	SH212	須恵器	蓋		14.9					3.5	2.7	漫黄褐	2/3	○	
31.24	66	SH212	須恵器	蓋		14.8					3.7	2.8	漫黄褐	ほびて形	○	
31.25	3	SH212	上絹器	環		(25.6)	(26.1)					にぶい緑	口縁部～体部 1/2	○		
32.1	3	SH212	土師器	环		(12.3)	(6.4)					绿	1/3	○	丹焼	
32.2	66	SH212	土師器	环		(11.8)		7.1			3.6	にぶい緑	明赤褐	○	完形	丹焼
32.3	66	SH212	土師器	环		(12.2)		7.4			3.4	にぶい緑	明赤褐	完形	丹焼	
32.4	67	SH212	土師器	环		(11.2)		7.5			3.2	漫黄褐	7/8	○	丹焼	
32.5	67	SH212	土師器	環		(25.7)	(25.8)	8.8			29.9	黄褐				
32.6	67	SH212	土師器	環		(26.9)	(27.0)	8.7			30.9	黄褐				
32.7	7	SH212	土師器	環		(25.8)	(7.7)					绿	口縁部～底部	○	半形	
32.8	6	SH212	土師器	環		(23.3)						淮黄褐	口縁部～肩部 1/3	○		
33.1	3	SH213	灰陶器	蓋		(17.6)						灰	1/5	○		
33.2	3	SH213	土師器	环		(12.2)	(6.4)				3.2	にぶい緑	○	1/2	○	丹焼
33.3	3	SH213	土師器	环		(11.8)	(6.4)				3.4	にぶい緑	1/4	○	丹焼	
33.4	3	SH213	土師器	皿		(14.3)	(12.3)				2.4	にぶい緑	1/5	○	半形	
33.5	3	SH213	土師器	皿		(16.3)	(14.4)				2.3	にぶい緑	3/5	○	丹焼	
33.6	67	SH213	土師器	皿		(14.1)	(14.6)				1.7	にぶい緑	4/5	○	丹焼 型舟	
33.7	7	SH213	土師器	環		(24.5)	(26.0)					绿	口縁部～体部 1/4	○		
33.8	8	SH213	土師器	環		(25.6)						淮黄褐	口縁部1/4	○		
33.9	67	SH213	土師器	小型盤		(15.2)	(15.9)	4.3			12.4	漫黄褐	ほびて形	1/3	○	
33.10	3	SH213	土師器	小型盤		(14.8)	(16.9)					にぶい黄褐	口縁部～体部 1/2	○		
33.11	3	SH214	土師器	環		(23.4)						淮黄褐	口縁部～体部 1/2	○		
33.12	3	SH215	土師器	环		(10.7)	(6.3)				2.7	にぶい黄褐	1/4	○	丹焼	
33.13	67	SH215	土師器	环		(10.1)		6.1			4.3	にぶい黄褐	2/3	○		
33.14	67	SH215	土師器	環		(10.6)	(5.2)				4.7	淮黄褐	○	1/2	○	
33.15	3	SH215	土師器	環		(27.7)						灰白	口縁部 わざりに残存	○		
33.16	3	SH215	土師器	環		(20.1)						にぶい黄褐	口縁部1/4	○		

固 形 番 号	定 名 通 用 名 称 及 規 格	構 造	種別	器種	法規(cm)					色調	神	固 形 番 号	現存率	反 応 実 験	備 考	
					口栓	最大径	底高	高台径	踏面							
23.17	II SB215	土師器	手捏ね		(4.9)					にぶい黄緑		2/3	○		登用	
23.18	II SB215	土師器	手捏ね	(4.3)	(4.3)					にぶい黄緑		1/2	○		登用	
24.1	II SB216	土師器	手捏ね	坪	(12.8)					にぶい黄緑		1/4	○			
24.2	II SB216	土師器	有台坪		(16.2)					灰白		1/5	○		丹塗	
24.3	II SB216	土師器	有台坪		(12.8)					淡黄緑		1/3	○		丹塗	
24.4	II SB216	土師器	焼		(24.8)					にぶい緑						
24.5	II SB216	土師器	焼		(24.8)					緑						
24.6	II SB216	土師器	焼		22.9					にぶい黄緑		○	口縁部3/5			
24.7	II SB216	土師器	焼		23.1					にぶい黄緑			○	口縁部4/5		
24.8	II SB216	土師器	鉢		(14.3)					緑		1/6	○			
24.9	II SB217	須恵器	皿		(18.9)		(18.9)		2.1	赤		2/6	○			
24.10	II SB217	土師器	坪		(11.8)		(7.2)		3.1	にぶい緑		2/3	○		丹塗 暗文	
24.11	II SB218	土師器	焼		(26.2)					緑						
24.12	II SB218	土師器	焼							褐灰						
24.13	II SB219	須恵器	皿		10.8				3.2	1.7	赤白					
24.14	II SB219	須恵器	高盤		15.2					灰		4/5	○			
24.15	II NB219	須恵器	鉢		(19.9)					灰						
24.16	II SB219	土師器	坪		12.3		8.7		3.6	にぶい黄緑 削赤角		○	ほぼ完形		丹塗	
25.1	II SB219	土師器	焼		19.6					にぶい緑						
25.2	II SB219	土師器	焼		(26.7)					浅黄緑						
25.3	II SB219	土師器	焼		(19.2)		(19.8)			にぶい緑		○	口縁部～体部 1/4			
25.4	II SB219	土師器	小型盤		(13.6)		(14.0)			緑						
25.5	II SB219	土師器	手捏ね		6.6				3.8	緑						
25.6	II SB220	土師器	小型盤		(14.9)		(16.8)			浅黄緑		○	1/5	○		
25.7	II SB220	土師器	手捏ね		2.7		2.5		2.9	灰白						
25.8	II SB221	土師器	焼		23.9		24.7			浅黄緑		○	2/3	○		
25.9	II SB221	土師器	焼		(26.0)					浅黄緑						
25.10	II SB221	土師器	焼		(29.8)		(30.2)			にぶい緑		○	口縁部～体部 1/4			
26.1	II SB222	灰釉陶器	壺				(6.6)			灰白						
26.2	II SB222	須恵器	小型盤		(5.4)		(5.4)			灰白						
26.3	II SB222	須恵器	箱付				(16.0)			灰白						
26.4	II SB222	須恵器	蓋		(16.0)					灰白		1/4	○			
26.5	II SB222	土師器	小型盤		(16.0)		(16.3)			緑						
26.6	II SB223	灰釉陶器	壺				(7.8)			灰白						
26.7	II SB223	灰釉陶器	壺		(12.2)		(7.0)		2.6	灰白		1/4	○	赤切り板 番ね焼き		
26.8	II SB223	土師器	焼		(26.0)					にぶい緑		○	口縁部1/6		丹塗?	
26.9	II SB223	土師器	小型盤		14.8		14.9			浅黄緑						
26.10	II SB226	灰釉陶器	壺							灰白						
26.11	II SB227	須恵器	蓋		10.0				3.8	灰白						
26.12	II SB227	須恵器	蓋		9.2				4.0	灰						
26.13	II SB227	土師器	焼		(21.0)					にぶい黄緑		○	口縁部1/2			
26.14	II SB227	土師器	焼		19.7		6.5		28.7	黄緑						
26.15	II SB227	土師器	焼		(24.0)		(16.0)		28.2	緑		1/6	○			
26.16	II SB228	須恵器	坪		(12.3)					灰		1/4	○			
26.17	II SB228	土師器	坪		(15.9)		(13.7)		2.6	にぶい黄緑		○	1/3	○	丹塗 暗文	
26.18	II SB228	土師器	小型盤							にぶい黄緑						
27.1	II SB228	土師器	焼		(36.0)					にぶい緑		○	口縁部1/7			
27.2	II SB228	土師器	蓋		(21.0)				(18.9)	にぶい緑		○	口縁部～体部 1/6	○	把手に穿孔	
27.3	II SF234	灰釉陶器	蓋		14.1				6.6	3.6						
27.4	II SF234	土師器	坪		12.5		7.2		3.3	灰白 灰オーバー		2/3	○		重ね焼き	
27.5	II SF234	土師器	坪		12.1		6.3		3.6	にぶい黄緑 墨		○	ほぼ完形		丹塗	
27.6	II SF234	土師器	坪		13.4		7.0		3.6	にぶい黄緑		4/6	○		丹塗	
27.7	II SF234	土師器	焼		(23.1)					にぶい黄緑		3/4	○		丹塗	
27.8	II SF236	灰釉陶器	長頸瓶				(17.6)			灰白		1/3	○			
27.9	II SF239	土師器	焼		(22.7)					淡黄緑		○	口縁部～体部 1/6	○		
27.10	II SF239	土師器	坪		(7.0)		(6.0)		3.6	墨		1/3	○			
27.11	II SF242	灰釉陶器	焼		(11.0)		6.0		3.6	灰白		1/2	○		小型丸	
27.12	II SF262	須恵器	坪		(16.3)				(7.6)	6.6	灰白		1/5	○		赤切り板
27.13	II SF262	土師器	坪		(11.0)		(8.0)		3.7	にぶい緑		○	1/2	○	丹塗	
27.14	II SF262	土師器	墨		(14.2)		(12.0)		2.2	にぶい黄緑		○	1/4	○	丹塗	

回 番	字 體 固 有 区	造 形	種 別	器 種	法規(cm)					色 調	種 類	保 存 付 帯	反 転 米 開 闊	備 考
					口径	最大径	底径	高台径	幅高					
37.15.69	■	SF263	環底器	環	(16.2)		(16.6)		6.6	灰			1/3	○
37.16	■	SF263	環底器	環	(14.5)					灰			1/4	○
37.17	■	SF263	土師器	环	(14.5)		(16.8)		3.3	淡黄緑			1/4	○
37.18	■	SF263	土師器	有台环					8.9	淡黄緑			1/4	○
38.1	■	SD254	環底器	环	(16.4)				4.2	灰白			1/2	○
38.2	■	SD254	環底器	環	(15.7)					灰	灰白		环剥1/5	○
38.3.70	■	SD254	環底器	環	9.4	11.6			3.1	3.8	灰白		2/3	
38.4	■	SD254	土師器	环	(6.8)					にぶい緑	口縁部～体部		小型品	○
38.5.70	■	SD254	土師器	半捏ね			6.6			にぶい黄緑			1/2	○
38.6.70	■	SD254	土師器	手捏ね		5.5				にぶい緑			2/3	○
38.7	■	SD254	土師器	環	(16.1)					にぶい黄緑	口縁部1/4		高形形	○
38.8	■	SD259	土師器	便	(22.4)					にぶい黄緑	口縁部1/5		高形形	○
38.9	■	SD260	土師器	便	(22.4)					にぶい黄緑	口縁部1/3		高形形	○
38.10	■	SP250	土師器	便	(24.4)					にぶい黄緑	口縁部1/6		高形形	○
38.11	■	SP302	須冠器	瓶頭状	(16.5)					灰	瓶部～底部1/2			○
38.12	■	SP304	灰陶胸器	瓶					7.4	浅黄	体部～高台		赤切り痕　青ねじ痕	○
38.13	■	SP304	土師器	便	(24.4)	(26.2)				灰白	口縁部～体部			○
38.14.70	■	SP313	灰陶胸器	瓶	(16.1)				7.4	4.8	灰白		1/3	○
38.15.70	■	SP313	土師器	便	15.0	22.7	8.3		28.6	赤褐色			ほぼ丸形	○
38.1	■	SX216	土師器	便	(16.2)					にぶい黄緑	口縁部～肩部		○	1/4
38.2	■	SX218	環底器	環	(7.8)	(9.8)				灰	口縁部～体部		赤切り痕	○
38.3.70	■	SX218	土師器	环	9.5	5.5	3.6			にぶい黄緑			2/6	
38.4.70	■	SX218	土師器	环	(11.4)	4.9	3.6			にぶい黄緑			2/3	○
38.5	■	SX218	土師器	环	9.4	6.5	4.5			緑			3/4	
38.6.70	■	SX218	土師器	环	10.9				5.6	根			2/4	
38.7.70	■	SX218	土師器	环	(16.7)	(7.1)	5.4			根			2/3	○
38.8.71	■	SX218	土師器	便	17.6	(18.2)	6.0		28.9	黄緑			2/3	○
38.9.71	■	SX218	土師器	便	(20.0)		5.0		28.6	根			2/3	○
38.10.71	■	SX218	土師器	小型甕	(14.7)	(14.8)	(7.2)		20.1	黄緑			1/3	○
38.11.71	■	SX218	土師器	小型甕	(16.9)					灰白			3/4	○
38.12	■	SX218	環底器	瓶	(18.2)					にぶい緑	口縁部1/6			○
38.13	■	SX218	土師器	便			5.2			灰黄	体部～底部		赤切り痕	○
38.14.71	■	SX218	土師器	便						根	脚部1/2			○
40.1.71	■	SX218	土師器	便	(8.0)	18.3				淡黄緑	口縁部1/4		40-2と同一個体の可能性	○
40.2	■	SX220	土師器	便		(5.0)				淡黄緑	体部2/3		40-1と同一個体の可能性	○
40.2.71	■	SX220	土師器	便	16.8	5.5	28.2			根			2/3	
40.4	■	SX224	土師器	便	(21.2)					にぶい緑	口縁部～体部			○
40.5	■	SX225	灰陶胸器	瓶						灰白	体部～瓶部1/3			○
40.6	■	SX225	灰陶胸器	瓶						灰白	体部～瓶部1/4			○
40.6.72	■	SX225	土師器	环	(13.2)	(11.0)	3.4			淡黄			1/3	○
40.7	■	SX226	灰陶胸器	瓶					7.6	灰白			丹波	
40.8	■	SX226	灰陶胸器	瓶					7.2	にぶい黄緑	体部～瓶部1/2		使用痕	○
40.9	■	SX226	灰陶胸器	瓶直	(18.0)					灰白			1/10	○
40.10	■	SX226	灰陶胸器	瓶底	(16.6)		0.8	2.3		灰白			1/5	○
40.11	■	SX226	灰陶胸器	瓶	(15.9)		0.8	2.5		灰白			1/10	○
40.12.72	■	SX226	土師器	环	12.8	6.1	3.5			にぶい緑	ほぼ丸形		丹波	○
40.13	■	SX226	土師器	环	(16.0)					淡黄			1/4	○
40.14	■	SX226	土師器	有台盆			(8.0)			にぶい根	体部～高台1/3		丹波	○
40.15	■	SX226	土師器	有台盆	(14.3)		(7.9)	2.3		淡黄緑	口縁部～百合			○
40.16.72	■	SX227	環底器	环	(16.4)		(7.0)	6.2		灰白			1/2	○
40.17	■	SX227	土師器	便	(23.3)					淡黄緑	口縁部～体部		わざかに残存	○
40.18.72	■	SX228	灰陶胸器	瓶	(16.4)		0.11	2.9		内黄			2/5	○
40.19.72	■	SX228	土師器	环	10.8 ~11.8	6.7		3.4		根	ほぼ丸形		丹波	○
40.20.72	■	SX228	土師器	环	13.3	7.4		3.5		他			7/8	○
40.21	■	SX228	土師器	有台环	(12.4)		(7.4)	4.4		灰白			1/6	○
41.1.84	■	SP-P2	質陶胸器	集付瓶	(13.2)					灰白	口縁部～体部		わずかに残存	○
41.2	■	SH11- -P5	陶器	铁袖内壳皿	(11.3)		(6.6)	1.5		暗灰黄	脚灰		1/6	○
41.3.72	■	SH11- -P5	陶器	铁袖内壳皿	(10.3)		5.6	2.1		灰白			大業3後(初山)	
41.4	■	SH11- -P5	陶器	鐵林						褐灰	灰赤		大業4(志戸呂)	
41.5	■	SH11- -P5	土師質土器	かわらけ	(9.3)		(3.7)	2.2		灰白			津ヨクロ	

留番	番号	測定区	測定	種別	器種	法規(cm)					盤付番	現存率	反転使用例	備考	
						口幅	最大径	底径	高台部	器高					
41-6	7-73	■ SF42	山茶碗	小里		7.9		3.7		1.9				ほぼ完形	日常 細切り煎
41-7	7-72	■ SF42	土師質土器	かわらけ		8.4		3.7		1.6				ほぼ完形	ロクロ 細切り煎
41-8	7-72	■ SF42	土師質土器	かわらけ		8.2		4.6		1.6				ほぼ完形	ロクロ 細切り煎
41-9	7-72	■ SF42	土師質土器	かわらけ		8.2		4.0		1.8				ほぼ完形	ロクロ 細切り煎
41-10	7-72	■ SF42	土師質土器	かわらけ		8.9				1.9				ほぼ完形	津ロクロ 高台穿孔
41-11	■ SF44	陶器	抹釉土器	(10.8)							灰白	オリーブ黄		口縁部~体部 1/9	後IV期古
41-12	■ SF44	陶器	天目系碗							4.8	灰白	灰		高台部分	大室2後(初山)
41-13	■ SF48	山茶碗	碗							(7.9)	灰白			体部~高台	細切り煎 使用煎
41-14	■ SF48	福惠器	小型盒	(8.0)	(9.0)	(7.0)					灰白			2/5	広口
41-15	■ SD26	陶器	小天目	(8.0)							に広い開口	灰白		は縁部~体部 1/8	大室2後(初山)
41-16	■ SD37	山茶碗	碗					(6.4)		灰白				高台部分	日常 細切り煎 使用煎 もと煎
41-17	■ SD38	山茶碗	小碗					(3.9)		灰白				1-2期	細切り煎
41-18	■ SD38	山茶碗	小碗					(3.9)		灰白				高台部分	1-2期 細切り煎
41-19	■ SD38	山茶碗	小豆	(8.0)		(6.0)			1.5	灰白				1/2	1-2期 細切り煎
41-20	■ SD38	山茶碗	碗							7.0				1/2	1-1期 細切り煎 砂目煎
41-21	■ SD38	山茶碗	碗			(6.0)				灰白				高台部分1/2	1-1期 細切り煎 使用煎
41-22	■ SD38	山茶碗	碗			(7.2)				灰白				高台部分	1-1期 細切り煎
41-23	■ SD38	山茶碗	碗			6.8				灰白				体部~高台	1-1期 細切り煎 使用煎
41-24	■ SD38	山茶碗	碗			(7.0)				灰白				高台部分1/2	1-1期 細切り煎
41-25	■ SD38	山茶碗	碗			(6.0)				灰白				1/2	1-1期 細切り煎 使用煎
41-26	■ SD38	山茶碗	碗			(7.7)				灰白				1/2	1-1期 細切り煎 使用煎
41-27	■ SD38	山茶碗	碗			(7.0)				灰白				高台部分	1-1期 細切り煎
41-28	■ SD38	山茶碗	碗	(15.1)				6.2	6.6	灰白				高台部分	1-1期 細切り煎 やも煎
41-29	■ SD38	山茶碗	碗			6.3				灰白				1/2	1-1期 細切り煎 やも煎
41-30	■ SD38	山茶碗	碗			(7.0)				に広い黄橙				高台部分	1-1期
41-31	■ SD38	山茶碗	碗			7.6				灰白				1/2	1-1期 細切り煎 使用煎
41-32	■ SD38	山茶碗	碗			7.0				に広い黄橙				高台部分	1-1期 細切り煎 やも煎
41-33	■ SD38	山茶碗	碗			6.9				に広い黄橙				1/4	1-1期 細切り煎
41-34	■ SD38	山茶碗	碗			8.2				灰白				高台部分	1-1期 細切り煎
41-35	■ SD38	山茶碗	碗			7.4				灰白				1/2	1-1期 細切り煎
41-36	■ SD38	山茶碗	碗			7.0				灰白				高台部分	1-1期 使用煎
41-37	■ SD38	山茶碗	碗			8.0				灰白				1/2	1-1期 細切り煎 使用煎
42-1	■ SD38	山茶碗	碗	(14.3)		5.8	4.5			灰白				1/2	1-2期 細切り煎
42-2	■ SD38	山茶碗	碗	(13.6)		5.7	4.5			灰白				1/6	1-2期 細切り煎
42-3	■ SD38	山茶碗	碗			(6.5)				灰白				高台部分	1-2期 細切り煎
42-4	■ SD38	山茶碗	碗			(6.2)				灰白				1/2	1-2期 細切り煎
42-5	■ SD38	山茶碗	碗			6.4				灰白				1/2	1-2期 細切り煎 使用煎 砂目煎
42-6	■ SD38	山茶碗	碗			6.4				灰白				高台部分	1-2期 細切り煎 使用煎
42-7	■ SD38	山茶碗	碗			6.1				灰白				1/2	1-2期 細切り煎
42-8	■ SD38	山茶碗	碗			6.7				灰白				1/2	1-2期 細切り煎
42-9	■ SD38	山茶碗	碗			(6.0)				灰白				1/2	1-2期 細切り煎 やも煎
42-10	■ SD38	山茶碗	碗			5.7				灰白				1/2	1-2期 細切り煎
42-11	■ SD38	山茶碗	碗			(5.5)				灰白				1/2	1-2期 細切り煎 使用煎
42-12	■ SD38	山茶碗	碗			(6.5)				灰白				1/2	1-2期 細切り煎
42-13	■ SD38	山茶碗	碗			(6.0)				灰白				1/2	1-2期
42-14	■ SD38	山茶碗	碗			(7.0)				灰白				1/2	1-2期 細切り煎 やも煎
42-15	■ SD38	陶器	灰釉丸瓶						に広い開口	に広い灰白				1/6	
42-16	■ SD38	陶器	灰釉丸瓶							灰白	灰白			高台1/8	中I・日常
42-17	■ SD38	陶器	灰釉丸瓶							灰白	灰白			1/5	大室3後(初山)
42-18	■ SD38	土師器	小型盒	13.2	(14.3)					に広い黄橙				口縁部~体部 2/3	
42-19	■ SD49	灰釉陶器	瓶					6.9		灰白				高台部分4/5	使用煎
42-20	■ SD49	灰釉陶器	瓶					(7.0)		灰白				高台部分4/5	使用煎
42-21	■ SD43	山茶碗	碗					(6.7)		灰白				底部1/2	I-1期 使用煎
42-22	■ SD43	山茶碗	碗					(7.2)		灰白				底部1/2	I-1期 使用煎
42-23	■ SD43	山茶碗	碗					(6.7)		灰白				底部1/2	I-1期 使用煎
42-24	■ SD43	山茶碗	碗					8.9		灰白				高台部分 体部~一部	I-1期 使用煎 やも煎

回 番 号	万 葉 区 分	國 籍	種 別	器種	法身(cm)					色調	輪	保存率	反 復 剥 離	備考
					径	最大径	底径	高台径	翻高					
4225	■	SD43	山茶樹	輪				4.1		灰黃		高台部分	○	I~2期 細切り板 使用後 ソミ紙
4226	■	SD43	山茶樹	輪				(4.6)		灰黃		体部~底部1/2	○	I~2~3期 使用後 ソミ紙
431	■	SD43	山茶樹	輪	(15.2)			0.6	5.6	李褐灰		○	1/2	○
432	■	SD43	山茶樹	輪				0.7	5.9	灰黃			2/5	○
433	■	SD43	山茶樹	輪				7.5		灰黃		体部~底部	○	III~I期 使用後 ソミ紙
434	■	SD43	灰袖樹	輪				6.0		灰白		高台部分4/5	○	南谷谷から 切り落し 使用後
435	73	■	SD44	山茶樹	輪	(16.2)		7.6	4.9	灰白 灰			1/2	○
436	673	■	SD44	山茶樹	輪	17.6		8.3	6.0	灰黃			2/3	
437	73	■	SD44	山茶樹	輪	(17.4)		8.6	5.7	オリーブ黄			1/2	○
438	73	■	SD44	山茶樹	輪	16.1		7.9	5.3	灰オリーブ			7/8	
439	973	■	SD44	山茶樹	輪	14.8		8.3	4.5	灰白			ほぼ完形	III~I期 細切り板 ソミ紙
440	10	■	SD45	南洋 櫻	楕林			(9.7)		褐黃	褐色	1/5	○	大第4
441	11	■	SD48	土佐賀芋	内耳輪	(25.0)	(26.4)	(26.3)		褐色		○	1/4	○
442	12	■	SD48	南洋 櫻	内耳輪 はさみ根	(10.3)				にぶい黃櫻	灰白	口縫部~体部	○	大第1
443	1	■	SD49	山茶樹	小豆			2.5		灰白		底部	■I~期 細切り板	
444	2	■	SD49	山茶樹	小豆			3.7		浅黃		底部		
445	3	■	SD49	山茶樹	輪			7.0		灰白		高台部分1/2	○	
446	4	■	SD49	山茶樹	輪			9.3		灰白		高台部分	○ I~I期 細切り板 ソミ紙	
447	5	■	SD49	南洋 櫻	緑袖小豆	(11.2)				灰白	灰白	口縫部~体部	○	大第3
448	6	■	SD49	南洋 櫻	鉄袖根被	(11.3)				灰白	にぶい緑	体部~高台1/3	○	大第3的
449	7	■	SD49	南洋 櫻	鉄袖			4.8		褐黃	褐色	高台部分	○	3~4~5期
4410	8	■	SD49	南洋 櫻	天目茶樹	(11.2)		4.4	(5.8)	にぶい緑	にぶい緑	1/8		大第4後
4411	9	■	SD49	南洋 櫻	天目茶樹			4.9		灰白	黒	体部~高台1/3	○	2小期(美濃)
4412	10	■	SD49	南洋 櫻	椎村天目			5.1		灰白	暗赤褐	高台部分	○	2小期(美濃)
4413	11	■	SD49	南洋 櫻	天目茶樹			6.0		灰白	黒褐	高台部分1/2	○	5~6小期
4414	12	■	SD49	南洋 櫻	天目茶樹	(11.3)				浅黃	暗赤褐	口縫部~体部	○	7小期(瀬戸内)
4415	13	■	SD49	南洋 櫻	欅葉開形輪	(10.7)				灰白	褐色	口縫部~体部	○	1~2小期(美濃)
4416	14	■	SD49	南洋 櫻	黄蘿豆			(16.0)		灰白	灰蘿豆	体部~高台	○	1~4~5期
4417	15	■	SD49	南洋 櫻	探林			(11.9)		褐黃櫻	灰	体部~底部1/3		後定期間
4418	16	■	SD49	南洋 櫻	探林	(31.2)		(16.4)	(12.3)	浅黃	にぶい黄櫻	1/5	○	大第3後(初山)
4419	17	■	SD49	南洋 櫻	櫻林	(37.9)				灰	灰櫻	口縫部	○	大第3後(初山)
4420	18	■	SD49	南洋 櫻	櫻林			(19.4)		青背景 にぶい櫻	灰赤	体部~底部1/4	○	大第4(志戸呂)
4421	19	■	SD49	南洋 櫻	櫻林	(36.2)				青背景 にぶい櫻	灰赤	口縫部	○	大第4前(志戸呂)
4422	20	■	SD49	南洋 櫻	櫻林	(31.6)				にぶい黄櫻	灰赤	口縫部	○	4小期(瀬戸内)
4423	21	■	SD49	南洋 櫻	櫻林	(34.8)				浅黃	にぶい黄櫻	口縫部	○	5~6小期
451	22	■	SD49	脚絆	片口絆	(24.5)				にぶい黄	灰赤	わざかに残存	○	常滑9型式
452	23	■	SD49	土佐賀芋	内耳輪	(27.2)	(28.2)	(28.3)		にぶい黄櫻		○	1/6	○
453	24	■	SD49	貢昌南	青磁不規					灰白	灰オリーブ	口縫部 わざかに残存		
454	25	24	■	SD49	貢昌南	青磁				灰白	灰オリーブ	体部 わざかに残存		B-I期(1~5期)
455	273	■	SD50	南洋 櫻	鉄袖開形輪	(16.9)				灰白	灰オリーブ	体部~高台1/6	○	大第4(志戸呂)
456	6	■	SD50	南洋 櫻	灰袖丸足	(16.9)				灰白	灰白	1/4	○	大第4(志戸呂)
457	7	■	SD50	南洋 櫻	灰袖丸足	(16.9)		(8.4)	2.1	にぶい黄	オリーブ黄	1/4	○	大第4前(志戸呂)
458	8	■	SD50	貢昌南	青磁開口文 白磁無					灰白	綠灰	体部 わざかに残存	○	三輪
459	9	■	SD51	南洋 櫻	灰白丸足			(5.3)		灰白	浅黃	体部~底部1/4	○	1~4小期
4510	10	■	SD51	南洋 櫻	櫻林	(25.3)				灰白	褐櫻	口縫部 わざかに残存	○	大第2的
4511	11	■	SD52	山茶樹	小柄			4.6		灰白		高台部分	1~1期 細切り板 使用後	
4512	12	■	SD52	山茶樹	小豆	(3.4)				灰白		底部2/3	○	■I~期 細切り板
4513	13	■	SD52	山茶樹	小豆	3.2				灰白		底部	■I~期 細切り板	
4514	14	■	SD52	山茶樹	輪			7.6		灰白		高台部分	○	青磁 細切り板 使用後 ソミ紙
4515	15	■	SD52	山茶樹	輪			6.6		灰白		高台部分	○	II~I期 細切り板
4516	16	■	SD52	山茶樹	輪			6.5		灰白		高台部分 体部~底部	○	III~I期 細切り板 ソミ紙
4517	17	■	SD52	山茶樹	輪			6.2		灰白		高台部分		II~2期 細切り板
4518	18	■	SD52	貢昌南	白磁無			(7.0)		灰白	白	高台1/6	○	三輪
4519	19	■	SD54	山茶樹	小柄			(4.0)		黃灰		体部~高台1/2	○	■I~期 底部
4520	20	■	SD54	山茶樹	輪			2.7		灰黃		体部~高台	○	■I~期 細切り板 重ね巻き底

回 番 号	可 用 部 位	種 類	部 位	法基(cm)					監 督 者	既存庫	反 復 周 期	備 考	
				口径	最大径	底座	高台径	脚高					
45.21	Ⅲ	S054	山茶瓶	碗			8.0			灰黃		体部～高台	
45.22	Ⅲ	S054	山茶瓶	碗			7.9			灰黃		体部～高台	
45.23	Ⅲ	S054	山茶瓶	碗			7.3			灰黃		体部～高台	
45.24	Ⅲ	S054	山茶瓶	飲物瓶	(10.4)	(5.4)	2.6		にぶい褐色	暗赤紅	1/3	○	■-1期 使用後 セミ季
45.25	Ⅲ	S054	山茶瓶	飲油瓶	(11.0)				にぶい褐色	暗赤紅	○		■-2期 手切り瓶 使用前
45.26	Ⅲ	S054	山茶瓶	火口茶瓶	(11.0)				深褐色	オリーブ黃	○		■-2期 手切り瓶 使用後 セミ季
45.27	Ⅲ	S054	山茶瓶	天目茶瓶	(12.0)				青灰	にぶい褐色	○		大窓1
45.28	Ⅲ	S054	山茶瓶	灰地銀反皿			5.1		灰白	オリーブ黃	○		大窓1 菊印?
45.29	Ⅲ	S054	山茶瓶	飲油小瓶			(6.3)		灰黃紅	黃褐	1/4		大窓1
45.30	Ⅲ	S054	山茶瓶	鐵輪小瓶					浅黃	にぶい赤褐色	○		大窓1
45.31	Ⅲ	S054	山茶瓶	鐵輪大瓶					褐色	暗紅黃			大窓3後(初山)
45.32	Ⅲ	S054	山茶瓶	えんごろ 呪符	(16.1)				にぶい褐色	暗赤	○		大窓3後(初山)
46.03	Ⅲ	S054	山茶瓶	鐵輪桶			(15.1)		にぶい褐色	西黃	体部～高台1/5		後IV期(志戸品)
46.1	Ⅲ	S054	山茶瓶	攝鉢	(27.0)				浅黃	暗紅黃	○		後IV期新
46.2	Ⅲ	S054	山茶瓶	摺鉢	(30.2)				にぶい褐色	灰	○		大窓2
46.3	Ⅲ	S054	山茶瓶	摺鉢	(26.1)				にぶい褐色	灰	○		大窓3前
46.4	Ⅲ	S054	山茶瓶	摺鉢	(27.4)	(13.0)	10.6		灰赤		1/2	○	大窓3後(初山)
46.5	Ⅲ	S054	山茶瓶	摺鉢	(26.7)				灰白	灰	○		大窓4後
46.6	Ⅲ	S054	山茶瓶	束	(43.7)				灰赤	灰赤	○		常清11世纪
46.7	Ⅲ	S054	土師質土器	かわらけ	(11.0)				灰黃		○		常清10日
46.8	Ⅲ	S054	土師質土器	かわらけ			5.0		淺黃	黃			ロクロ 手切り瓶
46.9	Ⅲ	S054	土師質土器	内耳瓶	(25.4)	(26.3)			褪		○		半球型
46.10	Ⅲ	S054	土師質土器	内耳瓶	(27.3)	(21.0)			灰白		○		内輪形
46.11	Ⅲ	S054	貿易陶器	青磁			(4.0)		灰	綠	高台部分1/3		B-1期(1-5期)
46.12	Ⅲ	S054	貿易陶器	青磁文瓶					灰白	暗緑狀	○		B-1期(1-5期)
46.13	Ⅲ	S054	貿易陶器	青磁文瓶					灰白	明緑狀	○		B-1期(1-5期)
46.14	Ⅲ	S054	貿易陶器	青磁瓶					暗緑狀	暗綠	○		A-2期小(1-4期) (1-2期4)
46.15	Ⅲ	S054	土師器	瓶					暗緑狀	暗綠	把手部分		穿孔
46.16	Ⅲ	S054	土師器	手捏2	2.3		3.2	2.8	にぶい黄緑 にぶい褐		ほぼ完形		穿孔
46.17	Ⅲ	S054	土師器	手捏2			(2.6)		浅黃		1/3	○	瓶形
47.1	Ⅳ	S054	灰釉陶器	耳壺	(11.0)	(5.8)	5.0	1.9 ~ 2.9	灰白		2/3	○	手切り瓶
47.2	Ⅳ	S054	灰釉陶器	碗	(16.0)		(7.0)	6.3	灰黃		1/4	○	使用痕
47.3	Ⅳ	S054	灰釉陶器	碗	(16.2)		(8.5)	5.4	灰白		1/6	○	
47.4	Ⅳ	S061	山茶瓶	瓶				7.3	灰黃	体部～底座4/5	○	■-2期 手切り瓶 使用瓶	
5.7	Ⅴ	S067	陶器	腹井内尖足	(11.0)	(6.1)	2.3		灰赤	にぶい褐色	1/2	○	大窓3後(初山)
47.6	Ⅳ	S069	土師質土器	内耳瓶	25.0		21.6	13.2	灰白		○		内輪形
47.7	Ⅳ	S071	山茶瓶	小瓶				(6.5)	灰白	藍銅～高台	○	■-1期 手切り瓶 セミ季	
47.8	Ⅳ	S071	山茶瓶	小瓶				4.2	灰白	藍銅～高台		■-2期	
47.9	Ⅳ	S071	山茶瓶	小瓶				(5.2)	灰白	藍銅～高台1/2		■-2期	
47.10	Ⅳ	S071	山茶瓶	碗	(16.0)		(7.2)	5.9	灰白		1/5	○	■-1期 手切り瓶 セミ季
47.11	Ⅳ	S071	山茶瓶	碗				(7.1)	灰白	藍銅～高台1/2	○	■-1期	
47.12	Ⅳ	S071	山茶瓶	碗				(6.2)	灰白	藍銅～高台1/4	○	■-1期 手切り瓶 セミ季 素面無施	
47.13	Ⅳ	S071	山茶瓶	甕?			(14.2)		褐色	黃褐	底部1/4	○	
47.14	Ⅳ	S071	灰釉陶器	豆	(14.0)			(7.1)	2.9		1/6	○	
47.15	Ⅳ	S071	灰釉陶器	段蓋	(12.0)			(6.8)	2.2		1/2	○	青ロクロ
47.16	Ⅳ	S071	土師質土器	かわらけ?			(6.6)		淡黃	灰白	体部～底座2/5	○	ロクロ 手切り瓶
47.17	Ⅳ	S071	土師器	短頸瓶	(11.0)	(20.0)			青白	天台	1/3	○	
47.18	Ⅳ	S072	土師質土器	かわらけ?	(18.0)			3.1	にぶい黃褐色		2/6	○	青ロクロ
47.19	Ⅳ	S072	土師質土器	かわらけ?	10.5			2.7	黃褐色		4/5	○	青ロクロ
47.20	Ⅳ	S072	土師質土器	かわらけ?	(16.4)			2.0	灰白		1/5	○	青ロクロ
47.21	Ⅳ	S072	土師質土器	内耳瓶	(22.0)			にぶい黃褐色		○	○	内輪形	
47.22	Ⅳ	S074	土師質土器	かわらけ?	(16.0)			2.6	灰白		1/5	○	青ロクロ
47.23	Ⅳ	S075	陶器	鉢形器	(6.7)				淡黃	暗赤褐色	1/4	○	大窓3後(初山)
47.24	Ⅳ	S077	陶器	灰釉陶器 はさみ豆				5.8	灰黃	オリーブ黃	体部～底部	○	大窓1 基本

登録番号	学年	区画	遺構	種別	類型	法量(cm)						色調	釉	保存状態	既存実測	備考		
						口径	最大径	底径	高台径	器高	つまみ径							
47-25	Ⅳ	Ⅲ	S077	貢品陶器	青磁 波足文瓶	(12.4)						灰白	淡灰釉	口縁部～体部	○	B-4型(初期)		
47-26	Ⅳ	Ⅲ	S077	貢品陶器	盤口瓶				(5.7)			灰白	明神灰	体部～高台1/4	○	17世紀代		
47-27	Ⅳ	Ⅲ	S077	土師質土器	かわらけ	16.9			2.3			灰白		2/5		ロクロ	赤切り灰	
47-28	Ⅳ	Ⅲ	S077	土師質土器	かわらけ	(12.6)			2.3			にじく黄緑	■	○	2/5	青クロ		
48-1	Ⅳ	Ⅲ	S079	陶器	尾呂茶碗				5.2			にじく黄緑	■	○	2/5	青クロ		
48-2	Ⅳ	Ⅲ	S079	陶器	尾呂茶碗				5.1			西黄	黒地	体部～高台	○	5・6小判		
48-3	Ⅳ	Ⅲ	S079	陶器	他利				(6.8)			灰白	灰白	体部～高台1/4	○	5・6小判		
48-4	Ⅳ	Ⅲ	S080	山系陶	小瓶							黄灰		高台部分 体部～脚	○	東造江1-1所		
48-5	Ⅳ	Ⅲ	S080	陶器	折統斜腹瓶	11.5	6.9		2.8			灰白	にい黄	3/4		2小判		
48-6	Ⅳ	Ⅲ	S080	陶器	仙納器	(8.2)	4.8		6.3			灰黄	暗黄釉	2/3	○	6小判(美濃)		
48-7	Ⅳ	Ⅲ	S081	山系陶	瓶				8.8			灰白		体部～瓶身2/3	○	1-2 日常 赤切り灰 ソミ底		
48-8	Ⅳ	Ⅲ	S083	貢品陶器	鰐口瓶							灰白	灰白	口縁部～体部	1/10	C群	被	
48-9	Ⅳ	Ⅲ	S085	陶器	鉢合子	(3.2)	(7.7)	(3.7)	3.7			灰白	黒	1/4	○	中1・日既		
48-10	Ⅳ	Ⅲ	S072	山系陶	小皿	8.4	4.4	1.9				灰白		ほぼ光形	日既	赤切り灰 使用板		
48-11	Ⅳ	Ⅲ	S095	貢品陶器	鰐口瓶	(16.9)						灰白	オリーブ灰	口縁部～体部	1/8	22群		
48-12	Ⅳ	Ⅲ	SP164	灰陶陶器	瓶	(16.7)	(6.8)	4.6				灰黄		1/3	○	使用板		
48-13	Ⅳ	Ⅲ	SP123	陶器	鉢丸丸丘	(10.2)						褐灰	灰褐色	口縁部～体部	1/6	大室4		
48-14	Ⅳ	Ⅲ	SP174	陶器	灰陶丸丘	(9.9)						浅黄	浅黄	口縁部～体部	1/6	大室3		
48-15	Ⅳ	Ⅲ	S24	山系陶	小瓶		(4.7)					灰白		口縁部～体部	1/3	日既		
48-16	Ⅳ	Ⅲ	S22	山系陶	碗	16.1		7.0	5.5			灰白		口縁部～体部	1/10	日既		
48-17	Ⅳ	Ⅲ	S22	山系陶	碗	16.8		7.4	6.0			灰白		ほぼ光形	日既	使用板		
48-18	Ⅳ	Ⅲ	S22	山系陶	碗	(16.3)						真灰		口縁部～体部	1/3	日既		
48-19	Ⅳ	Ⅲ	S22	山系陶	碗	(16.9)			7.6	6.8		灰白		1/3	○	日既		
48-20	Ⅳ	Ⅲ	S22	山系陶	碗	(16.7)	(6.5)	4.3				灰白		2/5	赤切り灰	使用板		
48-21	Ⅳ	Ⅲ	S33	陶器	埴輪	(20.6)						浅黄	褐灰	口縁部 わざかに残存	○	後IV期		
48-22	Ⅳ	Ⅲ	S34	陶器	灰陶埴輪	(10.9)						にい黄	オリーブ灰	口縁部～体部	1/6	大室1		
48-23	Ⅳ	Ⅲ	S34	陶器	天目茶碗	(11.4)						にい黄	オリーブ灰	1/4	○	大室1		
48-24	Ⅳ	Ⅲ	S34	陶器	天目茶碗	(11.7)						褐灰	灰褐	1/4	○	大室1		
48-25	Ⅳ	Ⅲ	S34	陶器	鉢	(29.0)	(10.9)	11.2				灰黄	赤灰	1/4	○	大室1		
48-26	Ⅴ	Ⅲ	SP175	Ⅲ	SP175	灰陶	(11.8)		6.6			灰白	灰	ほぼ光形	○	赤切り灰		
48-27	Ⅳ	Ⅲ	S35	陶器	灰陶罐反且	(11.8)						灰黄	灰白	口縁部～体部	1/10	大室1		
48-28	Ⅳ	Ⅲ	S35	陶器	埴輪	(37.0)						にい黄	褐灰	口縁部～体部	わざかに残存	大室1		
49-1	Ⅳ	Ⅲ	K-74	灰陶陶器	瓶	(16.3)	(6.2)	4.8				灰黄		1/3	○	墨書き？ 赤切り灰		
49-2	Ⅳ	Ⅲ	K-79	灰陶陶器	瓶		(7.1)					浅黄		底面1/2	○	墨書き 赤切り灰		
49-3	Ⅳ	Ⅲ	K-74	灰陶陶器	瓶	15.8		6.2	6.0			灰白		2/3	○	墨書き 赤切り灰		
49-4	Ⅳ	Ⅲ	K-81	灰陶陶器	瓶		(7.4)					灰黄		体部～高台2/3	○	墨書き 赤切り灰 使用板		
49-5	Ⅳ	Ⅲ	J-79	灰陶陶器	瓶	14.1		7.1	2.5			灰黄		1/2	○	軽用板		
49-6	Ⅳ	Ⅲ	J-73	灰陶陶器	瓶	(12.6)		7.0	3.1			灰黄		2/3	○	墨書き 系赤切り灰		
49-7	Ⅳ	Ⅲ	J-74	灰陶陶器	小瓶	4.5	8.2	5.6	11.1			暗オリーブ灰		ほぼ光形	○	赤切り灰		
49-8	Ⅳ	Ⅲ	L-76	須恵器	环	(13.2)	(2.7)		4.5			灰黄		1/3	○			
49-9	Ⅳ	Ⅲ	K-83	須恵器	有台杯	(14.9)		10.5	4.5			灰黄		1/4	○			
49-10	Ⅳ	Ⅲ	K-81	須恵器	有台杯	(16.5)	(11.4)	3.6				灰		1/4	○			
49-11	Ⅳ	Ⅲ	J-72	須恵器	有台杯	15.0		10.5	4.3			暗灰		4/5				
49-12	Ⅳ	Ⅲ	K-72	須恵器	有台杯	11.4		8.5	4.2			灰		ほぼ光形	○			
49-13	Ⅳ	Ⅲ	J-73	須恵器	有台杯	(12.9)		7.9	4.5			褐灰		1/3	○			
49-14	Ⅳ	Ⅲ	K-78	須恵器	瓶	12.2		7.9	3.8			灰黄		4/5				
49-15	Ⅳ	Ⅲ	K-77	須恵器	瓶	(16.2)	(16.9)	2.5				浅灰		1/4	○			
49-16	Ⅳ	Ⅲ	K-73	須恵器	瓶	(16.6)	(16.6)	2.7				灰黄		1/3	○			
49-17	Ⅳ	Ⅲ	K-74	須恵器	瓶	14.3		2.8				灰		ほぼ光形	○			
49-18	Ⅳ	Ⅲ	K-77	須恵器	瓶	(16.1)		2.3				灰白		1/3	○	軽用板		
49-19	Ⅳ	Ⅲ	L-82	須恵器	高环	(16.9)						灰白		底面1/3	○			
49-20	Ⅳ	Ⅲ	K-72	須恵器	高环	(12.5)	(6.4)	9.9				灰黄	わざかに残存	底面1/3	○			
49-21	Ⅳ	Ⅲ	J-73	須恵器	瓶	(20.6)	(6.6)	7.9				灰黄		1/10	○			
49-22	Ⅳ	Ⅲ	K-72	須恵器	円筒瓶							灰		体部1/2	○			
50-1	Ⅳ	Ⅲ	J-72	須恵器	壺	(23.6)	(38.4)					明緑灰		口縁部～体部	2/5	○		
50-2	Ⅳ	Ⅲ	K-75	土師器	壺	(13.7)	(10.6)	2.9				灰白		1/3	○	丹絞		
50-3	Ⅳ	Ⅲ	K-75	土師器	壺	(13.6)	(9.6)	2.8				灰白		1/4	○	丹絞		
50-4	Ⅳ	Ⅲ	K-75	土師器	壺	13.4	(10.2)	3.0				壺		1/3	○	丹絞		
50-5	Ⅳ	Ⅲ	K-78	土師器	壺	(16.0)	(13.4)	4.6				壺		1/3	○	丹絞		
50-6	Ⅳ	Ⅲ	K-75	土師器	有台壺	17.6			12.9	5.5		壺		2/3	○	丹絞		
50-7	Ⅳ	Ⅲ	K-80	土師器	壺	(15.1)						明赤釉	わざかに残存	○	墨書き			

固有 番 号	平 成 年 度 区	遺傳	種別	器種	法基(cm)					色調	輪	器 種 名	現存率	反 転 率	備考	
					口径	最大幅	底径	高台部	器高							
50 8	III	K-81	土師器	黑	(15.2)	(12.3)	1.5	明歩器		1/9	○	丹波 開香				
50 9	III	K-81	土師器	高麗	(21.9)	(8.9)	7.3	にぶい黃		1/2	○	丹波 開大				
50 10	III	L-81	土師器	小型瓶	(8.9)	(8.9)		淡黃		1/4	○					
50 11	III	L-75	土師器	壺	(18.3)			にぶい黃		△縫合一部	2/5					
50 12	III	K-78	土師器	小型壺	(11.8)	(13.0)		にぶい黃		口縫合一部	3/3					
50 13	III	L-73	土師器	手捏ね		4.4	3.3		灰白		7/8		並形			
50 14	III	J-72	土師器	壺	8.6			にぶい黃			2/3			小型壺		
50 15	III	L-74	土師器	壺	(8.2)			にぶい黃			3/4	○	小型壺			
50 16	III	J-72	土師器	壺	7.2			にぶい黃			3/4	○	小型壺			
50 17	III	L-71	土師器	手捏ね			4.7	にぶい黃			3/4	○	並形			
51 1	II	K-77	山茶碗	小碗	(8.2)			(4.6)	3.4	灰白		2/3	○	T-1期 使 用痕		
51 2	II	L-82	山茶碗	小碗				(4.8)		にぶい黃		高台部分 底部一部	1-1期	未切り版		
51 3	II	K-78	山茶碗	小碗				4.0		灰白		高台部分 底部一部	1-2期	未切り版		
51 4	II	L-76	山茶碗	小碗				(4.6)		にぶい黃		高台部分1/8 底部一部	1-2期	未切り版		
51 5	II	K-74	山茶碗	小碗				(4.0)		灰黃		体部～底羽1/2	○	1-2期 未切り版		
51 6	II	L-75	山茶碗	小碗	(8.5)			3.8	2.0	灰白		体部～底羽1/2	○	1-2期 未切り版		
51 7	II	L-75	山茶碗	碗				(8.6)		灰白		高台部分2/3 底部一部	1-1期	未切り版		
51 8	II	K-81	山茶碗	碗				(7.5)		灰黃		体部～底羽1/2	○	1-1期 未切り版		
51 9	II	K-79	山茶碗	碗				7.1		灰白		高台部分 底部一部	○	1-1期 未切り版		
51 10	II	K-82	山茶碗	碗				(7.1)		灰白		体部～底羽1/2	○	1-1期 未切り版		
51 11	II	K-74	山茶碗	碗				7.9		灰白		高台部分1/8 底部一部	○	1-1期 未切り版		
51 12	II	J-77	山茶碗	碗				5.6		灰黃		高台部分 底部一部	○	1-2期 ? 未切り版		
51 13	II	L-76	山茶碗	碗				7.5		灰白		体部～高台2/3	○	1-2期 目開 セミ目		
51 14	II	K-74	山茶碗	碗				7.0		灰白		高台部分 底部一部	○	1-2期 日開 未切り版		
51 15	II	L-76	山茶碗	碗				7.9		灰白		高台部分 底部一部	○	1-1期 未切り版 使用痕		
51 16	II	L-79	山茶碗	碗				(6.4)		灰黃		高台部分 底部一部	○	1-2期 未切り版		
51 17	II	K-79	山茶碗	碗				6.1		灰白		高台部分 底部一部	○	知多～型式 未切り版		
51 18	II	L-81	蝶袖陶器	碗				(8.4)		浅黃	灰オーラブ	高台 わずかに残存	○			
51 19	II	L-75	南器	狹輪丸皿 小内突皿	(11.8)					灰赤	にぶい黃	口縫合一部 わずかに残存	○	大雲3後(初山)		
51 20	II	K-77	南器	灰輪内突皿	(8.7)	(5.9)	2.0			灰黃	灰オーラブ		1/4	○	大雲3後	
51 21	II	L-83	南器	新輪内突皿	(8.2)	(5.1)	1.8			灰黃	灰赤	体部～底羽1/4	○	大雲3後(初山)		
51 22	II	J-76	南器	赤野内突皿			(7.2)			灰白	灰黃	体部～底羽1/4	○	1-2期		
51 23	II	L-78	南器	灰輪内突皿 小皿	(11.6)					灰黃	灰白	口縫合一部	○	後 I 期		
51 24	II	K-83	陶器	灰輪内突皿 さざえ皿			4.5			淡黃	灰白	底羽	○	大雲1 目開		
51 25	II	L-81	陶器	天目灰陶			4.3			灰白	灰輪	高台部分		大雲3後		
51 26	II	K-81	陶器	天目灰陶			(4.3)			にぶい黃	底羽	高台部分 底部一部	○	大雲2		
51 27	II	K-75	陶器	小天目	(6.1)					純灰	にぶい黃	口縫合一部	○	大雲3後(初山)		
51 28	II	L-70	陶器	灰輪 大豊	(23.5)					淡黃	にぶい黃	口縫合一部 わずかに残存	○	後Ⅱ期		
51 29	II	J-79	陶器	壺	(27.6)					にぶい黃	褐灰	口縫合 わずかに残存	○	大雲3		
51 30	II	J-81	陶器	壺	(28.4)					にぶい黃	赤灰	口縫合 わずかに残存	○	大雲3		
51 31	II	K-77	南器	壺	(21.7)					にぶい黃	褐灰	口縫合 わずかに残存	○	大雲4(志戸山)		
51 32	II	J-77	南器	壺	(33.2)					にぶい黃	にぶい黃	口縫合	○	大雲4(志戸山)		
51 33	II	K-77	南器	鐵輪片口	(18.0)					淡黃	にぶい黃	口縫合一部 わずかに残存	○	3・4小窓(攝内)		
51 34	II	K-78	南器	鐵輪水差か	(10.7)					にぶい黃	灰赤	体部～底部 1/6	○	大雲3後(初山)		
51 35	# II	K-81	貿易陶器	青釉 邊文直輪		(8.2)				明灰	緑灰	体部～高台1/3	○	B-1期 (1-5期)		
51 36	# II	L-73	貿易陶器	青釉 邊文直輪		(8.2)				灰	暗緑灰	高台部分2/5	○	B-1期 (1-5期)		
51 37	# II	L-63	貿易陶器	白磁碗	(18.6)					灰白	灰黃	口縫合 わずかに残存	○	IV期		
51 38	# II	J-76	貿易陶器	白磁碗						灰黃	灰黃	体部1/6	○	V期		
51 39	# II	K-83	貿易陶器	青釉直輪						灰白	オリーブ灰	口縫合 わずかに残存	○	VI期		
51 40	# II	K-82	貿易陶器	青釉直輪 青磁合子	(5.7)					白	白	口縫合2/5	○			
51 41	# II	J-72	貿易陶器	青磁直輪						灰白	明灰	体部1/6	○			
51 42	# II	J-75	貿易陶器	白磁直	(17.1)					灰白	灰白	口縫合 わずかに残存	○	C期		
51 43	# II	L-79	貿易陶器	青磁 無文直輪直	(12.5)					灰白	オリーブ灰	口縫合 わずかに残存	○	Ⅲ期		

表15 笠井若林遺跡 金属製品一覧表

図番	写真 図版	遺物 番号	調査 区	構造	種別	器種	特徴・法量	備考
52 1	79	M-9	II	SH3-P1	鉄製品	釘	頭部「T」字形。残存長3.3cm、頭部長4mm、幅1.3cm、厚さ5mm。釘身残存長2.9cm、幅6mm、厚さ4mm。断面横長方形。	
52 2	79	M-20	III	SH11-P3	鉄製品	釘	2点とも釘身片。断面円形。(上) 残存長1.0cm、直徑2mm。(下) 残存長3.3cm、直徑3mm。	
52 3	79	M-22	III	SH11-P5	鉄製品	刀子	刃部一基片。残存長4.8cm、刃部残存長2.3cm、幅9mm、厚さ6mm。刃部、桿側ともに角削。基は茎尻に向かって直線的に延びる。残存長2.5cm、幅6mm、厚さ2mm。断面横長方形。	
52 4	79	M-12	II	SF12 (中世墓)	鉄製品	環状製品	幅5mm、厚さ5mmの棒を環状に彎曲させたものである。外径2.5~2.7cm、内径1.8~2.2cm。	
52 5	79	M-11	II	SF12 (中世墓)	鉄製品	用途不明品 (馬具?)	「U」字形に折り曲げられた鉄製品。兵庫續か。残存長7.4cm、最大幅3.5cm、断面円形、直徑0.8cm。	
52 6	79	M-11	II	SF12 (中世墓)	鉄製品	用途不明品 (馬具?)	圓面右側が上に向かってやや彎曲し始める棒状の鉄製品。兵庫續か。残存長6.2cm、断面円形、直徑0.8mm。	
52 7	79	M-3	II	SF18	鉄製品	刀子	ほぼ先形品。残存長5.5cm、刃部残存長2.8cm、幅1.1cm、断面三角形。闊は桿側の片闊。基は茎尻に向かって先細りする。茎長2.7cm、最大幅8mm、厚さ3mm。断面三角形。	
52 8	79	M-7	I	SF35	鉄製品	刀子	茎片。茎尻に向かって先細りする。残存長2.3cm、最大幅0.6cm、厚さ2mm。断面横長方形。	
52 9	79	M-7	I	SF35	鉄製品	刀子	基片。茎尻に向かって先細りする。残存長3.7cm、最大幅7mm、厚さ3mm。断面横長方形。	
52 10	79	M-2	II	SD4	鉄製品	環状製品	幅5mm、厚さ8mmの棒を環状に彎曲させたものである。外径2.8~2.9cm、内径1.9~2.0cm。	
52 11	79	M-4	II	SD16	鉄製品	鎌	頭部一基片。台形闊。残存長3.9cm、頭部横長方形。残存長2.6cm、幅7mm、厚さ3mm。断面横面4mm、厚さ3mm。	
52 12	79	M-33	III	SD49	鉄製品	鎌	桿側頭部に向かって彎曲していること、刃が薄いことから鎌の可能性が高い。残存長8.3cm、幅3.2cm、断面横板状で下部に刃が形成される。	
52 13	79	M-32	III	SU60	鉄製品	釘	頭部「L」字形。残存長4.1cm、頭部長2.5mm、幅6mm、厚さ3mm。釘身断面方形、残存長3.85cm、幅4.5mm、厚さ3mm。	
52 14	79	M-30	III	SD62	鉄製品	刀子	刀片部。残存長3.8cm、幅1.2cm、厚さ2mm。	
52 15	79	M-7	III	SD69	鉄製品	釘	釘身片。残存長2.7cm、幅3mm。断面方形、厚さ3mm。	
52 16	79	M-3	III	SD69	鉄製品	釘	釘身片。残存長5.0cm、幅4mm。断面方形、厚さ3mm。	
52 17	79	M-10	III	SD71	鉄製品	輪	先端一輪身部片。残存長4.5cm、輪身幅7mm、断面2mm。先端部残存長1.0cm、幅5mm。断面横長方形、厚さ2mm。	
52 18	79	M-16	III	SD81	鉄製品	刀子	基片。残存長4.1cm、幅7mm。断面台形、厚さ3mm。	
52 19	79	M-8	II	SP31	鉄製品	刀子	基片。茎尻に向かい直線的に延びる。残存長3.3cm、幅7mm、厚さ2mm。断面横長長方形。	
52 20	79	M-8	II	SP31	鉄製品	用途不明品	「L」字形に鉄板を折り曲げ、一方に二孔を穿つ製品。残存長1.3cm、幅1.4cm、高さ9mm、穿孔直徑1mm。上面には鋸の痕跡(直径3mm)が残る。	
52 21	79	M-17	III	SP154	鉄製品	環状製品	やや扁平。外徑長軸2.4cm、短軸1.8cm、内徑長軸1.8cm、短軸1.0cm、3~4.5mm、厚さ4mm。断面方形。	
52 22	79	M-6	I	SB206	鉄製品	釘	釘身片。残存長7.3cm、最大幅5.5mm、厚さ4.5mm。断面方形。	
52 23	79	M-35	III	SB209	鉄製品	用途不明品	(上) は、上部に小さな環状部を有する棒状の鉄製品であり、下部には闊を有する。残存長5.9cm、環状部外径9mm、内径3mm、厚さ5mm。頭部長4.1cm、最大幅9mm。頭部は闊に向かって一端幅を狭めた後、やや広がる形態。台形闊。下部残存長1.0cm、幅6mm。断面横長長方形、厚さ4mm。(下) は闊部分のより下部の破片と考える。断面横長長方形。残存長4.0cm、幅4.5mm、厚さ4.5mm。	

図番	写真 番	遺物 番号	調査 区	遺構	種別	器種	特徵・法量	備考
53 1	79	M-54	III	SB209	鉄製品	釘	釘身片。釘先が「L」字形に折れ曲がる。残存長2.7cm、幅3mm。断面方形、厚さ3mm。	
53 2	79	M-55	III	SB211	鉄製品	刀子	基片。基底に向かい直線的に延びる。残存長2.8cm、幅7.5mm、厚さ3mm。断面台形。	
53 3	79	M-56	III	SB211	鉄製品	釘	頭部「L」字形に折り曲げられる。頭部長4mm、残存幅1.0cm、厚さ5mm。釘身残存長3.9cm、幅8mm。断面横長方形。厚さ8mm。	
53 4	79	M-51	III	SB212	鉄製品	用途不明品	「く」字形を呈する。断面円形。残存長3.0cm、直径7.5mm。	
53 5	79	M-40	III	SB216	鉄製品	鎌	鎌身～頭部片。両丸刃三角形様。残存長6.1cm、刃部長2.6cm、最大幅1.0cm、厚さ2mm。頭部残存長3.6cm、幅4.0mm。断面横長方形、厚さ2mm。	古墳時代後期～終末期
53 6	79	M-61	III	SB218	鉄製品	刀子	先切片。残存長4.0cm、最大幅1.3cm、厚さ5mm。	
53 7	79	M-42	III	SB220	鉄製品	刀子	刃部片。残存長4.9cm、最大幅1.8cm、厚さ5mm。	
53 8	79	M-45	III	SB221	鉄製品	釘	釘身片。残存長6.6cm、幅3mm。断面方形、厚さ3mm。	
53 9	79	M-21	III	SF263	鉄製品	鎌	鎌身～頭部片。両丸造柳葉形様。鎌身側は無開。開は欠損。残存長9.6cm。頭伸張8mm、幅8mm、厚さ2mm。頭部残存長8.8cm、幅7mm。断面横長長方形、厚さ3mm。	古墳時代後期～終末期
53 10	79	M-39	III	SX226	鉄製品	刀子	刃部～茎片。残存長7.9cm。開は棟側、刃部側ともに無闇で、刃部側は縫やかに彎曲して刃部と茎を区別する。刃部残存長2.5cm、幅1.1cm、断面三角形。基は基底に向かい先端りする。残存長5.5cm、厚さ3mm。断面台形。	
53 11	79	M-9	I	SX230	鉄・青銅製品	刀子	青銅製(金銅装袋雕?)。鍔付刀子片。残存長4.3cm。刃部、棟側共に舟開。刃部残存長1.7cm、幅1.6cm、厚さ5mm。茎は基底に向かって先端りする。断面台形。残存長2.7cm、最大幅1.1cm、厚さ3.5mm。鍔は舟円形であり、長軸1.5cm以上、短軸1.0cm以上、幅6mm、厚さ1mm。	古墳時代後期～終末期
53 12	79	M-68	III	包含層	鉄製品	刀子	刃部～茎片。残存長4.0cm。刃部残存長2.0cm、最大幅2.0cm、厚さ2.5mm。開は刃部側の片開。茎は基底に向かい直線的に延びる。茎残存長2.1cm、幅6mm、厚さ3mm。	
53 13	79	M-69	III	包含層	鉄製品	釘	頭部「U」字形。残存長7.3cm。頭部長4mm、幅1.2cm、厚さ6mm。釘身断面方形。残存長6.8cm、最大幅7mm、厚さ6mm。	
53 14	79	M-21	II	包含層	鉄製品	刀子(短刀)	先切片。残存長6.0cm、幅2.0cm、厚さ3mm。	
53 15	79	M-17	II	包含層	雁帯金具(巡方)		箱蓋形に折り曲げられた鉄板と、1mm程度の鉄板を目釘によって固定する。長辺2.7cm、短辺2.3cm、厚さ3.5mm。透かし模辺長1cm、短辺6mm。目釘孔直径1.1～1.5mm。目釘の有無は不明。	奈良
53 16	79	M-27	III	包含層	鉄製品	用途不明品	「U」字形に破断した金具と、やや彎曲した三本の縫合鉄棒が接着。彎曲した内面には木質が遺存。木目は鉄棒にはぼ直交。残存長9.8cm、幅3.7cm、厚さ1.3cm。「U」字形部残存長3.3cm、幅3.2cm。断面円形、直徑6mm。棒状部分断面円形、各棒の長さと直徑(上から)7.4cm、4mm、7.4cm、4mm、8.7cm、4mm。	
55 1	80	M-22	II	SH1-P3	銅製品	鎌	やや絞長で、刃が彎る。底部は明確に平らとはならない。頭部には13棘に構が割まれ、本体の上部には1度の棘を有する。その上部には紐の穿孔された突起を有す。高さ3.3cm、最大径2.1cm、質量41.0g。	中世 鋏釋の鍔
55 2	79	M-72	III	SD71	銅製品	用途不明品	小片。圓面右側が縫やかな円弧を描く。左側は直線的に破壊している。断面は円弧側(圓面右側)がやや厚く、圓面左側に向かって縫やかに傾斜する。残存長3.3cm、幅1.4cm、円弧側厚さ6mm、直線側厚さ3mm。頭部が全銅製(剣格)の刀装具(無意釘)の可能性がある。	

表16 笠井若林遺跡 銀貨一覧表

図番	写真 図番	遺物 番号	調査 区	遺構・ 地区	鉄貨	法量(cm)			備考
						直径	厚さ	重量(g)	
54 1	80	Z5	II	SF12	永楽通寶	2.56	0.19	2.50	初鋤1408 被熱
54 2	80	Z2-2	III	SF37	永楽通寶	2.57	0.13	3.68	初鋤1408 本錢
54 3	80	Z2-4	III	SF37	永楽通寶	2.49	0.12	2.99	初鋤1408 本錢
54 4	80	Z2-1	III	SF37	開元通寶	2.36	0.12	3.22	初鋤621 本錢
54 5	80	Z3-1	III	SF37	皇宋通寶?	2.42	0.10	3.20	初鋤1038 被熱
54 6	80	Z3-2	III	SF37	皇宋通寶?	2.40	0.12	2.09	初鋤1038 被熱
54 7	80	Z2-3	III	SF37	天聖元寶	2.38	0.13	2.87	初鋤1038 茶書 横鋤?
54 8	80	Z1	II	SD2	永楽通寶	2.48	0.12	1.25	初鋤1408 本錢 被熱
54 9	80	Z1	III	L-83	寛永通寶	2.41	0.11	2.40	新寛永

表17 笠井若林遺跡 石製品等一覧表

図番	写真 図番	遺物 番号	調査 区	遺構	種別	遺物名	法量(cm)			色調	材質	その他
							直径	全厚	孔径			
55 3	82	6862	III	SB211	石製品	紡錘車	3.90	1.20	0.70	灰褐色	蛇紋岩質 結晶片岩	
55 4	82	-	III	SB215	製品	玉	0.25	0.20	0.10	青色	ガラス	
55 5	82	-	III	SB218	石製品	勾玉	2.20	1.10	1.00	極暗赤褐色	瑪瑙	
55 6	82	546	III	SD62	石製品	硯	(4.10)	(4.70)	0.90	黒灰色	粘板岩	
55 7	82	-	II	SP9	石製品	玉	0.65	0.65	0.10	透明	水晶	穿孔3ヶ所 数珠玉
55 8	82	-	II	SP9	石製品	玉	0.50	0.35	0.15	灰白色	水晶	数珠玉

図番	写真 図番	遺物 番号	調査 区	遺構・ 地区	種別	遺物名	法量(cm)			石材	使用面	その他
							長辺	短辺	最大厚			
56 1	81	6844	III	SB212	石製品	砾石	4.50	3.30	2.70	34	流紋質凝灰岩	3
56 2	81	-	II	SP229	石製品	砾石	9.40	6.70	3.60	311	流紋質凝灰岩	4
56 3	81	1131	I	SP217	石製品	砾石	7.30	6.10	1.90	155	凝灰質砂岩	2
56 4	81	3514	III	SX228	石製品	砾石	6.00	1.90	2.80	54	流紋質凝灰岩	4 穿孔 提げ砾石
56 5	81	37	II	SD2	石製品	砾石	8.90	4.10	3.40	158	珪質安山岩	6
56 6	81	38	II	SD3	石製品	砾石	6.00	3.80	2.30	53	珪質安山岩	4
57 1	81	476	I	SD28	石製品	砾石	7.90	5.40	4.70	292	砾灰質砂岩	1
57 2	81	712	III	SD38	石製品	砾石	11.30	4.60	2.10	206	綠色片岩	3
57 3	81	574	III	SD52	石製品	砾石	8.40	6.90	2.50	197	砾灰質砂岩	5
57 4	81	-	II	SP55	石製品	砾石	9.50	3.70	3.30	145	珪質安山岩	5
57 5	81	5666	III	K-74	石製品	砾石	18.90	6.00	4.80	726	流紋質凝灰岩	5
57 6	81	5896	III	K-76	石製品	砾石	13.30	7.60	6.30	549	流紋質凝灰岩	2 蓋砾石
58 1	81	5902	III	J-75	石製品	砾石	5.40	6.30	2.90	86	流紋質凝灰岩	4
58 2	81	5534	III	K-76	石製品	砾石	5.80	3.70	3.00	87	流紋質凝灰岩	6
58 3	81	石No2	III	K-82	石製品	砾石	7.50	5.60	4.50	274	砾灰質砂岩	5
58 4	81	5568	III	K-76	石製品	砾石	6.90	4.30	1.30	41	流紋質凝灰岩	2
58 5	81	5937	III	K-79	石製品	砾石	5.60	4.30	2.80	97	細粒砾灰岩	4 被熱
58 6	81	石No2	III	J-77	石製品	砾石	6.70	7.20	2.30	160	砾灰質砂岩	4
58 7	81	5003	III	K-84	石製品	砾石	6.30	6.00	2.20	64	流紋質凝灰岩	2
58 8	81	5034	III	M-54	石製品	砾石	3.30	3.60	2.70	35	流紋質凝灰岩	2
58 9	81	5765	III	J-73	石製品	砾石	3.30	2.70	1.70	11	流紋質凝灰岩	2
58 10	81	5574	III	K-73	石製品	砾石	5.00	3.00	2.50	35	流紋質凝灰岩	1
59 1	81	5203	II	L-55	石製品	砾石	6.60	2.80	2.20	77	粘板岩	6 穿孔 提げ砾石
59 2	81	5615	III	搅乱	石製品	砾石	7.30	2.30	1.60	47	珪質安山岩	5
59 3	81	5572	III	K-77	石製品	砾石	6.80	3.00	2.80	92	流紋質凝灰岩	3
59 4	81	5909	III	J-73	石製品	砾石	5.70	3.00	2.20	54	流紋質凝灰岩	5
59 5	81	1050	I	J-64	石製品	砾石	6.20	6.40	1.00	58	細粒砾灰岩	5
59 6	81	5021	II	J-55	石製品	砾石	3.30	2.70	2.20	25	流紋質凝灰岩	4
59 7	81	5501	III	L-83	石製品	砾石	5.80	3.10	2.20	63	流紋質凝灰岩	4 被熱
59 8	81	石No1	III	J-75	石製品	砾石	5.80	2.90	2.10	43	流紋質凝灰岩	3
59 9	81	5907	III	K-79	石製品	砾石	5.80	2.30	1.15	20	細粒砾灰岩	5 被熱
59 10	81	5998	III	J-79	石製品	砾石	3.90	1.90	1.10	13	流紋質凝灰岩	6
59 11	81	5601	III	L-75	石製品	砾石	1.60	1.10	0.70	2	流紋質凝灰岩	5

表18 笠井若林遺跡 土製品一覧表

図番	番	写真 図版	調査 区	遺構	種別	遺物名	法量(cm)			色調	備考	
							長さ	最大径	内径			
60	1	82	II	SB201	土製品	土錐	4.10	1.00	0.20	3.39	灰白	一部欠損
60	2	82	I	SB206	土製品	土錐	5.90	1.15	0.40	6.79	にぶい黄緑	
60	3	82	I	SB206	土製品	土錐	5.30	1.20	0.25	5.80	にぶい黄緑	一部欠損
60	4	I	SB206	土製品	土錐	5.30	1.30	0.25	7.69	にぶい黄緑		
60	5	82	I	SB206	土製品	土錐	4.90	1.05	0.20	4.63	にぶい黄緑	一部欠損
60	6	I	SB206	土製品	土錐	4.25	1.20	0.30	5.61	にぶい黄緑		
60	7	82	I	SB206	土製品	土錐	(4.20)	1.15	0.25	5.67	にぶい黄緑	一部欠損
60	8	I	SB206	土製品	土錐	4.10	1.20	0.25	4.76	にぶい黄緑		
60	9	I	SB206	土製品	土錐	(3.10)	0.95	0.30	2.25	にぶい黄緑	一部欠損	
60	10	82	III	SB210	土製品	土錐	5.20	1.30	0.40	6.72	にぶい黄緑	
60	11	III	SB210	土製品	土錐	4.40	1.20	0.30	5.01	灰黄		
60	12	III	SB210	土製品	土錐	4.10	1.10	0.30	3.76	にぶい黄緑		
60	13	III	SB212-P1	土製品	土錐	4.70	1.00	0.25	4.00	橙	一部欠損	
60	14	82	III	SB213	土製品	土錐	(4.35)	1.55	0.50	9.22	にぶい黄緑	一部欠損
60	15	III	SB213	土製品	土錐	4.60	1.00	0.20	3.64	灰白		
60	16	III	SB213	土製品	土錐	4.20	1.10	0.25	4.79	にぶい黄緑		
60	17	82	III	SB218	土製品	土錐	3.10	1.40	0.60	5.83	浅黄緑	
60	18	I	SD243	土製品	土錐	(4.10)	1.20	0.25	4.78	にぶい黄緑	一部欠損	
60	19	82	III	SP290	土製品	土錐	4.20	1.40	0.40	6.32	橙	
60	20	III	SP290	土製品	土錐	3.00	1.60	0.40	6.47	灰白		
60	21	82	III	SP312	土製品	土錐	3.60	1.00	0.40	2.44	灰白	
60	22	III	SP322	土製品	土錐	4.25	1.10	0.30	4.14	浅黄緑		
60	23	I	SP36	土製品	土錐	(4.60)	1.30	0.25	3.70	にぶい黄緑	一部欠損	
60	24	82	III	SD41	土製品	土錐	3.20	1.60	0.40	8.00	にぶい黄緑	
60	25	III	SD44	土製品	土錐	2.90	1.10	0.25	2.44	にぶい黄緑		
60	26	82	II	K-54	土製品	土錐	5.10	1.20	0.30	5.84	にぶい黄緑	一部欠損
60	27	82	III	K-74	土製品	土錐	4.40	1.00	0.15	3.25	灰白	
60	28	III	K-73	土製品	土錐	4.60	1.00	0.25	3.63	灰黄		
60	29	III	K-74	土製品	土錐	4.40	0.90	0.15	2.78	灰白		
60	30	III	L-74	土製品	土錐	4.10	1.00	0.15	3.53	灰白		
60	31	III	K-74	土製品	土錐	4.05	0.90	0.35	2.23	浅黄緑		
60	32	II	J-56	土製品	土錐	4.00	1.00	0.25	3.30	にぶい黄緑	一部欠損	
60	33	82	III	K-75	土製品	土錐	3.75	1.40	0.50	6.60	灰白	
60	34	I	SB206	土製品	土馬?	2.60	1.00	-	2.54	灰白	足か	
60	35	83	III	SB210	土製品	土製支脚	(4.10)	-	-	77.55	にぶい黄緑	
60	36	82	III	SB211	土製品	輪羽口	(3.80)	(3.80)	最大厚 1.80	39.44	にぶい黄緑	被熱
60	37	83	III	SB212	土製品	土製支脚	(3.60)	直徑 5.90	-	55.85	浅黄緑	
60	38	82	III	SB220 燒土	土製品	輪羽口	(3.45)	(3.10)	最大厚 1.20	12.15	浅黄緑	被熱
60	39	83	II	SX208	土製品	土製支脚	19.60	直徑 7.50	-	930.00	にぶい黄緑	一部欠損
60	40	83	II	SP9	土製品	土玉?	直徑 1.20	厚 1.05	孔徑 0.15	1.46	灰	
60	41	82	I	K-63	土製品	輪羽口	(5.20)	(3.90)	最大厚 1.80	42.20	明黄緑	
60	42	83	II	N-54	土製品	土馬?	(2.95)	1.45	-	5.29	橙	足か
61	1	83	II	J-56	土製品	土馬	17.80	高 7.40	厚 2.80	174.26	灰黄緑	脚部欠損
61	2	83	II	L-55	土製品	土馬	(5.90)	高 (3.70)	厚 (1.80)	23.45	橙	脚部欠損
61	3	83	III	K-82	土製品	人形	(6.30)	最大径 3.40	-	55.51	にぶい橙	被熱
61	4	83	III	K-82	土製品	人形	(7.70)	最大径 2.90	-	65.43	橙	
61	5	83	III	K-81	土製品	人形	(6.90)	最大径 3.15	-	61.39	橙	

第VI章　まとめ

第1節　恒武西宮遺跡の遺構変遷

今回の恒武西宮遺跡2次調査では古墳時代中期から近世長福寺にわたる遺構まで、連続と続く遺跡ということが確認できた。ここでは当調査区における遺構の変遷について、平成8~10年度に調査された調査区南側に隣接する恒武西宮遺跡1次地点、北側に隣接する恒武西浦遺跡で判明した成果(埋文研2000)との関係にも若干触れながら述べてみたい。なお、第193・194図に主な遺構を時期ごとに抽出した図を掲載した。

古墳時代

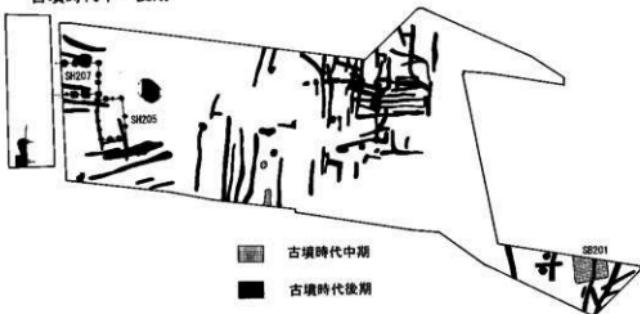
今回の調査区の東側に近接する恒武西宮遺跡3次調査地点(浜松市2002)では前期の方形周溝墓が検出され、また当調査区でも前期に遡るとみられる土器が数点出土していることから、周辺に前期の集落が存在したことは間違いない。しかし、今回の調査区では遺構が明瞭ではなく、わずかな土器しか出土していないため、本格的に人々が居住し始めたのは中期からということが窺える。調査区からは中期の土器が多量に出土しているが、中期の遺構と明確に判断できるものは竪穴住居跡SB201や数基の土坑と少なく、土器の多くは後期の遺構の中に混在した形で出土した。SB201は1次調査区北西端で検出された掘立柱建物跡SH10~13と強い関連を持つものであると推定され、1つの居住単位として把握できる可能性がある。そこから北は恒武西浦遺跡南区南端で検出されたSB2、SH17・18まで目立った遺構は少なく、空閑地または耕地が多くを占めていたと思われる。山ノ花遺跡、恒武西浦遺跡で調査された旧河道からは祭祀にわたる大量の石製品や木製品が出土している。これらを使用した祭祀行為は有力階層が執り行なったとみられ、周辺にはその居住域があったことが推定されている。しかし、今回の調査ではそれに関わる遺構は検出できていない。

後期になると、いくつかの群を形成するかのように平行または直交する小溝が多く検出される。これは既に述べたように畑の耕作痕と推定した。前述のように中期の土器も混在して出土することから、中期段階から空閑地を利用した耕作がすでに行われていて、後期段階に至っても継続的に耕地となっていたとも考えられる。第19図には小溝を群として示したが、A~C群、E群の一部がこうした耕作痕と考えられる。耕地は全面に展開するのではなく、このようにある程度空閑地を持った形で営まれていたと思われる。E群の耕地には耕作痕を切って掘立柱建物SH205・207が確認されており、耕地を小規模な居住域として転換した部分もあったと思われる。その北の恒武西浦遺跡南区南端でも数棟の掘立柱建物跡、竪穴住居跡が検出されているが、いずれもある程度の間隔をおいていることがわかる。居住域はこのように散在しており、その間の空間は耕地として利用されている部分もあることが推定できる。それは、当遺跡周辺での古墳時代中期~後期を通じた集落景観であったのであろう。

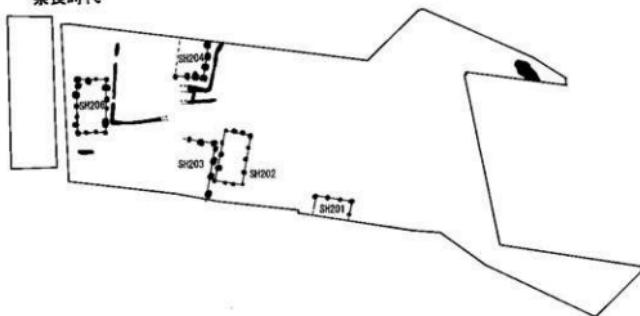
奈良時代

奈良時代には5棟の掘立柱建物跡とそれに伴うであろう溝を検出したに留まる。遺物は土器が若干量出土したに過ぎず、詳細は明らかではないが、笠井若林遺跡でみられる竪穴住居跡を主体とした集落ではないことが指摘できる。この時期とみられる遺構は恒武西浦遺跡中区で区画溝を伴う掘立柱建物跡が数棟検出されており、恒武西浦遺跡全体をみても該期の竪穴住居跡は検出されていない。これらは祭祀的な遺物が多量に出土した恒武西浦遺跡北区のSR30の南に展開している。調査は集落の一部を検出したに

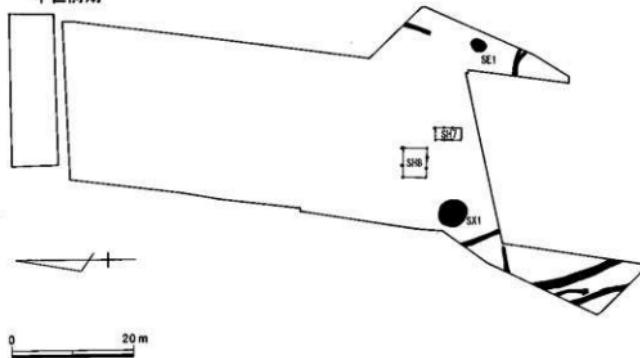
古墳時代中～後期



奈良時代

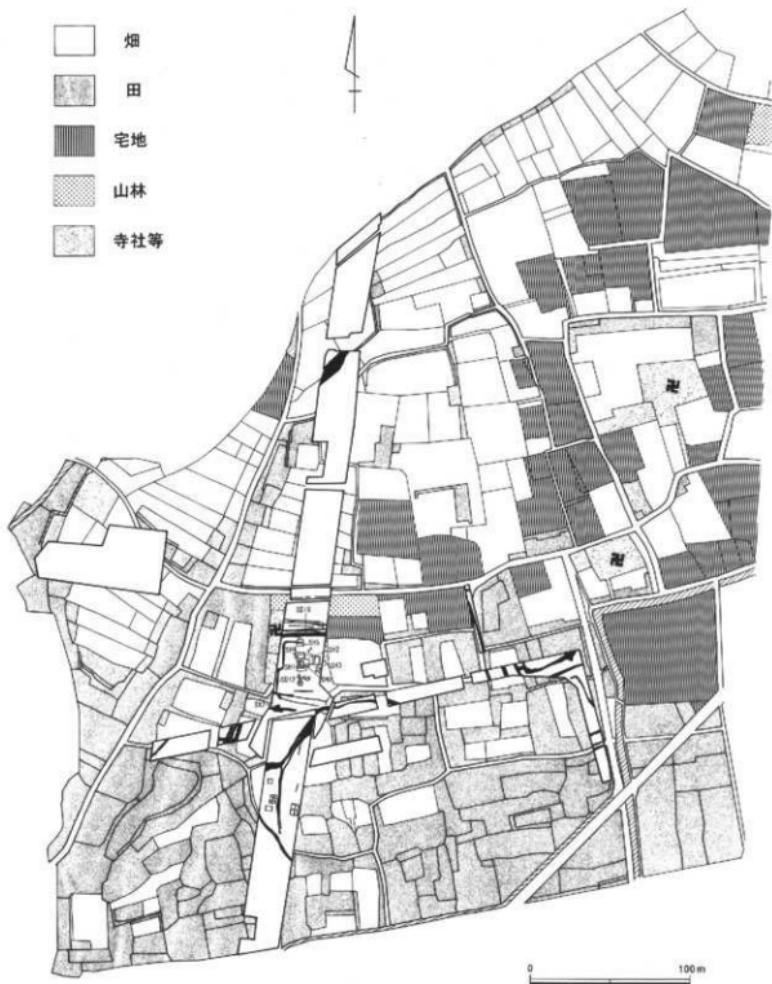
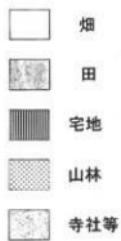


中世前期



0 20 m

第193図 恒武西宮遺跡古墳時代～中世前期遺構変遷図



第194図 恒武西宮遺跡中世後期～近世遺構と周辺地籍図

過ぎず、また未調査区も存在することから断言はできないが、SR30を境として集落の性格が異なっている可能性があるとも考えられる。それを明らかにすることは今後の課題であろう。

中世前期

平安時代前期～後期の遺構・遺物は当調査区ではほとんど確認できず、平安時代末期を含む中世前期から再び遺構が検出されるようになる。とはいっても、調査区南側でSH7・8の小規模建物と2基の井戸、溝が検出されたのみである。これらは12世紀前半～中頃の遺構と考えられ、道路状遺構とみられるSD1・3の向と同方向または直交する小溝は区画溝と考えられる。井戸の可能性があるSX1とSH7・8は近接しており、一つの居住単位という捉え方もできる。東側のSE1付近には小溝も他には遺構が見当たらないため、調査区外に居住域が広がる可能性があるが、いずれにしても小規模であったと思われる。

中世後期～近世

13世紀代以降、遺物は散見することができるが、遺構はほとんど確認できないため、集落としては衰退傾向にあったことが推定される。長くこの地に所在した長福寺の開山は、同寺の過去帳などによれば貞治年間（1362～67）という（田辺1988）が、その時期の遺構・遺物は発見されていない。遺物がまとまって出土するのは遺物の年代でいえば古瀬戸後IV期段階、15世紀中頃～後半に至つてからのことである。SD16などの溝によって区画された屋敷地が営まれ始めたのはこの時期であると推定できるが、調査区外の状況が判然としないため、規模については明らかではない。その後、屋敷地として16世紀後半～末頃まで機能し、17世紀初頭には廃絶したと思われる。この屋敷地内にはSH1～6が検出されている。組み合わせは明確ではないが、重複関係から屋敷地が機能した期間に少なくとも3時期にわたる建替えがあったと考えられる。

屋敷地の南東にはほぼ同時期とみられる流路SD9が1次調査区SR11に連続する形で検出されている。この流路と屋敷地の区画方向は異なっており、流路の方向から読みとれる微地形にとらわれない区画の設定が想定できる。また、東側に隣接する恒武西宮跡3次調査地点ではほぼ同時期、同方向の区画溝が検出されていることから、こうした単位の屋敷地が空閑地や耕地を有しながら所在していたと考えられる。屋敷地には突出した遺構・遺物がみられないことから、これが当時の一般的な農村における集落のあり方のひとつであったと思われる。屋敷地は17世紀初頭には廃絶し、この時期に集落の再編が行われた可能性が高い。昭和11年作成の豊西村土地宝典図を見るとこの時期の区画は、流路を含めて近年まで踏襲されていることもわかる（第194図）。

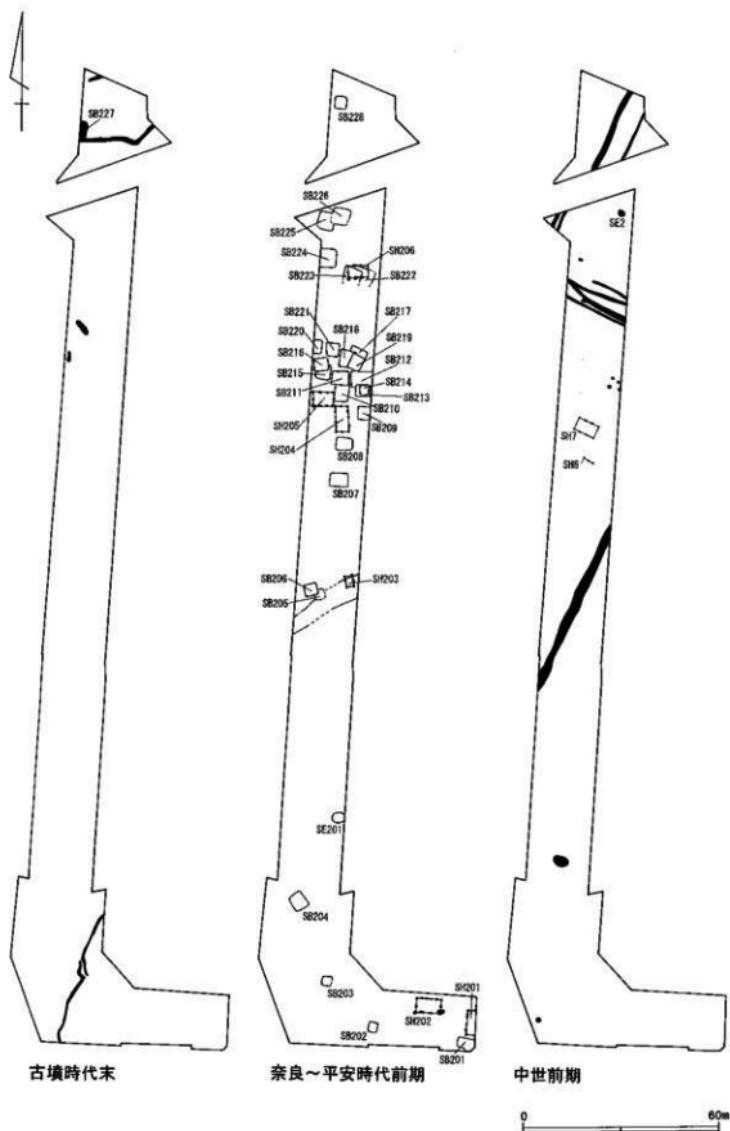
その後、はっきりとその時期について特定はできないが、屋敷地の廃絶から18世紀代までに長福寺がこの地に建立されることとなるのである。長福寺については、徳川家康が慶長6（1601）年に寺領として3石を寄進したことが伊奈忠次、彦坂元正、大久保長安らの連署手形によって知ることができる（田辺1988）。連署状には「恒武村内長福寺」とあることから少なくとも恒武村内に所在したことは確かであろう。しかし、調査結果ではその時期にこの地に長福寺が所在したことは確認できないため、集落の再編に伴って村内の別の地から移転してきたものと推定したい。

第2節 笠井若林遺跡の遺構変遷

笠井若林遺跡は古墳時代末から近世に至るまでの遺構が検出された。前節同様、第195・196図に掲載した時期ごとの遺構抽出図に沿いながら、遺構変遷について記述したい。

古墳時代

当遺跡で最も古い時期の遺構は中期段階のⅢ区でSP315が検出されたのみであり、他は遺物を含めては



第195図 立井若林遺跡古墳時代～中世前期遺構変遷図

とんど確認できない。集落としては7世紀代となってから把握できるようになる。遺構はⅡ・Ⅲ区で竪穴住居跡1軒、溝などが検出されている程度でまとまつたものではないが、小規模ながら周辺に広がりがあったものと考えられる。この時期、中期から続く恒武西宮・恒武西浦遺跡に比べてより標高の高い微高地に所在する当遺跡周辺に居住を求めたことは、恒武西宮1次・恒武西浦遺跡の報文（埋文研2000）で1つの可能性として指摘された、自然環境の変化と土地所有のあり方の変化と何らかの関わりがあるのかもしれない。

奈良・平安時代

当遺跡が最も盛んであった時期といえ、数多くの遺構、遺物が発見された。そのほとんどは8世紀後半～9世紀前半に集中している。8世紀前半～中頃と推定できるのは7世紀代の竪穴住居跡SB227と近接した、SB228がみられる程度である。8世紀の前半～中頃は前段階の集落とそれほど変わりがなく、まとまりのあるものではなかったと思われる。

8世紀後半になると竪穴住居跡を主体とする遺構が数多く検出されたことから、調査区外を含めて大規模な集落が営まれたと思われる。特にⅢ区では該期とみられる竪穴住居跡が17軒と多く検出されたことは特筆できる。これらは同時期に存在した訳ではないが、このように竪穴住居跡が集中して検出された例はこれまでの周辺地区における調査でも確認されておらず、どちらかといえば恒武西宮・西浦遺跡でみられるような散在的なあり方を示していた。Ⅰ・Ⅱ区においては同時期の竪穴住居跡は散在しており、Ⅲ区とは対象的である。Ⅰ区で検出された流路とみられるSD243を境として、集落の性格に違いがあるのかもしれない。集落の性格を知り得る要素としては、Ⅲ区のSB220でみられる工房的な建物の存在は、必ずしもこれらの建物が居住のみに供されていたのではないことを示唆している点や、また鉄製帶金具や円面鏡、獸足付短頸壺といった遺物の出土は既に指摘されているように、当遺跡周辺の居住者が官衙や官衙関連施設と何らかの繋がりを持っていたことが推定できる点などがあげられる。しかし、それらを具体的に位置付けることは今後さらなる検討が必要であると思われる。

9世紀後半～10世紀前半の遺構はⅡ区で掘立柱建物跡2棟、Ⅲ区で竪穴住居跡2棟及び土坑などが検出されている。前代に比べ、衰退傾向は否めず、出土する土器も激減する。Ⅲ区の東側で実施された笠井若林遺跡4次調査（浜松市2000）でも9世紀後半代の集落の一部が確認されていることから、一定の広がりを持った集落域が形成されていたと思われるが、散在する集落へと回帰するようである。そして、10世紀後半～11世紀代にかけては遺構・遺物ともほとんどみられなくなってしまう。

この時期の竪穴住居跡と掘立柱建物跡についてその方向性に着目してみたい。表11に竪穴住居跡については北を軸とする方向を示した。それをみると大きく2つのグループに分類が可能であると思われる。すなわち、A：東西に10°以内の角度の振れを持つもの（SB201～203・205～216・218・220・221・224・228）、B：東に10～30°程度の角度の振れを持つもの（SB204・217・219・222・223・225・226）の2者である。掘立柱建物跡は桁行方向のふれ角でいえばほとんどが10°以内におさまり、具体的なセッタ関係は不明瞭ではあるが、Aグループと密接な関係を成しているといえよう。また、すべてに該当する訳ではないが、Ⅲ区では9世紀～10世紀代とみられる竪穴住居跡はBグループに多い傾向が窺える。これは中世以降の区画にみられる方向に近く、この頃から土地利用のあり方に変化が防れた可能性がある。

今回笠井若林遺跡では竪穴住居跡が主体となる集落を確認した。これと類似する集落跡が海岸平野の砂堤列上に立地する若林町村西遺跡で調査されている（浜松市1996）。この遺跡では8世紀代～9世紀前半にかけての竪穴住居跡22軒、掘立柱建物跡3棟が検出されており、やはり竪穴住居跡が優位となる集落である。一方、該期の集落でも半田町と東三方原町にまたがる三方原台地の東端で調査された下淹遺跡群は異なった様相をみせる（浜松市1997）。下淹遺跡群では8世紀代の掘立柱建物跡176棟、竪穴住居跡33軒と掘立柱建物跡が卓越した集落が発見された。遺構・遺物の分析から8世紀代には竪穴住居跡が掘立

柱建物跡の付属的な施設へと移行し、住居形態に変化が生じたということが想定されている。集落の具体像に迫れる調査例がまだ少ないため、今後類例の増加を待つ必要はあるが、このように当該期の集落における住居形態は一様ではなく、立地や居住者層の背景によって様々であることは留意すべきであろう。

中世前期

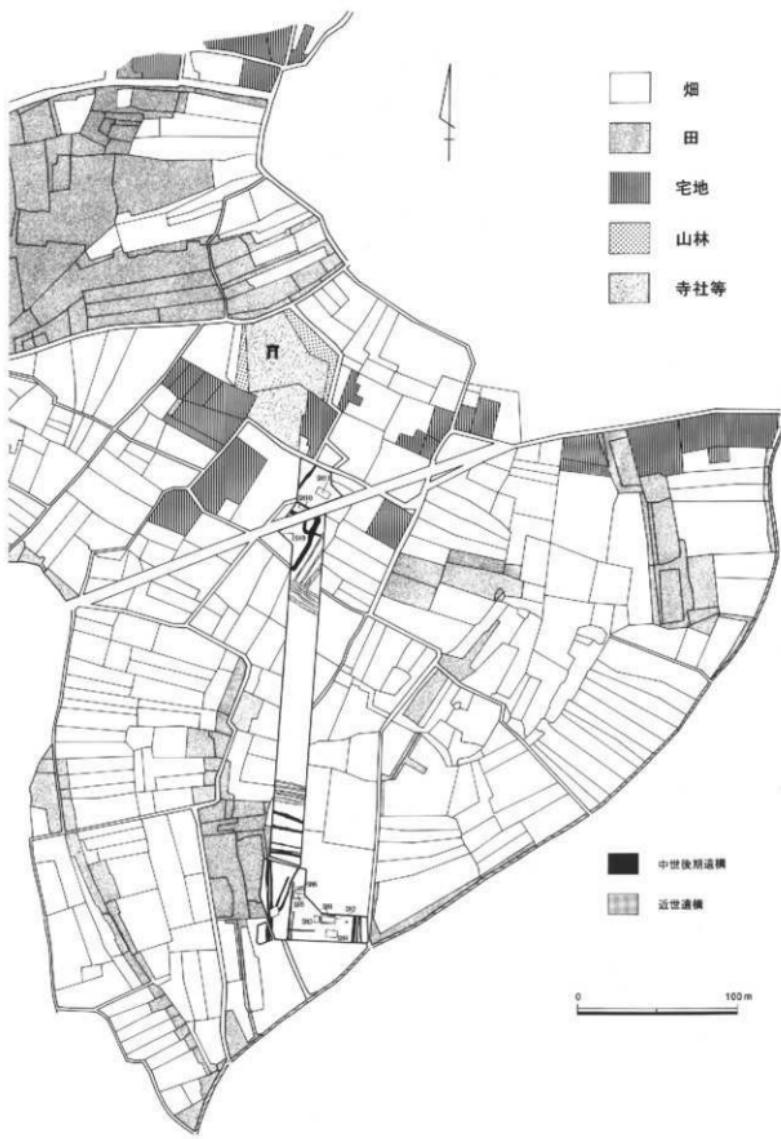
中世前期の遺構はⅠ区からⅢ区にかけて掘立柱建物跡、溝、井戸などが検出されている。溝は一定の方向性を持っており、区画溝として捉えることができる。区画された空間にはSH7・8など小規模な掘立柱建物が存在し、屋敷地となっていたと考えられる。全域が明らかとなった訳ではないため断定はできないが、区画内には遺構が少なく、また掘立柱建物の規模に比べるとSD28とSD42~45による区画の規模が大きいことから、耕地や空閑地を含めた空間を区画していたと考えられる。また、その北側には小規模な区画溝SD42~45を挟んでSE2が検出されており、別の屋敷地が存在したものと考えられる。これらがどの程度の広がりを持つものかは判然としないが、大小の溝によって区画された屋敷地が隣接しながらひとつのまとまりを持って、それが散在するような集落景観が想定される。区画溝の一部に12世紀代のものが含まれ、初源はそこに求めることもできるが、このような集落形態となるのは出土遺物が多くなる13世紀代を中心とした時期と思われる。

中世後期～近世

中世後期の遺構はⅡ区とⅢ区で多く検出された。いずれも溝によって区画された屋敷地であると考えられ、ほとんど遺構の検出できなかったⅠ区をはさんで散在的な集落を構成していたと考えられる。規模については調査区外となる部分もあることから推定の域を出ないが、Ⅱ区の屋敷地については1辺50m程度の方形区画がなされていたと考えられる。恒武西宮遺跡で検出された屋敷地まで視野に入れれば、当時の当地域における集落景観はこのような屋敷地が散在するようなものであったことが推定できる。中世前期の屋敷地が廃絶した後は古瀬戸戸へ～後期製品、貿易陶磁などの遺物が散見されるが、いずれも小破片が出土する程度で遺構との関係が判然とせず、集落としての具体像は明らかにはなっていない。遺物がまとまって出土するようになるのは古瀬戸戸IV期、15世紀中頃～後半からである。屋敷地はその頃より営まれたと考えられる。その後、16世紀末～17世紀初頭まで機能し、廃絶する。こうした動向は恒武西宮遺跡で検出された屋敷地と同様であり、両者の集落変遷は密接に関わりを持っていたことがわかる。

Ⅱ区とⅢ区で検出された屋敷地についてその方向に着目してみたい。Ⅱ区の区画が南北方向を基準としているのに対し、Ⅲ区の屋敷地は北を基準とした場合、やや東に振れている。これは中世前期の遺構とも関連すると思われる。Ⅲ区はほぼ同方向の中世前期の区画を検出しているが、Ⅱ区では検出されていない。Ⅲ区ではこれを踏襲し、Ⅱ区の屋敷地は区画を新たに設定したという見方もできる。中世後期段階の屋敷地が廃絶した後には、近世段階においては双方の区画を踏襲した区画溝が設定され、それは畑作などの耕地に関わるものと推定できた。さらに、恒武西宮遺跡で指摘したのと同様に昭和8年作成の笠井町土地宝典図と検出した中世後期～近世の遺構を重ねると、近年にまでその区画は地割としては生きていたことが確認できる。このように、遺跡周辺では前代の区画を踏襲しながら集落や耕地が営まれていたのである。

恒武西宮遺跡の場合と同様に笠井若林遺跡で検出された屋敷地も概ね遺構、遺物に突出したもののがなく、農村において普遍的にみられる集落の一部であると考えられる。その中でⅡ区の屋敷地内で出土した棹秤の鍤は注目できる遺物である。この遺物1点のみで屋敷地の居住者像にふれるのは困難ではあるが、ひとつ手がかりにはなると思われる。先述のように、こうした遺物は流通の拠点となる集落で出土することが多く、この屋敷地の居住者も流通と何らかの関わりがあり、それは近世初頭に成立する笠井の市とも関わる可能性がある。



第196図 笠井若林遺跡中世後期～近世遺構と周辺地籍図

17世紀初頭に屋敷地は廃絶し、その後Ⅲ区においては耕地化したのではないかと推定した。これはこの時期集落の再編が行われたことを意味していると思われる。これは恒武西宮遺跡の屋敷地も同様である。近世初頭の浜松地域は浜松藩領と天領が村単位で錯綜した状況にあり、近世を通じた浜松藩領が確立したのは新田開発や検地が本格的に推進された太田氏が藩主となった時期とされている（浜松市1971）。寛文4（1664）年の印知でその様子は確認でき、そこにみられる村名や石高が浜松藩領の基礎となったといわれる。この村名の中に笠井、恒武の名がみえることからこの時期には両村は浜松藩領となっていたことがわかる。それ以前、元和5（1619）年の天領の年貢割付を記載した「遠州池田川西御代官所高帳」（「秋鹿文書」 静岡県1938）には笠井村、角竹（恒武）の名がみえることから、この頃は天領であつたことがわかる。このように近世初頭に領地支配の主体が変わることは、該期に集落の再編が行われたことと無縁ではなかったと思われる。さらにこれら要因は先述のように笠井のおける市の成立自体とも密接に関わりを持っていたのではないだろうか。

第3節 恒武西宮・笠井若林遺跡の鉄滓分布について

恒武西宮・笠井若林遺跡では多くの鉄滓が出土している。恒武西宮1次・恒武西浦遺跡の調査においてもかなりの量の鉄滓が出土しており、集落内での鍛冶的な作業が行われていたことはすでに想定されていた。しかし、遺構を作った形での出土ではなく、その実態については明らかではなかった。

今回の調査では笠井若林遺跡Ⅲ区SB220内で形態や出土鉄滓の分析から、8世紀末～9世紀前半代の精錬炉と推定される遺構P2が検出された。SB220-P2はすでに述べたように、日野遺跡で検出された9世紀～10世紀代に操業されたとみられる精錬炉SG01に類似するものと思われる。このSG01については高炭素素材の脱炭処理を目的とした炉壁の必要のない「開放炉」であったと想定されている（渡辺1987）。SB220で検出された遺構も小規模なものではあるが、同様の遺構と思われ、笠井若林遺跡では精錬までをも含んだ鉄関連の作業が行われていたことを示すものと思われる。

こうした遺構はSB220-P2のみを検出したにとどまり、調査区内で出土している多くの鉄滓は包含層や遺構の埋土内からの出土がほとんどである。鉄滓を産した鉄関連の作業状況を少しでも知るために、両遺跡で出土した鉄滓の位置をグリッド単位で落とし、その分布を第22表に掲載した。大型・碗形滓とそれ以外の鉄滓・スラッグに大きく分けて表を作成し、併せて10点以上のグリッドについては網かけした。すべての遺構を対象とし、時期の明確でない包含層出土品を含むことから時期についてはこの表では明らかにはならない。遺跡の調査結果と鉄滓の分析結果をもとにすれば、古墳～平安時代までの期間で鉄関連の作業が行われていたことが推定でき、さらにそれは奈良・平安時代を中心としたものであったと考えられる。それを踏まえて表22を見てみたい。

恒武西宮遺跡ではE17区で比較的集中する傾向があるが、調査区全域にわたってほんべんなく出土している。調査区が耕地となっていたと推定したが、その影響もあってか鉄滓分布からは作業状況を見出しにくい。笠井若林遺跡については、Ⅱ区はまんべんなく鉄滓が分布しているが、SB201周辺のN54、SB204周辺のI58区にやや集中してみられ、これら遺構の周辺で作業が行われていたことが推定できる。Ⅰ区についてはSB205・206とSB207の間の空閑地であるK69区に集中がみられる。Ⅲ区はやはり前述のSB220を中心としたJ74～75・K72～76区に大型・碗形滓を含んだ多くの鉄滓が集中する。それも他地区と比べ量も圧倒的に多い。この地区が鉄関連作業の中心となっていたことは間違いない、堅穴住居跡とした遺構の中には工房的な施設も含んでいた可能性がある。

表19 恒武西宮・笠井若林遺跡鉄滓分布表

笠井若林遺跡

恒武西宮遺跡					
	A	B	C	D	E
23				▲1	▲1
22			●1 ▲1	▲2	●1
21				●1 ▲8	▲1
20			▲1	▲1	▲1
19			●1 ▲4	▲3	
18			▲6	▲3	
17		▲1	●1 ▲4	▲16	
16		▲3	▲5	●1 ▲5	▲2
15		▲1			
14					
13	▲1				

●…大型・椀形澤
▲…鉄澤・スラッグ

第4節 恒武遺跡群の中世遺物について

今回、中世の遺物である土器、陶磁器類について破片数まで含めた総量の計測を実施し、表20～22に掲載した。これはすでに報告されている恒武西宮遺跡1次、恒武西浦遺跡で出土した遺物も含んだ恒武遺跡群としての総量で、分類の方法や年代観については表中に記したとおりである。こうした取り組みは横地域総合調査報告を始め、元島遺跡、矢崎遺跡でも実施しており、中世遺跡における基本的なデータとして活用されている。今後、こうしたデータを遺跡、地域ごとに比較することで、多様な中世社会を知る手がかりを得る必要があると考えられ、詳細な検討、分析は改めて行いたいと思っている。

山茶碗類については産地、時期別に分類した。時期については松井氏編年（松井1993）、中野氏編年（中野1994）の区分にしたがっており、表5・14の一覧表に記載した時期区分についても同様である。産地の主体は湖西・美濃産で、分類できたものの内、97.4%を占める。それはⅠ～Ⅲ期を通じてほとんど変わることなく継続するようである。

鍋類の分類については元島遺跡（埋文研1999）の分類を参考とした。内耳鍋の出土量が多く、中でも内彎形が突出していることを指摘できる。鍋類の多くは16世紀代の屋敷地の溝やそれに関わる構造からの出土である。中世前期に位置付けられる伊勢型鍋は山茶碗の出土量と比べると極端に少ない。この時期の煮沸具については今後検討が必要であろう。

かわらけは成形方法によって分類した。中世前期のものを数点含むが、ほとんど15～16世紀代のものと思われ、非ロクロ成形品が98%を占める。かわらけの地域性についてはすでに論じられているが（松井1993b）、当遺跡群を含む笠井地区周辺は非ロクロ成形品が卓越しているといえる。

貿易陶磁は碗皿類を中心とした使用が確認できた。時期については12～14世紀前半までのものが多く、それ以降は減少する傾向がある。また、合子や青磁広口壺蓋などの品が少量ながら出土していることは集落における居住者像を知る上でも興味深い。

瀬戸美濃系施釉陶器については表21・22に詳細を掲載し、器種や年代観の曖昧なものは不明としてある。これは遺物を藤澤良祐氏に鑑定していただき、それをまとめたものであるため、年代観はすべて藤澤氏編年によっている。当遺跡では古瀬戸中期から遺物の搬入がみられるがその量が少なく、古瀬戸後IV期段階から搬入量は増加する。志戸呂・初山窯の製品も出土しており、特に初山窯製品は同時期の瀬戸美濃製品と比べ破片数でいえば倍近い数値を示し、かなりの搬入量が認められる。器種については、壺・瓶類が若干量出土しているが、ほとんどは日常に使用されたであろう碗・皿類で占められ、遺物の上からは突出するようを特徴は見出せない。

引用・参考文献（第IV～VI章）

- 川江秀孝 1979 「静岡県下の須恵器について」『須恵器—古代陶質土器の編年』 静岡県考古学会
宇野隆夫 1982 「井戸考」『史林』第65号第5号 史学研究会
渡辺康弘 1987 「伊豆の古代末期鉄製鍊について」『日野遺跡』 南伊豆町教育委員会
田辺寛司 1988 『長福寺誌』（「郷土を学ぶ会」資料）
後藤健一 1989 「湖西古窯群の須恵器と窯構造」『静岡県の窯業遺跡』 静岡県教育委員会
松井一明 1989 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器・陶器生産についての一考察」『静岡県の窯業遺跡』 静岡県教育委員会
八木勝行 1992 「歴史時代 銅製品」『静岡県史』資料編3考古3 静岡県
松井一明 1993 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』No.25 静岡県考古学会
松井一明 1993 「久野城出土の陶磁器・土師質土器が提示する諸問題」『久野城IV』 袋井市教育委員会
藤澤良祐 1993 「瀬戸・美濃古窯の編年」『瀬戸市史』陶磁史篇四 瀬戸市

- 中野晴久 1994 「生産地における編年について」『中世常滑焼をおって』
日本福祉大学知多半島総合研究所
- 中野晴久 1994 「知多（常滑）古窯址群の山茶碗について」『研究紀要』3号 三重県埋蔵文化財センター
- 上原真一 1994 「入れもの」『季刊考古学 第47号』雄山閣出版
- 宮本佐知子 1994 「国内出土の權衡資料」『大阪市文化財論集』（財）大阪市文化財協会
- 齊藤孝正・後藤健一編 1995 『須恵器集成図録』第3巻東日本編1 雄山閣出版
- 中世土器研究会編 1995 『中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 藤沢良祐 1996 「中世瀬戸窯の動態」『中世瀬戸窯をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』
(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴 1996 「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と妻そのデザイン』 東海考古学フォーラム
- 永井久美男 1996 『日本出土銭總覧』 兵庫埋蔵銭調査会
- 賛 元洋 1997 「古代遠江の食膳具」『静岡県考古学研究』No.29 静岡県考古学会
- 賛 元洋 1998 「湖西窯編年の再検討」『静岡県考古学研究』No.30 静岡県考古学会
- 藤沢良祐 1998 「近世瀬戸村の連房式登窯」『瀬戸市史』陶磁史篇六 瀬戸市
- 加藤理文 1999 「元島遺跡出土の煮沸用土師質土器について」『元島遺跡Ⅰ』遺物考察編1－中世－
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鈴木敏則 1999 「遠江の古墳時代中期土器様式（山ノ花様式）」『東国土器研究』5号 東国土器研究会
- 鈴木敏則 2000 「古墳時代湖西窯編年の再構築に向けて」『須恵器生産の出現から消滅』 東海土器研究会
- 古瀬清秀 1991 「農工具」『古墳時代の研究』8 古墳 副賞品 雄山閣出版
- 丸杉俊一郎 2000 「井通遺跡出土・獸足付短頸壺の新例」『研究紀要』7号
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 清口彰啓 2000 「笠井若林遺跡出土の銅鏡について」『研究紀要』7号 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録—近畿古代篇—』
- 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録—近畿原始篇—』
- 静岡県 1938 『静岡県史料』第4輯 鹿川書店（1994復刻）
- 浜松市 1971 『浜松市史』二
- 可美村教育委員会 1981 『城山遺跡』
- 浜松市教育委員会 1982 『西鶴江 中平遺跡』
- 南伊豆町教育委員会 1987 『日野遺跡発掘調査報告書』
- 新潟県教育委員会 1989 『新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡』
- (財)浜松市文化協会 1992 『佐鳴湖西岸遺跡群』
- (財)浜松市文化協会 1996 『若林 村西遺跡』
- (財)浜松市文化協会 1997 『下淹遺跡群』
- 御殿・二之宮遺跡調査会 1995 『御殿・二之宮遺跡』第6次発掘調査報告書
- (財)浜松市文化協会 1999 『西畠屋遺跡1999』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1999 『元島遺跡Ⅰ』遺物・考察編1－中世－
- 菊川町教育委員会 2000 『横地城跡』総合調査報告書資料編
- (財)浜松市文化協会 2000 『笠井若林遺跡4次』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000 『恒武西宮・西浦遺跡』
- 菊川町教育委員会 2001 『土橋遺跡』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2001 『矢崎遺跡Ⅱ』

表20 恒武遺跡群 中世遺物一覧表

器種組成表

項目	破片数(個体数)
山茶碗類	1,799(33%)
山茶碗	1,665(279)
小皿	73(39)
小鉢	61(41)
土師質土器類	2970(54%)
かわらけ	1,093(118)
鍋類	1,877(77)
その他	
常滑窯	89(1.6%)
壺	1(1)
甕	12
片口鉢	5(3)
その他	
瀬戸・湖西窯	48(0.9%)
壺	2(1)
甕	37
鉢	9(2)
その他	
備後・美濃窯	391(7%)
天目茶碗	54
碗類	24
皿類	80
卸皿類	6
盤類	10
擂鉢	122
壺・瓶頭	10
仏具類	1
その他	8
不明	76
貿易陶磁	44(0.8%)
青磁	25
碗類	18
皿類	3
盤類	1
壺類	1
その他	2
白磁	9
碗類	7
皿類	1
その他	1
青白磁	4
その他	4
染付	5
碗類	3
皿類	1
志戸呂窯	48(0.9%)
天目茶碗	2
碗類	2
皿類	11
盤類	1
擂鉢	22
壺・瓶頭	3
その他	2
不明	7
初山窯	100(1.8%)
天目茶碗	13
皿類	22
盤類	2
擂鉢	12
壺・瓶頭	41
その他	2
不明	8
その他	瓦器 3
合計	5,492
測量面積	19,025
m ² あたり点数	3.46

山茶碗時期別分類一覧

	湖西・瀬美 Ⅰ期	湖西・瀬美 Ⅱ期	湖西・瀬美 Ⅲ期	東渡江 Ⅰ期	東渡江 Ⅱ期	知多 3型式	知多 4型式	知多 5型式
碗	150(70)	27(8)	356(135)		2(2)	1(1)	3(1)	8(5)
小碗	52(33)			3(3)				
小皿		5(2)	50(24)					
合計	202(103)	32(10)	406(179)	3(3)	2(2)	1(1)	3(1)	8(5)

鍋類分類一覧

内耳鍋 (<u>の</u> 半型)	内耳鍋 (内脣型)	内耳鍋 (半型)	羽釜	羽無釜	鉢付鍋	伊勢型鍋	合計
57(5)	569(36)	54(7)	37(4)	24(1)	93(5)	23(5)	857(63)

かわらけ分類一覧

ロクロ	非ロクロ
18(16)	999(99)

貿易陶磁分類一覧

器種名	分類	年代	破片数
青磁	同安窯系 B類	12C後～13C前	1
	龍泉窯系 A類 I～4	12C後～13C前	1
	龍泉窯系 A類 I～2・4	12C後～13C前	3
	B類 B～0	14C前半	1
	B類 B～1	13C後～14C前	9
	B類 B～4	15C前半	3
	龍泉窯系 通井文皿 田類	14C	1
	無文折線皿 田類	13C～14C	1
	櫻花皿	15C中葉～15C後	1
	盤		1
白磁	白口青磁 (酒食蓋スタイル)		1
	不明		2
	IV類 (玉縁)	12C	4
	IV類 (玉縁) ?	12C	1
	V類 (端反)	12C～13C初頭	2
	三群 (端反)	15C後半～16C前	1
	不明		1
	合子 (身)		4
	B2群 (端反)	15C中葉	2
	C群 (蓋子)	15C後半～16C初頭	1
染付	B1群 (端反)	15C後半	2
	C群	15C後葉～16C前	1
	合計		44

※1 総点数には恒武西宮遺跡1次、恒武西宮遺跡2次、恒武西浦遺跡、笠井若林遺跡を対象とする。ただし、恒武西宮遺跡1次、恒武西浦遺跡遺物については、解釈がわからず、山茶碗の分類には含まない。

※2 山茶碗・鍋以外の遺物の分類及び年代観は菊川町教育委員会『横地城総合調査報告書資料編』2000による。

※3 山茶碗の時期別分類表中の時期区分は湖西・瀬美及び東渡江製品は松井氏編年(松井1993)、知多製品は中野氏編年(中野1994)による。また、I～II期のように複数時期でしか識別できなかったものは集計した。

※4 山茶碗・鍋類の分類は体部資料を含まない。

表21 恒武遺跡群 潤戸美濃系施釉陶器一覽表

部種名		古賀戸前用		古賀戸中用		古賀戸後用		古賀戸 古賀戸 一大箱		大箱物品				大箱計		合計		
		1	日	2	1	日	月	1	日	月	1	日	月	1	日	月	1	日
天目	天目茶碗							1	6		13	3	5	3			32	56
									17	7			3	2			10	10
煎茶	灰鶴丸煎							1	2	1	2	8					12	
	灰鶴平煎							1	1	12							1	
煎茶	灰鶴煎反煎																9	9
	灰鶴煎反煎かん煎																18	18
煎茶	灰鶴煎中煎							2	2								6	6
	灰鶴煎半煎							3	2								2	2
煎茶	灰鶴煎引煎																2	2
	灰鶴煎引煎小煎							1	4	1	7						7	
煎茶	灰鶴煎引煎小煎																13	13
	灰鶴煎引煎かん煎																1	1
煎茶	灰鶴煎引煎																1	1
	煎茶煎引煎																3	3
煎茶	煎茶煎引煎																1	1
	吉野小煎																1	1
煎茶	志摩煎																1	1
	角煎																1	1
煎茶	灰鶴煎引付大煎							1	1	2							2	
	灰鶴煎引付大煎																4	
煎茶	灰鶴煎引付大煎																4	
	灰鶴煎引付																6	
煎茶	灰鶴煎引付																6	
	灰鶴煎引付																122	
煎茶	灰鶴煎引付																4	
	灰鶴煎引付																4	
煎茶	灰鶴煎引付																6	
	灰鶴煎引付																6	
煎茶	灰鶴煎引付																122	
	灰鶴煎引付																122	
煎茶	灰鶴煎引付																2	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																1	
	灰鶴煎引付																1	
煎茶	灰鶴煎引付																	

表22 恒武遺跡群 初山・志戸呂窯施釉陶器一覧表

初山

器種名	古窯戸前期				古窯戸中期				古窯戸後期				古窯戸 計	古窯戸 ～大窯	大窯製品						大窯計	合計	
	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV			古	大	1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前
天目	天目茶碗																	10				10	10
	小天目																	3				3	3
	鉢																	1				1	1
並頭	鉢																	1				1	1
	鉢																	17				17	17
	鉢																	3				3	3
桂葉	鉢																	2				2	2
	鉢																	12				12	12
	鉢																	25				25	25
直腹鉢	鉢																	12				12	12
	鉢																	4				4	4
	鉢																	2				2	2
その他	鉢																	92				92	92
	合	計																					
																		100				100	100

志戸呂

器種名	古窯戸前期				古窯戸中期				古窯戸後期				古窯戸 計	古窯戸 ～大窯	大窯製品						大窯計	合計	
	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV			古	大	1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前
天目	天目茶碗																	1				1	1
	小天目																	2				2	2
	鉢																	2				2	2
並頭	鉢																	1				1	1
	鉢																	3				4	4
	鉢																	1				1	1
桂葉	鉢																	1				1	1
	鉢																	2				2	2
	鉢																	2				2	2
直腹鉢	鉢																	1				1	1
	鉢																	1				1	1
	鉢																	1				1	1
その他	鉢																	8				9	22
	合	計																1				1	1
																		15				19	41
不明	鉢																	1				1	1
	不明																	2				4	4
	合	計																3				4	7
	合	計																25				23	48

付編 恒武西宮・笠井若林遺跡出土鉄製品

成分分析調査

(株) 日鐵テクノリサーチ
伊藤 薫

1. いきさつ

笠井地区は浜松市北東部の天竜川が形成した沖積平野に位置し、古墳時代から中世にかけての堅穴住跡や掘立柱建物跡などが確認されている。建物跡からは数多くの土器とともに鉄関連遺物が出土した。本調査は、笠井若林遺跡および恒武西宮遺跡2次調査で出土した椀型状鉄滓の金属学的分析調査を行ったものである。

2. 試料

調査に供した試料は、笠井若林遺跡Ⅰ～Ⅲ区で出土した鉄滓9点、恒武西宮遺跡2次調査で出土した鉄滓1点の合計10点である。表1には調査試料の一覧表と分析項目を示した。

3. 調製法および調査方法

調査試料は外観的特徴を記録した後、上下関係を確認した後、平均的な箇所についてダイヤモンドカッターを用いて切断し、組織観察と成分分析用に供した。

組織観察用試料は、真空中でエポキシ系樹脂に埋め込み組織を固定した後、粗研磨は湿式エメリー紙にて、仕上げ研磨はダイヤモンドペーストを用いて行った後、光学顕微鏡を用いてその組織の観察を行った。なお組織判定用に用いた装置および条件は以下の通りである。

* 光学顕微鏡 HFX-II型 (日本光学製)

* X線マイクロアナライザー

(EPMA) JXA-8900型 (日本電子製)

測定条件 印加電圧: 15kV、試料電流: 0.1 μA

* 微小部分析(EDX) EMAX-2770型 (堀場製作所製)

成分分析用試料は超音波洗浄器を用いてエタノール中にて土砂等の付着物を取り除き、乾燥後鉄乳鉢にて微粉砕 (60メッシュ以下) し、含有する元素の定量を以下の方法で行った。

1) T・Fe (JIS容量法)

試料秤量後、塩酸およびフッ化アンモニウムで供試試料を分解し、ろ過・洗浄した後ろ液は保存し残渣を白金ルツボに挿入、電気炉にて炭化・灰化させた後 $K_2Cr_2O_7$ で溶解・抽出し水酸化物を分離する。ろ紙上の水酸化物を先のろ液に挿入し塩酸で溶解する。濃縮後三塩化チタン還元を行い、 $K_2Cr_2O_7$ で滴定後、計算から求める。

2) M・Fe (JIS容量法)

試料秤量後、Br-MeOHで攪拌する。吸引ろ過後 (残渣はFeO分析用に使用) 洗浄しBr-MeOH溶液

で蒸発乾涸させ、 H_2SO_4 、 H_2O_2 で有機物を分解した後、三塩化チタンで還元・滴定後計算から求める。

3) FeO (JIS容量法)

試料秤量後、Br-MeOHで攪拌する。吸引ろ過後の残渣を、三角フラスコに挿入しAr気流中で塩酸分解する。冷却後、混酸を添加し $K_2Cr_2O_7$ で滴定後、計算から求める。

4) SiO₂ (JIS重量法)

試料秤量後、塩酸溶解・ HNO_3 で酸化し硫酸で脱水白煙化後、放冷し可溶性塩類を溶解する。ろ過・洗浄（ろ液保存）後、乾燥・灰化・強熱（電気炉；1100°C）処理後、デシケーター中で冷却後秤量する（A）。その後、フッ酸処理し強熱（電気炉；1100°C）後デシケーター中で冷却した後秤量する（B）。

AとBからSiO₂を算出する。

5) Al₂O₃・CaO・MgO・MnO・TiO₂ (ICP法；誘導結合プラズマ発光分光分析)

3) のフッ酸処理後の試料は、白金ルツボに挿入し $K_2S_2O_7$ を加え溶解する。3) で保存したろ液に合併させ、定容した後ICPにて測定を行う。

鉱物相の判定は、エネルギー分散型X線分析装置（EDX）を用いて行った。また、代表的な鉱物相についての定量分析は、X線マイクロアナライザ（EPMA）を用い、以下の方法により行った。EPMAにより得られたX線強度値（cps；1秒当りのカウント数）と標準試料のX線強度値（cps）とから、ZAF補正を施した後、その鉱物の組成を半定量値（wt%）として表した。また、代表的な試料について鉱物相の元素分布を実施した。

4. 結果

表2に調査試料の大きさと外観的特徴を示した。

1) 奈良～平安前期の鉄滓

イ. 試料No.1 鉄滓 (SX229:笠井若林遺跡Ⅰ区 写真1)

一部に粘土が付着した黒褐色を呈し重量感のある橢型鉄滓の破片である。表2に化学組成を示した。全鉄（T・Fe）は41%台とあまり高くなく、チタン分も0.3%と低い。しかし、酸化珪素（SiO₂）が30%弱と高い値を示すことが特徴的である。写真1に断面マクロ・ミクロ組織を示した。数mmの大きな空孔が多く存在することから、鉄滓の生成過程で活発なガスの発生が伴っていたことが推測される。構成鉱物相は細長く大きく成長した結晶を主体とするものからなる。この鉱物はファヤライト（理論組成；2FeO-SiO₂、符号F）で、非晶質珪酸塩（符号S）中には微細なウスタイト（理論組成；FeO、符号w）やスピネル構造を有するハーシナイト（理論組成；FeO-Al₂O₃、符号H）が僅かに存在する。大きく結晶が発達したファヤライトやハーシナイトの存在から、高い還元雰囲気の鉄浴表面で生成したもので、比較的緩やかな冷却速度で固化したものと考えられる。

ロ. 試料No.2 鉄滓 (SB211:笠井若林遺跡Ⅱ区 写真2)

茶褐色を呈し、大小の空孔を有する橢型鉄滓の破片である。写真2-1に断面マクロ・ミクロ組織を示した。上層は数mm厚さの鉄錆（符号r）で覆われ、大小の空孔も多く存在し比較的ボーラスな鉄滓である。この鉄滓も生成過程で活発なガスの発生が起っていたことが判る。構成鉱物は前記のSX229と同様に、大きく発達したファヤライト（F）とハーシナイト（H）および微細なウスタイト（W）、非晶質珪酸塩（S）からなる。一方、写真2-2に鉱物相の元素分布をEPMA（X線マイクロアナライザ）により行った結果を示した。鉄（Fe）と珪素（Si）および酸素（O）が共存している結晶はファヤライト、鉄とアル

ミニウム (Al) が共存している結晶はハーシナイトであることが判る。この鉄滓は、一部分離しきれずに残した金属鉄が錆化したものとの混合物で、前記のSX229と同様に鉄浴と接していた箇所で生成した鉄滓といえる。

八、試料No.3 鉄滓 (SB223:笠井若林遺跡Ⅲ区 写真3)

茶褐色を呈し油脂感のある楕型鉄滓の破片で、表面の一部には球形化した部分（湯玉になりかかっている）もみられる。写真3-1に断面マクロ・ミクロ組織を示した。大小の比較的丸い空孔が多く、上層には鉄錆が薄く存在する。構成鉱物はウスタイト (W) とファヤライト (F)、僅かに金属鉄 (Me) と非晶質珪酸塩 (S) からなる。また、写真3-2には鉱物相の元素分布を示した。若干のマグネシウム (Mg) を固溶するウスタイトと不定形のファヤライトで僅かに酸化珪素・酸化アルミニウム・酸化カルシウムで構成される非晶質珪酸塩が存在することが判る。ウスタイトが多いことから鉄分の多い鉄滓といえる。この鉄滓も前記試料と同様の生成過程を経たものと考えられる。

二、試料No.4 鉄片錆 (SB220 : 笠井若林遺跡Ⅲ区 写真4)

黄褐色の丸みを帯びた形状を示す遺物である。写真4に断面マクロ・ミクロ組織を示した。角状を示す断面構造で、周辺には粘土鉱物が付着し中央部は空洞である。前面が錆 (赤錆・黒錆) からなり、錆化が進んでかなりの箇所に隙間が形成されている（膨張のため）。緻密な部分には僅かに金属鉄が存在するが、元の金属組織を推測するような組織は残存していない。断面形状からみて、角状に加工する工程で発生した鉄製品の残欠品と考えられる。

ホ、試料No.5 発泡スラグ (SB220-P2 : 笠井若林遺跡Ⅲ区 写真5)

数mmの丸みを帯びた形状で灰色から黒褐色を呈する発泡スラグである。表2に化学組成を示した。全鉄は22%台と低い値に対し酸化珪素が51%台、酸化アルミニウムも11%と高い値を示す。写真5に断面マクロ・ミクロ組織を示した。球状の空孔が多く存在し、数μmの角状を示す珪石や粘土質が溶けたものから構成される。したがって、このものは、炉材が火炎により溶けて、接触していた鉄滓の一部を取り込んで球状化したものといえる。

2) 中世～近世

イ、試料No.6 鉄滓 (SD8 : 笠井若林遺跡Ⅱ区 写真6)

茶褐色で凹凸を呈する塊状の鉄滓である。表2の化学組成から全鉄は62%と高い。しかし、酸化チタンは0.1%と低い値を示す。写真6に断面マクロ・ミクロ組織を示した。大小の空孔が多く存在するとともに、上層は数mmの鉄錆層が覆っている。この鉄滓の生成過程で活発なガス発生があったものと考えられる。構成鉱物は、ウスタイト・ファヤライトと若干の金属鉄や非晶質珪酸塩からなる。鉄錆や多くの空孔の存在から、鉄浴表面で生成した鉄滓と考えられる。

ロ、試料No.7 鉄滓 (SD71 : 笠井若林遺跡Ⅲ区 写真7)

黒褐色を呈し、底部に粘土が付着した楕型を示す鉄滓の破片である。写真7に断面マクロ・ミクロ組織を示した。大小の空孔はあるものの比較的緻密な鉄滓である。構成鉱物は、角状に大きく発達したファヤライトと微細なウスタイト、非晶質珪酸塩からなる。表層の一部に錆鉄の組織を残した数mmの粒子（錆化している）が固着している。この鉄滓の生成過程で錆鉄が使用されていたことが伺える。したがって、この鉄滓は炭素量の高い錆鉄を低減し鋼にするための精錬過程で生成した鉄滓と考えられる。

ハ、試料No.8 鉄滓 (SD39 : 笠井若林遺跡Ⅲ区 写真8)

茶褐色で一部に鉄錆が付着する塊状鉄滓である。写真8に断面マクロ・ミクロ組織を示した。大小の空孔が数多く存在し、上部には鉄錆が固着している。構成鉱物は微細なウスタイトと大きく結晶成長したファヤライト、非晶質珪酸塩からなる。この鉄滓も前記試料No.7と同様の生成過程を経たものと考え

られる。

二. 試料No.9 鉄滓 (SD43: 笠井若林遺跡Ⅲ区 写真9)

黒褐色で橢型を呈する鉄滓破片である。表2に化学組成を示した。全鉄は50%、酸化チタンは0.2%台と低い値を示す。写真9に断面マクロ・ミクロ組織を示した。表面の一部には薄く鉄錆が覆っており、大小の空孔も多く存在する。構成鉱物は前記SD71とほぼ同様に、微細なウスタイトと大きく結晶成長したファヤライトと非晶質珪酸塩からなり、結晶の大きさもほぼ同様である。

3) 古墳

イ. 試料No.10 鉄滓 (SD301: 恒武西宮遺跡 写真10)

茶褐色で橢型を呈する鉄滓である。一部に粘土質の粒子が付着している。表2の化学組成から、全鉄は60%近くあり、酸化第二鉄 (Fe_2O_3) も27%台と高い値を示す。酸化チタンは0.1%と低い。写真10-1に断面マクロ・ミクロ組織を示した。上層は10数mmの厚さで鉄錆層が存在するとともに、下層にも部分的に鉄錆が内包している。大小の空孔も多く存在する。鉄滓中の構成鉱物は、ウスタイトと針状のファヤライト、非晶質珪酸塩からなる。写真10-2には鉄滓組織中の鉱物相の元素分布を示した。したがって、この鉄滓は鉄浴と接していた部分で生成した鉄滓と分離しきれずに残存した金属鉄が錆化したものの混合物で、笠井若林遺跡の鉄滓と同様に、精錬工程で生成した鉄滓と考えられる。

5. 考察

年代の異なる笠井若林遺跡（奈良～平安、中世～近世）および恒武西宮遺跡（古墳）から出土した鉄滓類について、金属学的調査を行った結果、奈良～平安前期および中世～近世の時代に位置付けられる笠井若林遺跡から出土した鉄滓は、いずれもチタン濃度が低く、始発原料はチタン濃度の極低い砂鉄か鉄鉱石と考えられる。奈良・平安期のこれと類似する遺跡として（成分的に）、千葉県船橋市の本郷台遺跡および神奈川県秦野市の草山遺跡から出土した鉄滓の化学組成を表3に示した。チタン濃度は0.数%台と低く、いずれも精錬工程で生成した鉄滓と位置付けられ、本遺跡と同様の原料が使用された可能性が高い。本遺構の鉄滓も、マクロ構造および構成鉱物から、単なる鋼を加熱・鍛打して目的の鋼製鉄器を製作するという「小鍛冶操作」に伴って排出された鉄滓類ではないことは明らかであり、鋼を製造する「精錬操作」に伴って生成したものである可能性が高いといえる。しかし、中～近世の試料については①鉄錆が付着あるいは内包し、十分に分離しきれていない、②ファヤライト結晶が大きく発達している（徐玲）等、酷似する点があることや、また溝からの出土試料とのことから、奈良・平安時代の鉄滓が流れ込んだ可能性もあると考えられる。一方、古墳時代に相当する恒武西宮遺跡から出土した鉄滓のマクロ・ミクロ組織や化学組成のチタン分が少ないとおよび構成鉱物などは、笠井若林遺跡出土の鉄滓と大差ない。したがって、これらの地域一帯は、共通した素材が使用されていたものと考えられる。

引用文献

- 1) 船橋市遺跡調査会 『本郷台遺跡第7次発掘調査報告書』 2000.1
- 2) (財)かながわ考古学財団 『草山遺跡』 2000.12

表1 調査試料の一覧表と分析項目

試料 No.	地区と出土遺構 (記号)	試料名	時代	分析内容			
				外観 観察	組織 観察	EPMA 分析	化学 分析
1	笠井若林I区、SX229	鉄滓(焼型破片)	奈良～平安	○	○	△	○ 1
2	笠井若林III区、SB211	鉄滓(焼型破片)	奈良～平安	○	○	○	× 2
3	笠井若林III区、SB223	鉄滓(焼型破片)	奈良～平安	○	○	○	× 3
4	笠井若林III区、SB220	鉄鋳(製品破片)	奈良～平安	○	○	×	× × 4
5	笠井若林III区、SB220P2	鉄滓(発泡スケル)	奈良～平安	○	○	△	○ 5
6	笠井若林II区、SD8	鉄滓(塊状破片)	中世	○	○	△	○ 6
7	笠井若林III区、SD71	鉄滓(焼型破片)	中世	○	○	△	× 7
8	笠井若林III区、SD39	鉄滓(塊状破片)	近世	○	○	△	× 8
9	笠井若林III区、SD43	鉄滓(塊状破片)	中世	○	○	△	○ 9
10	恒武西宮、SD301	鉄滓(焼型破片)	古墳	○	○	○	○ 10

注) ○: 実施、△: 微小領域で実施、×: 実施せず。

表2 調査試料の大きさと外観的特徴

試料 No.	地区と出土遺構 (記号)	試料名	時代	大きさ (mm)	重量 (g)	外観的特徴
1	笠井若林I区(SX229)	鉄滓	奈～平	110×84×28	340	黒褐色、粘土付着、重量感あり
2	笠井若林III区(SB211)	鉄滓	奈～平	60×57×35	170	茶褐色、鉄鋳固着、空孔多い
3	笠井若林III区(SB223)	鉄滓	奈～平	75×57×35	84	茶褐色、鉄鋳固着、油脂感あり
4	笠井若林III区(SB220)	鉄鋳	奈～平	25×18×18	10	黄褐色、球状、粘土粒子付着
5	笠井若林III区 (SB220P2)	鉄滓	奈～平	約10φ	3	灰色～黒褐色、球状粒子
6	笠井若林II区(SD8)	鉄滓	中世	65×40×32	129	茶褐色、凹凸、鉄鋳固着
7	笠井若林III区(SD71)	鉄滓	中世	100×74×26	250	黒褐色、底部に粘土、油脂感あり
8	笠井若林III区(SD39)	鉄滓	近世	72×56×28	113	茶褐色、凹凸、鉄鋳固着
9	笠井若林III区(SD43)	鉄滓	中世	55×60×18	90	茶褐色、油脂感あり
10	恒武西宮(SD301)	鉄滓	古墳	87×48×36	144	茶褐色、凹凸、鉄鋳固着

表3 鉄滓の化学組成

試料名	全 鉄 T-Fe	金属鉄 M-Fe	酸化第一 鉄 FeO	酸化第二 鉄 Fe2O3	酸化珪素 SiO2	酸化アルミニウム Al2O3	酸化カルシウム CaO	酸化マグネシウム MgO	酸化チタン TiO2
SX229 梶	41.4	0.51	47.6	5.56	29.8	7.00	1.94	1.16	0.32
SB220 泡	22.5	0.31	21.1	8.28	51.2	11.1	1.22	1.64	0.54
SD8 塊	62.5	0.53	65.6	15.7	12.3	2.59	1.16	0.60	0.11
SD43 梶	50.2	0.46	53.0	12.9	21.7	5.12	1.18	0.88	0.23
SD301 梶	58.9	0.42	50.5	27.6	14.2	2.81	2.04	0.48	0.10
本郷台1)	56.2	---	49.0	32.0	8.21	2.22	5.71	1.27	0.21
草山2)	58.3	---	32.9	48.2	7.21	2.56	1.24	0.48	0.20

注) 梶; 梶型滓、泡; 発泡マグ、塊; 塊状滓を表す。

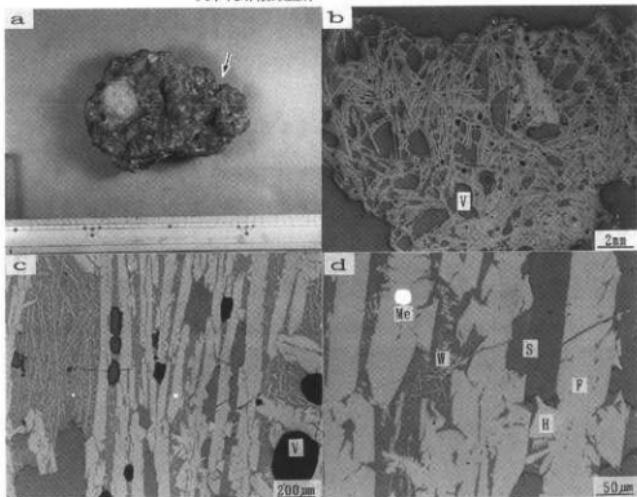
表4 SB211 鉄滓、鉱物相の半定量分析結果(wt% ; by EPMA)

鉱 物 名	酸化珪素 SiO2	酸化アルミニウム Al2O3	酸化カルシウム CaO	酸化マグネシウム MgO	酸化チタン TiO2	ウスタイト FeO
フッサイト(F)	33.0	0.4	0.7	3.3	Tre	62.7
ルソナイト(H)	0.4	44.7	tre	0.4	3.0	51.4

注1) tre; 検出されずを表す。

注2) 分析箇所; 写真2-1 の符号F,H

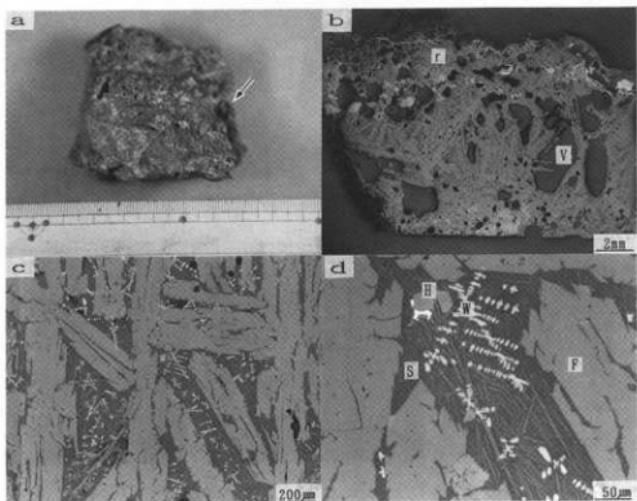
矢印；試料採取箇所



Me; 金属鉄、W;ウスタイト、F;ファヤライト、H;ハーシナイト、S;非晶質珪酸塩、V;空孔。

a;外観、b;断面マクロ組織、c, d;断面ミクロ組織。

写真1 試料No.1 (SX229) 鉄滓の外観と断面組織



W;ウスタイト、F;ファヤライト、H;ハーシナイト、S;非晶質珪酸塩、r;鉄鉢、V;空孔。

a;外観、b;断面マクロ組織、c, d;断面ミクロ組織。

写真2-1 試料No.2 (SB211) 鉄滓の外観と断面組織

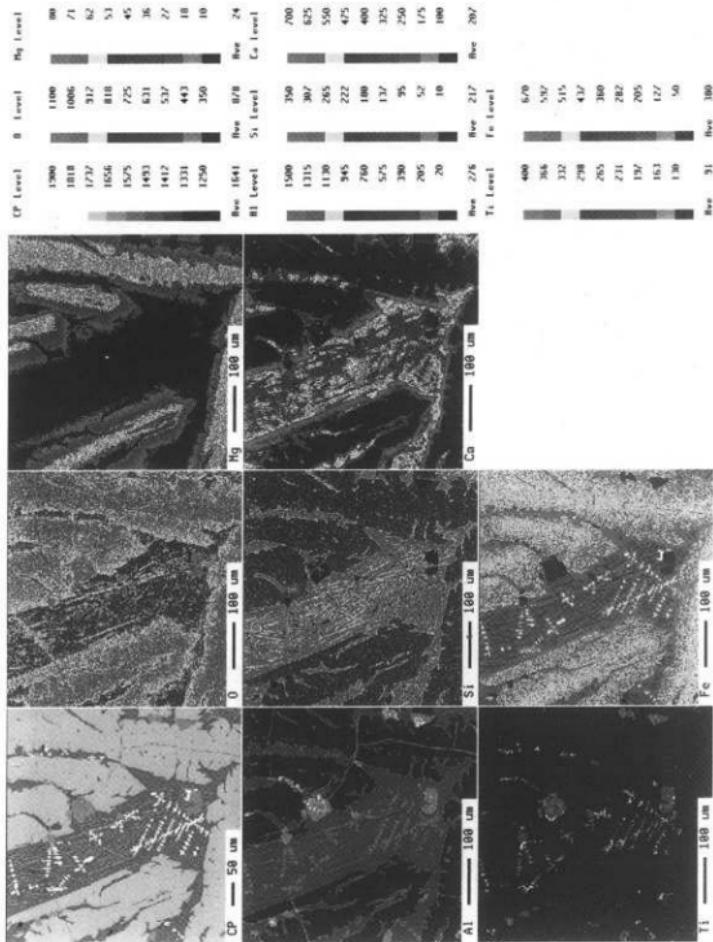
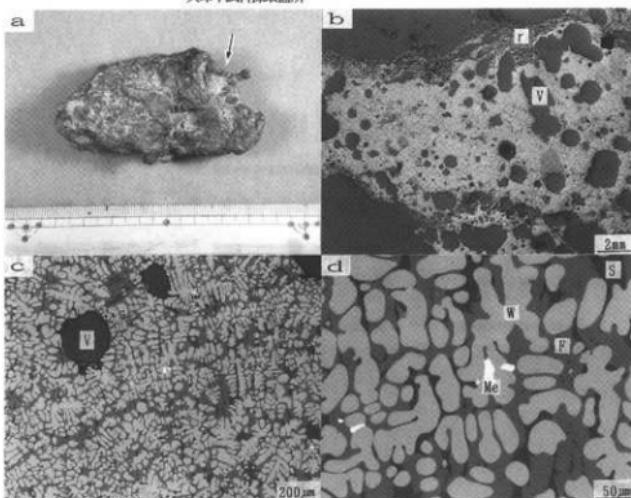


写真2-2 試料No2 (SB211) 鉄滓の鉱物相の元素分布

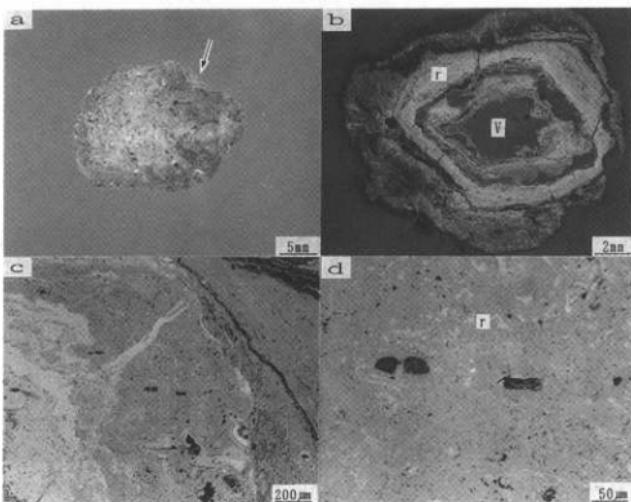
矢印；試料採取箇所



Me; 金屬鉄、W; ウスタイト、F; ファラライト、S; 非晶質珪酸塩、r; 鉄鏽、V; 空孔。

a; 外観、b; 断面マクロ組織、c, d; 断面ミクロ組織。

写真3-1 試料No.3 (SB223) 鉄滓の外観と断面組織



r; 鉄鏽、V; 空孔。

a; 外観、b; 断面マクロ組織、c, d; 断面ミクロ組織。

写真4 試料No.4 (SB220) 鉄滓の外観と断面組織

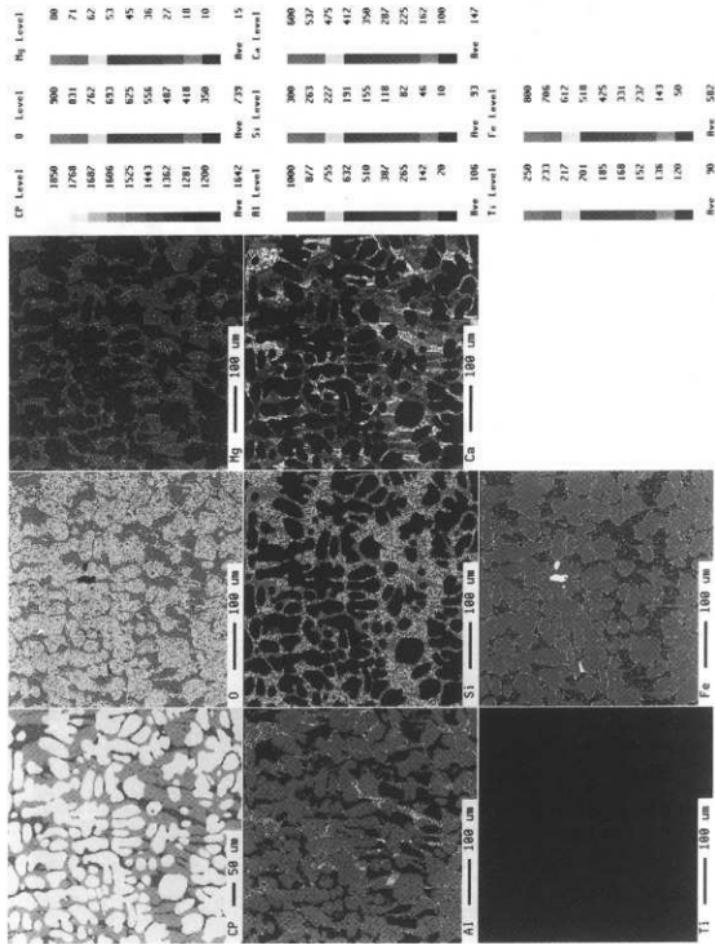
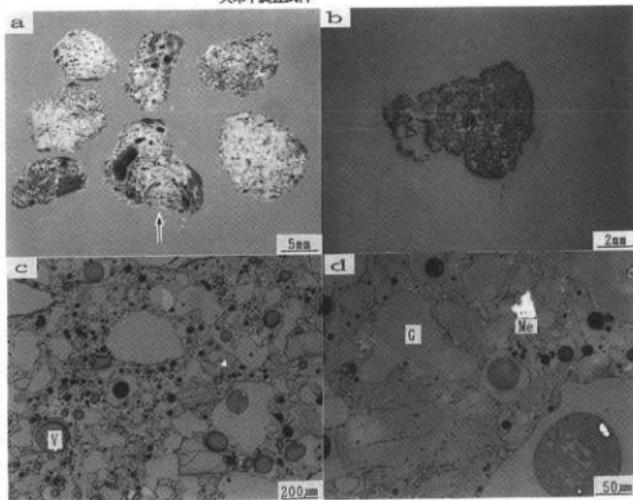


写真3-2 試料No.3 (SB223) 鉄-洋の鉱物相の元素分布

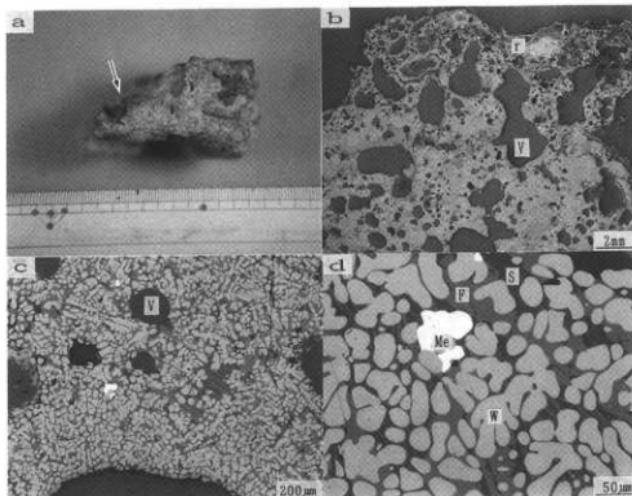
矢印: 調査試料



Me: 金属鉄、G:ガラス、V:空孔。

a:外観、b:断面マクロ組織、c, d:断面ミクロ組織。

写真5 試料No.5 (SB220-P2) 鉄滓の外観と断面組織

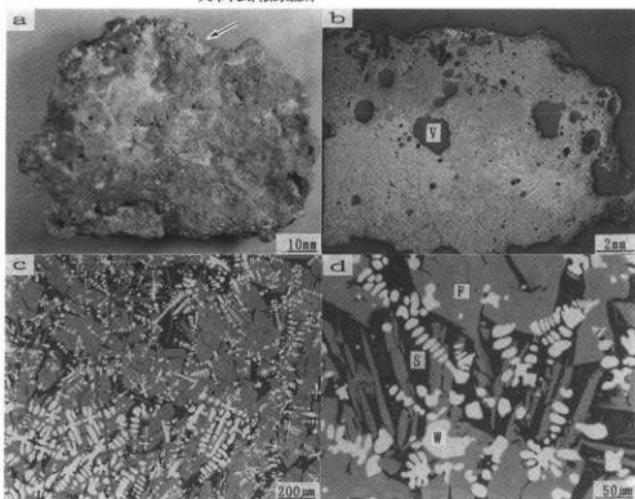


Me: 金属鉄、W:ウスタイト、F:ファヤライト、S:非晶質珪酸塩、r:鉄鏽、V:空孔。

a:外観、b:断面マクロ組織、c, d:断面ミクロ組織。

写真6 試料No.6 (SD8) 鉄滓の外観と断面組織

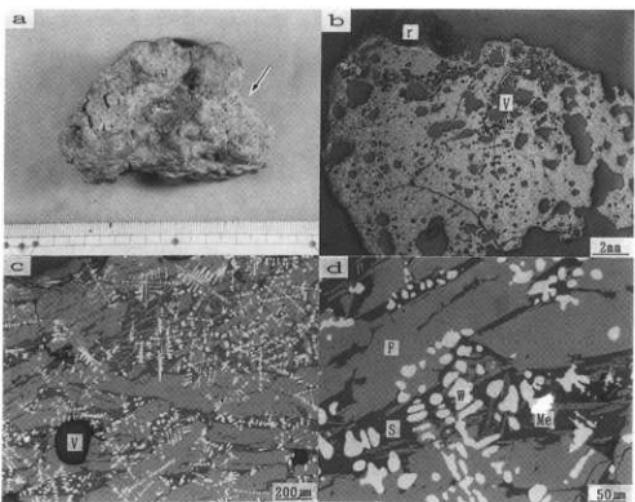
矢印；試料採取箇所



W:ウスタイト、F:ファヤライト、S:非晶質珪酸塩、V:空孔。

a:外観、b:断面マクロ組織、c,d:断面ミクロ組織。

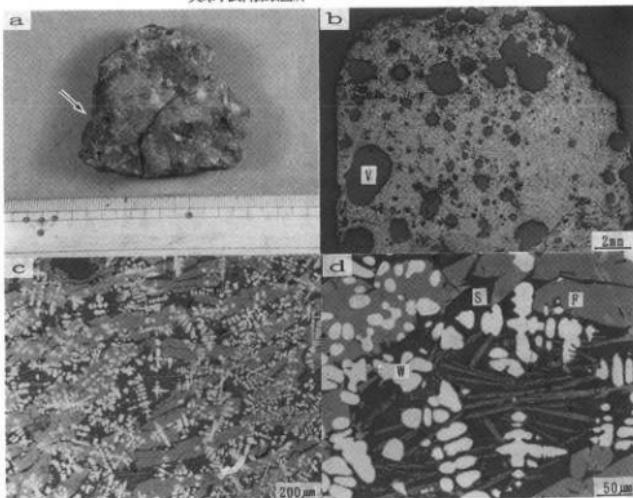
写真7 試料No.7 (SD71) 鉄滓の外観と断面組織



Me: 金属鉄、W:ウスタイト、F:ファヤライト、S:非晶質珪酸塩、V:空孔。

a:外観、b:断面マクロ組織、c,d:断面ミクロ組織。

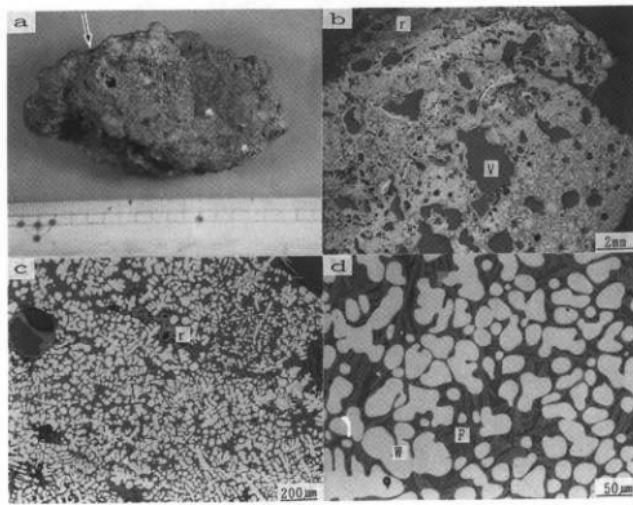
写真8 試料No.8 (SD39) 鉄滓の外観と断面組織



W:ウスタイト、F:ファヤライト、S:非晶質珪酸塩、V:空孔。

a:外観、b:断面マクロ組織、c, d:断面ミクロ組織。

写真9 試料No.9 (SD43) 鉄滓の外観と断面組織



W:ウスタイト、F:ファヤライト、r:鉄鏽、V:空孔。

a:外観、b:断面マクロ組織、c, d:断面ミクロ組織。

写真10-1 試料No.10 (SD301) 鉄滓の外観と断面組織

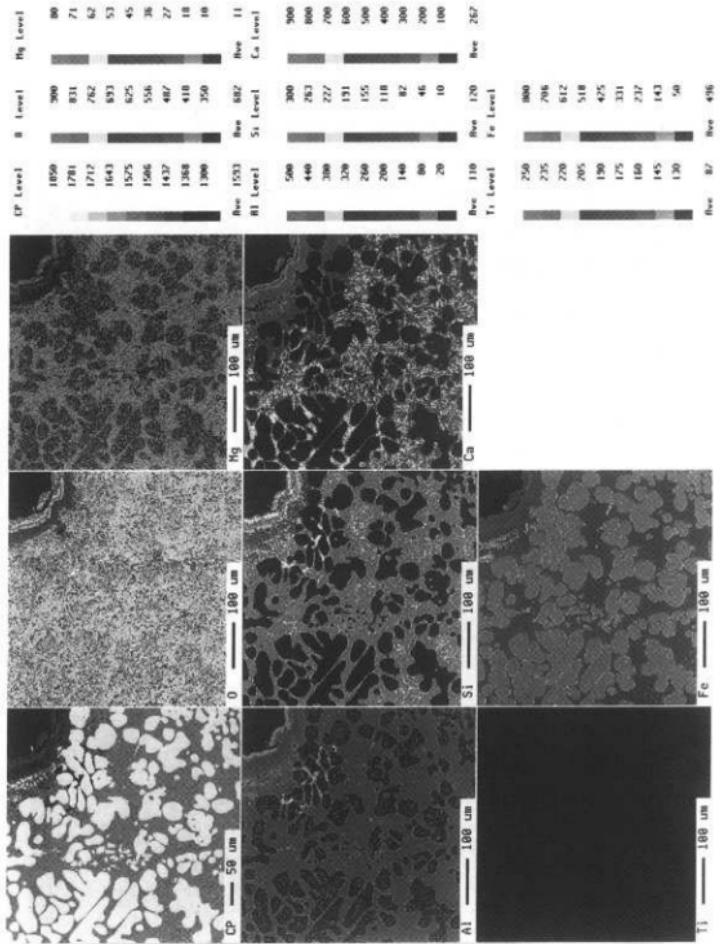


写真10-2 試料No.10 (SD301) 鉄錆の鉱物相の元素分布

発掘調査及び資料整理にあたって、浜松市教育委員会、恒武町在住の田辺寛二氏、小栗五雄氏には格別のご協力をいただいた。また、下記の方々にご指導、ご教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。
(敬称略・順不同)

足立順司 安藤寛 太田好治 小野正敏 川江秀孝 木戸雅寿 久野正博 桑原尊器 後藤健一
佐野一夫 佐藤由紀男 鈴木一有 鈴木敏則 柴田稔 清水尚 辰巳均 塚本和弘 次山淳
戸塚和美 中井均 中川律子 中野晴久 前田庄一 松井一明 三浦正幸 山本宏司 山本義孝

発掘調査参加者

相羽喜宏 青島みち子 青野武 秋元玲子 足立治 磯部茂栄 江間徳治 大城隆四郎 太田國雄
太田貞司 小笠原明美 影山文子 加藤幹也 加藤律子 川村富士夫 北史枝 金原邦雄
金原佳子 五明省司 佐藤満治 志太政夫 鳴田完治 鳴田雅司 鈴木乙男 鈴木勝夫 鈴木教二
鈴木恵 鈴木利幸 鈴木直行 鈴木秀子 鈴木正男 鈴木松好 鈴木安市 鈴木由美子 鈴木良光
鈴木喜宏 杉山勇 高野茂雄 高橋むつ子 高林智子 田口久子 武市聖 武田誠治 辻和子
辻村貞恵 土屋栄三郎 中林吉弘 中村脩司 中村智子 野沢やす子 橋口勝治 平野京造
藤田孝司 古川裕司 古田田鶴子 星堯 松島辰雄 松本栄 宮本来内 村松記代子 室岡いつ子
山本史子 山本留美子 渡邊治男

整理作業参加者

(島田整理事務所・本部)
秋山千春 海野ひとみ 萩本智子 酒井結花 佐野絹子 白烟幸子 杉浦久子 鈴木圭子
鈴木まき江 鈴木由美子 多田容子 原洋子 水野かおり 村田浩子 鶯塚宏子
(保存処理室)
青島アサイ 伊藤純子 川淵由美子 木村泰美 西川さおり 細澤明子 松永英絵
(写真室)
杉山すず代

写 真 図 版

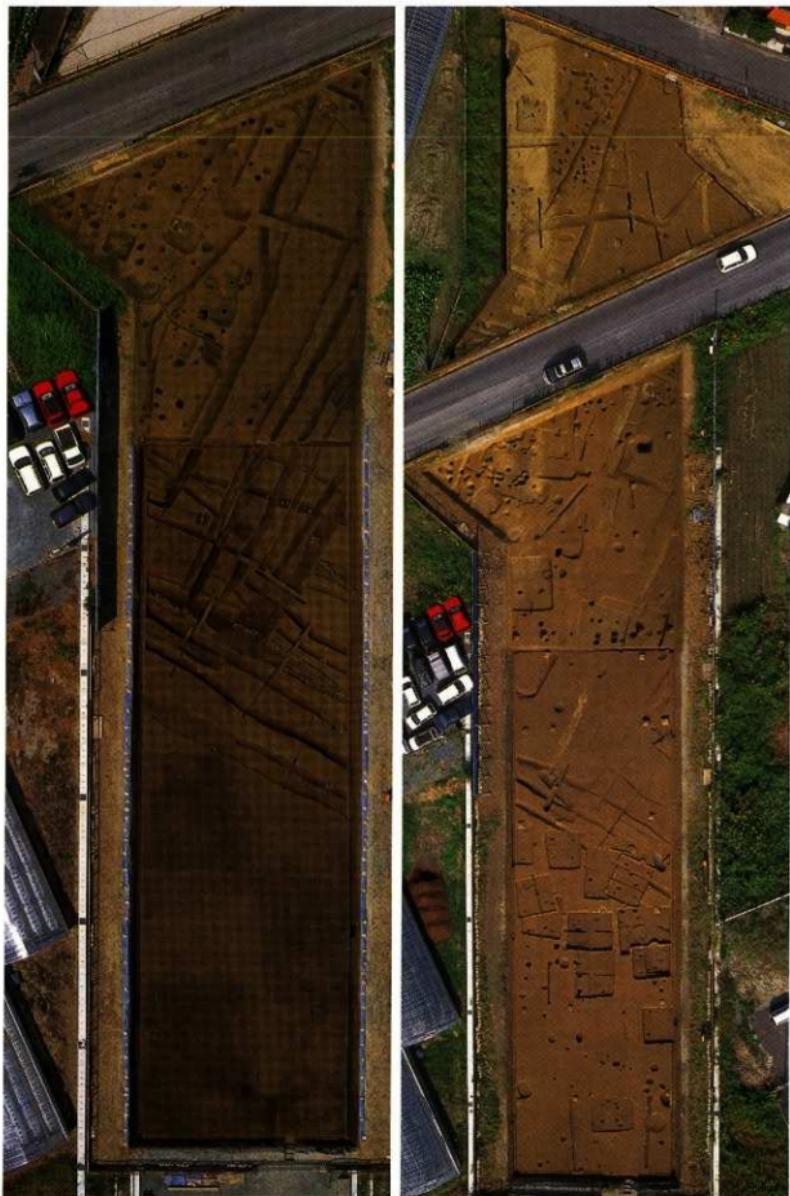


恒武遺跡群周辺の地形（南より）

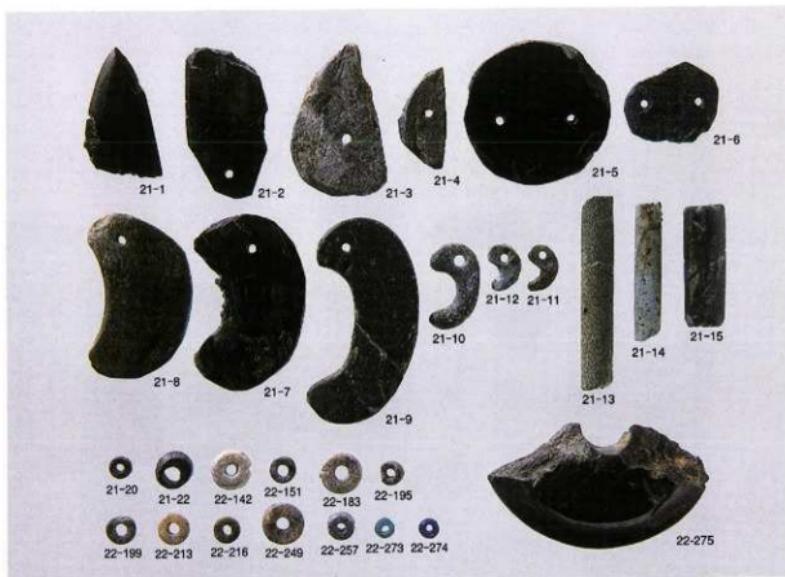


恒武遺跡群周辺の地形（南東より）

カラー図版2



笠井若林遺跡Ⅲ区完掘状況（上空より、合成）



恒武西宮遺跡出土石製模造品



笠井若林遺跡I区SB206出土遺物

カラー図版4



恒武西宮・笠井若林遺跡出土貿易陶磁



笠井若林遺跡 II 区 SD2 出土遺物



調査区北半第2面全景（西より）



調査区南半第2面全景（西より）

図版2



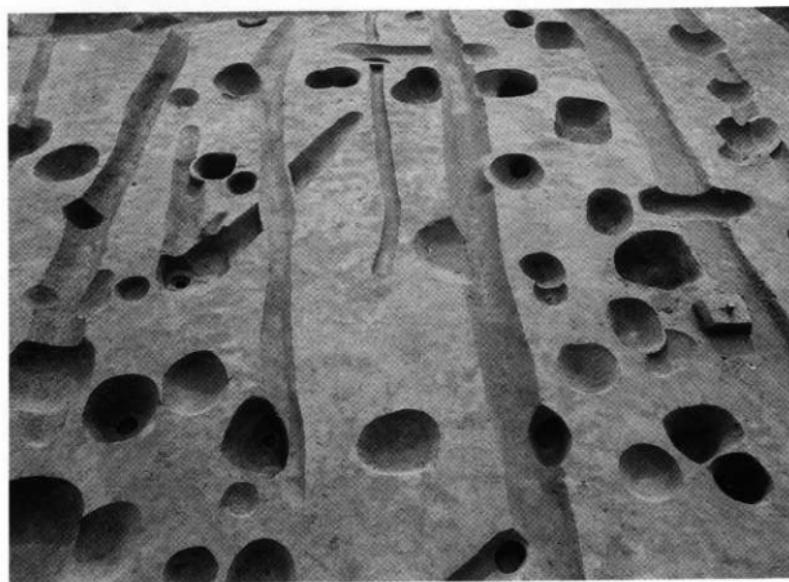
調査区北半第1面全景（西より）



調査区北端全景（西より）

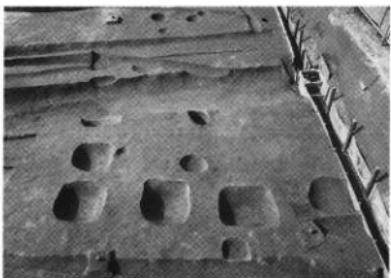


SH201完掘状況（南より）

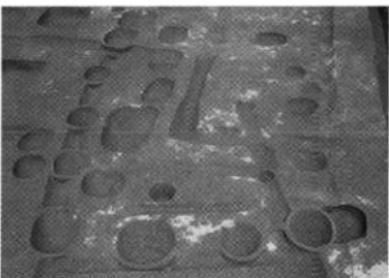


SH202完掘状況（西より）

図版4



SH204完掘状況（南より）



SH205完掘状況（西より）



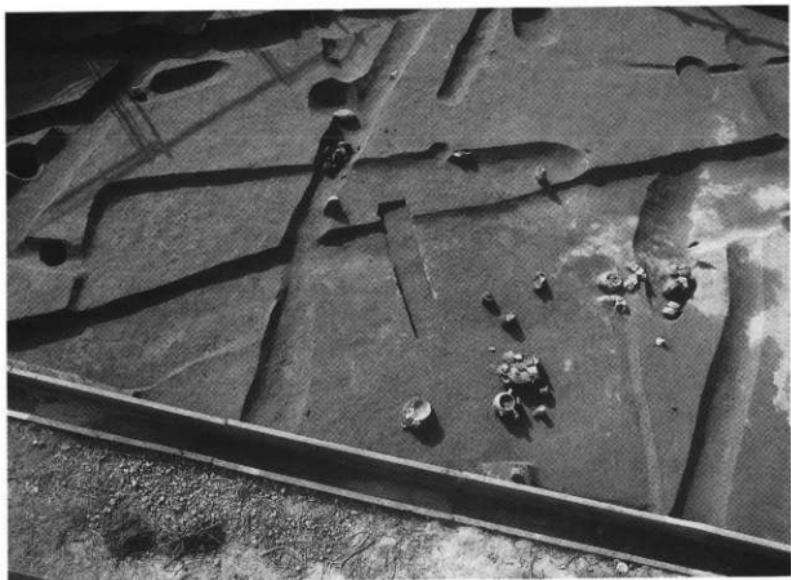
SH206完掘状況（西より）



SH204～207以北完掘状況（南より）



SH205～207完掘状況（西より）



SB201遺物出土状況（西より）



SB201遺物出土状況（西より、近接）

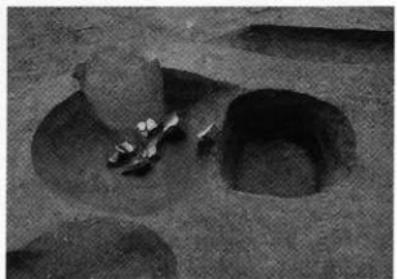
図版6



SF209遺物出土状況（北より）



SF209遺物出土状況（西より）



SF231遺物出土状況（南より）



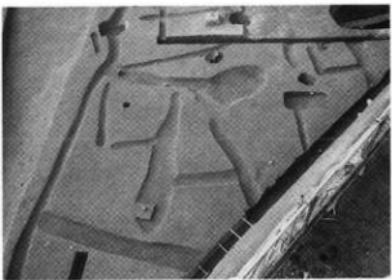
SD243遺物出土状況（東より）



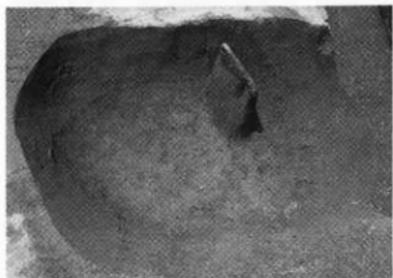
SD250遺物出土状況（北より）



SD299遺物出土状況（東より）



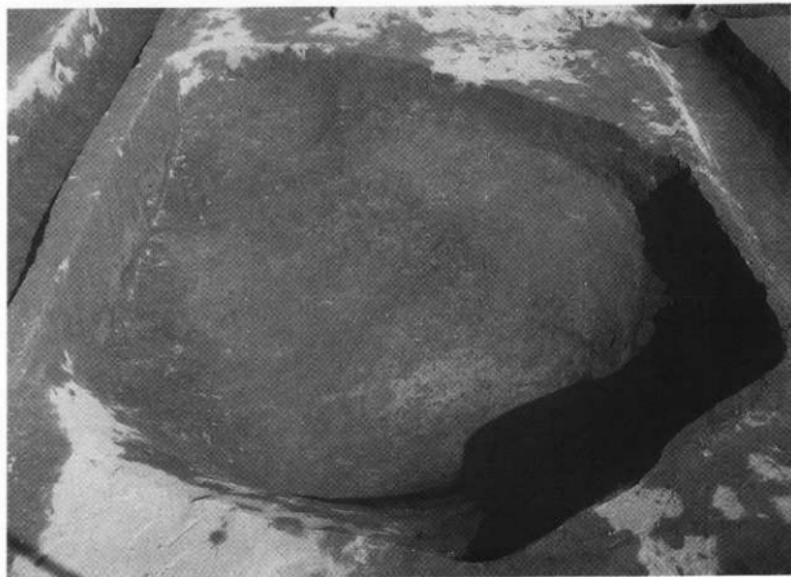
F-16区周辺溝状遺構完掘状況（東より）



SH203-P1鉄製品出土状況（北より）



SX211遺物出土状況（南より）

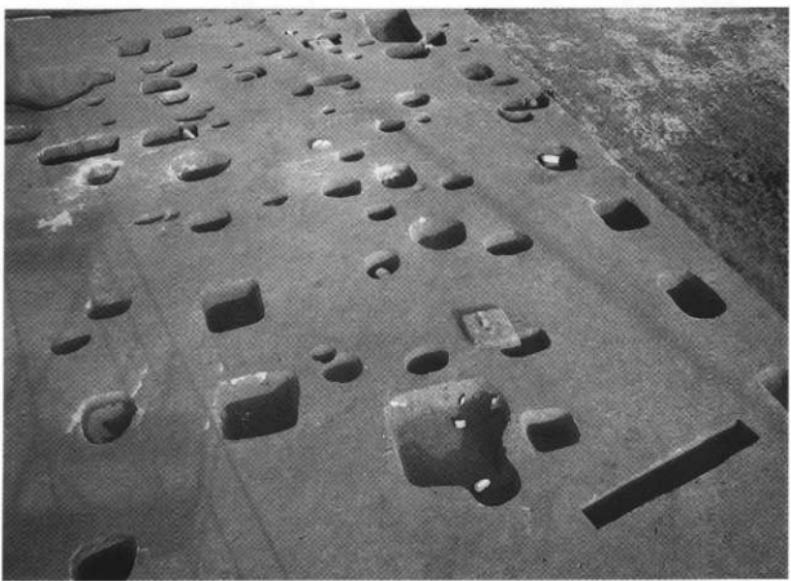


SX202完掘状況（西より）

図版8



SH1完掘状況（西より）



SH1～4・6完掘状況（西より）



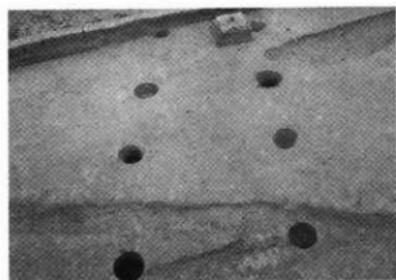
SH2完掘状況（南より）



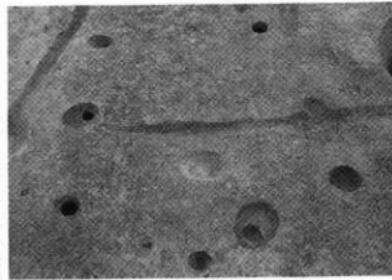
SH4-P3根石出土状況（南より）



SH4-P4根石出土状況（南より）

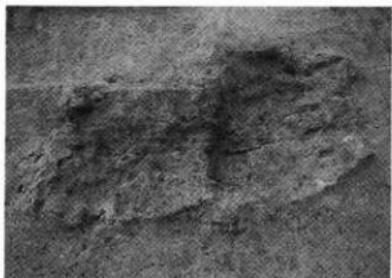


SH7完掘状況（北より）

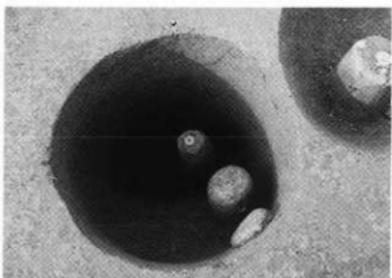


SH8完掘状況（東より）

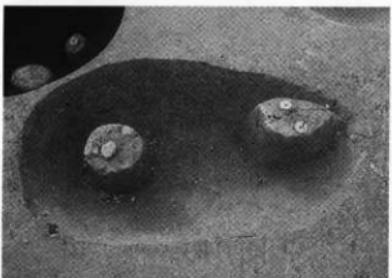
図版10



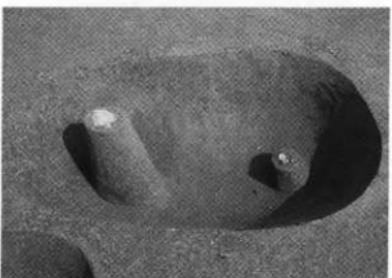
SF32焼土検出状況（東より）



SF41遺物出土状況（南より）



SF42遺物出土状況（東より）

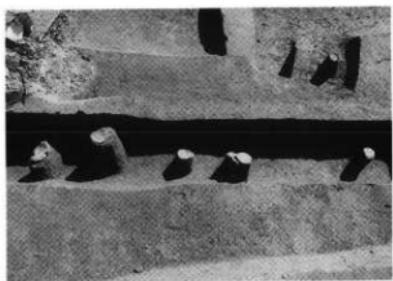


SF41遺物出土状況（西より）



SD1~3完掘状況（北西より）

図版11



SD5遺物出土状況（北より）



SD9遺物出土状況（南西より）



SD9完掘状況（南西より）



SE1遺物出土状況（南西より）

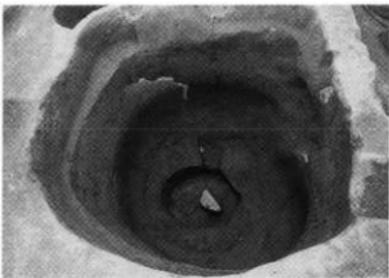


SE1完掘状況（南西より）

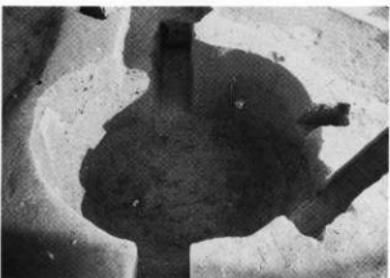
図版12



SE3石組み検出状況（南より）



SE2水溜検出状況（南より）



SX2完掘状況（南東より）



SX3完掘状況（東より）



SX1完掘状況（東より）

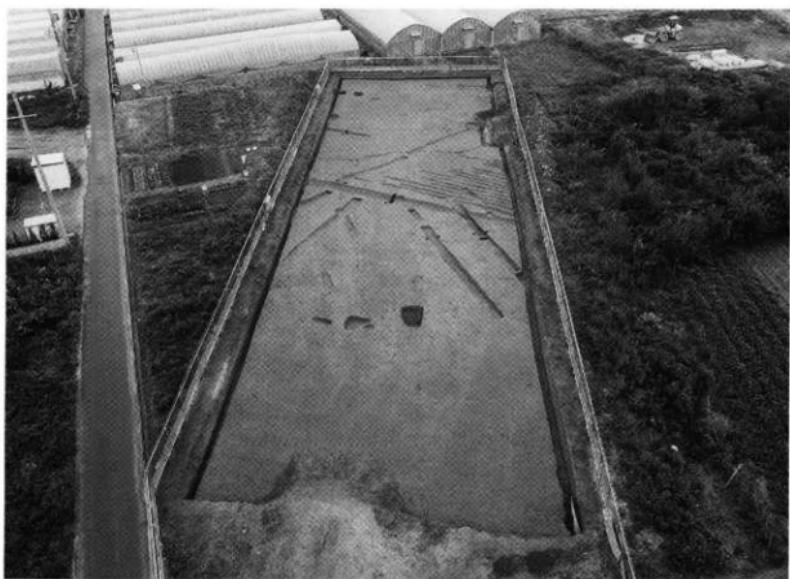


I区北半第2面全景（東より）

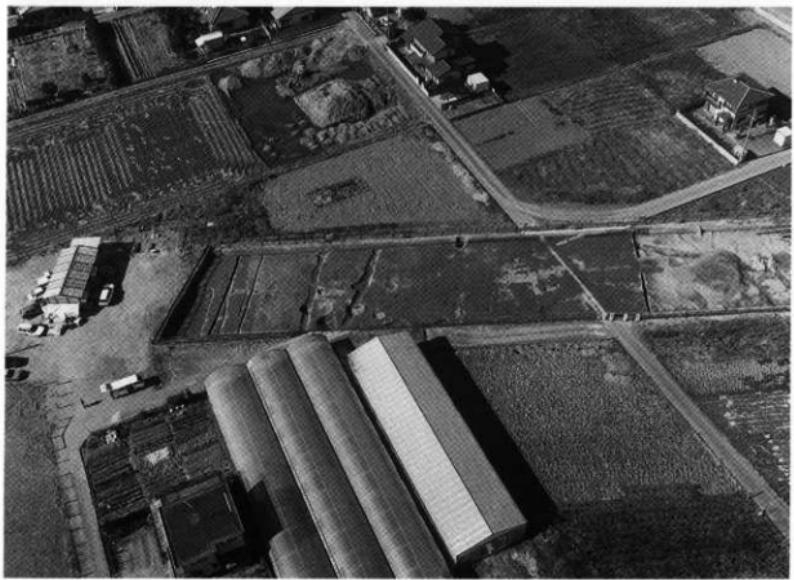


I区南半第2面全景（東より）

図版14



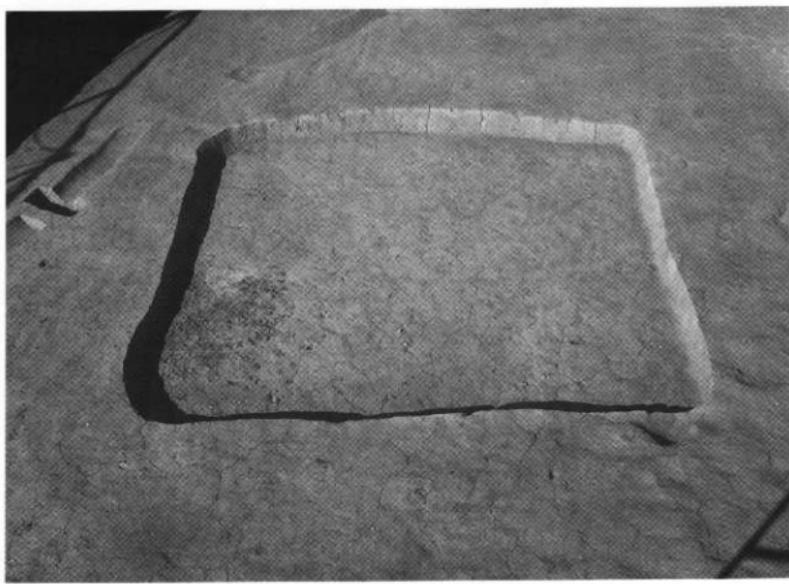
I区北半第1面全景（南より）



I区南半第1面全景（東より）



SB206遺物出土状況（東より）



SB206完掘状況（南より）

図版16



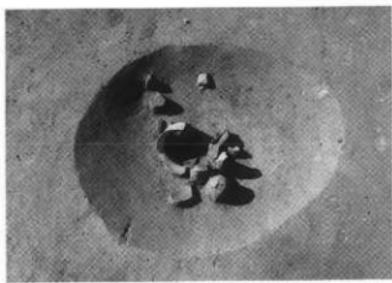
SB205完掘状況（西より）



SB207完掘状況（南より）



SB205遺物出土状況（西より）



SF216遺物出土状況（東より）



SD243遺物出土状況（北東より）



SE201井戸側検出状況（東より）

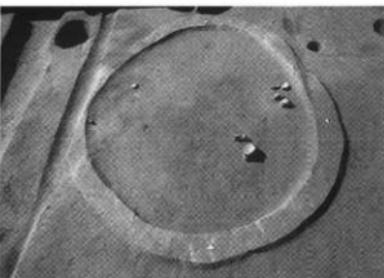


SX230遺物出土状況（西より）

図版18



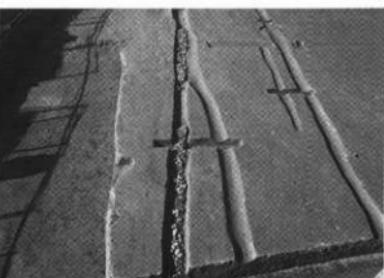
SX229遺物出土状況（西より）



SF11遺物出土状況（東より）



SF36遺物出土状況（南より）



SD20遺物出土状況（東より）



SD28完掘状況（南西より）



II区第2面全景（北より）



II区第1面全景（東より）

図版20



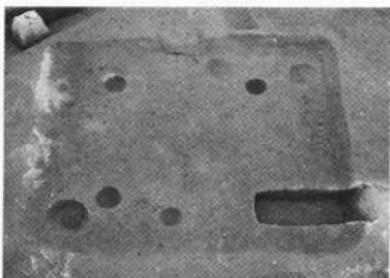
SH201完掘状況（南西より）



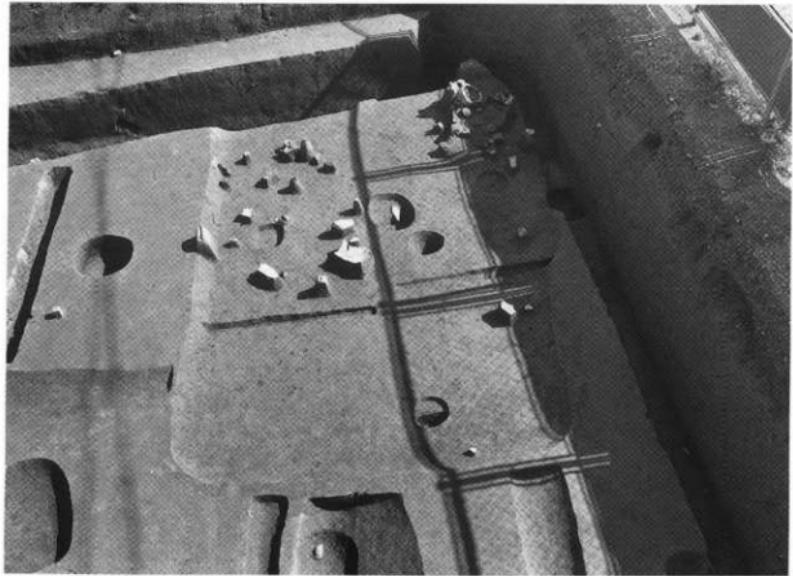
SB201竪検出状況（西より）



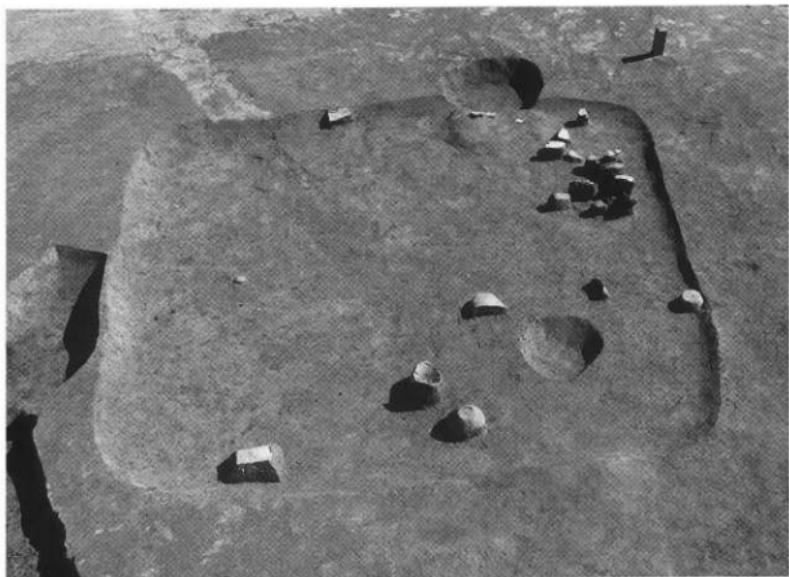
SB202完掘状況（西より）



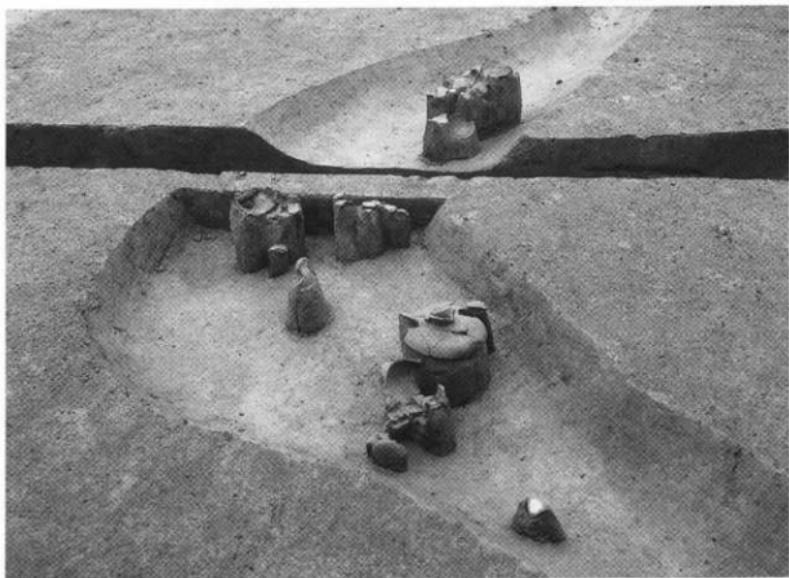
SB204完掘状況（南西より）



SB201遺物出土状況（西より）

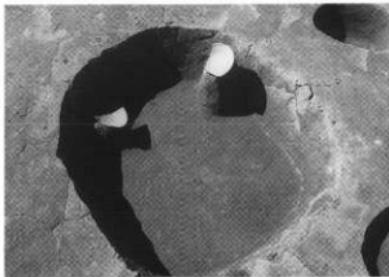


SB203遺物出土状況（西より）



SD227遺物出土状況（南より）

図版22



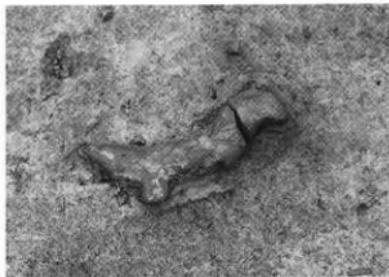
SF211遺物出土状況（南東より）



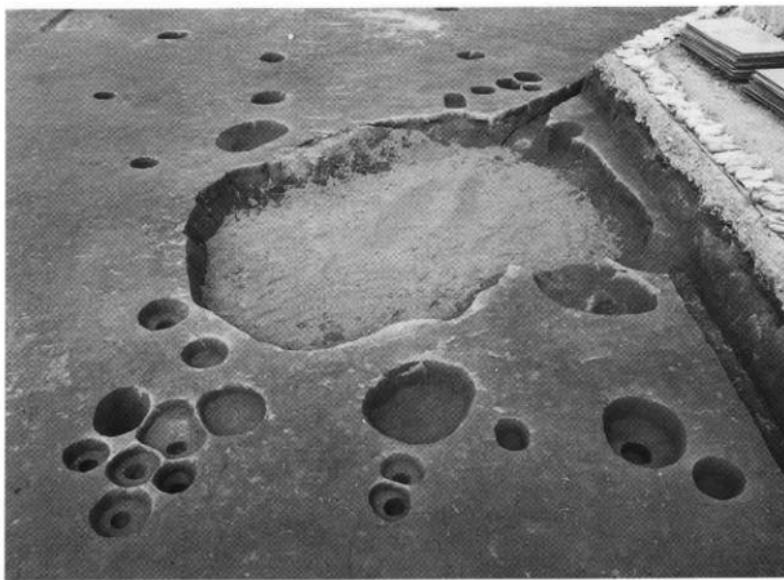
SD223遺物出土状況（東より）



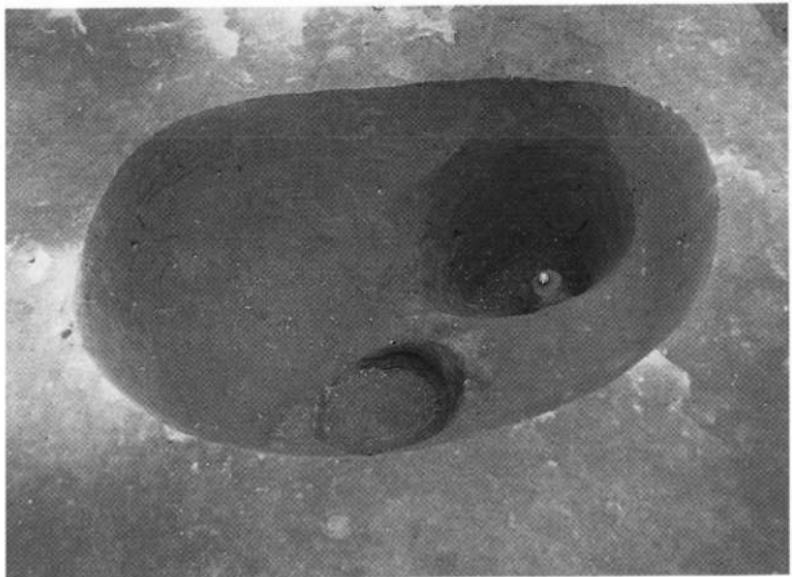
SD224遺物出土状況（南東より）



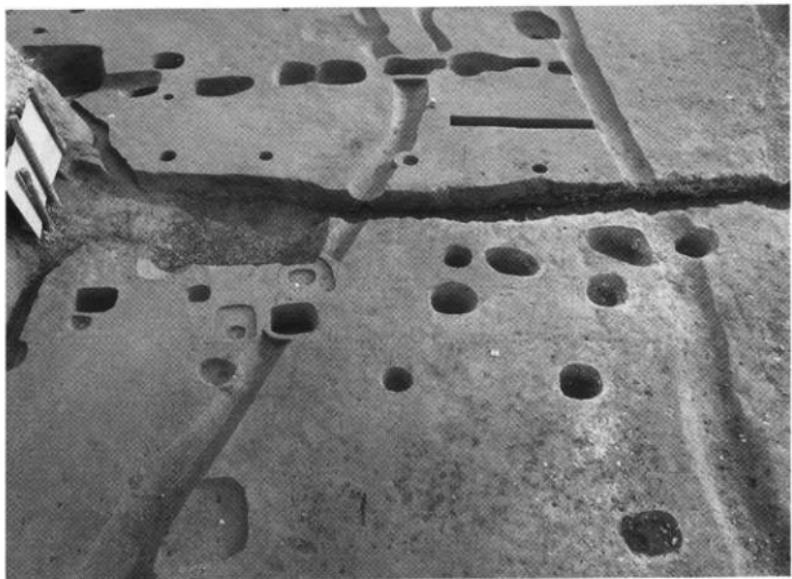
土馬出土状況（南より）



SH1・2完掘状況（東より）

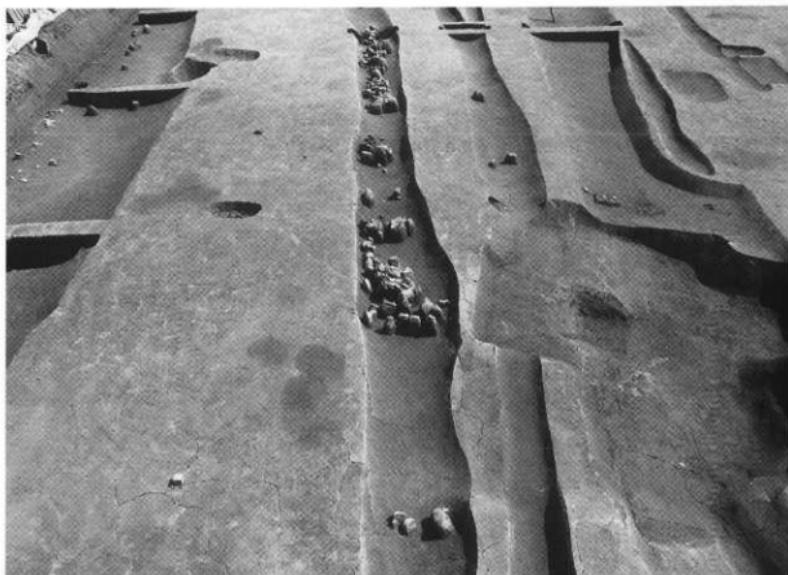


SH1-P3棹秤の錘出土状況（南より）



SH5・6完掘状況（北より）

図版24



SD2遺物出土状況（北より）



SH4完掘状況（東より）



SD2~6完掘状況（西より）



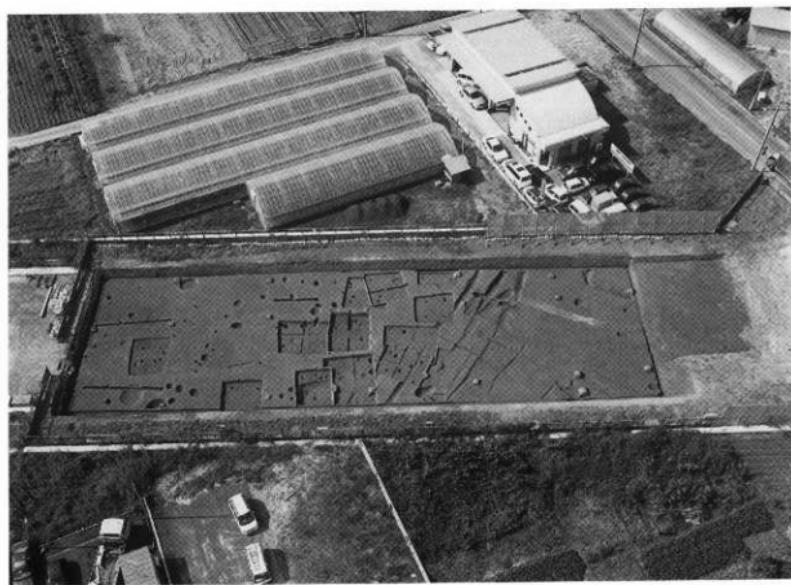
SD15遺物出土状況（南より）



SF9遺物出土状況（北より）

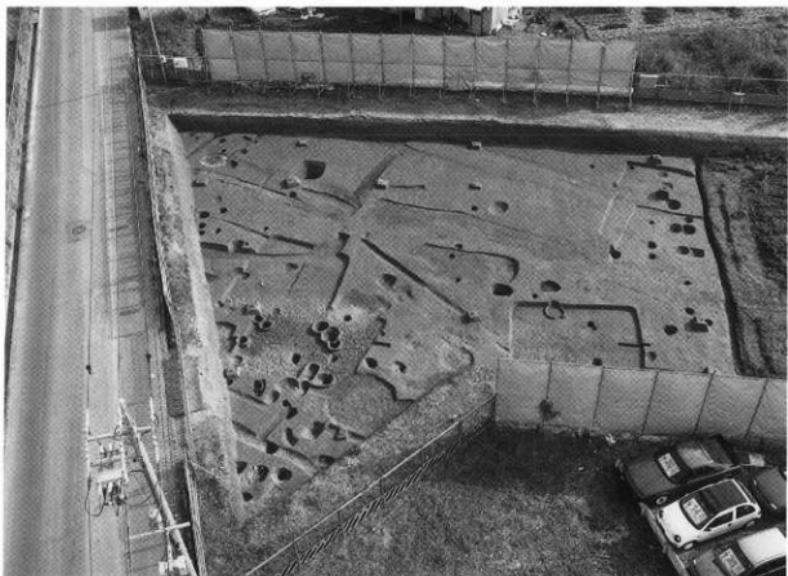


III区（北）第2面全景（南より）



III区（南）南半第2面全景（東より）

図版26



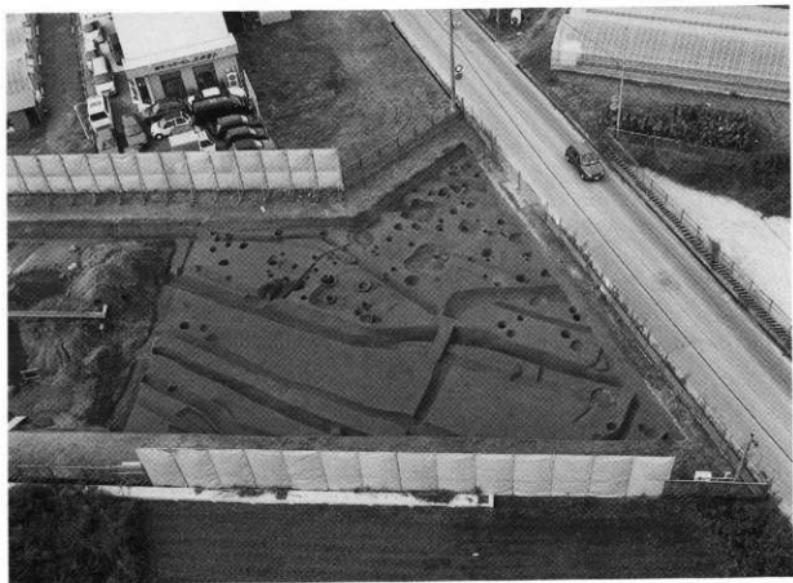
III区（南）北半第2面全景（西より）



III区（北）第1面全景（南より）

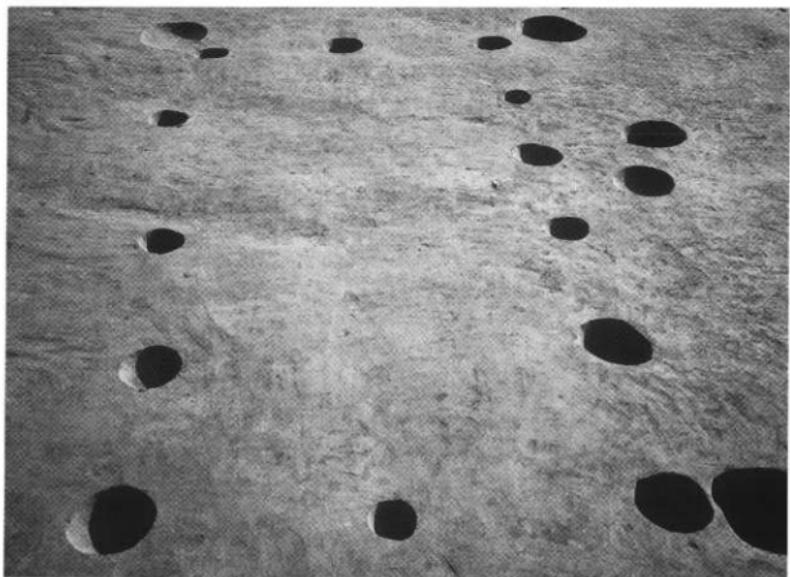


III区（南）南半第1面全景（東より）



III区（南）北半第1面全景（東より）

図版28



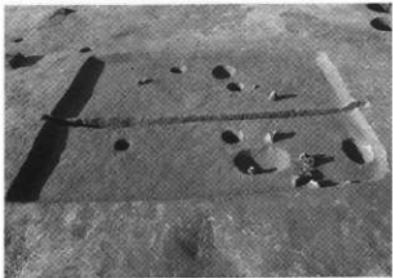
SH205完掘状況（北より）



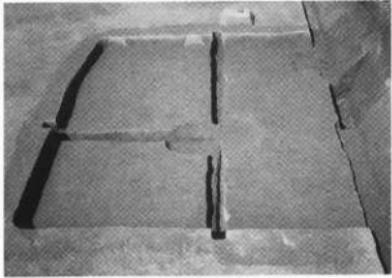
SH206完掘状況（西より）



SB209～220完掘状況（東より）



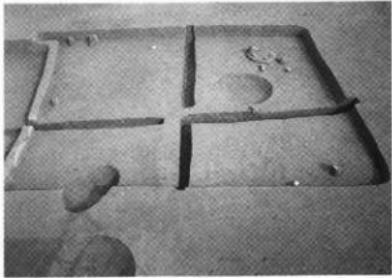
SB208遺物出土状況（南より）



SB209完掘状況（南より）



SB209遺物出土状況（南より、近接）



SB210完掘状況（西より）

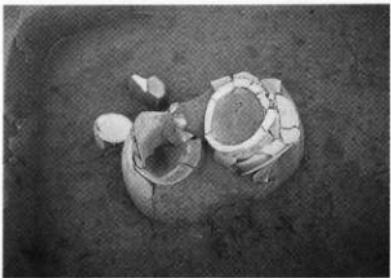
図版30



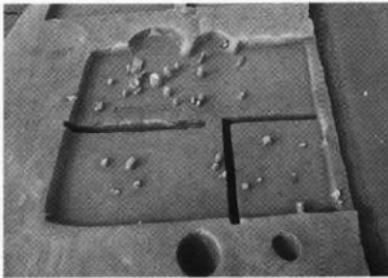
SB211遺物出土状況（南より）



SB212遺物出土状況（南より）



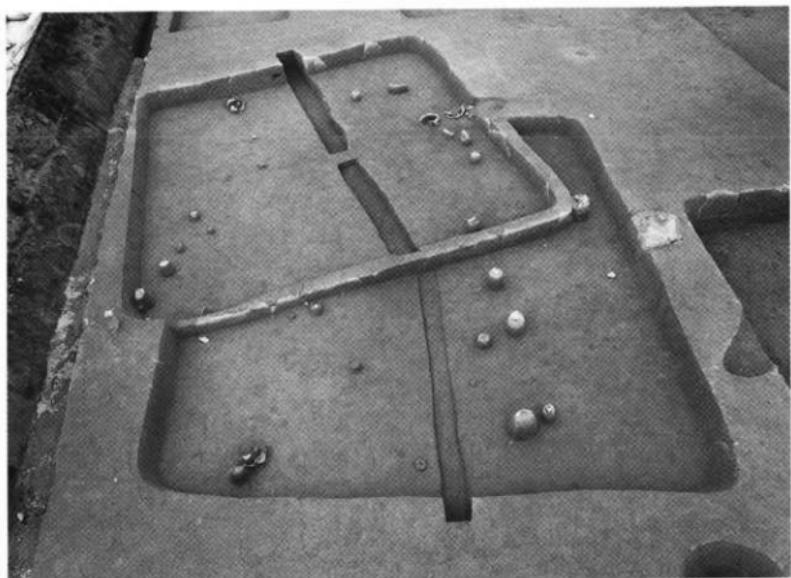
SB212遺物出土状況（南より、近接）



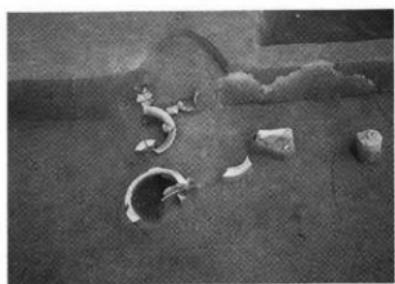
SB213遺物出土状況（南より）



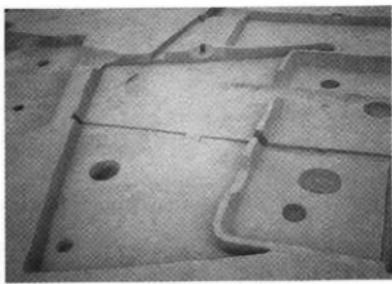
SB212～214完掘状況（南より）



SB215・216遺物出土状況（南より）



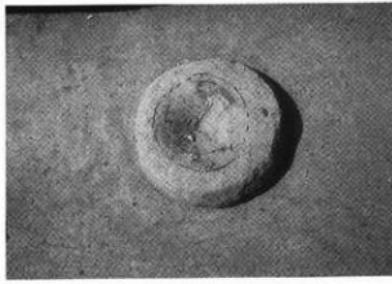
SB216竈周辺遺物出土状況（西より）



SB217完掘状況（南より）

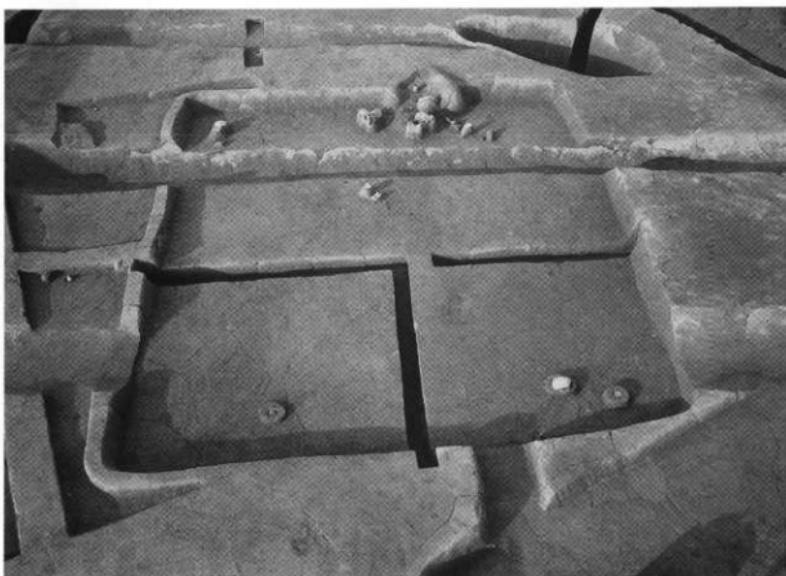


SB220完掘状況（南より）



SB220-P2検出状況（東より）

図版32



SB219遺物出土状況（南より）



SB219竈周辺遺物出土状況（南より）



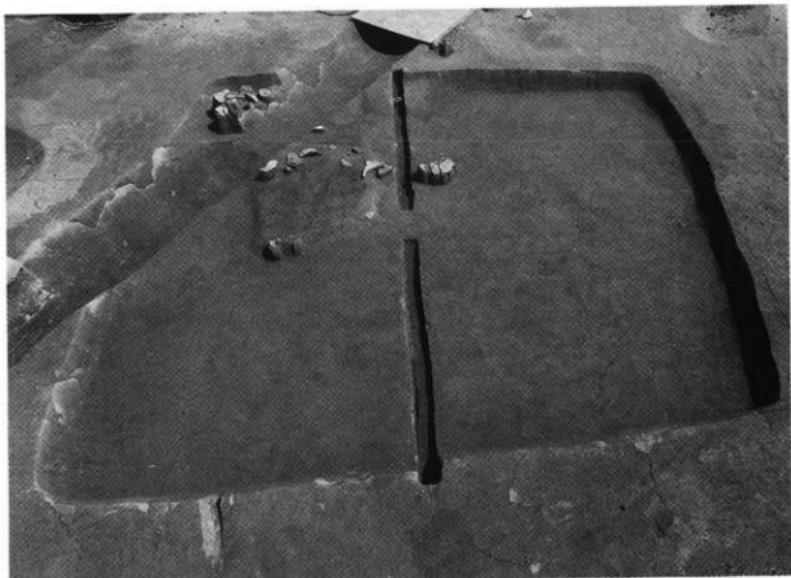
SB219竈内遺物出土状況（西より）



SB222・223完掘状況（南より）



SB224完掘状況（南より）



SB221遺物出土状況（西より）



SB221竈周辺遺物出土状況（西より）



SB225・226完掘状況（南より）



SB227遺物出土状況（南より）



SB227遺物出土状況（南より）、近接

図版34



SB227完掘状況（南より）



SB228完掘状況（南より）



SF234遺物出土状況（南西より）



SF239遺物出土状況（東より）



SF262遺物出土状況（北西より）



SD260遺物出土状況（南西より）



SP302遺物出土状況（北より）



SX218遺物出土状況（北東より）

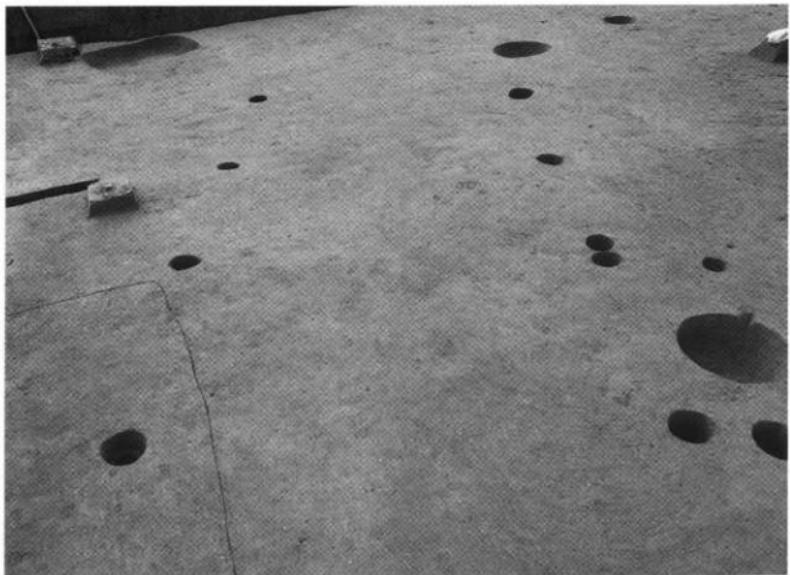


SX222遺物出土状況（北東より）



SX227遺物出土状況（北東より）

図版36



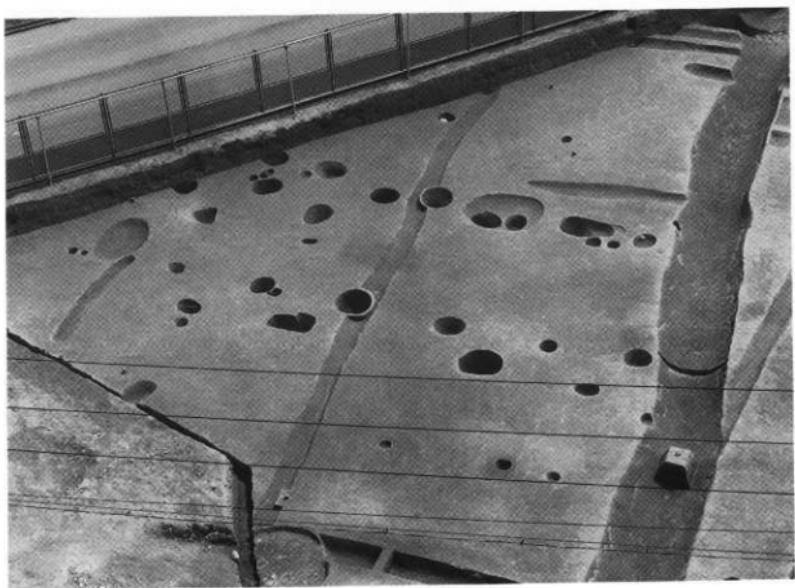
SH7完掘状況（南東より）



SH9完掘状況（南東より）



SH10完掘状況（北西より）

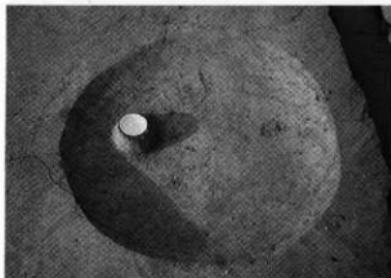


SH11完掘状況（北東より）

図版38



SF42遺物出土状況（西より）



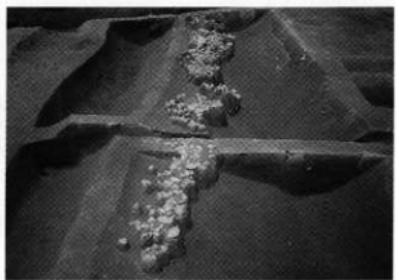
SP72遺物出土状況（東より）



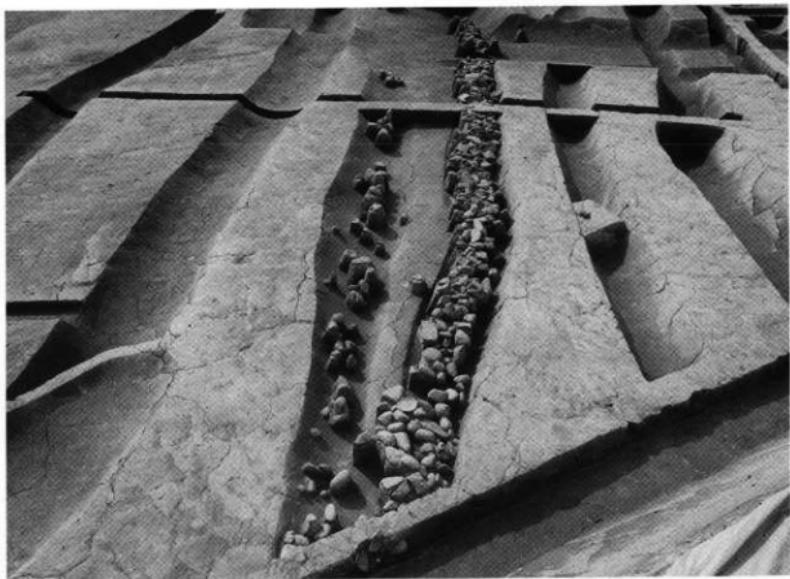
SD43遺物出土状況（東より）



SD38・52遺物出土状況（西より）



SD38・52遺物出土状況（東より）



SD38遺物出土状況（東より）

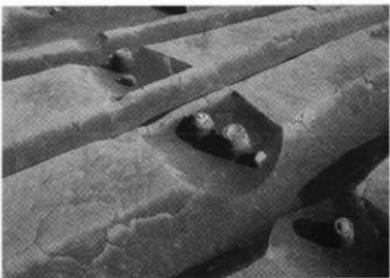


SD38完掘状況（西より）

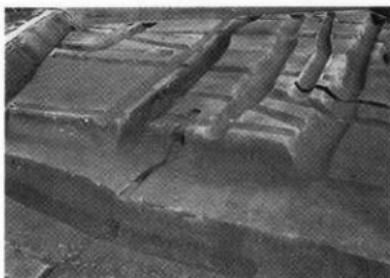
図版40



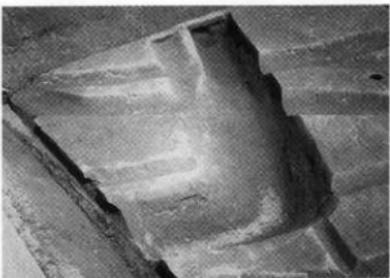
SD38遺物出土状況（西より）



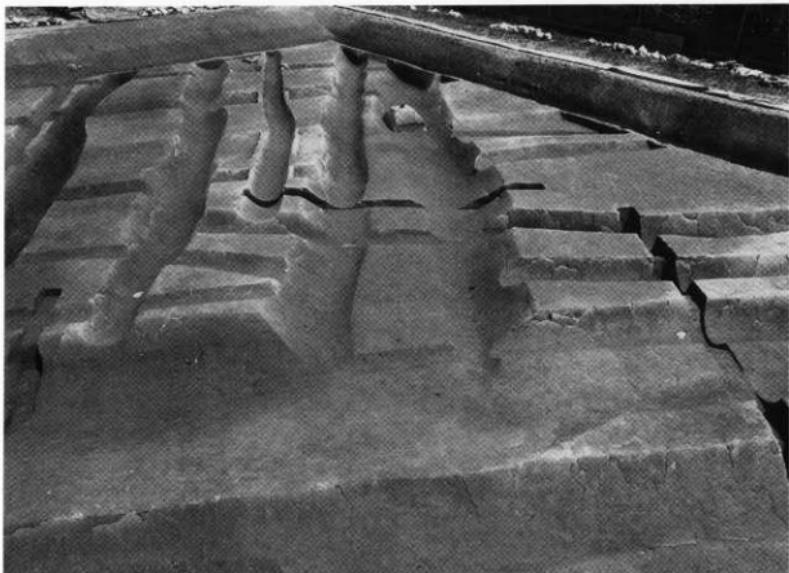
SD44遺物出土状況（北西より）



SD48～52完掘状況（南より）



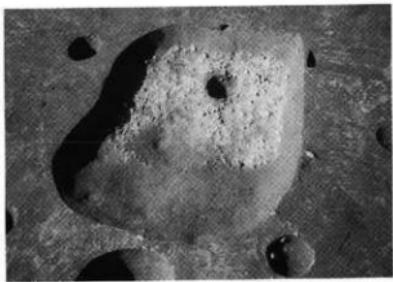
SD54南端完掘状況（南より）



SD52完掘状況（南より）



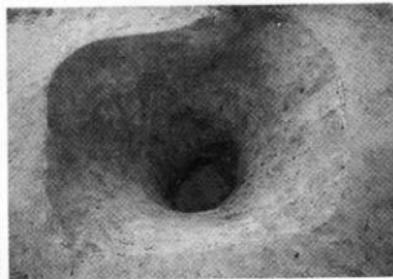
SD80遺物出土状況（南西より）



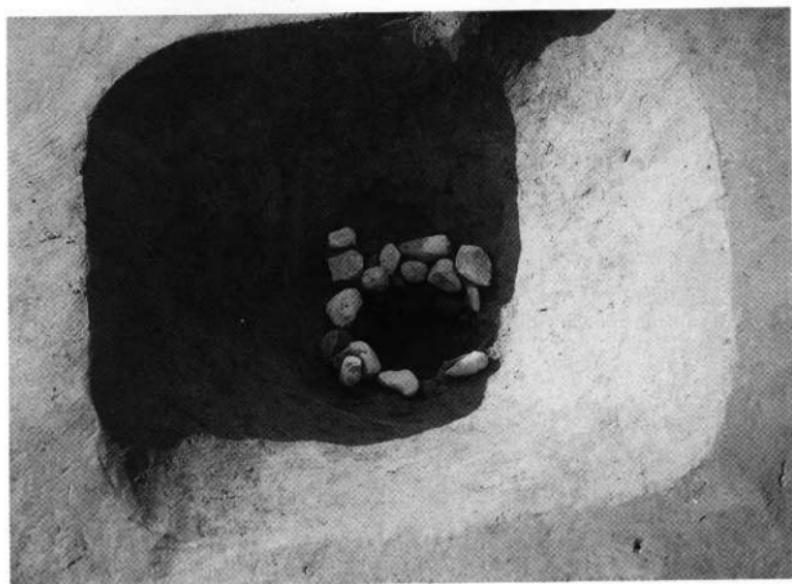
SX4完掘状況（東より）



SE2遺物・石検出状況（東より）

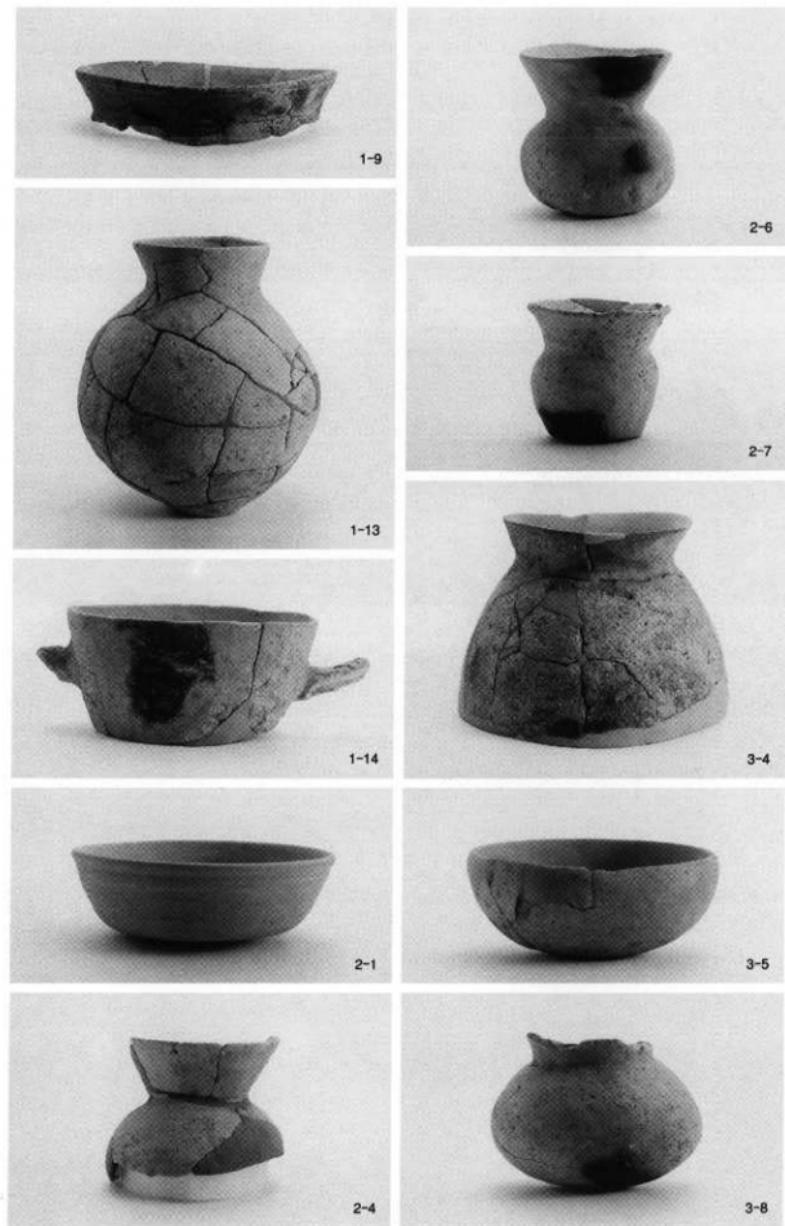


SE2完掘状況（東より）



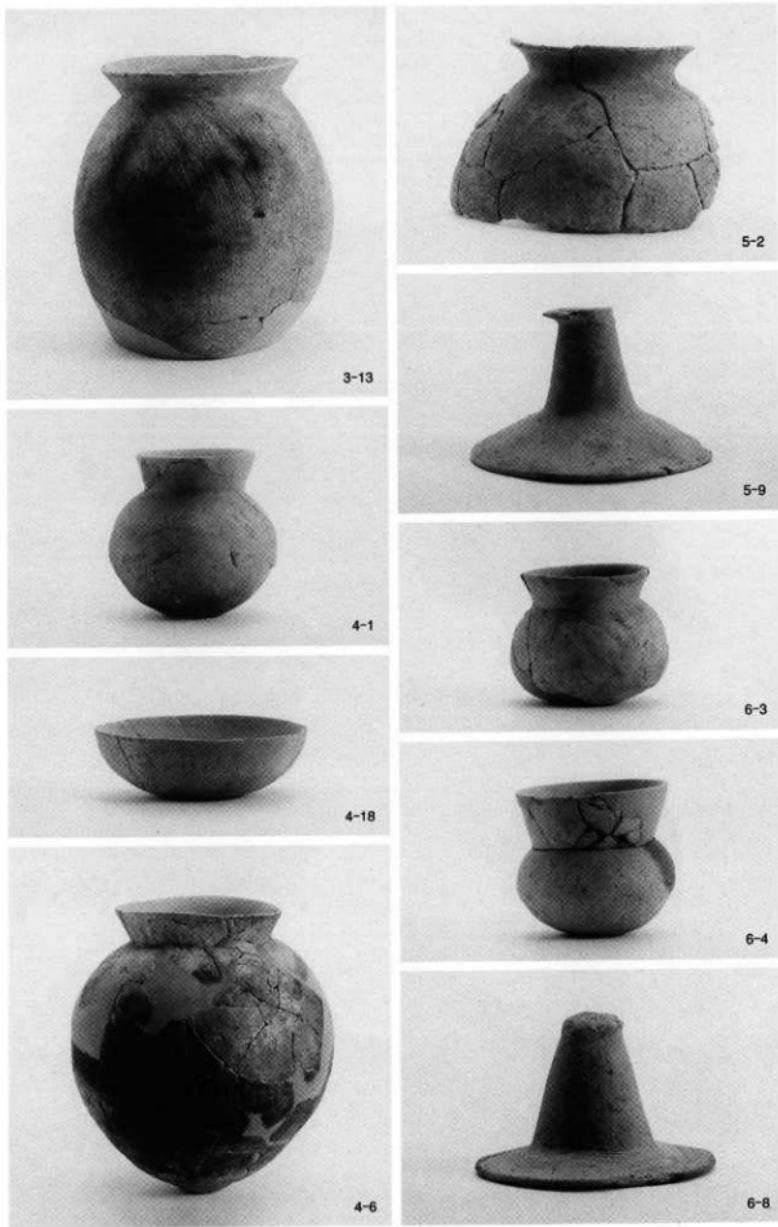
SE2石組検出状況（東より）

図版42



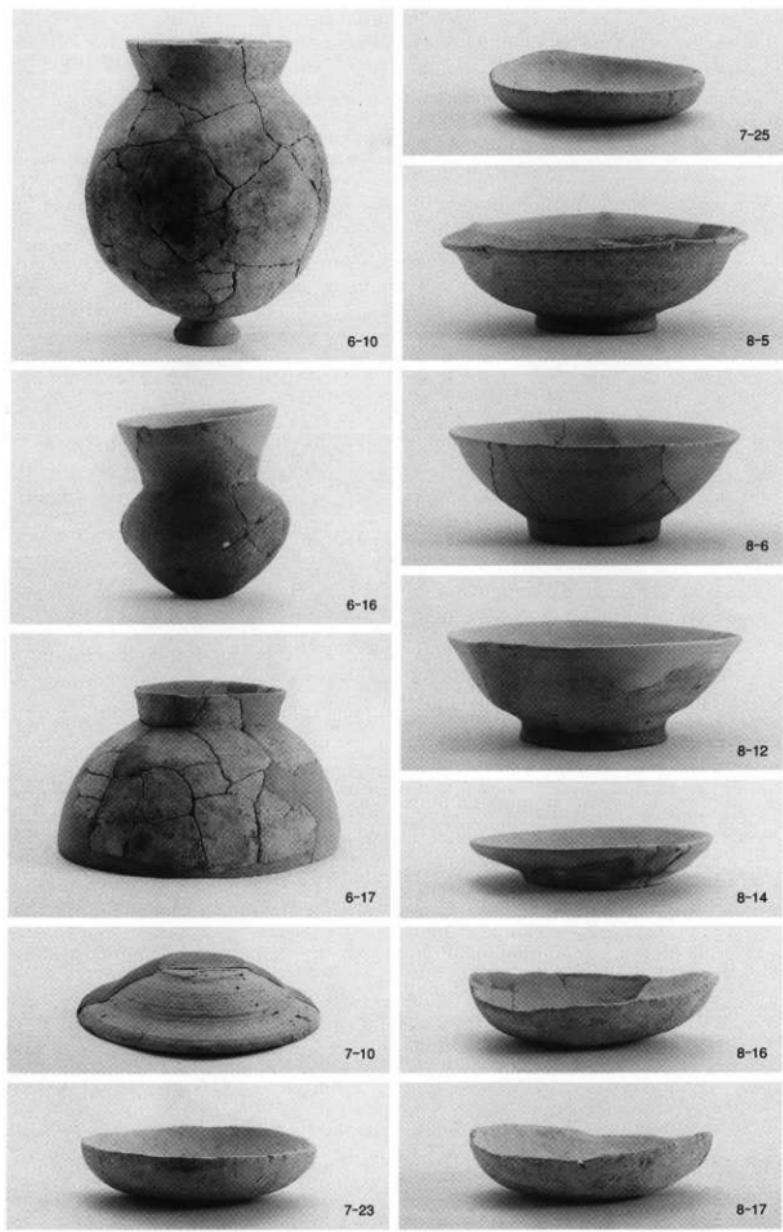
恒武西宮遺跡出土土器

図版43

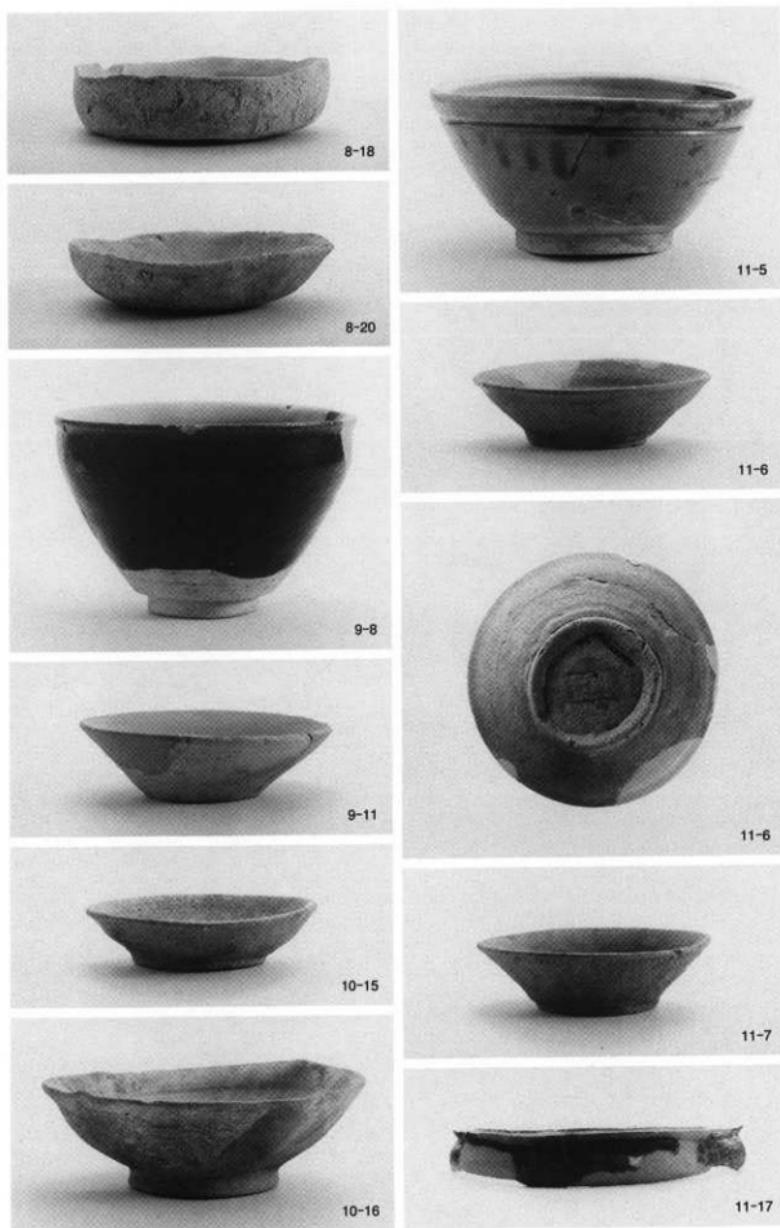


恒武西宮遺跡出土土器

図版44



恒武西宮遺跡出土土器



恒武西宮遺跡出土土器

図版46



恒武西宮遺跡出土土器



恒武西宮遺跡出土土器

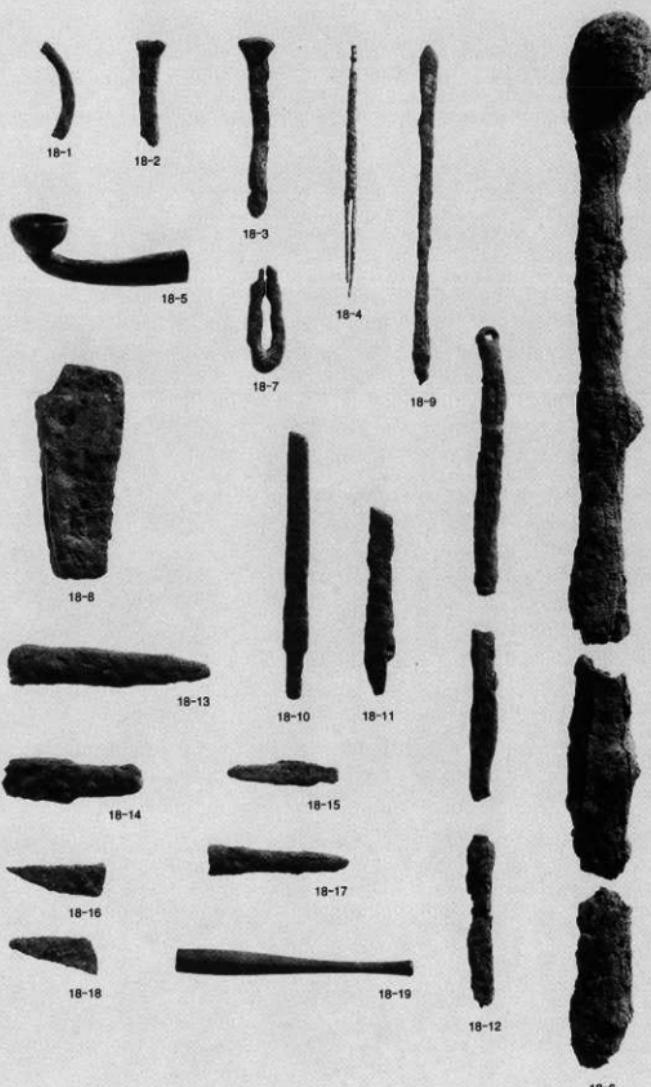
図版48



恒武西宮遺跡SB1出土土器

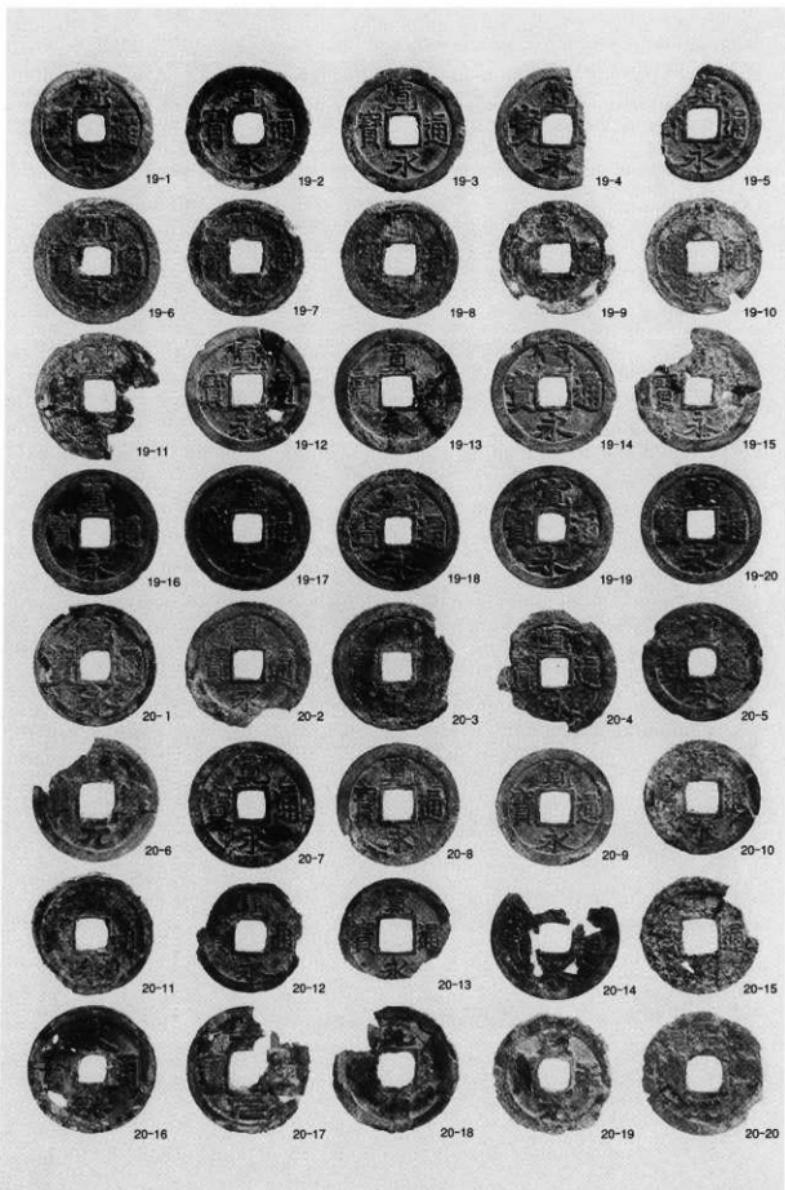


恒武西宮遺跡出土内耳鍋

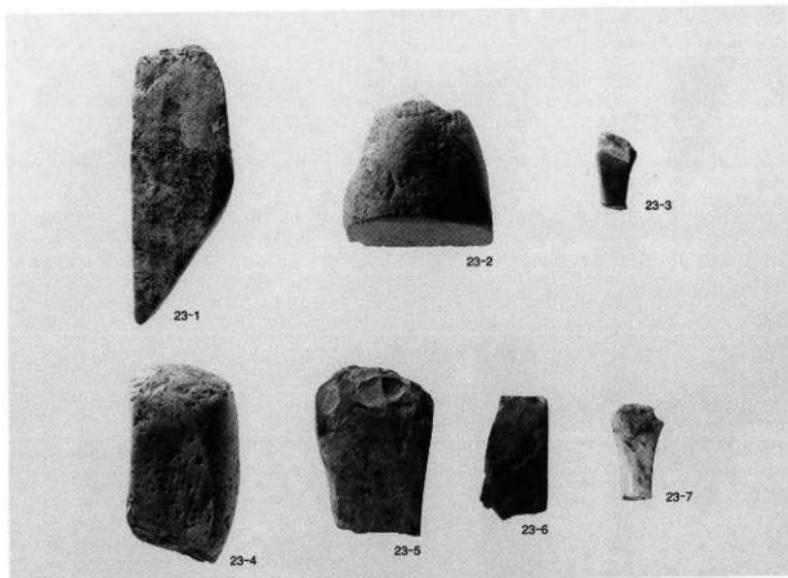


恒武西宮遺跡出土金属製品

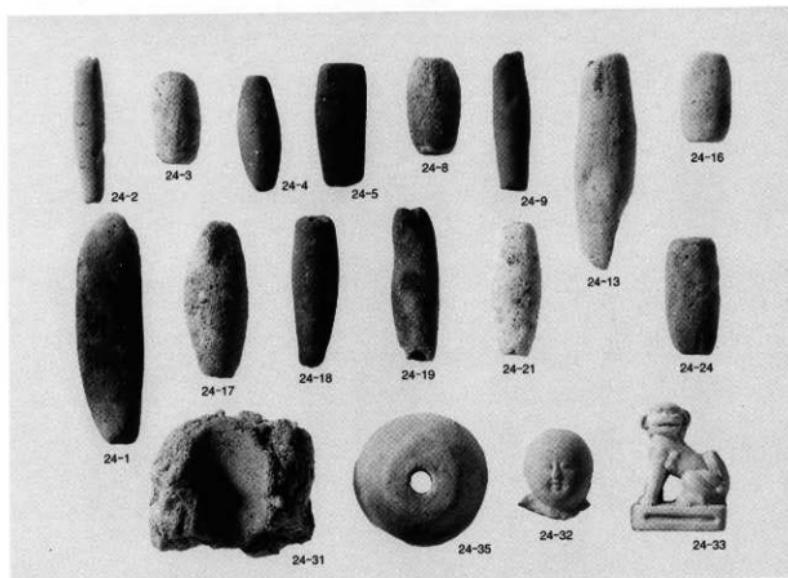
図版50



恒武西宮遺跡出土銭貨

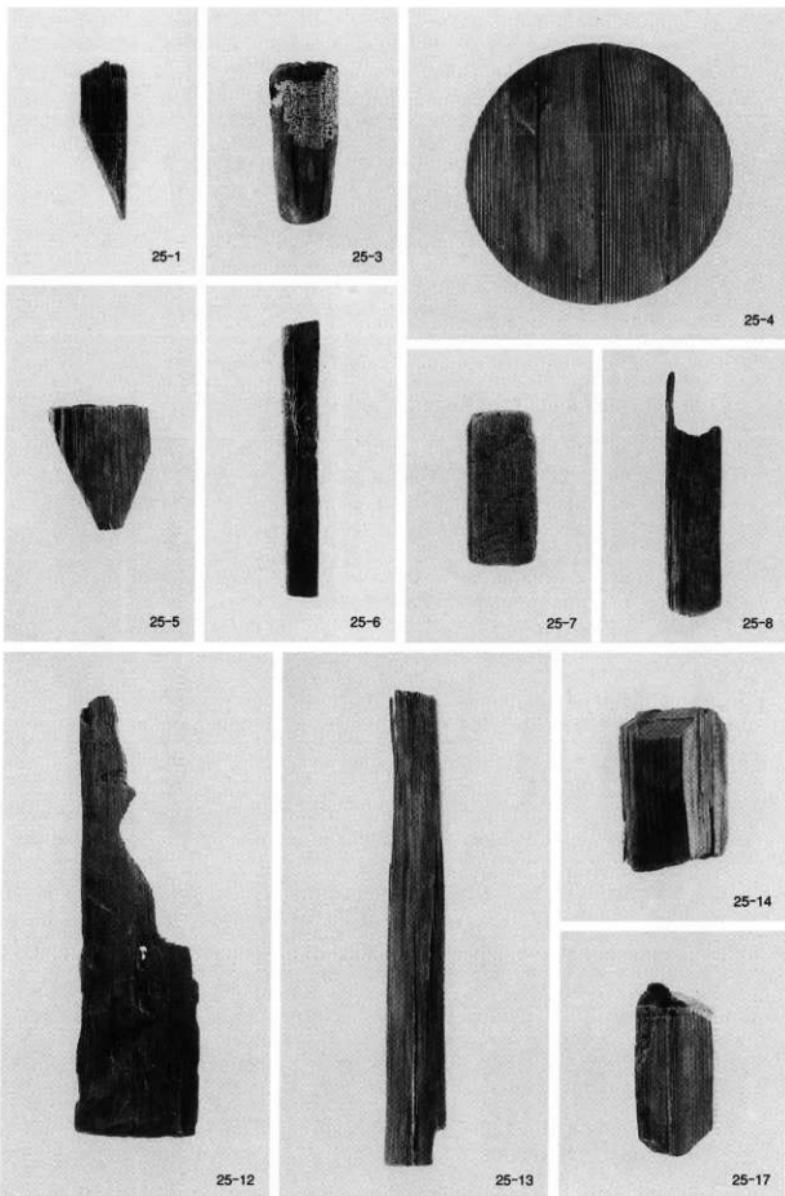


恒武西宮遺跡出土砥石

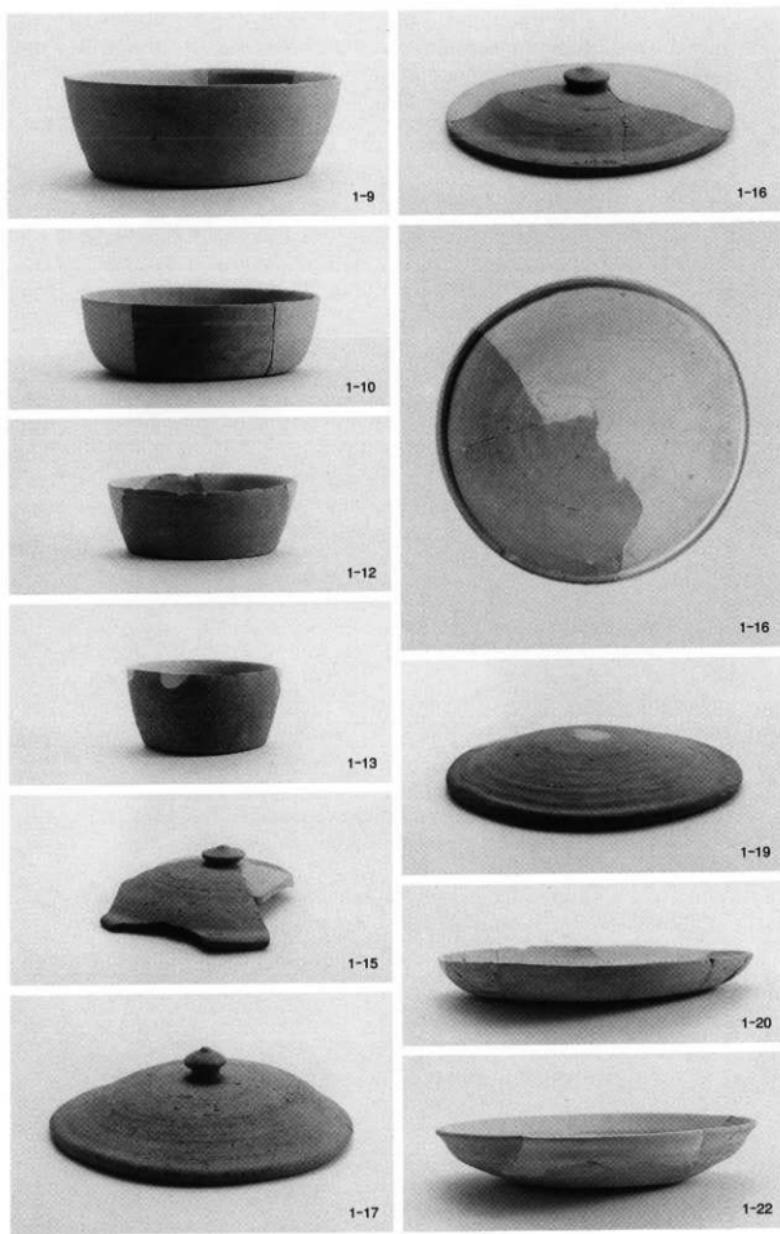


恒武西宮遺跡出土土製品

図版52

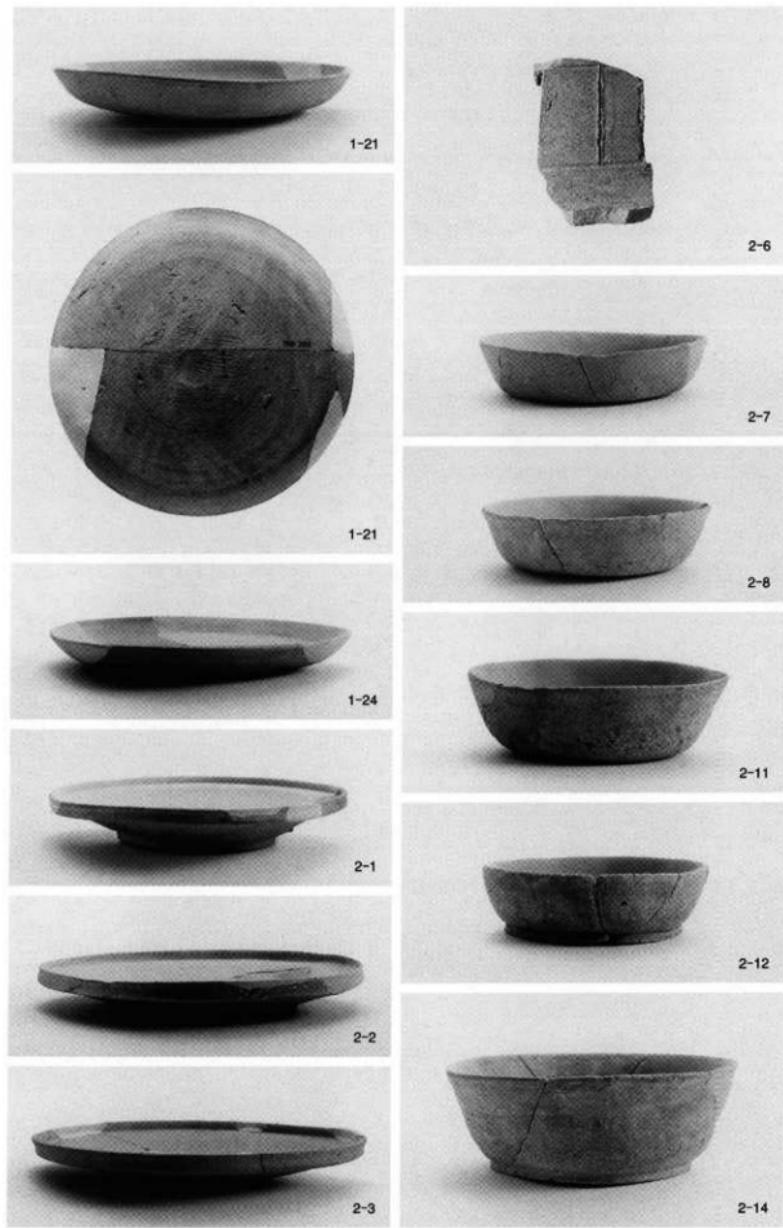


恒武西宮遺跡出土木製品

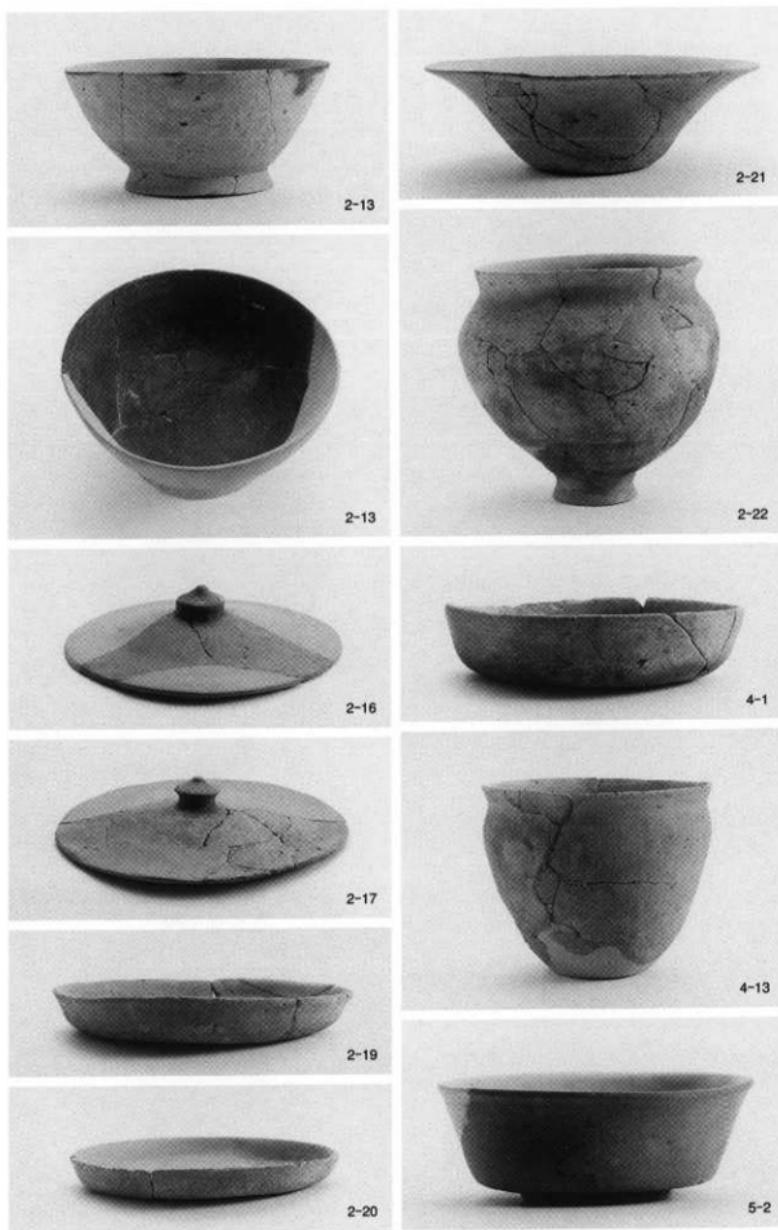


笠井若林遺跡 I 区出土土器

図版54

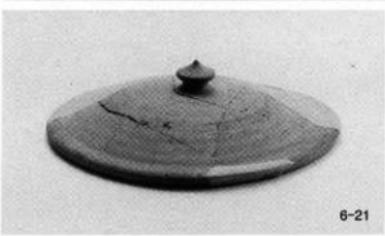
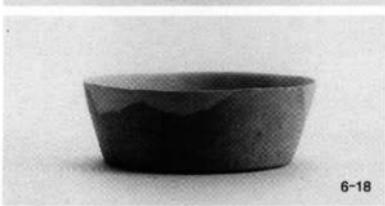
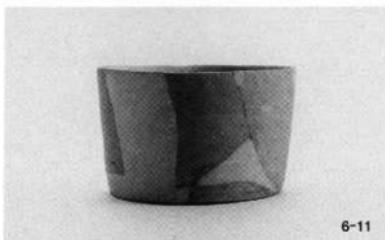
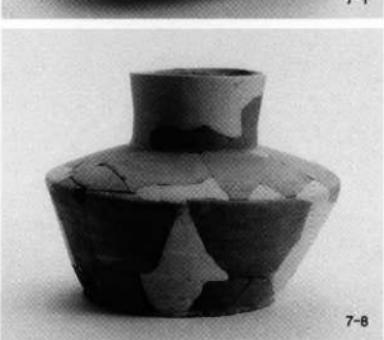
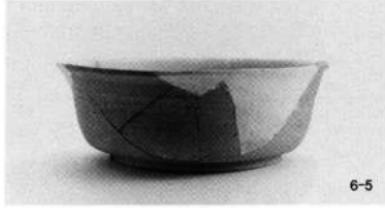
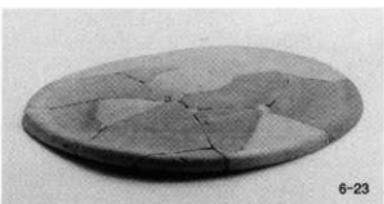


笠井若林遺跡 I 区出土土器

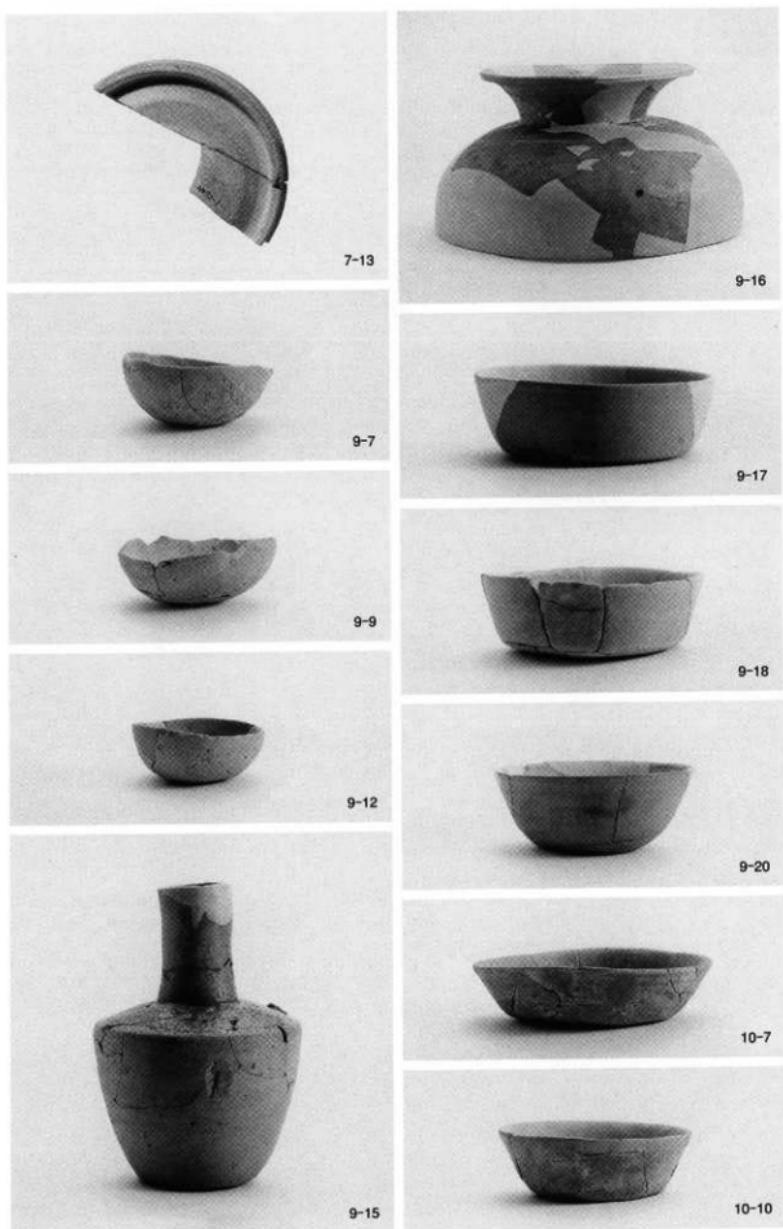


笠井若林遺跡 I 区出土土器

図版56

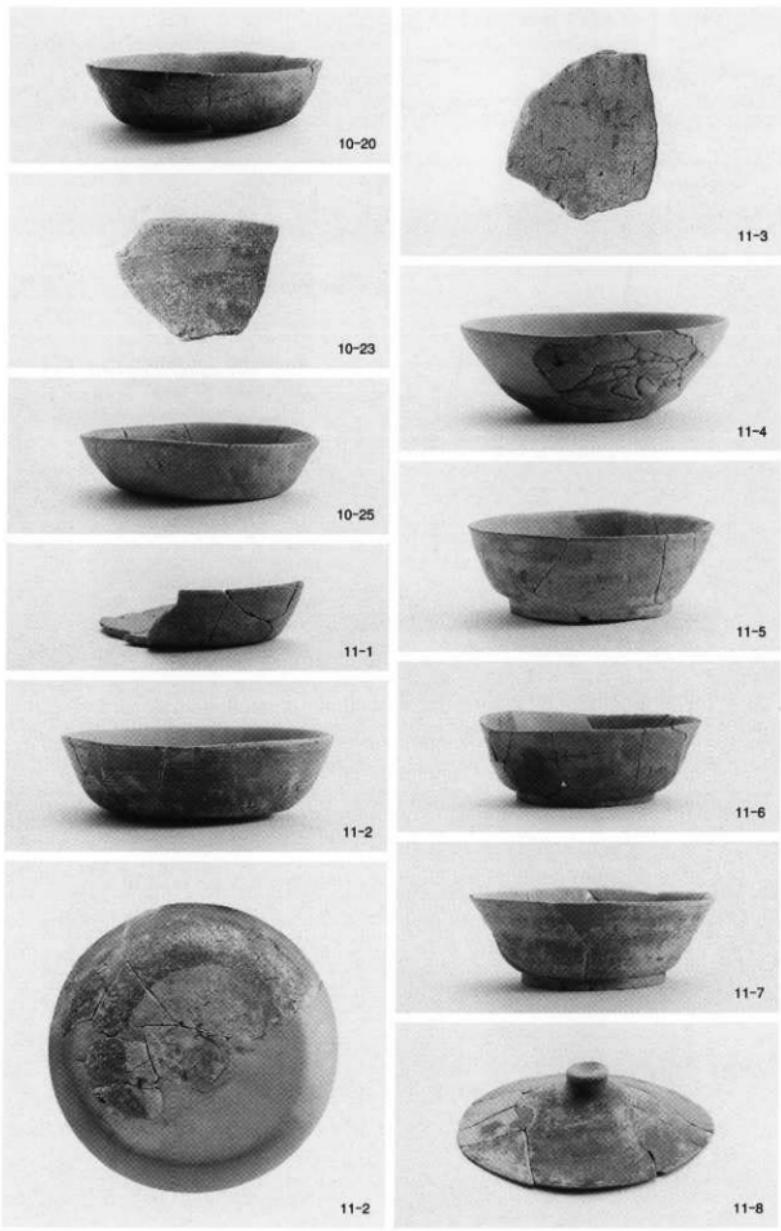


笠井若林遺跡 I 区出土土器

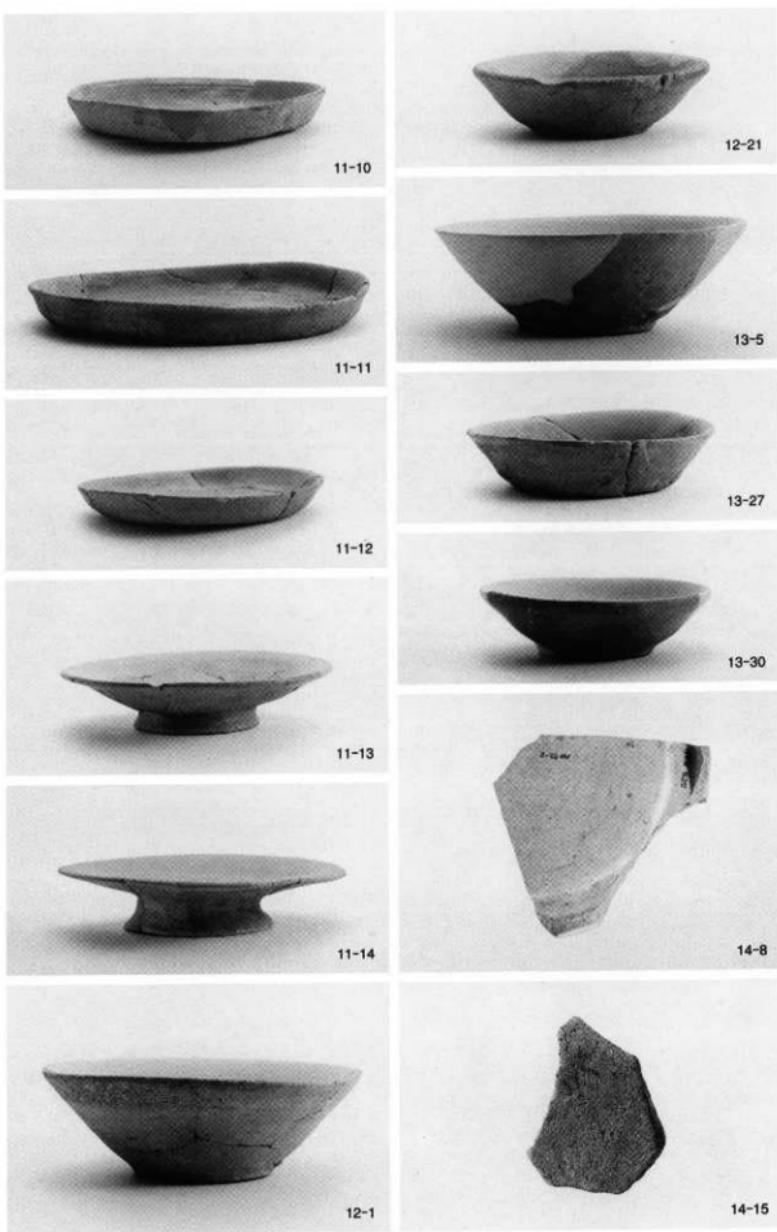


笠井若林遺跡 I 区出土土器

図版58

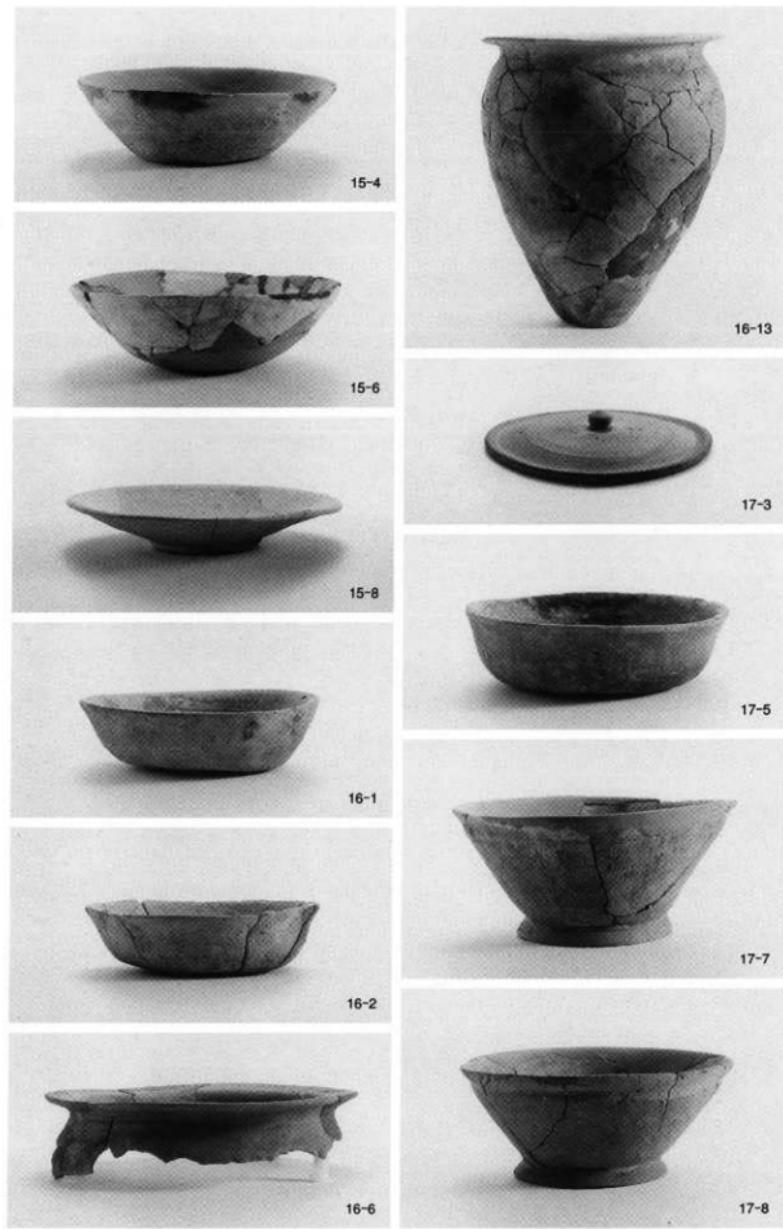


笠井若林遺跡 I 区出土土器

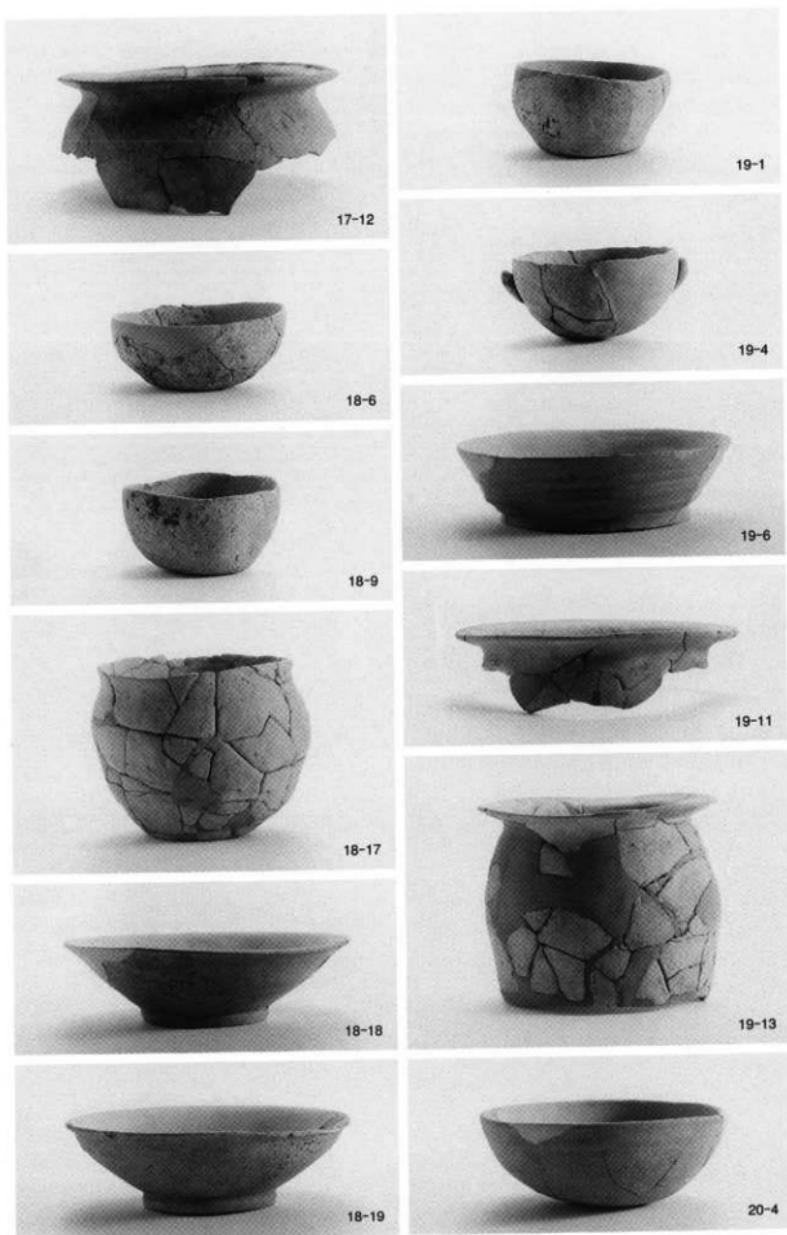


笠井若林遺跡 I 区出土土器

図版60



笠井若林遺跡 II 区出土土器



笠井若林遺跡Ⅱ区出土土器

図版62



20-5



20-6



20-11



20-7



20-13



20-9



20-16



20-10



21-10

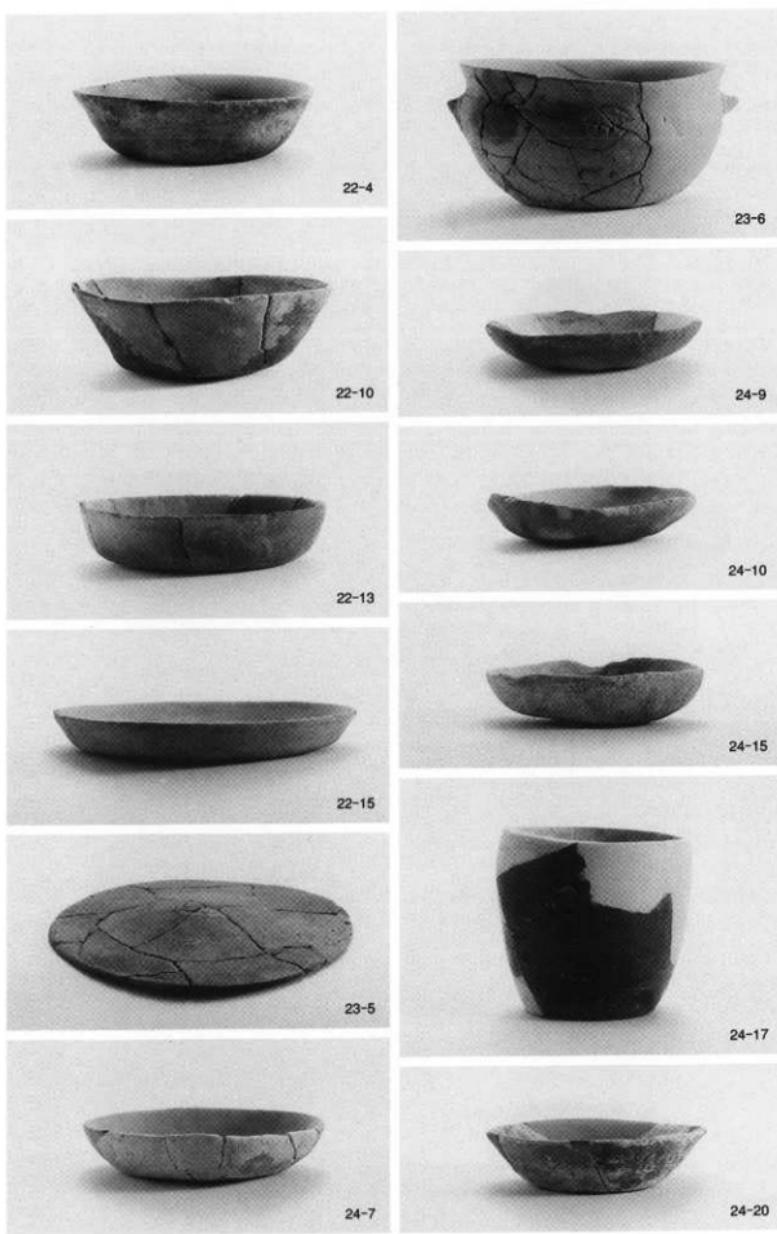


20-12



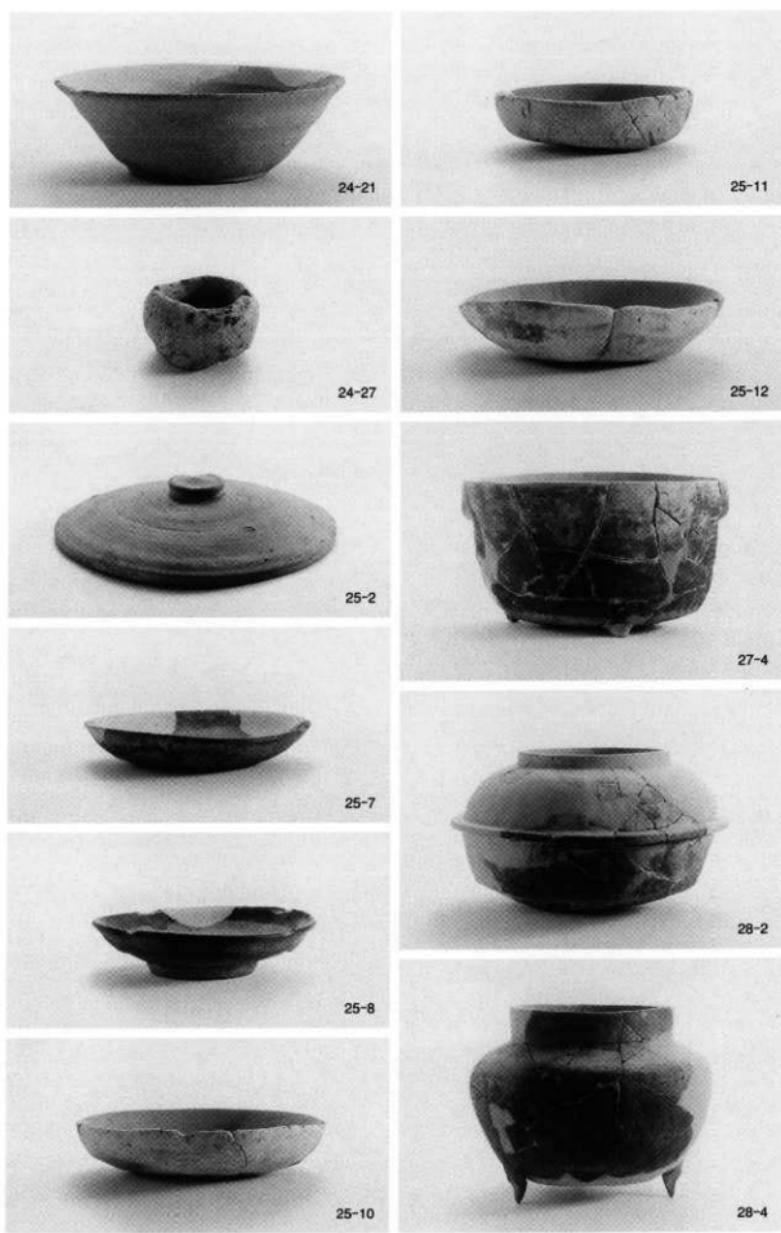
21-13

笠井若林遺跡Ⅱ区出土土器

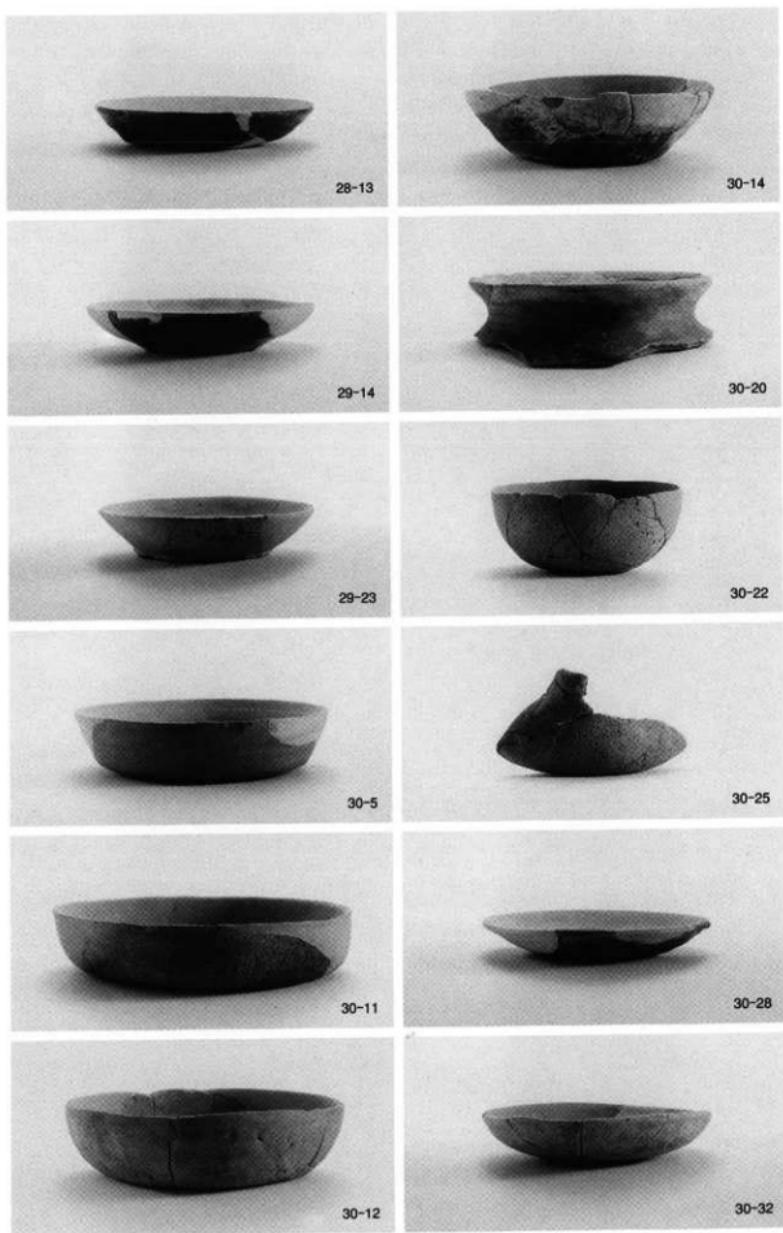


笠井若林遺跡 II 区出土土器

図版64

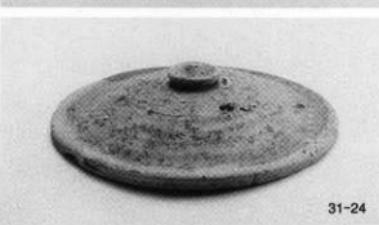


笠井若林遺跡Ⅱ区出土土器



笠井若林遺跡 II 区出土土器

図版66



笠井若林遺跡Ⅲ区出土土器

図版67



32-4



33-6



32-5



33-6



32-6



33-13



33-14



33-17

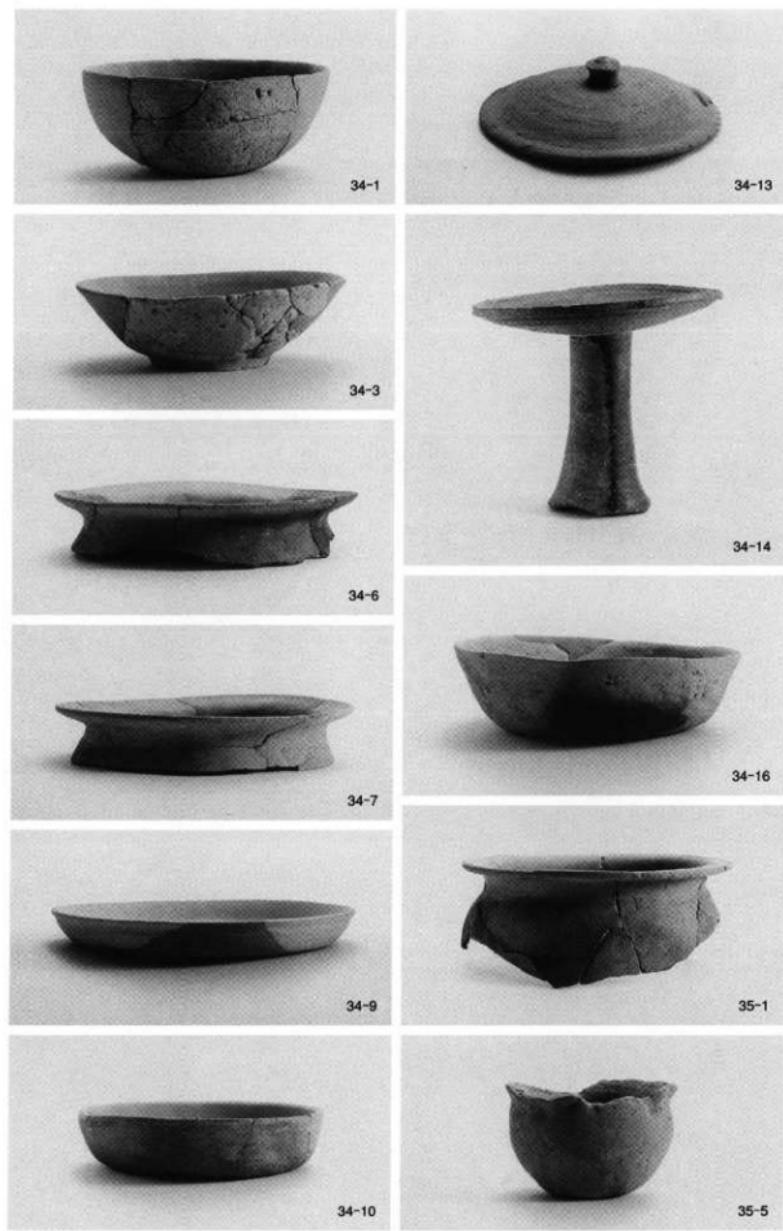


33-9



33-18

図版68



笠井若林遺跡Ⅲ区出土土器



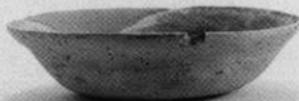
35-7



37-3



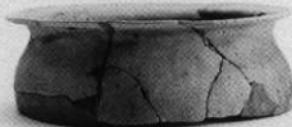
35-8



37-4



37-5



35-9



37-6



37-11



36-9

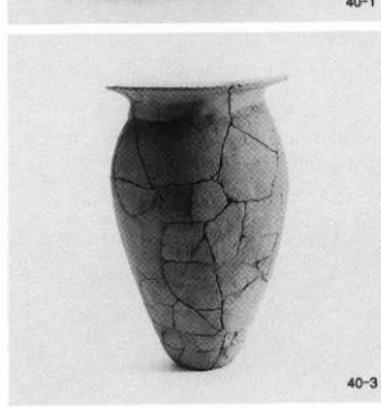


37-15

図版70

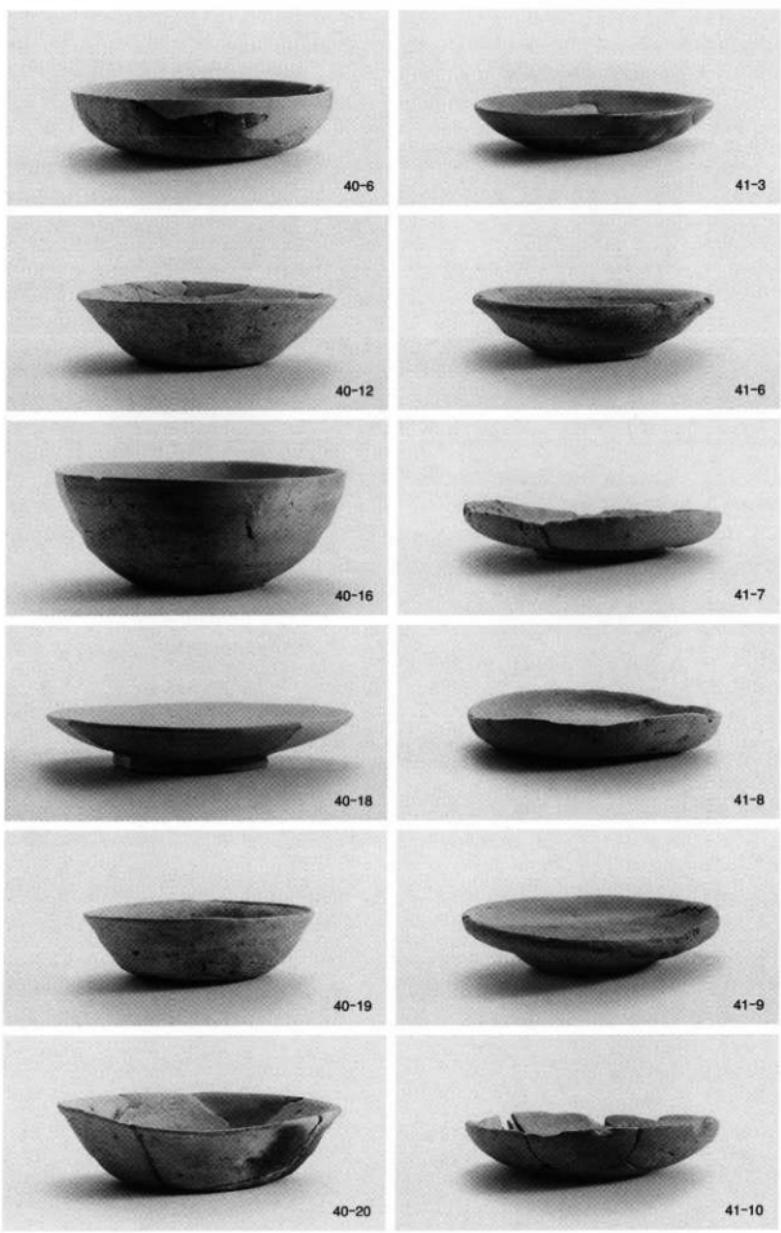


笠井若林遺跡Ⅲ区出土土器

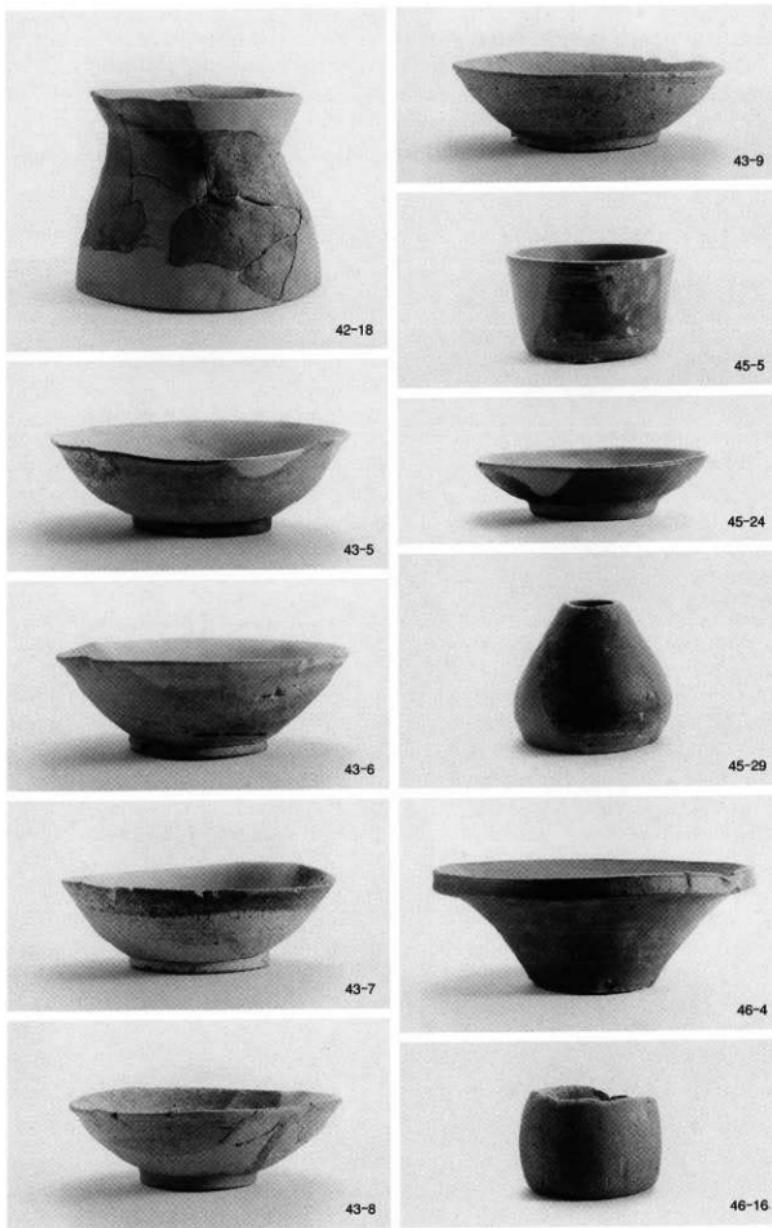


笠井若林遺跡Ⅲ区出土土器

図版72

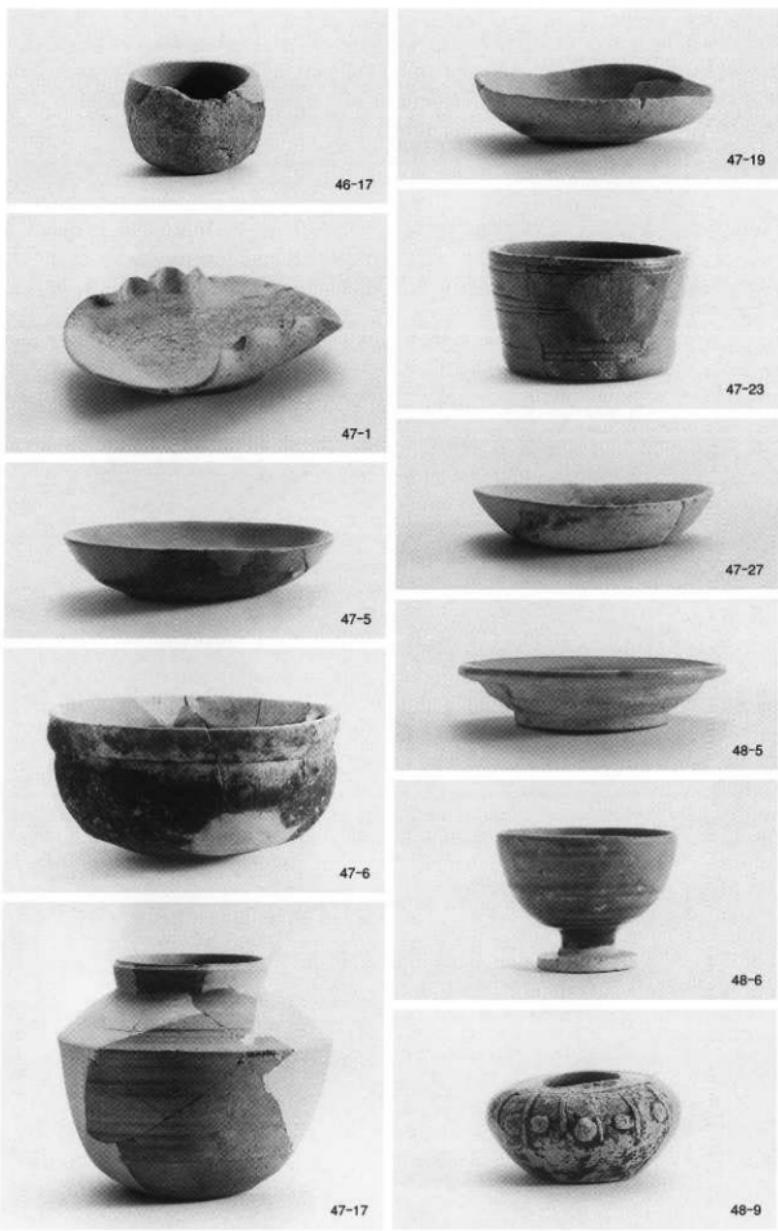


笠井若林遺跡Ⅲ区出土土器

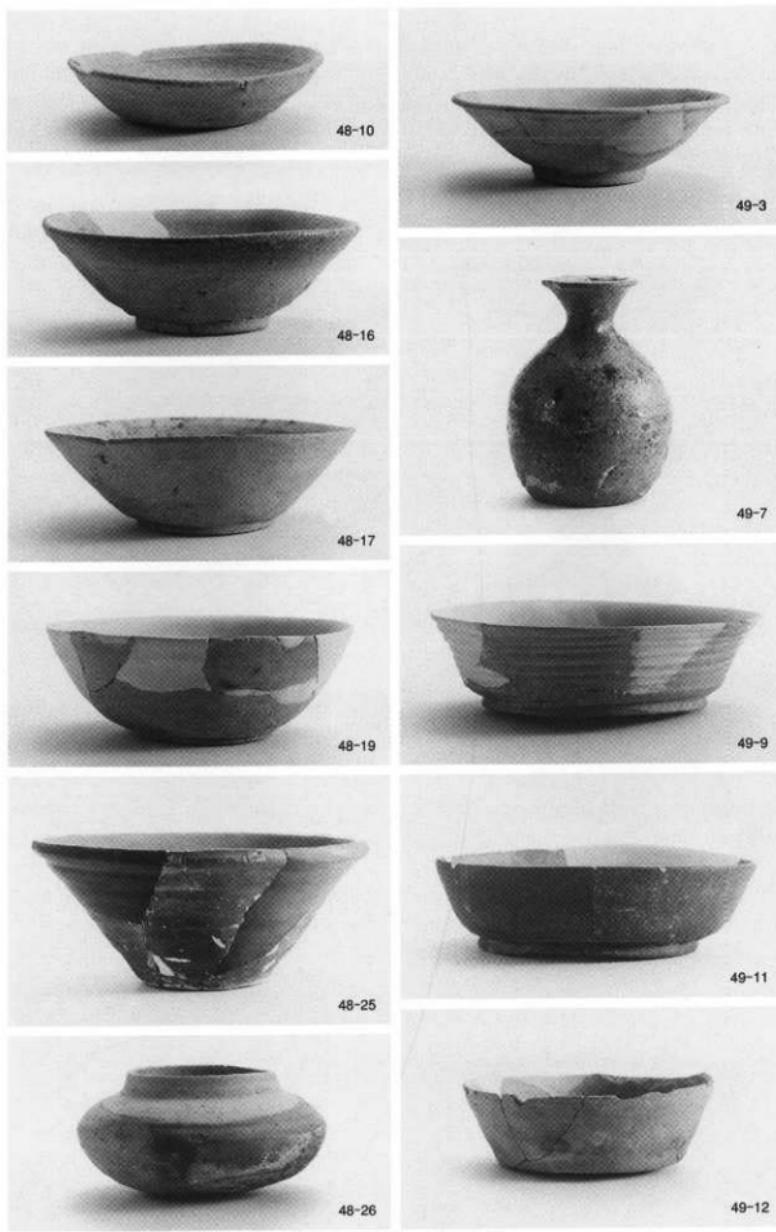


笠井若林遺跡Ⅲ区出土土器

図版74

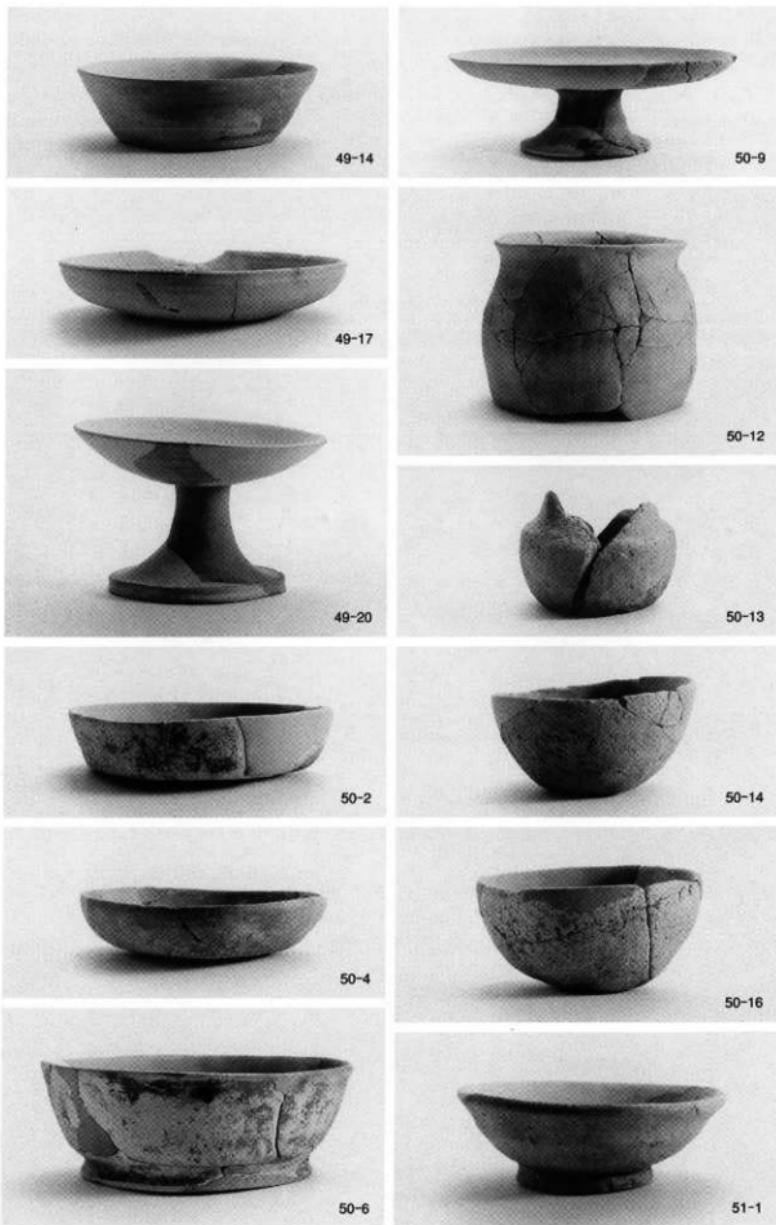


笠井若林遺跡Ⅲ区出土土器



笠井若林遺跡Ⅲ区出土土器

図版76



笠井若林遺跡Ⅲ区出土土器



笠井若林遺跡Ⅱ区SB203出土土器

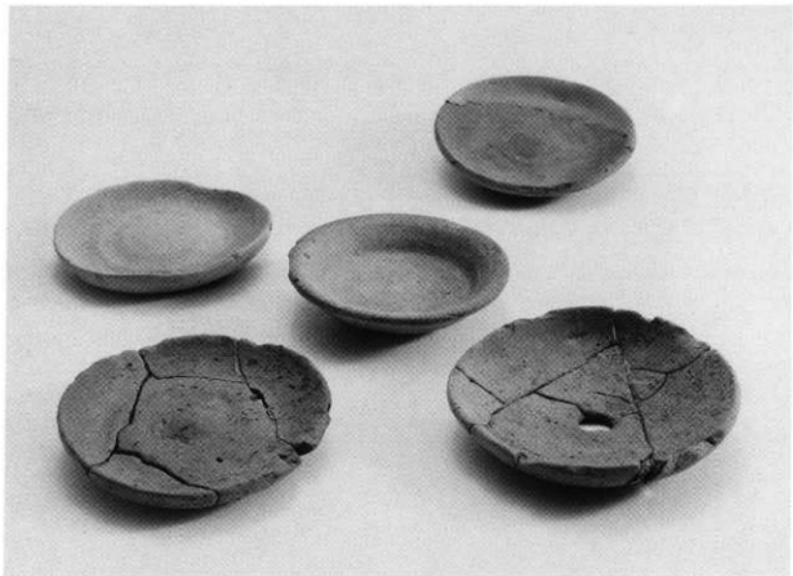


笠井若林遺跡Ⅲ区SB212出土土器

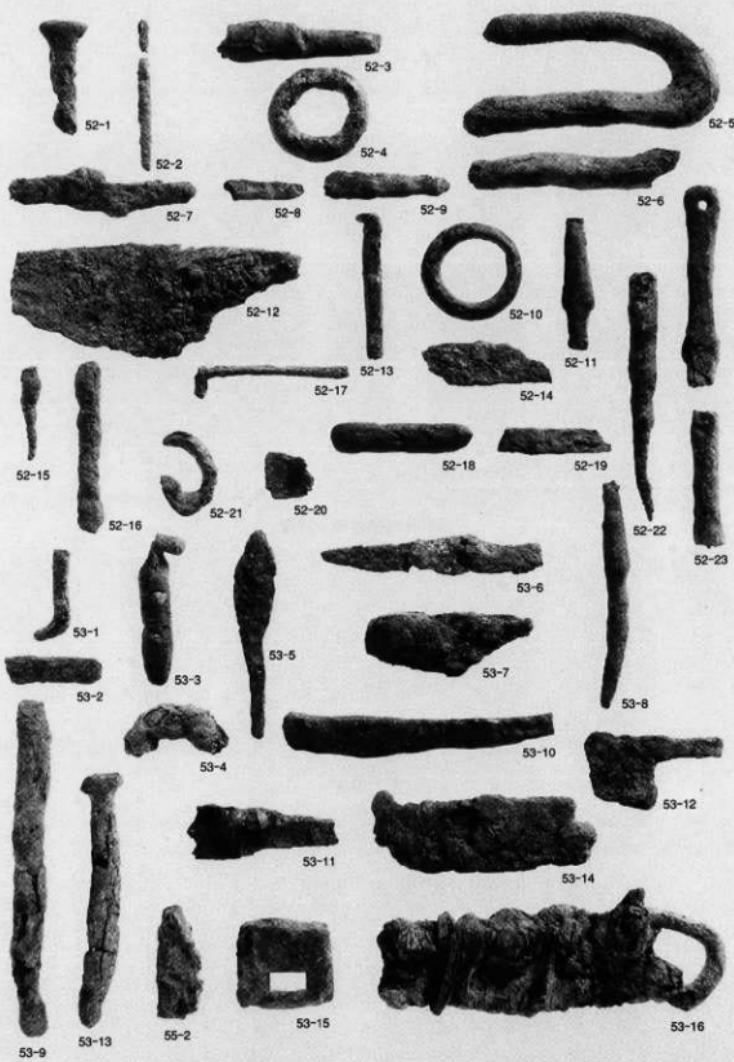
図版78



笠井若林遺跡 II 区 SD227 出土土器

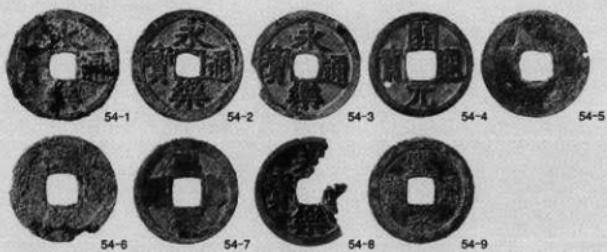


笠井若林遺跡 III 区 SF42 出土土器



笠井若林遺跡出土金属製品

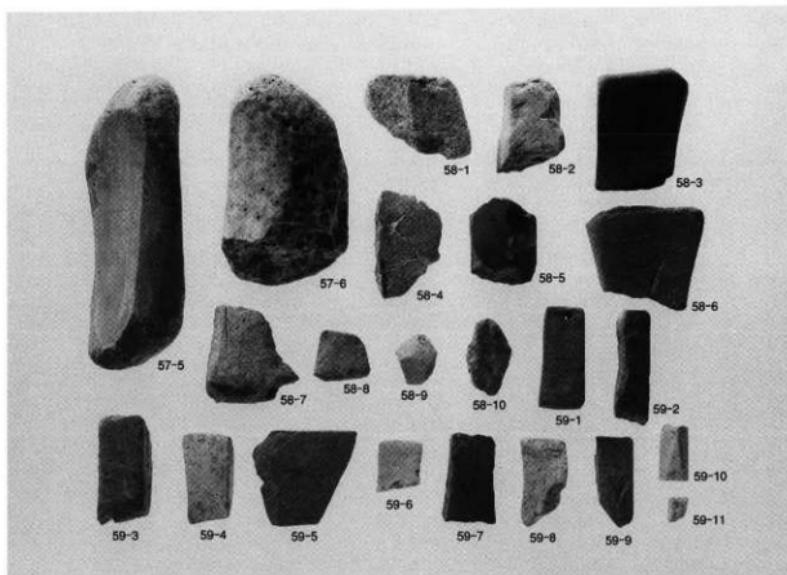
図版80



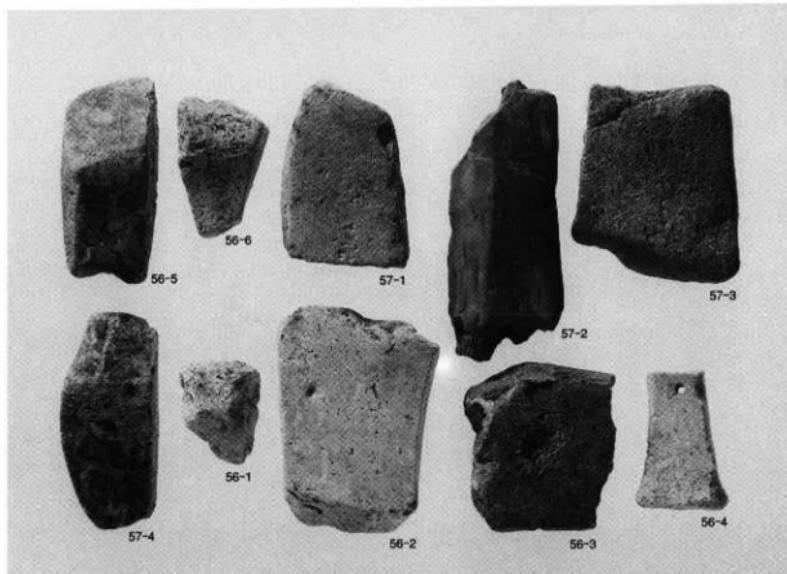
笠井若林遺跡出土銭貨



笠井若林遺跡出土棹秤の錘

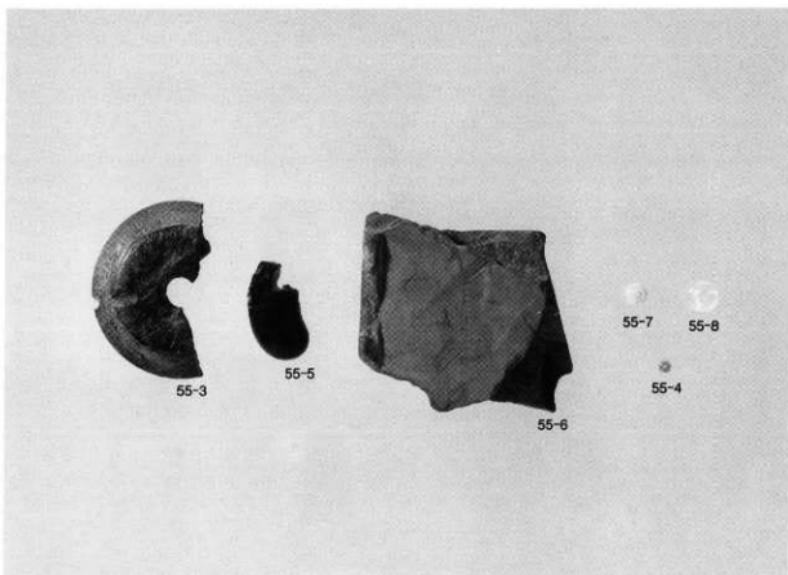


笠井若林遺跡出土石1

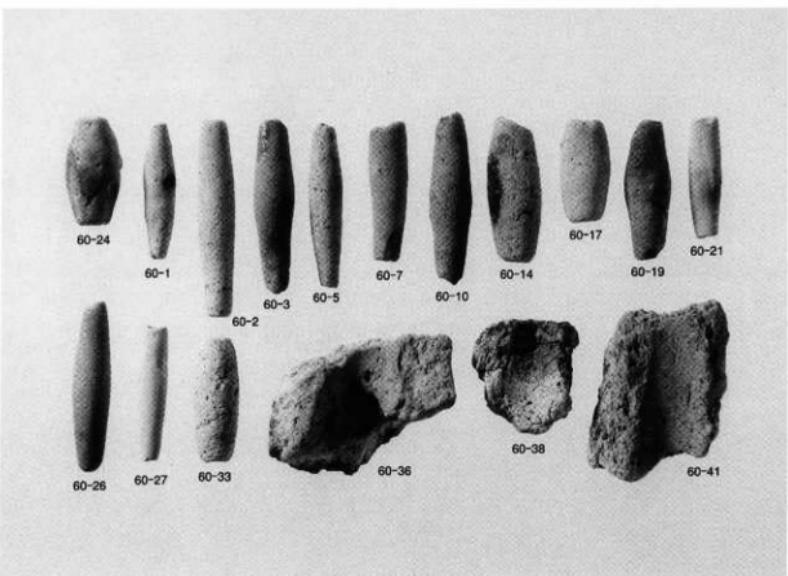


笠井若林遺跡出土石2

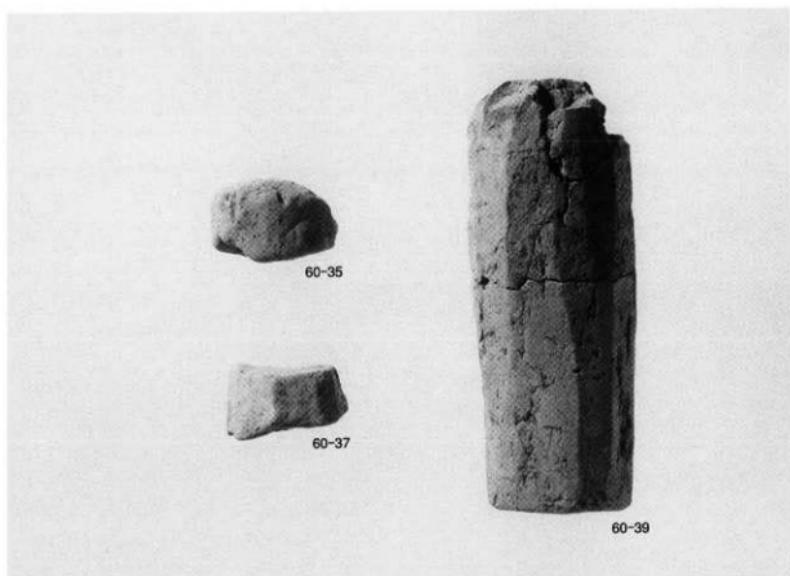
図版82



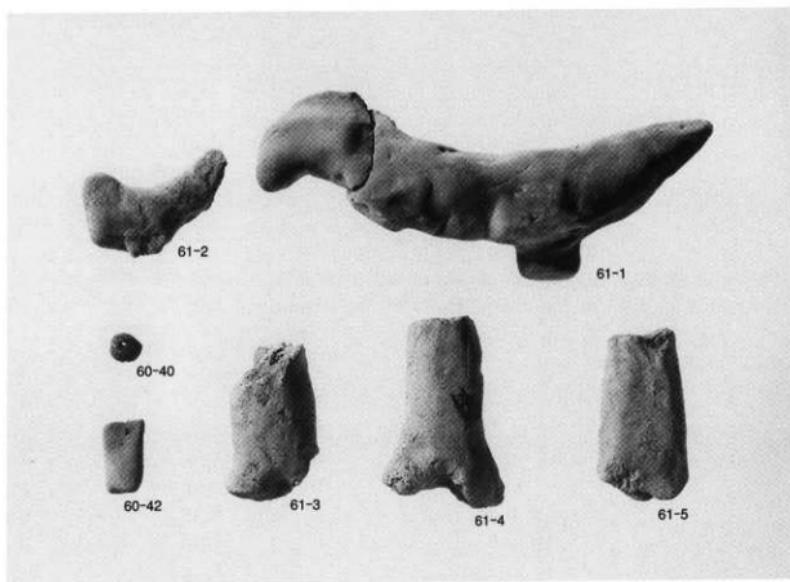
笠井若林遺跡出土石製品



笠井若林遺跡出土土製品1



笠井若林遺跡出土土製支脚



笠井若林遺跡出土土製品2

報告書抄録

ふりがな 書名 別書名	つねだけにしみやいせきⅡ かさいわかばやしいせき 恒武西宮遺跡Ⅱ 笠井若林遺跡 平成10・11・12年度（主）浜松環状線（笠井工区）道路改良（一般）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書
シリーズ番号	第132集
編著者名	溝口彰悟 大谷宏治 北山峰生 伊藤薰（株）日鐵テクノリサーチ
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 Tel 054-262-4261㈹
発行年月日	2002年3月29日

ふりがな 所収遺跡名 2次調査	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つねだけにしみやいせき 恒武西宮遺跡 2次調査	はまつしきねのけよう 浜松市恒武町 あじしみや 西宮	22202		34度 45分 25秒	137度 47分 47秒	19981001 ～ 19990531	2,420 m ² (延4,840 m ²)	浜松環状線道 路改良工事
かさいわかばやしいせき 笠井若林遺跡	はまつしきねのけよう 浜松市笠井町 あじしみや 字若林	22202		34度 45分 45秒	137度 47分 49秒	19981001～ 19990331 19990601～ 20001029 20010404～ 20011130	7,135 m ² (延14,270 m ²)	

所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
恒武西宮遺跡	集 落	古墳時代中期	堅穴住居跡1軒、 土坑、溝状遺構、 小穴	土師器、須恵器、金属 製品、石製模造品	
		古墳時代後期	掘立柱建物跡2棟、 土坑、溝状遺構、 小穴	土師器、須恵器、金属 製品	多数の溝状遺構は畑耕 作に伴う可能性がある。
		奈良～平安時代	掘立柱建物跡5棟、 溝状遺構	土師器、須恵器、灰陶 陶器	
		鎌倉時代	掘立柱建物跡2棟、 井戸2基	山茶碗、陶器類、貿易 陶器、金属製品、木製品	
		戦国～安土桃山時代	掘立柱建物跡6棟、 土坑、溝状遺構（区 画溝）、小穴	施釉陶器、陶器類、土 師質土器（鍋、かわら け等）、金属製品、銭貨	区画溝を伴う集落。
		江戸時代	墓15基、井戸2基	施釉陶器、土師質土器 (かわらけ)、金属製品、 銭貨、木製品	近世長福寺に伴う遺構 か。
笠井若林遺跡	集 落	古墳時代中～後期	堅穴住居跡1軒、 溝状遺構、小穴	土師器、須恵器、金属 製品	遺構・遺物のほとんど は後期末。
		奈良～平安時代	堅穴住居跡27軒、 掘立柱建物跡6棟、 土坑、溝状遺構、 小穴、井戸1基	土師器、須恵器、灰陶 陶器、墨書き土器、円面 碗3、獸足付短頸壺1、 金属製品、鉄製帶金具 1、鉄滓	堅穴住居跡内に鉄問連 と思われる遺構1箇所 検出。
		鎌倉時代	掘立柱建物跡2棟、 土坑、溝状遺構、 小穴、井戸1基	山茶碗、陶器類、貿易 陶器、金属製品、鉄滓	
		戦国～安土桃山時代	掘立柱建物跡9棟、 土坑、溝状遺構、 墓3基、小穴	施釉陶器、陶器類、土 師質土器（鍋、かわら け等）、貿易陶器、金 属製品、銭貨、棹秤の 縄1、鉄滓	方形の区画溝を持つ集 落。
		江戸時代	溝状遺構	施釉陶器、磁器、土師 質土器（鍋類、かわら け）、金属製品	溝状遺構は耕作に因る 可能性が高い。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第132集

恒武西宮遺跡Ⅱ
笠井若林遺跡

平成10・11・12年度(主)浜松環状線(笠井工区)
道路改良(一般)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成14年3月29日

編集発行 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002
静岡県静岡市谷田23-20
Tel 054-262-4261(代)

印刷所 株式会社開明堂
〒430-0904
静岡県浜松市中沢町1-1
Tel 053-471-6231(代)